

瓜生堂遺跡第46、47-1・2次
発掘調査報告書

2002年

東大阪市教育委員会

瓜生堂遺跡第46、47-1・2次
発掘調査報告書

2002年

東大阪市教育委員会



上. A・B地区全景（東より）



下. D-3～5 3号方形周溝基断ち割り断面南壁（北西より）



上. C-5 配石遺構検出状況 (東より)



中. C-3・4 配石遺構1 検出状況 (北より)



下. C-4 配石遺構6 検出状況 (北より)

上. C-1 第13層 (黒色粘土③)
銅鏃出土状況 (北より)



中. C-6 配石遺構 5 下層武器形木製品
出土状況 (北より)



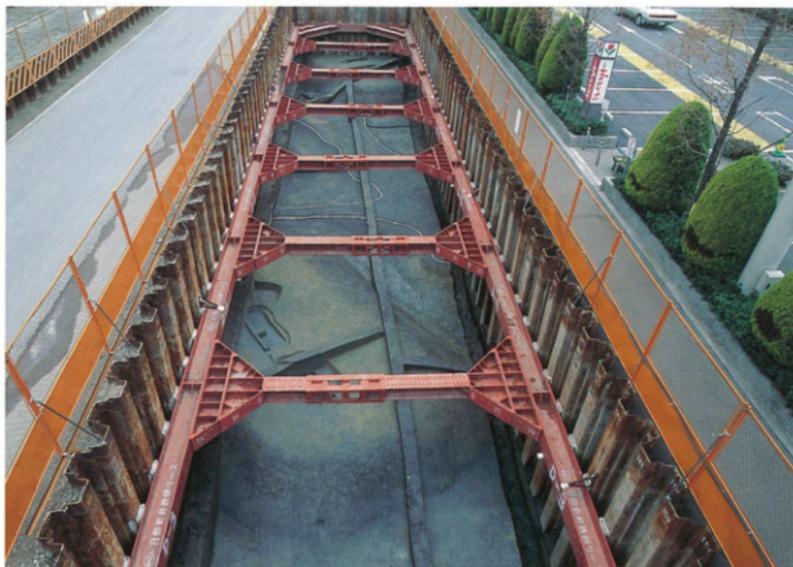
下. 配石遺構供獻土器



上. C-6トレンチ1断層(西より)



下. C-4堰状遺構検出状況(北より)



上. D-4~8 3号方形周溝墓・墓道全景(東より)



下. D-7~9 1号方形周溝墓全景



上. D-9 1号方形周溝墓1号・2号主体部検出状況(南東より)



下. 方形周溝墓供献土器



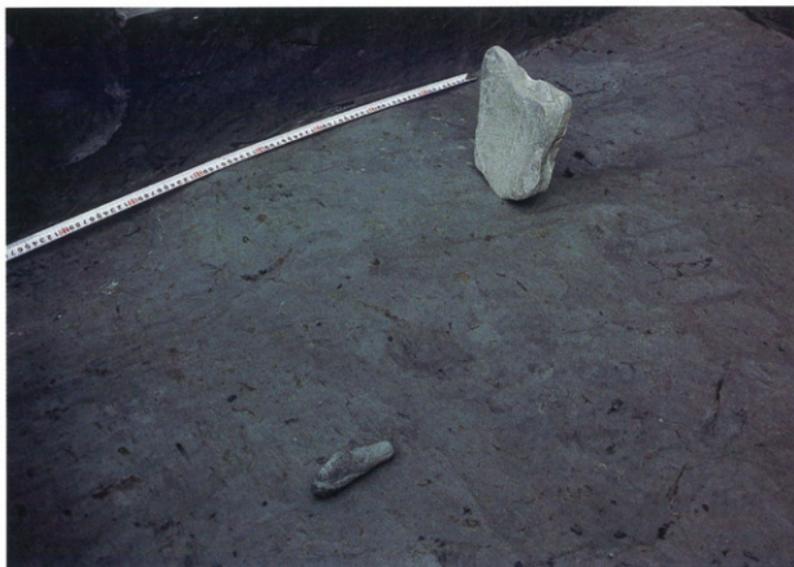
上. C-1 東壁断面



下. A-6 ピット F・G・H 断ち割り断面南壁



上. A-6~8中・下面遺構検出状況(東より)



下. A-1 石器形石製品出土状況復元(南西より)



上. B-0・1配石1
検出状況(南西より)



中. B-4配石3玉石
検出状況(北より)



下. B-3手埴形土器
出土状況(東より)



上、鉄斧(左上)、武器形木製品(左中・左下・中)、朱塗り盾(右)



F. 47-1次 手埴形土器と内部に残った灰

序

東大阪市は、河内のほぼ中央に位置します。河内は大和と並び古代より日本の中核地域でした。したがって市域には遺跡も多く存在し現在、旧石器時代以降中世まで約130箇所発見されています。まさに埋蔵文化財の宝庫と言えます。多くの遺跡の中でも、弥生時代、市域の北に往時存在した河内湖の縁辺には、弥生時代を代表的する大集落として教科書にもしばしば取り上げられ全国的に著名な鬼虎川遺跡と今回報告します瓜生堂遺跡が存在しています。

江戸時代以降は商都大阪の近郊農村地帯でしたが、現在市域の大半は住宅・工場などが立ち並びまとまった水田地帯はわずかとなり、市街地化が進んでおります。

今回報告する瓜生堂遺跡で実施した調査は、近畿日本鉄道奈良線の連続立体交差事業に伴い設置される道路部分を3年間にわたり発掘調査を実施し、現場調査終了後に1年間の整理作業を実施したものであります。

今まで遺跡の中心部付近の調査が行われてきましたが、周辺部は余りその例が有りませんでした。今回の調査で周辺部を調査した結果、弥生時代を中心に多くの新たな発見がありました。具体的には、方形周溝墓や墓道、あるいは地震を起こすカミを鎮めるための祭場の跡などであります。

また、土器を中心とした出土品は当時の人々の生活を偲ばせてくれるものがあります。既に、調査成果の一端を早くお知らせするために中間報告を上梓いたしました。これをもちまして最終の成果報告といたします。

本書が、地域の歴史を解明するうえでお役に立てれば幸いです。また文化財の学習資料となりますことを願っております。

最後になりましたが、調査を実施するうえに多大なご協力をいただきました大阪府八尾土木事務所をはじめとする関係機関、方々に心より謝意を表します。

東大阪市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成10年から13年度にわたり東大阪市西岩田2丁目地内において、大阪府八尾土木事務所が計画した都市計画道路大阪環状山線建設事業に伴い東大阪市教育委員会が委託を受けて実施した瓜生堂遺跡の発掘調査報告書である。すでに、平成10年度分は第46次（本報告では以下、A地区と仮称する）、11年度分は第47-1次（以下、B地区と仮称する）の発掘調査中間報告を刊行している。したがって本報告は、平成12年度に瓜生堂遺跡第47-2次調査を中心としたが、A・B地区についても整理作業を実施し明らかとなった成果を合せて収録した。これをもち今回実施した一連の調査の最終報告書とする。

2. 上記事業に関する調査は、平成10年から12年度まで現地調査、13年度に整理作業を実施した。各年度の担当調査員は、10年度、福永信雄・西口朗弘・鶴山まり・永田朋子・田之上裕子・田中秀和、11年度、福永信雄・鶴山まり・田之上裕子・永田朋子、12年度、福永信雄・田之上裕子・千喜良淳・横原美智子、13年度、福永信雄・千喜良淳・岩間俊之・横山佐夜子・田之上裕子である。

4. 本書の執筆は、福永信雄の指示の元に千喜良淳・田之上裕子・横山佐夜子・井筒美智子・河村恵理・西山佳宏・多賀晴司・前島ちか・岡田佳之が担当した。また、年輪年代測定は光谷拓実、地震痕跡は寒川旭、人骨・獣骨は安部みき子、サマカイト産地分析は薬科哲男の各氏に玉稿を頂き、花粉および珪藻分析はバリノサーベイ株式会社、樹種鑑定は、吉田生物研究所・京都科学株式会社に委託した。編集は福永が行ない、それぞれの執筆者名を目次の項に記した。

5. 遺構写真は調査担当者が、遺物写真は株式会社コムニカに委託し江藤新太郎が撮影した。

6. 現地調査実施にあたっては、大阪府八尾土木事務所・近鉄ハーツ株式会社の方々から多大なご協力をいただいた。記して謝意を表する。

7. 第47-2次調査の実施にあたり、測量杭の打設は興亜測量株式会社、航空測量図の作成は株式会社アコードに委託して実施した。その他の遺構実測図は調査に参加した全員で作成し、整図を西山佳宏・千喜良淳が担当した。遺物実測図は、土器・陶磁器類を千喜良・横山・河村・西山、瓦を前島・多賀、土輪を多賀、石器を井筒、木製品を田之上・多賀が作成した。遺物実測図の整図はそれぞれの作成者と、宮田佳代・松田直子・影山雄樹・中谷直貴が行った。なお、本書掲載の遺物の押図番号は、図版番号と一致させている。

8. 調査および本書作成にあたって、下記の方々から多くの協力を得た。心より謝意を表する。（敬称省略・順不同）

西谷真治・金関怒・山内紀嗣・桑原久男・金原正明・栗田薫・奥田尚・置田雅昭・山本忠尚・濱田延光・若林邦彦・國分政子・渡邊昌宏・石神怡・赤澤徳明・菅榮太郎・塩山則之・上原真人・江谷寛・中遠健一・大野薫・北野俊明・近藤康司・秋山浩三・川瀬貴子・朝田公年・西村歩・藤田憲司・一瀬和夫・小林義孝・野島稔・宇治原靖泰・中辻亘・森谷直樹・山田隆一・井西貴子・富山正明・石部正志・前坂尚志・福永伸哉・中村友博・深澤芳樹・角南総一郎・黒田恭正・森岡秀人・森島康雄・宮崎康雄・森下英治・奥井哲秀・野島永・蔵本晋司・信里芳紀

9. 整理を含めると4カ年にわたる現場・整理作業には、下記の方々への参加を得た。

文谷由紀江・北村奈菜・海野直子・武山愛・小野瀬智子・久木真美・川内清・山口香・小野友紀子・川上智由子・吉田綾子・楠木恵理・村上昇・田中良輔・野田忠良・松原愛・松谷好峰・朴慶淑・西川美奈子・川田純子・森本征明・大谷敦子・松岡隆史・八田美代子・内藤隆・杉本淳子・松本始・渡邊角好

本文目次

I	はじめに	1 (福永)
1.	調査に至る経過	1 (◇)
2.	位置と環境	1 (◇)
II	第47-2次調査概要 (C・D地区)	5 (◇)
1.	調査方法と目的	5 (◇)
2.	調査経過	6 (◇)
III	遺構	7 (福永)
1.	基本層序	8 (田之上)
2.	遺構と遺物	22 (福永)
(1)	近世・中世・古代の遺構と遺物	22 (千喜良)
	近世の遺構	
	溜池	22 (◇)
	近世の遺物	22 (◇)
	中世の遺構	
	大溝1・基壇・井戸・大溝2・溝5	22 (◇)
	中世・古代の遺物	
	C地区 大溝1・第2次基壇周溝、基壇整地土・第1次基壇周溝、基壇整地土	
	溝5、6・ビット14、17、D地区 井戸2・土壇1、2・溝5、3出土土器・陶磁器	32 (◇)
	C・D地区第3層 (包含層) 出土土器・陶磁器	42 (◇)
	瓦類	43 (前島)
	石製品	48 (多賀)
(2)	古墳時代の遺構と遺物	50 (福永)
	小型低方墳	50 (◇)
	埴輪	51 (◇)
	井戸3	54
	C・D地区第10層 (灰色粘土②)	57 (千喜良)
(3)	弥生時代後期～中期末の遺構と遺物	
	遺構	
	配石遺構	58 (西山)
	遺物	
	C地区第11層 (黒色粘土②)・第12層 (灰色粘土③)・第13層 (黒色粘土③)	
	第14層 (自然河川2)・第16層 (配石遺構・祭祀場)	
	第17層 (自然河川4)・第18層 (断層上面) 出土土器	65 (千喜良)
(4)	弥生時代中期の遺構と遺物	
	遺構	
	堰状遺構	86 (西山)
	方形周溝墓・墓道	87 (多賀)

方形周溝墓出土土器	115(千喜良)
遺物	
畦畔	120(西山)
(5) 弥生時代前期の遺構と遺物	
遺構	121(横山)
遺物	121(〆)
(6) 木製品と石器	
木製品	133(田之上)
石器・石製品・金属製品	156(井筒)
IV 小結(第47-2次調査の成果)	159(福永)
V 第46次(A地区)第47-1次(B地区)調査の概要	161(〆)
1. 第46次(A地区)調査の成果	
(1) はじめに	161(福永)
(2) 遺構	161(〆)
(3) 遺物	
土器溜り1・土器溜り2・土器溜り4出土土器	163(千喜良)
土塋・ピット・柱・杭・溝出土土器	164(〆)
灰色シルト出土土器	172(〆)
A~D層・川2・落込出土土器	172(〆)
木製品	180(田之上)
その他の遺物	183(福永)
(4) 小結	183(福永)
2. 第47-1次(B地区)調査の成果	
(1) はじめに	186(福永)
(2) 遺構	186(〆)
(3) 遺物	187(〆)
(4) 小結	188(〆)
VI 考察	
(1) 遺構	
1) 層序について	189(福永)
2) 瓜生堂廃寺について	191(〆)
3) 配石遺構について	193(〆)
4) 方形周溝墓について	198(多賀・岡田)
(2) 遺物	
1) 中・南河内における土器器皿の変遷	206(千喜良)
2) 庄内期の土器について	220(河村)
3) 弥生時代中・後期の土器について	229(千喜良)
4) 弥生時代前期の土器について	234(横山)
5) 弥生時代の石器について	238(井筒)
6) 弥生時代の木製品について	240(田之上)

Ⅶ 附編

- 1) 瓜生堂遺跡の木棺材、加工木の年輪年代 ……………241(光谷)
- 2) 瓜生堂遺跡で検出された人骨、獣骨の分析 ……………243(安部)
- 3) 瓜生堂遺跡で検出された地震の痕跡 ……………257(藥川)
- 4) 瓜生堂遺跡第47-2次調査に伴う自然科学分析 ……………265(バリノ・サーヴェイ)
- 5) 瓜生堂遺跡出土木製品の樹種同定調査結果 ……………283(吉田生物研究所)
- 6) 瓜生堂遺跡第46次調査出土のサヌカイト製遺物の石材産地分析 ……………298(藁科)

Ⅷ. 総括 ……………305(福永)

挿 図 目 次

第 1 図	弥生時代中期河内平野遺跡分布図	2
第 2 図	周辺遺跡分布図	4
第 3 図	河内湖東南辺弥生時代遺跡群模式図	4
第 4 図	調査地区割図	5
第 5 図	調査地位置図 (1/2500)	5
第 6 図	C地区基本層序模式図	8
第 7 図	D地区基本層序模式図	10
第 8 図	C地区東壁土層断面図	12
第 9 図	D地区東壁土層断面図	13
第 10 図	C地区南壁土層断面図	14
第 11 図	C・D地区南壁土層断面図	15
第 12 図	D地区南壁土層断面図	16
第 13 図	D地区南壁土層断面図	17
第 14 図	C地区溜池平面実測図	22
第 15 図	溜池土層断面実測図	22
第 16 図	溜池出土遺物実測図	22
第 17 図	C地区近・中世遺構全体図	24
第 18 図	D地区中世～古墳遺構全体図	25
第 19 図	C地区大溝 1 平面・土層断面実測図	26
第 20 図	第 2 次基壇平面実測図	27
第 21 図	第 1 次基壇平面実測図	27
第 22 図	基壇土層断面実測図	27
第 23 図	基壇柱穴平面・土層断面実測図	28
第 24 図	C地区基壇断ち割り土層断面図(南北方向)	28
第 25 図	D地区井戸 1・井戸 2 平面・土層断面実測図	29
第 26 図	D地区大溝 2 土層平面・土層断面実測図	30
第 27 図	C地区井戸 1・2 平面・土層断面実測図	30
第 28 図	D地区柱穴・井戸平面・断面実測図	31
第 29 図	C地区大溝 1 茶灰色土出土土器実測図	33

第30图	C地区大溝1 灰色粘土・砂層出土土器実測図	34
第31图	C地区大溝1 青灰色粘土出土土器実測図(1)	35
第32图	C地区大溝1 青灰色粘土出土土器実測図(2)	36
第33图	C地区第2次基壇周溝出土土器実測図	37
第34图	C地区基壇整地土・第3層(包含層)出土土器実測図	38
第35图	C地区第1次基壇周溝・整地土・溝5・6・柱穴14・17出土土器実測図	39
第36图	D地区井戸2・土塼1・2・溝3・5出土土器実測図	40
第37图	D地区第3層(包含層)出土土器実測図	41
第38图	第3層(包含層)出土瓦実測図(1)	44
第39图	第3層(包含層)出土平瓦実測図(2)	45
第40图	第3層(包含層)出土丸瓦実測図(3)	46
第41图	石鍋、砥石、擦り石、葺石、五輪塔実測図	49
第42图	D地区小型低方墳平面実測図	50
第43图	小型低方墳周溝土層断面実測図	50
第44图	小型低方墳周溝出土土器実測図	50
第45图	C地区第3層(包含層)出土埴輪実測図(1)	52
第46图	C地区第3層(包含層)出土埴輪実測図(2)	53
第47图	D地区井戸3平面・土層断面実測図	54
第48图	D地区井戸3出土土器実測図	55
第49图	C・D地区第10・11層(灰色粘土②・黑色粘土②)出土土器実測図(1)	56
第50图	C・D地区第10・11層(灰色粘土②・黑色粘土②)出土土器実測図(2)	57
第51图	C地区第13層(黑色粘土③)上部配石検出状況(1)	59
第52图	C地区第13層(黑色粘土③)下部配石検出状況(2)	60
第53图	C地区配石1検出状況平面・見通し断面実測図	61
第54图	C地区配石2検出状況平面・見通し断面実測図	61
第55图	C地区配石3検出状況平面・見通し断面実測図	62
第56图	C地区配石4検出状況平面・見通し断面実測図	63
第57图	C地区配石5検出状況平面実測図	64
第58图	C地区配石6検出状況平面実測図	64
第59图	C地区配石7・8検出状況平面実測図	64
第60图	C地区第11層(黑色粘土②)土器だまり出土土器実測図(1)	66
第61图	C地区第11層(黑色粘土②)土器だまり出土土器実測図(2)	67
第62图	C地区第12層(灰色粘土③)出土土器実測図	69
第63图	C地区第13層(黑色粘土③)出土土器実測図(1)	70
第64图	C地区第13層(黑色粘土③)出土土器実測図(2)	71
第65图	C地区第13層(黑色粘土③)出土土器実測図(3)	72
第66图	D地区第13層(黑色粘土③)出土土器実測図(4)	73
第67图	D地区第13層(黑色粘土③)出土土器実測図(5)	74
第68图	D地区方形周溝墓上面(第10・11・13層)出土土器位置図	76
第69图	C地区自然河川2出土土器実測図(1)	77

第70图	C地区自然河川2出土土器実測図(2)	78
第71图	C地区配石遺構出土供獻土器実測図	81
第72图	C地区祭祀場出土供獻土器実測図(1)	82
第73图	C地区祭祀場出土供獻土器実測図(2)	83
第74图	C地区自然河川4出土土器実測図	85
第75图	C地区断層上面出土土器実測図	85
第76图	C地区環状遺構平面・見通し断面実測図	86
第77图	D地区方形周溝墓檢出状況(左、墳丘・右、木棺)平面図	88
第78图	D地区1・3・4号方形周溝墓土器棺・供獻土器他檢出位置図	89
第79图	C地区5号方形周溝墓供獻土器檢出位置図	90
第80图	1号方形周溝墓遺構檢出状況実測図	91
第81图	1号方形周溝墓墳丘土層断面実測図	91
第82图	1号方形周溝墓主体部1平面・立面実測図	92
第83图	1号方形周溝墓主体部2平面・立面実測図	93
第84图	1号方形周溝墓土壤2供獻土器出土状況平面・断面実測図	94
第85图	1号方形周溝墓土壤1供獻土器出土状況平面・断面実測図	94
第86图	1号方形周溝墓主体部3平面・立面実測図	95
第87图	土壤3供獻土器出土状況平面・断面実測図	96
第88图	土壤4供獻土器出土状況平面・断面実測図	96
第89图	土壤5供獻土器出土状況平面・断面実測図	96
第90图	3号方形周溝墓遺構檢出状況	97
第91图	3号方形周溝墓墳丘土層断面実測図	98
第92图	3号方形周溝墓主体部1平面・断面実測図	99
第93图	3号方形周溝墓供獻土器出土状況平面実測図	99
第94图	3号方形周溝墓主体部2平面・立面実測図	100
第95图	3号方形周溝墓主体部3平面・立面実測図	101
第96图	3号方形周溝墓主体部4平面・立面実測図	102
第97图	4号方形周溝墓遺構檢出状況実測図	104
第98图	4号方形周溝墓主体部1・2平面・立面実測図	104
第99图	4号方形周溝墓墳丘土層断面実測図	105
第100图	4号方形周溝墓主体部3平面・立面実測図	106
第101图	4号方形周溝墓甕棺出土状況平面・立面実測図	106
第102图	4号方形周溝墓主体部5平面・立面実測図	108
第103图	4号方形周溝墓主体部1・2檢出状況平面実測図	109
第104图	4号方形周溝墓墳丘断ち割り東壁土層断面実測図	109
第105图	4号方形周溝墓土層断面実測図	109
第106图	5号方形周溝墓遺構檢出状況実測図	111
第107图	5号方形周溝墓主体部1平面・立面実測図	111
第108图	5号方形周溝墓出土供獻土器檢出状況実測図	111
第109图	5号方形周溝墓墳丘土層断面実測図	112

第110図	墓道検出状況実測図	113
第111図	墓道土層断面実測図(1)	114
第112図	墓道土層断面実測図(2)	114
第113図	墓道土層断面実測図(3)	114
第114図	墓道土層断面実測図(4)	114
第115図	1号・3号方形周溝墓出土土器実測図	116
第116図	4号方形周溝墓出土土器実測図	117
第117図	5号方形周溝墓出土土器実測図	119
第118図	D地区畦畔検出状況実測図	120
第119図	前期遺構検出状況実測図	122
第120図	溝1平面・土層断面実測図	123
第121図	遺構出土土器実測図	124
第122図	第28層(灰オリブ、オリブ茶色粘土)出土土器実測図	124
第123図	第30層(茶褐色粘土)上層出土土器実測図	125
第124図	第30層(茶褐色粘土)下層出土土器実測図(1)	127
第125図	第30層(茶褐色粘土)下層出土土器実測図(2)	128
第126図	第31層(灰黒色粘土)出土土器実測図(1)	130
第127図	第31層(灰黒色粘土)出土土器実測図(2)	131
第128図	木製品実測図(1)	134
第129図	木製品実測図(2)	135
第130図	木製品実測図(3)	136
第131図	木製品実測図(4)	137
第132図	木製品実測図(5)	138
第133図	木製品実測図(6)	139
第134図	木製品実測図(7)	140
第135図	木製品実測図(8)	141
第136図	木製品実測図(9)	142
第137図	木製品実測図(10)	143
第138図	木製品実測図(11)	144
第139図	木製品実測図(12)	145
第140図	木製品実測図(13)	146
第141図	石器・金属器実測図	157
第142図	石器・配石石材実測図	158
第143図	A地区弥生時代遺構全体図	162
第144図	A地区土器溜まり1出土土器実測図(1)	165
第145図	A地区土器溜まり1出土土器実測図(2)	166
第146図	A地区土器溜まり2・4出土土器実測図	167
第147図	A地区土坑出土土器実測図	168
第148図	A地区ピット出土土器実測図(1)	169
第149図	A地区ピット出土土器実測図(2)	170

第150図	A地区溝出土土器実測図(1).....	173
第151図	A地区溝出土土器実測図(2).....	174
第152図	A地区溝・灰色シルト出土土器実測図.....	175
第153図	A地区川2出土土器実測図.....	175
第154図	A地区A・B・C・D層出土土器実測図(1).....	176
第155図	A地区A・B・C・D層出土土器実測図(2).....	177
第156図	A地区落込み出土土器実測図.....	178
第157図	A地区包含層出土土器実測図.....	179
第158図	木製品実測図.....	181
第159図	各種掘立柱の立て方模式図.....	184
第160図	磨製石器(性器形石製品)実測図.....	185
第161図	扁平片刃鉄斧実測図.....	185
第162図	扁平片刃鉄斧装着想定図.....	185
第163図	各地区基本層序模式図.....	190
第164図	断層・配石遺構分布図.....	194
第165図	配石遺構実測図及び配石搬入先模式図.....	195
第166図	B地区配石遺構出土土器実測図.....	196
第167図	配石遺構出土桃核実測図.....	196
第168図	土器分類図.....	207
第169図	土師器皿編年試案(1).....	209
第170図	土師器皿編年試案(2).....	211
第171図	土師器皿編年試案(3).....	213
第172図	土師器皿編年試案(4).....	215
第173図	土器溜まり1(下層)出土土器実測図.....	223
第174図	土器溜まり1(上層)出土土器実測図(1).....	224
第175図	土器溜まり1(上層)出土土器実測図(2).....	225
第176図	邪視文土器拓影.....	233
第177図	河内湯周辺弥生時代前期の壺(左、若江北遺跡 中、瓜生堂遺跡 右、美園遺跡).....	236
第178図	河内湯周辺弥生時代前期の甕(左、若江北遺跡 中、瓜生堂遺跡 右、美園遺跡).....	237
第179図	地滑りに伴う低崖の分布.....	260
第180図	トレンチAの断面図.....	261
第181図	トレンチBの断面図.....	261
第182図	トレンチCの断面図.....	261
第183図	トレンチDの断面図.....	261
第183'図	トレンチEの断面図.....	261
第183''図	トレンチE'の断面図.....	261
第184図	砂層の粒径加積曲線.....	261
第185図	南海地震と東海地震の発生時期.....	262
第186図	サヌカイト及びサヌカイト椽岩石の原産地.....	304
第187図	弥生時代～中世遺構配置図.....	307、308

表目次

表1	木製品観察表(1)	147
表2	木製品観察表(2)	148
表3	木製品観察表(3)	149
表4	木製品観察表(4)	150
表5	木製品観察表(5)	151
表6	木製品観察表(6)	152
表7	木製品観察表(7)	153
表8	木製品観察表(8)	154
表9	木製品観察表(9)	155
表10	木製品観察表(10)	182
表11-1	主体部頭位	203
表11-2	木棺形式変遷	203
表11-3	土器棺組合	203
表12-1	墳丘平面規模	204
表12-2	方形周溝墓の長軸の向き	204
表13	各時期における成立技法の変遷	216
表14	土器だまり1(上層)における器種別胎土比率	225
表15	土器だまり1(下層)における器種別胎土比率	226
表16	各遺跡における器種の組成	226
表17-1	土器だまり1(下層)における器種の構成比	226
表17-2	土器だまり1(上層)における器種の構成比	226
表18	成法寺遺跡SW1・2における器種の構成比	226
表19	八尾南遺跡SE10馬場川遺跡井戸1・2における器種の構成比	226
表20	器種別胎土個体数	234
表21	壺・甕別底部胎土個体数	234
表22	器種比率	234
表23	壺の口径	235
表24	壺のサイズ	235
表25	口頸部境	235
表26	頸体部境	235
表27	甕の口径	236
表28	甕の頸部沈線数と口縁端部の刻み位置	236
表29	包含層別甕の口縁端部の刻み位置	236
表30	包含層別甕の頸部沈線数	236
表31	サヌカイト点数地区別集計表	238
表32	出土石器集計表	239
表33	年輪年代測定用に選定した試料一覧と結果	242

表34	ヒノキの暦年標準パターンングラフ（実線）とNo. 3の年輪パターンングラフ	242
表35	ヒノキの暦年標準パターンングラフ（実線）とNo. 8の年輪パターンングラフ	242
表36	コウヤマキの標準パターンングラフ（実線）とNo. 1の年輪パターンングラフ	242
表37	人骨の出土表	248
表38	人骨の下肢骨の計測表	251
表39	菌の計測値表	251
表40	動物遺体の出土表	252
表41	動物遺体の出土頻度表	256
表42	分析対象試料表	265
表43	珪藻分析結果	267
表44	主要珪藻化石群集の層位分布	271
表45	花粉分析結果	272
表46	主要花粉化石群集の層位分布	273
表47	寄生虫卵分析結果	274
表48	東大阪市瓜生堂遺跡出土木製品樹種同定表	288
表49	岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果	302
表50	和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果	302
表51	和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果	302
表52	瓜生堂遺跡群出土のサヌカイト製剥片の原材産地推定結果	303
表53	瓜生堂遺跡第46次調査出土サヌカイト製剥片の元素比分析結果	304

写真目次

写真1	現地説明会風景	12
写真2	木棺調査風景	13
写真3	方形周溝墓出土人骨	246
写真4	獣骨	247
写真5	トレンチAの断面	260
写真6	トレンチEの断面	261
写真7	トレンチE'の断面	261
写真8	トレンチBの断面形	263
写真9	トレンチCの断面形（その1）	263
写真10	トレンチCの断面形（その2）	263
写真11	トレンチDの断面形（その1）	264
写真12	トレンチDの断面形（その2）	264
写真13	南側壁面における地層の状態	264
写真14	珪藻化石（1）	279
写真15	珪藻化石（2）	280
写真16	花粉化石（1）	281

写真17	花粉化石(2)・寄生虫卵	282
写真18	出土木製品・顕微鏡写真(1)	291
写真19	出土木製品・顕微鏡写真(2)	292
写真20	出土木製品・顕微鏡写真(3)	293
写真21	出土木製品・顕微鏡写真(4)	294
写真22	出土木製品・顕微鏡写真(5)	295
写真23	出土木製品・顕微鏡写真(6)	296
写真24	出土木製品・顕微鏡写真(7)	297

巻頭図版目次

巻頭図版1	遺構 上、A・B地区全景(東より) 下、D-3~5 3号方形周溝墓断ち割り断面南壁(北西より)
巻頭図版2	遺構 上、C-5配石遺構検出状況(東より) 中、C-3・4配石遺構1検出状況(北より) 下、C-4配石遺構6検出状況(北より)
巻頭図版3	遺構遺物 上、C-1第13層(黒色粘土③)銅鏃検出状況(北より) 中、C-6配石遺構5下層武器形木製品出土状況(北より) 下、配石遺構供献土器
巻頭図版4	遺構 上、C-6トレンチ1断層(西より) 下、C-4環状遺構検出状況(北より)
巻頭図版5	遺構 上、D-4~8 3号方形周溝墓・墓道全景(東より) 下、D-7~9 1号方形周溝墓全景(東より)
巻頭図版6	遺構遺物 上、D-9 1号方形周溝墓1号・2号主体部検出状況(南東より) 下、方形周溝墓供献土器
巻頭図版7	遺構 上、C-1東壁断面 下、A-6ピットF・G・H断ち割り断面南壁
巻頭図版8	遺構 上、A-6~8中・下面遺構検出状況(東より) 下、A-1性器形石製品出土状況復元(南西より)
巻頭図版9	遺構 上、B-0・1配石1検出状況(南西より) 中、B-4配石3玉石検出状況(北より) 下、B-3手培形土器出土状況(東より)
巻頭図版10	遺物 上、鉄斧(左上)武器形木製品(左中・左下・中)・朱塗り盾(左) 下、47-1手培形土器と内部に残った炭

図版目次

図版1	遺構 上、航空写真(昭和23年撮影) 下、C・D地区全景(西より)
図版2	遺構 上、C-3南壁断面 中、C-4・5南壁断面 下、C-2南壁断面
図版3	遺構 上、C-6南壁断面 中、C-4南壁断面 下、C-5南壁断面
図版4	遺構 上、C-6南壁断面 中、C-2・3南壁断面 下、C-1南壁断面
図版5	遺構 上、D-5南壁断面 中、D-8南壁断面 下、D-3南壁断面
図版6	遺構 上、D-1南壁断面 中、D-7・8南壁断面 下、D-4・5南壁断面

- 図版 7 遺構 上、D-8・9南壁断面 中、D-6南壁断面 下、D-1東壁断面
- 図版 8 遺構 上、C-7溜池検出状況(東より) 中、C-7溜池護岸検出状況(南東より) 下、C-7溜池柄杓出土状況(南西より)
- 図版 9 遺構 上、C-2・3大溝1断ち割り断面南壁(北より) 中、C-2・3大溝1摺鉢出土状況(北より) 下、C-2・3大溝1獣骨出土状況(北より)
- 図版 10 遺構 上、C-2~7中世遺構全景(東より) 中、C-3~5瓜生堂廃寺基壇全景(南より) 下、C-4~6瓜生堂廃寺基壇全景(北東より)
- 図版 11 遺構 上、C-4基壇整地土内瓦器碗出土状況(北より) 中、C-4基壇柱穴(ピット10)検出状況(北より) 下、C-4基壇柱穴(ピット15)断ち割り断面(北より)
- 図版 12 遺構 上、C地区中世遺構全景(東より) 中、C-4大溝1検出状況(東より) 下、C-5・6大溝1上面石造物他検出状況(西より)
- 図版 13 遺構 上、D-7~9中世~古墳時代遺構全景(南より) 中、D-6~8中世~古墳時代遺構全景(南より) 下、D-5~6中世~古墳時代遺構全景(南より)
- 図版 14 遺構 上、D-3~6中世~古墳時代遺構全景(南より) 下、D地区中世~古墳時代遺構全景(南より)
- 図版 15 遺構 上、D-8中世遺構井戸2検出状況(北より) 中、D-8中世遺構井戸2検出状況(北より) 下、D-8中世遺構井戸2検出状況(北より)
- 図版 16 遺構 上、D-8中世遺構井戸2完掘状況(北より) 中、D-8中世遺構井戸2白磁皿出土状況(北より) 下、D-8中世遺構井戸2瓦器出土状況(北より)
- 図版 17 遺構 上、D-8中世遺構井戸1・2検出状況(南より) 中、D-8中世遺構井戸1検出状況(南より) 下、D-8中世遺構井戸3検出状況(北西より)
- 図版 18 遺構 左上、C-5中世遺構井戸1断ち割り断面(東より) 左中、C-5中世遺構井戸1検出状況(東より) 左下、C-5中世遺構井戸2断ち割り断面(北より) 右上、D-1中世遺構面ピット15断ち割り断面(東より) 右中、D-8中世遺構ピット33断ち割り断面(北より) 右下、D-5中世遺構ピット8断ち割り断面(北より)
- 図版 19 遺構 上、D-7中世遺構ピット34断ち割り断面(北より) 中、D-8中世遺構ピット32断ち割り断面(北より) 下、D-7中世遺構ピット29断ち割り断面(北より)
- 図版 20 遺構 上、D-3大溝2検出状況(南より) 中、D-3大溝2断ち割り断面南壁(北より) 下、D-3大溝2銅銭出土状況(北より)
- 図版 21 遺構 上、D-1~3小型低方墳周溝(溝3)検出状況(南より) 中、D-2小型低方墳周溝(溝3)遺物出土状況(東より) 下、D-2小型低方墳周溝(溝3)須恵器出土状況(北より)
- 図版 22 遺構 上、D-5井戸3検出状況(北西より) 中、D-5井戸3布帘式土器出土状況(北西より) 下、D-5井戸3断ち割り断面(東より)
- 図版 23 遺構 上、C-4第11層(黒色粘土②)土器だまり出土状況(南より) 中、C-4第11層(黒色粘土②)土器だまり出土状況(西より) 下、C-4第11層(黒色粘土②)土器だまり出土状況(南より)
- 図版 24 遺構 上、C-3第12層(灰色粘土③)土器だまり出土状況(北より) 中、C-4第12層(灰色粘土③)土器だまり出土状況(北より) 下、C-4第12層(灰色粘土③)木白出土状況(北より)

- 図版 25 遺構 C-2~5 配石遺構全景 (西より)
- 図版 26 遺構 上. C-4 第11層 (黒色粘土②) 土器だまり出土状況 (北より) 中. C-5・6 第11層 (黒色粘土②) 土器だまり検出状況 (東より) 下. C-5・6 第11層 (黒色粘土②) 配石・土器だまり出土状況 (西より)
- 図版 27 遺構 上. C-2 第13層 (黒色粘土③) 配石・土器だまり検出状況 (西より) 中. C-1~3 第13層 (黒色粘土③) 配石・土器だまり検出状況 (西より) 下. C-4 第13層 (黒色粘土③) 配石周辺木製品出土状況 (西より)
- 図版 28 遺構 上. C-3~7 配石遺構検出状況 (東より) 中. C-3~5 配石遺構検出状況 (東より) 下. C-3~6 配石遺構検出状況 (西より)
- 図版 29 遺構 左上. C-3 第13層 (黒色粘土③) 杵出土状況 (南より) 左中. C-6・7 配石遺構検出状況 (南より) 左下. C-1 配石遺構検出状況 (東より) 右上. C-3 第13層 (黒色粘土③) 朱塗り土器・配石出土状況 (南より) 右中. C-1 河川2 蛸壺出土状況 (東より) 右下. C-6・7 配石遺構検出状況 (南東より)
- 図版 30 遺構 左上. C-3~5 配石遺構全景 (西より) 左中. C-4・5 配石遺構検出状況 (南より) 左下. C-3・4 配石遺構検出状況 (東より) 右上. C-4・5 配石遺構検出状況 (東より) 右中. C-5 配石遺構検出状況 (東より) 右下. C-5 配石遺構3 検出状況 (北東より)
- 図版 31 遺構 左上. C-2・3 配石遺構・木製品出土状況 (西より) 左中. C-2・3 配石遺構・木製品出土状況 (南より) 左下. C-5・6 配石遺構4 検出状況 (東より) 右上. C-3~6 配石遺構木製品出土状況 (東より) 右中. C-5・6 配石遺構3・4 検出状況 (東より) 右下. C-5・6 配石遺構4 検出状況 (南より)
- 図版 32 遺構 上. C-6 配石遺構5 検出状況 (北東より) 中. 配石遺構5 検出状況 (北より) 下. C-6 配石遺構5 桃核検出状況 (北より)
- 図版 33 遺構 上. C-6 配石遺構5 武器形木製品茎出土状況 (東より) 中. C-6 配石遺構5 下層武器形木製品出土状況 (北より) 下. C-6 配石遺構5 下層武器形木製品出土状況 (北より)
- 図版 34 遺構 左上. C-1・2 土壌検出状況 (北より) 左中. C-1 配石遺構・土壌検出状況 (西より) 左下. C-1 土壌検出状況 (西より) 右上. C-3 配石遺構1 下部検出状況 (北より) 右中. C-3 配石遺構1 中部検出状況 (北より) 右下. C-3 配石遺構1 上部検出状況 (北より)
- 図版 35 遺構 左上. C-3 配石遺構8 検出状況 (南より) 左中. C-3 配石遺構7 貝他検出状況 (南より) 左下. C-4 配石遺構検出状況 (南東より) 右上. C-3 配石遺構8 検出状況 (南より) 右中. C-4 配石遺構2 検出状況 (西より) 右下. C-4 配石遺構検出状況 (東より)
- 図版 36 遺構 左上. C-5 配石遺構3 検出状況 (南西より) 左中. C-3 配石遺構7 検出状況 (北より) 左下. C-3 配石遺構5 検出状況 (北より) 右上. C-4 配石遺構4 検出状況 (南より) 右中. C-4 配石遺構6 検出状況 (南より) 右下. C-4 配石遺構6 検出状況 (南より)
- 図版 37 遺構 左上. C-4 南壁断面・配石6 検出状況 (北より) 左中. C-4 配石遺構6 検出状況 (北西より) 左下. C-4 配石遺構6 周辺検出状況 (北西より) 右上. C-4

- 南壁断面配石遺構検出状況（北より） 右中、C-4配石遺構6周辺検出状況（北より） 右下、C-3木製品出土状況（北西より）
- 図版38 遺構 左上、C-7落込検出状況（東より） 左中、C-6落込内遺物出土状況（東より） 左下、C-6・7落込検出状況（東より） 右上、C-6落込内土器出土状況（西より） 右中、C-6落込内遺物出土状況（西より） 右下、C-5~7配石遺構検出状況（東より）
- 図版39 遺構 上、C-3配石遺構周辺検出状況（南より） 中、C-6貝出土状況（北東より） 下、C-5配石遺構周辺石鏃出土状況（北より）
- 図版40 遺構 上、C-7配石遺構周辺イノシシ下顎骨出土状況（東より） 中、C-4配石遺構周辺朱塗盾出土状況（南より） 下、C-4配石遺構6朱塗木製品出土状況（西より）
- 図版41 遺構 上、C-6断層断面（西より） 下、C-6断層断面（東より）
- 図版42 遺構 上、D-3第13層（黒色粘土③）木製品出土状況（北東より） 中、D-3第13層（黒色粘土③）木製品出土状況（北東より） 下、D-3第13層（黒色粘土③）木製品出土状況（北より）
- 図版43 遺構 左上、D-7第10層（灰色粘土②）土器出土状況（北より） 左中、D-7第10層（灰色粘土②）土器出土状況（北より） 左下、D-8第13層（黒色粘土③）土器出土状況（北より） 右上、D-7第10層（灰色粘土②）土器出土状況（南東より） 右中、D-8第13層（黒色粘土③）土器出土状況（北西より） 右下、D-1第10層（灰色粘土②）土器出土状況（北より）
- 図版44 遺構 上、D-3第13層（黒色粘土③）木製品出土状況（北より） 中、D-3第13層（黒色粘土③）木製品出土状況（北より） 下、D-8第13層（黒色粘土③）土器出土状況（北西より）
- 図版45 遺構 上、C-3~7堰状遺構検出状況（東より） 中、C-4堰状遺構検出状況（東より） 下、C-4堰状遺構検出状況（南東より）
- 図版46 遺構 左上、C-4・5堰状遺構検出状況（東より） 左中、C-4堰状遺構検出状況（東より） 左下、C-4堰状遺構検出状況（東より） 右上、C-4堰状遺構検出状況（東より） 右中、C-4堰状遺構断ち割り断面（北東より） 右下、C-4堰状遺構断ち割り断面（東より）
- 図版47 遺構 D-3・9 1・3号方形周溝墓・墓道全景（東より）
- 図版48 遺構 上、D地区方形周溝墓検出状況（東より） 中、D地区方形周溝墓検出状況（西より） 下、D地区方形周溝墓検出状況（東より）
- 図版49 遺構 上、D-8・9 1号方形周溝墓全景（南より） 中、D-8・9 1号方形周溝墓全景（南東より） 下、D-8・9 1号方形周溝墓墳丘検出状況（東より）
- 図版50 遺構 上、D-9 1号方形周溝墓1・2号主体部検出状況（北西より） 中、D-9 1号方形周溝墓1・2号主体部検出状況（北東より） 下、D-9 1号方形周溝墓1・2号主体部検出状況（南より）
- 図版51 遺構 上、D-9 1号方形周溝墓1号主体部検出状況（北東より） 中、D-9 1号方形周溝墓1号主体部検出状況（西より） 下、D-9 1号方形周溝墓1号主体部検出状況（北東より）
- 図版52 遺構 左上、D-9 1号方形周溝墓1号主体部検出状況（南東より） 左中、D-9 1

- 号方形周溝墓1号主体部北半検出状況(南より) 左下, D-9 1号方形周溝墓1号主体部断ち割り断面(西より) 右上, D-9 1号方形周溝墓1号主体部検出状況(東より) 右中, D-9 1号方形周溝墓1号主体部南半検出状況(東より) 右下, D-9 1号方形周溝墓1号主体部北半検出状況(北より)
- 図版 53 遺構 上, D-9 1号方形周溝墓2号主体部検出状況(北東より) 中, D-9 1号方形周溝墓2号主体部検出状況(北東より) 下, D-9 1号方形周溝墓2号主体部検出状況(東より)
- 図版 54 遺構 左上, D-9 1号方形周溝墓2号主体部断ち割り断面(南より) 左中, D-9 1号方形周溝墓2号主体部南半検出状況(東より) 左下, D-9 1号方形周溝墓2号主体部北半検出状況(西より) 右上, D-9 1号方形周溝墓2号主体部断ち割り断面(東より) 右中, D-9 1号方形周溝墓2号主体部北半検出状況(東より) 右下, D-9 1号方形周溝墓2号主体部検出状況(南より)
- 図版 55 遺構 左上, D-9 1号方形周溝墓3号主体部断ち割り断面(北より) 左中, D-9 1号方形周溝墓3号主体部断ち割り断面(南より) 左下, D-9 1号方形周溝墓4号主体部断ち割り断面(南より) 右上, D-9 1号方形周溝墓3号主体部検出状況(東より) 右中, D-9 1号方形周溝墓3号主体部断ち割り断面(南東より) 右下, D-9 1号方形周溝墓3号主体部東西アゼ断ち割り断面(南より)
- 図版 56 遺構 左上, D-9 1号方形周溝墓壘棺検出状況(南東より) 左中, D-9 1号方形周溝墓供獻土器出土状況(東より) 左下, D-9 1号方形周溝墓供獻土器出土状況(西より) 右上, D-9 1号方形周溝墓1号主体部掘方内打製石剣出土状況(北より) 右中, D-9 1号方形周溝墓供獻土器出土状況(北より) 右下, D-9 1号方形周溝墓供獻土器出土状況(南東より)
- 図版 57 遺構 上, D-4・5 3号方形周溝墓墳丘検出状況(西より) 中, D-4・5 3号方形周溝墓墳丘断面南壁(北東より) 下, D-4 3号方形周溝墓2号主体部検出状況(南西より)
- 図版 58 遺構 上, D-3・4 3号方形周溝墓墳丘南東斜面断面南壁(北より) 中, D-4・5 3号方形周溝墓墳丘断面南壁(北より) 下, D-4・5 3号方形周溝墓墳丘南西斜面断面南壁(北より)
- 図版 59 遺構 左上, D-3・4・5 3号方形周溝墓全景(北東より) 左中, D-4・5 3号方形周溝墓検出状況(北西より) 左下, D-9 3号方形周溝墓主体部検出状況(北東より) 右上, D-4 3号方形周溝墓墳丘アゼ断面(西より) 右中, D-3 3号方形周溝墓北東周溝断面(南より) 右下, D-9 3号方形周溝墓北東周溝断面(北より)
- 図版 60 遺構 左上, D-5 3号方形周溝墓1号主体部検出状況(西より) 左中, D-4 3号方形周溝墓1号主体部検出状況(北より) 左下, D-4 3号方形周溝墓2号主体部検出状況(北西より) 右上, D-4・5 3号方形周溝墓1・2号主体部検出状況(南東より) 右中, D-4 3号方形周溝墓2号主体部検出状況(南東より) 右下, D-4 3号方形周溝墓2号主体部検出状況(西より)
- 図版 61 遺構 左上, D-4 3号方形周溝墓2号主体部西半検出状況(北東より) 左中, D-4 3号方形周溝墓2号主体部断面南壁(北より) 左下, D-4 3号方形周溝墓3号

- 主体部北東部検出状況（南東より） 右上、D-4 3号方形周溝墓3号主体部検出状況（東より） 右中、D-4 3号方形周溝墓3号主体部検出状況（南東より） 右下、D-4 3号方形周溝墓3号主体部検出状況（北より）
- 図版 62 遺構 左上、D-4 3号方形周溝墓3号主体部断ち割り断面（東より） 左中、D-4 3号方形周溝墓3号主体部断ち割り断面（東より） 左下、D-4 3号方形周溝墓4号主体部検出状況（南東より） 右上、D-4 3号方形周溝墓4号主体部検出状況（北東より） 右中、D-4 3号方形周溝墓4号主体部南半検出状況（北より） 右下、D-4 3号方形周溝墓供献土器出土状況（西より）
- 図版 63 遺構 上、D-1～3 4号方形周溝墓墳丘検出状況（西より） 中、D-2 4号方形周溝墓主体部検出状況（南より） 下、D-2 4号方形周溝墓1号主体部検出状況（南より）
- 図版 64 遺構 上、D-2 4号方形周溝墓2号主体部検出状況（南より） 中、D-2 4号方形周溝墓3号主体部検出状況（西より） 下、D-3 4号方形周溝墓4号主体部検出状況（南より）
- 図版 65 遺構 上、D-2 4号方形周溝墓5号主体部検出状況（東より） 中、D-2 4号方形周溝墓5号主体部検出状況（北西より） 下、D-2 4号方形周溝墓5号主体部検出状況（東より）
- 図版 66 遺構 上、D-2 4号方形周溝墓5号主体部検出状況（西より） 中、D-2 4号方形周溝墓5号主体部南側木口検出状況（西より） 下、D-2 4号方形周溝墓5号主体部検出状況（西より）
- 図版 67 遺構 左上、D-2 4号方形周溝墓1・2・3号主体部検出状況（東より） 左中、D-1・2 4号方形周溝墓検出状況（西より） 左下、D-1・2 4号方形周溝墓墳丘北斜面検出状況（北より） 右上、D-1～3 4号方形周溝墓全景（南より） 右中、D-2・3 4号方形周溝墓1号・3号主体部（東より） 右下、D-1・2 4号方形周溝墓墳丘北斜面断ち割り断面（南より）
- 図版 68 遺構 左上、D-2 4号方形周溝墓1号主体部検出状況（南より） 左中、D-2 4号方形周溝墓1号主体部検出状況（北より） 左下、D-2 4号方形周溝墓1号主体部断ち割り断面（南より） 右上、D-2 4号方形周溝墓2号主体部検出状況（西より） 右中、D-2 4号方形周溝墓2号主体部検出状況（南より） 右下、D-2 4号方形周溝墓2号主体部検出状況（西より）
- 図版 69 遺構 左上、D-2 4号方形周溝墓1・2号主体部検出状況（南西より） 左中、D-2 4号方形周溝墓2号主体部検出状況（南より） 左下、D-2 4号方形周溝墓3号主体部検出状況（東より） 右上、D-2 4号方形周溝墓2号主体部断ち割り断面（南西より） 右中、D-2 4号方形周溝墓3号主体部検出状況（東より） 右下、D-2 4号方形周溝墓2号主体部断ち割り断面（西より）
- 図版 70 遺構 左上、D-2 4号方形周溝墓3号主体部検出状況（南東より） 左中、D-2 4号方形周溝墓3号主体部検出状況（東より） 左下、D-2 4号方形周溝墓4号主体部検出状況（西より） 右上、D-2 4号方形周溝墓4号主体部検出状況（南より） 右中、D-2 4号方形周溝墓4号主体部検出状況（西より） 右下、D-2 4号方形周溝墓4号主体部検出状況（西より）

- 図版 71 遺構 左上, D-2 4号方形周溝墓5号主体部検出状況(西より) 左中, D-2 4号方形周溝墓5号主体部検出状況(南より) 左下, D-2 4号方形周溝墓5号主体部検出状況(南より) 右上, D-2 4号方形周溝墓5号主体部検出状況(東より) 右中, D-2 4号方形周溝墓5号主体部北半検出状況(南より) 右下, D-2 4号方形周溝墓5号主体部南半検出状況(北より)
- 図版 72 遺構 左上, D-2 4号方形周溝墓5号主体部断ち割り断面(西より) 左中, D-2 4号方形周溝墓5号主体部断ち割り断面(西より) 左下, D-2 4号方形周溝墓供献土器出土状況(西より) 右上, D-3 4号方形周溝墓供献土器出土状況(南より) 右中, D-2 4号方形周溝墓供献土器出土状況(東より) 右下, D-2 4号方形周溝墓供献土器出土状況(南より)
- 図版 73 遺構 上, C-1・2 5号方形周溝墓全景(北東より) 中, C-1・2 5号方形周溝墓全景(北東より) 下, C-1・2 5号方形周溝墓1号主体部検出状況(北より)
- 図版 74 遺構 上, C-1 5号方形周溝墓供献土器出土状況(西より) 中, C-2 5号方形周溝墓供献土器出土状況(北より) 下, C-2 5号方形周溝墓土器4土塊断ち割り断面(北より)
- 図版 75 遺構 左上, C-2・3 5号方形周溝墓検出状況(北より) 左中, C-2・3 5号方形周溝墓検出状況(北より) 左下, C-1・2 5号方形周溝墓検出状況(北西より) 右上, C-2 5号方形周溝墓1号主体部検出状況(北より) 右中, C-2 5号方形周溝墓1号主体部断ち割り断面(西より) 右下, C-2 5号方形周溝墓供献土器出土状況(西より)
- 図版 76 遺構 左上, C-2 5号方形周溝墓供献土器断ち割り断面(北より) 左中, C-2 5号方形周溝墓供献土器出土状況(北より) 左下, C-1・2 5号方形周溝墓供献土器出土状況(南より) 右上, C-2 5号方形周溝墓供献土器断ち割り断面(北より) 右中, C-2 5号方形周溝墓供献土器出土状況(北より) 右下, C-2 5号方形周溝墓供献土器検出状況(北より)
- 図版 77 遺構 左上, C-2 5号方形周溝墓供献土器断ち割り断面(北より) 左中, C-2 5号方形周溝墓土器8検出状況(東より) 左下, C-1 5号方形周溝墓供献土器出土検出状況(北より) 右上, C-1・2 5号方形周溝墓墳丘断面東壁・南壁(北西より) 右中, C-2 5号方形周溝墓墳丘西部断面南壁(北より) 右下, C-1 5号方形周溝墓墳丘東部断面南壁(北より)
- 図版 78 遺構 上, D-5~8 墓道全景(西より) 下, D-6~8 墓道全景(南東より)
- 図版 79 遺構 上, C-5~8 墓道検出前状況(東より) 中, C-6~8 墓道検出状況(北東より) 下, C-8~9 墓道・1号方形周溝墓検出状況(東より)
- 図版 80 遺構 上, C-7・8 墓道・土壌検出状況(東より) 中, C-8 墓道上土壌検出状況(南西より) 下, C-8 墓道断ち割り断面(北東より)
- 図版 81 遺構 上, D-3~6 畦半検出状況(東より) 中, D-6・7 畦半検出状況(西より) 下, D-1 畦半検出状況(南より)
- 図版 82 遺構 上, D-1 弥生時代前期溝1検出状況(南より) 中, D-1 弥生時代前期溝1検出状況(南より) 下, D-1 弥生時代前期溝1断ち割り断面(南西より)
- 図版 83 遺物 上, D-3~7 弥生時代前期遺構面全景(東より) 中, D-4・5 弥生時代前期土

- 遺物 溝4・5検出状況(東より) 下、D-2・3弥生時代前期溝2検出状況(西より)
- 図版 84 遺物 溜池・大溝1出土遺物(中・近世) 国産陶磁器(1~4)、瓦器(5、68、80、81、86)、土師器(9、84)
- 図版 85 遺物 大溝1・溝5他出土遺物(中世) 瓦器(63、247、248、265)、土師器(253、254、278、775)、輸入磁器(264)
- 図版 86 遺物 溝3他出土瓦器・金属製品・石製品 永楽通宝(779)、瓦器(266、303)、石製品(15、16)
- 図版 87 遺物 大溝1出土遺物(中世) 上、瓦器(15、23)、土師器(16、117) 下、瓦器(22、24)、土師器(17~20)
- 図版 88 遺物 大溝1出土遺物(中世) 上、瓦器碗(27、30、53、54、55、81、92、97、103) 下、土師器皿(25、27、39~50、83)
- 図版 89 遺物 大溝1出土遺物(中世) 上、瓦器播鉢(62)、火舎(37)、東播系須恵器控鉢(61) 下、土師器皿(64、65、67、69~71、73~76、78、92)
- 図版 90 遺物 大溝1出土遺物(中世) 上、瓦器椀(89~91、93~96、99~102、104、107) 下、瓦器椀羽釜(31、35、51、53、59、780、781)
- 図版 91 遺物 大溝1出土遺物(中世) 上、瓦器羽釜(58、60、119、782) 下、瓦器椀、皿(6、77、79、83、85、86、88、98、108、109、783~785)
- 図版 92 遺物 大溝1・包含層出土土器(中世) 上、土師器羽釜・瓦器甕(118、120、121、786) 下、輸入磁器碗・皿(57・110~115、297、299)
- 図版 93 遺物 大溝1・第2次基壇周溝他出土遺物(中世) 上、中世須恵器(10~12)、土師器(13、14) 下、土師器皿(124、126~129、131)、瓦器(123、130、134、137~140、144、147)
- 図版 94 遺物 第2次基壇周溝・包含層出土土器(中世) 上、土師器甕・皿(136、182)、瓦器椀皿(147、149、150、152、153、157)、黑色土器椀(151)、東播系須恵器控鉢(181)、輸入磁器椀(154)、国産陶器甕底部(158) 下、土師器羽釜(157)、瓦器羽釜(155、156)
- 図版 95 遺物 第1基壇整地土・包含層出土遺物(中世) 上、土師器皿(161、166)、瓦器(163~165、167、169、170、173、175~179) 下、土師器皿(198、200、201)、瓦器(197、199、202~209、788)
- 図版 96 遺物 第1次基壇周溝・溝3出土遺物(中世) 上、土師器皿(211、213、217、218)、瓦器椀・皿(210、212、214~216、219~221、224、227~230、232) 下、輸入磁器(284~287)、瓦器(292)、信楽(283)
- 図版 97 遺物 井戸2・土塚1・2・溝3・5出土土器(中世) 上、中世須恵器(288、289)、瓦器(290、291) 下、土師器皿(274~277、279、281)、瓦器(269、271~273、280、282)
- 図版 98 遺物 溝5・第2次基壇周溝・柱穴17出土土器(中世) 上、土師器皿(234、235、240)、瓦器(236~239、241、248)、輸入磁器(243)、信楽(244) 下、瓦器(246、789、792)、土師器皿(790、791)、中世須恵器(242)、輸入磁器(180、249、250)
- 図版 99 遺物 井戸2・溝1出土土器・輸入磁器(中世) 上、土師器皿(252、255、256、258、259、267)、瓦器(257、260~263、268、270) 下、土師器皿(793)、瓦器(794~

796、798~805)、輸入磁器(797)

- 図版100 遺物 包含層・大溝1・落込み2・基壇整地出土遺物(中世) 上. 土師器皿(302)、瓦器(301、304、305)、中世須恵器(306、307)、古墳須恵器(297) 下. 砥石(3~7、10、12)、基石(14)、石鍋(1)
- 図版101 遺物 包含層・大溝1出土遺物(中世) 軒丸瓦(3、4)、軒平瓦(1、2)、烏袈瓦(21)、道具瓦(25)、丸瓦(15)、常滑(776)
- 図版102 遺物 包含層出土遺物(中世) 上. 輸入磁器(184~190、192~194)、信楽焼(195)、常滑焼(196) 壺下. 平瓦(10~13、24、806)
- 図版103 遺物 包含層出土瓦(中世) 上. 平瓦(6、9、807)凸面 下. 平瓦(6'、9'、807')凹面
- 図版104 遺物 包含層出土瓦(中世) 上. 平瓦(7、808)凸面 下. 平瓦(7'、808')凹面
- 図版105 遺物 包含層出土瓦(中世) 上. 丸瓦(14、16、20、809~811)凸面 下. 丸瓦(14'、16'~20'、809'~811')凹面
- 図版106 遺物 包含層出土瓦(中世) 上. 平瓦(8、812)、軒丸瓦(813、814)、烏袈瓦(22)、道具瓦(25) 下. 平瓦・軒丸瓦・烏袈瓦・道具瓦(同上)
- 図版107 遺物 包含層出土埴輪(古墳時代) 上. 円筒埴輪(1~3、5、15、31、309) 下. 円筒埴輪(16~20、23~27、29、32、33)
- 図版108 遺物 井戸3・第10層(灰色粘土②)出土弥生土器 甕(32、310~312、318)
- 図版109 遺物 第10層(灰色粘土②)出土弥生土器 甕(315、317、319、320)、高杯(325、326)
- 図版110 遺物 第10層(灰色粘土②)出土弥生土器 甕(330、331、334)、壺(324)
- 図版111 遺物 第11層(黒色粘土②)出土弥生土器 甕(339、342、345)、壺(329)、鉢(353)
- 図版112 遺物 第10層(灰色粘土②)出土弥生土器 甕(342、343、347、348)、高杯(355)
- 図版113 遺物 第11層(黒色粘土②)出土弥生土器 壺(349、350)、甕(341、344)、鉢(354)
- 図版114 遺物 第12層(灰色粘土③)出土弥生土器 壺(362)、甕(346、417)、高杯(356)、鉢(357)、甕内部のコゲ跡(417')
- 図版115 遺物 第12層(灰色粘土③)出土弥生土器 甕(363、364、366~368)、高杯(376)
- 図版116 遺物 第13層(黒色粘土③)出土弥生土器 壺(381、382、384、385)
- 図版117 遺物 第13層(黒色粘土③)出土弥生土器 壺(383、389、390、396、414)
- 図版118 遺物 第13層(黒色粘土③)出土弥生土器 壺(387)、甕(407、412、421)、高杯(434)
- 図版119 遺物 第13層(黒色粘土③)出土弥生土器 壺(430)、壺底部(398)、甕(408、421、427)
- 図版120 遺物 第13層(黒色粘土③)出土弥生土器 壺(448)、甕(426、454)、鉢(397)、高杯(437、441)
- 図版121 遺物 第13層(黒色粘土③)・自然河川2出土弥生土器 壺(456)、甕(425、453、468)、甕底部(495)、高杯(435)
- 図版122 遺物 自然河川2出土弥生土器 壺(460、498)、甕(466)、蛸壺(497)
- 図版123 遺物 自然河川2・配石・祭祀場4号出土弥生土器 壺(511、541)、壺底部(542)、甕(467、487、554)
- 図版124 遺物 第13層(黒色粘土③)・配石・祭祀場出土弥生土器 甕(556)、高杯(439、565、566)、壺底部(547、574)、鉢(513)
- 図版125 遺物 祭祀場・1、3号方形周溝墓・断層上層出土弥生土器 壺(570、575、620)、壺底部(606)、甕(626)、水差(624)

- 図版126 遺物 1、3号方形周溝墓出土弥生土器 甕 (622、623)、水差 (625)、鉢 (636)
- 図版127 遺物 4、5号方形周溝墓出土弥生土器 甕 (628、635、652)、高杯 (656)
- 図版128 遺物 5号方形周溝墓出土弥生土器 甕 (649)、水差 (653)、鉢 (654、655)、高杯 (657)、
壺底部 (642)、甕底部 (651)
- 図版129 遺物 祭祀場・第13層 (黒色粘土③)・5号方形周溝墓出土弥生土器 甕 (455、640)、甕
(650)、高杯 (564)
- 図版130 遺物 第11層 (黒色粘土②)・第12層 (灰色粘土③)出土弥生土器 上. 高杯 (372)、甕
(339、344)、鉢 (377)、壺底部 (387) 下. 甕
- 図版131 遺物 第13層 (黒色粘土③)出土弥生土器 上. 甕 (400、402、449)、甕底部 (428、452)、
壺体部 (393)、壺口縁 (391)、高杯 (442、445~447) 下. 甕 (403、404、460)、
甕底部 (415~417)、壺体部 (394)、高杯 (443、444)
- 図版132 遺物 第13層 (黒色粘土③)・自然河川2出土弥生土器 上. 壺 (370、379、380)、甕
(369、399、414)、高杯 (373、404)、甕底部 (365) 下. 甕 (469~472、465)、壺
体部 (482)、壺 (495)、高杯 (505)
- 図版133 遺物 自然河川2出土弥生土器 上. 甕 (483~486、490~493、496、499)、鉢 (502) 下.
鉢 (480、500、501、503)、高杯 (504、506)、甕 (489)、壺 (507)
- 図版134 遺物 自然河川2・第13層 (黒色粘土③)・祭祀場出土弥生土器 上. 甕蓋 (473、507)、
壺底部 (462、464、527、538) 下. 壺 (515)、鉢 (581、529)、高杯 (572、582)、
甕 (525)、器台 (536)、壺体部 (517、524)
- 図版135 遺物 配石出土弥生土器 上. 壺 (526、537)、甕 (519、525、538~540)、高杯 (509)、壺
(518、548) 下. 高杯 (532)、壺底部 (574、580)、甕 (528、541、579)
- 図版136 遺物 祭祀場出土弥生土器 上. 壺 (546、551)、甕 (553)、鉢 (561、562、596)、壺底部
(552) 下. 壺 (569)、高杯 (523)、壺底部 (549)、甕底部 (557)
- 図版137 遺物 祭祀場出土弥生土器 上. 壺 (543、544、571)、甕底部 (560) 下. 壺 (550)
- 図版138 遺物 第30層 (茶褐色粘土)下層出土弥生土器 壺 (669~702)
- 図版139 遺物 第30層 (茶褐色粘土)下層出土弥生土器 壺 (659、704、706)、鉢 (709)、土錘 (740)
- 図版140 遺物 第28・29層 (灰オリーブ・オリーブ茶色粘土)出土弥生土器 上. 壺 (660、663)、
甕 (662、664)、壺蓋 (661) 下. 壺 (666~668)、甕 (669~674)、壺蓋 (675)
- 図版141 遺物 第30層 (茶褐色粘土)上層出土弥生土器 上. 壺 (647、687~689)、甕蓋 (685、697、
698) 下. 甕 (667、679、680、682、683、691~693、695)
- 図版142 遺物 第30層 (茶褐色粘土)上層・下層出土弥生土器 上. 甕 (678、681、684、690、694、
696) 下. 壺 (712~715)、甕 (707、708、716~719)
- 図版143 遺物 第30・31層 (茶褐色粘土・灰黒色粘土)出土弥生土器 上. 壺 (703、705) 下. 壺
(720~724)
- 図版144 遺物 第31層 (灰黒色粘土)他出土弥生土器 上. 甕 (730、748~756、758) 下. 甕
(727、729、756、757、759、761~767、773、774)
- 図版145 遺物 第31層 (灰黒色粘土)出土弥生土器 上. 壺 (725、741~746、789) 下. 鉢 (728、
731、732、768、769)
- 図版146 遺物 第31層 (灰黒色粘土)他出土弥生土器 上. 壺蓋 (733)、甕 (734、735、770~772)
下. 底部 (686、710、726、733、736、738)

- 図版147 遺物 銅鍔・打製石器 上. 打製石剣(1)、打製石鏃(2、3)、銅鏃(9) A面 下. 打製石剣(1')、打製石鏃(2'、3')、銅鏃(9') B面
- 図版148 遺物 46次調査出土弥生土器 上. 壺(98、104、149)、甕(90、129) 下. 壺(159)、甕(286)、底部(201、290)
- 図版149 遺物 46次調査土器だまり出土弥生土器 上. 壺(3、5)、鉢(33、34) 下. 壺(7、11、13、15)
- 図版150 遺物 46次調査土器だまり・47次土器だまり出土弥生土器 上. 甕(28、50、65) 下. 壺(814~817)、高杯(818)、甕底部(819、820)
- 図版151 遺物 46次調査土器だまり出土弥生土器 上. 甕(20、21、49、56) 下. 甕(26、27)
- 図版152 遺物 第28・29層(包含層)出土弥生土器 甕(555、821~823)、壺(824)
- 図版153 遺物 47の1次調査出土弥生土器 製塩土器(41、42)、高杯(91)、甕(31、34)、壺(19)
- 図版154 遺物 47の1次調査出土弥生土器 壺(3、5)、甕(13、826)
- 図版155 遺物 47の1次調査出土弥生土器 高杯(91)、壺(122、827、829)、甕(37、828)
- 図版156 遺物 47の1次調査出土弥生土器・接合痕 上. 壺(830~834)、高杯(837)、甕底部(835、836) 下. 壺(604、605)、甕(608、610、611、837)、高杯(619)、甕底部(614、615)
- 図版157 遺物 木製品 漆器椀(18)、火つけ棒(2~4、11、12、15、16)、下駄(21)、曲物(25、27)
- 図版158 遺物 木製品 箸(5~10、13)、下駄(22)、曲物(25)、槽(31)、不明木製品(30、32)、板材(33)、杭状木製品(17)
- 図版159 遺物 木製品 樞状木製品(37、38)、不明木製品(40)、臼(39)、杵(34)、天秤棒(35)
- 図版160 遺物 木製品 朱塗木製品(42)、朱塗盾(46、46')、朱塗武器型木製品(43)、武器型木製品(45)、樞状木製品(36)
- 図版161 遺物 木製品 武器形木製品(51、52、59)
- 図版162 遺物 木製品 有頭棒(54、56、57)、杭状木製品(69、71)、板材(93、95)、棒材(55、70、76)、杭(72、75)、挟り入り板材(96)、槽(97)
- 図版163 遺物 木製品 不明製品(47、80、86)、組合鋤(89)、板材(83)、組合鋏(92)、年代測定木製品
- 図版164 遺物 木製品 杭(77)、有頭棒(53、82、123)、不明木製品(81、88)、板材(94)、武器形木製品(58)、机脚部(87)
- 図版165 遺物 木製品 板材(91、98、99)、穿孔板材(98、104、105)、杭(125)、角材(121)、斧柄(90)、二又材(109、110、115)
- 図版166 遺物 木製品 羽子板状木製品(128)、穿孔板材(102、103)、二又材(29、111、112)、柱材(129)、穿孔棒材(126)
- 図版167 遺物 木製品 矢板(131、134、135)、杭(130)、柱材(46-6、11)、礎板(46-1・2・4・5・9)
- 図版168 遺物 1号方形周溝墓1号主体部木棺 蓋板(左)・側板(右・中央左)・底板(中央)・小口板(中央上・下)
- 図版169 遺物 1号方形周溝墓2号主体部木棺底板(左)、小口板(左上・下)、側板(中央左)、3号方形周溝墓4号主体部木棺蓋板(右上)、2号主体部(右中)、3号主体部側板(右下)
- 図版170 遺物 4号方形周溝墓5号主体部木棺底板(左中)、小口板(左上・下)、蓋板(中央)、3号主体部小口板(中央下)・底板(右下)、2号主体部底板(右上)

I はじめに

1. 調査に至る経過

第47-2次調査は、東大阪市西岩田2丁目地内において大阪府八尾土木事務所が実施した都市計画道路大阪環状山線建設に関連して第46・47-1次調査（西側に隣接）に引き続き平成12年度に実施したものである。この事業に関して東大阪市教育委員会が実施する最終の調査にあたる。調査場所は、近畿日本鉄道奈良線の北側、近鉄ハーツとの間に挟まれた道路敷きである。

今回の調査地は、従前の周辺の調査結果と過去2年度に実施した調査から得られた結果から遺跡の北辺にあたり、河内湖の南岸に隣接する地で弥生時代前期の居住域や方形周溝墓が営まれた可能性が高いと想定された場所である。

2. 位置と環境

位置

瓜生堂遺跡は、標高約5mの旧大和川の形成した自然堤防ないし三角州上に営まれた弥生時代の集落跡で、河内平野の一面に位置する。北に新家・岩田遺跡、南に若江・巨摩廃寺・山賀遺跡などが存在し、平野部の中でも弥生から古墳時代の遺跡密集地の一角にあたる。古代の国郡制に従えば、河内国若江郡に含まれ河内国のほぼ中央に位置する。

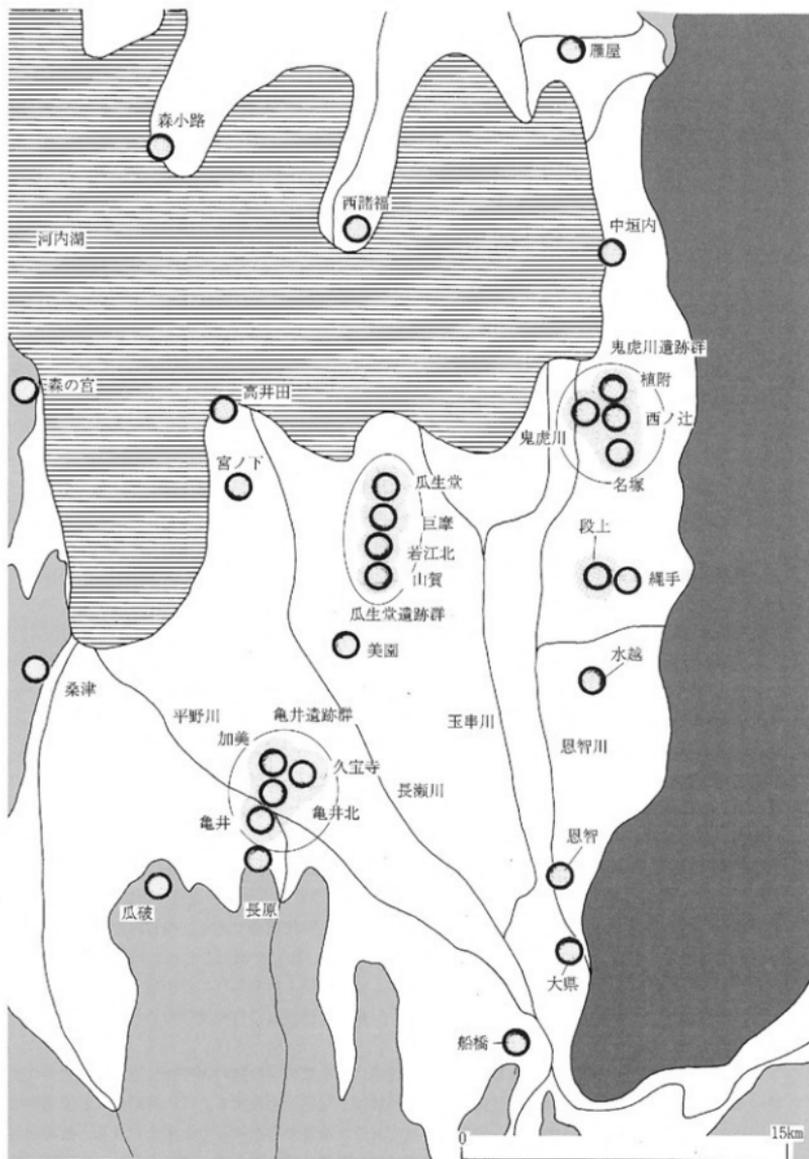
現在、本遺跡は近鉄奈良線八戸の里駅の南方、大阪府寝屋川流域南部下水道小阪ポンプ場を中心とした南北約1.1km、東西約0.7kmの東大阪市瓜生堂と若江西新町にかけての範囲（第1図）として周知されている。遺跡のほぼ中心を南北に大阪中央環状線が、北端付近を東西に近畿日本鉄道奈良線が通る。今回の調査地は奈良線の北側、中央環状線の東辺に隣接した地である。国土地理院発行の1/2500「大阪東南部」の地形図では北東隅付近にあたる。

地理的歴史的環境

本遺跡が位置する現在の河内平野北半の低平な地は、縄文時代前期にいわゆる縄文海進により河内湾と呼ばれる海が上町台地の先端から進入していた。河内湾には、現在の玉串川や長瀬川の前身である旧大和川が南から北に向い幾筋も流れ込み、川が運ぶ土砂の堆積などにより海水の流入が減じこの時代の終わり河内湾に変化する。次の弥生時代初めには、さらに堆積が進み淡水の河内湖に変わる。湖あるいは湖の沿岸には、これらの川により運ばれた土砂によって形成された三角州が広がり、流れ込む川の両側には自然堤防、その背後には後背湿地が形成されたことが判明している。本遺跡付近は、河内湖・湖の南辺部にあたる。

平野北半分における人間活動の痕跡は、現在のところ新家遺跡（本遺跡の北約1.5km）や山賀遺跡（南約1km）で少量の晩期中頃の土器が出土し晩期後半の土器もいくつかの遺跡で少数みられるため、この頃から認められる。しかし、活動が本格化するのは弥生時代前期である。後背湿地が稲作の耕作地として早くから利用されたためである。若江北遺跡（南0.5km）で検出された前期初頭の水田趾の存在から、当時伝来した稲作農耕が後背湿地を利用していち早く行われたことが窺える。当時の居住地は、同遺跡で検出された竪穴住居や掘立柱建物から水田に隣接した自然堤防や三角州上の微高地を選んで営まれたことが知られる。

現在知られる遺物出土状況などから見ると、本遺跡には北東部（今回の調査地付近）で弥生時代前期中頃から後半に、北西部で弥生時代前期後半に小規模な集落が出現する。この時期は、新家遺跡でも同様の集落が存在したようである。位置から見て若江北遺跡から派生したと考えられる。短期間居住をした後に、自然環境の変化などから本遺跡内では北西部に移動したことが考えられるが新家遺跡



第1図 弥生時代中期河内平野遺跡分布図 (濱田1996に加筆)

は一旦廃絶するようである。若江北遺跡は、前期末までは継続せず短期間で消滅するが、南に位置する山賀遺跡で、本遺跡の北東部に集落が営まれたのと同時期以降に比較的大きな集落がみられることからここに主体が移ったと考えられる。

中期には、本遺跡を含む若江北・巨摩廃寺・山賀遺跡と共に東西1.5km、南北1.6kmの範囲を占める大規模な遺跡群（瓜生堂遺跡群）が形成される。これを一つの集落と考えると河内湖南部に営まれた最大規模の集落となり、河内における中心的な集落であることは間違いない。なお、湖の東辺には鬼虎川・西ノ辻・榎附・鬼塚遺跡からなる遺跡群（鬼虎川遺跡群）がほぼ同時期に存在している。両者とも弥生時代中期中頃から後半に最も範囲を広げる。両遺跡群の存在は、単に農耕の拡大だけでは後の時代の遺跡の在り方から見て説明が困難で、背景に川や湖を利用した水運がもたらす富などが考えられる。巨摩廃寺遺跡から出土した「貨泉」はその証拠の一つと考えられている。また、鬼虎川遺跡では中期初頭の環濠が検出されているが、本遺跡においては知られていない。環濠を必要としない理由として北に河内湖、東西に北流する旧大和川支流の存在が想定され、防衛や灌漑にこれを利用すれば十分足りるためと考えることもできる。

後期には両遺跡群とも規模を縮小し瓜生堂遺跡群は巨摩廃寺遺跡に、鬼虎川遺跡群は西ノ辻遺跡に収斂していく。時を同じくして中期末に生駒山麓の標高100m付近に高地性集落の山畑遺跡、後期に岩滝山遺跡が出現する。高地性集落は、一般に居住に不適切な場所にあって営まれていることなどから戦争に備えた集落と考えられている。遺跡群の衰退が高地性集落の出現とほぼ時を同じくしていることは、背景に河内をはじめとする畿内地域の当時の不安定な社会状況を反映しているものと考えられる。

古墳時代は、北約0.5kmの前期の西岩田遺跡から前代から続く水運に関係すると考えられる山陽・山陰地方の土器や中期前半の大形の倉庫と考えられる掘立柱建物などが検出されている。中期後半と後期は仁徳記「堀江」の開削が伝えるように瀬戸内海への出口が狭められたためか、水運を窺わせる資料はあまり見られない。

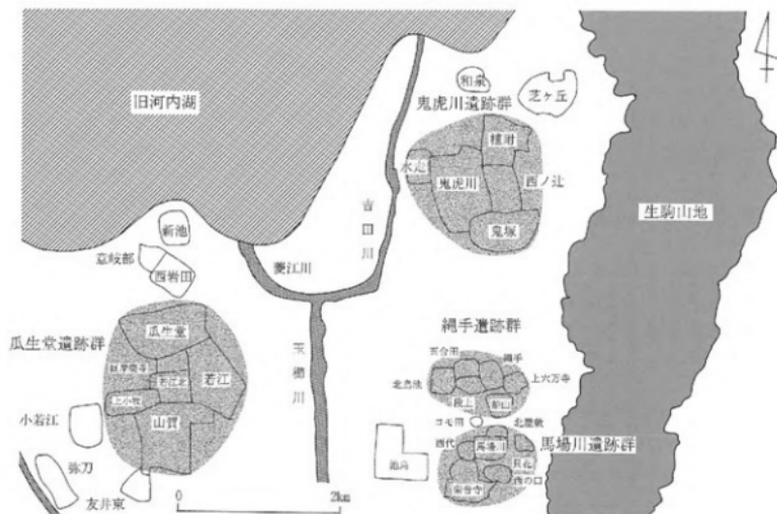
大規模な古墳は存在しないが、集落の有力者に許された最低限の古墳である小型低方墳は、巨摩廃寺遺跡（中期後半）と山賀遺跡（後期前半）で検出されている。本遺跡からも古墳時代中期から後期の埴輪が出土しており古墳の存在が想定できる。この種の古墳は、集落に隣接して営まれるため、検出地点の遠くないところに同時期の集落が存在すると予想されるが、実態は明らかでない。

飛鳥・奈良時代は、奈良時代後期の集落の一端が本遺跡で、山賀遺跡と友井東遺跡（本遺跡の南2km）から水田址が検出されている。本遺跡で「若」と記された墨書土器が1点出土しており、これを根拠に若江郡衙を想定する考えもある。しかし、検出されている建物の規模が小さく遺物の量も少ない。むしろ、織田信長による若江城の大改築に伴う削平のため明確な遺構は確認されていないが、遺物量の豊富さや種類の多さから見て若江寺に隣接した地を考えるべきである。若江寺（南約1km）は、飛鳥時代後期に創建された寺で中央政権に直接結びつく瓦や唐三彩などが出土しており、河内における主要寺院の一つである。

以降、室町時代に若江遺跡に存在した河内守護所（若江城）が示すように、本遺跡周辺は中世にいたるまで河内の中心として存在し栄えた地域といえる。この背景には、やはり河内湖および旧大和川の水運や、河内国のほぼ中心に位置する地勢的条件を考える必要がある。弥生時代後期段階で、本遺跡から巨摩廃寺遺跡への移住が示すように、一定の限られた地域の中で、時代により自然条件の変化などに適応して居住地を替えたものと考えられる。



第2図 周辺遺跡分布図



第3図 河内湖東南辺弥生時代遺跡群模式図

II 調査概要

1. 調査方法と目的

今回の調査は、北側に隣接する近鉄ハーツの出入り口を確保するため通路部分（幅約10m）を空けて西側に、長辺約38m、短辺約8m（C地区と仮称）と東側に、長辺約55mで短辺約9m（D地区と仮称）の東西に細長い長方形の調査範囲が設定された。調査面積は約610㎡である。

調査は土留の鋼矢板を打設した後、盛土および耕土を現地表下1.5mまで機械を用いて掘削した。以下を、調査対象とされた地表下5mまで人力で掘り下げ行った。機械掘削終了後、鋼矢板強度保持のため2段の仕保工を設置した。仕保工が5m毎に区切られたのを利用して、東から西に小地区に区分しC-1からC-7、D-1からD-9と仮称して調査を実施した。昨年度実施したB-17地区とC-7の西端は約2m離れている。

調査の目的は、従前と過年度の調査結果などから下記の事柄を明らかにすることを主とした。

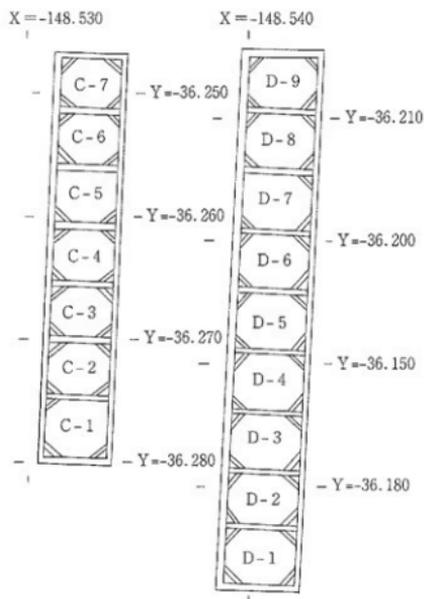
1) 調査地は、本遺跡の北限にあたり弥生時代に存在した河内湖の南岸にあたる地と考えられるため、当時の岸辺の状況や遺構・包含層の広がり確認。

2) 昨年度の調査で検出した配石遺構のひろがり、地震による地滑りで生じた東肩の確認。

3) 調査地の東側や試掘調査により検出されている方形周溝墓が、調査地点まで存在するかの確認。

4) 弥生時代以降近世に至るまでの遺構存在の有無の確認。特に、昨年度の調査では明らかにできなかったが遺跡の東端で最近、平安時代後期に創建された「瓜生堂」鹿寺所用と考えられる瓦が出土しておりこれに関連する遺構の有無の確認。

5) 土層の堆積状況を調査することにより、昨年度の成果も合わせた弥生時代から現代までの調査地の自然状況変化と推移の究明。



第4図 調査地区割図



第5図 調査地位置図 (1/2500)

2. 調査経過

主要な現場調査は平成12年8月3日より開始し、翌年3月5日に終了した。調査地区は去年度の調査である瓜生堂遺跡第47-1次調査の東に接したC地区とさらに東に約10m離れたD地区と仮称した。東より順に5m毎にC-1～7、D-1～9までの地区に分けた。調査の進捗状況に合わせてラジコン・ヘリコプターを使用した航空測量と、バケット車を用いた遺構全景写真撮影を行った。文中の層名は基本層序による。

調査日誌抄

- 8月3日 D地区東側より機械掘削を開始する。
- 8月18日 C地区東側より機械掘削を開始する。
- 8月21日 D地区の人力掘削を開始する。地区内北側に先行トレンチを設定し掘り下げる。
- 8月23日 D地区の井戸や大溝などの中世から布留式期の遺構面を検出する。
- 8月25日 D地区大溝より永楽通宝検出。井戸1より白磁皿出土。
- 8月28日 C地区の人力掘削を開始する。地区内北側に先行トレンチを設定し掘り下げる。
- 8月30日 D地区第1面遺構写真撮影。
- 9月6日 C地区の大溝や「瓜生堂」廃寺の基壇などの中世の遺構面を検出した。
- 9月8日 C地区大溝2を掘り下げる。石製五輪塔の部材が出土した。
- 10月12日 C地区空掘。井戸3より布留式土器が出土した。
- 11月9日 C地区「瓜生堂」廃寺の基壇及び周溝など中世の遺構面の全景写真撮影を行う。D地区1号方形周溝墓1号主体部掘方より打製石剣が1点出土した。
- 11月14日 D地区方形周溝墓の主体部掘方を検出し、掘方内を掘削する。
- 11月16日 D地区4号方形周溝墓の主体部から棺材が出土した。
- 11月24日 C地区第12層で木白が出土した。
- 12月4日 C-1地区第11層土器溜まり、C-6・7地区で自然河川を検出する。
- 12月6日 C地区第13層上面で配石遺構を検出する。
- 12月11日 C・D地区ともにラジコンヘリコプターによる航空測量を実施する。1号方形周溝墓木棺内から下顎骨・白歯が出土した。
- 12月16日 現地説明会を行う。約450人の市民の参加を得て無事終了した。
- 12月18日 C地区第13層よりサヌカイト製石鏡が出土した。
- 12月23日 D地区4号方形周溝墓2号主体部から上・下顎骨出土。また側板の一部も出土した。
- 12月27日 C地区配石遺構出土の木製品の取り上げを開始する。D地区バケット車による全景写真撮影。
- 1月10日 C地区で朱塗層が出土した。
- 1月17日 D地区方形周溝墓墳丘部の断ち割りを開始する。
- 1月18日 D地区の第26・27層上面で水田址の畦畔を検出した。
- 2月9日 C地区5号方形周溝墓で供献土器が出土した。
- 2月13日 D地区の第30層茶褐色粘土を掘削し、弥生時代前期の遺構を検出した。
- 2月19日 C地区断層に伴う供献土器、第13層より銅鏡出土。
- 2月20日 C地区配石より祭祀用の壺や朱塗の武器形木製品等出土した。C地区の調査が終了する。
- 2月23日 D地区弥生時代前期遺構面のバケット車による全景写真撮影を行う。
- 3月5日 D地区調査終了時の全景写真撮影。

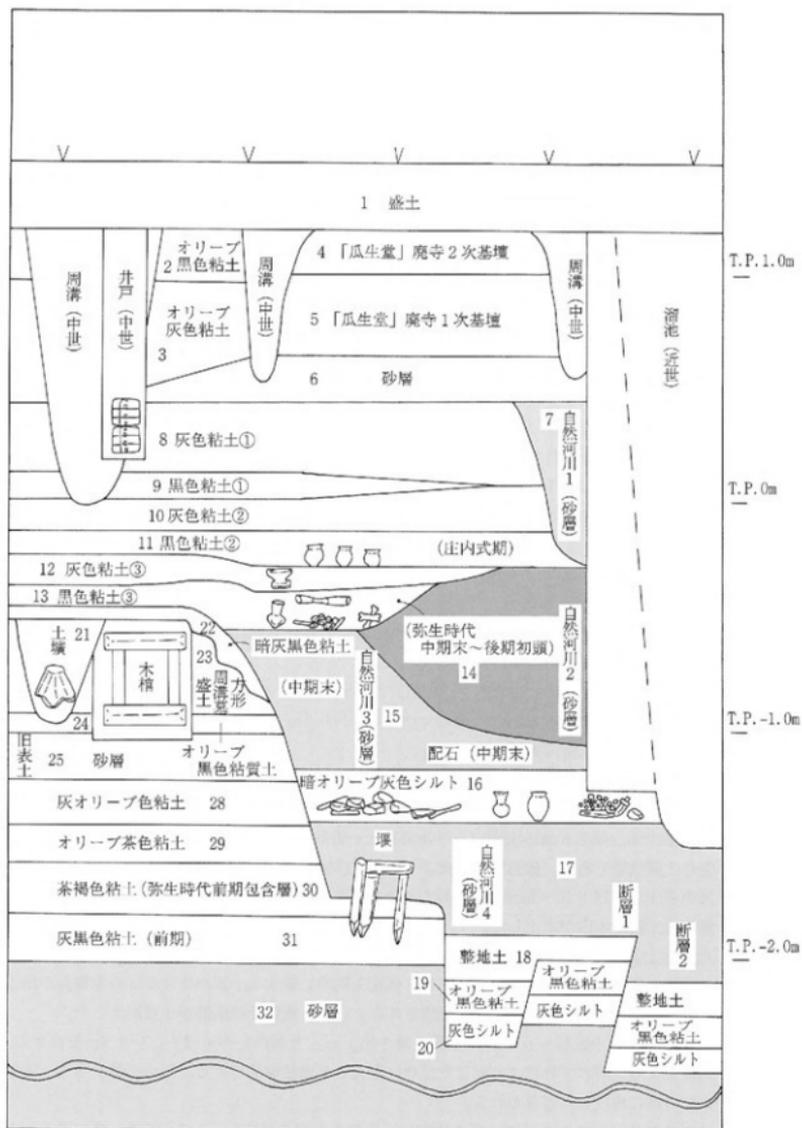
III 遺構

1. 基本層序

今回の調査で確認した堆積土の層序について、記述の便を図るために基本層序を模式化して説明する。C・D地区は隣接する2地区ではあるが、異なる層序が見られることから各々について記述する。個々の層序については別掲の土層断面図(第8～13図)を参照されたい。なお土器の様式については寺沢薫・森岡秀人両氏の編年による。

～C地区～

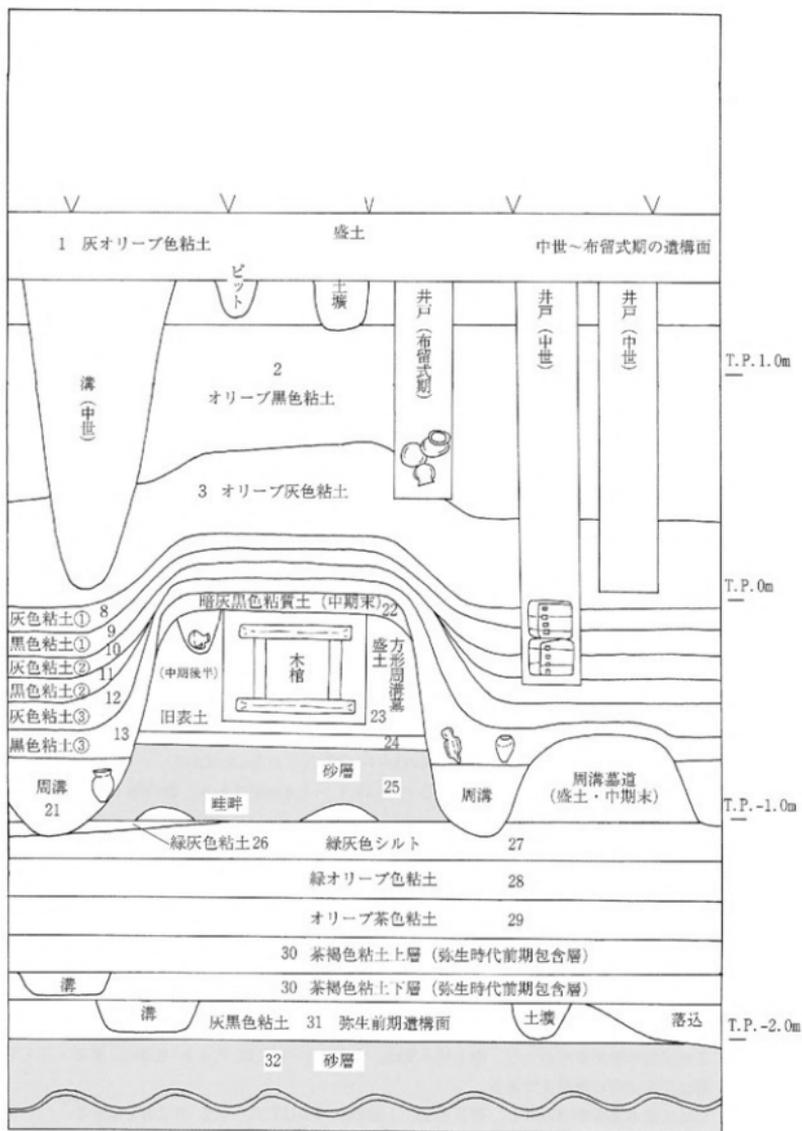
- 第1層 盛土及び攪乱。厚さ約130cm。現地表面はT.P.2.7m前後である。近畿日本鉄道玉川工場に伴う操車場に関連するコンクリートの基礎などが確認された。基礎の沈下を防ぐために打設されていた木製の基礎杭が部分的にT.P.-0.2m付近まで確認された。
- 第2層 灰オリーブ色粘土。D地区では確認されなかった。
- 第3層 オリーブ黒色シルト～粘土。厚さ最大50cm。上面のレベルはT.P.1.3m前後をはかる。
- 第4層 「瓜生堂」廃寺の第2次基壇と思われる。盛土による整地を行い第5層の第1次基壇を拡張していた。厚さ30cm。上面のレベルはT.P.1.3m前後である。13世紀後半に属する。C-4・5地区で確認された。
- 第5層 「瓜生堂」廃寺の第1次基壇と思われる。11世紀後半から12世紀初頭の生活面を削平して造成していた。厚さ50cm。上面のレベルはT.P.1.0mをはかる。第4層と同じくC-4・5地区で確認した。
- 第6層 灰オリーブ色砂～オリーブ灰色粘土～砂。厚さ15～30cm。上面のレベルはT.P.0.8m。
- 第7層 灰オリーブ色中粒砂～シルトの互層。厚さ最大100cm。上面のレベルはT.P.0.7mをはかる。第8層から切り込む自然河川の堆積でC-5～7地区で確認した。年輪年代測定の結果、A.D.83年の年代を示す加工木が出土した。
- 第8層 灰色粘土①。厚さ40cm。上面のレベルはT.P.0.5mをはかる。
- 第9層 黒色粘土①。厚さ5～20cm。上面のレベルはT.P.0.2mをはかる。ヨシなどの植物遺体・炭化物を含む土壌化層である。
- 第10層 灰色粘土②。厚さ10～25cm。上面のレベルはT.P.0.1mをはかる。畿内第Ⅵ様式1段階に属する土器が出土した。
- 第11層 黒色粘土②。厚さ5cm。上面のレベルはT.P.-0.2m前後。ヨシなどの植物遺体・炭化物を含む土壌化層である。畿内第Ⅴ様式2・3段階に属する土器が出土した。
- 第12層 灰色粘土③。厚さ15～35cm。上面のレベルはT.P.-0.3mをはかる。畿内第Ⅴ様式2段階に属する土器や木臼が出土した。
- 第13層 黒色粘土③。厚さ5～10cm。上面のレベルはT.P.-0.4mをはかる。ヨシなどの植物遺体・炭化物を含む土壌化層である。畿内第Ⅴ様式1段階に属する土器や葎竹などの木製品が出土し、C-2・3地区で配石遺構が確認された。C-1地区では銅鏡が1点出土した。
- 第14層 灰オリーブ色中粒砂～シルトの互層。厚さ約1m。上面のレベルはT.P.-0.6mをはかる。地震による断層のずれにより生じた窪地に流入した自然河川である。出土土器から上・下層の二時期に埋没したと思われる。
- 第15層 灰色中粒砂～シルトの互層。厚さ約90cm。上面のレベルはT.P.-1.5m前後。第14層より下層に位置する自然河川3の堆積土で第24～27層を切る。第16層の配石遺構の構築後に堆積し



第6図 C地区基本層序模式図

ている。

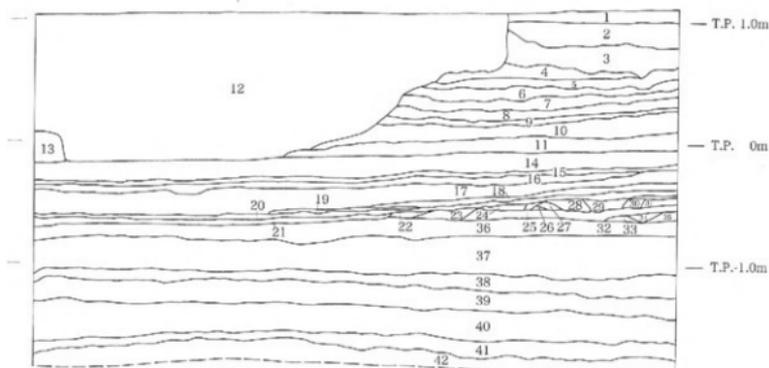
- 第16層 暗オリーブ灰色シルト。厚さ最大30cm。上面のレベルはT.P. -1.2mをはかる。第15層と第17層の自然河川の間層として堆積した上に、弥生時代中期末の土器と共に配石遺構が検出された。この層が堆積する直前から配石が開始されている。
- 第17層 オリーブ灰色シルト～粘質土の互層。厚さ約40cm。上面のレベルはT.P. -0.4mをはかる。自然河川4である。2回目の地滑りの後に堆積した層である。窪地になった部分に川が流れたと考えられる。層中に堰を設け水流調整を図ることから一定期間流れていたことはまちがいない。
- 第18層 暗オリーブ灰色シルト～粘土。厚さ約20cm。上面のレベルはT.P. -0.6mをはかる。地震の断層のずれによる窪地の上に整地したと思われる。
- 第19層 オリーブ黒色粘土。厚さ約10cm。上面のレベルはT.P. -0.7mをはかる。この層の堆積後、地震による断層のずれが発生し窪地ができたと思われる。
- 第20層 灰色シルト。厚さ約15cm。上面のレベルはT.P. -0.5mをはかる。以下は調査掘削深度を越えるため不明である。
第19・20層に遺物は含まれなかった。
- 第21層 暗オリーブ灰色粘土～粗粒砂。厚さ15～30cm。方形周溝墓の周溝の埋土である。周溝底部はT.P. -0.9mをはかる。
- 第22層 暗灰黒色粘質土。方形周溝墓の墳丘部の上面全体を覆うように堆積していた。上面のレベルはT.P. 0mをはかる。弥生時代後期初頭に属する。
- 第23層 オリーブ褐色粗粒砂～暗緑灰色粗粒砂。厚さ最大70cm。上面のレベルはT.P. -0.9mをはかる。方形周溝墓の墳丘部の盛土であり、20～90cm²を一単位として盛り上げている。弥生時代中期後半に形成されたと思われる。
- 第24層 オリーブ黒色粘質土。厚さ約10cm。上面のレベルはT.P. -0.5mをはかる。上面が土壌化しており墳丘の構築直前の地表面と思われる。
- 第25層 灰オリーブ色粗粒砂。厚さ約40cm。上面のレベルはT.P. -0.9m。自然堆積層である。
- 第28層 灰オリーブ色粘土。厚さ約20cm。上面のレベルはT.P. -1.2mをはかる。
- 第29層 オリーブ茶色粘土。厚さ約25cm。上面のレベルはT.P. -1.3mをはかる。
- 第30層 茶褐色粘土。厚さ20～35cm。上面のレベルはT.P. -1.4mをはかる。畿内第I様式中段階に属する土器がわずかに出土した。
- 第31層 灰黒色粘土。厚さ15cm。上面のレベルはT.P. -1.7mをはかる。畿内第I様式中段階に属する土器がわずかに出土した。
- 第32層 灰色細粒砂。以下は調査掘削深度を越えるため未調査である。
- ～D地区～
- 第1層 C地区基本層序参照のこと。
- 第2層 C地区基本層序参照のこと。厚さ20cm。上面のレベルはT.P. 1.3～1.4mをはかる。
- 第3層 C地区基本層序参照のこと。厚さ20cm。上面のレベルはT.P. 1.5m前後をはかる。
- 第6層 C地区基本層序参照のこと。厚さ15～30cm。上面のレベルはT.P. 0.2～0.8m。第2・3・6層は庄内式期の堆積土である。
- 第8層 C地区基本層序参照のこと。厚さ5cm。上面のレベルはT.P. -0.2～0.3mをはかる。
- 第9層 C地区基本層序参照のこと。厚さ5～15cm。上面のレベルはT.P. -0.2～0.2mをはかる。ヨ



第7図 D地区基本層序模式図

- シなどの植物遺体・炭化物を含む土壌化層である。
- 第10層 C地区基本層序参照のこと。厚さ5～15cm。上面のレベルはT.P. -0.3～0.1mをはかる。畿内第Ⅵ様式1段階に属する土器が出土した。
- 第11層 C地区基本層序参照のこと。厚さ5～10cm。上面のレベルはT.P. -0.3m前後。ヨシなどの植物遺体・炭化物を含む土壌化層である。墳丘部上では確認されなかった。畿内第Ⅴ様式2・3段階に属する土器が出土した。
- 第12層 C地区基本層序参照のこと。厚さ5～15cm。上面のレベルはT.P. -0.4mをはかる。畿内第Ⅴ様式2段階に属する土器が出土した。
- 第13層 C地区基本層序参照のこと。厚さ5cm。上面のレベルはT.P. -0.4～0.1mをはかる。ヨシなどの植物遺体・炭化物を含む土壌化層である。畿内第Ⅴ様式1段階に属する土器が出土した。第14～20層はD地区では確認されなかった。
- 第21層 暗オリーブ灰色粘土～粗粒砂。厚さ15～30cm。方形周溝墓の周溝の埋土である。周溝底部はT.P. -0.7mをはかる。
- 第22層 C地区基本層序参照のこと。上面のレベルはT.P. 0mをはかる。方形周溝墓の墳丘部の上面全体を覆うように堆積していた。弥生時代中期末に属する。下面の1・4号方形周溝墓の頭頂部に供献された完形の甕・水差し形土器などを埋納した土壌、4号方形周溝墓の裾部でも完形の甕・鉢を埋納した土壌を検出した。
- 第23層 C地区基本層序参照のこと。厚さ最大70cm。上面のレベルはT.P. -0.9mをはかる。方形周溝墓の墳丘部・墓道の盛土であり、20～90cm²を一単位として盛り上げている。弥生時代中後半に属する。
- 第24層 C地区基本層序参照のこと。厚さ約10cm。上面のレベルはT.P. -0.4mをはかる。方形周溝墓の構築基盤であり、上面が土壌化しており墳丘の構築直前の地表面と思われる。
- 第25層 C地区基本層序参照のこと。厚さ約50cm。上面のレベルはT.P. -0.4m。自然堆積層である。第26・27層上面に営まれた畦畔を覆う。
- 第26層 緑灰色粘土。厚さ5cm。D-1地区のみに存在する。上面のレベルはT.P. -0.8mをはかる。
- 第27層 緑灰色シルト。厚さ10cm。上面のレベルはT.P. -0.9mをはかる。D地区にのみ存在する。
- 第28層 C地区基本層序参照のこと。厚さ約20cm。上面のレベルはT.P. -1.0mをはかる。
- 第29層 C地区基本層序参照のこと。厚さ約25cm。上面のレベルはT.P. -1.2mをはかる。植物遺体を多く含む。
- 第30層 C地区基本層序参照のこと。厚さ20～35cm。ただしD地区においては上層と下層に分かれ、D-1地区では下層上面に溝を1条検出した。上面のレベルはT.P. -1.4m、下層上面がT.P. -1.5mをはかる。畿内第Ⅰ様式中段階に属する土器が出土した。
- 第31層 C地区基本層序参照のこと。厚さ15～30cm。上面のレベルはT.P. -1.6mをはかる。上面では弥生時代前期の遺構を検出した。畿内第Ⅰ様式中段階に属する土器が出土した。
- 第32層 灰オリーブ色中粒砂～灰色微粒砂の互層。上面のレベルはT.P. -1.8mをはかる。河内潟の堆積と思われる。流木と思われる自然木や植物種子を含む。
- 以下は調査掘削深度を越えるため未調査である。

X=-148.534

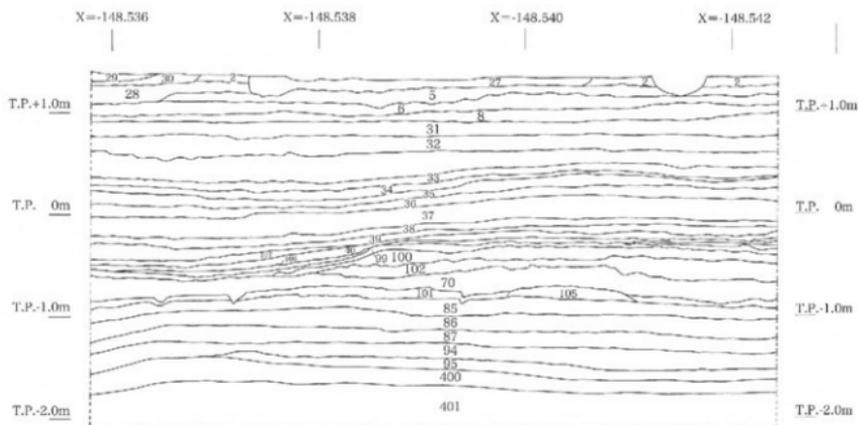


第8図 C地区東壁土層断面図

- | | |
|---|--------------------------------------|
| 1. ぶい黄褐色、粘質土 (旧床土) | 28. 灰色、細～微砂 (植物遺体含む) |
| 2. 褐色、粘質土 (旧床土) | 29. 暗オリーブ灰色、粘土 (中粒砂多量に含む、植物遺体、炭化物含む) |
| 3. 灰色、粘質土 (旧床土、中世遺物含む) | 30. オリーブ灰、粘質土 |
| 4. オリーブ灰、粘土 | 31. 暗オリーブ灰、シルト |
| 5. オリーブ灰、粘質土 | 32. 黒色、粘土 |
| 6. オリーブ灰、シルト | 33. 灰色、シルト |
| 7. オリーブ灰、砂質土 | 34. オリーブ黄、細粒砂 (植物遺体含む) |
| 8. 暗オリーブ灰、シルト | 35. オリーブ灰、極細砂 (植物遺体微量に含む) |
| 9. 暗オリーブ灰、粘質土 | 36. 黒、粘土・細粒砂 (混) |
| 10. 暗オリーブ灰、粘土 | 37. 黒、粘土 (植物遺体微量に含む) |
| 11. 灰色、シルト | 38. オリーブ黒、粘土 |
| 12. 黒色、粘土 | 39. 黒色、粘土 |
| 13. 黒色、粘土 (上部に炭化物多量に含む間層含む) | 40. オリーブ黒、粘土 |
| 14. 黒褐色、粘土 (植物遺体・炭多量に含む、オリーブ色、粘土を間層に含む) | 41. オリーブ黒、粘土 |
| 15. オリーブ黒、シルト | 42. 暗オリーブ、粘質土 |
| 16. 灰色、微砂、粘土 (泥) (土器含む) | |
| 17. オリーブ灰、粘土 (中世遺物含む) | |
| 18. 黒、シルト (植物遺体微量に含む) | |
| 19. 暗緑灰、中～細粒砂 (植物遺体含む) | |
| 20. オリーブ黄、細粒砂・灰色、細粒砂・灰白色、粗～細粒砂 | |
| 21. 暗オリーブ灰、粘土・緑灰、細粒砂 (炭化物、植物遺体含む) | |
| 22. 暗緑灰、粘土 (らんでっこう・植物遺体含む) | |
| 23. オリーブ黒、粘土 (炭化物・植物遺体含む) | |
| 24. 灰色、粘土 (オリーブ黒、粘土をブロック状に含む) | |
| 25. 灰色、細粒砂・オリーブ灰色、細粒砂 (粘土をブロック状に含む) | |

写真1 現地説明会風景

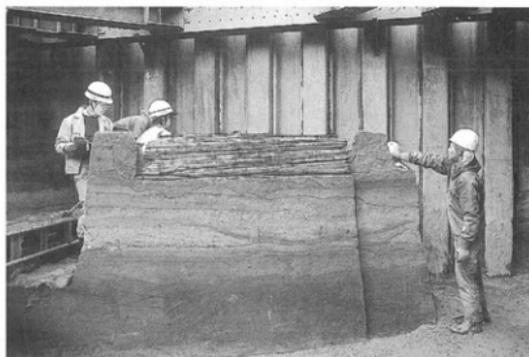


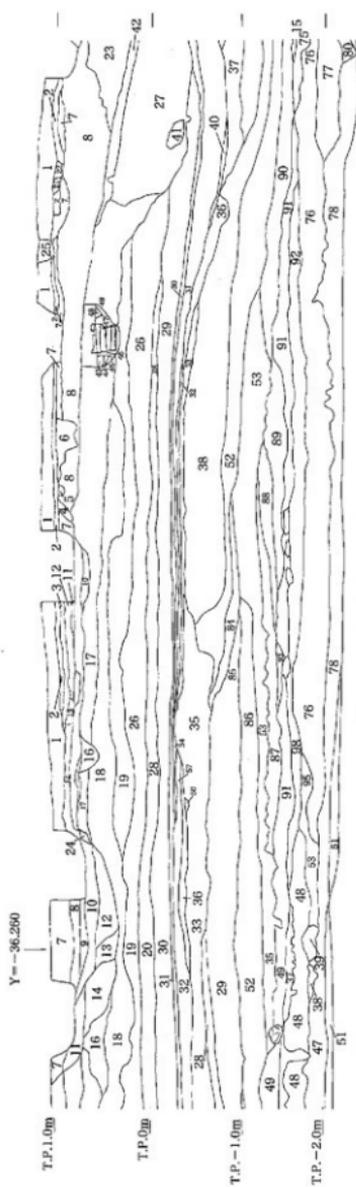
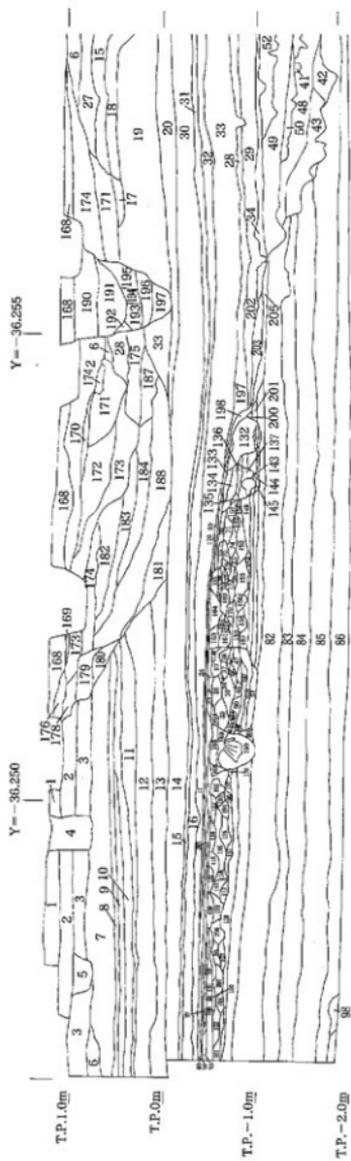


第9図 D地区東壁土層断面図

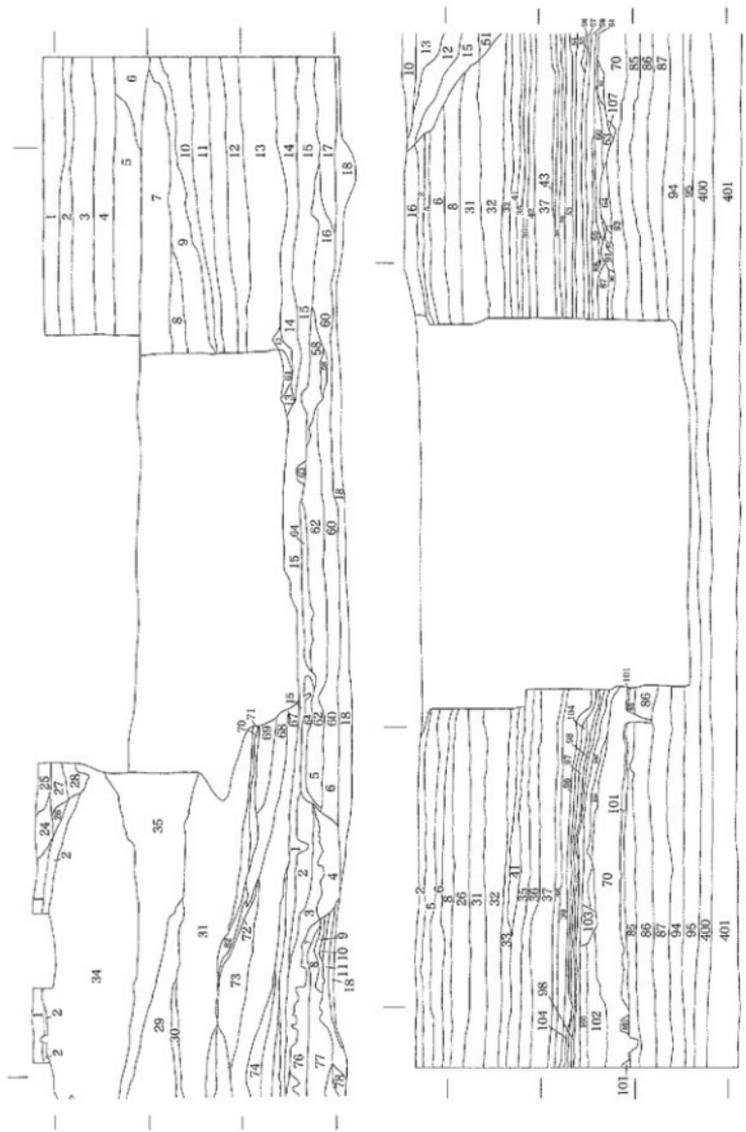
- | | |
|--|---|
| <p>2. 灰オリブ色、粘土・微砂(混)
 5. オリブ黒色、シルト・粘質シルト(混)
 6. 暗オリブ灰色、粘質シルト
 8. オリブ黒色、シルト・粘質シルト(混)
 29. にぶい黄褐色、粘土
 30. 灰色、シルト
 31. 灰色、シルト
 32. 灰オリブ、粘土
 33. オリブ黒色、粘土(植物遺体多く含む)
 34. 灰オリブ色、シルト(植物遺体多く含む)
 35. 灰オリブ色、細粒砂(植物遺体多く含む)
 36. 灰オリブ色、シルト(植物遺体多く含む)
 37. 灰オリブ色、粘土
 38. オリブ黒色、粘土(植物遺体多く含む)
 39. オリブ黒色、粘土
 40. オリブ黒色、粘土
 70. オリブ灰色、中粒砂・明黄灰色、中粒砂・緑灰色、シルトの互層
 85. 灰色、粘土(植物遺体含む)
 86. 灰色、粘土(植物遺体含む)
 87. オリブ黒色、粘土(炭化物・植物遺体含む)
 94. 灰オリブ色、細粒砂・暗オリ</p> | <p>ーブ灰色、シルト
 95. 暗オリブ灰色、シルト・灰オリブ色、粗粒砂・オリブ褐色、細粒砂(中粒砂含む)
 99. 暗オリブ灰色、シルト・粘土(混)
 100. 暗オリブ灰色、粘土・褐色、細粒砂(混)
 101. 暗緑色、中粒砂、粘土・褐色、細粒砂(混)
 102. 暗オリブ灰色、粘土・オリブ褐色、粘土(混)
 105. 灰色、粘土(灰色、シルト含む)
 106. オリブ黒、粘土
 107. 灰色、粘土(炭屑・植物遺体含む)
 400. 黄灰色、シルト質粘土・オリブ黒色、シルトの互層
 401. オリブ黒、細粒砂(灰オリブ、粗粒砂含む)</p> |
|--|---|

写真2 木棺調査風景





第10图 C地区南盛土层断面图

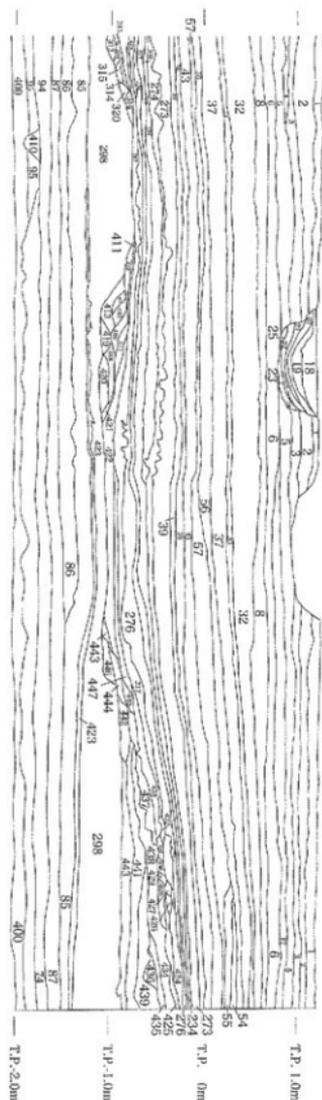


第11图 C·D地区南壤土层剖面图



第12图 D地区南麓土岸断面图

第13圖 D地区南麓土層断面図



- C区土層断面 南麓
1. に近い黄褐色、粘土質 (旧灰土)
 2. 浅灰色、土 (マンガン含む)
 3. 灰黄色、土 (粗粒砂含む)
 4. 灰褐色、土
 5. 褐色、土
 6. 暗緑灰、粘土・褐色、粘土 (深)
 7. に近い黄褐色、粘質土 (旧灰土)
 8. 灰黄色、土 (粗粒砂含む)
 9. 暗灰黄色、粘土
 10. オリーブ褐色、土 (細レキ・マンガン含む)
 11. 褐色、粘土
 12. 褐色、土 (基層の硬地土層一次)
 13. 褐色、粘土 (炭化物含む)
 14. 褐色、粘土
 15. 黒色、粘質土 (溝埋土)
 16. 褐色、粘土
 17. に近い褐色、シルト
 18. に近い褐色、シルト
 19. 暗褐色、粘質土
 20. 褐色、土 (遺物含む・柱穴)
 21. に近い黄灰色、粘質土
 22. 灰黄色、粘質土
 23. 褐色、土 (溝の埋土)
 24. 褐色、土 (溝の埋土)
 25. 褐色、土 (溝の埋土)
 26. 褐色、土 (遺物含む)
 27. 灰黄灰色、土 (溝の埋土)
 28. 暗緑灰、粘土・褐色、粘土 (混・旧灰土)
 29. 暗オリーブ灰色、粘土・粗粒砂 (混)
 30. 褐色、粘質土 (旧灰土)
 31. 褐色、粘質土 (旧灰土)
 32. 暗オリーブ灰色、粘土・粗粒砂 (混)
 33. 褐色、粘質土 (旧灰土)
 34. 褐色、粘質土 (旧灰土)
 35. 灰色、粘質土 (旧灰土・中世遺物含む)
 36. オリーブ灰、粘土 (中世遺物含む)
 37. オリーブ灰、粘質土
 38. 褐色、黄褐色、粘質土
 39. 褐色、オリーブ、粘質土・オリーブ黒、粘質土 (混)
 40. 灰色、粘土
 41. 灰色、シルト (粗粒砂含む)
 42. 灰色、粘土 (炭化物・細粒砂含む)
 43. オリーブ灰色、粘質土 (粗粒砂含む)
 44. 黄灰色、粘土
 45. 灰色、粘土
 46. 暗オリーブ灰色、粘土 (粗粒砂含む)
 47. 灰色、粘土 (植物遺体含む)
 48. 暗オリーブ灰色、粘土 (炭化物含む)
 49. オリーブ灰、シルト
 50. 暗褐色、粘土 (炭化物含む)
 51. 灰色、シルト
 52. オリーブ灰、粘質土 (細粒砂、混・基壇柱穴)
 53. 灰色、シルト
 54. に近い褐色、シルト
 55. 黄褐色、粗粒砂
 56. 暗オリーブ灰、粘質土 (細・中粒砂含む)
 57. 暗褐色、粗粒砂・粗粒砂
 58. 粘土ブロック (植物遺体・灰多量含む、灰オリーブ色、粘土層間に含む)
 59. 暗緑灰、粘土 (植物遺体含む)
 60. 暗緑灰、粘土 (混のたい礫物含む)
 61. 暗オリーブ灰、粘土 (遺物微量を含む、池のたい粘物含む)
 62. 暗オリーブ、粗粒砂、粘土 (混)
 63. オリーブ灰、シルト
 64. オリーブ灰、粘質土
 65. 暗オリーブ灰、シルト
 66. 暗オリーブ灰、粘質土
 67. 暗オリーブ灰、粘土
 68. 灰色、シルト
 69. 黒色、粘土
 70. 黒色、粘土 (上部に炭化物多量に含む層を含む)
 71. 暗褐色、シルト (自然木・植物遺体多量を含む)
 72. 暗オリーブ灰、粘質土 (植物遺体多量を含む)
 73. オリーブ黒、粘土
 74. 灰色、粘土 (微砂、少量含む)
 75. 灰色、粘土 (微砂、少量含む)
 76. 灰色、粘土 (微砂、少量含む)
 77. 灰色、粘土 (微砂、少量含む)
 78. 灰色、粘土 (微砂、少量含む)
 79. 灰色、粘土 (微砂、少量含む)
 80. オリーブ黒、粘土 (植物遺体・灰多量を含む、灰オリーブ色、粘土層間に含む)
 81. オリーブ黒色、粘土・粗粒砂 (混)
 82. オリーブ黒色、粗粒砂
 83. 黒色、粘土
 84. オリーブ黒色、シルト質粘土
 85. 黒色、粘土
 86. 黒褐色、粘土 (植物遺体・灰多量を含む、オリーブ色、粘土層間に含む)

87. オリーブ黒、シルト
 88. 灰色、微砂・粘土 (混・土層含む)
 89. オリーブ灰、粘土 (中量の遺物含む)
 90. 灰色、シルト (植物遺体微量含む)
 91. 暗緑灰色、中～細粒砂 (植物遺体微量含む)
 92. オリーブ黒、細粒砂・灰色、細粒砂・灰白色、粗～細粒砂
 93. 暗オリーブ灰、粘土・緑灰、細粒砂 (炭化物・植物遺体含む)
 94. 暗緑灰色、粘土 (らんてっこう・植物遺体含む)
 95. オリーブ黒、粘土 (植物遺体・植物遺体含む)
 96. 灰色、シルト (オリーブ黒、粘土をブロック状に含む)
 97. 灰色、細粒砂・オリーブ灰、細粒砂 (粘土をブロック状に含む)
 98. 灰色、細粒砂 (オリーブ黒色、粘土を帯状に含む・植物遺体を含む)
 99. 灰色、細～微砂 (植物遺体含む)
 100. オリーブ黒、粘土 (粘土を間層に含む)
 101. 灰オリーブ、細粒砂・灰色、微砂・シルト (混、植物遺体含む) との互層
 102. オリーブ黒、粘土 (植物遺体、炭多量を含む、灰オリーブ色、粘土を間層に含む)
 103. 灰色、シルト (植物遺体含む) ・オリーブ黒色、シルト (混)
 104. 暗オリーブ灰色、粘土 (中粒砂多量を含む、植物遺体・炭化物含む)
 105. 浅灰色、粗砂・灰色、粗土に粗砂が (混)
 106. 灰色、細粒砂・明黄褐色、粗～中粒砂の互層 (粘土ブロック・植物の遺体・炭化物含む)
 107. オリーブ黒、粘土・細粒砂 (混)、暗緑灰色、細砂・灰オリーブ色、中粒砂の互層 (植物遺体含む)
 108. オリーブ灰色、中～細粒砂・緑灰色、極細粒砂 (オリーブ黒、粘土をブロック状に含む)
 109. オリーブ黒、粘土 (オリーブ黒、粘土ブロック含む)
 110. 黒色、粘土 (植物遺体・灰色、粘土をブロック状に含む)
 111. 灰色、粘土 (植物遺体含む)
 112. オリーブ灰、中～細粒砂
 113. 暗緑灰色、粘土 (暗緑灰色、細粒砂をブロック状に含む)
 114. オリーブ色、粗～中粒砂
 115. オリーブ黒、粘土 (炭化物含む)
 116. オリーブ黒、粘土 (粘土をブロック状に含む) ・暗オリーブ灰、細粒砂 (植物遺体含む)
 117. オリーブ黒、粘土 (灰色、粘土・暗緑灰、細粒砂をブロック状に含む)
 118. オリーブ黒、シルト質粘土
 119. 灰色、シルト
 120. オリーブ黒、粘土 (植物遺体・炭多量を含む、灰オリーブ色、粘土を間層に含む)
 121. 暗褐色、粘土 (植物遺体・炭多量を含む、灰オリーブ色、粘土を間層に含む)
 122. 灰色、粘土 (微砂少量含む、炭と炭化物含む)
 123. オリーブ黒、微砂・シルト (混) ・灰オリーブ、細粒砂・灰色、粗砂～細粒砂の3層の互層
 124. 灰オリーブ、粗粒砂 (オリーブ、極粗粒砂・暗オリーブ灰、中粒砂を帯状に含む)
 125. オリーブ黒、微砂・シルト (混) ・灰オリーブ、細粒砂との互層
 126. オリーブ黒、微砂・シルト (混) ・灰オリーブ、細粒砂との互層
 127. 浅灰色、中粒砂 (植物遺体微量を含む、灰オリーブ、中粒砂を帯状に含む)
 128. オリーブ黒、シルト
 129. 灰オリーブ、中粒砂
 130. 灰オリーブ色、中粒砂
 131. 灰オリーブ色、中粒砂 (植物遺体含む)
 132. オリーブ灰色、中粒砂 (植物遺体微量を含む)
 133. オリーブ色、極粗粒 (1cm位の小石も含む)
 134. オリーブ黒、微砂・シルト (混) ・灰オリーブ、細粒砂との互層 (植物遺体含む)
 135. オリーブ黒、中粒砂・細粒砂 (混) (オリーブ黒、粘土ブロック・オリーブ灰、細粒砂含む)
 136. 灰色、細粒砂 (灰色、シルトを間層に含む)
 137. オリーブ黒、粘土 (微砂少量 (混) (植物遺体・炭化物・木片や多く含む)
 138. オリーブ黒、粘土・暗オリーブ灰、シルトの互層 (炭末製品品出土)
 139. 灰色、粗～中粒砂
 140. 暗緑灰色、細～中粒砂
 141. 暗オリーブ灰色、粘土 (炭屑を帯状に含む)
 142. オリーブ黒、粘土～シルト (炭、少量を含む)
 143. 暗オリーブ灰、シルト (植物遺体微量と炭少量を含む)
 144. 黒色、粘土
 145. オリーブ黒、シルト (植物遺体・炭微量を含む)
 146. 黒色、粘土
 147. 黒色、粘土 (暗緑灰、粘土ブロック含む)
 148. 暗オリーブ灰色、粘土
 149. オリーブ黒、粘土・暗緑灰、粘土の互層 (黒、粘土ブロック・暗緑灰、粘土ブロック含む)
150. オリーブ黒、粘土 (植物遺体・木片少量を含む、炭屑少量含む)
 151. オリーブ黒、粘土 (植物遺体少量含む)
 152. 灰オリーブ、中粒砂
 153. オリーブ黒色、シルト (植物遺体微量を含む)
 154. 暗オリーブ灰、細粒砂
 155. オリーブ色、中粒砂
 156. 灰色、細粒砂
 157. 暗オリーブ、中粒砂・灰オリーブ、細粒砂の互層
 158. 灰色、シルト・粗粒砂 (混)
 159. 灰オリーブ、粗砂
 160. オリーブ黒、粘質土 (植物遺体含む)
 161. 162. オリーブ黒、粘土・少量微砂 (混) (植物遺体や多く含む)
 163. 164. 暗オリーブ灰色、シルト
 165. 暗緑灰色、シルト・オリーブ黒、細粒砂 (混)
 166. オリーブ黒、粘土・微砂少量 (混) (植物遺体少量含む)
 167. オリーブ黒、シルト (植物遺体・炭少量含む)
 168. 灰色、粘土 (旧床土)
 169. 褐色、粘質土・粗粒砂 (混)
 170. 灰色、粘土・粗粒砂 (混)
 171. オリーブ黒、粘質土・粗粒砂 (混)
 172. 灰色、粘土
 173. 灰オリーブ、粘質土・粗粒砂 (混)
 174. 明緑灰色、粘質土
 175. オリーブ黒、粘土・極細粒砂 (混)
 176. 灰オリーブ、粘土・細シルト (混)
 177. 暗オリーブ、粘質土 (旧床土)
 178. 灰色、粘土
 179. オリーブ黒、粘土
 180. オリーブ黒、粘土
 181. 灰色、シルト
 182. 灰色、粘土 (旧床土)
 183. 褐色、粘質土・粗粒砂 (混)
 184. 暗緑灰、粘質土・粗粒砂・細シルト (混)
 185. オリーブ黒、粘土・粗粒砂 (混)
 186. 暗灰色、粘質土 (炭化物含む)
 187. 灰色、土・細シルト (混)
 188. 暗灰黄色、粘質土 (粗粒砂含む)
 189. 暗灰黄色、粘土 (粗粒砂含む)
 190. 暗灰黄色、粘質土 (粗粒砂含む)
 191. 暗灰黄色、粘質土 (細シルト含む)
 192. 暗オリーブ灰色、粘質土 (細シルト含む)
 193. 灰色、シルト
 194. オリーブ黒、粘土
 195. 黒色、粘土
 196. オリーブ灰、粘質土
 197. 暗オリーブ灰、シルト
 198. 黒色、粘土
 199. 灰色、シルト
 200. オリーブ黒、細粒砂 (植物遺体少量含む)
 201. オリーブ灰、極細粒砂 (植物遺体少量含む)
 202. 黒、粘土・細粒砂 (混)
 203. 黒、粘土 (植物遺体微量を含む)
 204. オリーブ黒、粘土
 205. 黒色、粘土
 206. オリーブ黒、粘土
 207. オリーブ黒、粘土
 208. 暗オリーブ、粘質土
 209. 黒色、粘土 (上部に炭化物多量を含む間層有)
 210. 灰オリーブ、シルト
 211. 灰オリーブ、細粒砂 (オリーブ、中粒砂ブロック含む)
 212. 灰オリーブ、シルト (オリーブ、中粒砂ブロック含む)
 213. 暗緑灰色、粘土 (灰オリーブ、シルト含む)
 214. オリーブ黒、粘土
 215. 灰色、粘質シルト
 216. オリーブ黒色、粘土
 217. 灰色、粘質細粒砂 (植物遺体含む)
 218. オリーブ黒色、粘土
 219. オリーブ灰色、中粒砂 (植物遺体含む)
 220. 灰色、シルト (灰オリーブ、シルト含む)
 221. 暗オリーブ灰色、粘質細粒砂・灰オリーブ、細粒砂
 222. オリーブ黒色、粘土 (植物遺体含む)
 223. 灰オリーブ、中粒砂 (灰色、シルト含む)
 224. オリーブ黒色、粘土
 225. オリーブ灰色、粘土
 226. オリーブ黒色、シルト (暗オリーブ色、シルト含む)
 227. 黒色、粘土 (炭化物微量を含む)
 228. 暗オリーブ灰色、シルト
 229. 灰色、シルト
 230. 灰色、シルト (植物遺体含む)
 231. オリーブ黒色、粘土
 232. オリーブ黒、粘質細粒砂・暗オリーブ、細粒砂
 233. オリーブ黒色、シルト (中粒砂含む)
 234. 黒色、粘土・中粒砂 (混) (炭含む)
 235. オリーブ黒、粘土 (炭化物含む)
 236. オリーブ黒色、粘質シルト (粗粒砂含む)

237. 暗緑灰色、細粒砂・暗オリーブ、細粒砂
 238. 灰色、細粒砂
 239. 暗オリーブ灰色、細粒砂・暗オリーブ、細粒砂
 240. 灰色、細粒砂・灰オリーブ、細粒砂
 241. 灰色、細粒砂・暗オリーブ色、細粒砂
 242. 暗緑灰、粘質シルト
 243. 灰色、粘質シルト
 244. 灰色、粘土 (植物遺体含む)
 245. 灰オリーブ、細粒砂・灰色、細粒砂
 246. 暗緑灰色、細粒砂・オリーブ、細粒砂 (中粒砂)
 247. オリーブ色、細粒砂・暗オリーブ灰色、細粒砂
 248. 暗緑灰色、細粒砂・オリーブ黒色、粘土
 249. オリーブ黒色、粘土
 250. オリーブ黒色、粘土
 251. オリーブ黒色、粘土 (中粒砂微量に含む)
 252. オリーブ黒色、粘土 (炭化物含む)
 253. 暗緑灰色、粘土
 254. オリーブ黒、粘質土
 255. オリーブ黒、粘土 (植物遺体・中粒砂含む)
 256. オリーブ黒、細粒砂・暗緑灰、細粒砂
 257. 灰オリーブ、中粒砂
 258. オリーブ、中粒砂 (植物遺体微量に含む)
 259. 暗オリーブ灰、シルト (植物遺体微量に含む)
 260. オリーブ黒、粘質土
 261. オリーブ黒、粘土
 262. 灰色、シルト
 263. 暗オリーブシルト
 264. 灰色、細粒砂 (オリーブ、中粒砂ブロック)
 265. 暗オリーブ灰、シルト
 266. オリーブ黒、粘土 (植物遺体含む、木栓痕跡検出)
 267. オリーブ黒、粘土 (細粒砂含む)
 268. 灰色、中粒砂・灰色、粘土ブロック含む)
 269. 灰色、中粒砂 (植物遺体微量に含む)
 270. 灰オリーブ、中粒砂 (植物遺体微量に含む)
 271. 灰オリーブ、中粒砂 (黒色、シルトブロック含む)
 272. 灰オリーブ、中粒砂
 273. オリーブ、中粒砂 (オリーブ黒、粘土ブロック含む)
 274. オリーブ灰、細粒砂
 275. 暗オリーブ灰、粘質細粒砂
 276. 暗オリーブ灰、粘質細粒砂
 277. 暗オリーブ、細粒砂
 278. 灰色、細粒砂・灰オリーブ、細粒砂の互層
 279. オリーブ灰、細粒砂・灰オリーブ、細粒砂の互層
 280. 灰色、粘質細粒砂
 281. オリーブ黒、粘土・細粒砂 (混)
 282. 暗オリーブ色、細粒砂・灰色、細粒砂の互層
 283. オリーブ黒、粘土 (中粒砂・植物遺体含む)
 284. 灰色、粘土・灰色、細粒砂の互層
 285. オリーブ黒、粘土 (植物遺体含む)
 286. 灰色、細粒砂
 287. 灰色、細粒砂・灰オリーブ、細粒砂の互層
 288. 灰オリーブ、細粒砂・暗オリーブ灰色、細粒砂
 289. オリーブ、細粒砂・オリーブ黒、細粒砂の互層
 290. 暗緑灰色、細粒砂・オリーブ、細粒砂の互層
 291. オリーブ黒、粘粒砂 (粘質)
 292. オリーブ黒、粘粒砂 (粘質)
 293. 灰色、粘質細粒砂
 294. 暗オリーブ灰色、細粒砂
 295. オリーブ灰色、粘土・灰オリーブ、細粒砂の互層
 296. オリーブ黒、粘質土～細粒砂
 297. 暗オリーブ灰色、細粒砂 (粘粒砂含む)
 298. オリーブ黒、粘土 (中粒砂含む)
 299. オリーブ黒、粘土・砂 (混) (植物遺体微量に含む)
 300. オリーブ黒、中粒砂
 301. オリーブ黒、粘土 (細粒砂少量混)
 302. 黒色、シルト
 303. 灰色、粘土 (細粒砂少量混・植物遺体含む)
 304. オリーブ黒、シルト (植物遺体少量含む)
 305. オリーブ黒、粘粒砂・粘土 (混)
 306. オリーブ黒、粘土 (中粒砂含む)
 307. 灰色、粘土 (中粒砂含む)
 308. 灰色、粘質シルト、灰オリーブ、細粒砂の互層
 309. オリーブ黒、粘土 (細粒砂含む)
 310. 灰色、粘粒砂
 311. オリーブ黒、粘土 (植物遺体含む)
 312. オリーブ黒、粘土 (植物遺体含む)
 313. オリーブ黒、粘土
 314. 灰色、粘質細粒砂
 315. 灰オリーブ、細粒砂 (オリーブ黒、細粒砂含む)
 316. 暗オリーブ灰色、粘質土～細粒砂
 317. オリーブ黒、粘土
 318. オリーブ黒、粘土 (灰オリーブ、細粒砂含む)
 319. オリーブ黒、粘土
 320. オリーブ黒、粘土 (中粒砂含む)
 321. オリーブ黒色、粘土 (中粒砂含む)
 322. 灰色、粘土 (中粒砂含む)
 323. オリーブ黒、粘土 (炭化物含む)
 324. 黒色、粘土 (炭化物、植物遺体含む)

325. オリーブ黒、粘土 (灰オリーブ、中粒砂含む)
 326. オリーブ黒、粘土 (中粒砂含む)
 327. 暗オリーブ灰、粘粒砂・暗オリーブ、細粒砂
 328. 暗オリーブ灰、粘質土

D区南壁土層注記

1. 暗灰質色、粘土 (鉄分沈着有)
 2. 灰オリーブ、粘土 (鉄分沈着有・炭分沈着有)
 3. オリーブ黒、粘土・微砂 (一部鉄分沈着有・炭層を間隔として含む)
 4. 灰、粘土・微量の微砂 (微量の炭分沈着有)
 5. オリーブ黒、シルト (一部粘質シルト含む)
 6. 暗オリーブ灰、粘質シルト (一部鉄分沈着有)
 7. オリーブ黒、粘質シルト (一部粘質シルト含む)
 8. 暗緑灰、微砂 (一部中粒砂含む)
 9. 暗緑灰、微砂 (一部中粒砂含む)
 10. オリーブ黒、細粒砂・粘粒砂～細粒土 (全体に少量の炭分沈着有)
 11. オリーブ黒、粘土・極細砂 (全体に微量の炭分沈着有、少量の炭含む)
 12. オリーブ黒、粘質シルト・細～中粒砂 (少量の炭含む)
 13. オリーブ黒、微砂・粘粒砂～細粒土 (炭含む)
 14. オリーブ黒、細・中粒砂
 15. オリーブ黒、粘土・細粒砂 (少量の炭含む)
 16. 暗オリーブ褐、粘質シルト・粘粒砂 (微量の炭含む・炭分沈着有)
 17. 暗オリーブ褐、シルト・細粒砂
 18. 灰オリーブ、粘土・細粒砂 (炭化物含む・鉄分沈着有・黄褐色細砂をブロック状に含む)
 19. 暗青灰、粘土・細砂 (炭化物含む・鉄分沈着有)
 20. オリーブ黒、粘土・細砂 (炭層有)
 21. 灰、粘土・細砂 (炭化物含む)
 22. 暗緑灰、粘土・細砂 (炭化物含む)
 23. 黄褐色、細砂・微砂 (炭・土器片・粘土含む)
 24. オリーブ黒、粘土・細砂 (炭・燧石・土器片含む)
 25. 暗青灰、粘土・細砂 (炭含む)
 26. 灰、粘質シルト (重層)
 27. 灰黒腐褐色、粘土・微砂 (炭化物含む)
 28. 灰オリーブ、粘土・微砂 (炭化物含む)
 29. にぶい貫通、粘土
 30. 灰オリーブ、粘土・細砂多量 (炭化物・炭土・土器片含む)
 31. 灰色、シルト
 32. 灰オリーブ、粘土 (植物遺体多く含む)
 33. オリーブ黒、シルト (植物遺体多く含む)
 34. 灰オリーブ、細粒砂 (植物遺体多く含む)
 35. 灰オリーブ、シルト (植物遺体多く含む)
 36. 灰オリーブ、シルト (植物遺体多く含む)
 37. 灰オリーブ、粘土 (植物遺体多く含む)
 38. オリーブ黒、粘土 (植物遺体多く含む)
 39. オリーブ黒、粘土
 40. オリーブ黒、粘土
 41. オリーブ黒、粘土 (植物遺体微量含む)
 42. オリーブ黒、粘土
 43. 灰オリーブ、粘土
 44. オリーブ黒、粘土・灰オリーブ、シルト (混) (植物遺体多く含む)
 45. オリーブ黒、粘土・灰オリーブ、シルト (混)
 46. 暗オリーブ、シルト (植物遺体多く含む)
 47. オリーブ黒、粘土
 48. 灰色、シルト (植物遺体多少含む)
 49. 灰オリーブ、シルト・オリーブ質色、シルト (混)
 50. 灰色、シルト
 51. 灰色、粘土・灰色、シルト (混)
 52. オリーブ黒、粘土
 53. 灰色、粘土 (有機物を微量に含む)
 54. オリーブ黒、シルト
 55. 灰色、細粒砂
 56. 灰オリーブ、シルト
 57. オリーブ黒、シルト
 58. 灰色、シルト
 59. 暗緑灰色、粘土、粗・中粒砂混 (植物遺体含む)
 60. オリーブ黒色、粘土 (植物遺体含む)
 61. 暗緑灰色、粘土 (シルト・植物遺体含む)
 62. 暗緑灰色、粘質シルト (植物遺体含む)
 63. 暗オリーブ灰色、粘土 (粘粒砂多く含む)
 64. 暗オリーブ灰色、粘土 (中粒砂多く含む)
 65. 黒色、粘土 (植物遺体含む)
 66. 黒色、粘土 (中粒砂含む)
 67. 黒色、粘土 (微細ならんでっこう・植物遺体含む)
 68. オリーブ黒色、粘土 (微量ならんでっこう・植物遺体含む)
 69. オリーブ灰色、中粒砂・黄灰、中粒砂・黒灰色、シルトの互層
 70. 暗オリーブ灰色、細粒砂
 71. 暗オリーブ灰色、粘粒砂
 72. 暗オリーブ灰色、粘土・シルト (混)
 73. 灰色、粘土 (中粒砂多く含む)
 74. 暗オリーブ灰色、粘土 (シルト、中粒砂含む)
 75. 暗緑灰色、粘土 (多量の中粒砂・微量のらんでっこう含む)

7. 暗オリーブ灰色、粘土・シルト(混)
 暗緑灰色、粘質シルト(植物遺体含む)
 ~
 80. 暗オリーブ灰色、粘質シルト(炭化物含む)
 81. 暗オリーブ灰色、粘土・シルト(混)、灰、細粒砂の互層
 82. 暗緑灰色、シルト(砂・粘土・植物遺体含む)
 83. 暗オリーブ灰色、粘土(細粒砂含む)
 84. 灰色、粘土(細粒砂・植物遺体含む)
 85. 灰色、粘土(植物遺体含む)
 86. 灰色、粘土(植物遺体含む)
 87. オリーブ黒色、粘土(炭化物・植物遺体含む)
 88. 暗緑灰、粘土(粗砂・中粒砂・植物遺体含む) オリーブ褐色、
 中粒砂(植物遺体含む)
 89. オリーブ黒色、粘土・オリーブ色、粘土・オリーブ褐色、土
 (粗砂・中粒砂含む)
 90. 暗オリーブ灰色、シルト・オリーブ褐色、細粒砂(粗・中粒砂
 砂含む)
 91. オリーブ黒色、土・オリーブ褐色、細粒砂(粗・中粒砂・植
 物遺体含む)
 92. 灰色、シルト・オリーブ褐色、細粒砂(粗・中粒砂・植物遺
 体含む)
 93. 暗オリーブ灰色、細粒砂・オリーブ褐色、細粒砂(粗・中粒
 砂含む)
 94. 灰オリーブ色、細粒砂・暗オリーブ灰色、シルト
 95. オリーブ灰色、シルト・灰オリーブ色、粗粒砂・オリーブ褐
 色、細粒砂(中粒砂含む)
 96. 灰色、細粒砂・灰オリーブ色、土・オリーブ灰色、土の互層
 (オリーブ褐色、細粒砂・粗砂・中粒砂含む)
 97. オリーブ黒色、土・オリーブ灰色、土(粗砂・中粒砂多く
 含む)
 98. 暗オリーブ灰色、シルト・オリーブ色、細粒砂(植物遺体含
 む)
 99. 暗オリーブ灰色、シルト・粘土混、オリーブ色、土
 100. 暗オリーブ灰色、粘土・オリーブ褐色、細粒砂
 101. 暗緑灰色、中粒砂・粘土混、オリーブ褐色、細粒砂
 102. 暗オリーブ灰色、粘土・オリーブ褐色、粗粒砂・中粒砂
 混
 103. 暗緑灰色、粘土・オリーブ褐色、粘土・オリーブ褐色、土
 104. 暗オリーブ、中粒砂、シルト混、オリーブ褐色、中粒砂
 105. 暗緑灰色、粘土・オリーブ褐色、土(炭化物・中粒砂・植物
 遺体含む)
 106. 暗オリーブ、粗粒砂・暗オリーブ灰色、細粒砂(炭化物・植
 物遺体含む)
 107. 暗緑灰色、中粒砂・粘土(混) オリーブ褐色、土・植物遺
 体含む)
 108. 暗緑灰色、粘質シルト・オリーブ褐色、土(植物遺体含む)
 109. 暗緑灰色、粘土・オリーブ褐色、細粒砂(中粒砂混)
 110. 暗緑灰色、細粒砂・粘土混、灰オリーブ、中粒砂・オリーブ
 褐色、細粒砂
 111. 暗緑灰色、細粒砂・粘土混、灰オリーブ色、中粒砂(植物遺
 体含む)
 112. 暗緑灰色、細粒砂・オリーブ色、細粒砂
 113. 暗緑灰色、細粒砂・粘土混、オリーブ色、中粒砂
 114. 暗緑灰色、粘土・細粒砂混、灰オリーブ色、シルト
 115. 暗緑灰色、粘土・細粒砂混、灰オリーブ色、細粒砂・オリーブ
 褐色、細粒砂
 116. 暗緑灰色、粘土・オリーブ褐色、細粒砂(中・細粒砂多く
 含む)
 117. 暗緑灰色、中粒砂・オリーブ褐色、中粒砂・オリーブ灰色、
 中粒砂
 118. 暗緑灰色、中粒砂・粘質シルト混、オリーブ褐色、細粒砂
 119. オリーブ褐色、細粒砂・灰色、シルト・暗緑灰色、細粒砂・
 灰オリーブ色、中粒砂
 120. 暗緑灰色、細粒砂・オリーブ黒色、粘土・細粒砂(混)、オ
 リーブ褐色、細粒砂
 121. 暗緑灰色、細粒砂・灰オリーブ色、中粒砂
 122. 灰オリーブ色、中粒砂・暗緑灰色、細粒砂、粘土(混)
 123. 暗緑灰色、細粒砂・粘土混、灰オリーブ色、中粒砂
 124. 暗緑灰色、粘土(オリーブ褐色、細粒砂微量を含む)
 125. 暗緑灰色、粘土・中粒砂混、灰オリーブ色、中粒砂
 126. 暗緑灰色、細粒砂(オリーブ褐色、細粒砂微量を含む)
 127. 暗緑灰色、シルト・灰オリーブ、中粒砂・黄褐色、細粒砂
 128. 暗緑灰色、細粒砂・オリーブ色、中粒砂(粗粒砂含む)
 129. 暗緑灰色、細粒砂(暗オリーブ色、細粒砂含む)
 130. 暗緑灰色、中粒砂・オリーブ褐色、中粒砂・オリーブ色、中
 粒砂
 131. オリーブ色、中粒砂・暗緑灰色、細粒砂
 132. 暗緑灰色、粘土(緑灰色、細粒砂・植物遺体含む)
 133. 暗緑灰色、中・細粒砂
 134. 暗緑灰色、中粒砂・暗オリーブ、粗・中粒砂
 135. 灰オリーブ、中・細粒砂・暗緑灰色、細粒砂
 136. 暗緑灰、細粒砂・灰オリーブ、中粒砂(小石含む)
 137. 暗緑灰、細粒砂・灰オリーブ、細粒砂(粘土ブロック・植物
 遺体含む)
 138. 灰オリーブ色、粗・中粒砂(植物遺体含む)
 139. 灰オリーブ色・中粒砂(やぐら混)
 140. 灰オリーブ、中粒砂・暗緑灰、細粒砂
 141. 灰オリーブ、粗・中粒砂(シルト少量含む)
 142. 暗緑灰色、中・細粒砂(植物遺体含む)
 143. 灰オリーブ、中・細粒砂(暗緑灰、細粒砂の互層(小石含む))
 144. 灰オリーブ、細粒砂(植物遺体・小石含む)
 145. 灰オリーブ、細粒砂(細粒砂微量を含む)
 146. 暗オリーブ灰色、細粒砂・灰オリーブ色、細粒砂
 147. 灰オリーブ、細粒砂(植物遺体含む)
 148. 灰オリーブ、細粒砂
 149. 灰オリーブ、細粒砂・暗オリーブ灰色、細砂
 150. 灰オリーブ色、粗・中粒砂、暗緑灰、細粒砂
 151. 暗緑灰、細粒砂・灰オリーブ、細粒砂
 152. 暗緑灰、細粒砂・灰オリーブ、細粒砂
 153. 暗緑灰、細粒砂・灰オリーブ、細粒砂
 154. 暗緑灰、細砂・灰オリーブ、細砂
 155. 灰オリーブ、中粒砂(植物遺体含む)
 156. 暗緑灰、細粒砂・灰オリーブ、細粒砂
 157. オリーブ灰色、細粒砂・灰オリーブ色、細砂
 158. 暗緑灰、細粒砂・灰オリーブ、細粒砂
 159. 暗緑灰、細粒砂・灰オリーブ、中粒砂
 160. 暗緑灰、細粒砂(植物遺体含む)
 161. 暗緑灰、細粒砂(植物遺体含む)
 162. オリーブ混、シルト(中粒砂含む)
 163. 暗緑灰、細粒砂・灰オリーブ、細粒砂
 164. 暗緑灰、細粒砂・灰オリーブ、細粒砂
 165. 暗緑灰、細粒砂・灰オリーブ、細粒砂
 166. オリーブ混、中・細粒砂
 167. 暗緑灰、細粒砂(植物遺体少量含む)
 168. 暗緑灰、細粒砂(植物遺体少量含む)
 169. 暗緑灰、細粒砂(シルトブロック・植物遺体含む)
 170. 暗緑灰、細粒砂・灰オリーブ、細粒砂
 171. 暗オリーブ灰色、中・細粒砂・オリーブ混、細粒砂
 172. 暗オリーブ灰色、細粒砂(植物遺体含む)
 173. 暗オリーブ灰色、細粒砂(植物遺体含む)
 174. 暗オリーブ灰色、細粒砂(植物遺体含む)
 ~
 176. 暗緑灰、細粒砂
 177. オリーブ混、細粒砂
 178. オリーブ混、細粒砂(植物遺体含む)
 179. 暗オリーブ灰色、シルト(植物遺体・炭化物含む)
 180. オリーブ混、中粒砂(シルト含む)
 181. オリーブ混、粘土(細粒砂・植物遺体含む)
 182. オリーブ混、粘土(細粒砂・植物遺体含む)
 183. オリーブ混、粘土(細粒砂含む)
 184. オリーブ混、粘土(細粒砂含む)
 185. 灰褐色、混
 186. オリーブ混、粘土(細粒砂含む)
 187. オリーブ混、粘土(植物遺体含む)
 188. 暗オリーブ灰、シルト(植物遺体・炭化物含む)
 189. 暗オリーブ灰、粘土(植物遺体含む)
 190. 暗緑灰、シルト
 191. 暗緑灰、細粒砂・オリーブ灰、細粒砂
 192. 暗緑灰、細粒砂・灰オリーブ、細砂(植物遺体含む)
 193. 暗緑灰、細砂・灰オリーブ、細砂
 194. 灰オリーブ、細砂
 195. 暗緑灰、細砂
 196. 灰オリーブ、細粒砂(植物遺体含む)
 197. 灰オリーブ、細粒砂・暗緑灰、暗緑砂
 198. 暗オリーブ灰色、シルト
 199. 暗緑灰、細砂(シルト少量含む)
 200. 暗オリーブ灰、細粒砂
 201. 暗緑灰、細粒砂(植物遺体含む)
 202. 暗緑灰、シルト(植物遺体含む)
 203. 暗緑灰、細粒砂
 204. 暗緑灰、細粒砂
 205. 暗緑灰、細粒砂・灰オリーブ、細粒砂
 206. 暗緑灰、シルト(植物遺体含む)
 207. 暗緑灰、シルト(植物遺体含む)
 208. 暗オリーブ、シルト
 209. 暗オリーブ灰、細粒砂
 210. オリーブ混、シルト
 211. 灰色、シルト
 212. 黒色、粘土(植物遺体・細粒砂含む)
 213. 黒色、粘土(粘土(しまり強))
 214. オリーブ混、粘土(植物遺体含む)
 215. 暗オリーブ灰、粘質シルト(植物遺体含む)
 216. 暗オリーブ灰、粘質シルト(植物遺体含む)
 217. 暗オリーブ灰、粘質シルト
 218. 暗オリーブ灰、粘質シルト
 219. 暗オリーブ灰、粘質シルト(植物遺体含む)
 220. 暗オリーブ灰、粘質シルト、(オリーブ褐色、細粒砂含む)
 221. 暗オリーブ灰、粘質シルト(植物遺体含む)
 222. 暗オリーブ灰、粘質シルト(植物遺体含む)
 223. 暗緑灰色、シルト(植物遺体含む)
 224. 暗オリーブ灰、粘土(炭化物・植物遺体含む)
 225. 暗緑灰、粘土
 226. 暗緑灰、粘質シルト(植物遺体含む)
 227. 暗緑灰、粘質シルト
 228. 暗緑灰、粘質シルト

229. 暗緑灰、粘土
 230. 暗オリーブ灰、粘質シルト
 231. 暗オリーブ灰、粘質シルト
 232. 暗緑灰、粘質シルト (植物遺体含む)
 233. 暗オリーブ灰、シルト (植物遺体含む)
 234. 暗オリーブ灰、シルト (ちんてこう・炭化物含む)
 235. 暗緑灰、シルト (炭化物・ちんてこう含む)
 236. 暗緑灰、シルト (植物遺体含む)
 237. 暗緑灰、シルト・暗オリーブ灰、シルト (植物遺体含む)
 238. 暗緑灰、粘土 (植物遺体含む)・暗緑灰、シルト
 239. 暗緑灰、粘質シルト (植物遺体含む)
 240. 暗緑灰、シルト
 241. 暗オリーブ灰、シルト・暗緑灰、粘土
 242. 暗オリーブ灰、シルト・暗オリーブ灰、粘質シルト (炭化物・オリーブ褐色、細粒砂含む)
 243. 暗緑灰、粘土・暗緑灰、シルト (植物遺体・炭化物含む)
 244. 暗オリーブ灰色、粘土・暗オリーブ灰色、シルト
 251. 黒褐色、粘土 (植物遺体・オリーブ褐色、細粒砂含む)
 252. オリーブ黒色、粘土 (植物遺体含む)
 253. 黒褐色、粘土 (オリーブ褐色、細粒砂・植物遺体・炭化物含む)
 254. オリーブ黒色、粘土・灰色、シルト (植物遺体含む)
 256. 暗オリーブ色、中粒砂 (植物遺体含む)
 257. オリーブ黒色、粘土・炭化物・オリーブ褐色、細粒砂含む
 258. 黒色、粘土 (オリーブ灰、シルト微量含む)
 259. 灰色、シルト (植物遺体含む)
 260. 灰色、細粒砂 (灰オリーブ、中粒砂微量含む)
 261. オリーブ黄色、中粒砂・灰色、細粒砂
 262. 暗オリーブ灰、シルト (オリーブ灰色、細粒砂・オリーブ黄色、中粒砂微量含む)
 263. オリーブ灰、シルト (植物遺体・炭化物微量含む)
 264. 暗緑灰、シルト (灰オリーブ、細粒砂微量含む)
 265. 暗緑灰、粘土 (オリーブ、中粒砂含む)
 266. オリーブ黒色、粘質シルト
 267. オリーブ黒色、粘土・オリーブ色、中粒砂
 268. 暗緑灰色、粘質シルト・オリーブ色、中粒砂
 269. 暗緑灰、粘質シルト・オリーブ色、中粒砂 (268より多い)
 270. 暗緑灰、粘質シルト・オリーブ色、中粒砂
 271. 暗緑灰、粘土・暗緑灰、シルト
 272. オリーブ黒、粘土 (細粒砂多く含む)
 273. 灰色、粘土 (植物遺体含む)
 274. 灰色、粘土 (炭化物多量・植物遺体含む)
 275. オリーブ黄色、中粒砂 (粗粒砂・植物遺体含む)
 276. オリーブ黒色、粘土 (炭化物・植物遺体含む)
 277. 暗オリーブ灰色、粘土 (シルト含む)・オリーブ灰、細粒砂・オリーブ黒、粘砂
 278. オリーブ黒、粘砂 (植物遺体含む)
 279. 灰色、中粒砂・粘土 (細粒砂含む)
 280. 黒色、粘土 (植物遺体・中粒砂含む)
 281. 灰色、粘土 (オリーブ褐色、粗～中粒砂含む)
 282. 暗緑灰、粘土 (中粒砂多量含む)
 283. 暗緑灰、粘質シルト
 284. 暗オリーブ灰、中粒砂 (植物遺体含む)
 285. 暗オリーブ灰、細粒砂 (中粒砂多く含む)
 286. 暗オリーブ灰、粘土 (オリーブ褐色、細粒砂含む)
 287. 暗オリーブ灰、細粒砂 (細粒砂含む)
 288. 暗オリーブ灰、粘土 (細粒砂多く含む)
 289. 暗オリーブ灰、シルト (粗～細粒砂含む)
 290. 暗緑灰、中粒砂 (細粒砂含む)
 291. 灰色、粘土 (中粒砂多く含む)
 292. 暗緑灰、中～細粒砂
 293. 暗オリーブ灰、細粒砂・暗オリーブ灰、粘土ブロック
 294. 暗緑灰、中～細粒砂・オリーブ黒、粘土
 295. 暗オリーブ灰、粘質細粒砂・オリーブ黒、粘土
 296. 暗オリーブ灰、細粒砂・オリーブ黒、粘土
 297. 灰・細粒砂・粘質シルト
 298. オリーブ灰色、粗～細粒砂 (オリーブ灰、シルト微量含む)
 299. 暗緑灰、粗～中粒砂
 300. オリーブ黒、粘土 (ちんてこう・粗～細粒砂多く含む)
 301. 暗オリーブ灰、中～細粒砂 (オリーブ黒、粘土微量・ちんてこう微量含む)
 303. 明黄褐色、中～細粒砂・暗緑灰、粘土
 304. 暗オリーブ灰、粘土・暗緑灰、中～細粒砂
 305. オリーブ黒、粘土・暗緑灰、粗～中粒砂
 306. 暗オリーブ灰、粘土・暗緑灰、粗～中粒砂
 307. オリーブ黒、粘土・暗オリーブ灰、中～細粒砂
 308. オリーブ黒、粘土・暗オリーブ灰、中～細粒砂
 309. 暗緑灰、中～細粒砂・灰オリーブ、中粒砂
 310. オリーブ黄色、粗～中粒砂・暗オリーブ灰、粘土
 311. オリーブ黒、粘質細粒砂・暗緑灰、粗～中粒砂の互層
 312. 暗オリーブ灰、細粒砂・暗緑灰、粘質中～細粒砂の互層
 313. 暗緑灰、粗～中粒砂・暗緑灰、中～細粒砂の互層
 314. 暗オリーブ灰色、シルト (質粘土)

315. オリーブ灰色、砂質土
 ~
 317. 黒褐色、粘土 (植物遺体・炭化物含む)
 ~
 319. 暗オリーブ灰、粘質土
 320. 暗オリーブ灰、中粒砂
 321. 黒色、粘土 (植物遺体含む)
 322. 暗オリーブ灰、粘質細砂 (植物遺体・オリーブ褐色、細粒砂含む)
 323. 暗オリーブ灰、粘質細砂 (オリーブ褐色、細粒砂含む)
 324. 暗オリーブ灰、粘質細砂・明黄褐色、細粒砂
 325. 暗オリーブ灰、中～細粒砂 (粘土ブロック含む)・灰オリーブ、中～細粒砂
 326. オリーブ灰、中～細粒砂・粘土 (混)、灰オリーブ、中～細粒砂
 327. 暗オリーブ灰、中～細粒砂・灰オリーブ、中～細粒砂
 328. 暗緑灰、中～細粒砂・灰オリーブ、細粒砂
 329. 暗緑灰、細粒砂
 330. オリーブ黒色、粘土 (植物遺体含む)
 331. オリーブ灰、中～細粒砂・灰オリーブ色、粗～細粒砂・暗緑灰・細砂
 332. オリーブ黒、粘土 (粗～中粒砂微量・植物遺体・ちんてこう含む)
 333. オリーブ黒、粘土 (植物遺体・炭化物・ちんてこう含む)
 334. 黄褐色、中～細粒砂 (オリーブ黒、粘土ブロック含む)
 ~
 400. 黄灰色、シルト質粘土・オリーブ黒、シルトの互層
 401. オリーブ黒、細粒砂 (灰オリーブ、極細粒砂混)
 ~
 405. オリーブ黒、粘質シルト (植物遺体多く含む)
 406. オリーブ黒、細粒砂・極細粒砂・黒色、僅量・中粒砂の互層
 ~
 410. オリーブ黒、粘土・オリーブ黒、中～細粒砂 (植物遺体含む)
 411. オリーブ黒、粘土・オリーブ黒、粗～細粒砂
 412. 灰オリーブ、粗～細粒砂・灰オリーブ、粗～細粒砂
 413. 灰オリーブ、極粗～細粒砂・灰色、粗～細粒砂
 414. 灰色、細粒砂 (中粒砂含む)・灰オリーブ極粗～細粒砂
 415. 暗オリーブ灰、細粒砂・粘土 (混)、灰オリーブ、極粗～細粒砂
 416. 灰色、粗～細粒砂・灰オリーブ、粗～細粒砂 (植物遺体含む)
 417. 灰色、細粒砂・粘土 (混)、灰色、粗～細粒砂
 418. 灰、粗～細粒砂・灰色、粗～細粒砂
 419. 灰、粗～細粒砂・暗オリーブ灰、粗～細粒砂
 420. 灰色、粘土 (混)・灰オリーブ、粗～細粒砂
 421. 灰色、粘土 (粗～細粒砂、植物遺体含む)
 422. 灰色、粘土 (植物遺体含む)
 423. 暗オリーブ灰、シルト (植物遺体層状に含む)
 424. 黒色、粗～細粒砂・粘土 (混)、オリーブ黒、粗～細粒砂
 425. 灰色、粗～細粒砂 (植物遺体含む)
 426. 黒色、粗～細粒砂・オリーブ黒、粗～細粒砂
 427. 灰色、粗～細粒砂 (植物遺体含む)
 428. オリーブ黒、粗～細粒砂・灰色、粗～細粒砂
 429. 黒色、粗粒砂
 430. 灰色、粗～細粒砂・オリーブ黒、粗～細粒砂
 431. 灰色、粗～細粒砂・オリーブ黒、中～細粒砂、粘土 (混)
 432. 黒色、中～細粒砂・粘土 (混) (灰色、粘土をブロック状に含む)
 433. オリーブ黒、粗～細粒砂・粘土 (混) (植物遺体含む)
 ~
 435. 暗オリーブ灰、中～細粒砂・オリーブ黒、中～細粒砂 (植物遺体含む)
 436. 暗緑灰、シルト (中～細粒砂含む)
 437. 灰、粗～細粒砂・オリーブ黒、粗～細粒砂 (植物遺体含む)
 438. 暗オリーブ灰、粗～細粒砂 (植物遺体含む)
 439. 暗オリーブ灰、シルト (細粒砂・炭化物・植物遺体含む)
 440. 暗オリーブ灰、極粗～細粒砂 (黒色、粘土含む)
 441. 暗緑灰、粗～細粒砂・オリーブ灰、粗～細粒砂・暗オリーブ、中～細粒砂、粘土 (混)
 442. オリーブ灰、粗～細粒砂
 443. オリーブ黒、粗～細粒砂・黒色、粗～細粒砂・粘土 (混) (植物遺体含む)
 444. 暗オリーブ灰、粘土・灰オリーブ、細粒砂 (植物遺体含む)
 445. 灰色、粘土・灰色、粗～細粒砂 (植物遺体含む)
 446. 暗オリーブ灰、粗～細粒砂・灰、細粒砂・灰オリーブ、細粒砂

2. 遺構と遺物

C地区では近世の溜池、中世の瓜生堂廃寺の基壇と大溝、弥生時代中期末から後期初頭の配石、弥生時代中期の方形周溝墓などが検出された。このうち中世と近世の遺構の配置を第15・16図に示した。

D地区では中世の井戸、大溝、古墳時代の小型低方墳、井戸、弥生時代中期の方形周溝墓と墓道、畦畔、弥生時代前期中頃の溝などが検出された。このうち中世と古墳時代の遺構の配置を第15図に示した。

(1) 近世・中世・古代の遺構と遺物

今回検出した遺構は、近世の溝・溜池、中世の溝・井戸・土壇と基壇、弥生時代中期末から後期初頭を中心とする配石遺構、弥生時代中期の方形周溝墓・墓道・畦畔、弥生時代前期中頃の溝などである。時代の新しいものから概要を報告する。層名は基本層序による。

近世の遺構 (第12図)

耕作用の溝などとともにC地区で灌漑用に掘られた溜池を検出した。溜池について説明する。

溜池

C-7で一部を検出した。東部は攪乱で破壊され、西端および南端は調査区外に延び平面形は不明である。深さT.P.-1.5mまで掘られ、第17層まで達している。堆積土は暗緑色粘土・オリブ黒色シルトなどである。護岸施設として、一定間隔で杭を打ち、それを支えとして径10cm前後の竹を横に並べて矢板としていた。内部より下層から混入した弥生土器と国産磁器や漆器碗などが出土した。出土遺物から見て18世紀後半に機能していたと考えられる。

近世の遺物 (第14図1~4)

溜池からは瀬戸美濃焼の菊皿と肥前焼のいわゆる「くらわんか」茶碗、仏飯器、漆器の碗が出土した。菊皿(1)は緑黄色の釉薬がかり、内面に菊花状の窪みを持つ。口径は9.0cmである。15世紀代である。混入であろう。くらわんか茶碗(2、3)は2点出土した。両者とも草花文を施す。口径は双方とも10.0cmである。仏飯器(4)は薄緑色の釉薬がかり、口径は7.1cmである。これらの遺物は18世紀後半のものである。

中世の遺構 (第15図)

大溝1 (第19図)

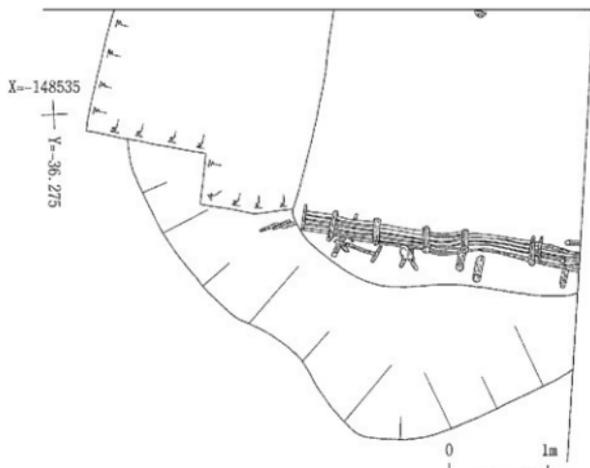
大溝1は幅約5m、深さ約1mを測る。南北方向に流れる溝で、東側はやや浅く、西側に向かってやや深くなっている。溝の南側には時期は不明であるが後世の井戸による切合いがみられる。溝の埋土は大きく分けて4層認められ、上から茶灰色土、灰色粘土、砂層、青灰色粘土が堆積している。それぞれの層からは多量の中世土器や獣骨が出土している。獣骨は主に馬で溝の両端から中世土器とともに一括して投棄された状況を呈していた。遺物は各層毎に取り上げたが明確な時期差は示しなかった。大溝は溝心で西に約5度振っている。このような溝はB地区やD地区でも検出されており、寺院や居館を囲む溝の可能性はある。

基壇 (第20~24図)

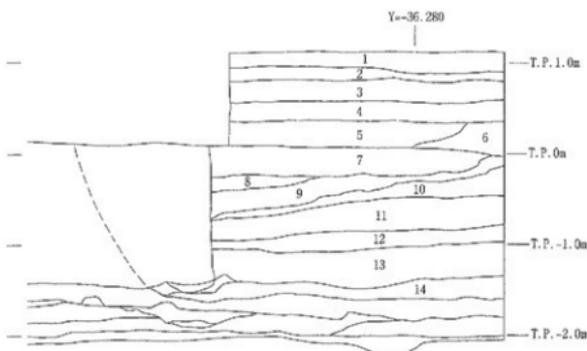
C地区の中央で寺院の基壇と思われる高まりを検出した。土層の観察から基壇は最低2回の築造がなされており、1回目を1次基壇、2回目を2次基壇と呼び、後者から説明する。2次基壇は1次基壇に比べ大きく北側に迫り出し、周囲に幅約1mの溝を巡らす。周溝からは13世紀から14世紀にかけての遺物が出土した。基壇は全て盛り土によってつくられており、瓦などは積まれていない。柱穴は3基検出した。それぞれ直径30~50cm、深さ約20cmを測る。根石などはなく全て掘立柱である。このような柱穴の他に、完形の瓦器碗、皿や土師器皿を埋納したとおもわれる小さなピットも3基検出し

た。これらのピットは2次基壇を造成する際に地鎮の目的で埋められた可能性も示唆しておきたい。また、基壇上に浅い溝が2条あり、周溝出土の遺物よりも比較的新しい遺物が出土することから基壇築絶後に穿たれたものと考えられる。

1次基壇は2次基壇を造る整地土を除去した段階で検出した。この整地土からもまとめて13世紀代の遺物が出土した。1次基壇は2次基壇に比べ南に約1m短くなっている。西側は攪乱によって規模は不明であるが、南壁断面観察の結果、2次基壇と東西幅はほぼ同一であることが解っている。基壇上面では柱穴を3基検出したが、1次基壇と異なり整然とは並ばない。これは2次基壇を築造する過程である程度削平が行なわれたために柱穴が判別できなかったためによると考えたい。1次基壇は南壁土層断面観察によると12世紀代の井戸1・2が埋没した後、その上に整地を行い築造されたものと考えたい。1次基壇の周溝からは13世



第14図 C地区溜池平面実測図

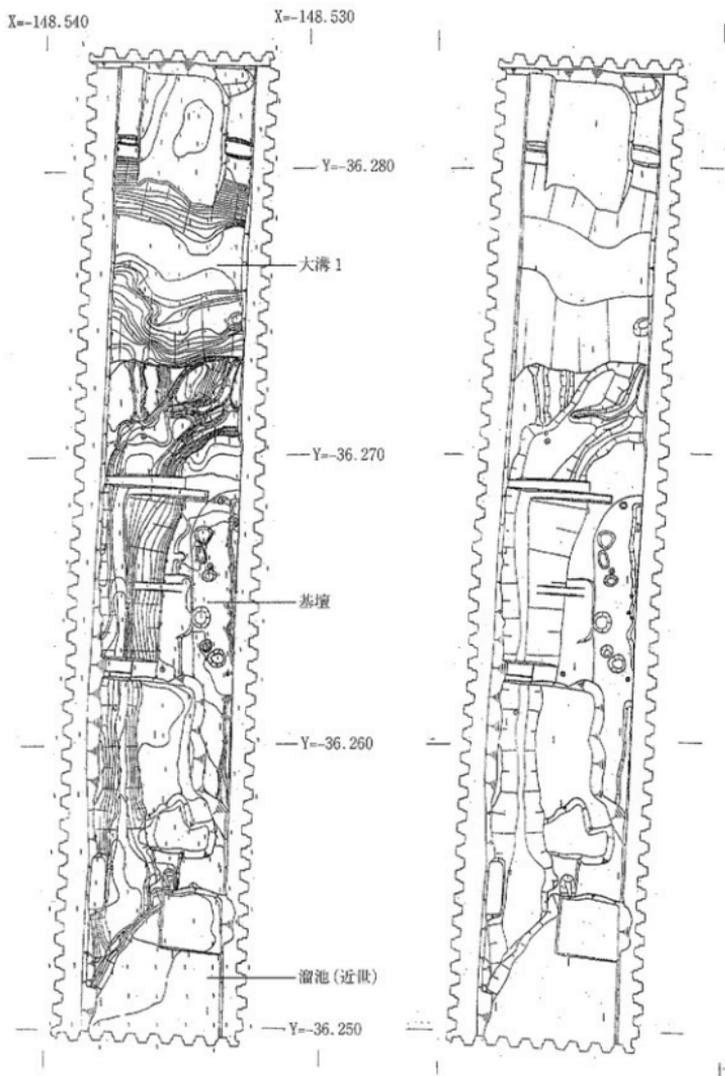


第15図 溜池土層断面実測図

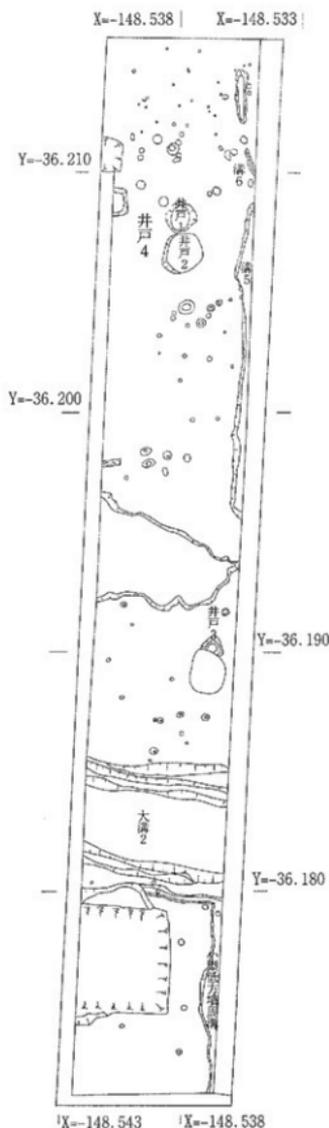
- | | | |
|--------------|------------------|--------------|
| 1. 暗緑灰色粘土 | 7. 暗オリーブ細砂 | 12. 灰色シルト |
| 2. 緑灰色粘土 | 8. オリーブ黒色粘土 | 13. 灰オリーブ細砂 |
| 3. 暗オリーブ灰色粘土 | 9. オリーブ黒色極粗砂 | 14. オリーブ黒砂質土 |
| 4. 暗緑灰色粘土 | 10. 黒色粘土 | |
| 5. 緑灰色粘土 | 11. オリーブ黒色シルト質粘土 | |
| 6. 暗オリーブ灰色粘土 | | |



第16図 溜池出土遺物実測図



第17图 C地区近·中世遺構全体图



第18図 D地区中世～古墳遺構全体図

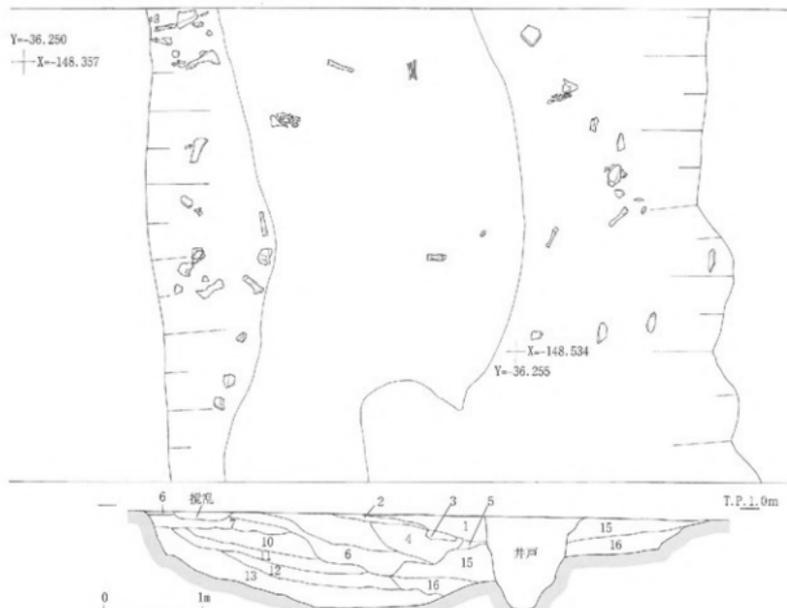
紀後半、整地土からは13世紀前半の遺物がまぎって出土した。なお、基壇の断割り土層断面観察によると、整地土を除去した段階でもう1条の溝があることが確認された。この溝は調査区南壁に接するためその規模を明らかにできないが、1次基壇築造以前の周溝であることも考えられる。その場合、基壇は3時期に亘って作られた可能性がある。

基壇築造以前の遺構（第27図）

1次基壇周溝の北側で井戸1を検出した。掘方はやや楕円形を呈し、長径約50cm、短径約40cm、深さ約40cmを測る。茶灰色の埋土を取りのぞくと1段の曲物が現われた。断面観察によると、曲物の上に2層の堆積がみられることから、この井戸は本来3段組であったと推定される。内部から遺物が出土しなかったため正確な時期を決定するに到らないが、井戸の配置状況からみて1次基壇と同時期かそれ以前であると考えたい。井戸2（第27図）は調査区南壁で検出された。この井戸の上層は1次基壇の整地土であることから、基壇築造以前のものであることが解る。掘方は不整形な楕円形を呈し、直径約45cm、深さ約30cmを測る。内部には曲物が2段残存していた。埋土の断面観察によると、さらに1層の堆積がみられることから、本来3段組であったと考えられる。埋土からは図示できなかったが12世紀代の遺物が出土した。

D地区では井戸1と2（第25図）、ピット群（第28図）を検出した。井戸1と2は共に不整形な円を呈し、1は直径約1.2m、深さ約0.5m、2は直径約1.5m、深さ約2mを測る。井戸1の埋土は茶灰色～青灰色を呈し、レンズ状に5層堆積していた。内部からは13世紀代の土師器皿が1点のみ出土した。これに対し井戸2は非常に深く、レンズ状に堆積している埋土を取り除くと、曲物が2段残存していた。土層断面観察によるとこの曲物の上に更に1層の堆積がみられることから、本来3段組であったことが解る。埋土は茶灰色～黄灰色～青灰色を呈し、内部からは13～14世紀代の瓦器椀、皿、土師器皿、中国製白磁皿などが出土した。埋土の堆積状況からみて、この井戸は廃絶後一度に埋められたのではなく、時間をかけて徐々に埋まっていったと考えられる。このことは出土した遺物に時期差があることからも妥当であると言える。

井戸4（第28図）は調査区南壁で検出した。この井戸の南半分は調査区外であるが、平面形は約1.1mの方形を呈すると思われる。埋土は青灰色を呈し、レンズ状に6層堆積



第19図 C地区大溝1平面・土層断面実測図

- | | | |
|------------|------------------|-----------|
| ① 褐色粘質土 | ⑦ オリーブ黒粘土 | ⑬ 灰色粘土 |
| ② 灰色粘土 | ⑧ 灰オリーブ粘土 | ⑭ 灰色粘土 |
| ③ オリーブ黒粘質土 | ⑨ 暗オリーブ粘質土 (旧床土) | ⑮ 暗灰黄粘質土 |
| ④ 灰色粘土 | ⑩ 灰色粘土 | ⑯ オリーブ黒粘土 |
| ⑤ 灰オリーブ粘質土 | ⑪ オリーブ黒粘土 | ⑰ 黄灰色土 |
| ⑥ 灰色粘土 | ⑫ オリーブ黒粘土 | |

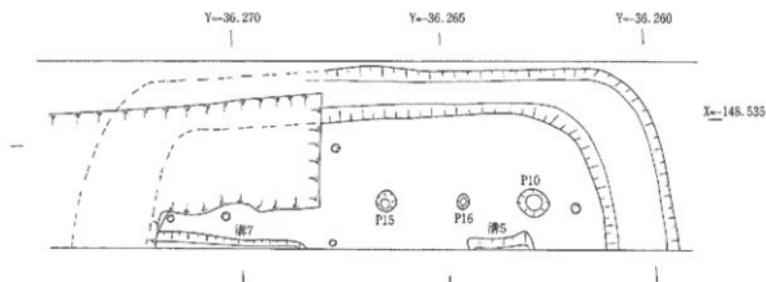
していた。遺物は出土していない。その他、ピット33はやや楕円形を呈し、直径30cm、深さ50cmを測る。埋土は3層みとめられ、二度に亘って掘り直しが行なわれたことを示している。ピット39は直径25cm、深さ25cmを測る。埋土は1層である。ピット34は直径40cm、深さ80cmを測る。埋土は4層で非常に深い。ピット36は直径30cm、深さ30cmを測り、内部から木片が出土した。ピット35は直径30cm、深さ40cmを測る。埋土は1層である。これらのピットは井戸1・2の東に位置するが、その性格は不明である。

大溝2 (第26図)

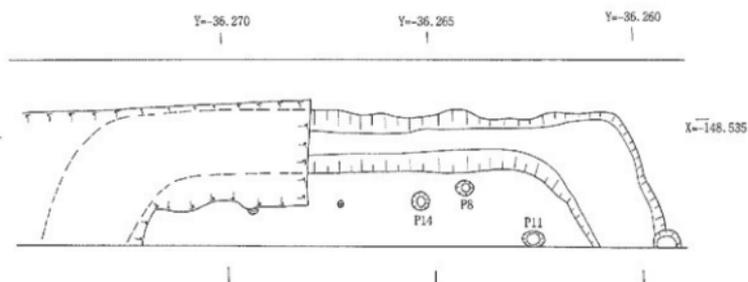
大溝2はD地区の東で検出した。南北方向に流れる溝で、幅約5m、深さ1mを測る。埋土は茶灰色～青灰色を呈する。埋土からは13～15世紀代の遺物が出土した。この溝は肩から急な角度で掘り鉢状に落ち込むもので、大溝1とは規模において異なる。弥生時代の環濠のような断面形を呈していることから、寺院の東隅を区画する溝ではないかと推察される。

溝5 (第15図)

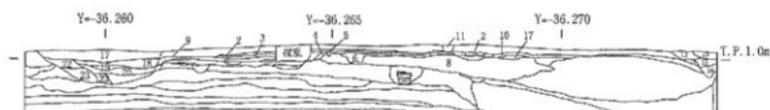
D地区の北隅でかろうじて検出した。この溝は東西に長く伸び、埋土から14世紀代の遺物が出土した。遺物の性格は不明である。



第20図 第2次基壇平面実測図

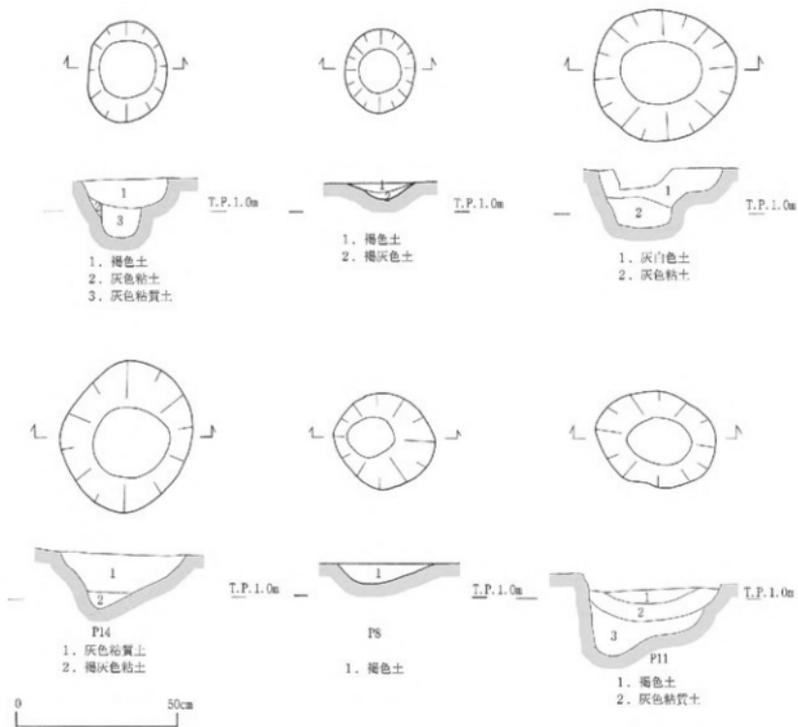


第21図 第1次基壇平面実測図



第22図 基壇土層断面実測図

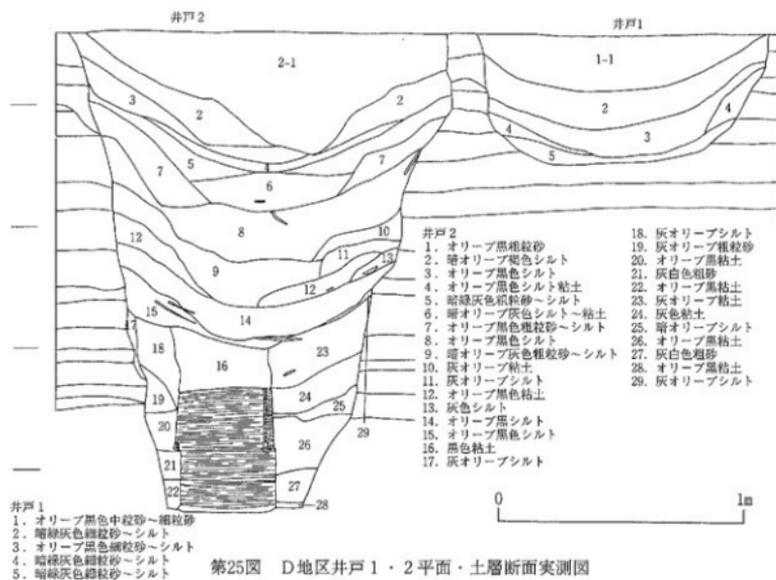
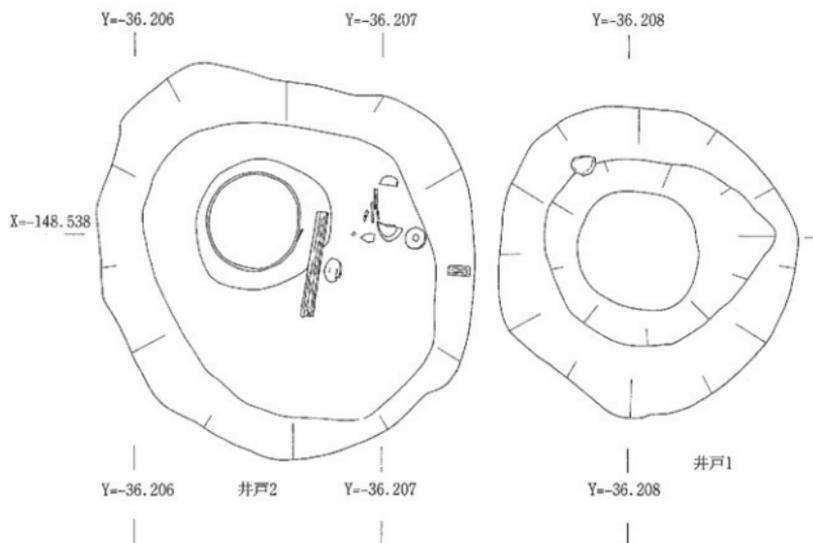
- | | | |
|-------------------|------------------|-------------|
| 1. 灰褐色土 (基壇2次整地土) | 9. 褐色土 (基壇1次整地土) | 17. 灰黄色土 |
| 2. 褐灰色土 | 10. 灰黄色粘質土 | 18. 灰黄色土 |
| 3. 褐灰色粘土 | 11. 褐灰色土 | 19. オリーブ褐色土 |
| 4. 褐灰色粘土 | 12. 褐灰色土 | 20. 黄灰色粘土 |
| 5. にぶい褐色シルト | 13. 褐色土 | 21. 灰色粘土 |
| 6. にぶい褐色シルト | 14. 褐灰色土 | 22. 暗灰黄色土 |
| 7. 明褐灰色粘質土 | 15. 褐色土 | 23. 灰色粘土 |
| 8. にぶい橙色シルト | 16. 灰黄褐色土 | |

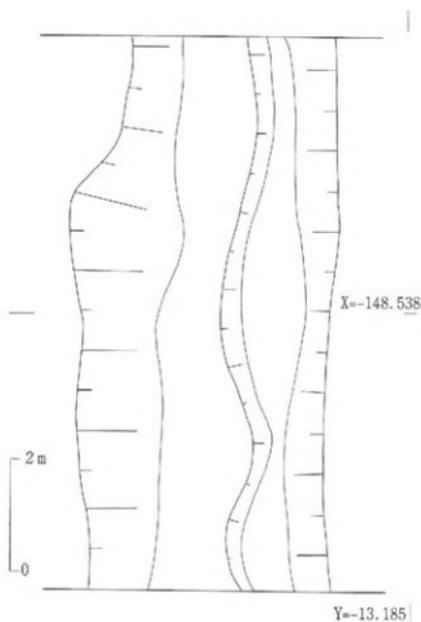


第23図 基礎柱穴平面・土層断面実測図



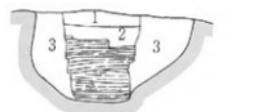
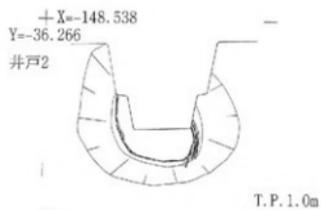
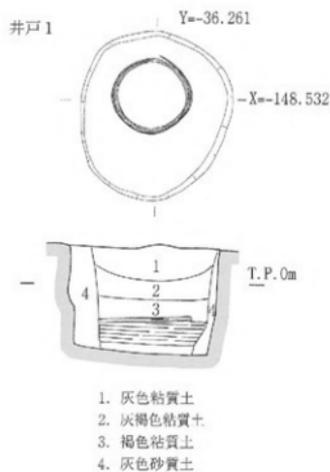
第24図 C地区基礎断ち割り土層断面実測図 (南北方向)





1. オリーブ黒色細粒砂
2. オリーブ黒色微砂
3. オリーブ黒色粘土
4. オリーブ黒色細粒砂
5. オリーブ黒粘質シルト
6. オリーブ黒色粘土
7. オリーブ黒色粘土
8. 灰オリーブシルト
9. オリーブ黒色粘土
10. 暗オリーブシルト
11. 灰色シルト
12. オリーブ黒色粘土
13. 灰色シルト
14. 灰色粘土
15. オリーブ黒色粘土

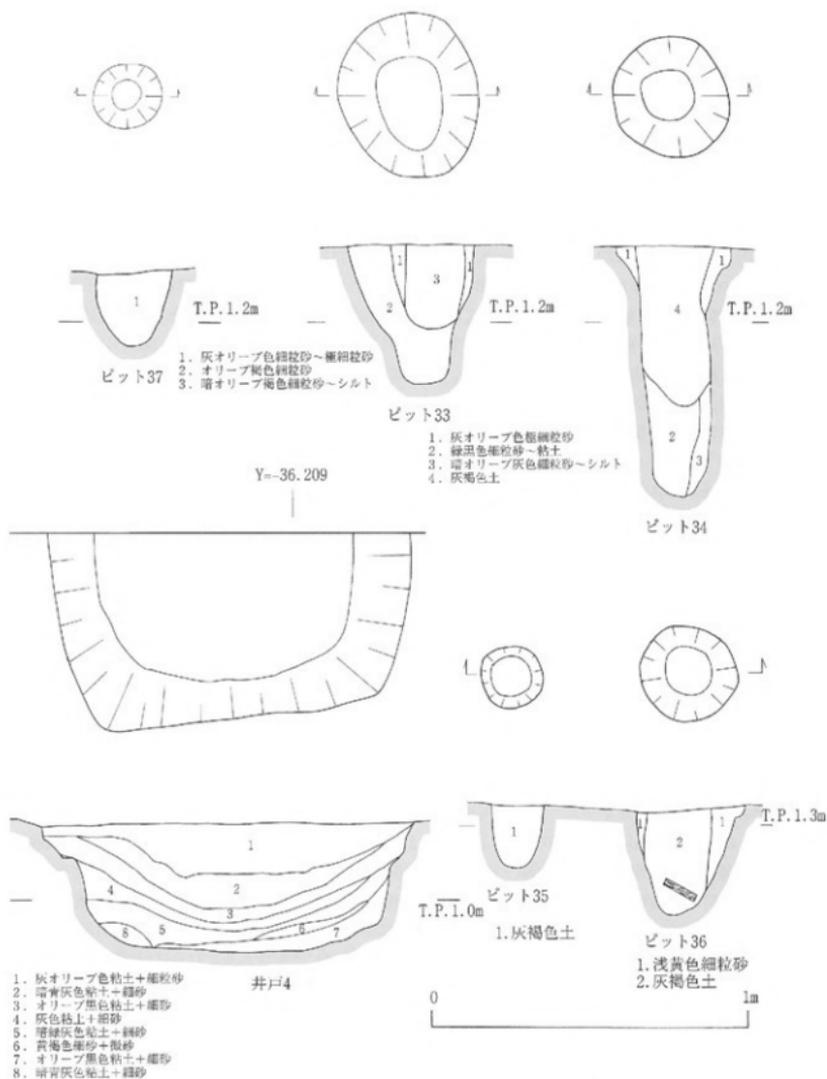
第26図 D地区大溝2平面・土層断面実測図



1. 褐色粘質土
2. 灰褐色粘質土
3. 灰色砂質土



第27図 C地区井戸1・2
平面・土層断面実測図



第28図 D地区柱穴・井戸平面・土層断面実測図

中世の遺物

C地区大溝1出土土器(第29図)

C地区大溝1からは中世土器が大量に出土した。以下各層ごとに述べる。

茶灰色出土土器(第29図5~24)(5・6・15~20)は瓦器碗である。(5)は完形に復元できる。見込みに平行線文が入る。口径15.0cm、器高5.3cm。尾上編年Ⅱ-3期に相当する。(6・19)は大和型である。近江編年Ⅰ-4期に属す。(15~18・20)は内面にヘラミガキ、外面にユビオサエを施すものが多い。(21)は和泉型の皿である。外面にユビオサエ、見込みに平行線文を配する。(7・8)は土師器皿である。(7)はいわゆるヘソ皿で14世紀代である。(8)は口縁部ヨコナアにより段がつく。13世紀代のものであろう。(9)は瓦質の羽釜である。外面にヘラケズリを施し、口縁部は凹線を巡らし、やや内傾する。口径は22.0cm。15世紀代であらう。(10・11)は東播系の須恵器である。口縁部は肥厚しない。(10・11)は森田編年第Ⅲ期第2段階に相当する。12~13世紀初頭である。(13・14・22~24)は土師質羽釜である。森島編年A型式に属する。12世紀末~13世紀初頭である。前者は口径33.0cm。後者は口径32.0cm。(22)は森島編年C型式に属し、12世紀末である。口径31.6cm。(23・24)は同A型式に属し、13世紀末に位置付けられる。前者は口径29.6cm、後者は口径36.0cm。

灰色粘土出土土器(第30図25~38)

(25~27)は土師器皿である。前二者は13世紀代、後者は14世紀代である。(29~31)は瓦器碗である。内面にヘラミガキをまばらに入れる。尾上編年Ⅱ-2~3期に相当する。(28)は白磁底部である。(32)は東播系捏鉢の口縁部である。(33~35・38)は瓦質羽釜である。(35)は森島編年F型式で16世紀まで下る。(37)は瓦質の大型火鉢である。口径45.0cm。

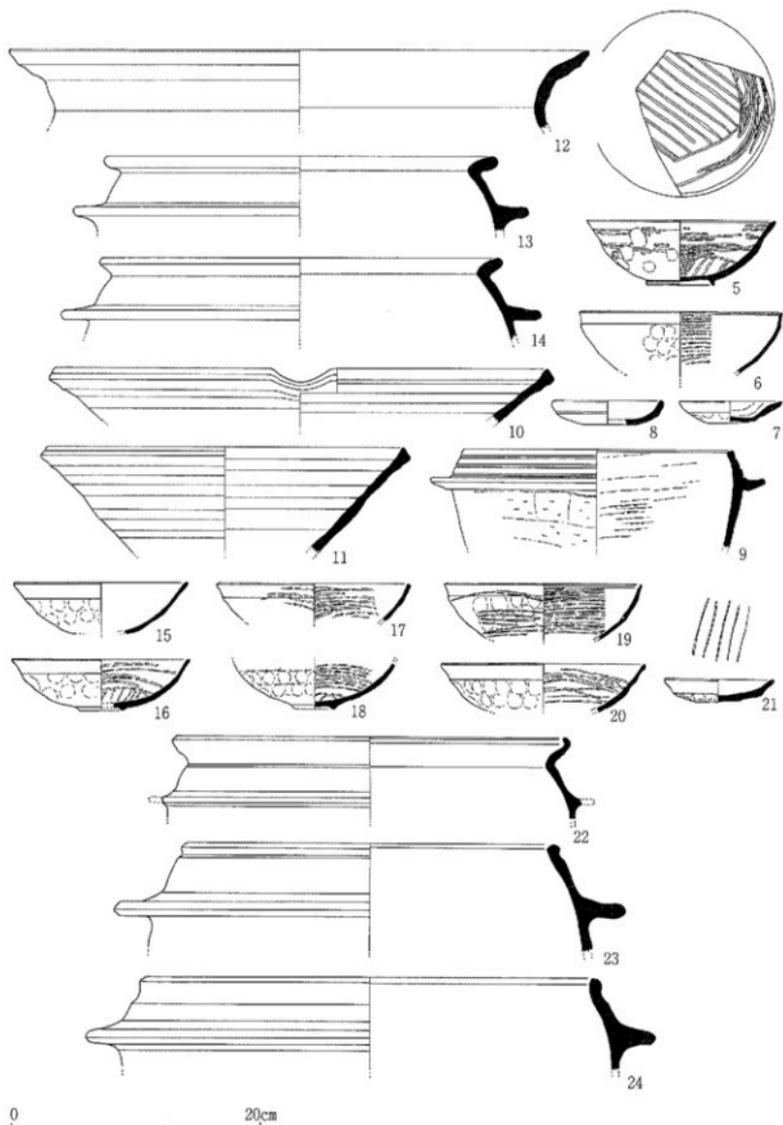
砂層出土土器(第30図39~63)

(39~50)は土師器皿である。(39~41)は平らな底部をもつが、(42~50)は外面にユビオサエが多く、ヘソ皿になるものであろう。(51~56)は瓦器碗である。(52・53)を除いて尾上編年Ⅱ-3~Ⅲ-1期に相当する。これに対して(52・53)は新相を呈する。(57)は青白磁の皿である。(58~60)は瓦質の羽釜である。森島編年F型式に相当する。15世紀末~16世紀初頭である。(61)は東播系の捏鉢である。(62・63)は瓦質の摺鉢である。前者は16世紀、後者は13世紀代である。

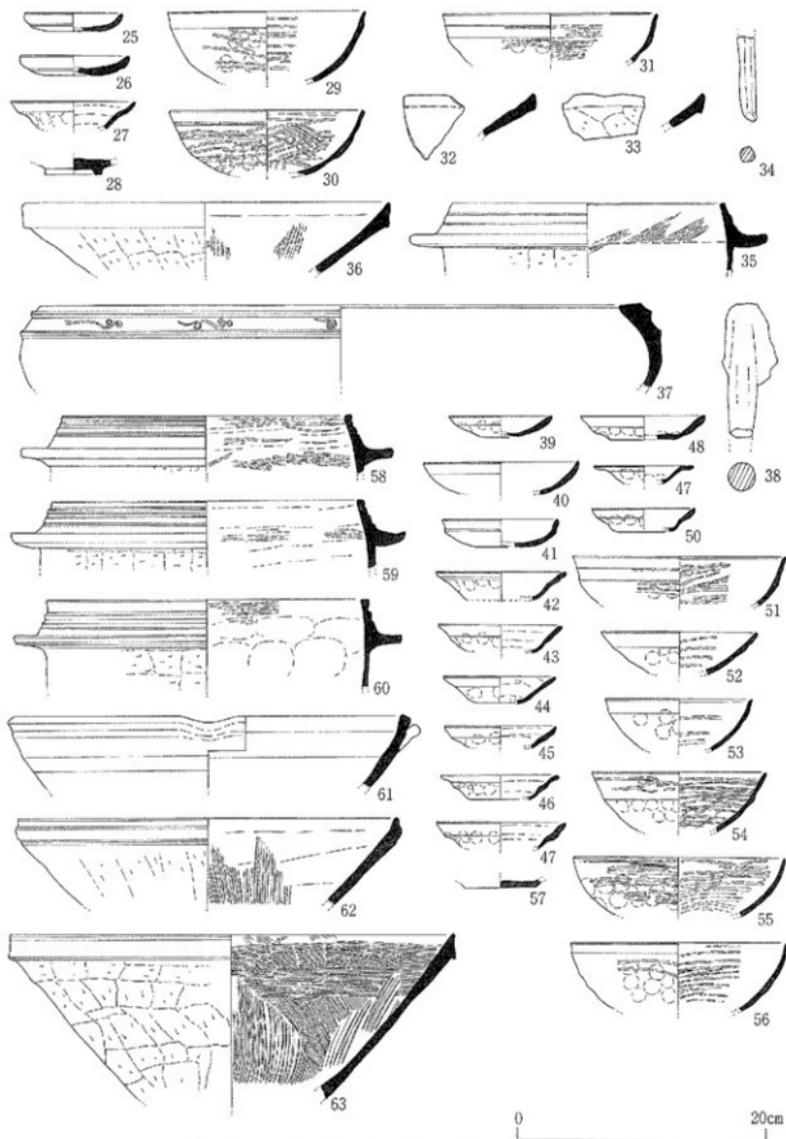
青灰色粘土出土土器(第31図64~121・第32図775~777)

(64~78)は土師器皿である。(64~67、76~78)は底が平坦なものである。(68~75)は外面にユビオサエを施し、ヘソ皿となる。15世紀代である。(76~78)は中皿である。13世紀代である。(79~85)は瓦器皿である。外面にユビオサエ、内面にヘラミガキを施す。(82)は口縁部に強くヨコナアを施す。(86~109)は瓦器碗である。(90~97・99~107)は尾上編年Ⅱ-3期に相当するものが多い。(98)は大和型で近江編年Ⅰ-6期に属する。(86~88・108・109)は底部である。(86)は見込みに斜交子文が入る。(110~115)は中国製白磁である。(110)は森田・横田分類V-1類、他は同文類Ⅳ-2類に相当する。(117・118・120)は土師質羽釜である。(117・118)は羽根部は短い。(119)は瓦質羽釜である。森島編年F型式16世紀初頭に属する。(120)は同編年A型式13世紀代に比定される。(121)は瓦質の和泉型甕である。15世紀代である。(122)は瓦質の羽釜である。(775)は土師質の甕である。甕の銜部のみ残存している。(776・777)は常滑大甕である。(776)は口径34.0cm。灰釉がかかる。(777)は底部である。

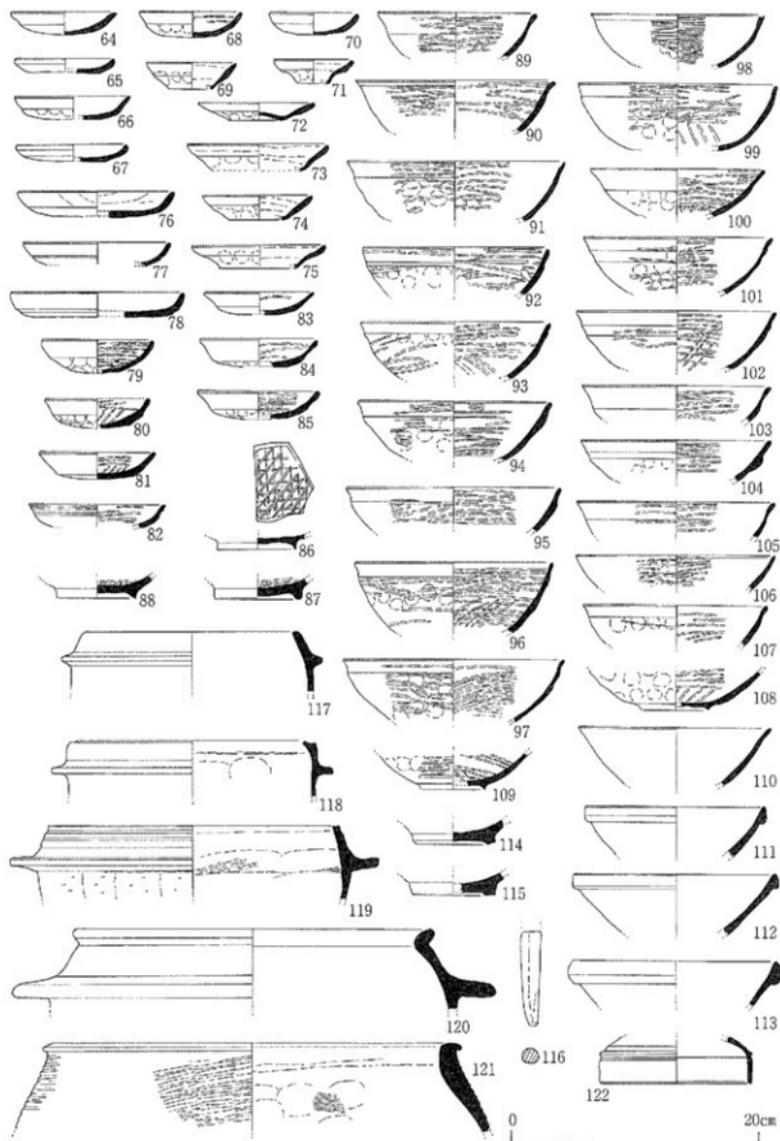
以上、みてきたように大溝1は層ごとに取り上げたが、それぞれの遺物は13~15・16世紀にまで及ぶものであった。後述するが、基壇出土の中世土器は13世紀代を中心としており、この遺跡が13世紀代に一度ピークに達したことが考えられる。この溝は13世紀~16世紀初頭にまで存続し、その際大量の13世紀代の遺物が混入したと考えたい。



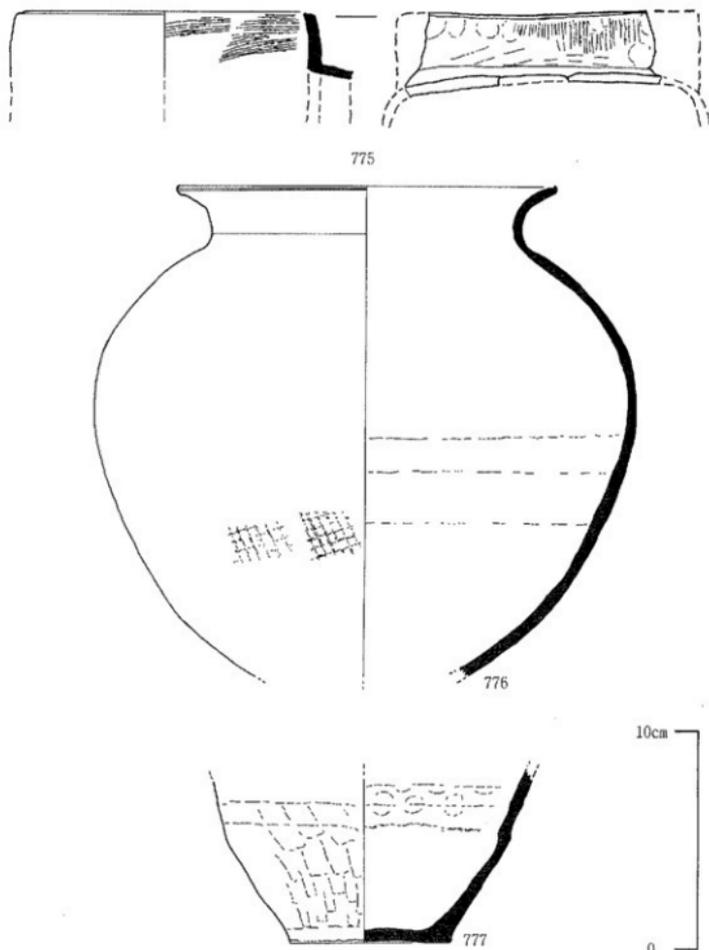
第29图 C地区大沟1茶灰色土出土器实测图



第30图 C地区大沟1灰色粘土·砂层出土土器实测图



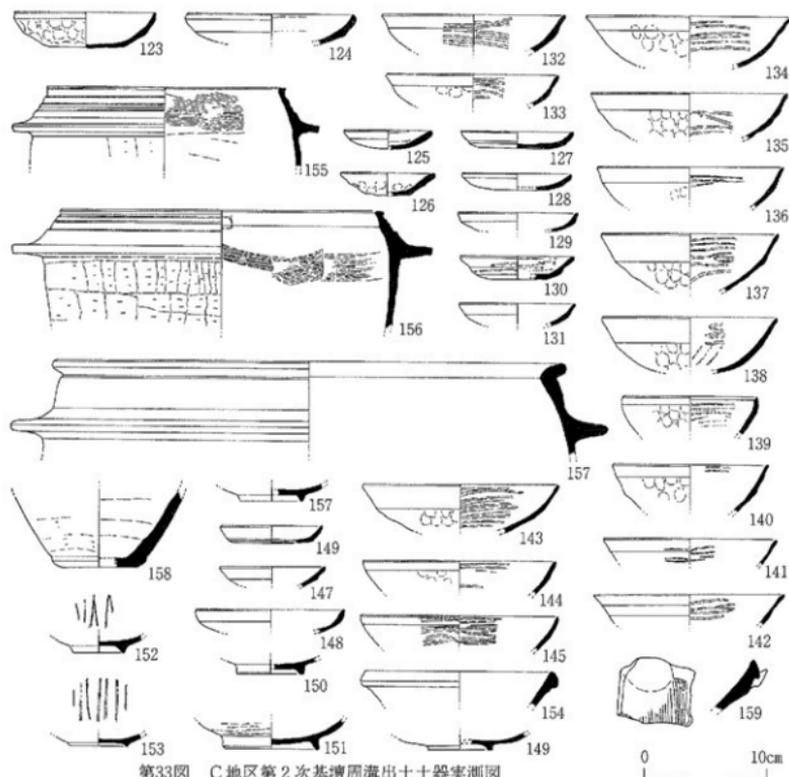
第31图 C地区大湾1青灰色粘土出土土器实测图(1)



第32図 C地区大溝1青灰色粘土土器実測図(2)

第2次基壇周溝出土土器(第33図)

(123~129・146~148)は土師器皿である。(123・126)は外面にユビオサエを施す。皿は底部が平坦なものが多く、ヘソ皿はまだ出現していない。(123・124・148)は中皿である。13世紀代である。(132~145)は瓦器である。椀は口縁部を広くヨコナデし、外面にユビオサエを施す。内面のヘラミガキはまばらである。これらは尾上繩年Ⅲ-3期に相当する。13世紀前半中葉である。(139・140)は大和型である。近江繩年Ⅱ-2~3期に相当する。14世紀代である。(155・156)は瓦質羽釜である。外面に横方向のヘラケズリを施す。森島分類、F型式に比定される。13世紀代である。(154)は

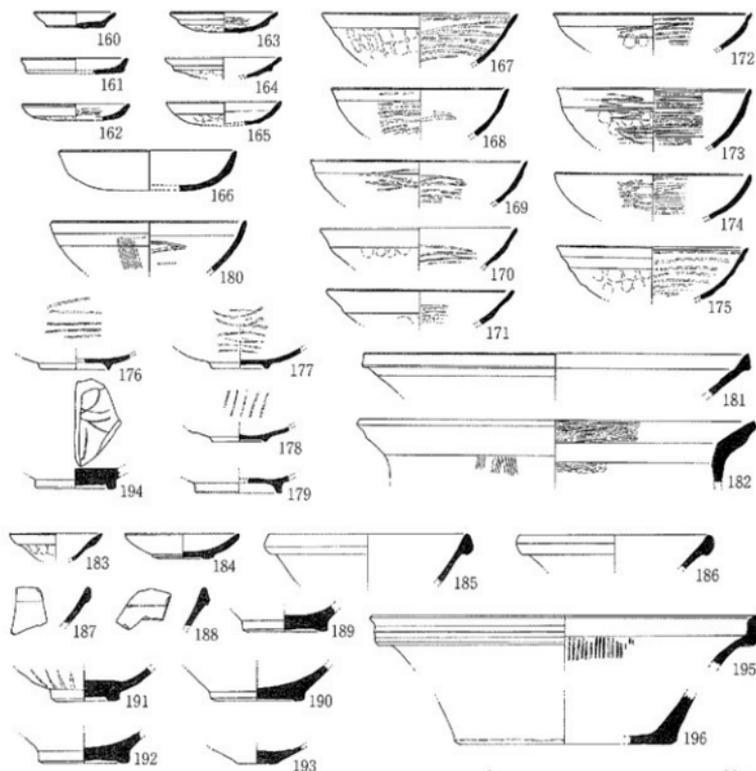


第33図 C地区第2次基壇周溝出土土器実測図

中国製白磁碗である。横田・森田分類Ⅳ-2類である。(150~153)は底部である。(151)は黒色土器である。(152~153)は見込みに平行線状の暗文を施す。(158)は信楽焼の壺底部である。(159)は瓦質摺鉢である。16世紀代である。これらの遺物のうち大和型瓦器鉢、瓦質羽釜、瓦質摺鉢は周溝の比較的上層から出土していることから、第2次基壇周溝の時期は13世紀代に掘削され、15・16世紀まで存続したと考えたい。

第2次基壇整地出土土器 (第34図160~182)

(160~162・166)は土師器皿である。(160・161)は13世紀代である。(163~165・167~175)は瓦器である。(163~165)は皿である。底部外面にユビオサエを施す。(163・164)の内面にはヘラミガキを加える。(167~175)は椀である。口縁部を広くヨコナデし、外面にユビオサエを施す。内面には比較的密にヘラミガキを施す。これらの椀は尾上編年Ⅲ-2~3に相当する。12世紀末~13世紀前半中葉である(176~178)は底部で、内面に平行線状の暗文を加える。(177)はしっかりした高台が付くもので、やや古相を呈する。(180)は中国製青磁碗である。同安窯系である。(181)は東播系須恵器の捏鉢である。森田編年第Ⅳ期第2段階に相当する。12世紀末~13世紀初頭である。(182)は



第34図 C地区基壇整地土・第3層(包含層)出土土器実測図 0 20cm

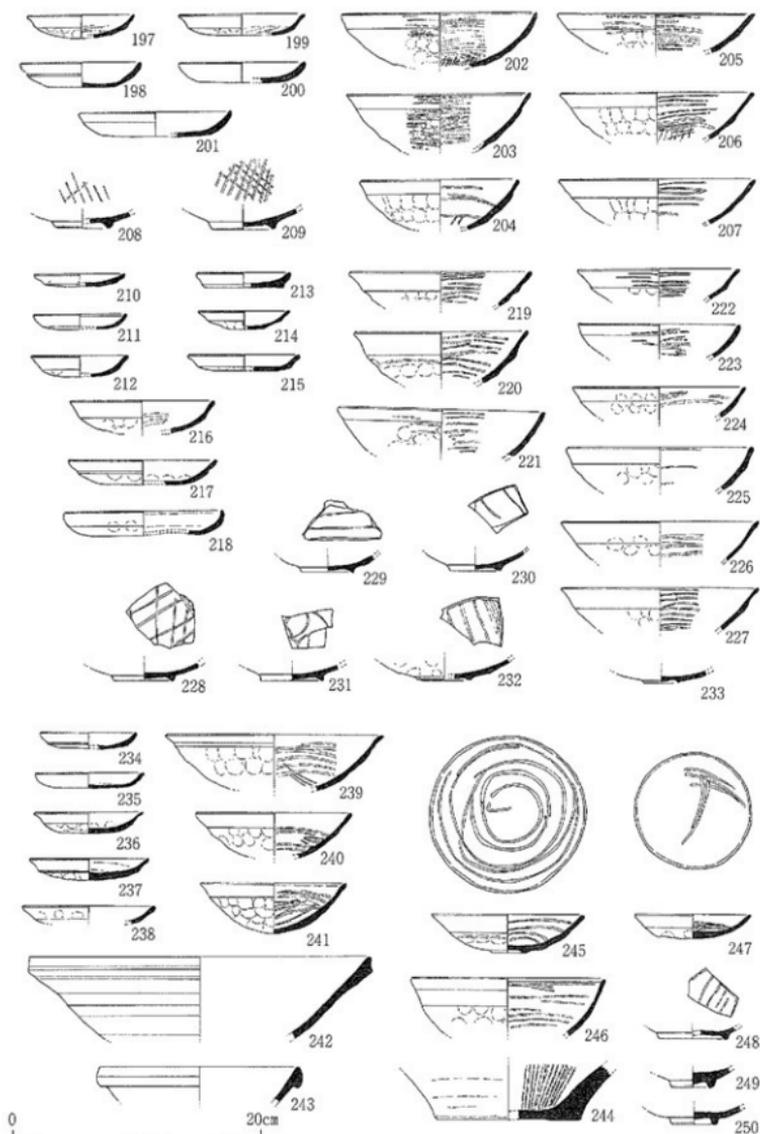
土師質鍋である。内外面にハケを施す。10世紀代である。これらのことから、第2次基壇は13世紀前半～中葉に築造されたものと考えたい。

第1次基壇周溝出土土器(第35図210～233)

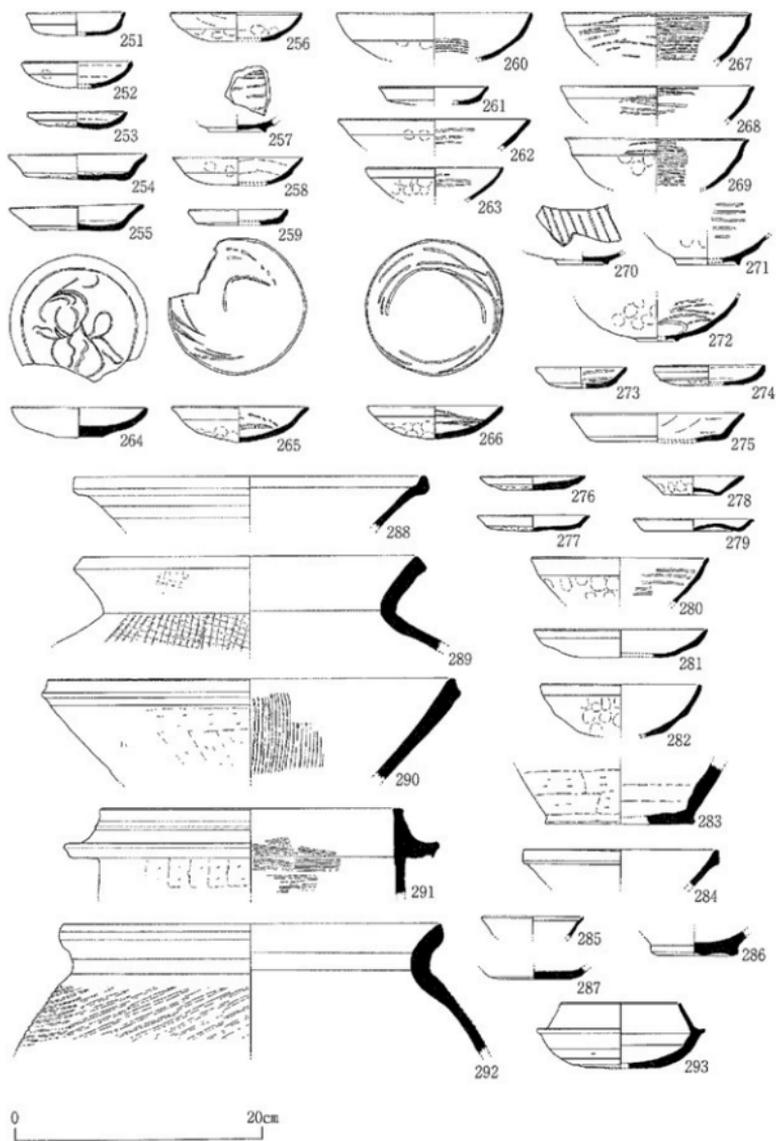
(210・211・213)は土師器皿である。口縁部にヨコナデを施す。(217・218)は中皿である。(216・219～233)は瓦器である。(214)は皿である。底部外面にユビオサエを施す。(216)は小型の椀である。口縁部をヨコナデし、外面にユビオサエ、内面にヘラミガキを施す。(219～233)は椀である。口縁部を広くヨコナデし、外面にユビオサエを施す。尾上編年Ⅲ-2に相当する。13世紀前半である。(228～233)は底部である。(229・230・232)は平行線状、(228)は斜格子状の、(231)は同心円状の暗文を加える。これらのことから第1次基壇周溝は13世紀前半と考えたい。

第1次基壇整地土出土土器(同図197～209)

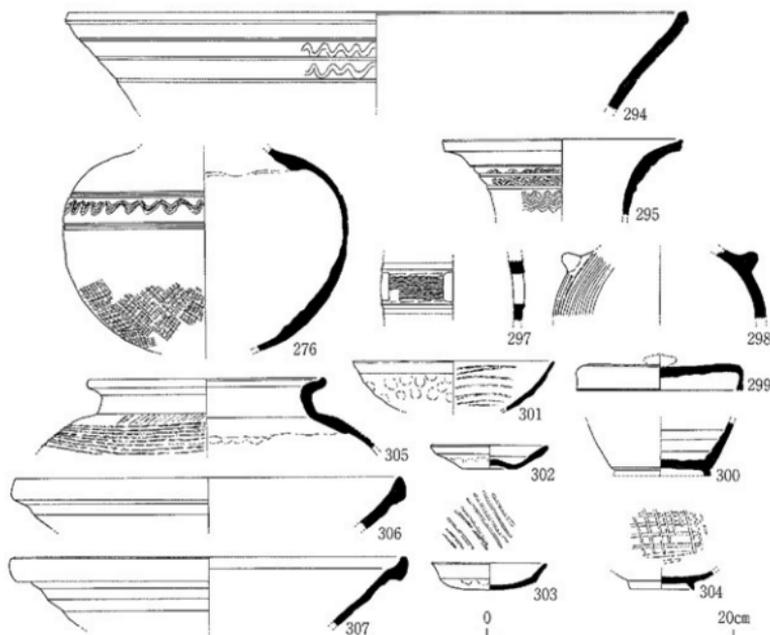
(197～200)は土師器皿である。(197～199)は口縁部にヨコナデを施し、(197～199)は底部にユビオサエを加える。(202～209)は瓦器である。(202～209)は椀である。口縁部をヨコナデし、外面



第35图 第1次基壇周溝·基壇整地土·溝5·6·柱穴14·17出土土器実測図



第36图 第1次基壇周溝・基壇整地土・溝5・6・桂穴14・17出土土器実測図



第37図 D地区第3層（包含層）出土土器実測図

にユビオサエを施す。尾上編年Ⅲ-2期に相当する。13世紀初頭である。(208・209)は底部である。見込みに斜格子状の暗文を加える。

以上、見てきたように、短期間ではあるが、瓜生堂庵寺の基壇から出土する土器が13世紀初頭から13世紀中葉に集中することから、この寺院が上記の時期に営まれていたことを示している。この傾向は隣接地域での調査結果とも一致しており、この時期に後に瓜生堂と呼ばれることになる寺院が存在していたことが明らかになったといえる。また基壇の周溝からは14世紀から16世紀の遺物まで出土していることから、この基壇の周溝が同時期まで痕跡として残り、近世には周辺を区画する溝として存続していたことも物語っている。近世の遺物としては石製品の中で述べるが、五輪塔の石材も出土しており、周溝は後世まで大溝1とともに存在した可能性も考えられよう。

溝1出土土器（第35図249・250）

基壇周溝の直上で検出された近世の溝である。(249・250)は李朝の白磁碗である。16世紀代である。

溝5出土土器（第35図227～247）

(234・235)は土師器皿である。(236～241)は瓦器である。(236～238)は皿である。口縁部をヨコナデし、外面にユビオサエを加える。(239～241)は碗である。口縁部にヨコナデ、外面にユビオサエを施す。内面はまばらにヘラミガキを加える。(241)は高台が消滅している。尾上編年Ⅳ-3期に相当する。13世紀末～14世紀初頭である。

溝6出土土器（同図242）

(242)は東播系須恵器の捏鉢である。森田編年第Ⅶ期第2段階に相当する。12世紀末～13世紀初頭である。

ピット14出土土器（同図246・248）

(246)は瓦器碗である。(248)は底部である。

ピット17出土土器（同図245・247）

(245)は瓦器碗である。見込みに同心円状の暗文を加える。(247)は皿である。

D地区井戸2（第36図251～271）

(251～256・259・261)は土師器皿である。13世紀代である。(254・255)は口縁部が僅かに折れ曲がるものである。14世紀代である。(254・255・261)は中皿である。(259)は14世紀代である。(260・262・263・265～271)は瓦器碗である。口縁部をヨコナデし、僅かにヘラミガキを加える。内面は密にヘラミガキを加える。尾上編年Ⅲ-3期までのものが主体を占める。(264)は同安窯系白磁皿である。口縁部に煤が付着していることから燈明皿として使われたと考えられる。

土贖1出土土器（同図272）

(272)は瓦器碗である。外面にユビオサエ、内面にヘラミガキを加える。

土贖2出土土器（同図273～279）

(273)は瓦器皿である。(274～279)は土師器皿である。(275)は中皿である。14世紀代である。

溝5出土土器（同図289～291）

(289・290)は土師器皿である。(289)はヘソ皿である。14世紀代である。

溝6出土土器（同図280～284・289～292）

(281)は土師器皿である。(280・282)は瓦器である。外面にヨコナデを施し、ユビオサエを加える。(283)は擂鉢の底部である。(284・286)は中国製白磁碗である。(284)は横田・森田編年Ⅷ期第2段階に相当する。14世紀代である。(289)は須恵器の大甕である。亀山焼の可能性がある。(290)は瓦質擂鉢である。(291)は瓦質羽釜である。16世紀代である。(292)は和泉型瓦質甕である。16世紀代である。

C地区包含層出土土器（第34図183～196）

(183)は土師器皿である。外面にユビオサエを施し、口縁部は強くヨコナデする。ヘソ皿である。14～15世紀代である。(184)は朝鮮製白磁皿である。(185～192)は中国製白磁碗である。横田・森田分層Ⅳ-2類である。(191・194)は中国製青磁碗の底部である。龍泉窯系である。(193)は青磁碗の底部である。(195)は丹波焼擂鉢である。16世紀以降である。(196)は常滑焼甕の底部である。

D地区包含層出土土器（第37図294～307）

(294～298)は古墳時代の須恵器である。(294)は大型の器台である。波状文を巡らす。(295)は壺である。外面に波状文を施す。(296)は壺胴部である。外面にタタキを加え、沈線文と波状文を巡らす。(297)は器台である。四方に方形のスカシがある。波状文を施す。(298)は壺瓶である。(299・300)は奈良時代の須恵器である。(299)は蓋、(300)は壺の底部である。(301・303・304)は瓦器である。(301)は碗である。口縁部をヨコナデし、外面にユビオサエを施す。内面にヘラミガキを施す。(303)は皿である。見込みに平行線状の暗文を加える。(315)は見込みに斜格子文を施す。(305～307)は東播系須恵器である。(305)は壺である。外面にヨコハケを加える。(306・307)は捏鉢である。(306)は森田編年Ⅷ期第1段階、(307)は同第2段階である。13・14世紀代である。

瓦類 (第38～40図1～20)

出土した瓦の種類は、軒平・軒丸・鬼・平・丸・道具瓦であり、総量はコンテナ4箱分である。軒平・軒丸・鬼・道具瓦はすべて、平・丸瓦に関しては代表的なものを報告する。出土地点は、包含層出土の遺物であるため記載しない。

軒平瓦

(1) は内区の厚さ2.7cm、上外区の厚さ1.2cm、下外区の厚さ0.8cm、脇区幅1.5cmを計る連珠紋軒平瓦である。瓦当周縁をヘラケズリし、瓦当面には離れ砂が付着する。平瓦の凹凸面に離れ砂が付着し、ナデ調整を施している。顎の形態は浅顎の段顎で、顎の付け根に凹型台を使用した痕跡が残る。色調は灰黄色を呈し、胎土中に1～2mm程度の多量の石英、雲母、1～2mm程度の中量の長石、赤色砂粒を含む。鎌倉時代前期に属する。(2) は内区の厚さ1.6cm、上外区の厚さ1.0cm、下外区の厚さ1.0cm、脇区幅0.7cmを計る連珠紋軒平瓦である。瓦当貼り付けによって接合されるが、キザミ目を入れるなど顎と平瓦の接合面の詳細は不明である。瓦当の上縁部分および顎の後縁部分を面取りしている。平瓦の凸面はタテ方向の板ナデで、凹面はナデ調整する。色調は青灰色を呈し、胎土中に1～2mm程度の石英、1～2mm程度の中量の長石、2～3mm程度の灰色砂粒を含む。鎌倉時代前期に属する。

軒丸瓦

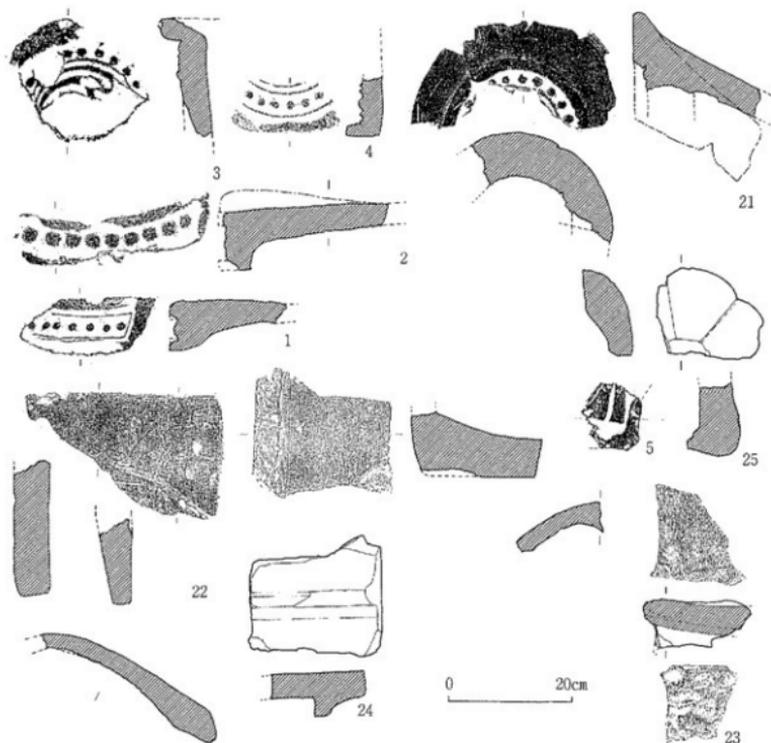
(3) は左巻きの巴紋軒丸瓦である。外縁は直立縁。瓦当側面はヘラケズリを施し、瓦当裏面はナデ調整する。色調は明黄褐色を呈し、焼成は良好、胎土中に微小の石英、長石が少量、赤色砂粒を中量含む。室町時代前期に属する。(4) は巴紋軒丸瓦。巴紋と珠紋の間である内区内縁に圏線がめぐる。瓦当裏面の調整はナデで一部にユビオサエが残る。丸瓦との接合法方法は不明である。色調は暗青灰色を呈し、いぶしが良好にかかっている。室町時代前期に属する。

鬼瓦

(5) は丸瓦に接する鬼瓦の「齒」の部分にあたる。縦5.9cm、横4.9cm、厚さ4.0cmを計る。瓦当面の周縁はヘラケズリで調整し、瓦当裏面と側面は全体をユビナデして仕上げる。色調は灰色を呈し、胎土中に長石を中量、微細の石英を多量を含む。焼成は良好である。平安時代後期に属する。

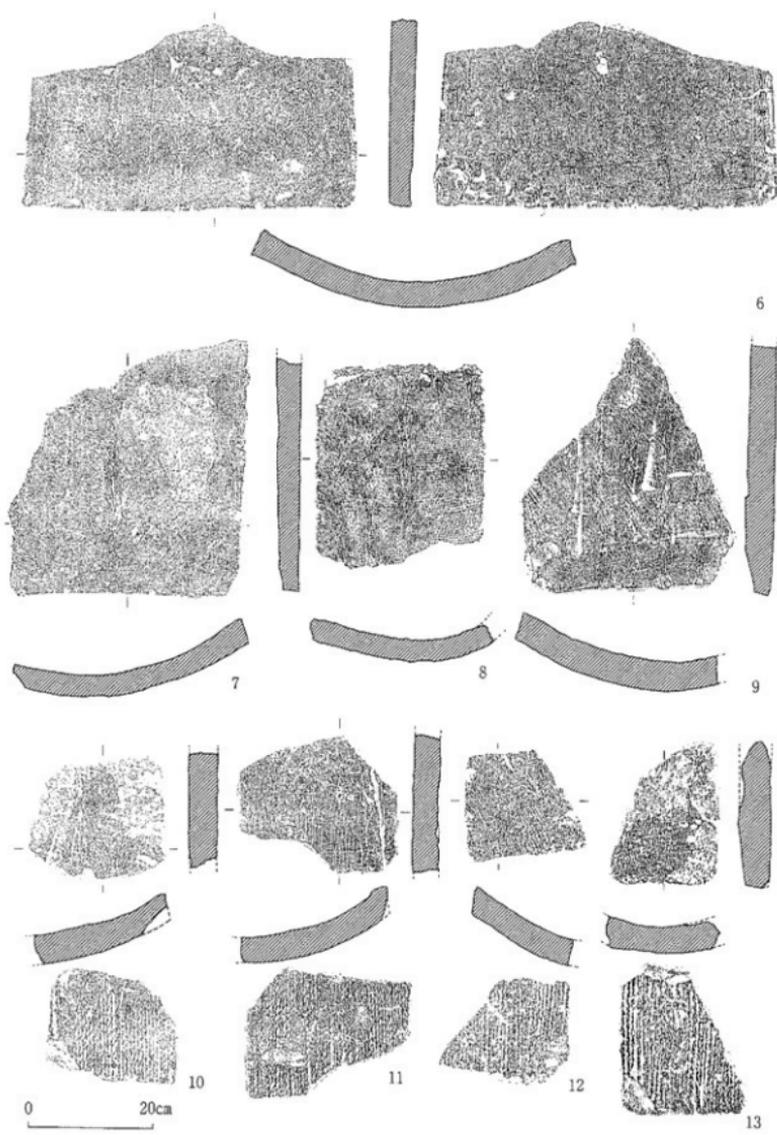
平瓦

(6) は現存する長さは縦16.2cm、横26.5cm、厚さ5.9cmを計る。一枚造りの瓦で、凸面・凹面ともに板ナデ調整を施す。凸面一部にユビナデとユビオサエの痕跡が認められる。色調は黒褐色を呈し、凹面に厚く煤が付着する。焼成はやや軟質で、胎土中に石英、0.7mm～1cmの暗褐色または灰色砂粒を含む。(7) は現存する長さは縦19.1cm、横18.7cm、厚さ6.5cmを計る。凸面をハケ状工具で、凹面を斜め方向のヘラケズリと板ナデで調整する。側面と端面および凹面側の端縁にヘラケズリを施す。また凹面側に2次焼成をうけた痕跡がある。色調は暗青色を呈し、焼成は硬質で、いぶしが良好にかかっている。胎土中に石英、長石、チャート、7mm程度の灰色砂粒を多量を含む。(8) は現存する長さは縦16.8cm、横14.6cm、厚さ1.8cmを計る。凸面はナデ調整、凹面に横骨痕と1cm角中に縦糸横糸の本数が7～8本の布目が残る。凹面もナデ調整を施すが、狭端面をヘラケズリする。側面もヘラケズリを施す。凹凸面一面に離れ砂が付着している。色調は浅黄色を呈し、焼成はやや軟質で、胎土中に1～2mm程度の多量の石英、長石、微小の雲母を含む。(9) は現存する長さは縦20.6cm、横16.5cm、厚さ6.3cmを計る。凸面は縄目タタキで叩き締めた後、斜め方向にハケメを施す。凹面は縦糸横糸の本数が10本前後の布目残り、ハケメ状工具による斜め方向の調整を行う。凹面側面縁をヘラケズリする。凹凸面両面に離れ砂が少量、付着している。色調は暗青灰色を呈し、いぶしは良好。胎土中に石英、長石、雲母、4mm×10mmの花崗岩を含む。(10) は現存する長さは縦8.7cm、横11.6cm、厚さ5.8cmを

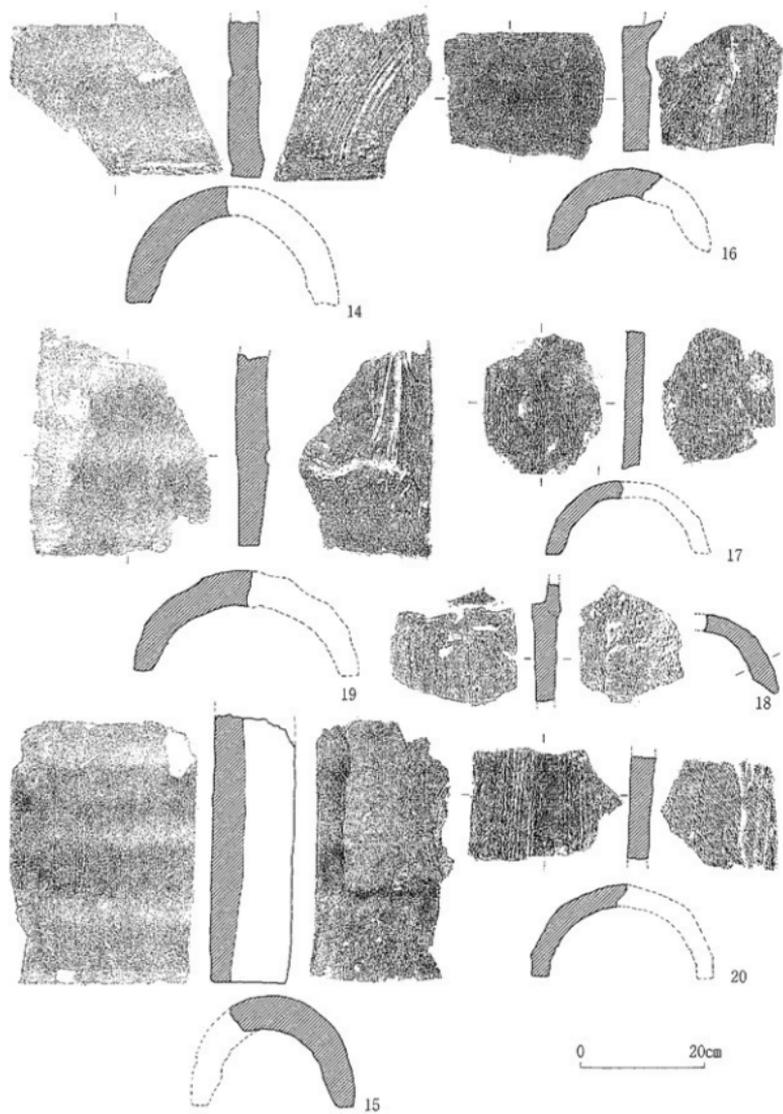


第38図 第3層（包含層）出土瓦実測図（1）

計る。凸面は縄タタキで叩き締めた後、一部に板ナアを施す。凹面は縦糸横糸の本数が7～9本の布目が残る。色調はにぶい褐色を呈し、胎土中に石英、2～5mm程度の長石を含む。(11)は現存する長さは縦11.1cm、横11.3cm、厚さ6.5cmを計る。凸面は縄タタキで叩き締めた後、一部ユビオサエを施す。凹面に1cm角中に縦糸横糸の本数が7～8本の布目が残る。また二次利用した際に側面のヘラケズリ部分をあらたに削っている。色調は暗紫灰色を呈し、胎土中に石英、長石、5mm～1cmの雲母、花崗岩を含む。(12)は現存する長さは縦7.3cm、横8.2cm、厚さ6.3cmを計る。凸面に縄タタキ痕が残り、凹面は縦糸横糸の本数が6本前後の布目の上から、ハケメ状工具による斜め方向の調整を行う。側面はヘラケズリするが一部に未調整部分が残る。凹凸面両面に離れ砂が付着している。色調は灰白色を呈し、胎土中に極微量の長石、石英、雲母を含む。(13)は現存する長さは縦10.2cm、横4.4cm、厚さ3.0cmを計る。凸面に縄タタキ痕、凹面に縦糸横糸の本数が6本前後の布目が残る。凹面は布目の上からヘラケズリし、側縁をナデ調整している。離れ砂は凸面側のみ付着している。色調は暗青灰色を呈し胎土中に2mm以下の微量の石英、長石、多量の黒色粒子を含む。



第39圖 第3層(包含層)出土瓦甓測圖(2)



第40图 第3层(包含层)出土瓦实测图(3)

丸瓦

(14) は凸面はナデ調整で端部付近に板状工具を押し当てたような痕跡が残る。凹面は布目の上から粗いハケ状工具でナデ、一部に板ナデを施す。また凹面側に2次焼成をうけた痕跡が残る。端面と凹面の側面にヘラケズリを施す。色調はにぶい褐色を呈し、胎土中に5mm程度の微量の長石を含む。(15) は凸面に縄目タタキが観察されるが丁寧なタテ・ヨコ方向のナデによりタタキ板の痕跡が消されている。凹面に布目が残る。側縁と凹面側の広端縁、側面にヘラケズリを施す。また端面に離れ砂が付着する。色調は灰色を呈し、焼成は硬質で、胎土中に0.1~0.2cm程度の少量の石英、2~3mm程度の中量の長石を含む。(16) は有段式丸瓦。ただし玉縁部分は欠損している。凸面は縄目タタキのあと丁寧なヘラミガキを施す。凹面に布目が残るが、一部にハケ状工具によるナデがみられる。凹面側の側面と側縁はヘラケズリの後ナデを施す。色調は明青灰色を呈し、焼成は良好でいぶしがかかっている。胎土中に3~5mm程度の微量の石英、長石、暗褐色砂粒を含む。(17) は凸面は縄目タタキの上からナデ調整し、凹面に布目が残る。側面はヘラケズリの後ナデ調整し、側縁にヘラケズリを施す。色調は青灰色を呈し、胎土中に少量の石英、微細の長石、灰色砂粒を含む。焼成は良好でいぶしがかかっている。(18) は有段式丸瓦。ただし玉縁部分は一部欠損している。凸面にタタキ板などの痕跡は確認されず、ナデ後に丁寧なミガキが施されている。玉縁部分の頸部凹面はヨコ方向のナデ調整で体裁を整えている。凹面に布目が残る、部分的にヘラを押し当てたような痕跡が観察できる。凹面側の側縁は分割後にナデを施して分割界線を消している。色調は青灰色を呈し、胎土中に微量の石英、長石、0.5mm程度の黒色砂粒、5mm程度の凝灰岩状の砂礫を含む。焼成は良好でいぶしがかかっている。(19) は凸面は板ナデ調整で、凹面に布目痕が残る、側面と端面はヘラケズリを施した後ナデでいる。また局部的にヘラケズリやハケ状工具によるえぐりが認められる。色調は明青灰色を呈し、胎土中に3mm程度の少量の石英、長石、微量の雲母、青色砂粒を含む。(20) は凸面は縄目タタキのあとナデを施す。凹面は縦糸横糸の本数が8本前後の布目残り2次焼成を受けた痕跡が残る。色調は明褐色を呈す。胎土中に微量の石英、長石、花崗岩、5~6mm程度のチャート、赤色粒子を含む。

鳥衾瓦

(21) は内縁に珠紋を飾る鳥衾瓦の軒丸瓦部である。内区幅1.4cm、外縁幅4.0cm、外縁高1.0cmを計る。瓦当面の外縁はナデ調整、内縁に離れ砂が付着している。丸瓦凸面は板ナデ調整を施す。色調は暗色を呈し、胎土中に1~2mm程度の少量の石英、1~2mm程度の中量の長石、微細の雲母、2~3mm程度の白色砂粒を含む。焼成は良好である。(22) は鳥衾瓦の平瓦部で、現存する長さは縦が10.1cm、横16.2cm、厚さ10.1cmを計る。凸面はタテ方向の板ナデで調整するが、広端面から2cm程度にヨコナデを施す。凹面はヨコ方向のナデ調整により布目を丁寧に消す。凹面側の広端部にケズリで調整した際の2条の工具痕が残る。色調は灰黄色を呈し、胎土中に2~3mm程度の少量の石英を含む。焼成は良好である。(23) は鳥衾瓦の軒丸瓦部に続く部分にあたり、現存する長さは縦が8.8cm、横7.0cm、厚さ3.8cmを計る。凸面はナデ、ヘラナデ、ミガキを施し、凹面にユビオサエ痕が残る。色調は青灰色を呈し、胎土中に長石、微細の石英を微量含む。いぶしがかかり、焼成は非常に良好である。

滑り止め瓦

(24) は凸面の棧が平瓦の滑り止め部分にあたる。現存する長さは縦7.4cm、横10.6cm、厚さ5.4cmを計る。凸面は板ナデで調整し、滑り止めの貼り付け部分にユビオサエの痕跡が残る。凹面は丁寧な板ナデ調整を施す。色調は暗青灰色を呈し、胎土中に微細の黒色粒子をやや多く含む。

用途不明瓦

(25) は道具瓦の一部と思われるが用途不明である。

石製品 (第41図1～16)

C地区大溝1・D地区溝3などから砥石・叩き石・碁石・五輪塔(地輪)などが出土した。

石鍋

(1)はC地区大溝1から出土し、口径16.8cm、重さ151gを測る滑石製石鍋である。体部は緩く内湾し、水平な口縁端部にかけて厚みを増す。口縁端部から1.2cm下がりを削り出す。体部外面はケズリを施し、内面は丁寧に磨かれている。破断面を面取りしていることから温石などに二次利用していると考えられる。

砥石

(2～13)は砥石である。(2・4・7・12)はC地区大溝1から出土している。(2)はやや粗い研ぎ面を1面持つ。残存長9.4cm、残存幅6.8cm、残存する厚さ5.7cm、重さ315gで、色調は青灰色である。下面は大きく割れている。(4)はやや滑らかで僅かに内湾する研ぎ面を1面持つ。残存長5.9cm、残存幅10.4cm、厚さ4.9cm、重さ405gで、色調は暗紫灰色である。上部は欠損している。(7)は4面を平滑な研ぎ面とし角柱状をなす。上下端とも欠損しており、被熱した痕跡を残す。残存長4.8cm、幅2.9cm、厚さ2.4cm、重さ55gで、色調は灰白色である。(12)は石鍋を転用している。残存長10.1cm、幅3.7cm、厚さ2.9cm、重さ218gで、色調は紫灰色である。口径が大きい石鍋の内面を研ぎ面としている。口縁端部と外面は粗いケズリ痕を残す。欠損する部分を除き二次焼成を受けている。(3)と(5)はC地区落込2の出土である。(3)は3面を研ぎ面とし、非常に滑らかである。下端は欠損している。残存長5.9cm、幅3.7cm、厚さ2.6cm、重さ74gで、色調は淡黄色である。(5)は滑らかな内湾する面とやや粗い平坦な面を研ぎ面としている。一部欠損しているがほぼ使用時の大きさを保つ。長さ10.3cm、幅9.1cm、厚さ3.9cm、重さ399gで、色調は青灰色である。一部被熱している。(8)はC地区中世包含層から出土している。全ての面を研ぎ面とし滑らかである。残存長8.1cm、残存幅4.8cm、厚さ1.9cm、重さ80gで、色調は明緑灰色である。持った感じが非常に軽い。(6)はC地区瓜生堂薬師基壇地層から出土した。上面を使用面としている。割れた面にも熱を受けた痕跡を残す。残存長10.5cm、幅6.8cm、厚さ3.4cm、重さ255gで、色調は青灰色である。(9)はC地区中世包含層から出土した。上面と左側面を研ぎ面とし、左側面はやや滑らかであり、上面は粗くあまり使用されていないと思われる。残存長6.7cm、幅9.0cm、厚さ4.8cm、重さ344gで、色調は淡黄色である。(11)はC-2区の先行トレンチから出土した。大きく欠けているが上面に2面の研ぎ面を持つ。残存長3.0cm、残存幅6.5cm、厚さ5.6cm、重さ155gで、色調は灰白色である。(10)はD地区先行トレンチから出土した。4面と角の一部を滑らかな研ぎ面としている。割れ面以外は被熱している。残存長5.9cm、幅3.7cm、厚さ2.6cm、重さ357gで、色調は灰白色である。

擦石

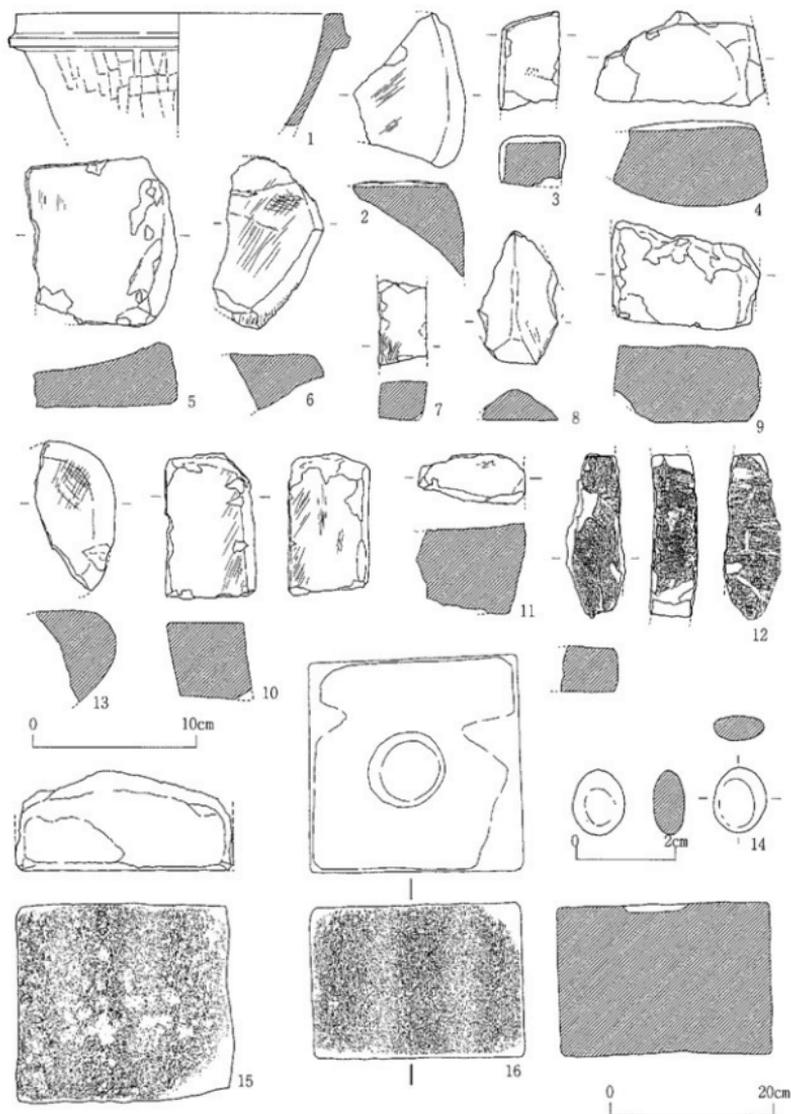
(13)はD地区溝3から出土した擦り石である。左半分を欠損している。残存部分は滑らかで、上面は特に平滑である。一部被熱している。残存長9.2cm、残存幅4.8cm、残存する厚さ5.7cm、重さ265gで、色調はオリーブ灰色である。

碁石

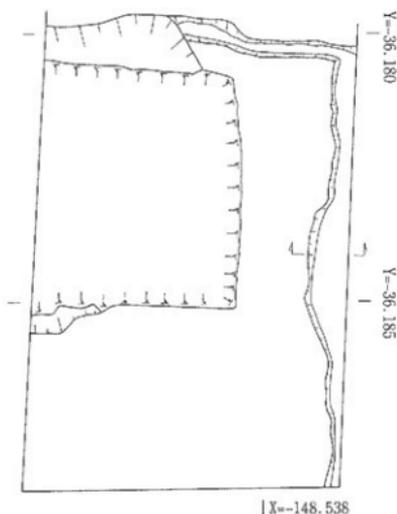
(14)はD地区溝5から出土した碁石である。残存長1.3cm、幅1.1cm、厚さ0.6cm、重さ1gで、色調は暗青灰色である。扁平な円礫を利用している。

五輪塔

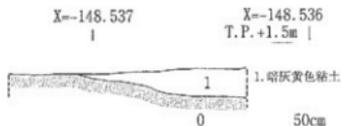
(15)と(16)は五輪塔の地輪で、D区溝3から出土している。(15)は幅26.3cm、残存高12.1cm、奥行き25.4cm、重さ15kgである。上部は大きく欠損しており、表面の剝離も著しい。底面中央には叩打痕を多く残す。(16)は幅25.5cm、高さ19.0cm、奥行き25.0cm、重さ20kgである。上面中央に直径8.5cm、深さ1.1cmの掘り込みを入れる。底面は叩打しわずかに窪ませている。



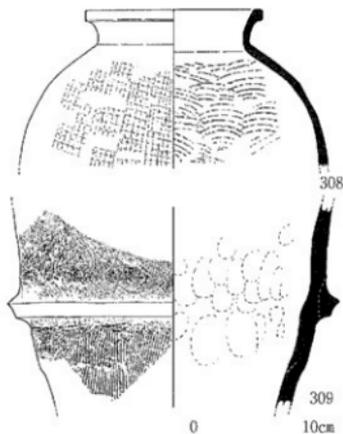
第41図 石鍋・砥石・擦り石・基石・五輪塔実測図



第42図 D地区小型低方墳平面実測図



第43図 小型低方墳周溝土層断面実測図



第44図 小型低方墳周溝出土土器実測図

(2) 古墳時代の遺構と遺物

遺構

遺構は、中世遺構と同一面上で小形低方墳の周溝と考えられる溝と古墳時代前期の井戸を各1基検出した。出土遺物の量に比して、遺構は少なく大半の遺構が中世段階で削平を受け消滅したものと考えられる。

小型低方墳 (第42・43図)

D地区東端で小型低方墳の周溝と思われるL字に巡る小規模な溝を検出した。

溝は、大溝2の東で南にほぼ直角に折れ曲がる。東西方向の溝の北端は調査区外に延び、南側に延びる溝は途中攪乱によって削平されている。従って本来の形状は確認できていない。幅約1m以上、深さ約40cmで溝内の黒土は茶灰色シルト質粘土である。東西に延びる溝の中央付近から須恵器の壺1点、埋土から円筒埴輪などが出土した。出土状況からみて原位置からは移動していると考えられる。

東西方向の溝の規模が1m以上あることと、形状および溝内より埴輪・須恵器が出土していることから見て、墳丘が後世の削平によって旧状を留めていないが、小形低方墳の周溝と考えられる。周辺で埴輪が多数出土していることから古墳群を形成する古墳の中の1基であろう。

出土遺物 (第44~46図)

出土した遺物は、少なく図示できるものは須恵器の壺と埴輪1点である。

須恵器壺 (第44図308) は、丸みをもつ体部から短く外反する口縁部をもち、口縁端部が肥厚する。口径14.8cm、内外面にタタキとその当て具痕が看取される。胎土に砂粒を比較的多く含み焼成は悪く軟質である。6世紀前半に属す。

埴輪 (309) は、円筒埴輪の底部近くの破片である。タガは、断面が崩れた台形を呈する。外面にタテハケ (7条/cm) を施し、内面はユビオサエが見られる。胎土は砂粒を含まず、比較的精良で、焼成は須恵質である。型式からみて伴出した須恵器と同時期の川西福年V期に属すと考えられる。

埴輪 (第45・46図1～39)

後世の溝など包含層中から出土した埴輪の量はコンテナ2個分である。円筒埴輪と朝顔形埴輪がほとんどで形象埴輪は蓋の可能性のあるものが1点見られるだけである。いずれも破片で全形が知れるものはない。

スカシ孔の形は全形を知れるものはないが、残存部が弧状を呈するため円形と考えられる。色調は土師質が茶褐色、須恵質は灰色から赤灰色を基調とする。胎土は石英やチャートなどの砂粒を含むが、ほぼ精良な粘土を使用している。黒斑がみられるのは1点、赤彩された可能性のあるものが2点含まれる。

円筒埴輪

(1・2・13)は口縁部である。(1)は口径19.8cm、口縁部と最上段のタガの幅16.2cmで外面にB種ヨコハケ(7条/cm)内面にハケ(7条/cm)を施す。タガは、断面が台形を呈する。焼成は須恵質である。(2)は口径30.4cm、口縁部を強くヨコナデする。内面にハケを施す。焼成は土師質である。(13)は円筒埴輪の口縁部とも見られるが口縁部を強くヨコナデし、外反させ外面に粗いタテハケ(3条/cm)を施すなど少し形態が異なるため形象埴輪の可能性も考えられる。

(3～12)は底部である。(3)は底部径17.1cm、最下段のタガと底部との幅8cmで2段目の外面にB種ヨコハケ(4条/cm)1段目の外面にタテハケ(4条/cm)を施す。タガは、断面が台形を呈する。2段目に円形のスカシ孔が見られる。焼成は土師質である。底部径が出せた(4～8・10・11)は14～15cm前後である。(4～6)は外面に右下がりのハケ(6～10条/cm)を施す。(7)は黒斑が見られる。(8)外面にB種ヨコハケ(6条/cm)を施す。(12)は最下段のタガと底部との幅8.8cmである。(10)は内面に顕著なユビオサエが認められる。(11)の底面に部分的に雑なハケメが残る。焼成は、須恵質の(10)を除き土師質である。

(17～37)は体部である。朝顔形埴輪の体部も含まれている可能性もあるが識別できない。(17・19)にはヘラによる線刻が認められる。外面にB種ヨコハケを施すものとタテハケのみの調整で終わるものがある。内面にハケ(7条/cm)を施す。タガは(27)のように断面が台形を呈するものと(17)のように突出度が低く不整形を呈するものがある。(22)はタガの断面が台形を呈するが他に比べて突出する。(34)はタガの上面にもヨコハケを施し外面に朱が見られることから赤彩されていた可能性が高い。(34)などにスカシ孔の弧状を呈する一端が認められる。焼成は(18・23・25・27・29・28・33・34・35・37)が須恵質である。

朝顔形埴輪

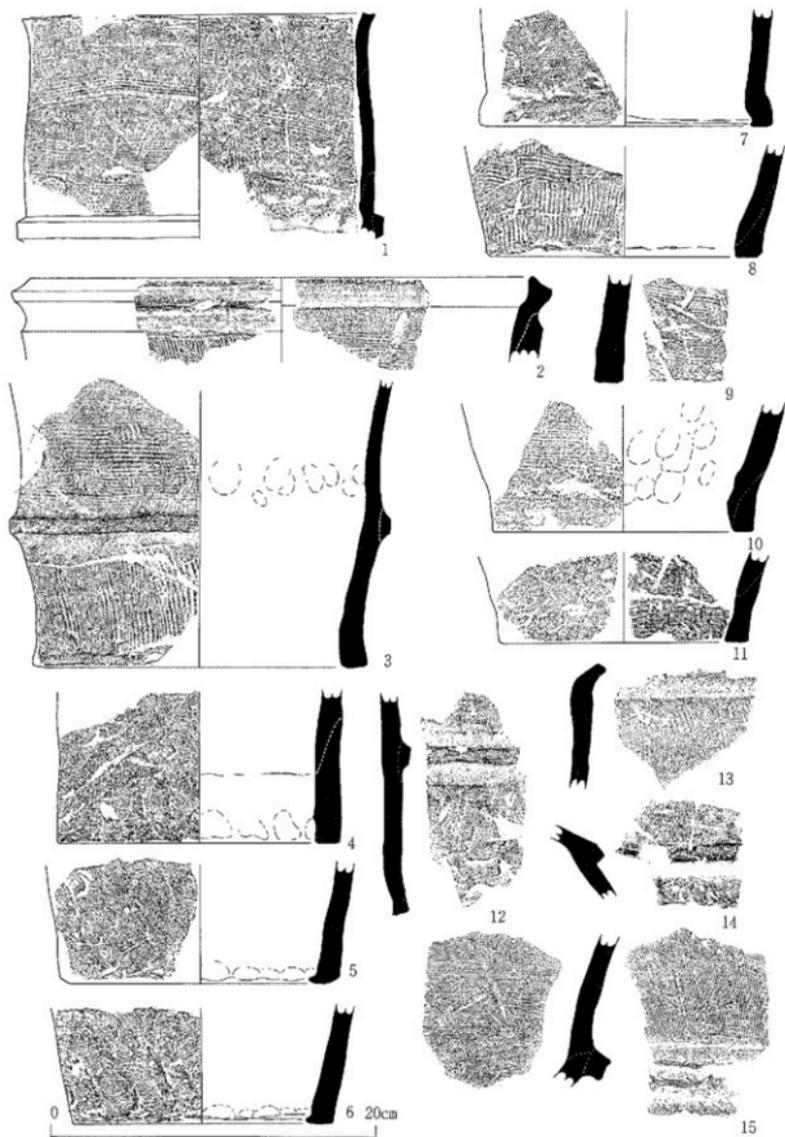
(15・16)は口縁部である。(15)は外面にやや右下がりのタテハケ(10条/cm)内面にヨコハケ(10条/cm)を施す。タガは、断面が台形を呈する。焼成は須恵質である。(16)は外面はナデ、内面にヨコハケ(6条/cm)を施す。タガは、断面がややひしゃげた台形を呈する。焼成は須恵質である。

形象埴輪

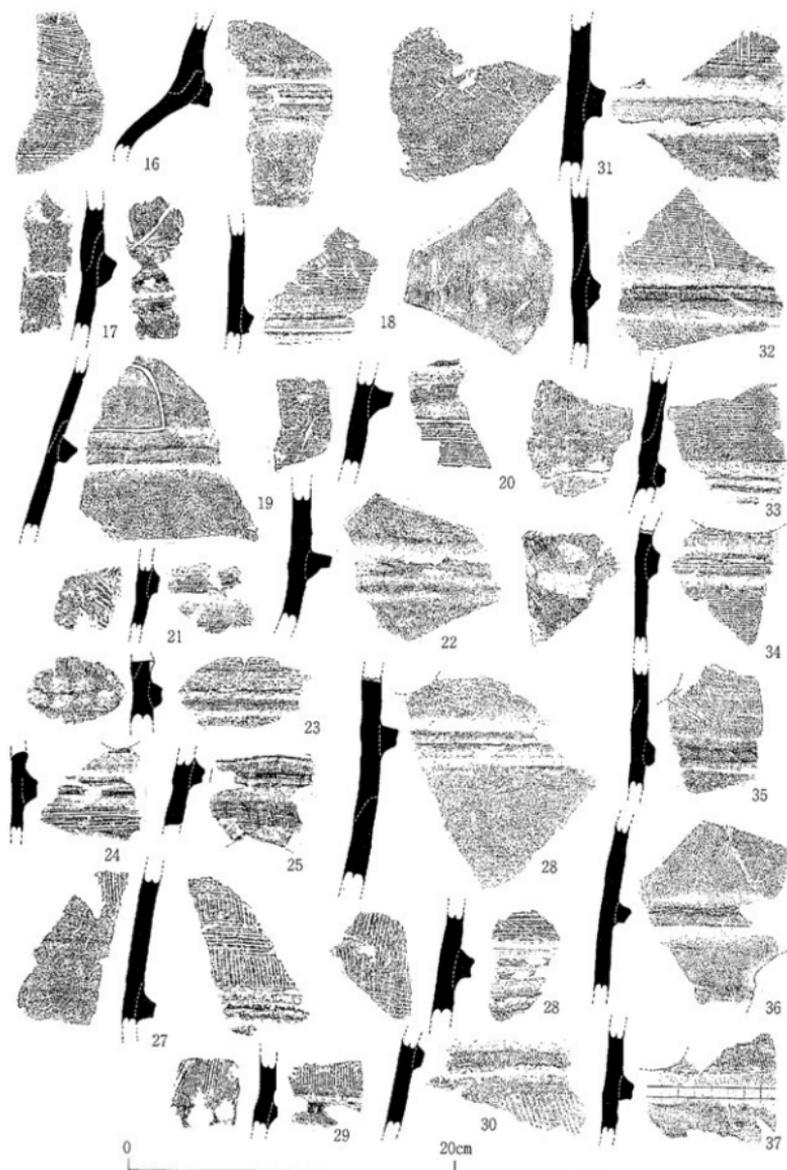
(14)は蓋の可能性がある。調整は内外面とも風化のため不明である。焼成は土師質である。

以上のように、破片のため個々の埴輪の年代を確定するのは困難であるが、黒斑、B種ヨコハケを持つものやタガが崩れ2次調整を省略するもの存在する。おおよそ、これらの特徴からみると、川西編年¹⁾の第Ⅲ～Ⅴ期に相当する。しかしⅢ期に属するものは少なく大半は5世紀中頃から6世紀前半のⅣ～Ⅴ期に属すと考える。

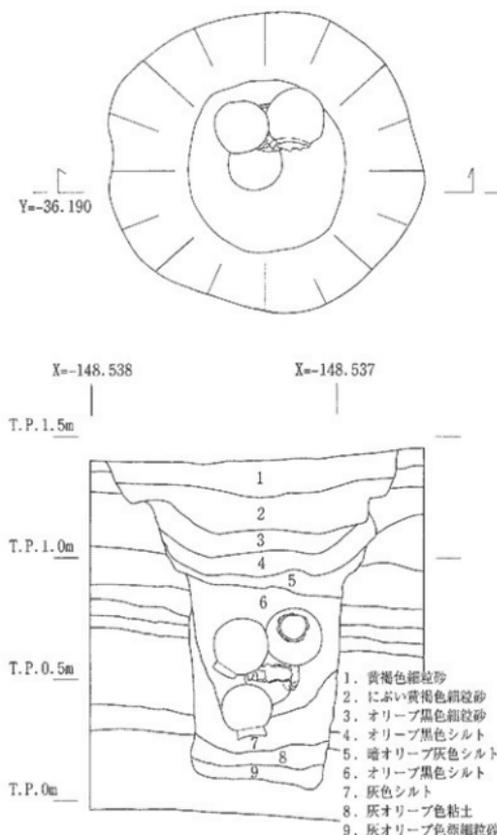
注1) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 1978年



第45图 C地区第3层(包含层)出土埴轮尖测图(1)



第46图 C地区第3层(包含层)出土车轮实测图(2)



第47図 D地区井戸3平面・土層断面実測図

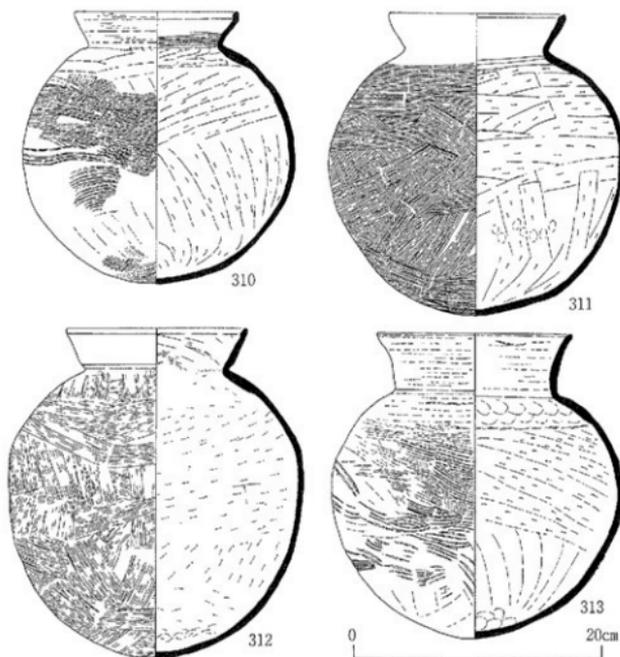
時に後世において竹の棒を用いるいわゆる「うめごろし」に類似するものと思われる。第1～第4層が水平に堆積していることや、棒がさしてあったことなどから、この井戸は徐々に埋まっていったものではなく、廃絶後はすぐに人為的に埋められたものと考えたい。

出土布留式土器（第47図310～313）

(310～313)は完形の布留式土器である。(310～312)は球形状した胴部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。端部は内側に肥厚する。しかしながら(310・311)は(312)に比べ若干肥厚は薄くなっている。(311・312)は外面に丁寧なヨコハケを施し、内面は全面に亘ってヘラケズリを行う。(310)は外面のヨコハケが全面ではなく体部中程に僅かに施されるのみで、(311・312)に比べ比較的新しい様相を呈する。(310)は口径14.4cm、高さ22.0cmを測る。(311)は口径14.0cm、高さ25.2cm、(312)は口径14.4cm、高さ26.4cm、(313)は口径15.6cm、高さ24.2cmを測る。(311・312)の外面全

井戸3（第47図）

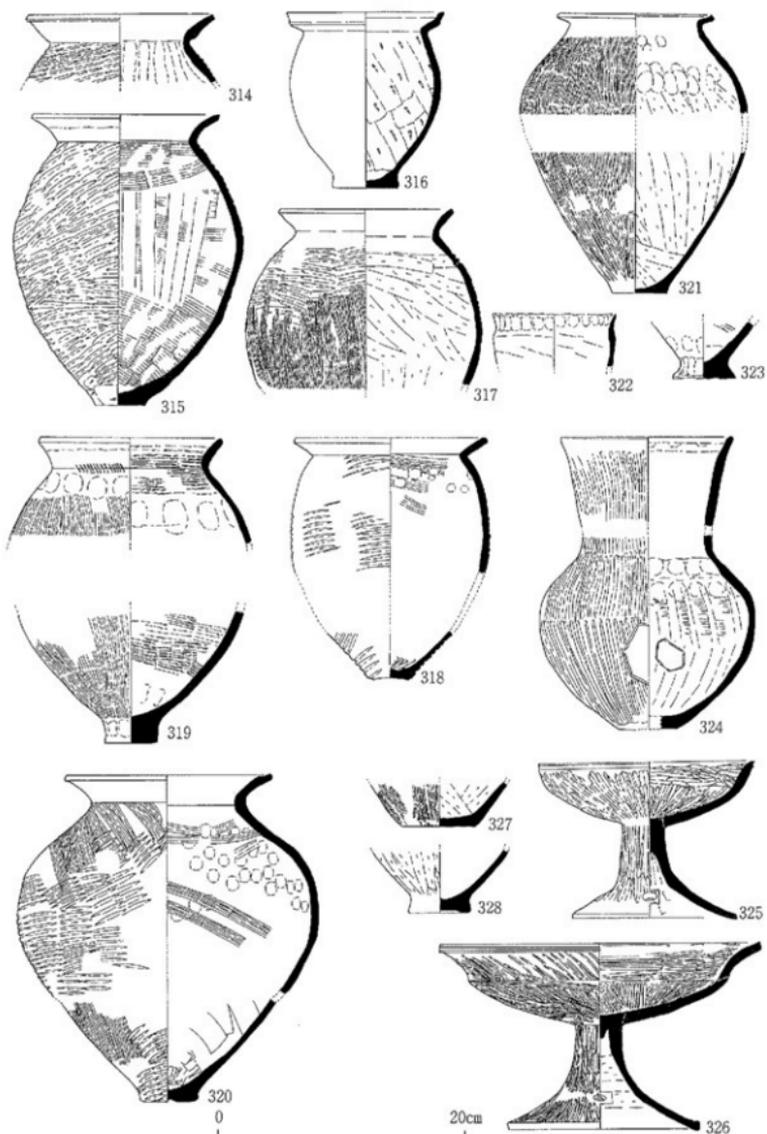
D地区の西側、古墳～中世の遺構面において古墳時代初頭の素掘り井戸を1基検出した。井戸3は平面プランはほぼ正円形を呈し、直径約1.5mを測る。検出当初は同一面で中世の遺構ばかりが検出されていたため、この井戸も中世に属するものと思われた。しかしながら井戸の掘り下げを行ってゆくにつれ、中世の遺物がまったく出土せず、かわりに布留式土器が出土したことから、この井戸が古墳時代初頭のものであることが判明した。その結果この井戸は、上から三段掘りされており、一段目から30cm二段目は上から50cm、底までは上から1.5mを測る。埋土は茶灰色～青灰色を呈する。最底面から約30cm上の青灰色粘土層から、釣瓶として使われたと思われる布留式の甕が4個体出土した。布留式甕はそれぞれが完形を保っており、重なるように埋没していた。この井戸からはこれ以外に遺物は出土していない。また、埋土には直径約2cmの細い棒が直立してさし込まれており、井戸を廃棄させる



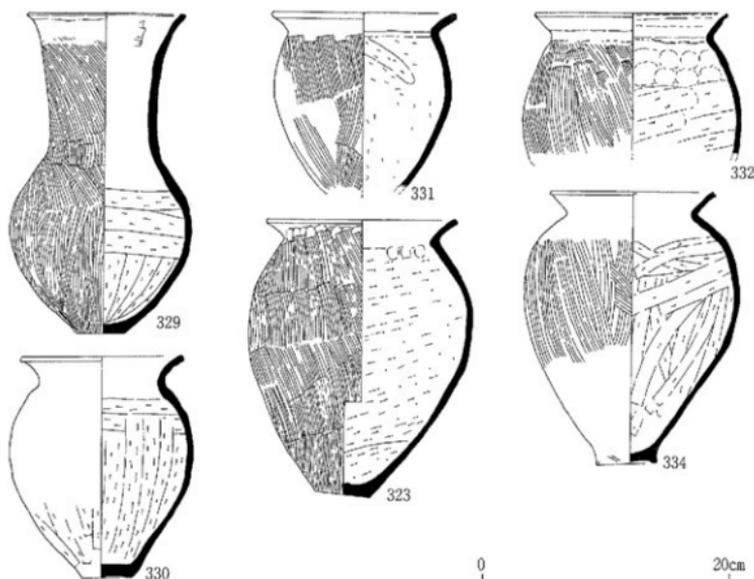
第48図 D地区井戸3出土土器実測図

体にはススが付着することから日常の炊飯に使われていたものが釣瓶として転用されたと考えられる。胎土はそれぞれ淡黄白色を呈する。(310)は口縁部の形態は(312)と異なるものの、外面に粗いヨコハケを施し、それを体部中程のみ残してヨコナデによって消している点。また、内面はヘラケズリを施すが、口縁部下にユビオサエを施す点などから、技法的にはまったく同一の成形が行われたことが考えられる。また(313)の様な外反する口縁部をもつものは布留式土器の中では異質であり、定型化した布留式土器とは言えないものである。この甕に付いては型式学的な検討が必要であろう。

(313)は球形化した体部からゆるやかに外反して立ち上がるものである。口縁部は内外面とも丁寧にヨコナデが施されている。外面は(310)と同様に体部外面に粗いヨコハケを施し、後にナデによって全体の約半分が消されている。内面も底部付近にはユビオサエを施し、体部中程にヘラケズリを行う。口頭部付近にはユビオサエを施す。胎土は黄白色を呈する。(313)は(310~312)とは形態的にも製作技法から見てもまったく異なる甕である。この甕はやはり(311・312)より比較的新しい様相を呈しているものと考えたい。これらの土器群は(310・313)のように外面のヨコハケをナデによって消していることや、(310・311)の口縁端部の肥厚がそれほど厚くないこと、また、(313)のように内面にユビオサエを施し、ヘラケズリが全面に及ばないことなどから、布留2~3式に属するものとして一応の位置付けをしておきたい。



第49图 C·D地区 第10·11层 (灰色粘土②·黑色粘土②) 出土土器实测图 (1)



第50図 C・D地区 第10・11層 (灰色粘土②・黒色粘土②) 出土土器実測図(2)

C・D地区第10・11層 (灰色粘土②・黒色粘土②) 出土土器 (第49・50図)

(314~320) は甕である。タタキを施すもの (314~319)、ハケで仕上げるもの (319・329・331~334)、ナデを施すもの (316・330) がある。このうち (317・320) はタタキの後、タテハケを施している。(318) はタタキの後、ナデによって仕上げる。(320) は底部外面にヘラケズリを行なう。外面にタタキを施すものは、(317) を除いて全て内面にナデとヨコハケを行なう。(317) はヘラケズリを施す。また、外面にナデとタテハケを施すものは、(319) を除いて全て内面にヘラケズリをおこなう。(319) は内面にヨコハケとユビオサエを施す。(330) は生駒西麓産である。(321) は肩が張った胴部から口縁部が短く水平に折れ曲がるものである。胴部全体にタテハケを施した後、底部周辺にヘラミガキを行なう。内面はヘラケズリとユビオサエで仕上げる。胎土は細かい角閃石を含み、器壁は薄い。讃岐地域からの搬入品である。また、(316) は搬入品ではないが、器形の特徴から吉備地域のV-3~4 模式の甕に類似する。(324~329) は長頸甕である。(324) は外面にヘラミガキを行なう。(329) は外面にタテハケを施し、内面にヘラケズリを行なう。端部はヨコナデによって面をもつ。(325・326) は高杯である。(325) は皿状の杯部をもつ。口縁端部にはヨコナデによる凹線文を施す。(326) は杯部から短く外反する口縁部をもつ。口縁端部にはヨコナデによる凝凹線文を施す。双方とも内外面に丁寧なヘラミガキをおこなう。(327・328) は底部である。(327) は外面にタテハケ、内面にヘラケズリを施す。(328) は外面にヘラケズリを行なう。(322・323) は手づくねで造られている。器形は不明である。これらの土器群はタタキを施し、球形化する胴部をもつ甕や、内面にヘラケズリを施すものが多く存在すること。定形化した庄内式の甕がまだ出現していないことなどから、庄内式初頭、北鳥池下層式に併行するものと考えられる。

(3) 弥生時代中期末～後期の遺構と遺物

遺構

配石遺構 (第51・52図)

C地区において第13層(黒色粘土③)から第16層(灰オリーブ色粘土)の3層に亘り、親指大から子牛頭大までの石を用いた配石遺構を多数検出した。配石が行われた場所は、弥生時代中期後半に起きた南海地震の地滑りにより生じた窪地内部が中心である。窪地の肩口付近にあたる5号方形周溝墓が起因する高まりにも後期後半のものが散発的にみられる。各配石遺構の周辺からは焼けた木、供献されたと思われる土器、獣骨、桃の種子、海・淡水産の貝などが出土した。また、地面で火を焚いたと思われる炭層も各所で認められた。配石は、長期間に亘り多数複雑に行われているため、配石の各単位を全て明らかにすることはできなかったが、検出できたうちの代表的な配石遺構について以下説明する。

配石1(第53図) C-3の南壁際、5号方形周溝墓から西に約3m離れた第13層中で検出した。東西約1.8m、南北約1.4mの平面形が方形を呈する範囲に径約12cm前後の礫さ数と径約1~3cm前後の多数の小石が用いられていた。石材はチャートなどである。平面では確認できなかったが、小石の出土状況からみて深さ約10cm、幅約30cm前後の土壌を掘りその中に小石を積み重ねて埋めたと考えられる。配石上およびその周辺に自然木や加工木が折り重なって認められており、2回以上に亘り配石が行われたと考えられる。

自然木には焼けた跡が見られ、東側に集中して認められた。西側では径約1.5~2.5cm前後、長さ約7.5~41cm前後の自然木に焼けた跡が見られ、東側では径約1.5~8.5cm、長さ約7.5~155cm前後の自然木が認められた。淡水産の貝(カラス貝か?)7個体が西側に集中して見られ、自然木と加工木の下に敷き並べた状態で配置されていた。

自然木とは別に二股材が複数配石上で認められた。二股材には焼けた跡がみられなかった。供献土器として祭祀用に作られた壺(第71図511)などが認められた。また、中期後半に属す凹線文を施す鉢も出土したが時期や出土位置から5号方形周溝墓の供献土器を転用した可能性が考えられる。また桃の種子、淡水産の貝(カラス貝か?)などが認められた。この配石の総重量は1181g以上である。伴出した土器と検出層からみて弥生時代後期初頭に配石が行われたと考えられる。

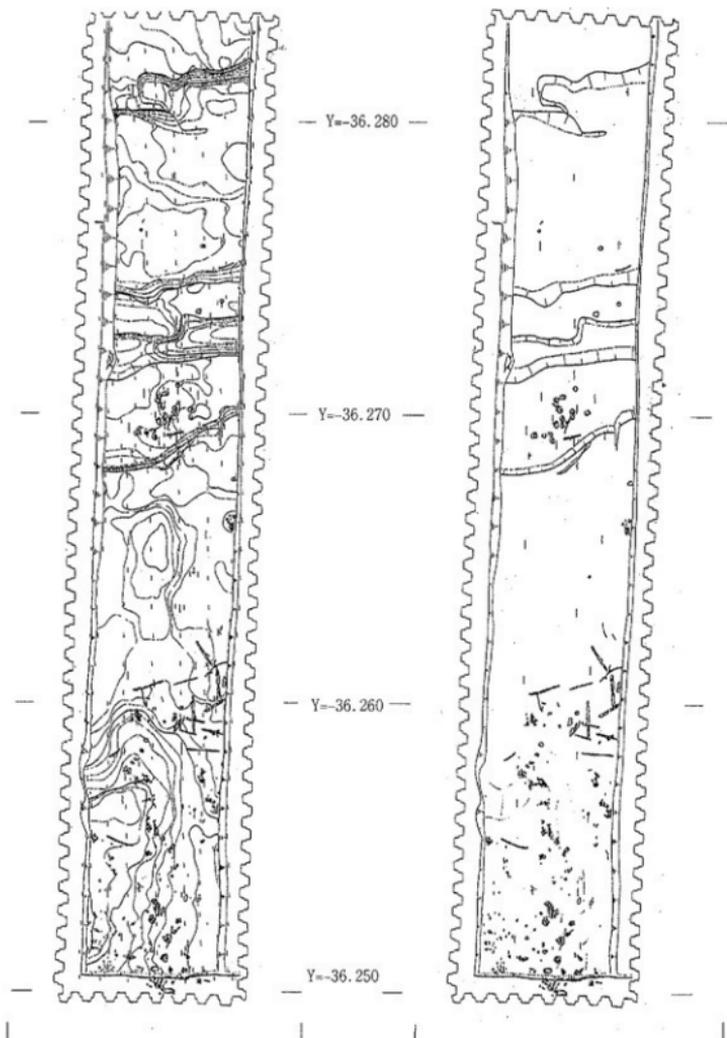
配石2(第54図) C-4の北東部の第13層中で検出された。配石1の約3m北西に位置する。東西約0.4m、南北約0.5mの平面形が楕円形を呈する範囲に径約13cm前後の礫と径約30cm前後の礫が敷き並べた状態で配置されていた。石材は角閃石安山岩・和泉砂岩・流紋岩などである。土器(514)も認められた。また下層からは径約7~22cm前後の礫7個を置いた状態で検出しており、2時期以上に亘り配石が行われたと考えられる。この配石の総重量は11.3kg以上である。土器と検出層からみて弥生時代後期初頭にこの配石行為が行われたと考えられる。

配石3(第55図) C-4・5の中央部の第13層中で検出した。配石1の約5m西に位置する。東西約3m、南北約3mの平面形が不整形を呈する範囲で径約15~35cm前後の礫が散漫に敷き並べた状態で配置されていた。分層出来ないが配石に上下が認められるため2時期以上にわたり行われたと考えられる。下面では上面に比べて小さな石(径約4.5~9cm前後)が多数を占めており、自然木(径約1~2.5cm前後、長さ約3.5~31cm前後)と加工木などが折り重なった状態で認められ、土器(515~518)が数ヶ所にまとまって配置されていた。配石に用いられた石は全体で25個以上である。石材は黒雲母花崗岩・和泉砂岩・流紋岩などである。桃の種子も認められた。

この配石の総重量は、136.0kg以上である。土器と検出層からみて弥生時代後期初頭にこの配石行

| X=148.540

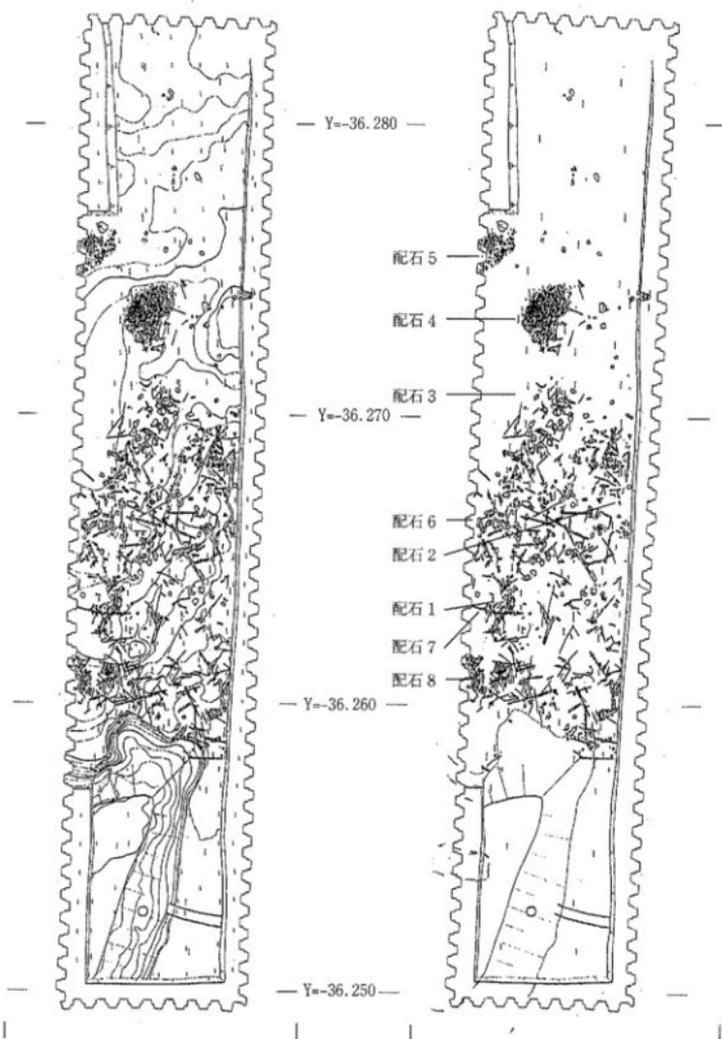
| X=148.530 |



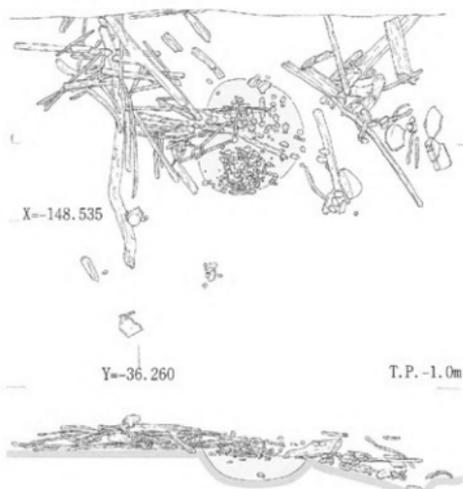
第51图 C地区 第13层(黑色粘土③)上部配石检出状况(1)

x=-148.540

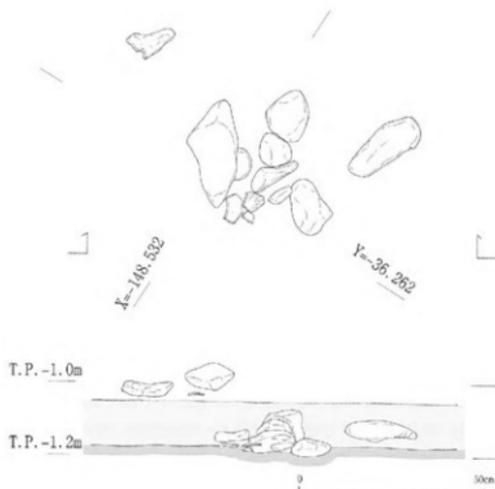
x=-148.520



第52图 C地区 第13层(黑色粘土③)下部配石檢出狀況(2)



第53図 C地区配石1検出状況平面・見通し断面実測図

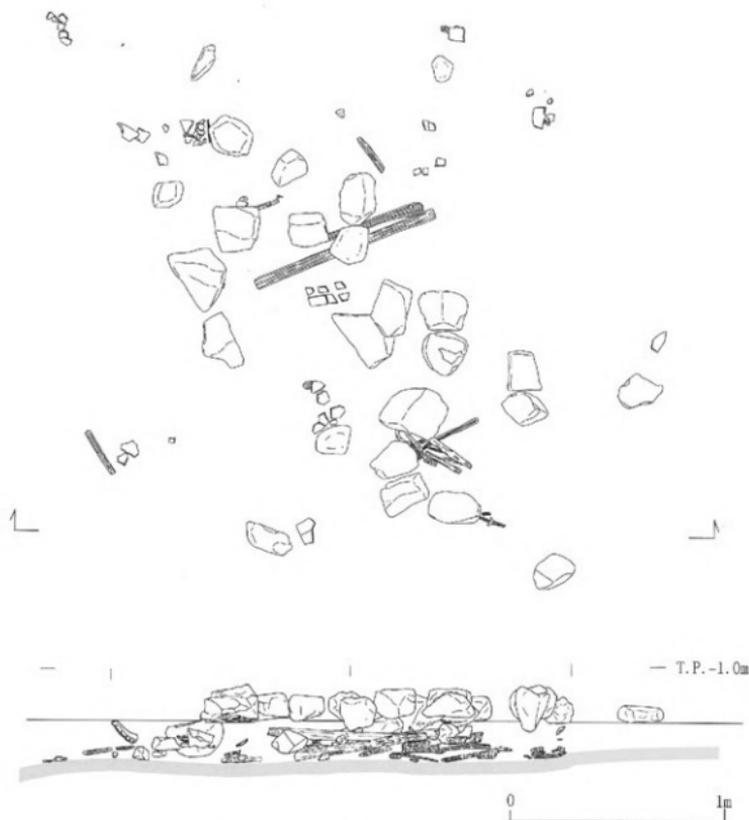


第54図 配石2検出状況平面・見通し断面実測図

為が行われたと考えられる。

配石4(第56図) C-5の中央部西側の第13層中で検出された。配石1の約9m西に位置する。東西約2.3m、南北約1.8mの平面形が不整形を呈する範囲に径約1~12cm前後の小石が薄く積み重ねた状態で配置されていた。小石の上に自然木、加工木を配置し、さらにその上に小石を重ねており、2時期以上に亘り配石が行われたと考えられる。下面の石には上面に比べて大きな石(径約6~12cm)が多数認められた。石材の重量は37.1kgである。先端に焼けた跡がみられる自然木、加工木、桃の種子、土器(522~528)などが認められた。この配石の総重量は36.1kg以上である。土器と検出層からみて弥生時代後期初頭にこの配石行為が行われたと考えられる。

配石5(第57図) C-5・6の南端中央部の南壁内第16層中で検出した。配石4の約1.6m南西に位置する。東西約1.9m、南北約1.3mの平面形が楕円形を呈する範囲に径約40cm前後の礫1点と径約2cm前後の結晶片岩を含む多数の小石と径約12~16cm前後の少数の礫が敷きつめた状態で配置されていた。西端に子牛頭大の礫1点(約38kg)と、南東隅に比較的大きな礫(径約12~16cm前後)がまとまって出土しており、多数を占める径約2cm前後の配石とは時期差が想定されるので、複数回に亘ってこの配石行為が行われたと考えられる。配石の下には横に置かれた状態で武器型木製品が埋められており、配石上より朱塗りの武器型木製品を突き刺された状態で検出した。配石上には桃の種子、自然木、



第55図 配石3 平面・見通し断面実測図

土器 (529~532) などが認められた。

この配石は、中期後半の南海地震の後に再度起きた地震により生じた断層の直上に営まれていた。平面形は確認できなかったが、木剣の出土状況からみて深さ約30cm、幅約60cmの土壌を掘り、その中に鉄剣形の武器型木製品を埋めて配置したと考えられる。埋納の状況を復元した図を第VI章3に図示している。この配石の総重量は11.0kg以上である。これらは弥生時代中期末と考えられる。

配石6 (z第58図) C-3・4の南端中央部の南壁内第16層中で検出した。配石5の約7.5m西に位置する。東西約4.1m、南北約1.4mの平面形が楕円形を呈する範囲に径約4~50cm前後の礫が敷き並べた状態で配置されていた。石材は結晶片岩などである。加工木、自然木、桃の種子、土器 (533~535) などが出土しており、南端中央部に朱塗りの榎の破片が認められた。この配石の総重量は47.4kg以上である。土器と検出層からみて弥生時代後期初頭にこの配石行為が行われたと考えられる。

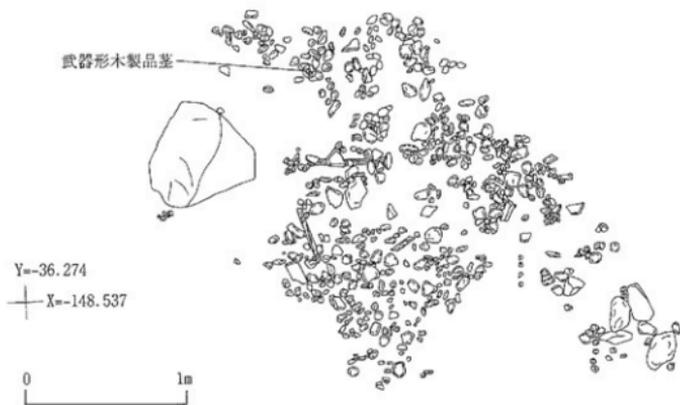


第56図 C地区配石4検出状況平面・見通し断面実測図

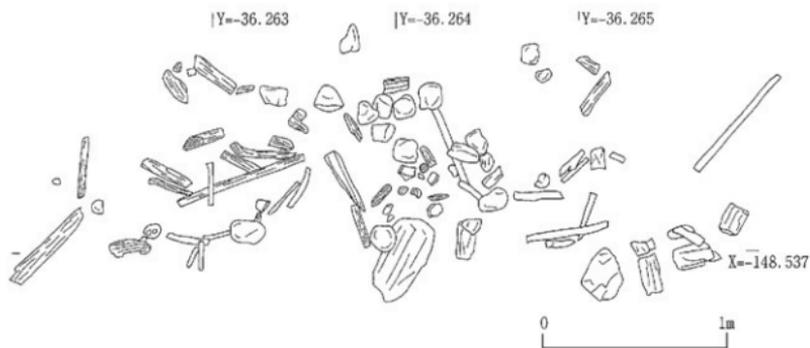
配石7 (第59図) C-3の南端中央部の南壁内第16層中で検出した。配石6の西側に接して分布する。東西約2.1m、南北約1.2mの平面形が楕円形を呈する範囲に径約9~24cm前後の礫3個が置かれた状態で配置されていた。自然木、加工木、土器(536)などが折り重なった状態で認められた。この配石の総重量は12.8kg以上である。土器と検出層からみて弥生時代後期初頭にこの配石行為が行われたと考えられる。

配石8 (第59図) C-2・3の南端中央部の南壁第16層中で検出された。配石7の約1.3m西に分布する。東西約2m、南北約1.2mの平面形が楕円形を呈する範囲に径約3~20cm前後の礫が置かれた状態で配置されていた。石材は結晶片岩などである。自然木、加工木が折り重なった状態で配置されており、桃の種子、土器(532~537)などが認められた。この配石の総重量は988g以上である。土器と検出層からみて弥生時代後期初頭にこの配石行為が行われたと考えられる。

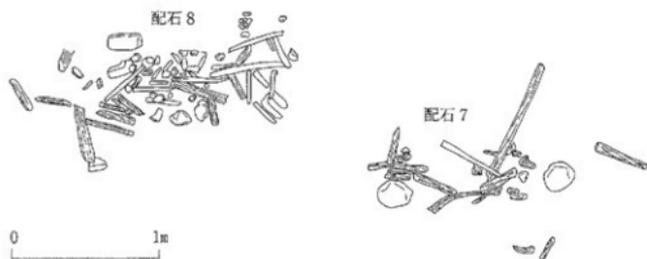
今回検出した配石の大半は、窪地内部に集中していたが、窪地の東側肩口付近にあたる5号方形周溝溝が起因する高まりにも後期後半に1~2点の石を置いた配石がみられた。B地区でも、窪地内部で後期後半の二層付近で庄内期の配石を検出している。時期が下がるに従い、肩口付近で配石行為が行われたことが判明した。また、後期後半から庄内期の配石には祭に使用し終了後、遺棄されたと考えられる土器が集中して出土している。しかし、中期末から後期前半の供獻土器を含む祭に使用された土器は散漫な出土状況を示す。時代により配石の仕方だけでなく祭に使用した土器を含む道具類の遺棄の仕方に変化していることが判明した。



第57图 C地区配石5検出状況平面実測图



第58图 C地区配石6検出状況平面実測图



第59图 C地区配石7・8検出状況平面実測图

遺物

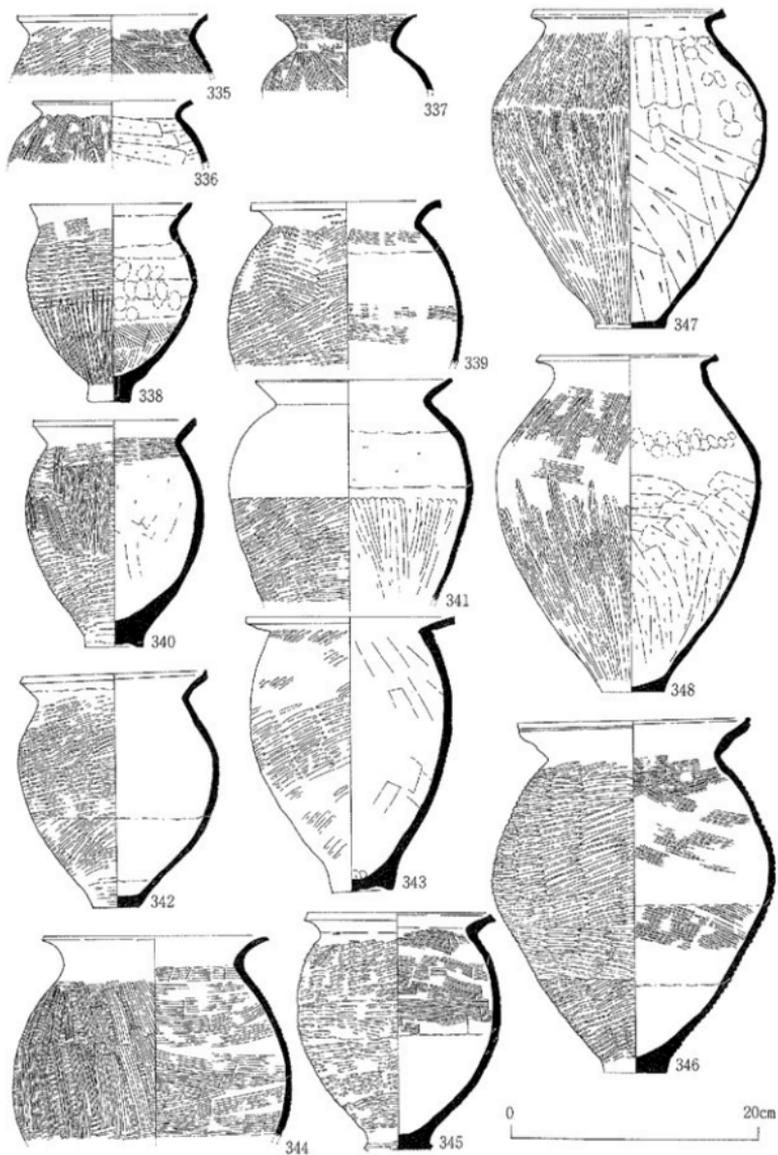
C地区第11層(黒色粘土②)土器溜まり出土土器(第60・61図335~356)

黒色粘土②からは弥生時代後期の土器がまとまって出土した(335~348)は甕である。そのうち、(335・336・338~346)はタタキによって成形するもので、やや球形化した胴部からくの字に折れ曲がる口縁部を持つ。端部は357が凹縁、他は面取りする。タタキ目の方向からそれぞれの甕は三段階の分割成形技法を守っていることが解かる。これらのうち、(338)は胴部下半を、(340・344)は胴部上半にそれぞれタテハケを施す。また、(341)は胴部上半を、(343)は全体に亘ってナデを施し、タタキを消している。また、内面はヨコハケやナデを施すものが多い。胎土は342、345、346が生駒西麓産である。これらタタキを施す甕以外に外面にタテハケ、内面にヘラケズリを施す(336・337・347・348)も存在する。(336・337)は丸みを帯びた胴部から短く外反する口縁部を持つ。347は内面にヘラケズリを施す。産地は不明である。(347・348)は肩の張った胴部から水平気味に短く折れ曲がる口縁部を持つ。外面にタテハケを施した後下半部にタテ方向のヘラミガキを行う。内面は下半部をヘラケズリ、上半部をユビオサエによって成形している。器壁は薄く、胎土は細かい角閃石を含み、淡茶褐色を呈する。(347)は口径15.2cm、器高25.6cm、(348)は口径14.4cm、器高27.6cmを測る。双方とも讃岐地域からの搬入品である。

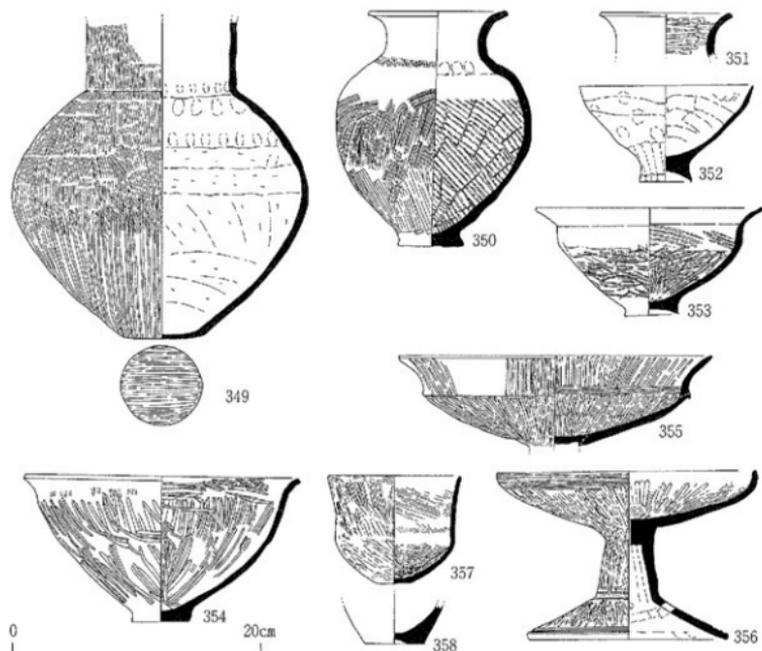
(349~351)は壺である。(349)は球形化した胴部から頸部がまっすぐ立ち上がるもので、口縁部は欠損する。外面にタテハケを施した後、下半部をタテ方向のヘラミガキを行う。底部外面にも丁寧なヘラミガキを施す。内面は下半部にヘラケズリ、上半部をユビオサエによって成形する。調整技法は(347・348)とまったく同じである。器壁も薄い。胎土に角閃石を含み、淡茶褐色を呈することから(349)も讃岐地域からの搬入品である。(350・351)は丸みを帯びた胴部から、外反する頸部、口縁部を持つ。(350)は外面にタテハケを内面に粗いハケによって仕上げる。(351)は内面にヘラミガキを施す。(352~354)は鉢である。(352)は椀状の器形を呈し、内外面をナデと板ナデによって成形している。(353・354)は外反する口縁部を持つ。両者とも内外面にナデを施した後、ヘラミガキによって仕上げている。(355・356)は高杯である。(355)は外反する口縁部を持ち、(356)は浅い皿状を呈する。両者とも内外面をヘラミガキによって仕上げている。(357)は小型の壺である。内外面にハケを施した後、外面下半にヘラミガキを施す。胎土は淡黄褐色を呈し、器壁は薄い。小型埴の祖形であろうか。(358)は底部である。これらの土器は器形、成形技法などから上六万寺式と並行するものであろう。

C地区第12層(灰色粘土③)出土土器(第62図359~378)

(359~362)は長頸壺の口縁部である。(360)はタテハケ、(361)はヘラミガキ、(362)はヘラミガキとタテハケを施す。(363~368)は甕である。(363~365)は外面にタタキを施す。内面はハケによって仕上げる。これらの甕はタタキの方向から三分割して作られており、分割成形技法が守られている。(369)は胴部下半をナデとユビオサエによって成形し、上半は口縁部までタテハケを施す。内面はヘラケズリを行う。(368)は肩の張った胴部から緩やかに外反する口縁部を持つ。外面は板ナデを施し、口縁部直下は内外面ともユビオサエを施す。胴部内面にはヘラケズリを行う。胎土は淡黄茶褐色を呈する。(369)は広口壺の口縁部である。端部には疑凹縁を施す。(370)は小型の壺である。外面にタテハケを施すがナデによって一部は消される。口縁部は受け口状を呈する。(371)は壺の底部である。(372~376)は高杯である。(372)は短く外反する口縁部を持つ。内外面ともヘラミガキを行う。(373~375)は脚部である。(375)は外面にヘラミガキを行う。(376)は椀状を呈する杯部を持つ。口縁部は欠損する。杯部と脚部の境には疑凹縁が巡る。外面はヘラミガキを施す。(377・378)



第60図 C地区第11層(黒色粘土②)土器だまり出土土器実測図(1)



第61図 C地区第11層（黒色粘土②）土器だまり出土土器実測図（2）

は鉢である。(377)は胴部から短く斜めに伸びる口縁部を持つ。(378)は手づくねによって作られている。これらの土器群は甕や高杯の形態、成形技法から弥生時代後期中頃のものと思われる。

C地区第13層（黒色粘土③）出土土器（第63～67図）

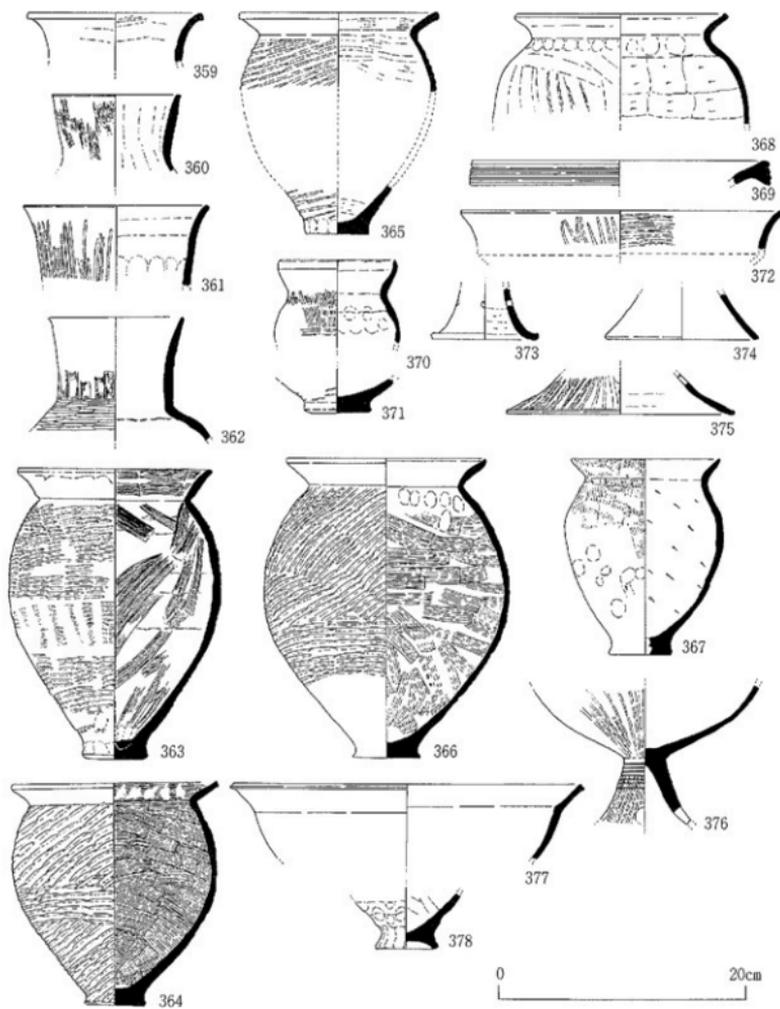
黒色粘土③からは多量の土器がまとまって出土した。(379～390)は長頸壺である。(379・380・382・383)は外面にヘラミガキを施す。(380・382)は内面にヨコハケ、(379・383)は内面にヘラミガキを施す。(381・384・385)は外面にタテハケを施す。(381・385)には外面に線刻された記号文が存在する。口縁部内面には(382)はヨコハケ、(383)は全面ヘラミガキ、(385)は胴部にヘラケズリ、口縁部にヨコハケを施す。口縁端部はヨコナデによる面を持つ。(383)は底部付近に一孔を穿つ。生駒西麓産である。(383・384)は胴部内面をナデとユビオサエによって仕上げる。(386)にも外面に記号文がある。(383)は生駒西麓産である。(387～390)は算盤形の胴部から真直ぐ立ち上がる頸部を持つものである。外面にヘラミガキを施し、内面は(388・390)がヘラケズリ、(389)がハケを施す、(386)は底部である。内外面にヘラミガキを施す。(392)は波状文、(393)は記号文、(394)は円形浮文である。(395)は底部である。(396)は阿波もしくは讃岐地域の壺である。胴部外面にヘラミガキを丁寧に施し、頸部に凹線を11条巡らす。口縁部は短く外反する。内面はヘラケズリを行う。胎土は淡黄褐色を呈する。口径12.8cm、器高23.8cmを測る。(397・398)は鉢である。双方とも外面にヘラミガキを施す。(397)は内面をタテハケで仕上げる。(399～413・415～417)は甕で

ある。(399・400・403・407)は口縁部が短く、くの字に外反し、端部に面を持つ。(399・400)は内外面ともハケを施し、端面もハケ状工具によって成形している。(402~405・409)は外面にタテハケを施し、内面はヘラケズリを行う。(406・410・412~414・420)はタタキによって成形する。内面は(412・414)がナデ、(410・413・417)がヘラケズリを施す。このうち(410~413)は外面にハケを施し、タタキを消している。(407・408)は外面に板ナデ、内面にヘラケズリを施す。(408)は口径13.8cm、器高19.0cm。にぶい黄橙色を呈する。(410)は外面にタタキを行うが、ハケによってほとんど消されている。口径15.2cm。にぶい黄橙色を呈する。(412)は内面をナデ仕上げする。口径14.2cm、器高17.3cm。暗灰黄色を呈する。(401・403)は口縁部が内湾気味に伸びる。(413)は口径15.4cm、器高21.4cm。褐灰色を呈する。(414)は壺である。胴部下半をタタキで成形し、上半をハケによって仕上げる。やや張った胴部から緩やかに外反する頸部から口縁部に至る。端部は面を持ち、頸部と口縁部の境は不明瞭である。内面はユビオサエを施す。口径11.6cm。灰白色を呈する。(417)は底面に木葉痕が残る。(419)は一見布留式土器に類似するが、確実にこの層に伴うものである。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部をつまみ上げる。胴部上半には記号文がある。口径14.4cm。暗灰黄色を呈する。

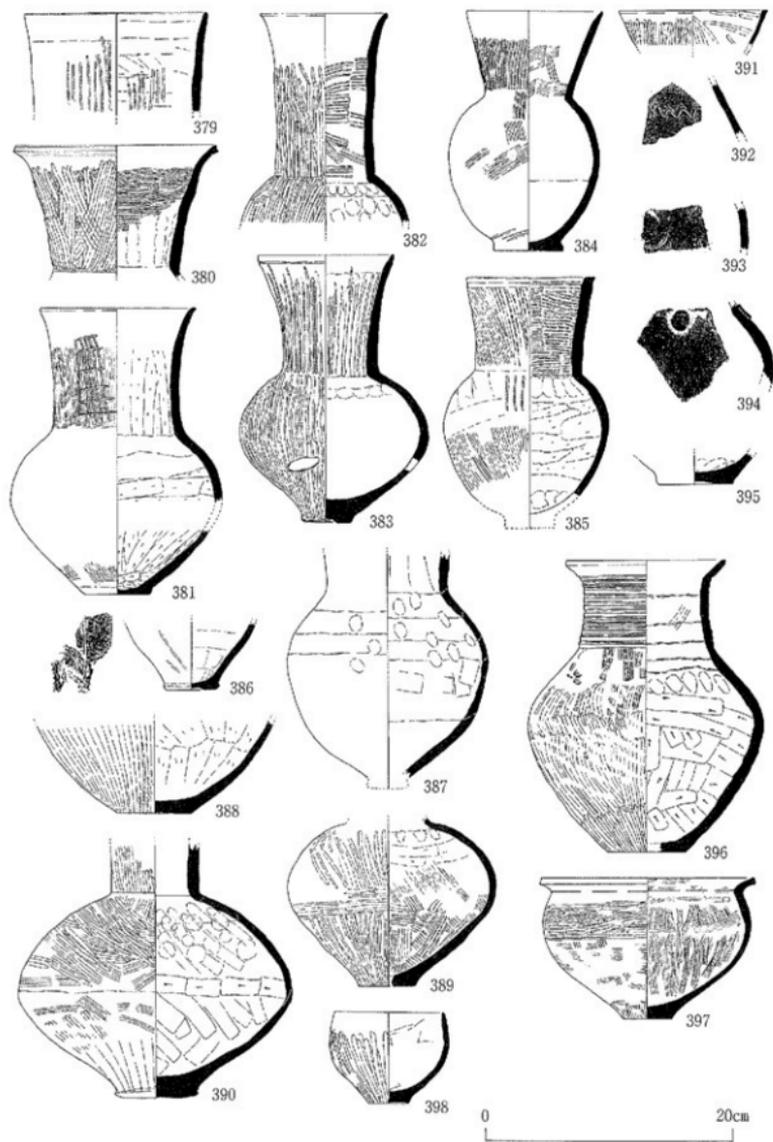
(421~429)は壺である。これらの土器群は口縁端部に疑凹線を施す特徴がある。(421・422・424・426)は外面にタテハケを施し、胴部下半にヘラミガキを施す。内面にはヘラケズリを行う。(421)は口径14.9cm。にぶい黄橙色を呈する。(422)は口径14.9cm。黄褐色を呈する。(424)は口径13.6cm。浅黄橙色を呈する。(426)は口径16.2cm。にぶい黄橙色を呈する。(423)は口縁端部に広い面を持つ。内面はヘラケズリを行う。口径13.0cm。にぶい黄橙色を呈する。(425)は胴部外面にヨコ方向のヘラミガキを施す。口縁端部は面を持つ。内面はユビオサエを施す。(427)は肩の張る胴部下半に外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリを行う。口径14.1cm。胎土は精良で細かい角閃石を含む。搬入品である。(428・429)は底部である。双方とも外面にヘラミガキ、内面にユビオサエを施す。(430)は壺である。算盤形の胴部外面にタテハケ後ヨコハケ、内面に板ナデを施す。真直ぐ立つ頸部から口縁部が外反して、端部に面を持つ。口径13.6cm。にぶい橙色を呈する。(431)は小型の鉢である。内面にハケを施す。口径13.1cm。器高8.1cm。灰黄褐色を呈する。(433・434)は高杯である。(433)は杯部外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。(434)は口縁部が真直ぐ立ち上がるもので、杯部内外面にヘラミガキを施す。脚柱部には疑凹線を施す。(432)は底部である。

(435~447)は高杯である。(432)は短く外反気味に立ち上がる口縁部を持つ。内外面はヘラミガキを施す。(435)は口径24.8cm。にぶい黄色。(437)は口径11.5cm。灰黄色。(441)は口径27.5cm。浅黄色を呈する。(436)は皿状になる杯部を持つ。内外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリを行う。3者とも遮し穴がある。(442~447)は脚裾部である。(442・445)は外面に疑凹線を施す。(443)はヘラミガキ、内面にヘラケズリを行う。

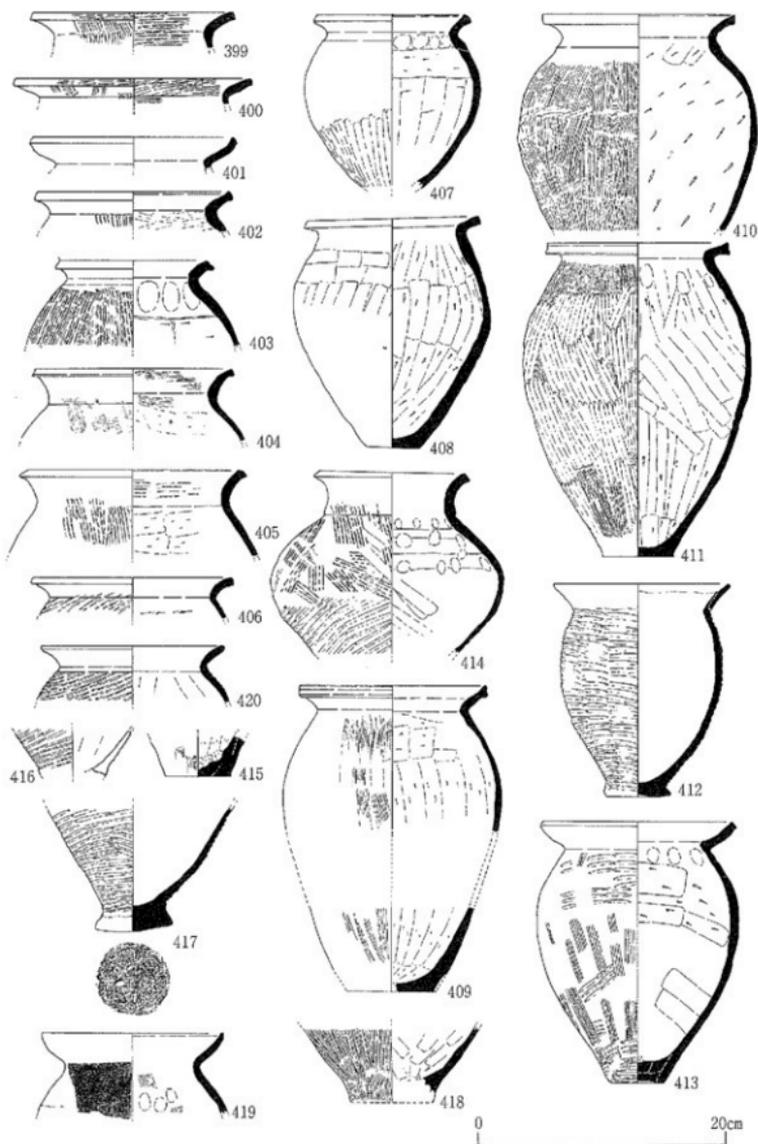
(448)は壺である。算盤形の胴部にタテハケ後、ヘラミガキを施す。口縁端部には疑凹線が巡り、その面にクシ描波状文を施す。内面はヘラミガキを施す。口径13.8cm。器高23.7cm。胎土は暗灰黄色を呈する。(449)は壺である。外面にタテハケ後、ヘラミガキ、内面にヨコハケ後、ヘラケズリを施す。口縁端部に広い面を持つ。(450・451)は壺の胴部片である。(450)は竹管による刺突文、(451)は線刻文である。(452)は底部である。(453~455)は比較的大型の壺である。3者とも内面にヘラケズリを行う。これらは肩の張った胴部から口縁部が短く外反し、端部に面を持つ。(453)はタテハケ後、ヘラミガキを施す。口径17.7cm。灰黄色を呈する。(454)は粗いタテハケ後、胴部上半に横方向のヘラミガキを数乗入れる。口径14.4cm。器高15.0cm。灰黄色を呈する。(455)は細いタテハケ



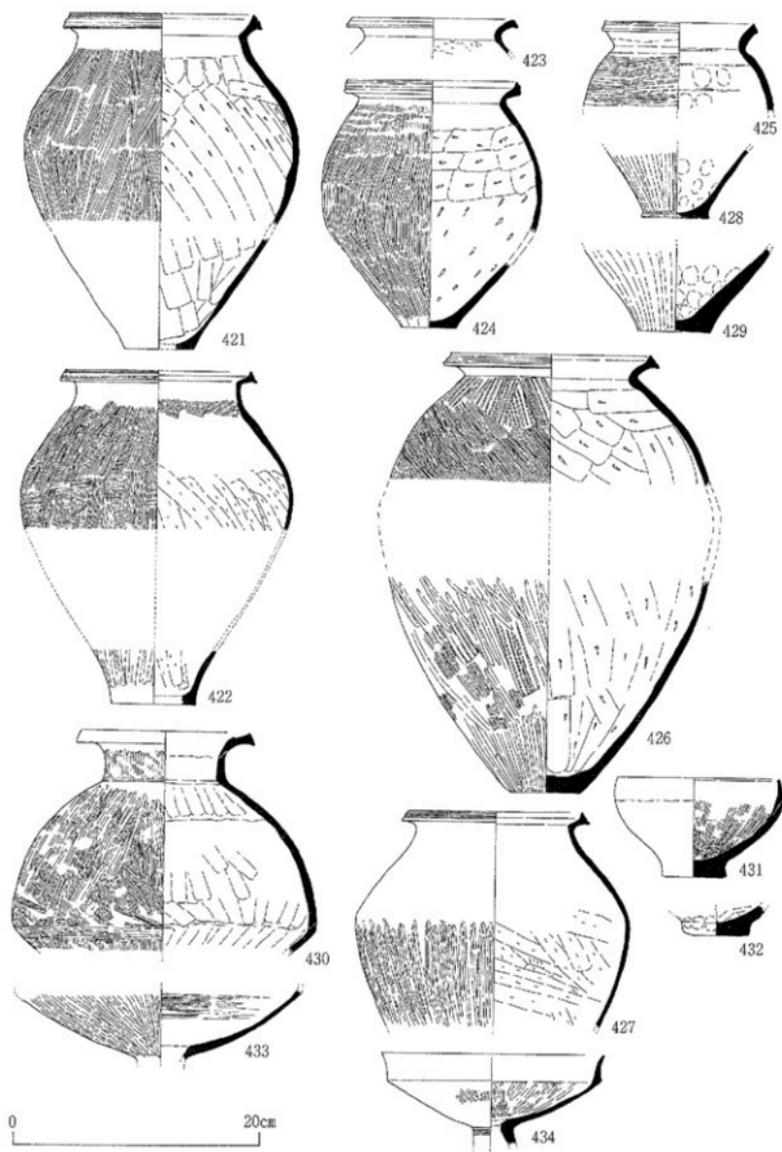
第62图 C地区第12层(灰色粘土③)出土土器实测图



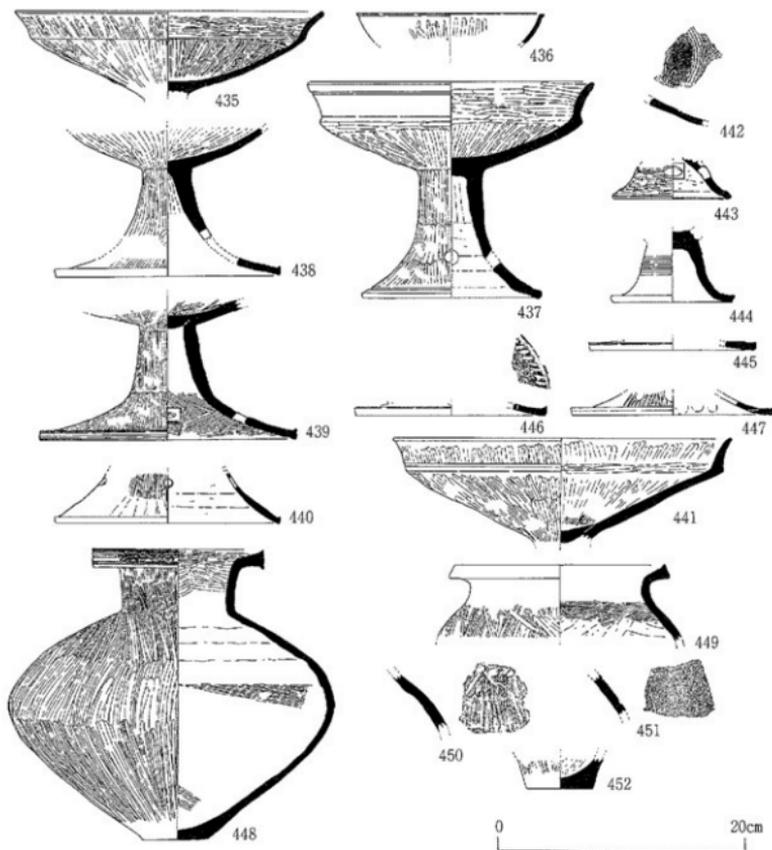
第63图 C地区第13层(黑色粘土③)出土土器实测图(1)



第64图 C地区第13层(黑色粘土③)出土土器实测图(2)



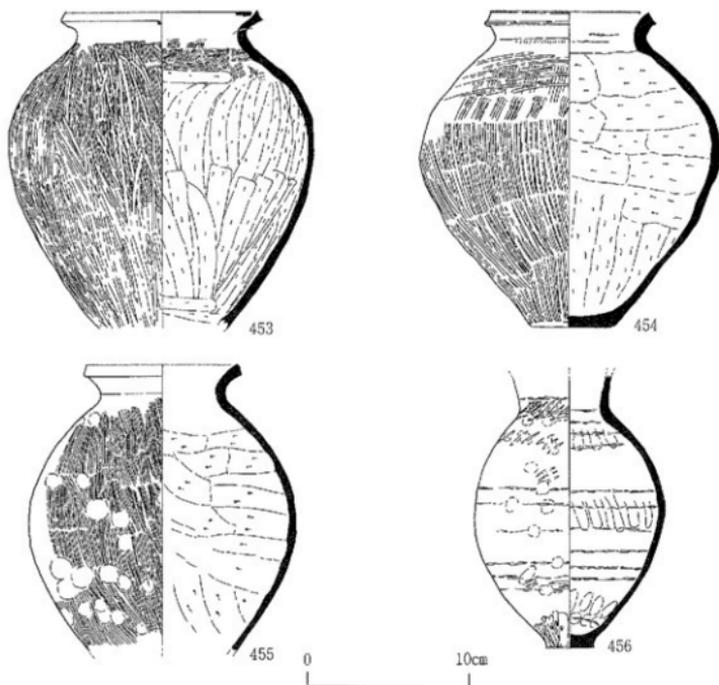
第65图 C地区第13层(黑色粘土③)出土土器实测图(3)



第66図 D地区第13層(黒色粘土③)出土土器実測図(4)

後、ユビオサエを施す。口径16.2cm。灰黄色を呈する。(456)は倒卵形の胴部から頸部が上方に伸びるものである。タタキによって成形されているが、ナデによってほとんど消されている。内面もユビオサエによって仕上げる。底部外面に一部ヘラケズリを施す。

これらの土器のうち、(396)は吉備地域V-2様式に類例がある。また(397)も形態や技法などから吉備系である可能性がある。甕は内面にヘラケズリを施すもののうち、口縁端部に面を持ち、疑凹線が巡る。(421~427・437)などは吉備地域後期Ⅱ様式期を前後するものと考えられる。(427)は若干古い様相を呈している。(421・422・424・426・427)は搬入品である。(437)の高杯も同時期であろう。(453~456)は器形からは吉備系とは言いがたいが、畿内では例を見ないので、やはり東部瀬戸内のどこかの影響を受けた土器群と考えたい。以上のことからこれらの土器群は弥生時代後期初頭~前葉に位置付けたい。



第67図 D地区第13層(黒色粘土③)出土土器実測図(5)

これらの土器の中で外面にタテハケ、内面にヘラケズリを施す(347・348・413・416・420)は器形は畿内第V様式の形態を取るものの、成形技法を見ると内面にヘラケズリ、口縁部直下にユビオサエを施す点で大きく畿内通有の器形を逸脱している。成形技法に関して言うと、讃岐や阿波地域のものと同様に近い関係にあるといえる。これらの土器の型式学的な位置付けは難しいが、搬入品と思われる讃岐の土器が存在することから、それらの地域の成形技法と畿内の壺の形態が融合した折衷土器として捉えておきたい。

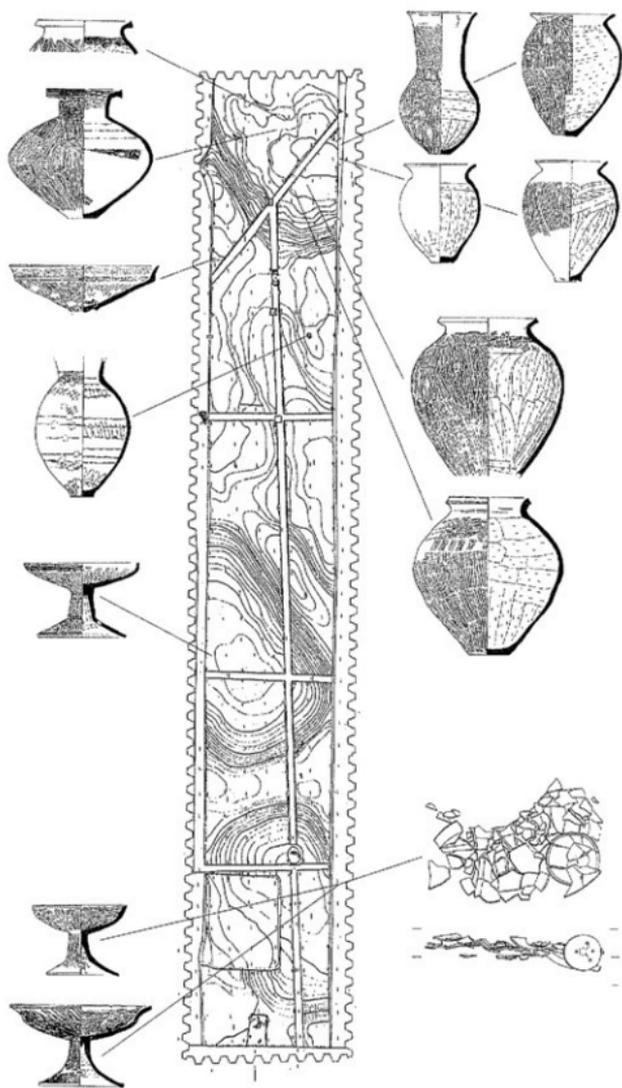
C地区自然河川2出土土器(第69・70図)

自然河川2からは弥生時代後期の土器がまとめて出土した。(457~460・498)は長頸壺である。いずれも胴部や頸部にタテハケを施す。口縁部はヨコナデによってハケが消え、緩やかに外反する。(460)は東部瀬戸内の影響を受けたと思われる、口縁部に凹線文を2条施す。頸部には一見邪視文と思われる線刻、胴部にも縦方向のジグザグ文の線刻がある。口径は8.8cmで、胎土は灰黄色を呈する。(498・657・659)は内面にヨコハケを施す。(502)は口径10.0cm、器高23.1cmを測る。胎土は浅黄色を呈する。(461)は生駒西麓壺である。(462~464)は壺の底部である。(462)は内面に板ナデを施す。(463・464)は外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリを施す。(465)は近江系の壺である。外面にハケ状工具による刺突文と浅凹線文を施す。口径14.2cmを測る。胎土は灰白色を呈するが、外面に

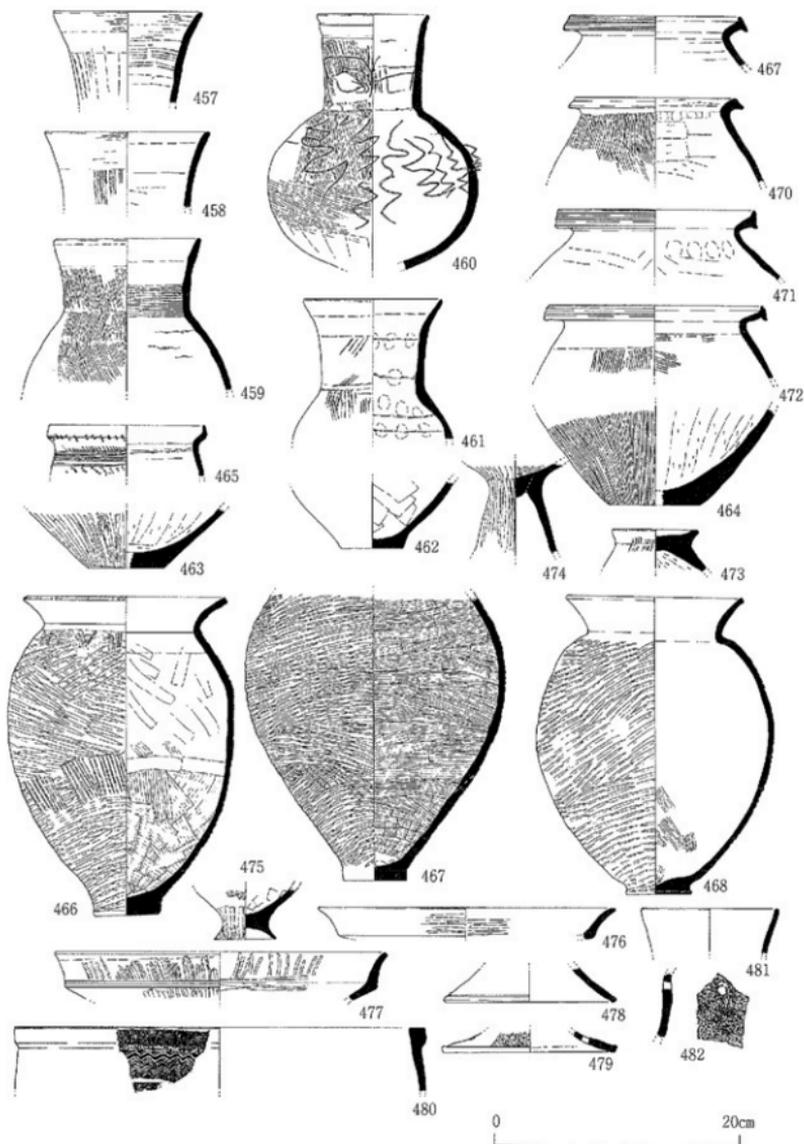
は煤が付着し黒色である。(462~466・483~496)は甕である。このうち(466~468・490・495・496)はタタキによって成形されている。(466)は内外面にハケを施す。口径15.9cm、器高26.3cmを測る。胎土は灰白色を呈する。底部内面には炭化米が付着している。(467)は内面に丁寧なヨコハケを施す。胎土は灰白色を呈する。(468)は口径14.1cm、器高24.1cmを測る。胎土は暗灰黄色を呈する。外面には煤が付着する。(469~472)は東部瀬戸内の甕である。(469・470・472)は口縁端部に襷込線がはいる。(469)は内外面にナデ仕上げする。口径13.8cm。胎土は灰白色を呈する。(470)は口縁端部にひろい面をもつ。外面にタテハケ、内面にヘラミガキを施す。口径13.0cm。黄褐色を呈する。(471)は内外面に板ナデを施す。口径16.0cm。にぶい橙色を呈する。(472)は内外面にハケを施す。口径17.2cm。淡黄色を呈する。(496)は胴部外面ばかりでなく、口縁部内外面にもハケを施し、端部もハケ状工具によって面取りする。胎土は白色を呈し、摂津産の可能性がある。(483~486・490~493)は短くくの字に外反する口縁部である。(492)はヨコナデによって端部を上方につまみあげる。(483・491)は生駒西麓産である。(487)は内外面にハケとユビオサエによって成形し、器壁は薄い。胎土は淡黄褐色を呈する。産地は不明である。(506)はタタキを施す大甕である。外面はハケによってタタキが一部消されている。胴部上半に円弧状の記号文がある。内面は板ナデする。胎土は黄橙色を呈する。(495)は甕の底部である。(494)は小型で受け口状の口縁部をもつ。生駒西麓産である。(488・489)は中期の混入である。(497)は罎甕である。タタキによって成形し、内面はナデで仕上げる。口径11.0cm。器高26.3cmを測る。胎土はにぶい黄褐色を呈する。外面には煤が付着していることから、別の用途も考えられる。(473・505)は蓋である。(473)は外面にハケ、内面にヘラケズリを施す。(476~479・502~504)は高杯である。(476・477・502)は緩やかに外反する口縁部をもつ。それぞれ内外面にヘラミガキを施す。(478・479・503)は脚部である。(479・503)は外面にヘラミガキを施す。(503)は内面にヘラケズリを行なう。(478・503)は生駒西麓産である。(474・504)は杯部と脚部である。(474)は円盤充填法により成形されている。内外面ともヘラミガキを行なう。(475・481・497~501)は鉢である。(475)は小型で、手づくねによって脚台部を造りだしている。内面は板ナデを施す。(480)は大型で口縁端部を肥厚させる。外面にはクシ指波状文を施す。(497)は口縁部が内湾気味に立ち上がるもので、端部にヨコナデを施す。胴部との境はない。内外面にヘラミガキによって仕上げる。(497~501)は口縁部が緩やかにくの字に外反するものである。(497)はやや受け口状を呈する。外面にヘラミガキを施す。(499)は内外面にナデ仕上げする。(500)は内面にハケを施したのちヘラミガキを行なう。(501)は内外面ともヘラミガキを施す。(482)は器種不明である。一孔を穿つ。生駒西麓産である。

これらの土器のうち特筆すべきことは吉備もしくは東部瀬戸内地域の影響を受けたと思われる(460・469・470~472)の存在であろう。(460)は吉備V-1様式、讃岐V-1様式、阿波IV-2、V-1様式に類例が求められる。また甕類(469・470~472)も同時期のものに類例が存在する。この時期吉備、讃岐、阿波では共通の器形をした土器が相互に存在することから、搬入土器とともに成形技法も伝えられ、瓜生堂遺跡でこれらの甕類が作られた可能性はないであろうか。また、(484・487)のようにくの字口縁で内外面にタタキではなく、ハケを施すものも存在し、甕についてはさまざまな形態や成形技法をとるものが存在することも注意せねばならないだろう。

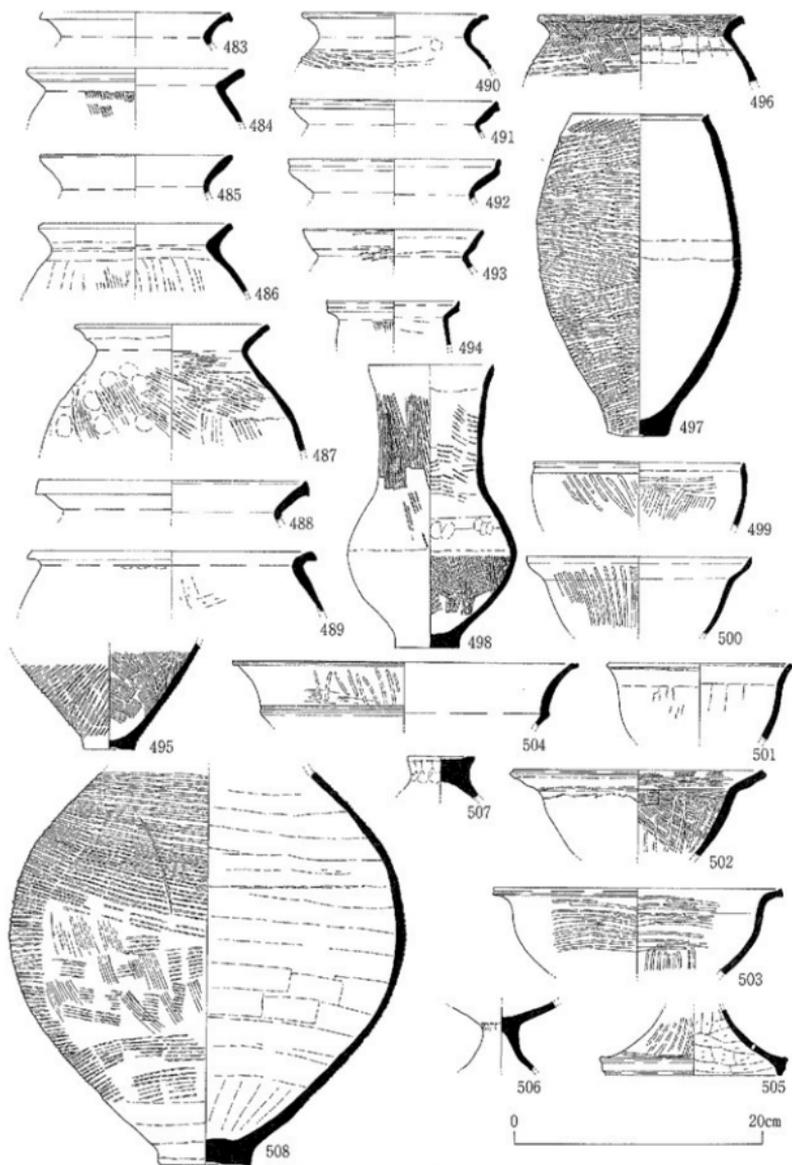
これらの土器群は(470)が備前V-1~2様式に比定できることや、タタキをもつ甕の形態や成形技法などから弥生時代後期前半に位置付けたい。



第68图 D地区 方形周溝墓上面(第10·11·13層)出土土器位置圖



第69图 C地区自然河川2出土土器実測図(1)



第70图 C地区自然河川2出土土器实测图(2)

C地区配石遺構出土土器（第71図509～542）

配石 1（509～513）509は高杯である。口縁部は短く立ち上がる。内外面にヘラミガキを施す。(510)は底部である。(511)は特殊壺である。胴部中央に二条の突帯を巡らし、棒状浮文を5本貼り付けている。外面は丁寧なヘラミガキを行なっている。胎土にはぶい黄色を呈するが、外面に朱が残る。内面は煤が付着している。祭祀用の土器であろう。(512)は壺である。外面にタテハケ、内面にハケ、ユビオサエを施す。(513)は鉢である。口縁部に凹線文がはいる。混入であろう。

配石 2（514）(514)は特殊壺である。算盤形の胴部から細い頸部が伸びそのまま口縁部に続く。外面は丁寧なヘラミガキ、内面はハケが施されている。胴部中央には凹線文を5条巡らし、その上に渦巻文が配されている。底部には剝離痕がみられ、脚部が付いていたと思われる。胎土にはぶい黄橙色を呈する。内面は胴部全体に煤が付着している。(511)同様祭祀用の土器であろう。

配石 3（515～521）(515～518)は壺である。(515)は広口壺である。口縁端部を垂下させ、円形のスタンプ文を配する。外面にヘラミガキ、内面にヨコハケを施す。口径23.0cm。(516)は胴部である。外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリとユビオサエを施す。胎土は灰黄色を呈するが、外面は赤色塗彩されている。(517・518)は胴部片である。(517)は(514)同様渦巻文を配する。(518)は幅の広い縷状文を施す。(519)は甕である。口縁部を水平に折り曲げる。内外面にハケを施す。口径14.6cm。オリブ黒色を呈する。外面に煤が付着する。(520・521)は底部である。(520)は外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。壺であろう。(521)は甕である。これらの土器のうち(515・517・518～520)は生駒西麓産である。

配石 4（522～528）(522・523)は高杯である。口縁部は胴部から緩やかに立ち上がる。内外面にヘラミガキを施す。(522)は口径16.6cm。(533)は口径28.0cm。にぶい黄褐色を呈する。(524)は特殊壺である。胴部と頸部の境に突帯を貼り付ける。胎土は精良で灰黄色を呈する。外面に朱が残存している。祭祀用の土器であろう。(525)は甕である。口縁端部に面をもつ。外面にハケ、内面にヘラケズリを施す。口径14.4cm。にぶい黄褐色を呈する。(526)は無頸壺である。口径10.0cm。(527・528)は底部である。(522・526・527)は生駒西麓産である。

配石 5（529～532）(529)は裝飾付台付鉢である。杯部下面を垂下させ、そこに凹線文を施し、棒状浮文を4本貼り付ける。胎土は精良で灰白色を呈する。(530)は広口壺である。口縁端部にかろうじて波状文が残る。口径13.0cm。黄褐色を呈する。(531)は壺の胴部である。算盤形を呈し、朱が残っている。外面はヘラミガキ、内面にハケを施す。生駒西麓産である。(533)は高杯もしくは台付鉢の脚部である。裾部には規則的に小孔が穿たれている。外面には擬凹線が巡る。内面はヘラケズリを行なう。にぶい黄褐色を呈する。

配石 6（533～535）(533)は小型の鉢である。外面にヘラミガキ、内面に板ナデを施す。口径9.8cm。胎土は精良でにぶい褐色を呈する。(534)はタタキを施す甕である。口縁端部にはヨコナデによる凹線が巡る。内面は板ナデを施す。口径13.6cm。黄褐色を呈する。(535)は高杯の脚部である。灰白色を呈する。

配石 7（536）(536)は器台の脚部である。二重の裾部の先端にキザミを施し、三つ一組の穿孔を四方に配する。脚径14.0cm。灰色を呈する。

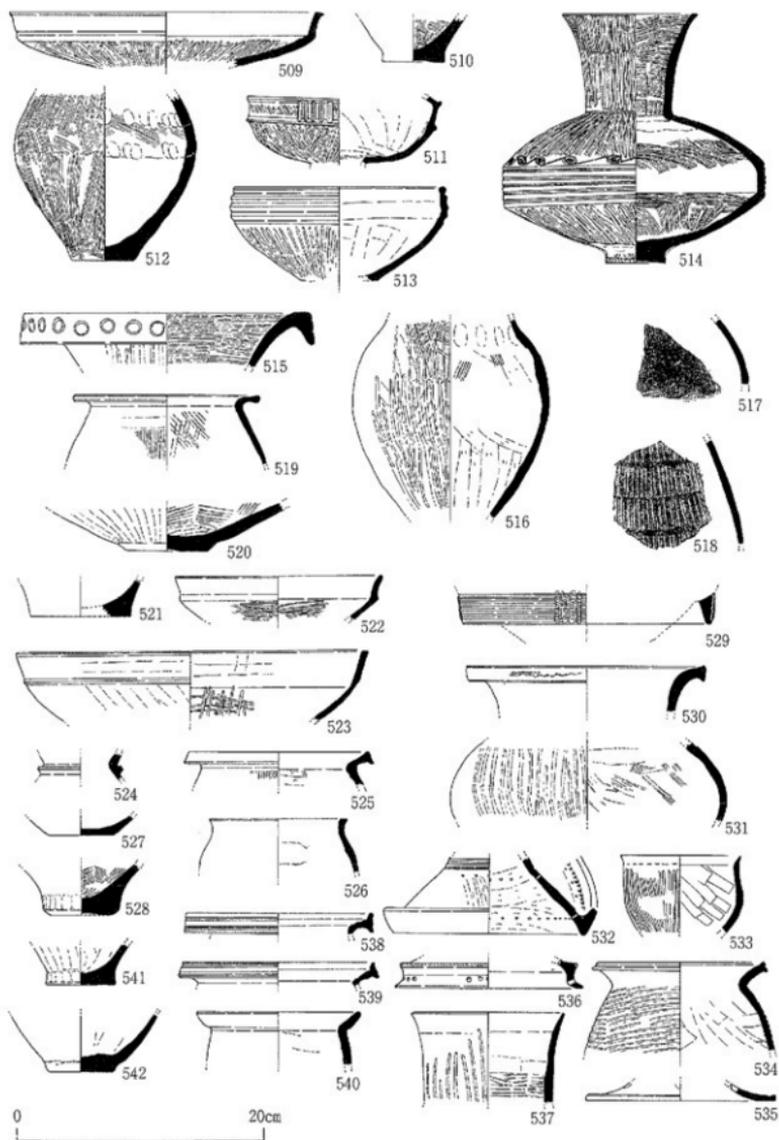
配石 8（537～542）(537)は長頸壺である。口縁部外面にヘラミガキ、内面にヨコハケを呈する。口径12.0cm。暗灰黄色を呈する。(538～541)は甕である。(538・539)は口縁端部に面をもち、擬凹線を巡らす。前者は口径15.0cm。灰黄色を呈する。後者は口径15.2cm。灰色を呈する。(540)はくの字口縁をもち、端部は丸くおさめる。口径13.2cm。生駒西麓産である。(541)は底部である。内外面

に板ナアを施す。赤褐色を呈する。(542)は壺の底部である。内外面にナアで仕上げる。生駒西麓産である。

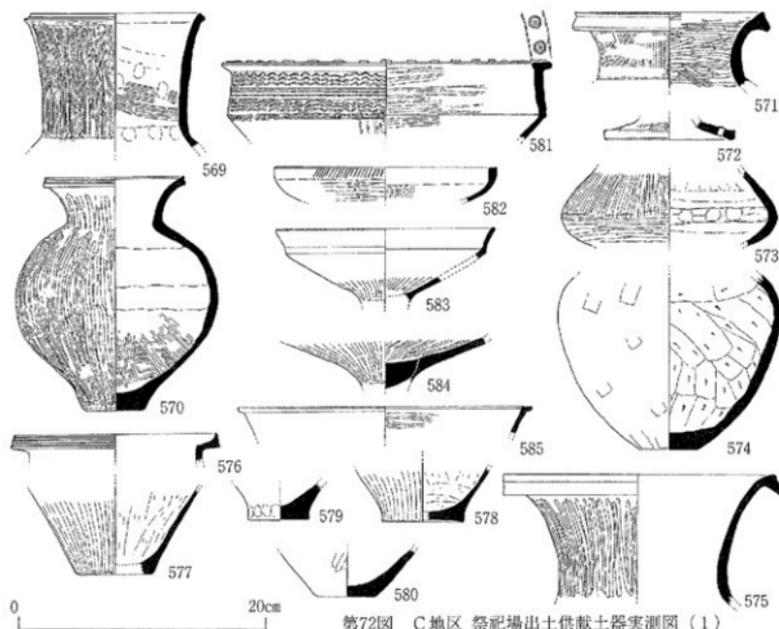
これらの土器群は高杯の口縁部が直立すること。口縁端部を垂下させる壺が存在すること。タタキをもつ壺が出現していることなどから、弥生時代中期末～後期初頭に位置付けられる。

C地区祭祀場出土土器(第72・73図543～580)

(543～552)は壺である。このうち(543～546)は長頸壺である。(543～545)は口縁部が頸部から緩やかに外反し、端部に面をもつ。(543)は外面にヘラミガキ、内面に板ナアを施す。口径10.8cm。生駒西麓産である。(544・545)は外面にタテハケ、内面に板ナア、ナアを施す。前者は口径13.8cm。灰白色を呈する。後者は口径14.1cm。生駒西麓産である。(546)は直立する頸部から口縁部に至る。端部はヨコナデする。外面にヘラミガキ、内面にユビオサエを施す。口径12.6cm。灰白色を呈する。(547)は胴部である。外面にハケ、内面に板ナアを施す。灰白色を呈する。(548)は胴部片である。外面に朱が残る。(549)は底部である。外面にヘラミガキ、内面に板ナアを施す。(550)は特殊壺の胴部である。算盤形を呈し、3条の凹線が巡る。外面に丁寧なヘラミガキ、内面に板ナアを施す。褐色を呈する。(551)は長頸壺の頸部片である。外面に2条の沈線がはいる。(552)は底部である。外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。生駒西麓産である。(553～561)は甕である。(553)は口縁端部を上方に拡張し、受け口状を呈する。外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリを施す。口径15.0cm。生駒西麓産である。(554)は倒卵形の胴部から短かくくの字に折れ曲がるもので、端部に面をもつ。外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ、ハケを施す。口径14.8cm。生駒西麓産である。内外面に煤や炭化物が付着する。(555)はくの字口縁を有し、端部に面をもつ。外面にタテハケ、内面にヘラケズリ、ユビオサエを施す。黄灰色を呈する。外面は全面に煤、内面は炭化物が付着する。(556)はタタキをもつ。口縁端部は上方につまみあげる。内面はヘラケズリを施す。口径14.3cm、器高28.7cm。生駒西麓産である。(557～561)は底部である。(557)はタタキ、(558)はハケで仕上げる。前者は生駒西麓産である。後者は黒色を呈する。(559)は外面にタテハケ、内面にヘラミガキ、ヘラケズリを施す。断面や剥離面など全体に亘って煤が付着しており、強く火を受けたことが伺える。(561)は外面に板ナア、内面にヘラケズリを施す。黒色を呈する。(560・562)は裝飾付台付鉢である。杯部外面を垂下させ、そこに凹線を数条施し3本一組の棒状浮文を張りつける。両者とも灰白色を呈する。(563)はくの字口縁をもつ鉢である。内外面にヘラミガキを施す。口径18.2cm。浅黄色を呈する。内面に朱が残存する。(565～569)は高杯である。(565)は深い皿状の杯部をもつ。円盤充填法で成形されている。外面にまばらにヘラミガキ、内面に横方向の幅の広いミガキを施す。口径20.0cm。浅黄色を呈する。(566・569)は杯部から直立する口縁部をもつ。両者とも内外面にヘラミガキを施す。前者は裾の狭い脚部が付く。口径18.6cm。浅黄色を呈する。後者は口径37.0cm。灰白色を呈する。(567・568)は杯部から緩やかに外反する口縁部をもつ。内外面に丁寧なヘラミガキを施す。前者は口径30.0cm。灰黄色を呈する。口縁部に一部朱が残る。後者は口径15.3cm。淡黄色を呈する。(570～575)は壺である。(570)は長頸壺である。頸部外面にタテハケを施し、ジグザグの線刻がはいる。口縁端部はヨコナデによる面をもつ。内面はヨコハケ、ユビオサエを施す。口径13.8cm。灰白色を呈する。(571・572・575)は頸部から緩やかに外反する口縁部をもつ。(571)は端部に縦凹線がはいる。外面にヘラミガキ、内面にナア、ハケを施す。口径11.1cm、器高19.0cm。灰黄色を呈する。内外面に煤が付着する。(572・575)は口縁端部を下方に拡張する。(572)は外面にタテハケ、内面にヘラミガキを施す。口径15.2cm。淡黄色を呈する。(575)は外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。口径21.9cm。生駒西麓産である。内面全体に煤がつく。(573・574)は胴部である。前者は算盤形を呈し、



第71图 C地区配石遗構出土供献土器実測図

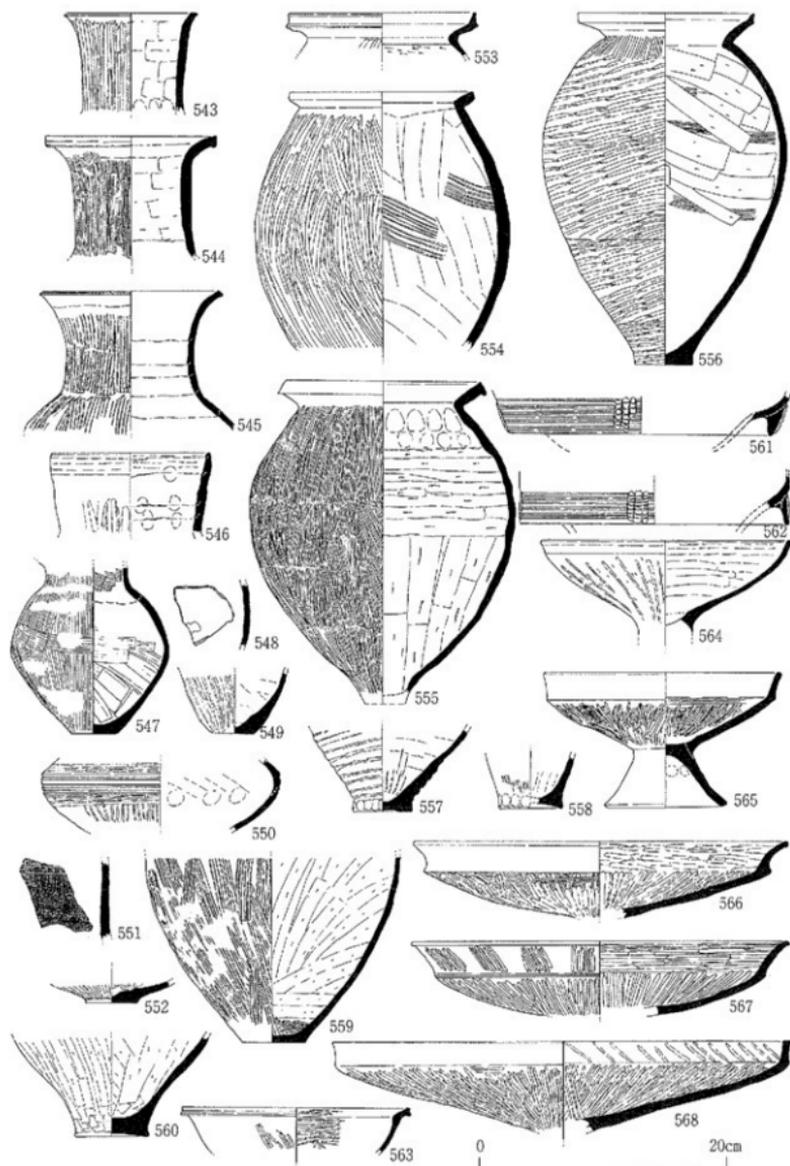


第72図 C地区 祭祀場出土供献土器実測図(1)

外面にヘラミガキを施す。内面はナデである。生駒西麓産である。外面に朱が残る。後者は肩が張る。外面に板ナデ、内面にヘラケズリを施す。灰白色を呈する。(576~580)は甕である。(576)は口縁端部に縦凹線をもつ。口径16.0cm。灰青色を呈する。(577~580)は底部である。(577・578)は外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリを施す。前者は黄灰色を呈する。後者は生駒西麓産である。(579)は暗灰黄色、(580)は灰白色を呈する。(581)は裝飾鉢である。粗い直線文、波状文を巡らす。その上に円形浮文を配する。口縁上面にも円形浮文を貼りつける。内面はヘラミガキを行なう。この土器も祭祀用と考えられ、外面と口縁部に朱が残る。口径33.6cm。生駒西麓産である。(582~584)は高杯の杯部である。三者とも内外面にヘラミガキを行なう。(582)は口径18.0cm。生駒西麓産である。(583)は口径17.6cm。灰オリーブ色を呈する。(584)は円盤充填法で成形する。灰白色を呈する。(585)も高杯の口縁部である。内面にヘラミガキを行なう。口径21.6cm。生駒西麓産である。(586)は高杯の脚部である。

配石と祭祀場出土土器の中で留意すべきことは、日常の土器とは思われない祭祀に使ったと考えられるものの存在であろう。(511・514・550)は特殊な壺で、丁寧に裝飾されているのが注目される。また、内面には炭化物が付着しており、47-1次調査において出土した手埴り形土器に近い使用方法があったことも推察される。その他にも朱が残るもの(531・548)や裝飾付台付鉢(529・560・562)などが存在している。また、口縁部に縦凹線を入れる甕(538・539)の存在など、やはりここでも播磨から東部瀬戸内系の土器の影響を考えざるを得ない。

C地区自然河川4出土土器(第74図586~603)



第73图 C地区 祭祀場出土供献土器实测图(2)

(586~588)は壺である。(586)は筒状の頸部からわずかに外反する口縁部をもつ。端部には擬凹線が1条入る。外面には刺突文を巡らす。外面はナデ、内面はユビオサエを施す。口径9.2cmにぶい橙色を呈する。(587)はゆるやかに外反する口縁部である。(589)は口縁端部に擬凹線を施すもので吉備系であろう。外面にはタテハケ、内面にはヘラケズリ、ユビオサエを施す。口径15.6cmにぶい橙色を呈する。(590・591)はくの字状口縁をもつ。(590)は外面にタテハケを施す。(592)は底部である。外面にタテハケ、内面に板ナデを行う。(593)は受口状を呈する口縁部である。口径16.0cm。灰黄色を呈する。(594・595)は底部である。内面はヘラケズリを行う。(596)は裝飾付鉢である。口縁端部を肥厚させ、凹線文を施した後、円形浮文を貼り付ける。内外面にヘラミガキを施す。外面に朱が残る。(597)は外面に凹線をもつ。(600)は水平口縁をもつ。(598~602)は高杯である。(598)は外面に刺突文を巡らす。内外面にヘラミガキを施す。口径18.8cm。生駒西麓産である。(603)は壺胴部片である。直線文を施す。

ここでは吉備系と思われる(586・589・592)などの土器の存在が目される。(589)はその形態や胎土から搬入品の可能性がある。また(596)の裝飾付台鉢も存在し、配石祭祀場同様、播磨から東部瀬戸内にかけての土器の存在は留意する必要があるだろう。

断層上面出土土器(第75図604~619)

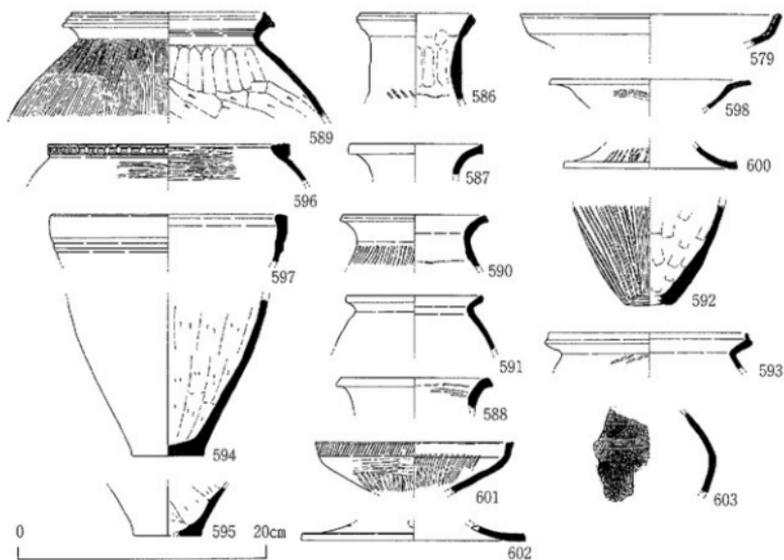
(604~607)は壺である。(604)は口縁外面に僅かに直線文が残る。(605)は頸部から緩やかに外反し、口縁部に続く。内外面にハケ、端部にヨコナデを施す。口径9.0cm。灰黄色を呈する。東部瀬戸内の土器であろう。(606)は胴部外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。(607)は底部である。外面にタテハケ後ヘラミガキ、内面に板ナデを施す。(608~617)は壺である。(608)は肩の張った胴部から口縁部が短く屈曲し、端部を丸くおさめる。外面にタテハケ、内面にユビオサエを施す。口径13.6cm。灰黄色を呈する。(609)はタタキ成形を行い内面にヘラケズリを施す。口径15.4cm。灰白色を呈する。(610)は短い口縁部をもつ。(611)は水平口縁を呈する。(612・613)は外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリを施す。(618)は壺の底部である。外面にヘラミガキ、内面にヨコハケを施す。(619)は鉢である。(614・615)は高杯である。(614)は内外面にハケ、(615)は内外面にヘラミガキを施す。

ここでも吉備もしくは讃岐と思われる(605・608)などの存在が目される。

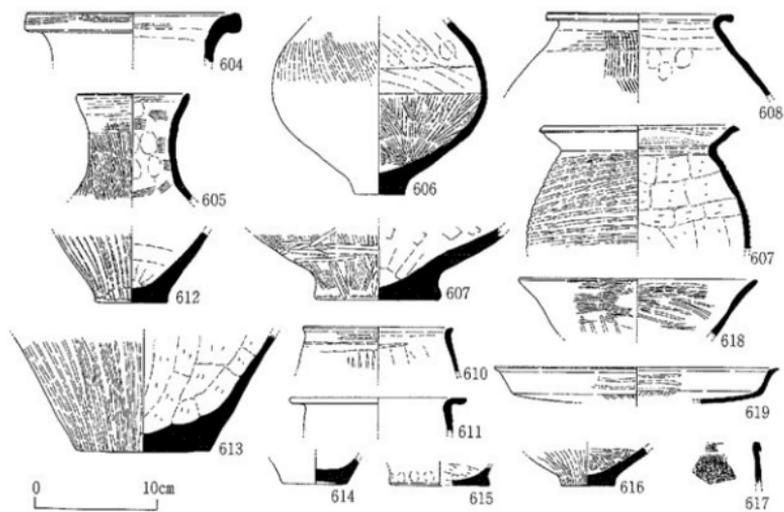
灰色粘土②から出土した第V様式~庄内式期の土器には壺が多い。(329~334)は内面をヘラケズリするものである。また、ここでも讃岐系と思われる(321)が出土している。(321)は胴部外面下半のヘラミガキがなくなり、全面をハケで仕上げるようになる。内面下半はヘラケズリ、上半はユビオサエを施す。全面をハケで仕上げるようになるという点で、黒色粘土②の讃岐系壺とは一線を画せよう。また、黒色粘土②からは第V様式2~3段階の土器がまとめて出土している。壺(356)は口縁部を欠損するが、胴部外面下半をヘラミガキ、上半をハケ、内面下半をヘラケズリ、上半をユビオサエする点で讃岐系壺と同様である。壺は外面にタタキ及びハケを施す畿内系のものがほとんどである。しかし、(354・355)はその調整技法や器形から讃岐地域からの搬入品である。その他、瓜生堂で作られたと思われる壺類には外面にハケを施すものの多くが内面にヘラケズリを施すものが多い。これらの壺は技法的に讃岐系土器の影響下で成立したことを暗示させる。

参考文献

- 正岡隆夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社 1992年
菅原康雄・梅木謙一編『弥生土器の様式と編年』四国編 木耳社 2000年



第74图 C地区 自然河川4出土土器实测图



第75图 C地区 断层上面出土土器实测图

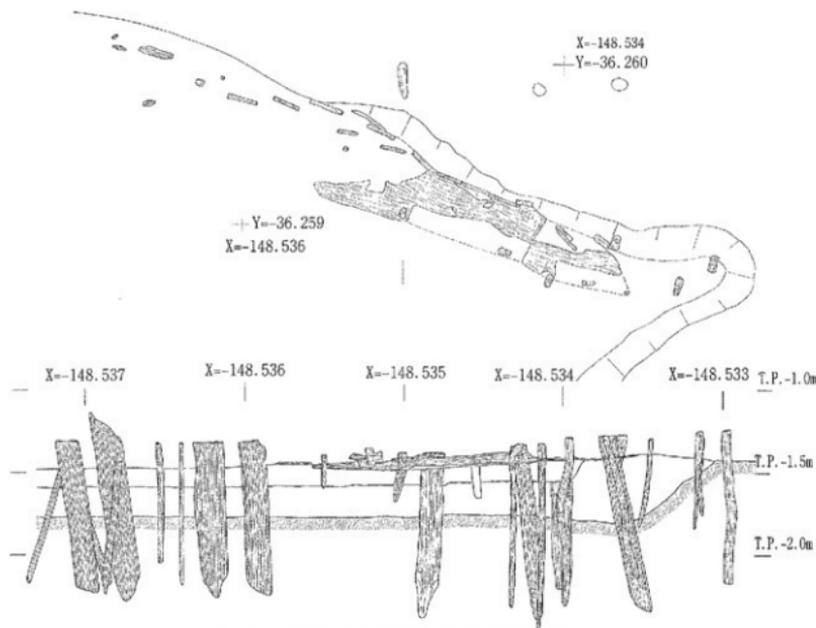
(4) 弥生時代中期の遺構と遺物

遺構

堰状遺構 (第76図)

C-3の南端に位置する。弥生時代中期後半の南海地震が起因する地滑りによって生じた窪地を地山の第30層と第31層を用いて厚さ約35cm前後の盛り土をして埋めている。しかし、なお低かったために窪地跡を南東から北西に向けて流れる川の水流を調整するために設けられた堰状遺構である。地滑りによって北西隅が崩れた5号方形溝溝墓から西に約3m離れた第29層中で検出した。検出規模は東西約4.2m以上、南北約2.4m以上、高さ約1m前後で南側は調査区外にのびる。先端を尖らせた幅約18cm前後、長さ約1.2m前後の矢板(頂部高T. P-114~-145cm前後)12本と径約2~5cm前後、長さ約1m前後の杭(頂部高T. P-125~144cm前後)17本を窪地の西端に流れに直交して南西から北東方向に打ち込み、その上にムシロ状の編み物(幅約10~36cm前後、長さ約193cm前後、頂部高T. P約-139cm前後)を被せていた。

矢板は遺構の西端に約8~40cmの間隔で1列に打ち込まれ、南西隅部分では3列が確認された。杭は遺構の東西両端に約8~87cm前後の間隔で2列に打ち込まれており、西端の列では中央部に約21~52cm前後の杭5本が盛り土の上に倒置した状態で認められた。矢板、杭は頂上部分を欠如しているが当初は、地面から約0.7m前後打ち込まれていたと思われる。伴出した遺物はない。検出層、検出状況から弥生時代中期後半の南海地震直後に構築されたと考えられる。



第76図 C地区 堰状遺構平面見通し断面実測図

方形周溝墓（第77図）

C地区で1基（5号方形周溝墓）、D地区で3基（西より1・3・4号方形周溝墓）を検出した。

築造後、黒色粘土層に覆われ、その後部分的に砂層が堆積し、古墳時代初頭に堆積したシルトから粘土層に厚く被覆され完全に埋没する。墳丘は厚い堆積層に守られ、自然環境による盛土の流失以外に削平を受けることはなく、ほぼ完全な残存状態で検出することができた。以下1号方形周溝墓から順を追って報告する。なお2号方形周溝墓は調査の過程で方形周溝墓ではないことを確認したため欠番としている。

1号方形周溝墓（第80・81図）

D地区の西端（D-8から9区）で検出した。北隅から北東辺・西隅・南西辺は調査区外に及び、東隅から南隅の一角を検出した。確認できる墳丘の規模は、墳丘の上面で長軸7.8m、短軸6.0m、墳丘の裾で長軸10.7m（指定11.8m）を測り、短軸7.8mを測り、長軸はN-65°-Eを向く。墳丘の高さは南東周溝から1.1mである。南東周溝は上場幅1.9m、深さ0.5mで、北西周溝は溝というよりも落ち込み状をなし、外側の肩は調査区外となる。当方形周溝墓の北東に別の方形周溝墓が存在し、この周溝となるかもしれない。墳丘東隅では北東周溝と南東周溝の間に上場幅3.2mの墓道から派生する陸橋を形成している。南東周溝はその底から砂粒を含む黒色粘土層が連続して堆積し埋没している。

旧表土は次項で述べる弥生時代中期前半の畦畔を有する面の上に堆積した砂層を覆うT.P.-0.5m前後のオリブ黒色粘質土上面である。墳丘東斜面（第81図）では旧表土から0.6mほど垂直に掘り込み、墳丘へ盛土し、さらに斜面を形成する盛土を行っている。南東斜面では旧表土の掘り込みは緩く同様に斜面を盛土で覆う。墳丘上面では検出面から0.65m前後の盛土を確認できる。盛土は0.15～0.4m²の塊状で一気に積み上げていると考えられる。

供献土器（第115図）は全て墳丘斜面から裾にかけて土壁に埋められている。墳丘北東斜面の長軸およそ0.76m、深さ0.36mの土壁1から底部に焼成後穿孔がある壺形土器（第85図、620）が出土している。完形の状態では直立し埋納されていたと考えられるが、土層観察と排水を兼ねる先行トレンチが土壁の北半を通り、約半分を欠損している。墳丘の南東斜面の直径1.5m、深さ0.36mのほぼ円形を呈する土壁2から出土した甕形土器（第84図、621）は1個体分の土器片を検出しているが、完形に復元することが困難なほどに打ち砕かれた状態で埋められる。直径0.9mの不整円形をなす土壁3から出土した底部を欠損する甕形土器（第87図、623）は土壁4から出土した破片と接合することができた。長径1.0m、短径0.85mの楕円形を呈する土壁5から水差形土器（第89図、625）が破砕された状態で出土している。底部に焼成後穿孔が施される水差形土器（624）は土層観察用の南壁から出土したため検出状況を確認できていない。また、1号主体部の北辺の墓壇内埋土上部から打製石剣（第141図）が切先を主体部のほうへ向けた状態で出土している。検出した当初は墓壇の外であったが、主体部を南北に断ち割ったところ墓壇北辺の掘り方は大きくなり、検討の結果、墓壇の掘方内からの出土であると判断された。これらの供献土器から当方形周溝墓の築造時期は、第Ⅳ様式前半と考えられる。

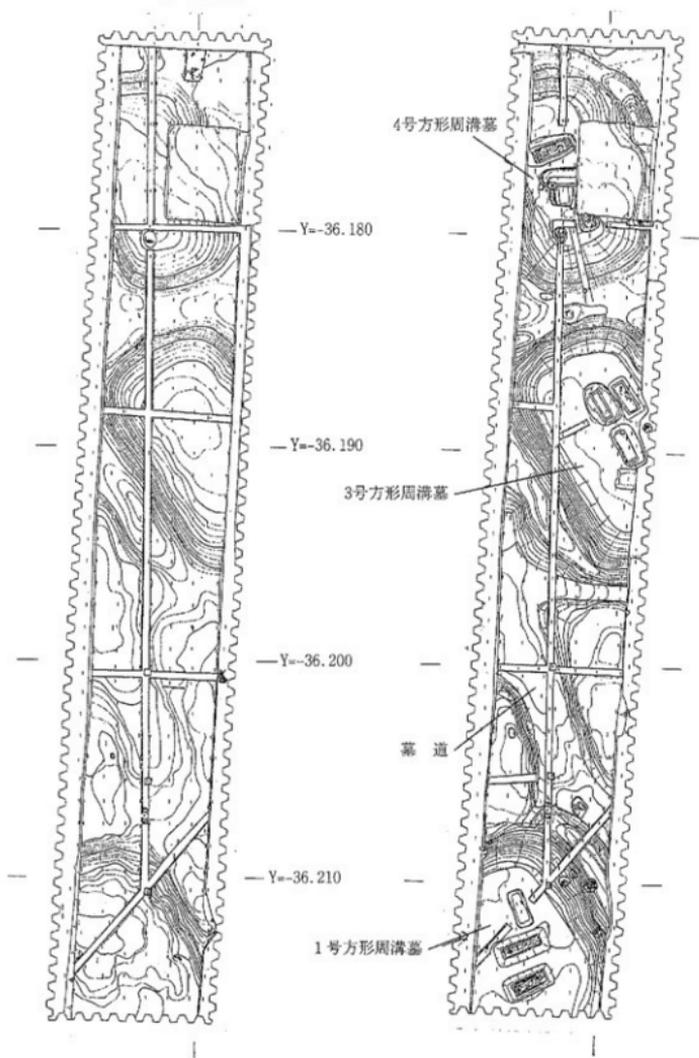
周溝からは供献土器とみさせるものは出土しておらず小破片がわずかに出土している程度である。

墳丘上面から土器箱1基を含め4基の主体部を検出している。

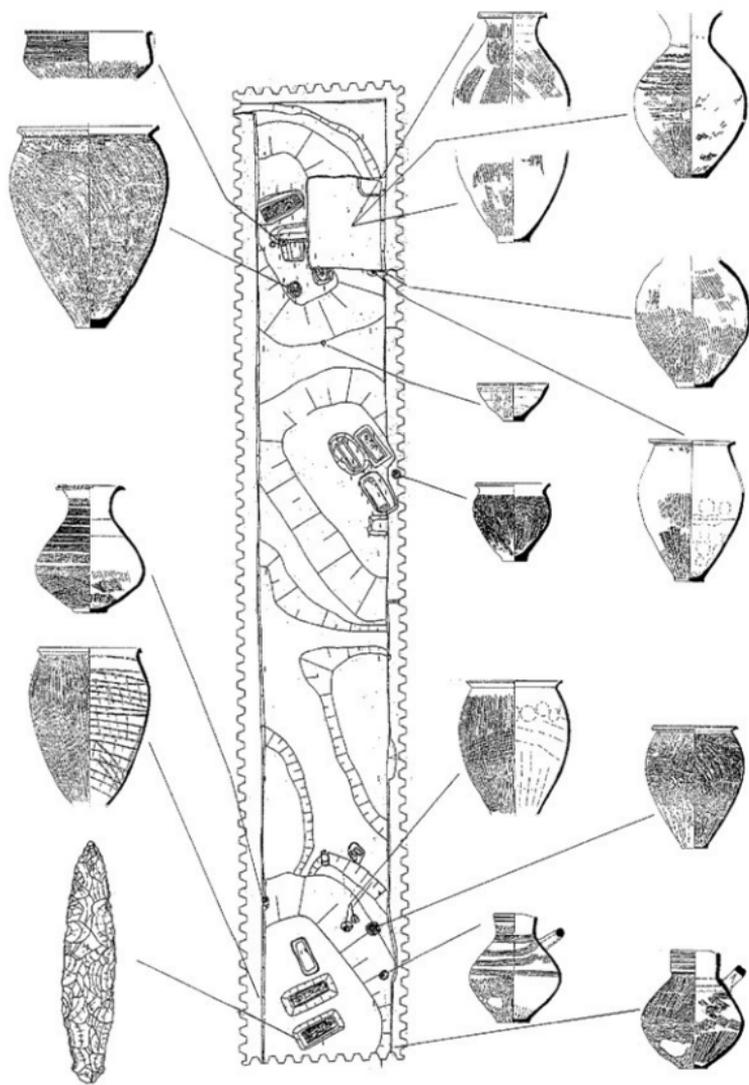
1号主体部（第82図）

墳丘の中央部南西に位置し、埋葬施設は木棺を使用している。墳丘の上面から長軸2.3m、幅1.1m、深さ0.75m、下場1.9m、0.74mの木棺をより一回り大きい隅丸長方形の墓壇を掘り、底面を平らに整地したあと木棺を据える。木棺は全ての部材を検出している。残存状態はあまり良くないが、比

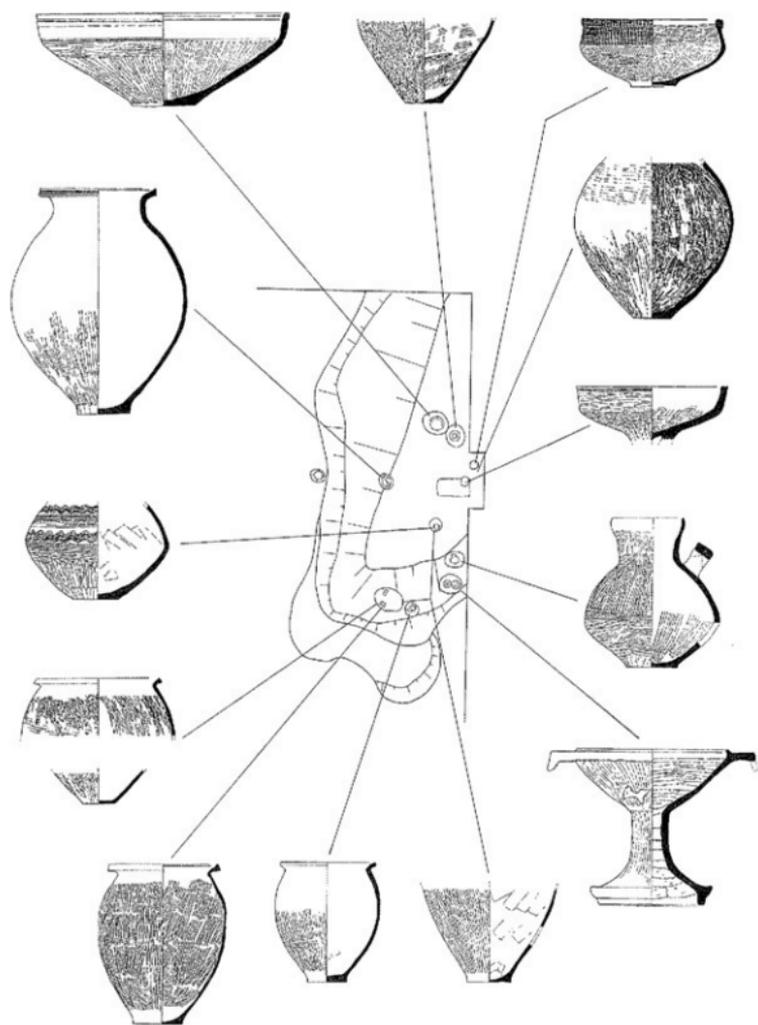
X=-148.540



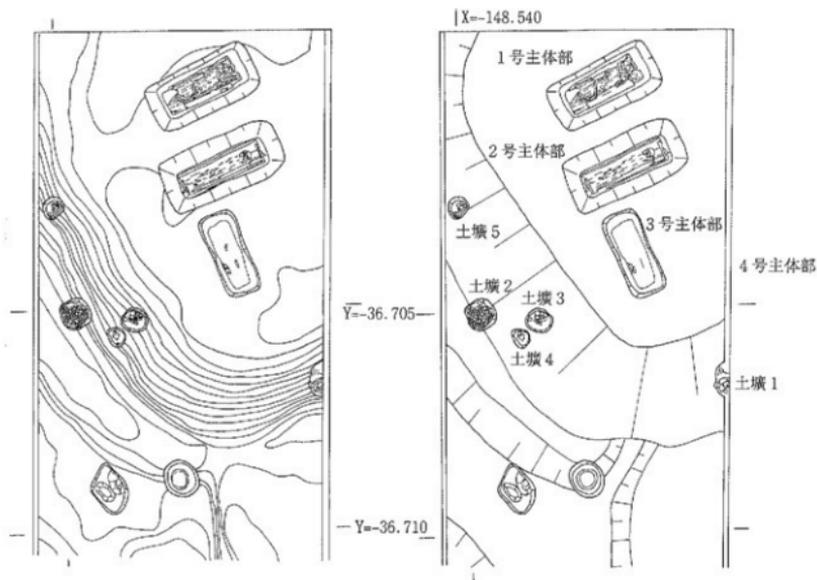
第77图 D地区 方形周溝墓檢出狀況(左:填丘·右:木棺)平面圖



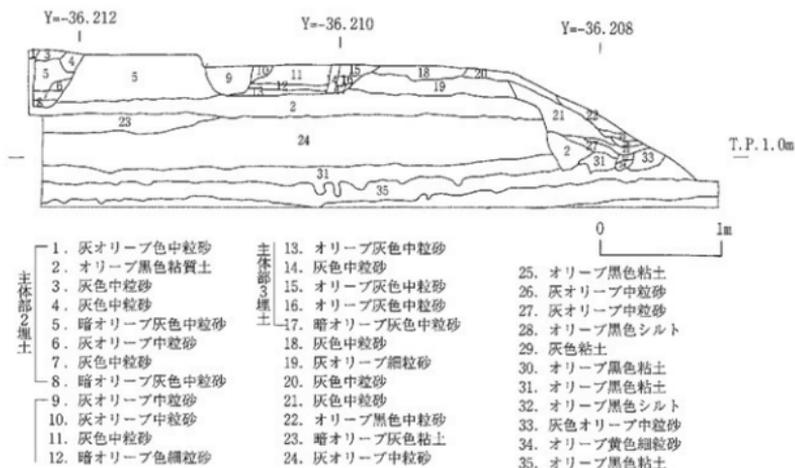
第78图 D地区1·3·4号方形周溝墓土器棺·供獻土器他檢出位置图



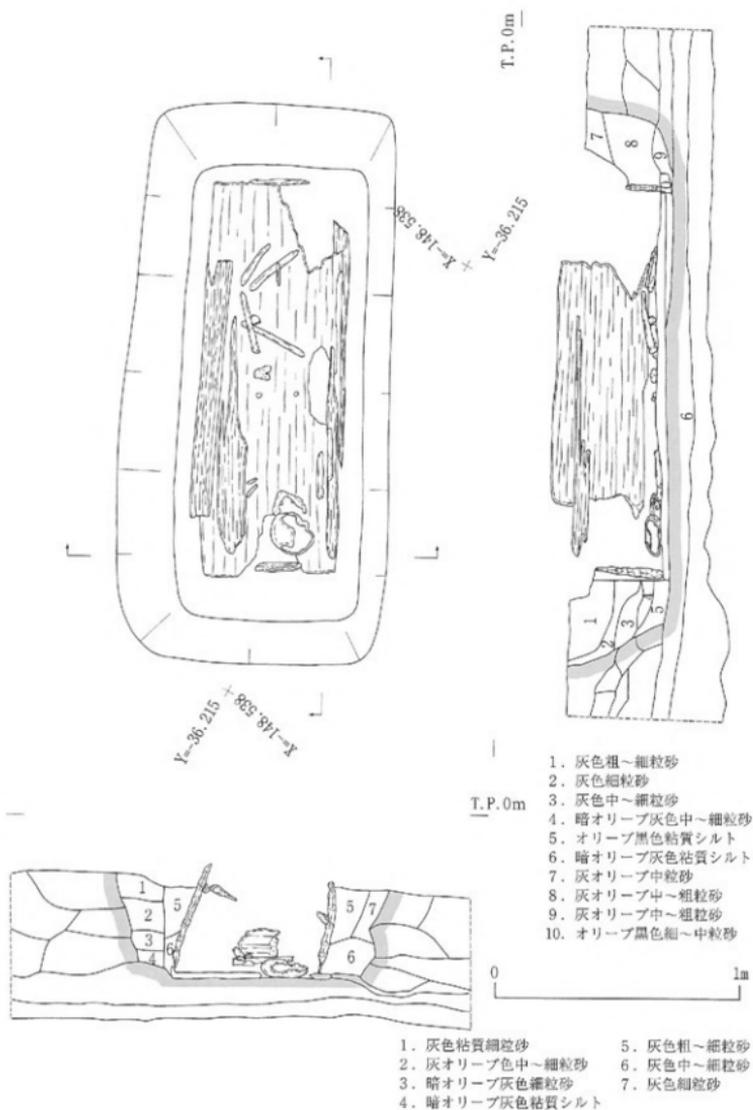
第79图 C地区5号方形周溝墓供献土器檢出位置图



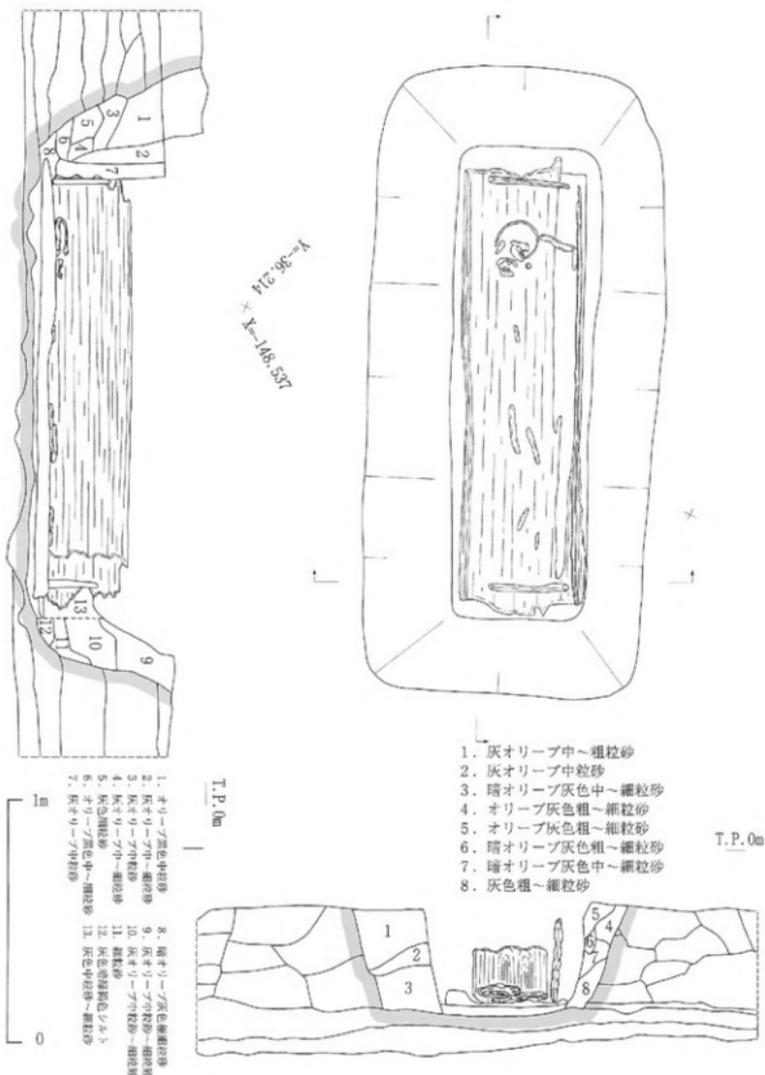
第80図 1号方形周溝墓遺構検出状況実測図



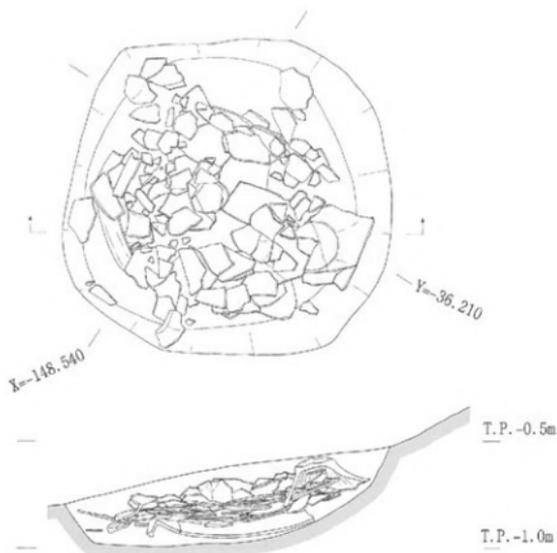
第81図 1号方形周溝墓墳丘土層断面実測図



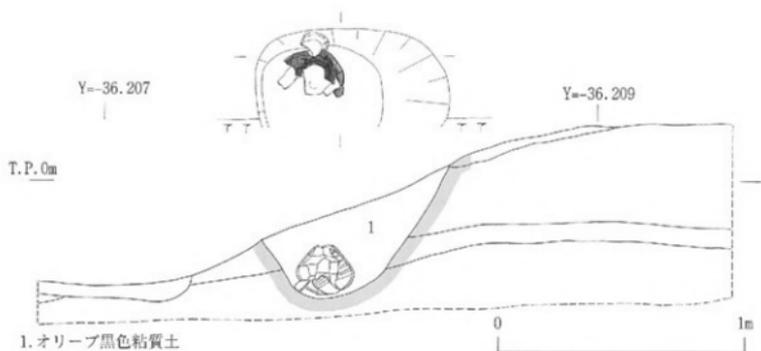
第82図 1号方形周溝墓1号主体部平面・立面実測図



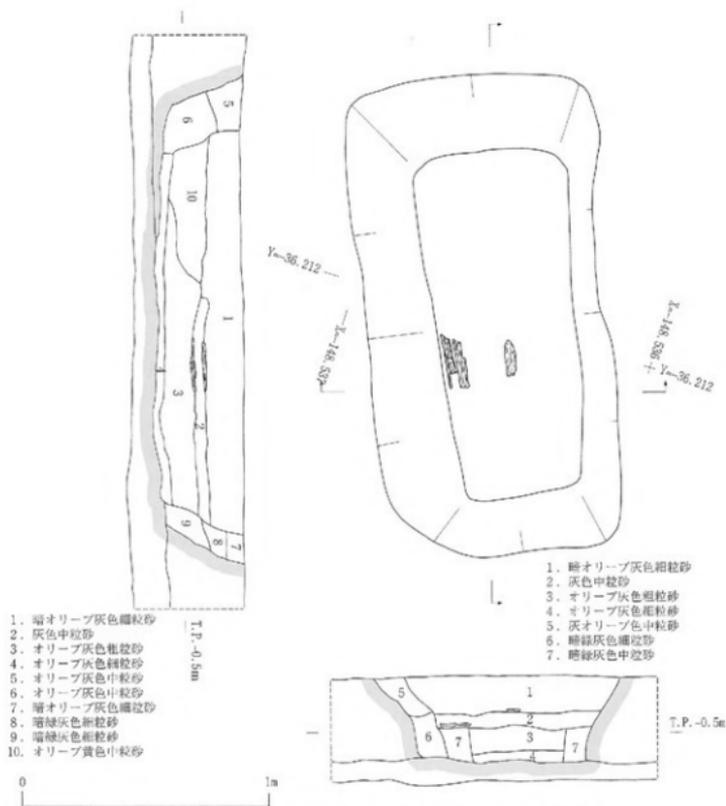
第83図 1号方形周溝墓3号主体部平面・立面実測図



第84図 1号方形周溝墓土壌2 供献土器出土状況平面・断面実測図



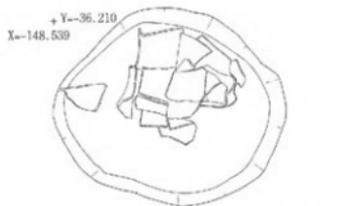
第85図 1号方形周溝墓土壌1 供献土器出土状況平面・断面実測図



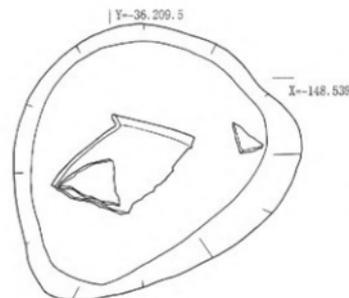
第86図 1号方形周溝墓3号主体部平面・立面実測図

較的残りが良い底板で長さ1.61m、幅0.51m、厚さ0.07m、東側板で高さ0.40m、幅1.09m、厚さ0.05m残存している。底板は南辺が特に腐食しており、全体的に厚さが減じている。痕跡を含め長さ1.7mと推定できる。東側板は南北両端から大きく腐朽しているが中央部はほぼ元の高さを留めていると考えられる。内法は長さ1.5m、幅0.45m、高さ0.45mである。側板、小口板はともに原位置をあまり動いていない。側板は土圧により西へ傾き、北小口板はやや内に傾いている。北小口板は底板の端に、南小口板は端から0.06m中に入れ立っている。小口板はヨコ日使いである。福永伸哉氏による分類（『弥生時代の木棺墓と社会』『考古学研究』第32巻第1号）のⅡ形式である。小口板を設置する底板の掘り込みは判然としない。棺材は全てコウヤマキを使用している。

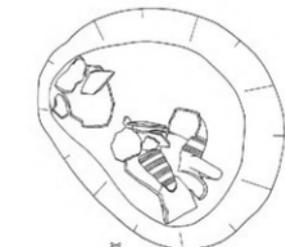
被葬者は下顎骨・下顎大臼歯・上肢骨・左右大腿骨・左右脛骨・右腓骨を検出した。25才前後の成人であるが、性別は不明である。検出状況から仰臥屈肢の姿勢で、木棺の長軸からN-25° -Wへ頭を向けて葬られていたと考えられる。



第87図 土抔3 供献土器出土状況平面・断面実測図



第88図 土抔4 供献土器出土状況平面実測図



第89図 土抔5 供献土器出土状況平面実測図



2号主体部（第83図）

検出した墳丘の中央部に位置している。埋葬施設は木棺である。墳丘の上面から長軸25m、幅1.1m、深さ0.8m、下場1.85m、0.56mの隅丸長方形で、木棺が納まる程度の墓壇を掘り込み、底面を水平にならし木棺を据える。木棺の底板の東辺は腐朽が進んでいる。中央部では上面が特に瘦せ、厚さ0.02mまで薄くなっている。西側板を立てたと推定できる底板の西辺は状態が良く厚さ0.07mが残存している。南北両端はやや腐食しているが、底板の大きさは長さ約1.83m、幅0.46mである。小口板は上部が腐朽し幅は一回り小さくなっている。東側版はほぼ元の高さを保っていると考えられる。南小口板との組み合わせ部分は段状に削り出し小口板を挟む。西側板と蓋板は残っていない。墓壇北部の埋土の状況と合わせ、木棺の内法は推定で長さ1.64m、幅0.42m、高さ0.46mである。木棺の形式は底板の上に小口板と側板を載せるⅡ形式である。底板の南北端は残りが悪いため掘り込みは不明である。小口板はタテ目使いである。各部材の樹種は底板がヒノキ、東側板、両小口板はコウヤマキである。

被葬者は上顎骨・下顎骨、大臼歯、大腿骨を確認し、熟年の成人である。性別は不明である。検出状況から仰臥伸展の姿勢で埋葬されていた可能性が高い。頭位は木棺の長軸からN-24°-Wを向いている。

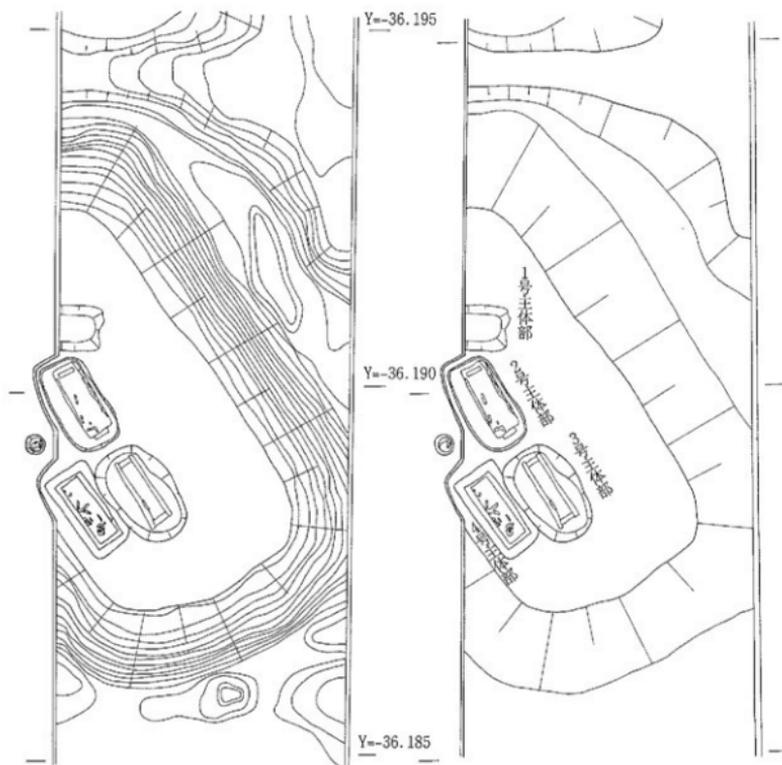
3号主体部（第86図）

墳丘の西隅部に位置している。木棺を使用するが、残存していたのは南側板と蓋板の一部のみである。墳丘の上面から長軸1.95m、幅0.97m、深さ0.65m、下場1.4m、0.55mの隅丸長方形の墓壇を掘り、長軸をN-66°-Eに向け木棺を埋置する。底板の痕跡を長さ1.4m、幅0.3~0.4mの規模に確認した。部材の樹種は、南側板がヒノキ蓋板がコウヤマキである。人骨は残存していない。

墓壇の底面は1・2・3号主体部とも旧表土をわずかに掘り込む程度でほぼ同じレベルにある。

4号主体部（第111図）

甕形土器を棺身とし蓋を用いない土器棺である。墳丘北部の先行トレンチ内で確認したため、掘り方を検出できなかった。底部を銅矢板で寸断されてい



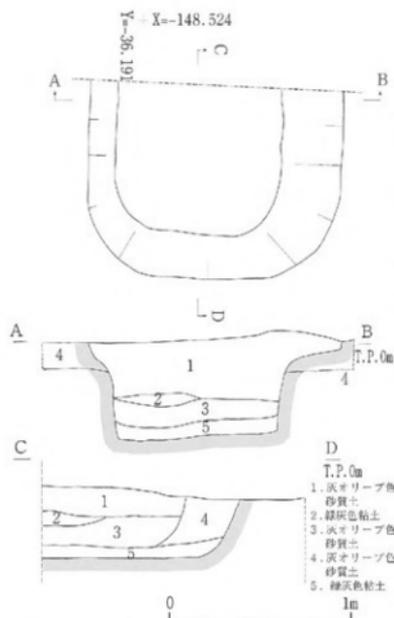
第90図 3号方形周溝墓遺構検出状況実測図

たが、体部下半から上部は良好に残存しており、大部分は土圧のため割れた状態であった。やや口縁部を上に向け横たえられた姿勢で、口縁と底部の軸は南を向いていた。

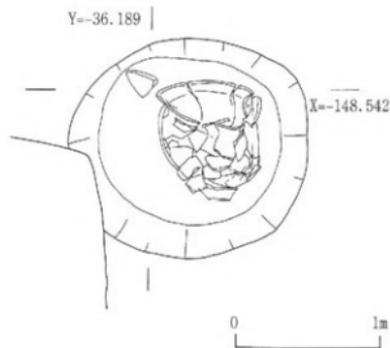
3号方形周溝墓（第90・91図）

D区の中央東より（D-3から5区）で検出した。墳丘の南隅は調査区の外に及ぶが、3つの隅を確認しており、墳丘の規模は推定することができる。上面が長軸7.2m、短軸3.6m、墳丘裾で長軸10.4m、短軸6.5mの隅丸長方形を呈する。墳丘長軸の向きは $N-59^{\circ}-E$ である。墳丘高は最も低い北西周溝の底から0.93~1.1mである。墳丘中央部では高さ0.45mの盛土を持っている。墳丘の周囲は幅0.6~1.5mの周溝が巡り、北西側が広く、4号方形周溝墓との間の北東周溝は比較的狭くなっている。周溝は黒色粘土が連続して堆積し、埋没している。

旧表土はT.P.-0.5mの暗オリープ灰色シルト層で、南東部では墳丘上面近くまで旧表土が盛り上がっている一角がある。周溝に相当する部分を南東で0.4m掘削し、0.1~0.5m²の塊状に墳丘の盛土として積み上げたものと推察される。南東部では特に斜面を形成する盛土が厚く施されている。



第92図 3号方形周溝墓1号主体部平面・断面実測図



第93図 3号方形周溝墓供獻土器出土状況平面実測図

供獻土器（第115図）は完形の小型壺形土器（第93図、626）が土圧により割れた状態で検出されたのみである。2号主体部から0.6m南のビット状の掘り込みに埋められていた。南壁から検出しており、ビットの一部は銅矢板にかかっている。周溝や壺土内からは小破片の土器が出土しているのみである。方形周溝墓に伴う土器が少なく築造時期を確定する根拠は薄い。隣接する4号方形周溝墓との間の周溝の堆積状況から時間差を捉えることはできないため、ほぼ同時期の第Ⅳ様式前半と考えることができる。

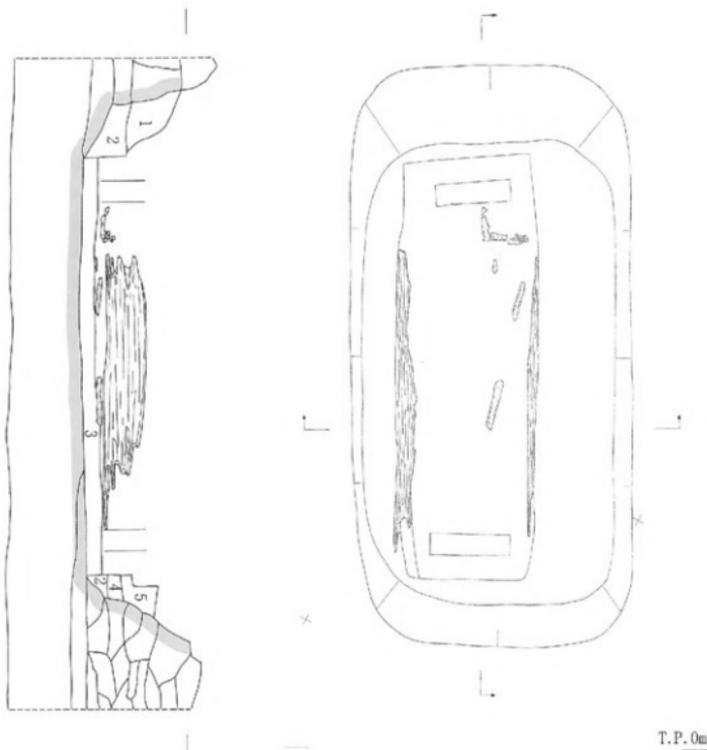
墳丘上面から4基の主体部を検出している。主体部は中央部から南に偏在する状況を呈している。

1号主体部（第92図）

墳丘の南西部に位置し、南半分は調査区外に及ぶ。墳丘の上面から長軸0.54m以上、幅0.69m、深さ0.27m、下場0.42m以上、0.46mの隅丸長方形の墓壇を掘り、底面を平坦にしている。木棺は検出していないが、2層から棺材の痕跡を確認しており、埋葬施設に木棺を使用していたと考えられる。墓壇の長軸はN 2° -Eである。他の木棺を使用する主体部の向きは墳丘の方向と合わせているが、当主体部のみ墳丘の向きから61°のずれがある。

2号主体部（第94図）

墳丘の中央部に位置する。埋葬施設は木棺である。墳丘の上面から長軸2.32m、幅1.17m、下場1.84m、1.08mの隅丸長方形の墓壇を掘削し、底面を整地している。墓壇は木棺幅の倍程度の大きさで、やや西に片寄らせて木棺を据える。木棺材は両側板を検出した。北側板は長さ1.23m、高さ0.11m、厚さ0.03m、西側板は長さ1.18m、高さ0.17m、厚さ0.04mである。樹種は南側板はコウヤマキ、西側板はヒノキである。墓壇の整地面には底板（長1.75m、幅0.56m）、小口板（幅0.32m、厚0.09m）の痕跡が認められる。痕跡から側板と小口板は底板の上に立てられていた状況を観察することができる。木棺形式はⅡ形式である。



1. オリーブ黄色砂質土 4. 灰オリーブ砂質土
 2. 灰色砂質土 5. 灰オリーブ砂質土
 3. 暗緑灰色シルト

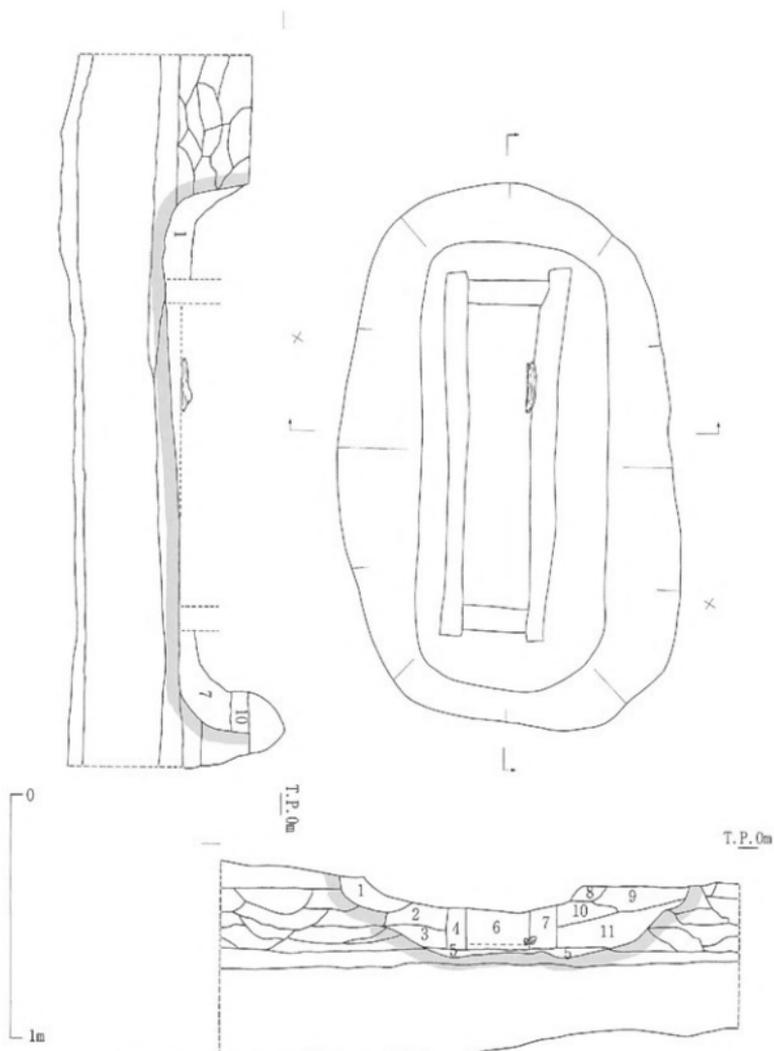
0 1m

第94図 3号方形周溝墓2号主体部平面・立面実測図

被葬者は、成人と考えられる上顎骨、下顎骨、歯、右腓骨を検出した。20才前後の成人である。性別は不明である。頭位は木棺の長軸からN-63°-Eを向く。埋葬姿勢は遺骨の残りが少ないため不明である。歯は棺内の東隅に位置し、木棺の軸より東にずれてた状態で埋葬された可能性が高い。

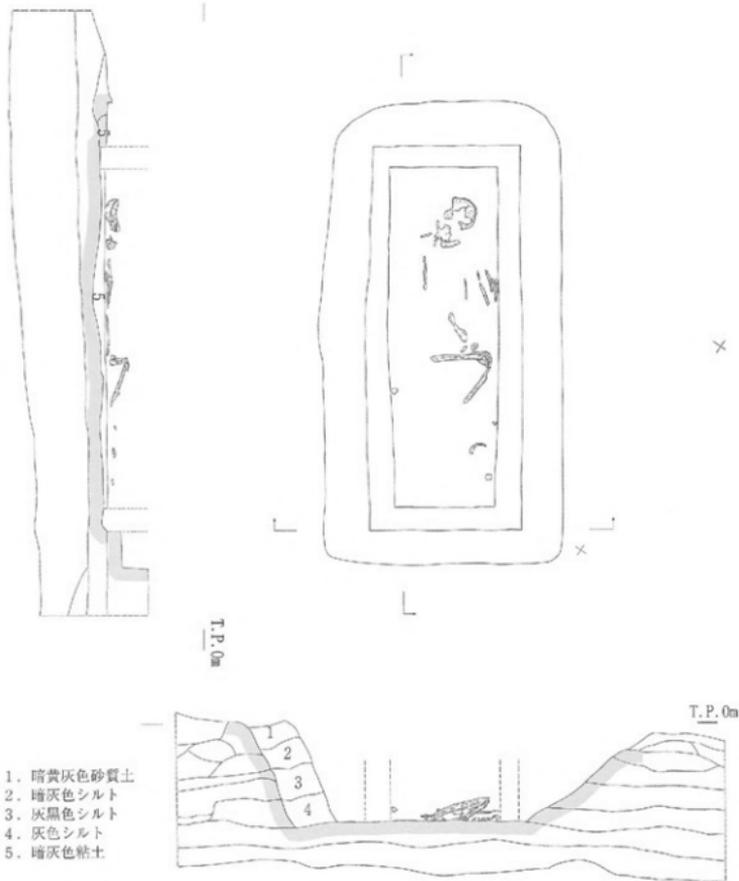
3号主体部（第95図）

墳丘の中央東部に位置し、埋葬施設は木棺である。墳丘の上面から長軸2.2m、幅1.32m、深さ0.55m、下場1.84m、0.75mの楕円形を呈する墓壇を掘る。墓壇壁の傾斜は緩く、断面は皿状をなす。



- | | | |
|--------------|--------------|----------------|
| 1. 暗オリーブ灰色粘土 | 5. オリーブ黒色シルト | 9. 灰オリーブ色細粒砂 |
| 2. 黄褐色中粒砂質土 | 6. 灰色粘土 | 10. 灰オリーブ色細粒砂 |
| 3. 灰色中粒砂質土 | 7. 暗灰色粘土 | 11. 暗オリーブ灰色粘質土 |
| 4. 暗オリーブ灰色粘土 | 8. 灰オリーブ色粘質土 | |

第95図 3号方形周溝墓3号主体部平面・立面実測図



1. 暗灰色砂質土
2. 暗灰色シルト
3. 灰黒色シルト
4. 灰色シルト
5. 暗灰色粘土

第96図 3号方形周溝墓4号主体部平面・立面実測図

墓壁は4号主体部を切っている。木棺の部材はコウヤマキ製の東側板を僅かに検出したのみである。墓壁底面には小口板と側板が直立していたと考えられる痕跡が「II」の字形に明瞭に残存していた。痕跡の底面は0.05~0.03m底板痕跡面から下がっており、小口板と側板が底板を挟み込んでいた可能性が高い。小口板と側板の痕跡から木棺の内法は長さ1.3m、幅0.25m、高さ0.17m以上で、長軸はN-60°-Eを向いている。人骨は出土していない。

4号主体部 (第96図)

墳丘の南東部中央に位置する。墳丘を掘り下げた段階で墓壁を確認した。墓壁の下場は長さ1.9m、

幅0.97mである。南端は南壁にかかっており、その観察から、墳丘上面から掘りこまれた深さ0.45mの墓壇である。木棺は検出できなかったが、整地面には「ロ」の字形に側板と小口板の痕跡があり、埋葬施設は墓壇の大きさと痕跡から内法長さ1.39m、幅0.44mの木棺と推定される。人骨検出面から北小口板の痕跡底面は0.03m下がり、側板と南小口板の痕跡底面は0.04mあがる。

被葬者は、成人と考えられる上顎骨、下顎骨、歯、上肢骨、下肢骨を検出した。仰臥屈肢の姿勢で埋葬され、頭位は木棺の長軸からN-56°-Eである。齒は棺内の東側に位置し、木棺の軸より東にずれてた状態で埋葬された可能性が高い。

4号方形周溝墓(第97・99図)

D区の東端(D-1から3区)で確認した。墳丘の北隅は調査区外へと続き、墳丘の南東辺は大阪府教育委員会による試掘調査により攪乱されている。南裾部は南壁にかかっており明確ではないが、調査区を大きく出ることはないと考えられる。墳丘上面の長軸は7.0m、短軸は5.6m、墳丘の裾で長軸は10.9m、短軸は8.0mを測る隅丸の長方形を呈する。長軸はN-62°-Eの方向を向く。北東周溝の底からの高さは1.13mで、墳丘中央で0.68mの盛土をしている。検出面で4号主体部の土器棺の口縁部が露出しており、本来の墳丘の高さはおそらく1.3m前後と推定される。周溝は北東部では上場幅が1.3mを測り、南東中央部は土壌状に落ち込み特に深くなっている。周溝北西側では幅0.6m、深さ0.2mの浅い周溝である。3号方形周溝墓との間の周溝の境は明瞭ではないが、一部共有するものの個々に周溝を巡らせるようである。周溝は3号方形周溝墓との間の周溝の底に暗緑灰色粘質土が堆積するほかは黒色粘土が連続して堆積し埋没する。

旧表土は南東部がT.P.-1mの黒色粘土で、東西断面でT.P.-0.45m~0.6mに位置する。墳丘中央部は0.2~0.6m²の塊状に盛土を積み上げ、周辺部では水平方向に不規則に積み上げている。4号主体部付近は不明瞭であるが、埋葬された後に墳丘全体を覆うように盛土を0.1m行っている。

供献土器(第116図)は1号・2号主体部上部の径0.44mの円形を呈するビット(第103図)から甕形土器(634)と壺形土器と考えられる底部(638)が出土している。甕形土器は墳丘の南東裾の土壌から出土した破片と、接合することができた。墳丘南西裾の径0.3mの円形ビットからは鉢形土器(636)が完形の状態で出土した。攪乱によって切られている南東裾の土壌からは壺形土器の体部(628)のほか甕形土器の口縁部(633)、壺形土器の口縁部(629)が出土している。これらの供献土器から築造時期は第IV様式前半と考えられる。

盛土の中からはわずかであるが高坏の脚部(639)、が出土している。

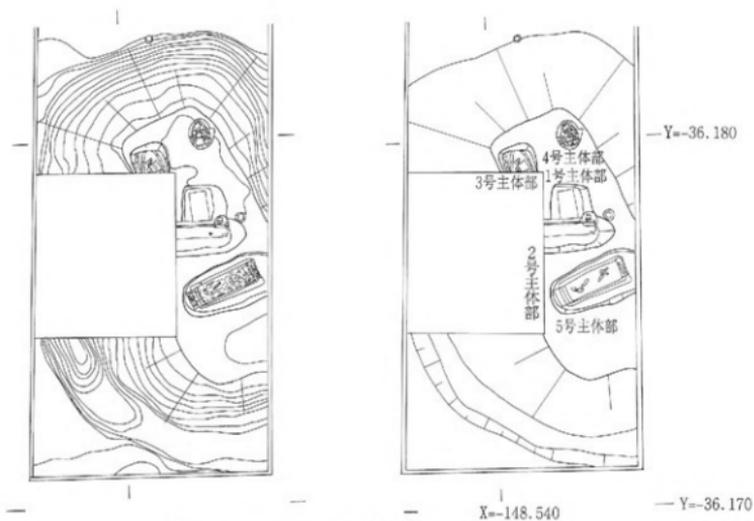
墳丘上面から5基の主体部を検出した。

1号主体部(第98図)

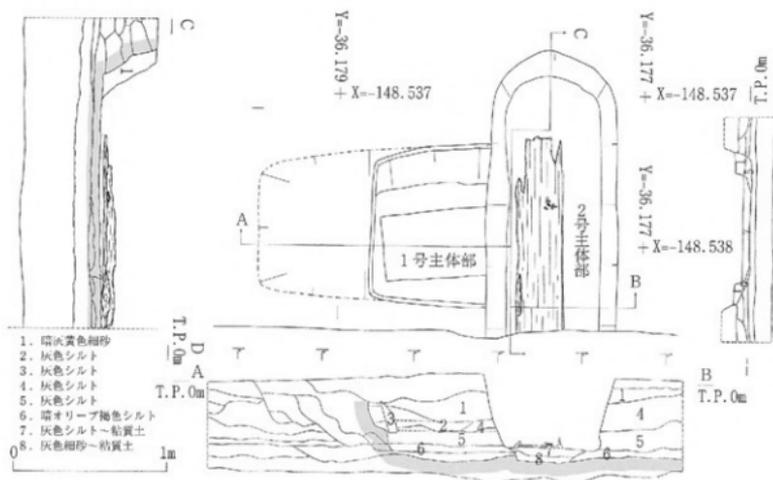
墳丘の中央部に位置している。2号主体部に東部を切られている。長さ1.5m以上、幅0.98m、深さ0.51m、下場0.8m以上、0.47mの墓壇を掘り、底面に0.06mの厚さの灰色シルト層を敷き木棺を埋納する。木棺の部材は検出できなかったが、底板と小口板の痕跡を確認している。前者は長さ0.65m、幅0.41m、後者は高さ0.2m、厚さ0.06mである。痕跡の長軸はN-83°-Eを向いている。木棺の組み合わせは底板を小口板が挟む形のものである可能性が高い。2号主体部の東側には墓壇の東端を確認できないため長軸は1.3m以下であり、木棺の長さは1m以下と推定され小さいものとなる。人骨は確認していない。

2号主体部(第98図)

墳丘の中央部に位置し1号主体部の木棺痕跡を切っている。埋葬施設は木棺を使用している。試掘調査のため南部を失っている。長さ1.68m以上、幅0.85m、深さ0.73m、下場1.66m以上、0.59mで、



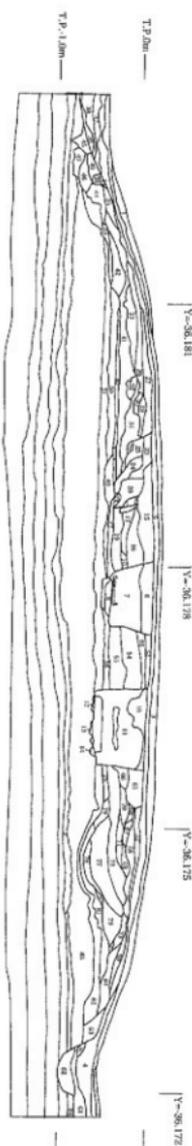
第97図 4号方形周溝墓遺構検出状況実測図

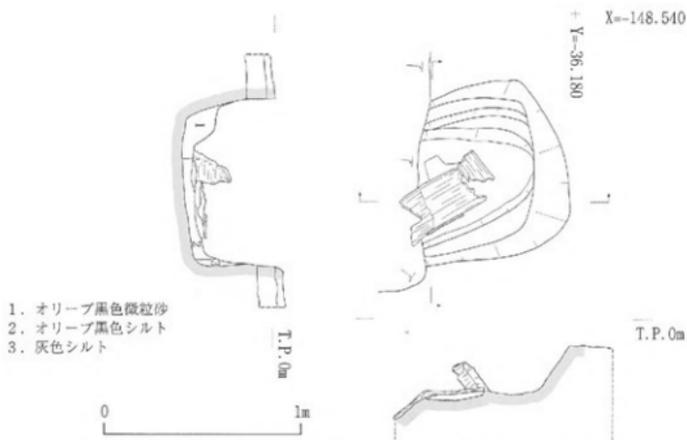


第98図 4号方形周溝墓1・2号平面・立面実測図

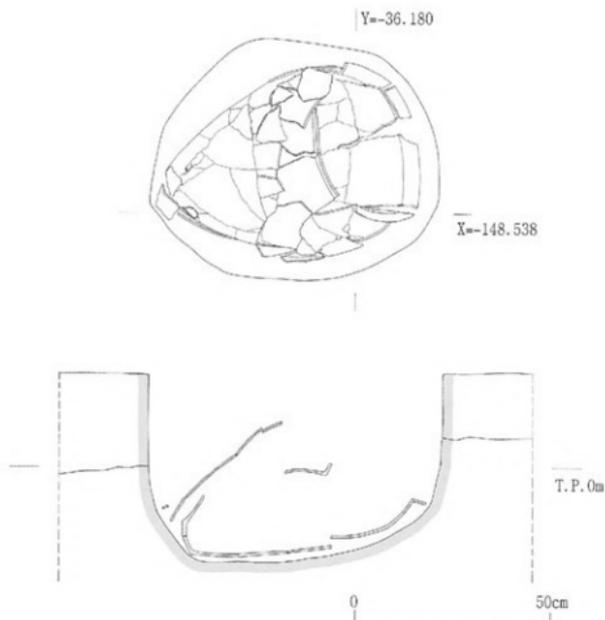
1. 暗灰黒色砂質土
2. 灰黒色砂質土
3. オリーブ黒中粒砂
4. 黒色粘土
5. 黒褐色中粒砂
6. 黒褐色砂質土
7. 暗緑灰色砂質土
8. 暗緑灰中～細粒砂と灰オリーブ中～細粒砂
9. 暗オリーブ灰細粒砂
10. 灰色粘質土
11. 暗灰黒色砂質土
12. オリーブ灰細粒砂と暗オリーブ灰細粒砂とオリーブ黄粗～細粒砂
13. 灰色細粒砂とオリーブ黄粗～細粒砂
14. 暗オリーブ灰細粒砂
15. 黄灰色シルト
16. 黄灰色中粒砂と灰オリーブ中粒砂
17. 黄灰色シルト
18. 黄灰色シルト
19. オリーブ黒色粘土
20. オリーブ黒粘質シルトと灰オリーブ細粒砂と褐色粗～中粒砂
21. 灰オリーブ砂質土
22. オリーブ灰細粒砂と暗オリーブ灰細粒砂と暗緑灰細粒砂
23. オリーブ灰色砂質土
24. 灰色シルトと灰オリーブ細粒砂
25. 暗オリーブ灰細粒砂と灰オリーブ細粒砂
26. 暗オリーブ灰色砂質土
27. オリーブ灰色砂質土
28. オリーブ灰細粒砂と灰オリーブ細粒砂
29. オリーブ黄色砂質土
30. オリーブ黄細粒砂と灰色細粒砂
31. 暗オリーブ灰細粒砂と灰オリーブ中～細粒砂
32. 暗オリーブ灰細粒砂とオリーブ色中～細粒砂
33. 灰色細粒砂と灰オリーブ中～細粒砂
34. オリーブ黒粘土
35. オリーブ黒粘土
36. オリーブ黒細粒砂混じり粘土と暗オリーブ灰細粒砂
37. オリーブ黒色砂質土
38. 暗オリーブ灰色粘土
39. 暗オリーブ灰色粘土
40. 暗オリーブ灰粘土混じり中～細粒砂と灰オリーブ中～細粒砂
41. 暗オリーブ灰細粒砂とオリーブ黄中～細粒砂
42. 暗緑灰粘質シルト
43. 暗緑灰粘質シルト
44. 暗オリーブ灰粘質細粒砂と灰オリーブ中～細粒砂
45. 暗オリーブ灰細粒砂とオリーブ黄粗～細粒砂の互層
46. 灰オリーブ細粒砂
47. オリーブ灰細粒砂と灰色粘土ブロック
48. 暗オリーブ灰粘質シルト
49. 暗オリーブ灰細粒砂
50. オリーブ黒粘質シルト
51. 暗オリーブ灰粘質シルト
52. 暗オリーブ灰色シルト
53. 暗オリーブ灰色粘土
54. 灰色シルト
55. 灰色シルト
56. 暗オリーブ灰色砂質土
57. 暗灰色砂質土
58. 灰色細粒砂と灰オリーブ細粒砂
59. オリーブ灰細粒砂とオリーブ黒粘質細粒砂
60. 粘質細粒砂
61. 灰色砂質土
62. 細粒砂と微砂混じり粘土と灰オリーブ色粗～中粒砂の互層
63. 黒色粘土
64. オリーブ黒粘質細粒砂
65. 灰色細粒砂
66. オリーブ灰細粒砂と灰オリーブ細粒砂
67. 黄褐色中～細粒砂と灰色細粒砂
68. 灰色細粒砂とオリーブ褐色細粒砂
69. 灰色細粒砂とオリーブ細粒砂
70. 暗オリーブ灰シルトとオリーブ灰細粒砂
71. オリーブ黒シルト
72. オリーブ黒粘質シルト
73. 暗オリーブ灰細粒砂
74. オリーブ黒粘質シルトと灰オリーブ細粒砂
75. 暗オリーブ灰粘質シルト
76. 暗緑灰粘質シルト
77. 暗オリーブ灰粘質シルトと灰オリーブ細粒砂
78. オリーブ黒粘質シルトと灰オリーブ細粒砂
79. オリーブ黒細粒砂
80. 黒色シルトと灰オリーブ細粒砂
81. 黒色粘土
82. オリーブ黒粘質シルトと灰色細粒砂
83. 浅黄色中粒砂と灰オリーブ色細粒砂の互層
84. 灰オリーブ色砂質土

第99図 4号方形函溝敷填土上面断面実測図





第100図 4号方形周溝墓3号主体部平面・立面実測図



第101図 4号方形周溝墓4号主体部平面・立面実測図

短辺が丸い長方形の墓塚を掘り、木棺をやや西に寄せた位置に置く。木棺の部材は底板と両側板、蓋板の痕跡を検出したが、側板は腐朽が進みかなり瘦せている。底板は長さ1.22m、幅0.2m、厚さ0.04mが残存している。幅はほぼ当時のものが残っていると考えられる。東側板は底板の上に載せているが、西側板は腐食のため明らかにすることはできない。棺材の樹種は底板がコウヤマキ、西側板がヒノキである。

被葬者は上顎骨、下顎骨、上顎歯、下顎歯は左右の大臼歯が残存しており、5、6才の幼児であるが、性別は判明できない。上顎歯、下顎歯は噛み合わせた状態で検出している。頭位は木棺の長軸からN-0°を向いている。

3号主体部 (第100図)

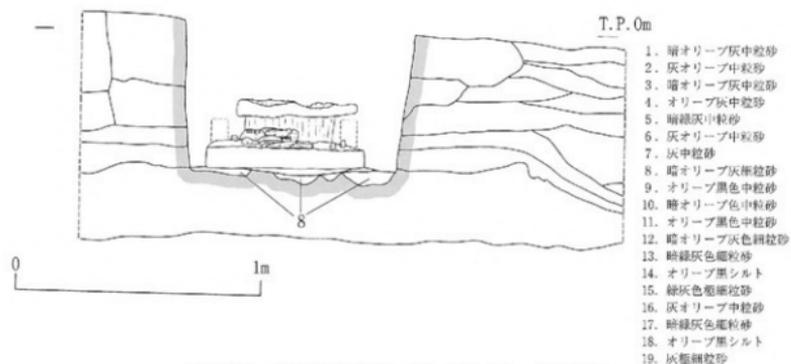
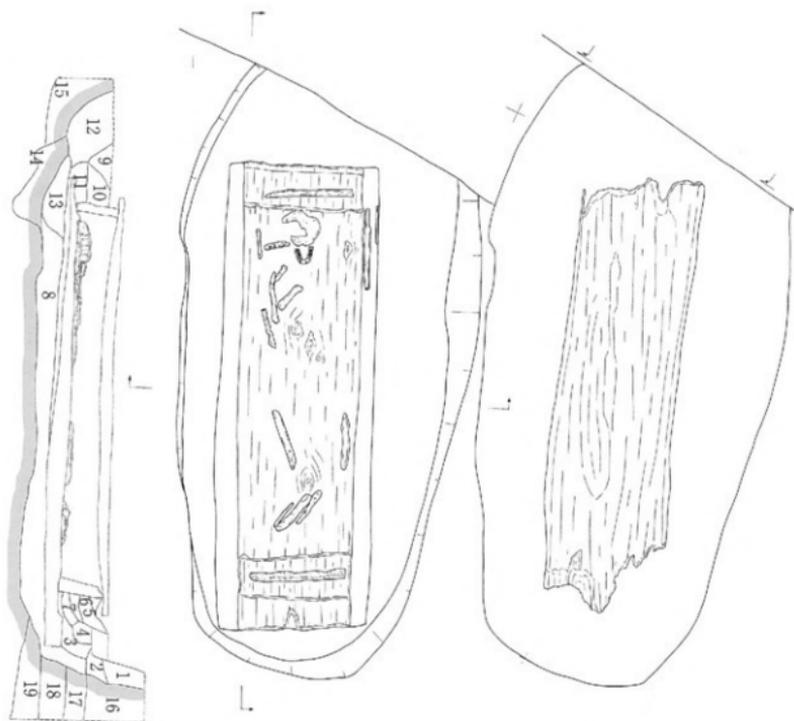
墳丘の南隅に位置し、埋葬施設は木棺を使用している。東部を試掘調査で失っている。長さ0.75m以上、幅0.8m、深さ0.6m、下場0.6m以上、0.7mの墓塚を掘り、木棺を据えている。木棺の部材は蓋板と小口板を、また底板の痕跡を検出している。蓋板は長さ0.05m、幅0.2m、厚さ0.04mが残存している。小口板は幅0.2m、高さ1.8m厚さ0.04cmの残存し、ヨコ目使いである。原位置を動いているため、木棺の向きは不明である。樹種は蓋板がコウヤマキ、小口板がヒノキである。

4号主体部 (第101図)

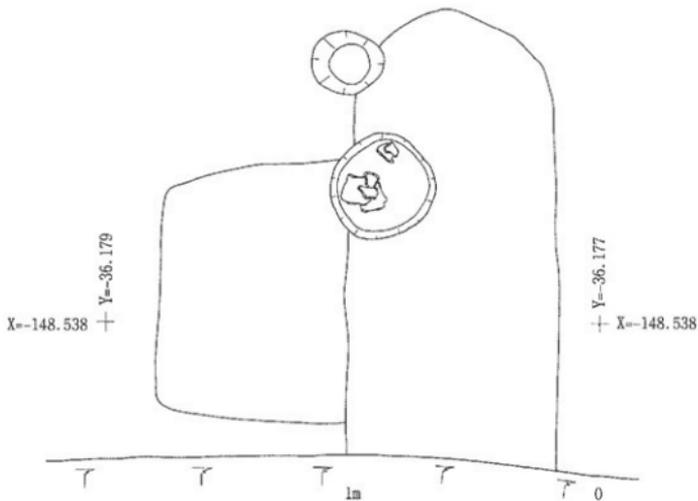
墳丘の東隅に位置する。埋葬施設は土器棺である。墳丘上面から長軸1.4m、短軸1.0mの大きさで、T.P.-0.38mまで掘り込み、底面はレンズ状に窪む。土器棺は、口をN-75°-Eに向け、ほぼ横たえて据えられている。蓋が存在せず、中に土砂が入り込み、土圧で割れているもの高位にある破片以外は原位置をほぼ動いていない。棺身は甕形土器で、底部から約0.08m上に焼成後穿孔が5箇所施されている。すべて円形で均等に開けられている。墓塚から棺身のほかに別個体の甕形土器の大きい破片が11片出土している。色調や厚さが良く似たものであったため、出土状況を明らかにすることはできなかった。

5号主体部 (第102図)

墳丘の中央やや北東よりに位置している。埋葬施設は木棺である。墓塚は北部を先行トレンチで失っている。長さ2.5m以上(推定2.6m)、幅1.14mの上場から、ほぼまっすぐに深さ0.78m掘りこむ。墓塚平面形は短辺が丸い長方形を呈する。下場は2.42m以上(推定2.5m)、1.04mで木棺より一回り大きい。墓塚底面を整地したあと木棺を据えている。西側板以外は全ての棺材を検出している。東側板は非常に腐朽しており、高さ0.05m、幅0.32mしか残っていない。底板の横に痕跡が幅0.07m残っているため底板の横に据えていたことが分かる。小口板は北側が高さ0.2m、幅0.35m、厚さ0.04m、南側が高さ0.22m、幅0.4m、厚さ0.04m残存しタテ目使いである。長さ1.76m、幅0.51m、厚さ0.04mの蓋板は両小口板に載った状態で検出している。底板は今調査で最も残りが良い木棺の部材である。北端はやや腐朽しているがほかの部分はほぼ元の形を保っている。長さ1.92m、幅0.48m、厚さ0.1mで、小口板を立てるための溝を南側で幅0.19m、深さ0.03mの大きさで端まで削り込んでいる。北側では端部が腐食しているがわずかに隆起している部分が認められ、南側と同じく溝を掘っていたと考えられる。幅0.20m残存し、深さ0.03mである。検出した状態での内法は長さ1.52m、幅0.51m、高さ0.22mである。小口板の腐朽度合は不明であるが、両小口板の高さはあまり異ならず、蓋板がほぼ水平に保たれて小口板に載っていることから、内法の高さは大きく変わることはなからう。木棺の形式はⅡ形式である。棺材はすべてコウヤマキが使用されている。なお、底板には人骨が残っていた痕跡や、小口板が立っていた痕跡を把握できる。湿っている状態では確認できなかったが、自然乾燥後は明瞭に観察することができる。



第102図 4号方形周溝墓5号主体部平面・立面実測図

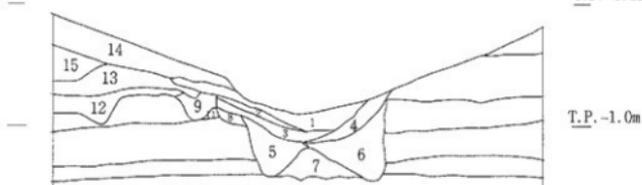


第103図 4号方形周溝墓墳上供献土器出土状況平面実測図

X=148.540

X=148.542

T.P. -0.5m



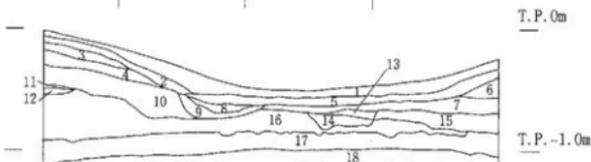
- | | | | |
|-------------|--------------|--------------|---------------|
| 1. オリーブ黒色粘土 | 5. 黒色粘土 | 9. 暗緑灰色粘土 | 13. オリーブ黒色粘土 |
| 2. オリーブ黒色粘土 | 6. オリーブ黒色粗粒砂 | 10. オリーブ黒色粘土 | 14. 黒色粘土 |
| 3. 黒色粘土 | 7. オリーブ黒色粘土 | 11. オリーブ黒色粘土 | 15. オリーブ黒色シルト |
| 4. 灰色粗粒砂質土 | 8. 暗オリーブ灰色粘土 | 12. オリーブ黒色粘土 | |

第104図 4号方形周溝墓墳丘断ち割り東壁土層断面図

Y=36.184

Y=36.185

Y=36.186



- | | | | |
|---------------------|---------------|------------------|---------------|
| 1. オリーブ黒色粘土 | 5. 黒色粘土 | 10. 暗オリーブ灰色シルト | 14. 暗緑灰色粘質細粒砂 |
| 2. オリーブ黒色粘土 | 6. 黒色細粒砂混じり粘土 | 11. 暗緑灰色粘質粒砂 | 15. 暗オリーブ灰色粘土 |
| 3. オリーブ黒色粘質細粒砂 | 7. オリーブ黒色粘土 | 12. 暗緑灰色粘質シルト | 16. 暗緑灰色細粒砂 |
| 4. 暗オリーブ灰色中粒砂混じり細粒砂 | 8. 暗オリーブ灰色粘土 | 13. 暗オリーブ灰色粘質細粒砂 | 17. 暗オリーブ灰色粘土 |
| | 9. オリーブ黒色粘土 | | 18. オリーブ黒色粘土 |

第105図 4号方形周溝墓周溝土層断面図

被葬者は頭骨上顎骨、下顎骨、下肢骨が残存しており、成人である。性別は不明である。頭位は木棺の長軸からN-29°-Eに向いており、仰臥屈肢の姿勢で葬られていたと考えられる。

5号方形周溝墓(第106・109図)

C区の東端(C-1から2区)で墳丘の北西隅を確認した。墳丘は方形ではなく北東隅が鋭角に突き出ている。墳丘上面の長辺は6.6m、短辺は2.2m、墳丘の裾で長辺は8.5m、短辺は4.3m、墳丘の高さはT.P.-0.4mを測り、長辺はN-78°-Wである。旧表土は黒色粘土層、オリブ黒色粘土層で、東側はT.P.-0.6mとやや高く、主体部の辺りまで緩やかに高さを減じ、主体部から西側にかけて比較的角度を増し低くなる。西端での高さはT.P.-1mである。傾斜のある築造面に盛土をするため、主体部の東側で0.27m、西側で0.42mの厚さである。上記の3基の方形周溝墓と同じく0.1~0.5m²の塊状に盛土を行っている。墳丘の北西裾は北西と西方向に短く突出しており、地震によって地滑りが起こり崩れた可能性が高い。周溝に相当する部分は存在していない。供献土器から築造時期は第IV様式前半である。

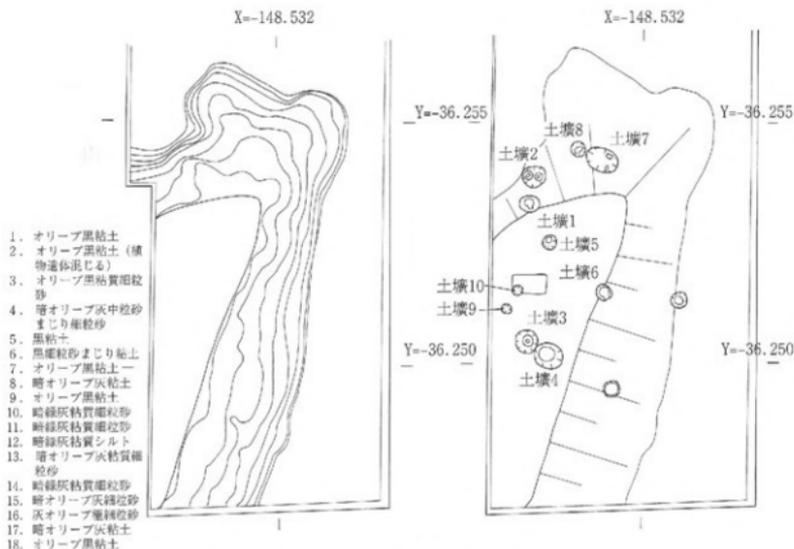
供献土器(第117図)は墳丘上面と斜面の土壌に埋められ、合計15個体出土している。南壁西側付近の墳丘上面から緩やかに斜面にかかる深さ0.4mの土壌1から完形の水差形土器(第108図下左、653)を横たえた状態で、土壌1を切る深さ0.35mの土壌2では高坏形土器(第108図下右、下、657)を坏部と脚部を折り割り脚部を直立させ、坏部は伏せた状態で横に並べて埋納している。体部上半を半分ほど欠く鉢形土器(654)は土壌9から、坏部のみの高坏形土器(656)は土壌10から直上した状態で出土している。土壌10は南壁内より確認したため墓壇上面から掘られたか、墓壇に伴うものかは不明である。主体部の東の径0.56m、深さ0.5mの円形の土壌3では甕形土器の底部(646)を上伏せた状態で埋めている。その北東に連なる径0.51mの円形の土壌4から完形の鉢形土器(第108図中下、655)が直立した状態で埋められている。墳丘上面やや西よりの円形の土壌5から体部上半を欠く甕形土器(第108図中上、642)が直立した状態で出土し、墳丘の上面から斜面にかかるやや楕円形の土壌6から完形の甕形土器(第108図上、640)が横たえられた状態で埋納されている。墳丘上面北西隅の楕円形の土壌7からは甕形土器(第108図上、644、649、650、651)が4点出土している。(649)の甕形土器はすぐ南の土壌8から同一個体と思われる底部が見つかり、(651)は土壌5から出土した破片と接合できる。

主体部の掘り方や盛土の中からは(641、647、648)の甕形土器や甕形土器の破片が出土している。

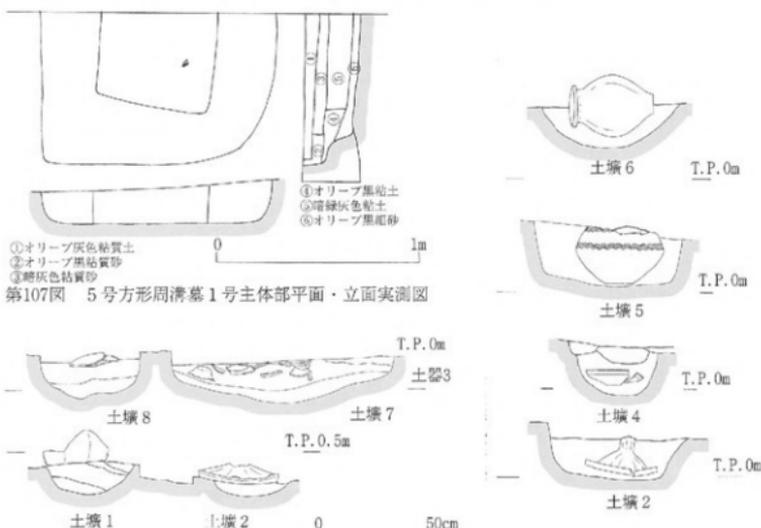
墳丘上面から主体部を1基検出した。ほかに1号主体部を切って西側で検出した甕形土器(643)は土器棺の可能性ある。上半が調査区外となるため体部下半の大きさ以外に手掛かりがなく、当方形周溝墓は土器埋納が多いため特定することはできず、供献土器として取り扱っておく。

1号主体部(第107図)

確認した墳丘の中央部に位置する。南側は調査区外におよぶ。検出した墓壇は上場が長さ0.72m以上、幅1.1mで、深さ0.53mである。埋葬施設は墓壇に残る痕跡から木棺である。痕跡の大きさは、内法は長さ0.48m、幅0.52mである。底板の部分に該当する痕跡の下面は側板の痕跡下面より0.02m低く、底板の上に側板が立っていた可能性が窺える。痕跡の向きはおよそN-1°-Wである。



第106図 5号方形周溝墓遺構検出状況実測図



第107図 5号方形周溝墓1号主体部平面・立面実測図

第108図 5号方形周溝墓出土供献土器検出状況実測図



第109図 5号方形扇形落葉丘土層断面実測図

- | | | |
|----------------------------|------------------------------|----------------------------|
| 1. オリーブ黒粘土 | 56. オリーブ黒色粘土 | 一層細粒砂の互層 |
| 2. オリーブ黒粘土 | 57. オリーブ黒色粘土 | 102. 暗オリーブ色細粒砂と灰色の互層 |
| 3. 黒褐色粘土 | 58. 暗オリーブ灰色シルト | |
| 4. 灰色シルト | 59. オリーブ黒色シルト | 103. 細粒砂と暗オリーブ細粒砂の互層 |
| 5. 黒粘土 | 60. オリーブ黒色粘質シルト | 104. 灰色粘質細粒砂 |
| 6. 黒粘土に中粒砂混じり | 61. 暗緑灰色細粒砂と細粒砂の互層 | 105. オリーブ黒シルト |
| 7. 暗オリーブ灰色細粒砂 | 62. 灰色細粒砂と暗オリーブ色細粒砂の互層 | 106. 黒シルト |
| 8. 灰色シルト | 63. 暗緑灰色粘土 | 107. オリーブ黒粘土 |
| 9. オリーブ黒色粘土 | 64. 灰色粘質細粒砂 | 108. 暗オリーブ灰色粘質細粒砂 |
| 10. オリーブ黒色粘土 | 65. オリーブ灰色中～細粒砂 | |
| 11. オリーブ黒色粘土 | 66. 灰オリーブ中粒砂 | 109. 暗オリーブ灰色細粒砂 |
| 12. オリーブ黒色シルト | 67. 暗オリーブ灰色粘質細粒砂と灰オリーブ細粒砂の互層 | 110. オリーブ黒細粒砂まじり粘土 |
| 13. オリーブ黒色粘土 | 68. 灰色シルト | 111. 灰色細粒砂 |
| 14. 暗緑灰色粘土 | 69. 灰色シルト | 112. オリーブ黒粘土 |
| 15. オリーブ黒粘土 | 70. オリーブ灰色中粒砂 | 113. 灰色粘土と灰色細粒砂の互層 |
| 16. 灰オリーブ細粒砂と灰色細粒砂の互層 | 71. 暗オリーブ灰色細粒砂と暗オリーブ細粒砂の互層 | 114. 暗オリーブ灰色粘土と灰オリーブ細粒砂の互層 |
| 17. 暗緑灰色細粒砂とオリーブ細粒砂の互層 | 72. 灰色粘質シルト | 115. オリーブ黒粘土 |
| 18. オリーブ色細粒砂と暗オリーブ灰色細粒砂の互層 | 73. 灰色シルト | 116. オリーブ黒粘土 |
| 19. 暗緑灰色細粒砂とオリーブ黒粘土の互層 | 74. 灰色シルト | 117. オリーブ黒粘土 |
| 20. オリーブ黒粘質土 | 75. オリーブ黒色粘土 | 118. オリーブ黒粘土 |
| 21. 灰中粒砂 | 76. オリーブ黒粘質細粒砂と暗オリーブ細粒砂の互層 | 119. オリーブ黒粘土 |
| 22. オリーブ色細粒砂と暗緑灰細粒砂の互層 | 77. 灰色細粒砂 | 120. 灰色粘質細粒砂 |
| 23. 灰オリーブ中粒砂 | 78. 灰色細粒砂と灰オリーブ細粒砂の互層 | 121. 灰色粘土 |
| 24. 灰オリーブ中粒砂 | 79. 暗緑灰粘質 | 122. オリーブ黒粘土 |
| 25. 灰オリーブ中粒砂 | 80. 灰色粘質シルト | |
| 26. オリーブ中粒砂 | 81. オリーブ黒色粘土 | |
| 27. 灰オリーブ中粒砂 | 82. 黒色粘土 | |
| 28. オリーブ灰中粒砂 | 83. 暗緑灰中～細粒砂 | |
| 29. オリーブ中粒砂 | 84. 灰色細粒砂と灰オリーブ細粒砂の互層 | |
| 30. 暗オリーブ灰粘質土 | 85. 暗オリーブ細粒砂 | |
| 31. 灰細粒砂 | 86. 灰色細粒砂 | |
| 32. 暗オリーブ灰シルト | 87. オリーブ黒粘土に砂混じり | |
| 33. 暗オリーブ灰シルト | 88. オリーブ黒中粒砂 | |
| 34. 灰オリーブシルト | 89. 灰色細粒砂と灰オリーブ細粒砂の互層 | |
| 35. 暗オリーブ灰シルト | 90. オリーブ細粒砂とオリーブ黒細粒砂の互層 | |
| 36. 灰シルト | 91. 灰オリーブ細粒砂と暗オリーブ灰色細粒砂の互層 | |
| 37. オリーブ黒粘土 | 92. オリーブ灰色細粒砂と灰オリーブ細砂の互層 | |
| 38. オリーブ黒粘土 | 93. 灰色粘質細粒砂 | |
| 39. オリーブ黒粘土 | 94. 灰色シルト | |
| 40. オリーブ黒粘土 | 95. 暗緑灰色細粒砂とオリーブ細粒砂の互層 | |
| 41. オリーブ黒粘土 | 96. オリーブ黒細粒砂 | |
| 42. オリーブ黒粘土 | 97. オリーブ黒細粒砂 | |
| 43. オリーブ黒粘土 | 98. オリーブ黒粘質中～細粒砂 | |
| 44. オリーブ黒粘土 | 99. オリーブ黒粘土 | |
| 45. 灰色粘土 | 100. 灰粘土 | |
| 46. 灰オリーブ細粒砂 | 101. 灰色粘質シルトと灰オリ | |
| 47. 暗オリーブ灰色粘質中～細粒砂 | | |
| 48. オリーブ黒粘土 | | |
| 49. オリーブ黒粘土 | | |
| 50. オリーブ黒粘土 | | |
| 51. オリーブ黒粘土 | | |
| 52. オリーブ黒色粘土 | | |
| 53. オリーブ黒粘土 | | |
| 54. オリーブ黒色粘土 | | |
| 55. オリーブ黒色粘土 | | |

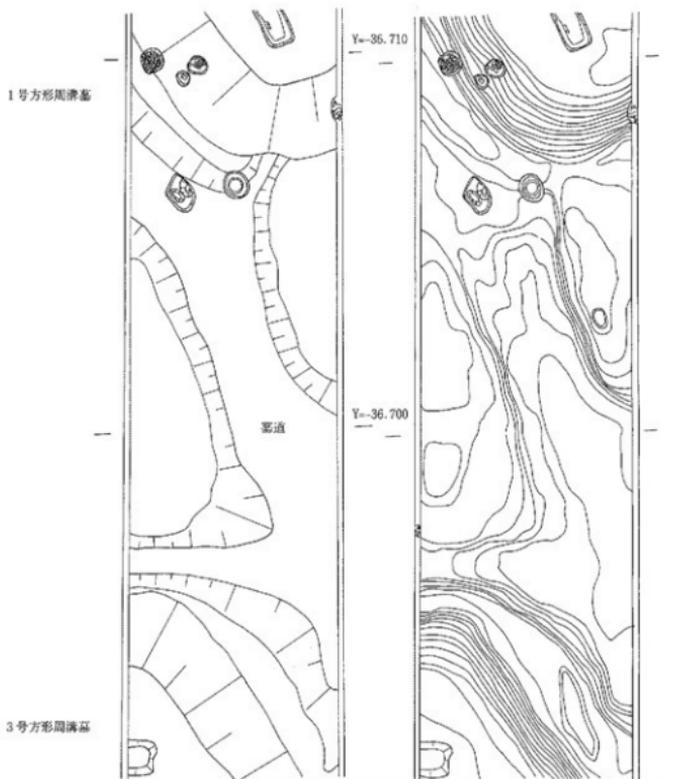
墓道（第110図）

今回検出した盛土をもつ墓道は管見の限りでは初めての報告となろう。

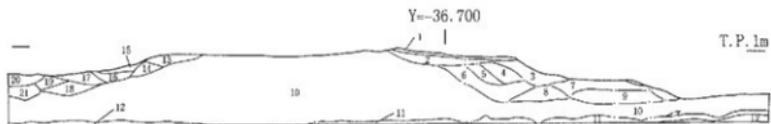
D地区の西半（D-4から8区）で検出した。3号方形周溝墓の北東に位置する墓道は1号方形周溝墓の東まで西南西に伸びる。1号方形周溝墓の東隅と陸橋でつながっており、1号方形周溝墓に沿うように南東に向きを変えている。南および北は調査区外に続いている。上面幅は1~1.3m、断面が台形を呈している。西南西に伸びる墓道から「Y」の字形に枝分かれし、3号方形周溝墓の西側を通る。上面幅が0.65~0.8m、断面がカマボコ形をなす。南は調査区外へと続く。

1号方形周溝墓の陸橋から南へ1.9mの位置に、墓道の上面から掘り込まれる、対角1m、0.64mの不正な菱形をなす掘り方の中に2基の土壇を検出している。ともに楕円形を呈し、大きさはそれぞれ長径0.5m・短径0.25mである。遺物は確認できなかった。

墓道の形成は確認した地点により若干異なる。1号方形周溝墓の東の南壁部では、方形周溝墓の旧表土下の砂層の上面を墓道通路面とし、側面に盛土を行い補強している。3号方形周溝墓の西側の南壁部と座標軸Y=-36,200mのラインでは、それぞれ厚さ0.14~0.06m、0.1mの盛土で全体を覆っている。

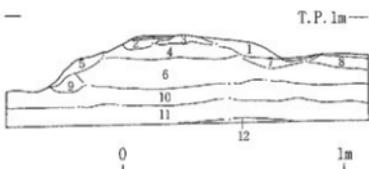


第110図 墓道検出状況実測図



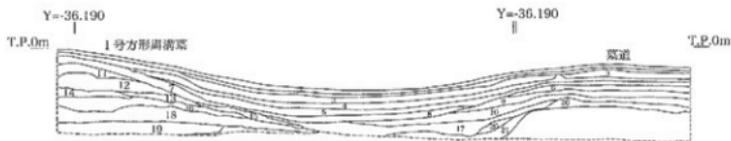
1. 灰色細粒砂
2. 灰色中粒砂
3. 灰色粗～中粒砂
4. 灰色中～細粒砂
5. 灰色中粒砂
6. 灰色粗粒砂
7. 灰色粗～細粒砂
8. 灰色粗～細粒砂・暗オリーブ灰
9. 灰色細粒砂・粘土
10. オリーブ灰色粗～細粒砂
11. 暗オリーブ灰色シルト
12. 灰色粘土
13. 暗オリーブ灰色粘土
14. 暗オリーブ灰色中粒砂
15. 暗オリーブ灰色粘質土～細粒砂
16. 暗オリーブ灰色中粒砂
17. 暗オリーブ灰色細粒砂・暗緑灰
18. 暗緑灰色細～中粒砂・暗緑灰中
19. オリーブ黒色粘質細粒砂・暗緑灰色細粒砂の互層
20. オリーブ黒色粘土・暗オリーブ灰中～細粒砂
21. 暗緑灰色中～細粒砂・灰オリーブ中粒砂

第111図 墓遺土層断面実測図 (1)



第112図 墓遺土層断面実測図 (2)

1. 暗オリーブ灰細粒砂・オリーブ黒粘土
2. 暗緑灰中～細粒砂・オリーブ黒粘土
3. 暗オリーブ灰粘質細粒砂・オリーブ黒粘土
4. 灰オリーブ色細粒砂・暗オリーブ灰シルト
5. 暗緑灰中～細粒砂
6. オリーブ灰色粗～細粒砂
7. 暗緑灰細～中粒砂
8. 暗オリーブ灰中～細粒砂
9. 暗オリーブ灰細粒砂・オリーブ黒粘土
10. 灰色粘土
11. 灰色粘土
12. オリーブ黒色粘土



第113図 墓遺土層断面実測図 (3)

1. 灰色粘土
2. オリーブ黒色粘土
3. 黒褐色粘土
4. オリーブ黒色粘土
5. オリーブ緑灰色粘土
6. 暗オリーブ灰粘土
7. オリーブ黒色粘土
8. 灰色粘土
9. オリーブ灰色粘土
10. オリーブ黒色粘土
11. オリーブ灰色粘土
12. 灰色粘土
13. 灰色砂まじり粘土
14. オリーブ灰色粘土
15. オリーブ黒色粘土
16. 灰色粘土まじり砂
17. 灰色粘土
18. 灰オリーブ色細粒砂
19. 暗オリーブ灰色シルト
20. オリーブ灰色粘土
21. オリーブ灰色粘土
22. オリーブ黒色
23. 灰色粘土 (墓遺)



第114図 墓遺土層断面実測図 (4)

1. オリーブ黒色粘土
2. 暗オリーブ色中粒砂
3. オリーブ黒色シルト
4. オリーブ黒色粘土
5. 灰色粘土
6. 灰オリーブ色中粒砂から細粒砂
7. 灰オリーブ色中粒砂
8. オリーブ黒色粘土
9. 黒褐色粘土
10. オリーブ黒色粘土
11. オリーブ黒色シルト
12. オリーブ黒色シルト
13. 黒褐色粘土
14. 黒褐色粘土
15. オリーブ黒色粘土
16. オリーブ黒色シルト
17. オリーブ黒色粘土
18. オリーブ黒色中粒砂
19. 灰色粗粒砂
20. オリーブ黒色中粒砂
21. オリーブ黒色粗粒砂
22. オリーブ黄色粗粒砂

遺物

方形周溝墓出土土器

1号方形周溝墓出土土器(第115図620~625)

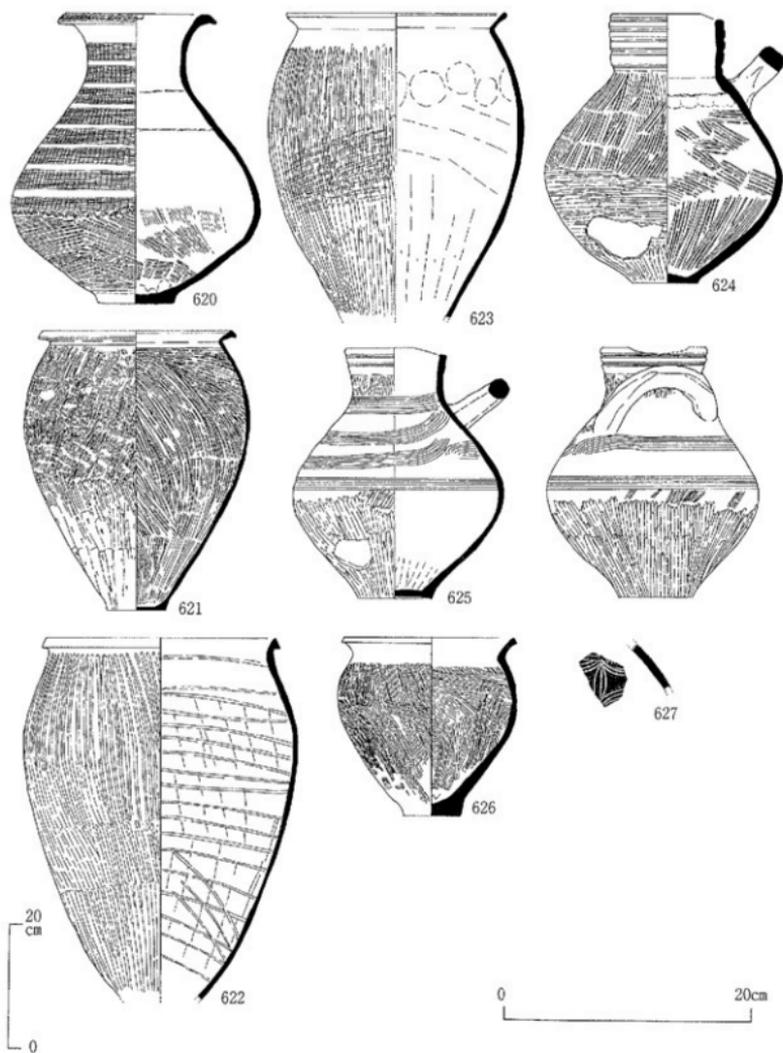
(620)は小型の広口壺である。マウンドの裾部土壌1から出土した。やや下膨れの胴部から短い頸部が立ち上がり、そのまま外反して口縁部へと続く。胴部下半は細かいヘラミガキを全体を4分割するように丁寧に施している。内面はハケを施す。人為的と思われる穿孔が1カ所ある。胴部上半は最大径のところに扇形文を配し、その上部は口縁部直下まで幅広い縞状文を施す。口縁端部には波状文、円形浮文を施す。口径11.4cm。器高24.8cm。生駒西麓産である。(621~623)は甕である。(621)は周溝内から出土した。くの字口縁をもち、端部は肥厚する。外面は全体にタテハケを施した後、下半部にヘラミガキ、さらに底部付近にヘラズリを行う。内面は全体にタテハケを施す。口径11.4cm。器高23.8cm。浅黄橙色を呈する。外面全体に煤が付着し二次焼成を受けた痕跡がある。(622)は大形の甕棺である。口縁端部を下方に肥厚させる。外面は全体に縦方向のヘラミガキ、内面は板ナデ後、横方向のヘラミガキをまばらに施す。口径32.8cm。生駒西麓産である。(623)はマウンド裾部の土壌3内から出土した。前二者と異なり、口縁端部は肥厚しない。外面は一部にタタキを行った後、縦方向のヘラミガキを丁寧に施す。内面は板ナデ、ユビオサエを施す。口径19.6cm。生駒西麓産である。(624・625)は把手付水差である。マウンド上から出土した。(624)は胴部外面に粗いタテハケを施した後、下半にヘラミガキを全体を4分割するように行う。内面もハケを施す。底部付近には穿孔がみられる。頸部には凹紋文が数条巡る。口径9.2cm。器高22.0cm。灰黄色を呈する。(625)は胴部下半にヘラミガキを施した後、上半部に直線文を入れる。頸部外面には僅かにタテハケが残る。口縁部には2条の凹紋文が巡る。底部付近には穿孔がある。口径8.3cm。器高20.4cm。灰白色を呈する。摂津産の可能性がある。

3号方形周溝墓出土土器(第115図626、627)

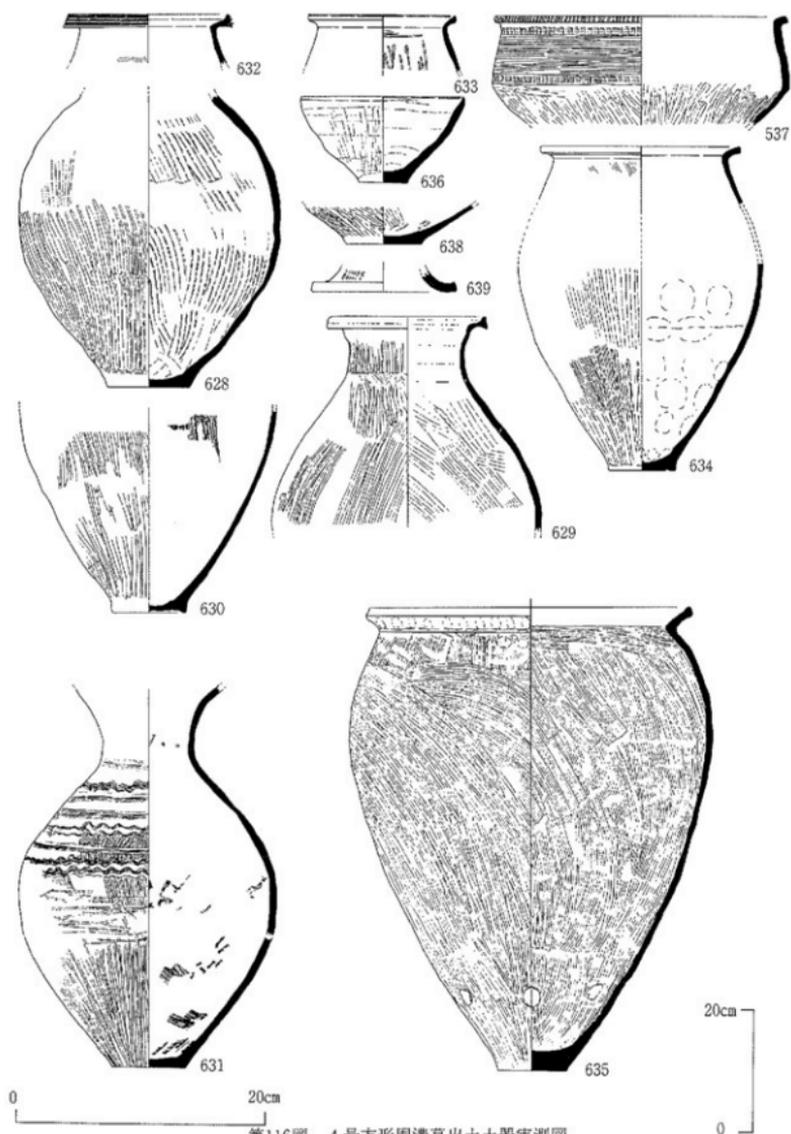
(626)は小型の甕である。くの字に外反する口縁部をもつ。内外面とも細かいハケを丁寧に施す。口径13.5cm。器高14.6cm。生駒西麓産である。(627)は前期の壺胴部片である。重弧文である。混入である。

4号方形周溝墓出土土器(第116図628~638)

(628~631)は壺である。(631)は土壌から出土した倒卵形の胴部をもつ。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は粗いハケを施す。生駒西麓産である。(628~630)は試掘調査で出土した。(628)はあまり張らない胴部から頸部が伸び、屈曲する口縁部をもつ。端部は上下に肥厚する。外面にタテハケ、内面にもハケを施す。口径12.8cm。(628)は底部である。内外面にタテハケを施す。(630)は倒卵形の胴部から緩やかに外反する頸部が伸びる。外面下半にヘラミガキを施した後、直線文と波状文を入れる。内面は僅かにハケが残る。(632~635)は甕である。(632)は口縁端部に縞凹線を施す。口径13.0cm。浅黄色を呈する。(633)はマウンド裾部から出土した。くの字口縁を持つ。内面にヘラミガキを施す。口径12.0cm。灰黄色を呈する。(634)はマウンド裾部土壌から出土した。くの字口縁を持つ。外面にタテハケを施した後、ヘラミガキを行う。内面はユビオサエで仕上げる。口径16.0cm。灰黄色を呈する。(635)は大型の甕棺である。くの字口縁をもつ。外面にタテハケを施した後、ヘラミガキを行う。内面にもタテハケを施す。底部付近に5カ所穿孔がみられる。口径39.4cm。器高28.5cm。生駒西麓産である。(636)は小型の鉢である。マウンド裾部ピットから出土した。外面は粗いヘラミガキを施す。口径13.2cm、器高7.0cm。生駒西麓産である。(637)は底部である。ピットから出土した。外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。生駒西麓産である。(638)は脚部である。盛土



第115图 1号·3号方形周濠墓出土土器实测图



第116图 4号方形周潭墓出土土器实测图

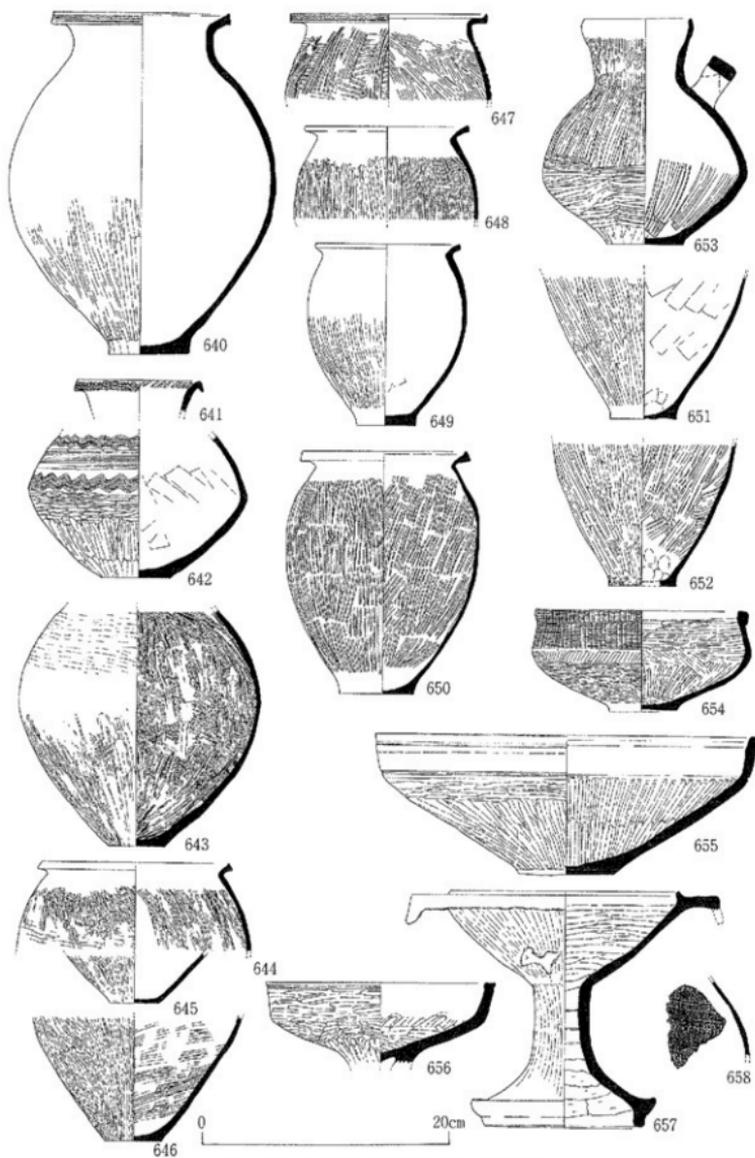
内から出土した。にぶい黄橙色を呈する。

5号方形周溝墓(第117図640~658)

(640~642)は壺である。(641)は倒卵形の胴部から頸部が伸び、くの字に外反する口縁部をもつ。端部には擬凹線が巡る。胴部下半にはヘラミガキを施す。口径14.1cm。器高27.9cm。浅黄色を呈する。(641)は口縁部である。端部に波状文、内面にハケ状工具による刺突文を施す。口径10.0cm。生駒西麓産である。(642)は胴部である。算盤形を呈する。外面下半に丁寧なヘラミガキを施す。上半には波状文と直線文が巡る。内面は板ナデを行う。生駒西麓産である。(643~652)は甕である。(643)は胴部外面下半にヘラミガキを施し、上半にタタキを行う。内面には細かいタテハケを施す。灰白色を呈する。(644)はくの字口縁をもつ。端部は僅かに肥厚する。胴部外面にタタキを行った後、タテハケを施す。内面もタテハケで仕上げる。生駒西麓産である。(649・650・652・657)は底部である。(649)は外面にヘラミガキを施す。生駒西麓産である。(650)は外面にヘラミガキ、内面にヨコハケを施す。にぶい黄橙色を呈する。(651・652)は外面にヘラミガキを施す。内面は前者が板ナデ、後者はタテハケを行う。両者は共に生駒西麓産である。(643)は主体部から出土した。胴部から水平に折れ曲がる口縁部をもつ。端部は上方につまみあげ、擬凹線が巡る。外面はタタキの後、タテハケ、内面もハケで仕上げる。口径12.2cm。(644~646)はくの字口縁をもつ。(644)は外面にヘラミガキ、内面にタテハケを施す。口径13.0cm。生駒西麓産である。(645)は胴部外面下半にヘラミガキを施す。口径11.5cm、器高14.8cm。生駒西麓産である。(646)は口縁端部が僅かに肥厚する。内外面に粗いタテハケを施した後、ハケ状工具による刺突文を加える。口径13.2cm、器高15.7cm。灰白色を呈する。(653)は把手付水差である。胴部下半には横方向、上半には縦方向のヘラミガキを施す。口径8.7cm。器高18.5cm。浅黄橙色を呈する。(654・655)は鉢である。(654)は小型で、胴部外面下半と内面にヘラミガキを施す。最大径のところに刺突文を配し、上半は簾状文を密に施す。口径17.2cm、器高8.2cm。生駒西麓産である。(655)は大型で内外面にヘラミガキを施し、口縁部外面には2条の凹線文を加える。口径31.2cm。器高11.4cm。生駒西麓産である。(656・657)は高杯である。(656)は直立する口縁部をもち、内外面にヘラミガキを施す。口縁直下に1条の凹線文を加える。口径19.6cm。生駒西麓産である。(657)は垂下口縁をもつ。内外面にヘラミガキを施した後、杯部に穿孔する。垂下部も人為的に打ち欠いた可能性がある。脚部内面はヘラケズリを行う。口径18.8cm。器高19.3cm。灰白色を呈する。(658)は壺胴部片である。外面に簾状文を施す。生駒西麓産である。

方形周溝墓出土土器を概観してみたが、供献土器として供えられている土器は非常に丁寧に成形されており、また、体部下半~底部にかけて穿孔されているものがみられる。胎土は生駒西麓産が多いが、他地域産も存在する。型式学的には凹線文が入り始める段階、Ⅲ様式新段階を中心とする時期であろう。(型式学的な考察は後で述べる)この時期の遺構、遺物としてはA地区、B地区などでも居住域が検出されており、今回の調査ではその墓域が検出できたことが大きな成果である。

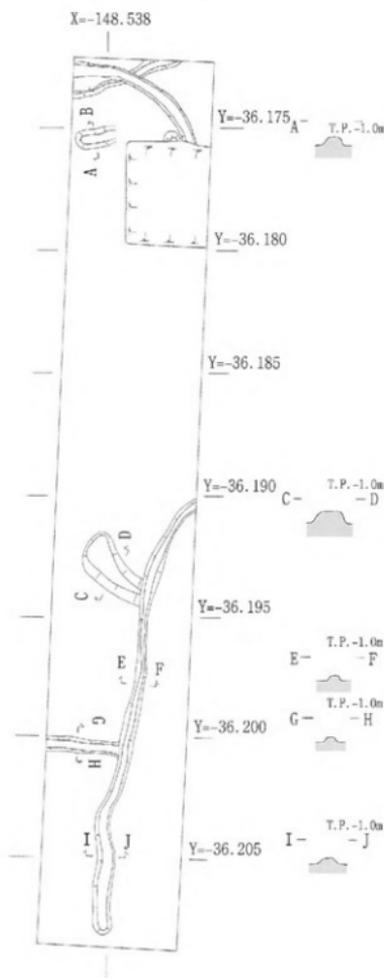
また今回の調査では木棺ばかりではなく甕棺も2基出土している。甕棺に用いられる胎土は生駒西麓産である。これらのことは甕棺に葬られる人物の出自は大半が瓜生堂近辺ではなかったのかという事を考えさせる。また、それと同様に供献土器のほとんどが生駒西麓産の胎土を持っている。このことは瓜生堂遺跡においてはやはり生駒西麓産の胎土が在地のもので、その他のものは他地域産のものではなかったかと推察させる。従来瓜生堂遺跡の土器は西麓産ではなく、他の胎土と考えられてきたこともあるようだが、方形周溝墓が家族墓であり、そこに供献される土器がその人物の出自に関係するものであるならば、生駒西麓産の土器こそが瓜生堂遺跡の在地のものであると考えられるのが妥当であろう。その場合集落から出土するものの主体が生駒西麓産が他地域のものであるかはその点にお



第117图 5号方形周濠墓出土土器实测图

いて問題となろう。

畦畔（第118図） D地区において6条の畦畔を検出した。畦畔上には多数の足跡がみられた。明確な区画が認められない。検出状況から短期間利用され、洪水によるとみられるすぐ上層の砂層によって埋没したものと思われる。所属時期が確認できる遺物は出土していない。D-1~4で確認した畦畔は幅約0.3m前後、長さ約20m前後、高さ約0.3m前後の規模をもち、直交する畦畔と斜交する畦畔とに枝分かれしながら西から南東方向へ蛇行している。先端は調査区外にのびる。枝分かれた畦畔がD-3とD-4にみられる。D-3の畦畔は幅約0.4m前後、長さ約5m前後、高さ約0.2m前後の規模をもち、南東から北西方向へはまっすぐにのびる。先端は調査区外にのびる。D-4の畦畔は幅約0.5m前後、長さ約5m前後、高さ約0.3m前後の規模をもち南西から北東方向にのびる。D-7で3条の畦畔を検出した。北東部の畦畔は幅約0.5m前後、長さ約5m前後、高さ約0.3m前後の規模をもつ。北東から南西方向へとやや蛇行し、両端は調査区外にのびている。北西部の畦畔は幅約0.3m前後、長さ約3m前後、高さ約0.2m前後の規模をもち、南から北方向へはまっすぐにのびる。南西部の畦畔は攪乱によってわずかし確認することができなかった。幅約0.3m前後、長さ約0.5m前後、高さ約0.2m前後の規模をもつ。畦畔は耕土として利用された第25層を盛り上げて形成されている。花粉分析では畦畔群衆が認められ、本時期の水田耕作は氾濫堆積物を利用して行われていた可能性が考えられている。下層に弥生時代前期の包含層が存在し、上層には弥生時代中期後半の方形周溝墓が存在することから、その間に営まれたことは間違いない。おそらく弥生時代中期前半の一時期に作られたものと考えられる。



第118図 D地区畦畔検出状況実測図

(5) 弥生時代前期の遺構と遺物

遺構 (第119・120図)

遺構は、溝2基、土塋6基、ピット2基で全てD地区において確認された。削平されており、全て20cm未満の浅いものである。遺構の覆土は全て黒オリーブ色粘土を呈す。

溝1は、D地区の東端のD-1区で検出した。北東方向と南西方向にかけて縦軸をもつ。覆乱によって一部壊されている。幅0.9m、長さ5.0m以上、深さ0.09m。(第120図)

溝2は、D-2から3区にかけて検出し、北東方向から南西方向にかけて縦軸をもつ。幅の狭い個所で0.9m、広い個所で2.0m、長さ6.0m以上、深さ0.15mの不整形な溝である。

土塋1はD-5から6区にかけて検出した。南側が調査地外なので、全形は不明だが、東西に長いひょうたん形を呈すと推定される。最大幅1.0m以上、長さ3.4m、深さ0.25m。少量の土器が出土している。

土塋2は、D-5から6区にかけて検出した。南側が調査地外なので、全形は不明だが、東西に長いひょうたん形を呈すと推定される。幅0.29m以上、長さ1.34m、深さ0.16m。

土塋3はD-7区で検出した。南側が調査地外なので、全形は不明だが、東西方向に長軸を持つひょうたん形を呈すと推定される。幅0.23m以上、長さ2.08m、深さ0.13m。少量の土器が出土している。

土塋4はD-4区で検出した。南北方向に長軸をもつ不整形を呈す。幅1.05m、長さ3.7m、深さ0.1m。少量の土器が出土している。

土塋5はD-4区で検出した。不整形である。南北幅5.5m以上、東西幅3.47m、深さ0.12m。少量の土器が出土している。

土塋6はD-4からD-5区にかけて検出した。東西方向に長軸を持つ不整形である。幅0.58m、長さ1.9m、深さ0.06m。

ピット1は、D-8区南端で検出した。円形を呈す。直径約0.6m、深さ0.14m。

ピット2は、D-8区中央付近で検出した。円形を呈す。直径0.5m、深さ0.17m。

遺物 (第121～127図)

D地区で検出した遺構や包含層から弥生時代前期(畿内第I様式中段階)に属する土器を中心にコンテナ10個分の遺物が出土している。C地区では遺構は検出されず、包含層出土遺物もD地区に比して極端に少なくコンテナ1個分に満たない。D地区においても特に3地区から7地区にかけて出土量が多い。

角閃石を含み茶褐色を呈する生駒山西麓産の土器の中に、判別不可能なため、瓜生堂遺跡付近の土を用いた土器も含まれる。その他の胎土のものを全て他地域産とする。また、ヘラ描き沈線については煩雑になるため単に沈線として説明する。

遺構出土土器

溝と土塋から浅いコンテナ1個分弱の土器が出土した。包含層出土土器に比して量は少ない。

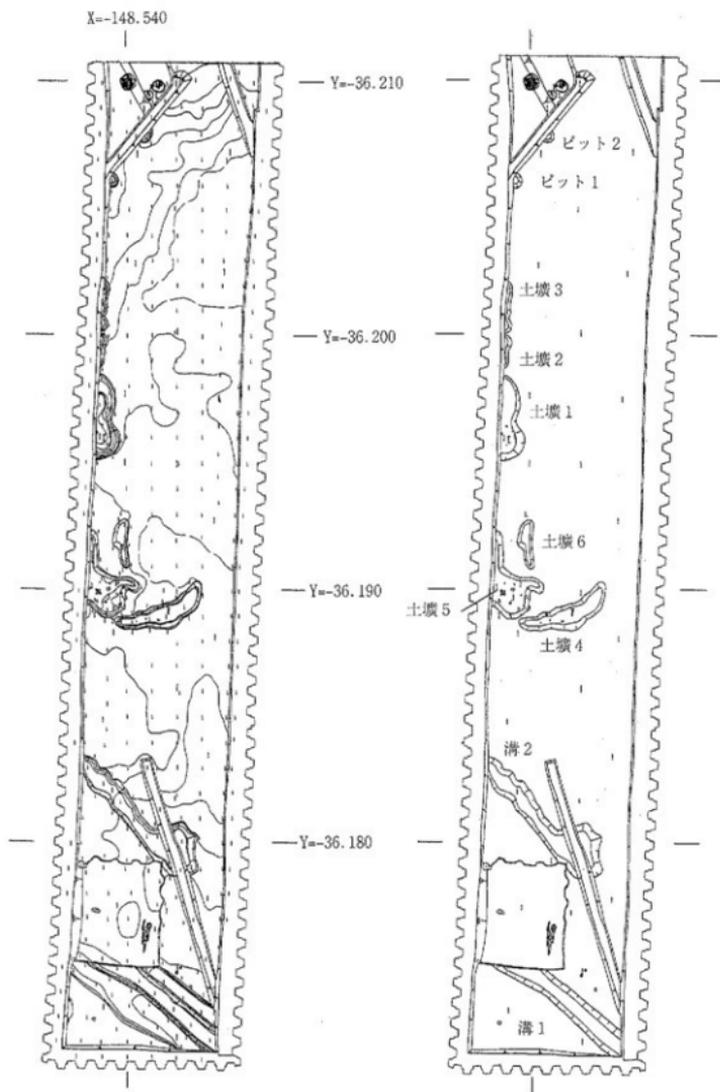
溝2出土土器 (第121図660・662)

壺(668)は屈曲点を持って外反する口縁部をもつ。口頸部の境に1条の沈線を施し、その下に段が認められている。口縁部外面にも1条の沈線がめぐる。外面を横方向のヘラミガキで仕上げる。口縁部外面の沈線にわずかに赤彩が残る。

甕(670)は甕の体部で頸部に2条以上の沈線を施す。口径13.6cm。

土塋3出土土器 (第121図659・661)

壺(667)は完形に復元できた。短く外反する口縁部をもち、頸部部の境は段ではなく1条の沈線を



第119図 前期遺構検出状況実測図

施す。体部外面は横方向のヘラミガキで仕上げる。口径14.0cm。体部最大径26.0cm。器高25.0cm。底部径8.0cm。

壺蓋 (669)は傘形を呈する。外面全体をヘラミガキで仕上げる。焼成前に頂部に1孔を穿つ。裾部径13.0cm。

土壌4出土土器 (第121図663)

壺 (659)は横方向のヘラミガキで仕上げる。頸部に1条の沈線を施す。外面の色調は浅黄橙色を呈し、石英などを含む摂津からの搬入品である。

土壌1出土土器 (第121図664)

甕 (664)は甕の体部で横方向のヘラミガキで仕上げる。頸部に1条の沈線を施す。

包含層出土遺物

第28～32層から弥生土器コンテナ10個分と土製品(土鍾)1点が出土している。自然木は認められたが、木製品と石器は出土していない。上層出土土器から順に報告する。

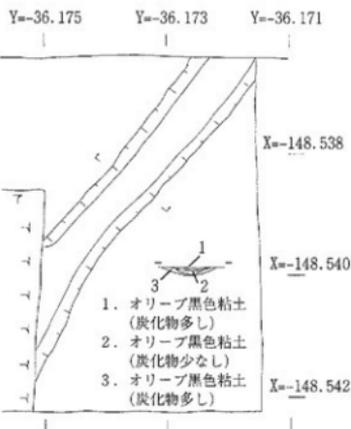
第28・29層(灰オリブ色粘土・オリブ茶色粘土層)出土土器 (第122図665～675)

壺(図666～668)(666)は体部上半の破片で沈線を2条施し、その下に5本単位の下弦の重弧文を施す。(667)は口縁部内外面をヘラミガキで仕上げる。(668)は、体部破片で、頸部側が下がる段をもち、その下に4条の沈線を施し、さらにその下に頸部側が下がる段、2本の沈線で構成する。段で下がった位置には強調のためか両段とも沈線をめぐらす。体部に少なくとも2帯の紋様帯をもつ土器である。甕(第122図665・674)(665)は口縁端部外面に口縁部に対して垂直に上から下に引いた刻み目をもつ。ナデで仕上げる。口頸部に頸部側が下がる段を持つ。(669～672・674)は口縁がわずかに外反し、頸部に3条の沈線を施す。(671)は口縁端部外面に口縁部に対して垂直方向から刻み目、(672)は口縁下部に横方向から刻み目を施す。(673)は甕の破片で放射状に沈線の紋様を施し、突帯の上に斜め方向の刻み目を施す。その突帯の下は段で下がる。ナナメ方向のヘラミガキを施す。蓋、壺の可能性がある。(674)は胴部がやや膨らむ甕の破片である。外面をナデで仕上げる。無文である。

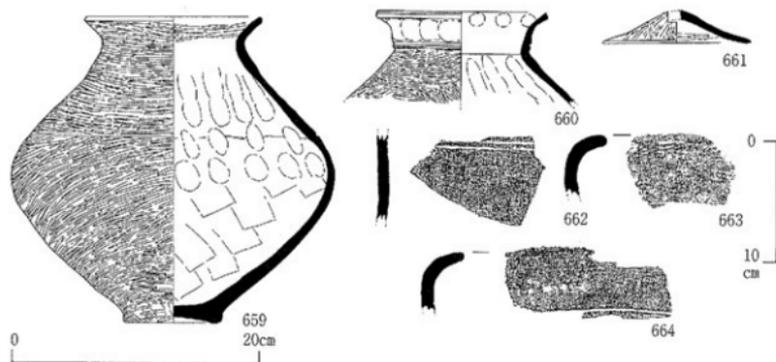
壺蓋(675)は傘形を呈し、全体に摩滅が認められる。口縁部に焼成前に1個以上の細孔を穿つ。外面の色調は灰白色を呈し胎土に石英を含む搬入品である。

第30層(茶褐色粘土)上層出土土器 (第123図676～698)

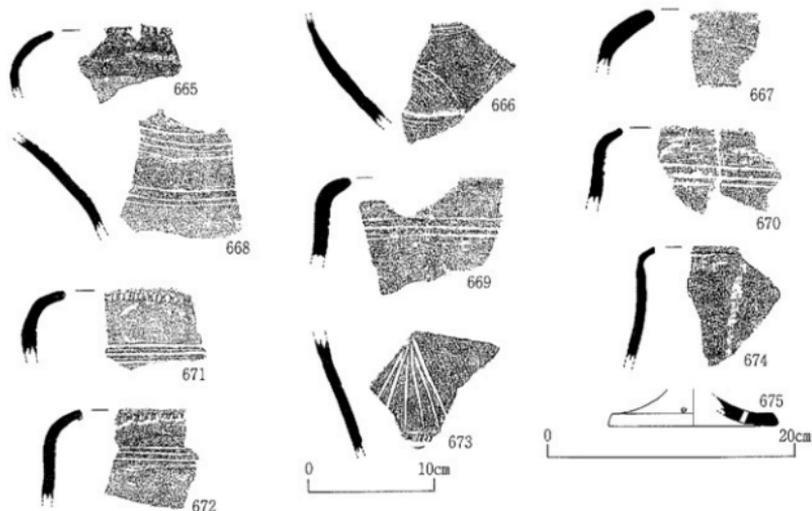
壺(676・677・687～689)(676)は体部上半の破片である。頸体部の境に段は無く、2条の沈線を施す。摩滅のため調整は不明である。外面の色調は灰白色を呈し石英などを含む搬入品である。(677)は口縁が短く外反する大型の壺である。頸部に3条沈線を施し、内外面ともに密に(3条/cm)ヘラミガキで仕上げる。口径38cm。(687)は口縁端部外面に1条の沈線を施す。内外面ともナデで仕上げる。(684)は頸体部の破片で、頸部の側に下がる段をもち、その下に比較的間隔の広い3条の沈線を施す。外面は摩滅のため調整は不明、内面はナデで仕上げる。外面の色調は灰白色を呈し石英などを含む搬入品である。(689)は、口頸部境に2条以上の沈線を施す口縁部破片である。内外面とも調整は摩滅のため不明である。



第120図 溝1平面・土層断面実測図

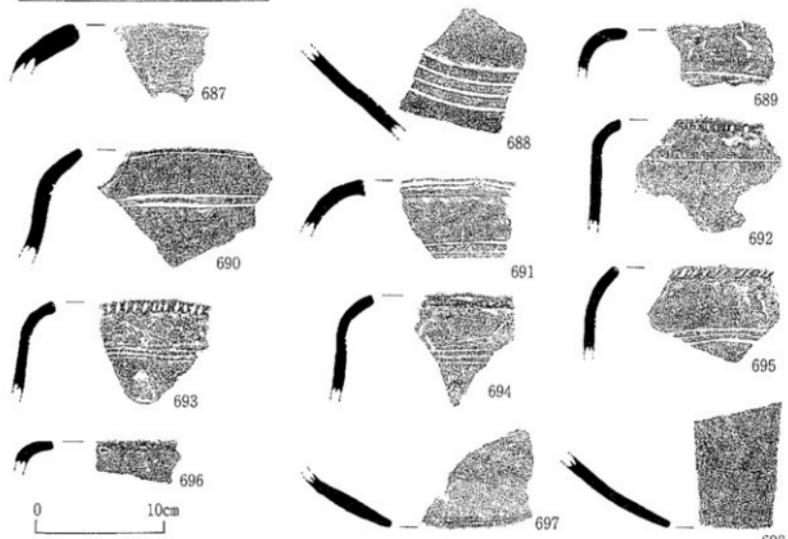
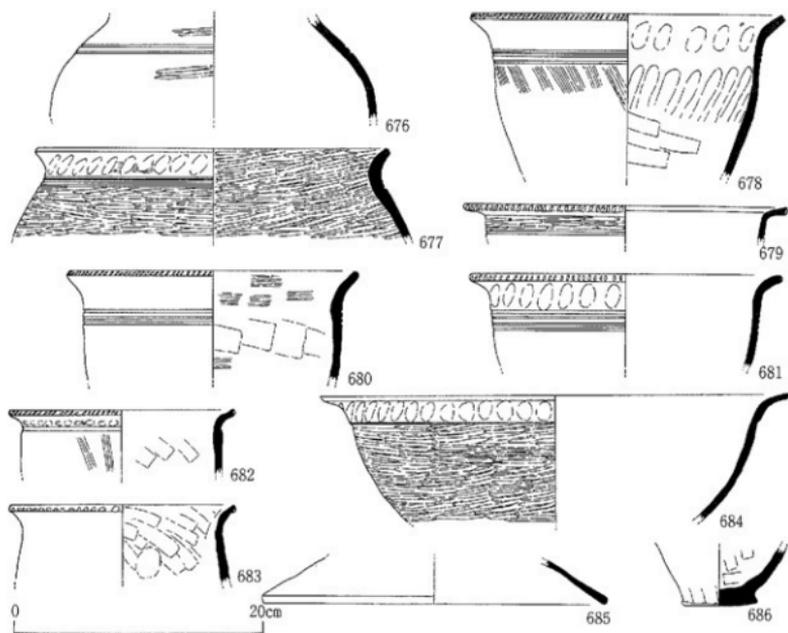


第121図 遺構出土土器実測図



第122図 第28層（灰オリブ、オリブ茶色粘土）出土土器実測図

甕（第123図678～683、690～697）（678）は口縁端部外面全体に斜め方向の刻み目を、頸部に3条の沈線を施す。外面はタテ方向のハケ（6条/cm）で仕上げる。口縁部内面にモミ痕がある。口径12.5cm。（679）は強く屈曲する口縁部をもつ。口縁端部外面に口縁に対して垂直に板状工具による刻み目を施す。口径26.0cm。（680）は口縁端部外面全体に斜め方向の刻み目を施す。外面は摩擦のため調整は不明。口縁部内面は横方向のハケ、体部内面は横方向の板ナデを施す。口径23.0cm。（681）は口縁端部外面全体に口縁部に対して垂直方向から縦方向に刻み目を施し、頸部に4条沈線を施す。内外面とも



第123图 第30層(茶褐色粘土)上層出土土器实测图

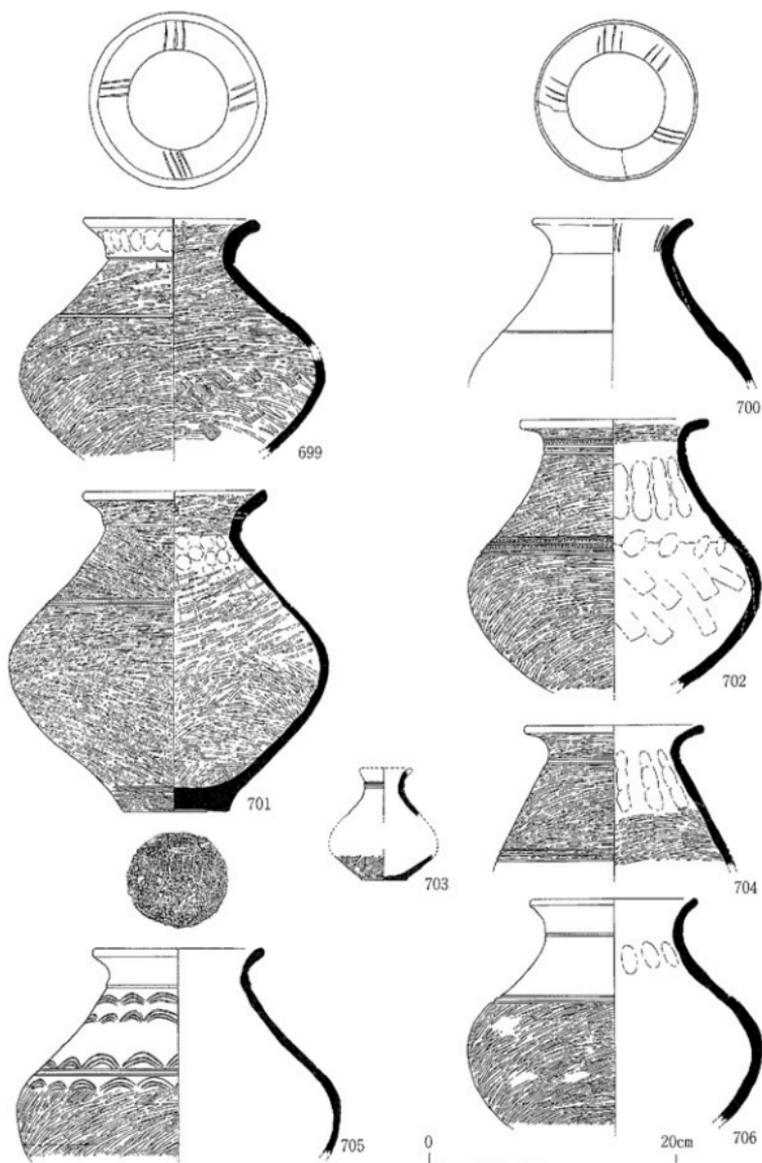
摩滅のため調整不明である。口径25.0cm。(683)は口縁下端部をO字形に刻み目を施す。外面は調整不明、内面は板ナデで仕上げる。口径18.0cm。(681)は口縁端部外面に1条、頸部に2条の沈線を施す。外面ナデ、内面ヘラミガキ(4条/cm)で仕上げる。(690)は口縁端部外面に1条、頸部には2条以上の沈線をめぐらす。内外面ともナデで仕上げる。(692)は口縁下端部を逆D字形に刻み目を施す。頸部に1条の沈線を施す。外面ナデ、内面板ナデで仕上げる。(693)は口縁端部外面全体に縦方向の刻み目を施し、頸部に3条の沈線を施す。摩滅のため調整は不明。(694)は頸部に3条の沈線を施す。摩滅のため調整は不明。(695)は口縁端部全面に斜め方向の刻みを施し、頸部に3条の沈線を施す。内外面ともナデで仕上げる。外面にスガが付着している。(696)は内外面ともナデで仕上げる。鉢(684)は頸部に体部側に下がる段を持つ。外面はヘラミガキ(3条/cm)で仕上げる。内面は摩滅のため不明。口径19.0cm。

甕蓋(685・693・694)(685)は内外面ともナデで仕上げる。口径27.6cm。外面の色調はにぶい黄褐色を呈し石英などを含む搬入品である。裾部内面に帯状のスガが付着している。(697)は外面ヘラミガキ、内面をナデで仕上げる。(698)は外面ヘラミガキで仕上げ、内面は摩滅のため調整は不明である。裾部内面に帯状のスガが付着している。

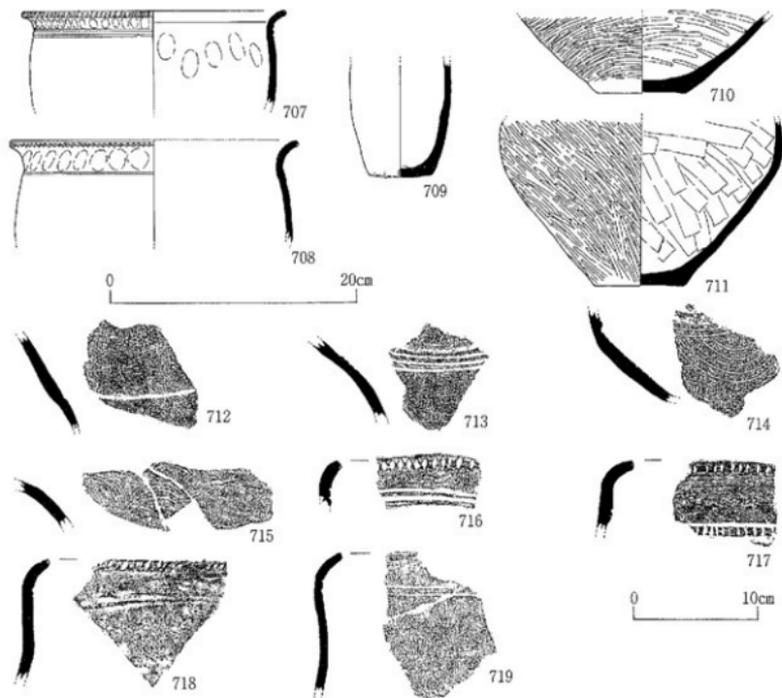
底部(686)は甕の底部。内外面とも板ナデで仕上げる。内面に黒斑が認められる。底部径5.6cm。

第30層(茶褐色粘土)下層出土土器(第124・125図699～719)

(699)は口縁部がやや厚みをもち短く外反し、体部が大きく張り出す。口頸部境に頸部側が下がる段、頸部部境に頸部側が下がる段を持つ。頸部部の段の下に沈線を1条めぐらす。口頸部の段は削り出され、頸部部の段の低い部分には段を作り出すために削った結果できた沈線が1条認められる。口縁部外面はナデ、体部外面はヘラミガキ(3～4条/cm)で仕上げる。口縁部内面は横方向のヘラミガキ(3条/cm)、体部内面はハケのち下から上方向の板ナデで仕上げる。内面に、頸部から口縁部にかけて下から上へ、3条のヘラガキ沈線を3条単位で3箇所、4条単位で1箇所、4方に割り付ける。頸部部境に赤彩がわずかに残る。口径14.2cm。(700)は、口縁が短く直線的に外反する。口頸部に頸部側が下がる段、頸部部に頸部側が下がる段を作り出している。内面には頸部から口縁部にかけて下から上方向へ、ヘラガキ沈線を3条単位で3箇所、4条単位で1箇所割り付ける。内外面ともに摩滅のため調整は不明である。口径12.6cm。体部最大径は24.8cm。(701)は、完形が復元可能であった。口縁が外反し、体部のほぼ中心に最大径をもつ。底部はゆるい上げ底を呈する。口頸部に頸部側が下がる段をもち、頸部部には段を持たず、3条の沈線を施す。底部付近には、ヘラ描きによる3条の沈線を外周の約半分施す。底部に布目圧痕が残る。内外面ともヘラミガキ(6～7条/cm)で仕上げる。頸部内面には指頭圧痕、ユビナデが残る。口縁部に紐穴が1孔穿たれている。欠損しているが、対で2孔穿たれていたものと考えられる。口径14.7cm。体部最大径は25.6cm。器高は26.5cm、底部径8.4cm。(702)は口縁がほぼ水平に外反し、大きく張り出す体部を持つ。口頸部境には段を持たず、3条の沈線を施し、上の2条の間に米粒状の列点を施す。頸部部には頸部側が下がる段をもち、米粒状の列点、その下に沈線、列点、さらに2条の沈線を施す。頸部部の段で下がった位置には沈線を1条めぐらしている。外面は全体にヘラミガキ(3条/cm)、内面は口縁部のみ横方向のヘラミガキ、頸部はユビナデ、体部は板ナデで仕上げる。口径15.0cm。体部最大径24.0cm。(703)は小形の壺で口縁部、体部の破片はない。口頸部に1条の沈線を施した後、頸部側が下がる段を作りだし、低めた部分に明確な沈線を施すことによって突帯を作り出す。外面はヘラミガキ(3～4条/cm)、内面は摩滅のため調整は不明である。(704)は口縁部がやや外反し、やや細く広がる頸部をもつ。口頸部に段は作り出さず2条の沈線を施し、頸部部には頸部側が下がる段と2条の沈線を施す。頸部部の段で低めた



第124圖 第30層（茶褐色粘土）下層出土土器実測圖（1）



第125図 第30層（茶褐色粘土）下層出土土器実測図（2）

位置には段を作り出すために板状工具で削ったため、沈線様が形成されている。外面は全面にヘラミガキ、口縁部内面はナデ、頸部内面はユビナデ、体部内面はヘラミガキで仕上げる。口径14.0cm。(705)は口縁部が短く外反し、体部が大きく張り出す器形をもつ。口縁部先端が肥厚し、頸部側が細くなる。口頸部境に頸部側が下がる段、頸部体境にも頸部側が下がる段を作り、1条沈線をめぐらす。頸部部の段の低めた位置には明確な沈線を施す。口頸部の段の下に3条単位の下弦文を2段、頸部部の段に接する明確な沈線に接して重弧文を1段、段の下にめぐらす沈線の下にさらに1段重弧文をめぐらす。重弧文は全て下弦である。外面はヘラミガキ(3条/cm)、内面の調整は磨滅のため不明である。口径13.4cm。体部最大径26.6cm。(706)は口縁部がゆるやかに外反し、体部が大きく張り出す。口頸部には段を作り出さず、1条の沈線を施し、頸部体境に頸部側が下がる段を作り、段の下にも1条沈線を施す。段で低めた位置にも明確な沈線を施す。外面はヘラミガキで仕上げ(4条/cm)、内面の調整は磨滅のため不明である。口径13.0cm。体部最大径24.0cm。(712)は体部の破片で、頸部側が下がる段をもつ。(713)は体部上半の破片である。頸部側が下がる段をもち、段の下には3条の沈線を施す。段の低めた位置に段を作り出すために削ったためにできた沈線様が存在する。(714)は体部上半の破片で突帯を削り出し、その下に3条の沈線を施し、その下に接して5条単位の下弦の重弧文を施

す。(715)は体部上半の破片で3条単位の重弧文を施す。

甕(707・708・716~719)(707)は口縁端部外面全体に口縁部に対して垂直方向から板状工具による縦方向に刻み目を施し、頸部に2条の沈線を施す。内外面ともナデで仕上げる。口径21.0cm。(709)は口縁下端部に縦方向の刻み目を施す。頸部に1条の沈線を施す。内外面とも摩滅のため調整は不明である。(716)は口縁下端部を縦方向に刻み、頸部に3条以上の沈線を施す。(717)は口縁端部外面全体を縦方向に刻み目を施す。頸部に2条の沈線を施し、その間に縦方向の刻み目を入れる。外面は横または斜め方向にハケ(8条/cm)で、内面はナデで仕上げる。(718)は口縁端部外面全体を斜め方向に刻み、頸部に2条の沈線を施す。調整は内外面とも摩滅のため不明である。(719)は頸部に2条の沈線を施す。外面の調整は摩滅のため不明で、内面は板ナデで仕上げる。

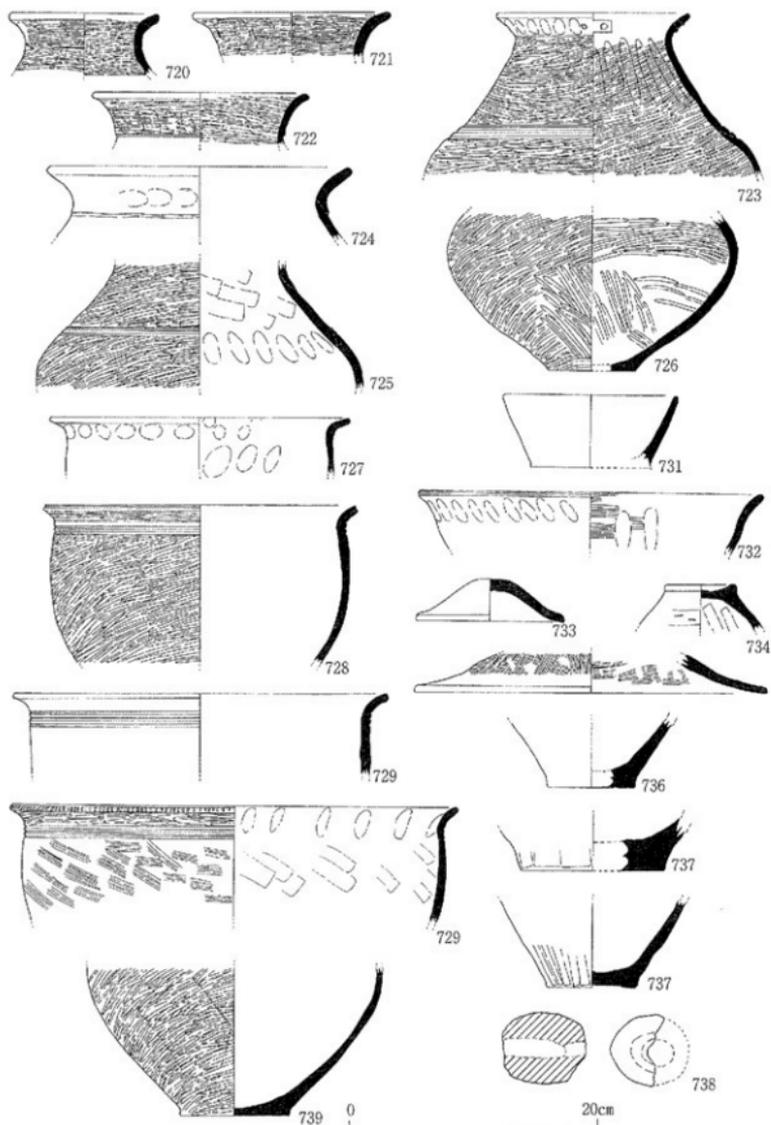
鉢(709)筒状を呈し、内外面とも板ナデで仕上げる。底部径5.6cm。小形の甕の可能性はある。

底部(710~711)(710)は甕の底部で内外面とも横方向のヘラミガキで仕上げる(3条/cm)。底部径7.0cm。(711)も甕の底部で外面は縦方向のヘラミガキ(3条/cm)、内面板ナデで仕上げる。底部径7.0cm。

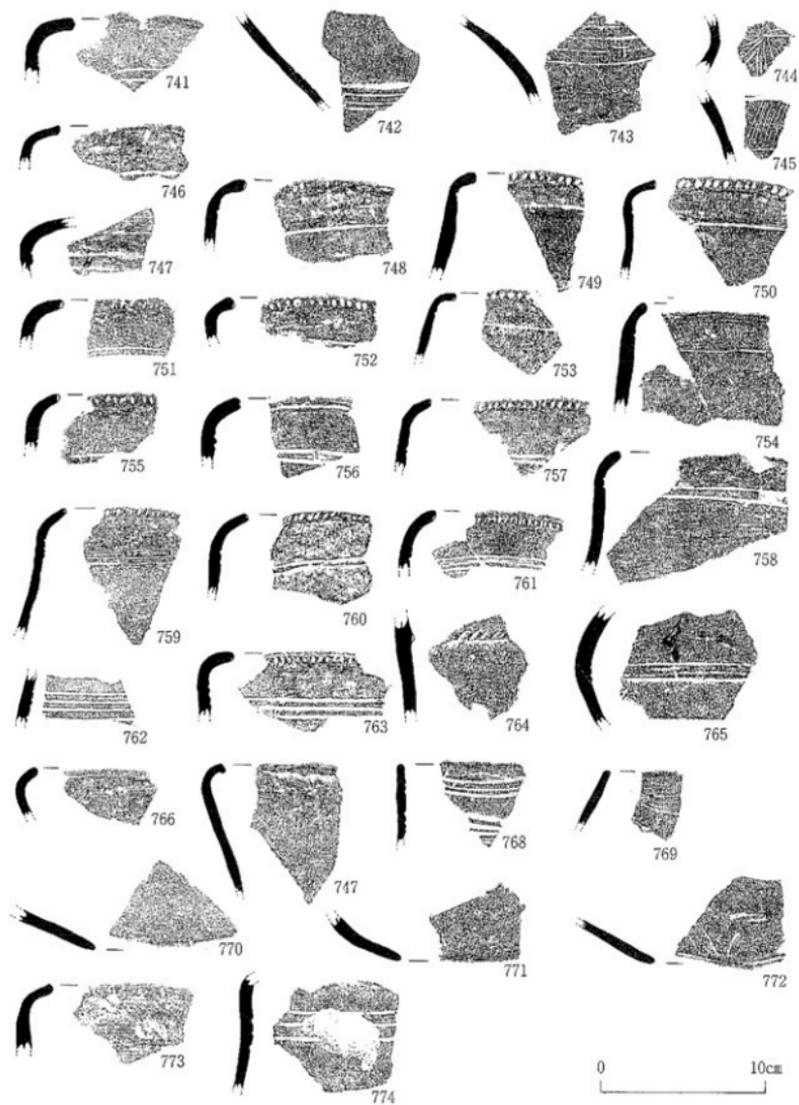
第31層(灰黒色粘土)出土土器(第126・127図720~772)

壺(720)は短く外反する口縁部で、内外面ともヘラミガキで仕上げる(3~4条/cm)。頸部に1条沈線を施すがヘラミガキによって一部消されている。口径12.0cm。(721)は内外面ともヘラミガキで仕上げる(3~4条/cm)。口径15.6cm。(722)は口頸部に頸部側が下がる段を作り出す。内外面ともヘラミガキで仕上げる(3~4条/cm)。口径17.0cm。(719)は口縁部が短く外反し、口頸部の境、頸部部の境にそれぞれ頸部側が下がる段を削りだし、頸部部側が下がる段の下には1条、一部2条の沈線を施す。頸部部の段を低めた位置には明確な1条沈線をめぐらす。口縁部に2孔一対の紐孔が焼成前に穿たれている。口径15.4cm。(724)は大型の甕で、口頸部に頸部側が下がるやや不明瞭な段を持つ。調整は外面ヘラミガキで仕上げる。内面は摩滅のため調整は不明である。(725)は体部上半の破片で頸部部の境に頸部側が下がる段をもち、段の下に2条の沈線をめぐらす。段で低めた位置に1条の沈線を施す。外面はヘラミガキ(3条/cm)、内面板ナデで仕上げる。頸部に2条沈線を施す。(726)は内外面ともヘラミガキで仕上げる(3条/cm)。底部径7.0cm。(741)は頸部に2条以上の沈線を施す。内外面ヘラミガキで仕上げる(6条/cm)。内面にススが附着している。(742)は体部上半の破片である。頸部部の境の粘上帯つなぎ目で頸部側が下がる段を作り、さらに板状工具で段を強調して沈線様を形成している。段の下に3条沈線を施す。(743)は体部上半の破片で4条以上の沈線を施す。(744)は体部の破片で木葉紋を施す。(745)は体部の破片で2条の沈線の間に平行斜線紋を施す。(746)は口頸部の境に頸部側が下がる削りだしの段をもち、(747)は体部上半の破片で、口頸部の境に1条沈線をめぐらし下を削り出して突帯を作り出している。内外面ともヘラミガキで仕上げる。

甕(726~730,748~767)(727)は口縁部がやや外反する。内外面ともユビオサエが認められる。口径24.0cm。図736は口縁端部外面に1条の沈線、頸部に3条の沈線を施す。外面は斜め方向のヘラミガキ(3~4条/cm)、内面は板ナデで仕上げる。口径25.0cm。(729)は口縁がわずかに外反し、頸部に3条の沈線を施す。調整は内外面とも摩滅のため不明である。口径30cm。(730)は口縁がわずかに外反し、体部が丸く膨らむ。口縁下端部全面を口縁に対して垂直に縦方向に刻み、頸部に3条の沈線を施す。外面は横方向のハケ、内面は板ナデで仕上げる。口径36.0cm。(748~754)は頸部に1条沈線を施す。(748・750)は口縁端部外面全体を口縁部に対して垂直に縦方向に刻み目を施す。(749~752)は口縁下端部を縦方向に刻み目を施す。(750)は口頸部の沈線を境に口縁部側が下がる段を持つ。外面にスス、内面に黒斑がみられる。モミ跡がある。(751)は外面に横方向のハケ(10条/cm)、内面は



第126图 第31层(灰黑色粘土)出土土器实测图(1)



第127图 第31层（灰黑色粘土）出土土器实测图（2）

ナデで仕上げる。(752)は外面の色調は褐色を呈し長石、石英などを含む搬入品である。(755～758・760)は頸部に2条の沈線を施す。(756)は口縁端部外面に1条の沈線を施す。(757・760)は口縁端部外面全体に口縁部に対して垂直に縦方向の刻み目を施す。(759・761・763)は頸部に3条の沈線を施す。(759)は口縁端部外面全体に口縁部に対して垂直に縦方向の刻み目を施す。(761・763)は口縁下端部に縦方向に刻み目を施し、(763)は刻み目の上に1条沈線を施す。(762)は体部の破片である。4条の沈線を施す。(764)は体部上半の破片で段を作りだし、その下端に斜めに刻み目を施す。外面の色調はぶい黄褐色を呈し、石英などを含む搬入品である。(765)は体部上半の破片で上は沈線と段を削りだすことによって、突帯を作り出している。壺の可能性もある。(766)は外面を斜め方向のハケ(10条/cm)、内面はナデで仕上げる。(767)は口縁を折り返して作りだし、体部がやや張り出す器形を呈す。無文である。河内型壺の祖形と考えられる。

鉢(731・732・768・769)(731)は直立する器形で内外面ともナデで仕上げる。口径14.0cm。器高6.0cm。(732)は直線的に外傾する器形である。口縁端部外面に1条の沈線を施す。(768)は7条沈線を施し、3条目と4条目の間を削りだすことによって段状に低めている。(769)は沈線による紋様をもつ。浮線紋系の紋様である可能性を持つ。

蓋(733～735、770～772)(733)は蓋蓋で、摩滅のため調整は不明である。口径12.0cm。器高2.5cm。(734・735・770～772)は蓋蓋である。(734)は蓋蓋のつまみで外面に横方向にケズリを施す。つまみの直径は3.6cm。(735)は外面を縦方向のハケ(10条/cm)、内面を横方向のハケ(10条/cm)で仕上げる。口径28.4cm。蓋の口縁内面に帯状にスス付着している。(770・771)は内外面ともナデで仕上げる。(772)は口縁端部外面に1条沈線を施し、外面をヘラミガキ、内面をナデで仕上げる。(770)と(772)は口縁内面に帯状にススが付着している。

底部(736～739)(736～738)は壺の底部である。(738)は内外面ともに帯状のスス付着している。(739)は壺の底部で、外面の一部が赤化しており、赤彩の可能性もある。外面を横方向のヘラミガキで仕上げる(5条/cm)。内面は摩滅のため調整は不明である。外面の色調は灰白色を呈し、長石、石英、チャートを含む搬入品である。

土錘(740) 紡錘形を呈する。破損、摩滅のため調整は不明。両面から穿孔している。残存長は6.66cm、幅5.75cm。

第32層(砂層)出土土器(第127図773・774)

壺(773・774) 図781は摩滅が著しいが口縁端部外面全体を口縁に対して垂直方向から縦方向に刻み目を施す。外面を横方向のハケ(10条/cm)、内面をナデで仕上げる。外面の色調は灰黄褐色を呈しチャートなどを含む搬入品である。(774)は体部上半の破片で頸部に3条沈線を施す。外面の色調は灰黄褐色を呈し石英などを含む搬入品である。

(6) 木製品と石器

木製品 (第128～140図、1～141)

今回の調査で近世から弥生時代前期にかけての各時代から多くの木質遺物が(以下木製品と略す)出土した。そのうち製品・未製品および製品の一部など138点を選別し、代表的なものを時代の新しいものから概要を器種ごとに報告する。個々の木製品については別掲の観察表を参照されたい。観察表の出土層は基本層序模式図による。挿図の横断面のスクリーントーンは模式的に年輪を表し木取り法を示している。

近世～古代の遺構出土木製品 (第128・129図、1・3・5・8～11・14・15・18～20・22・24～28・124)

近世の溜池、中世の「瓜生堂廃寺」の基壇周辺、大溝や井戸、自然河川1などから出土した。柄杓(24)、曲物(25～27)、火付棒(1・3・11・14・15)、箸(5・8～10)、漆器椀(18・19)、下駄(22)、杭(20・28・124)、二又材(29)の22点である。

近・中世・古代の包含層出土木製品 (第128・129図、2・4・7・12・16・17・21・23)

第2・4・6層出土の板材(23)、火付棒(2・4・12・16)、箸(7・17)、下駄(21)の8点を図示した。

弥生時代中期から後期の遺構出土木製品 (第129～140図、30～32・34・36～38・42・43・45・46・52～57・59・60・62・67・68・81・84・88・89・100)

C地区第13層の土器だまり・祭祀場、第16層の配石遺構、自然河川2・4、環状遺構出土の木製品95点を図示した。槽(30・31・100)、堅杵(34)、組合鋤(89)などがある。

椀状木製品(36～38) 棒材の一端を平たく削り出す。材質はブナ科シイ属。(38)もほぼ同加工である。C地区配石遺構3出土。(37)は一端を張り出すように削り全体を丁寧に面取りをする。一部樹皮を取っただけの自然面のまま残す。(36・37)C地区祭祀場出土。

朱塗木製品(42・46) (42)は平面形が下部を半円形に削った長方形を呈す。表面中央部に段差を作り出すが裏面は無加工。表面全体に朱が塗られている。材質はブナ科シイ属。C-4地区配石遺構6出土。(46)は二辺は残存するが欠損が多く全体形は不明。表面には円孔を列となして穿ち、紐による摩擦痕が見られ一部に樹皮の紐が残存した。楯の器厚としては、やや薄く思われる。C地区祭祀場出土。

武器形木製品 (43・45・52・59・60・67) (43)は茎の両面に朱が、柄部の両面には黒漆が塗られている。中央部を菱ぎ状に削り出す。材質はクワ。銅剣を模したものと思われる。(45)両側面から削って柄状に作り出す。全体に薄く滑らかに仕上げている。鉄剣を模したものと思われる。材質はスギ。ともにC-6地区配石遺構5出土。

有頭棒(53～57・62・63・68・82) (57)一端を削ってやや丸みを帯びた頭部を作り出す。もう一端は2方向から削って尖らせる。武器形木製品の可能性がある。C-6地区落ち込み出土。

不明木製品(32・81・84・88) (84)両側面から方形の挟りを入れて頭部を作り出す。材質はブナ科シイ属。心持材。木偶の可能性ある。C地区祭祀場出土。

弥生時代中期から後期の包含層出土木製品 (第130・135・140図、35・39・40・80・87)

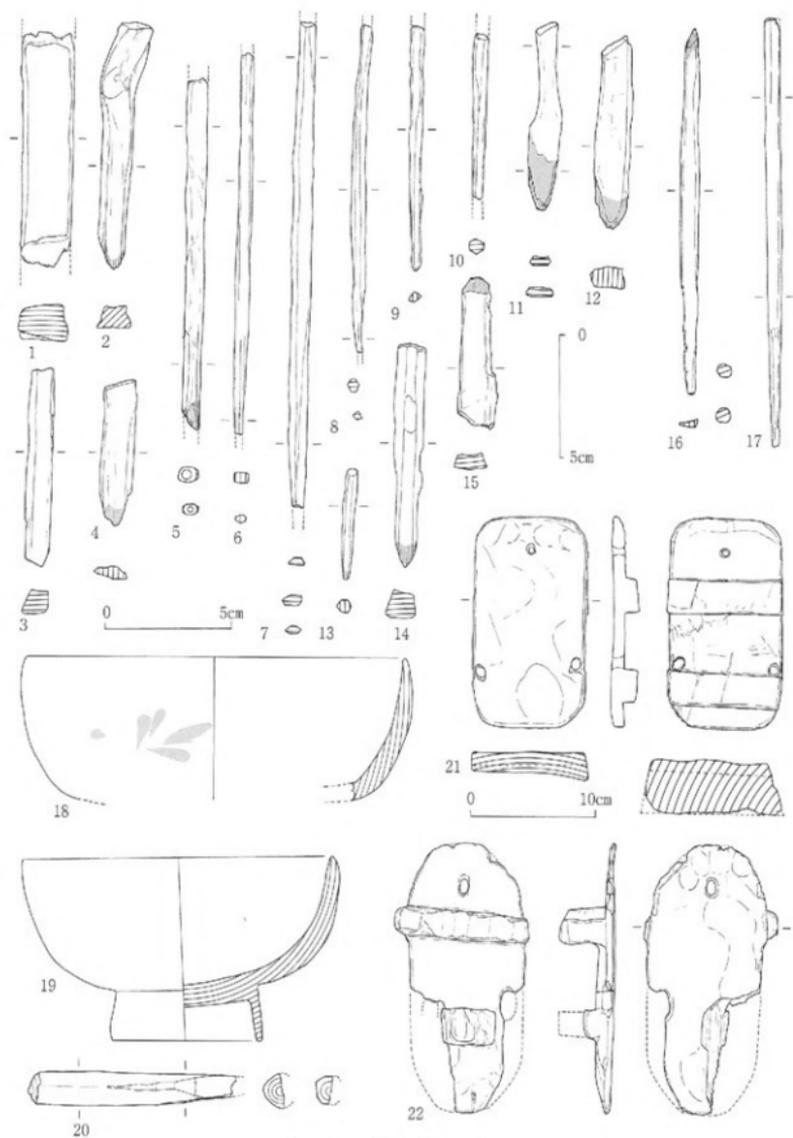
第8・12・13・16層より出土の8点である。

天秤棒(35)、臼(39)、脚部(87)、羽子板状木製品(128)などがある。

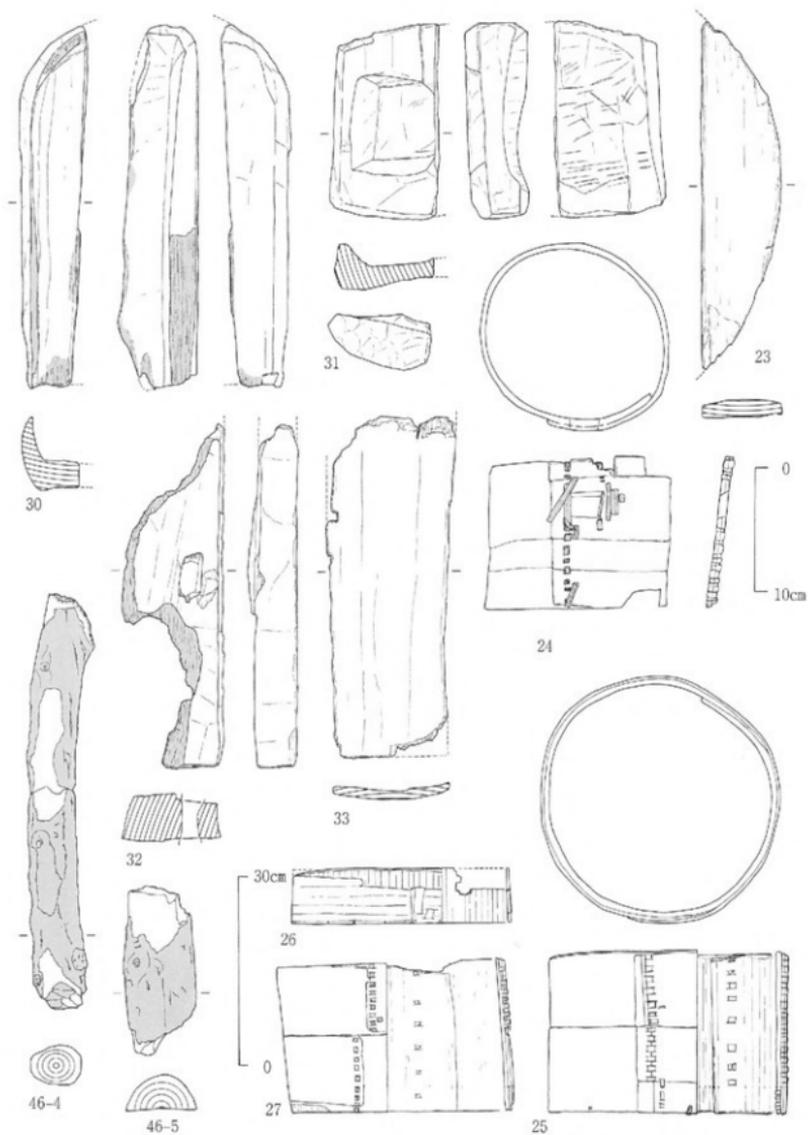
不明木製品(40・80) (40)は全体形は不明だが方形の張り出しや挟りなどを削り作り出す。全体を丁寧に面を取る。材質はスギ科スギ属。(80)両側面に半円形の挟りをもつ。中央部に円孔を穿ちその中心に切込を入れる。材質はブナ科アカガシ属。ともにD-3地区第13層出土。

弥生時代前期包含層出土木製品 (第131図、138)

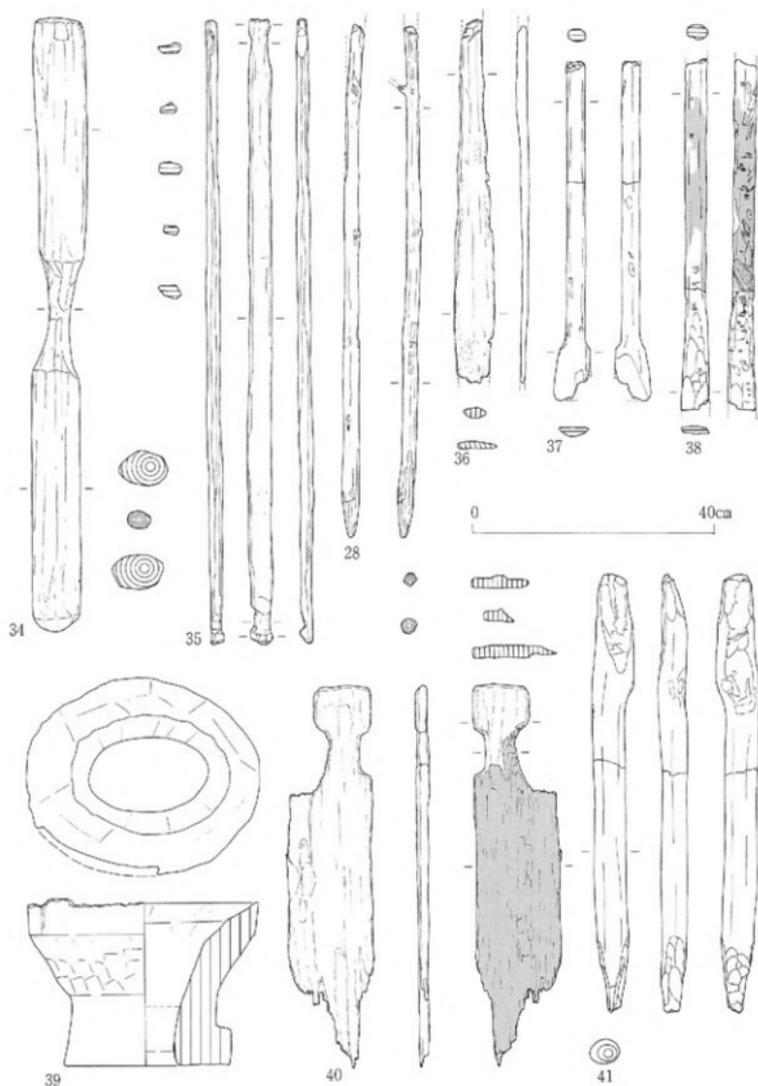
第27層出土の板材(138)の1点のみ出土した。



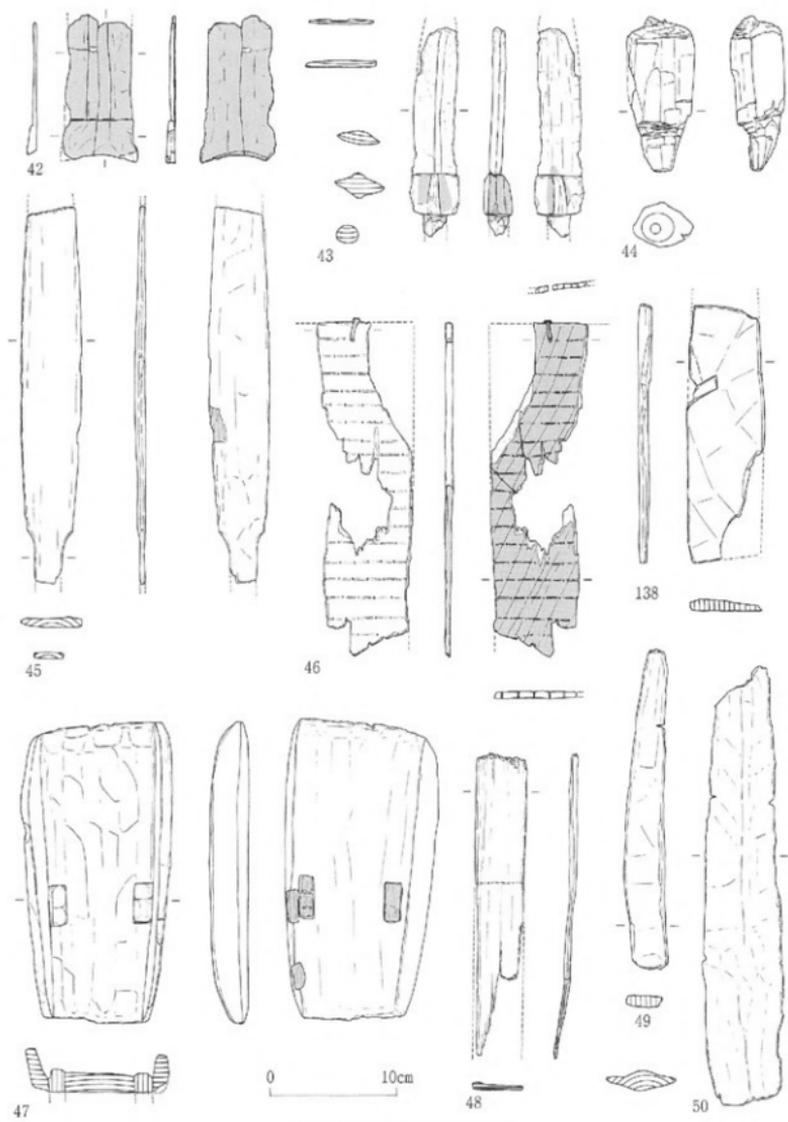
第128圖 木製品実測図(1)



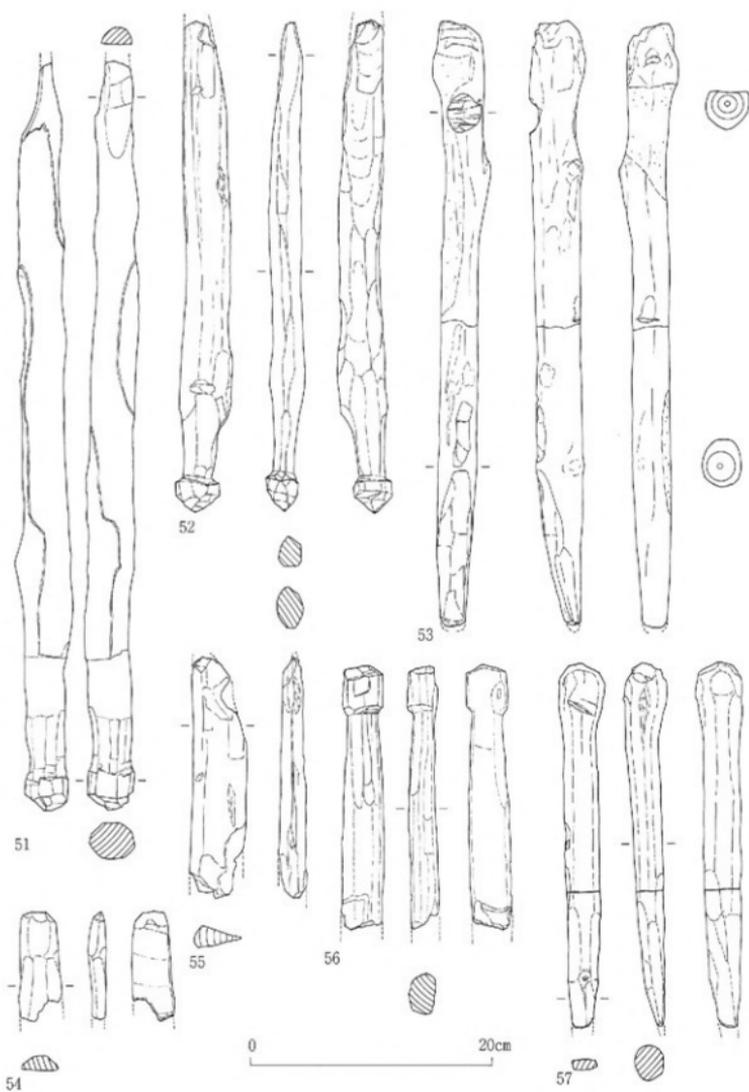
第129图 木製品実測图(2)



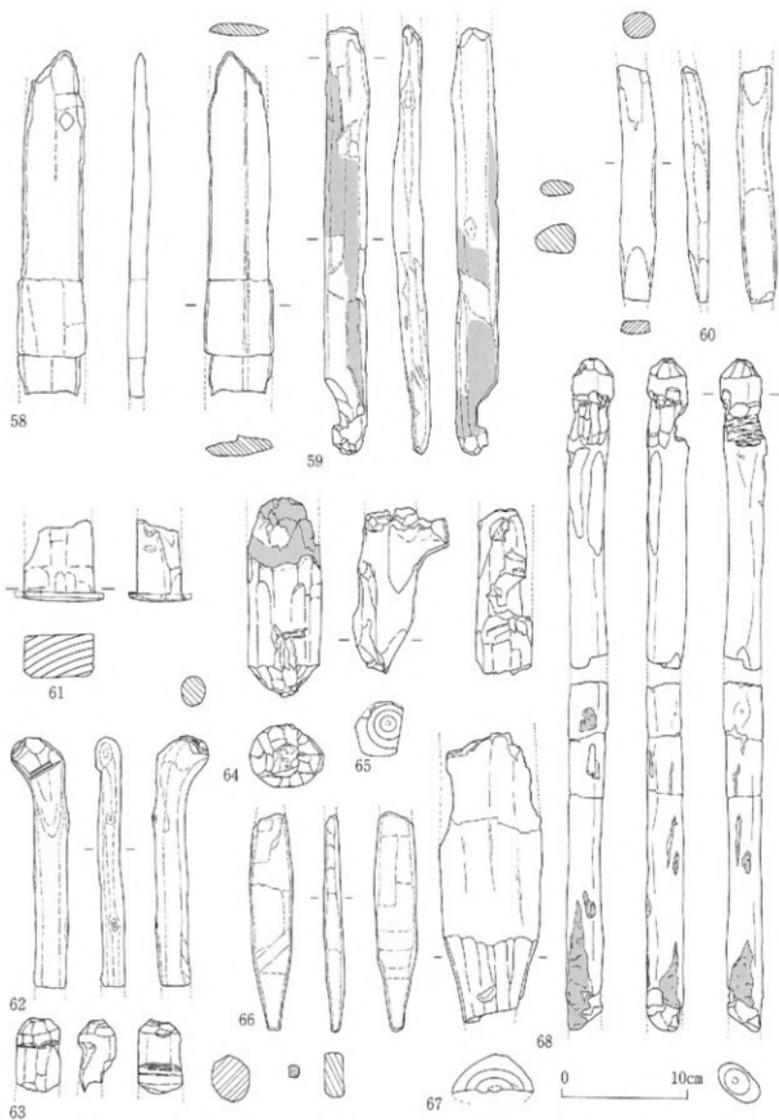
第130图 木製品実測图(3)



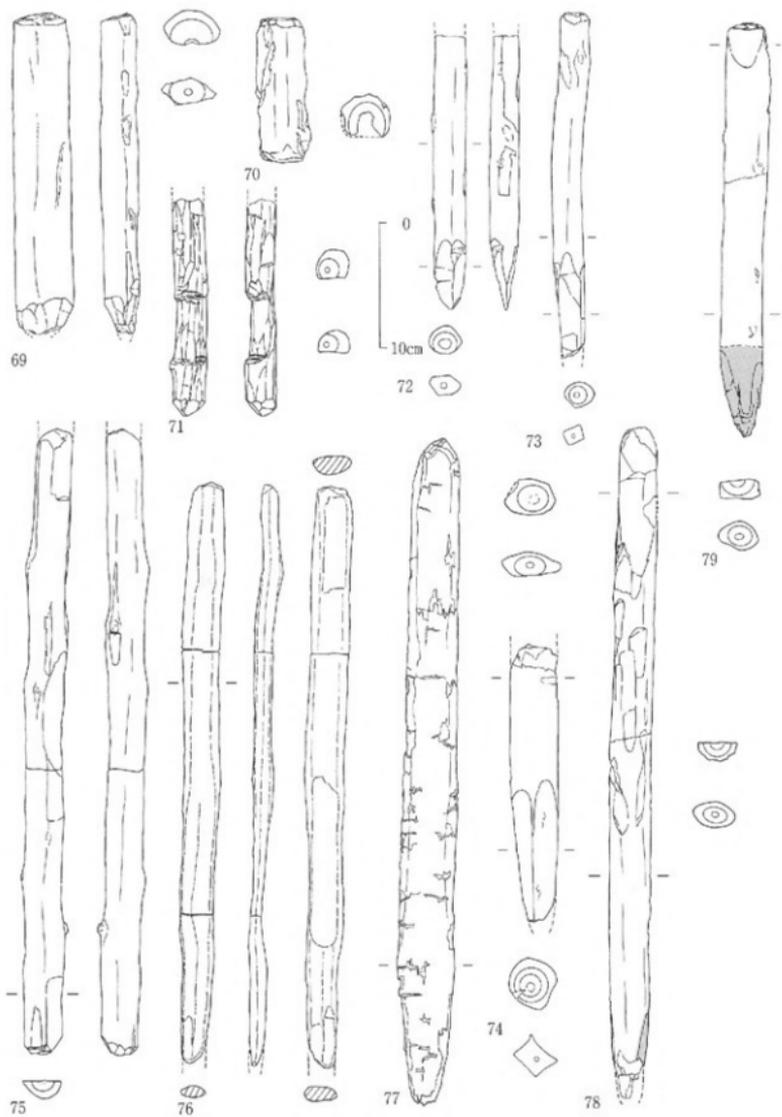
第131图 木製品実測图(4)



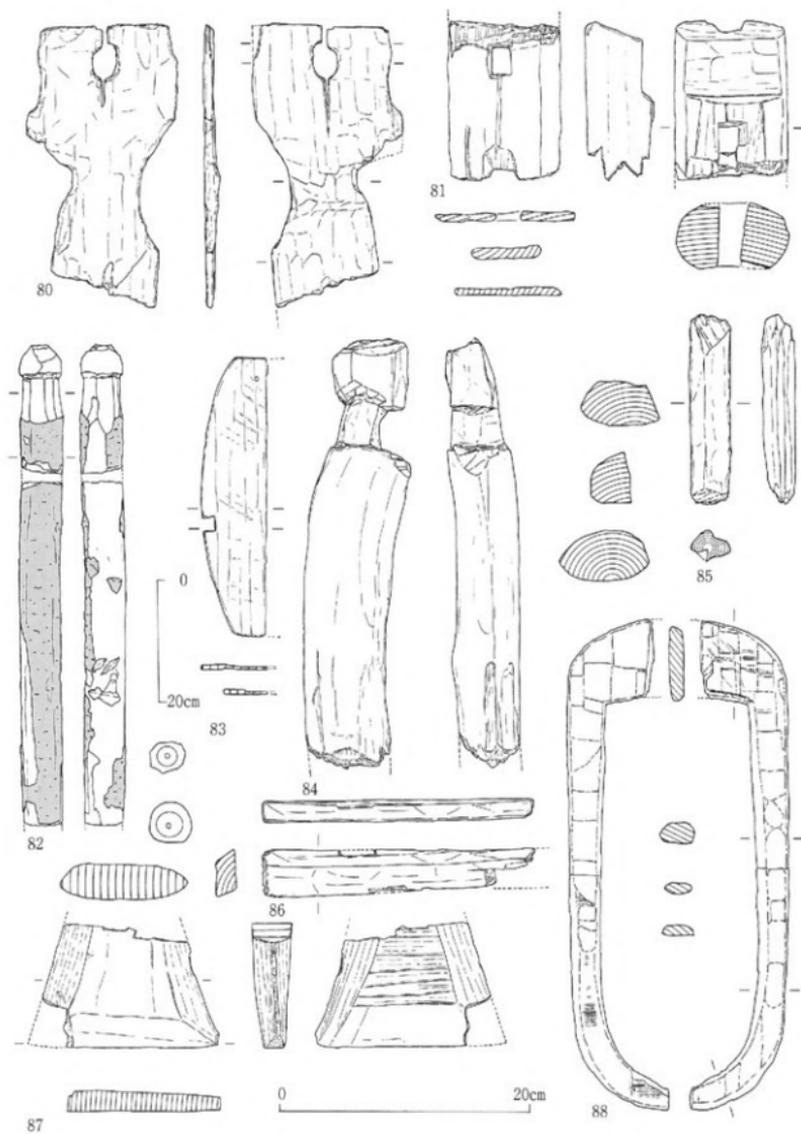
第132图 木製品実測图(5)



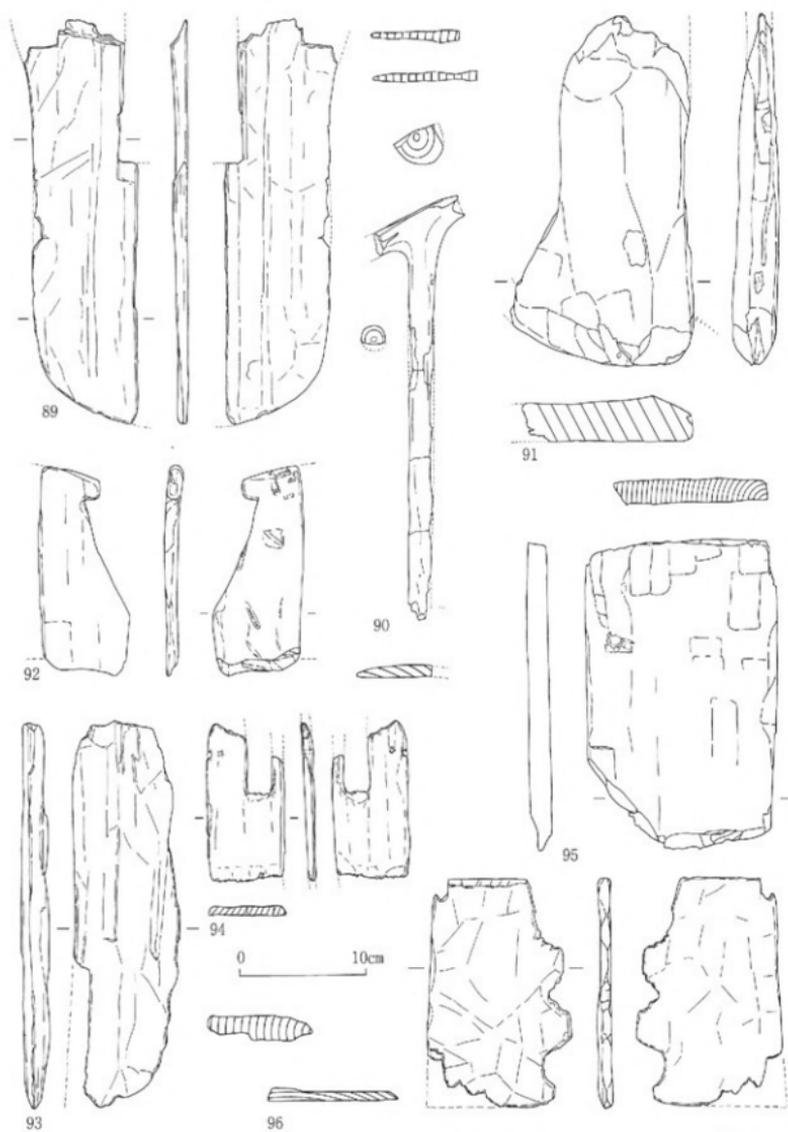
第133图 木製品実測图(6)



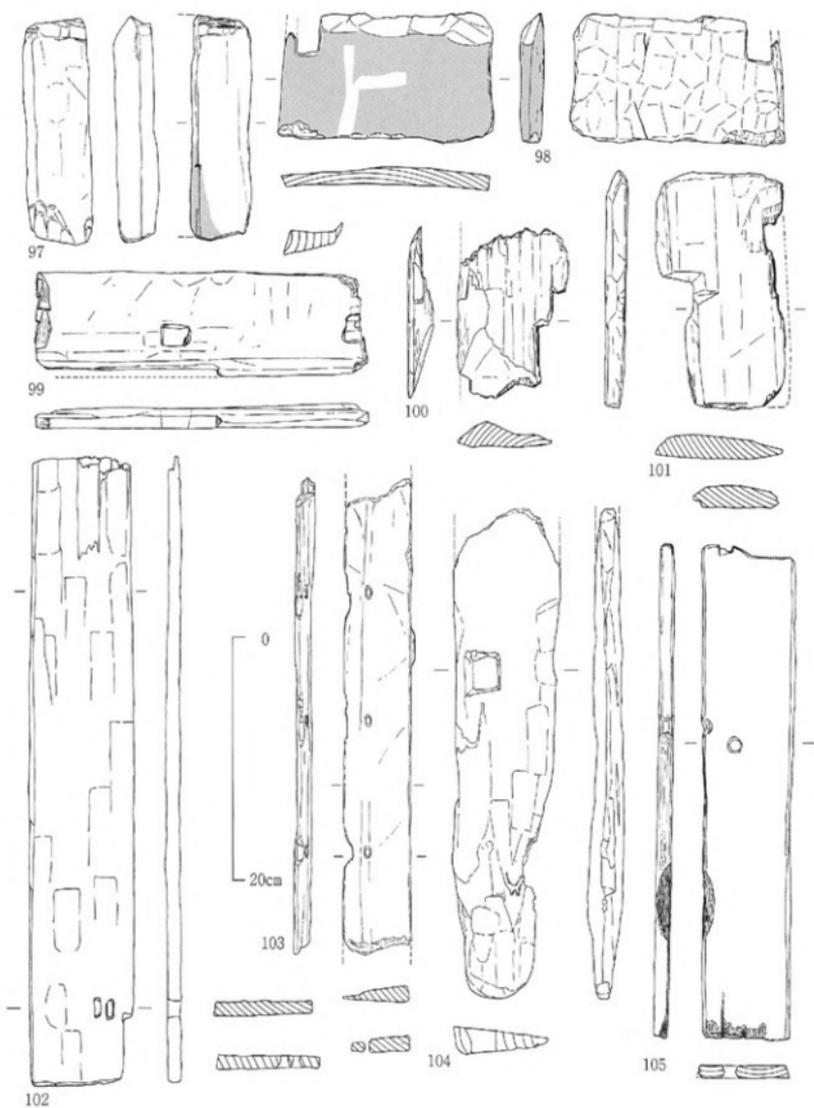
第134图 木製品実測图(7)



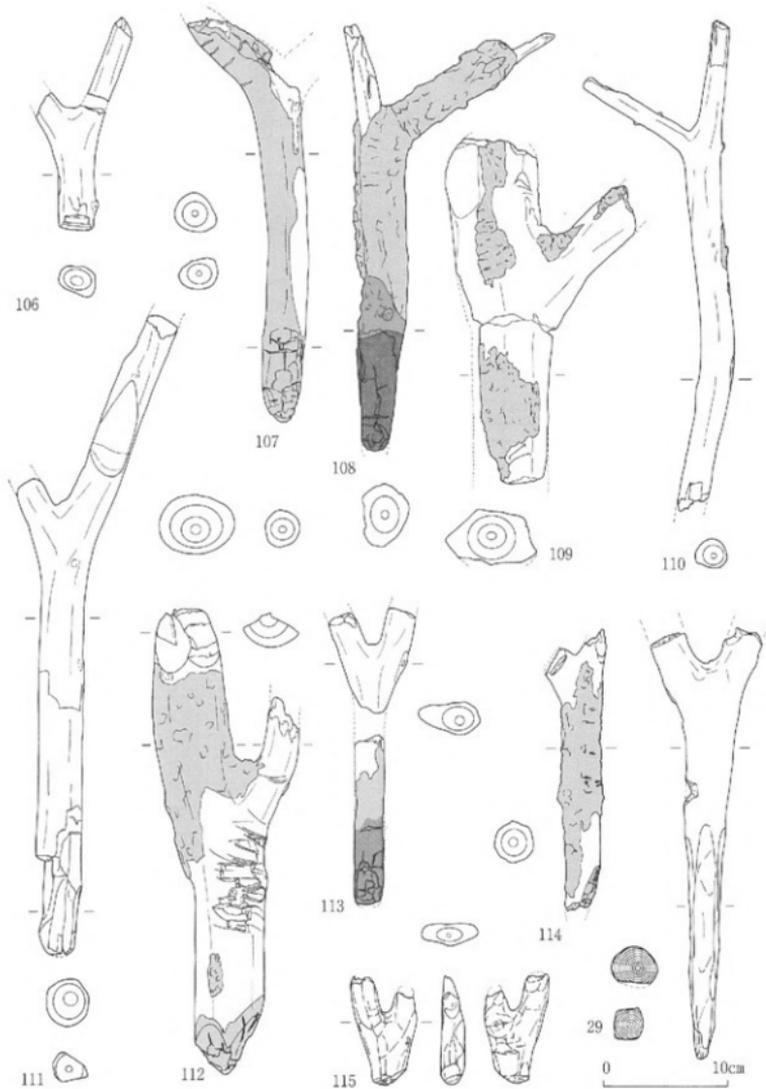
第135图 木製品实测图(8)



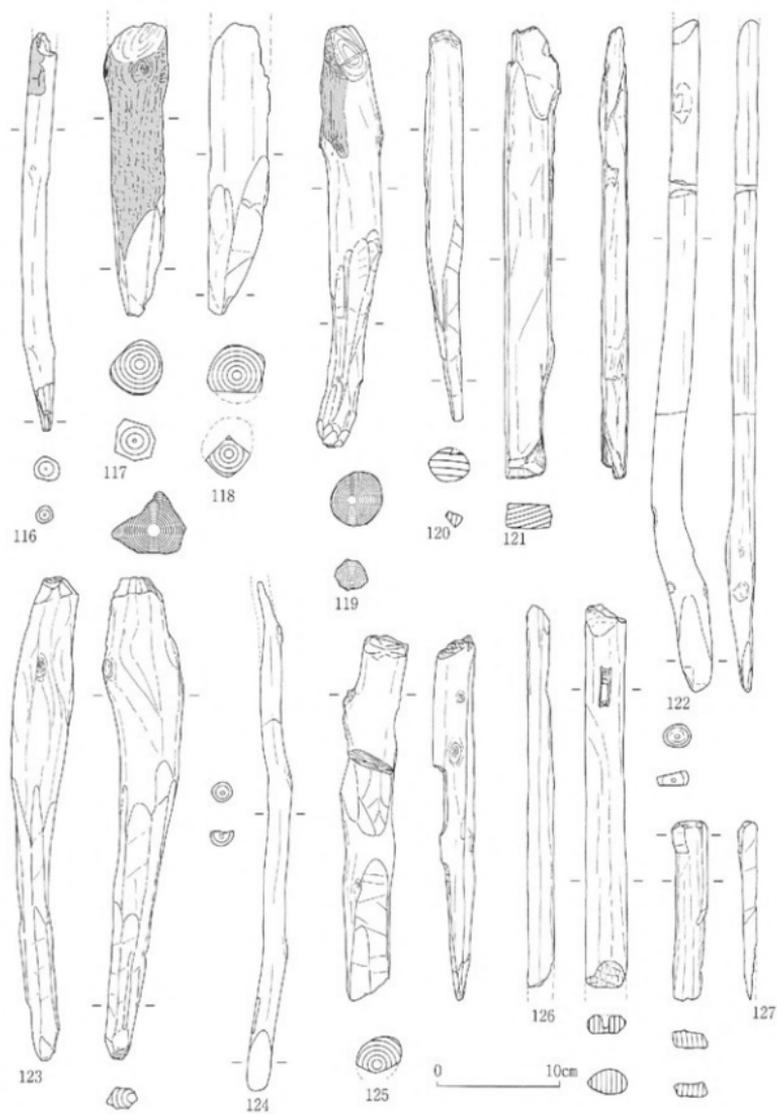
第136图 木製品実測图(9)



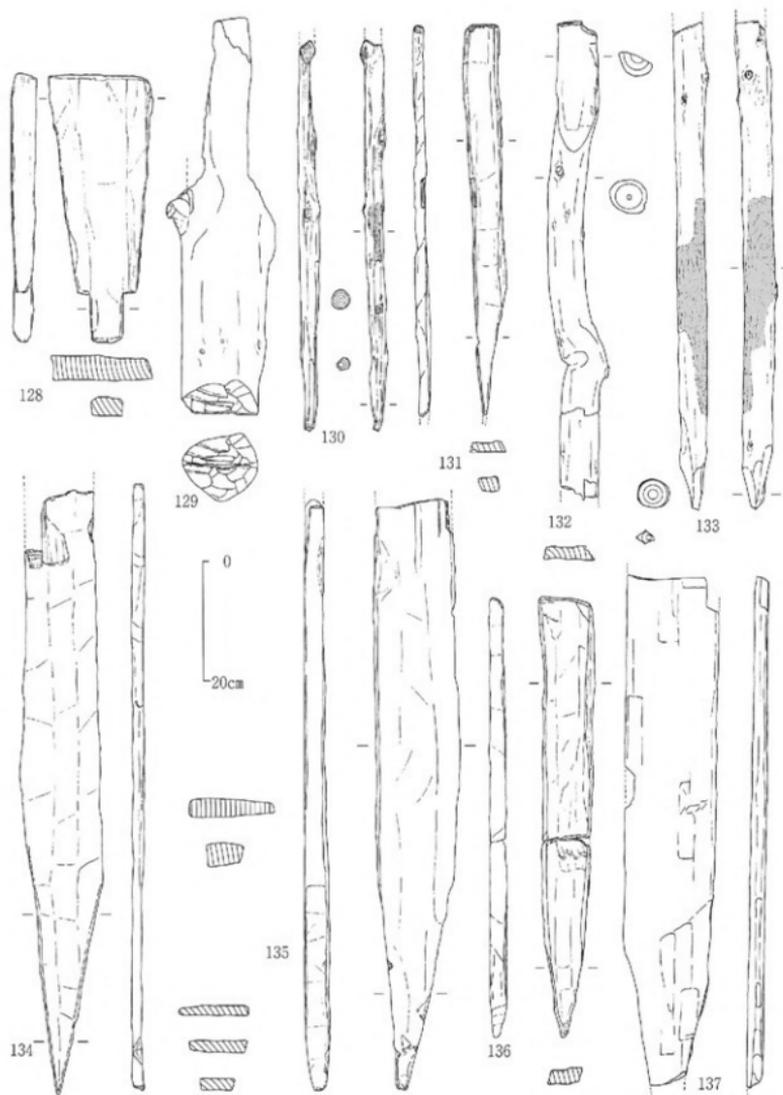
第137图 木製品実測图 (10)



第138图 木製品実測図(11)



第139图 木製品実測图 (12)



第140图 木製品実測图 (13)

No.	器種	法量(cm)	材質	水取り法	調査	出土地点	出土層	備考
1	火つけ棒	残存長 9.4 幅 2.0 厚さ 1.5		楕円	・1端が焼成を受けて欠損。 ・断面形が台形を呈す。	溝3	D-2	
2	火つけ棒	残存長 9.9 幅 1.3 厚さ 0.9		楕円	・1端は切り落とし、もう1端は焼成を受けて欠損。 ・断面形が台形を呈す		D	2
3	火つけ棒	残存長 7.9 幅 1.0 厚さ 1.0		楕円	・1端は切り落とし、もう1端は焼成を受けて欠損。 ・断面形が台形を呈す	井戸2	D-8	
4	火つけ棒	残存長 5.9 幅 1.3 厚さ 0.5		楕円	・1端は切り落とし、もう1端は焼成を受けて欠損。 ・断面形が台形を呈す		D	2
5	箸	残存長 15.2 径 0.5			・両端とも欠損 ・1端は多方向から削って尖らせる	井戸2	D-8	
6	箸	残存長 14.2 幅 0.9 厚さ 0.6			・両端とも欠損 ・1端は多方向から削って尖らせる	井戸2	D-8	
7	箸	残存長 19.4 幅 0.9 厚さ 0.4			・両端とも欠損 ・1端は6方向から削って尖らせる		D	2
8	箸	残存長 13.1 径 0.5			・両端とも欠損 ・1端は4方向から削って尖らせる	井戸2	D-8	
9	箸	残存長 9.7 径 0.5			・両端とも欠損 ・1端は4方向から削って尖らせる	井戸2	D-8	
10	箸	残存長 6.6 径 0.6			・両端とも欠損 ・1端は6方向から削って尖らせる	溝3	D-2	
11	火つけ棒	残存長 7.6 幅 1.3 厚さ 0.4			・1端は焼成を受け炭化 ・断面形は長方形を呈す	井戸2	D-8	
12	火つけ棒	残存長 5.9 幅 1.4 厚さ 0.9			・1端は焼成を受け炭化 ・断面形は長方形を呈す		D	2
13	箸	残存長 4.5 径 0.6			・1端は焼成を受け炭化しもう1端は欠損 ・6方向から削って皿を取っている	井戸2	D-8	
14	火つけ棒	残存長 8.9 幅 1.2 厚さ 1.1			・1端は焼成を受け炭化 ・断面形は長方形を呈す	井戸2	D-8	
15	火つけ棒	残存長 5.9 幅 1.6 厚さ 0.6			・1端は焼成を受けて欠損 ・断面形は台形を呈す	井戸2	D-8	
16	火つけ棒	残存長 29.4 幅 1.6 厚さ 0.7			・全体に荒く削り出したままの棒材である ・もう1端は欠損		C-5	6
17	箸	全長 34.4 径 1.1	ヒノキ科 アスナロ属		・1端を細く尖らせ、全体を削って面取りを行っている ・全面に黒漆を施し、外面に朱漆で文様を描く ・高台部分と底部は欠損		C	6
18	漆器碗	復元口径15.0 残存高 5.7			・全面に黒漆を施し、外面に朱漆で文様を描く ・高台部分と底部は欠損	溜池	C	
19	漆器碗	復元口径12.2 器高 7.5 高台径 5.7			・全面に朱漆を施す。 ・2.2cmの高台をもつ	溜池	C-7	
20	杭	残存長 8.3 幅 1.3 厚さ 0.8		心持材	・心持材であったが、半分が欠損 ・両端とも欠損しているが、1端は斜めに削って尖らせている	溜池	C-6	

表1 木製品観察表(1)

21	下駄	全長 17.0 幅 9.2 器厚 2.2	スギ科スギ		・ 連歯・両歯独立型 ・ 平面形が隅丸方形を呈す ・ 両歯とも左側の磨耗が激しく爪先が消耗している ・ 鼻縮孔が完存	C-6	表録
22	下駄	全長 21.6 幅 9.1 器厚 3.6	ヒノキ科アスナロ属		・ 連歯・両歯独立型 ・ 平面形が長楕円形を呈す ・ 足の痕跡があり、右足のものと思われる ・ 鑿孔のうち1孔が完存	河川1 C-6・7	
23	板材	残存長 28.0 残存幅 6.4 厚さ 1.5		板目	・ 何らかの容器の底、もしくは蓋と思われる ・ 形状からおよそ直径33cm前後の円形を呈すと思われる	D	6
24	柄杓	径 15.0 器高 12.3			・ 側面上部に縦1.8cm、横2.5cmの長方形の柄孔をあける	溜池	C-7
25	曲物	径 38.1 器高 29.0	ヒノキ科アスナロ属		・ 径のやや小さい曲物を内側に入れ、2重にしている	井戸2	D-8
26	曲物	径 35.2 器高 8.8			・ 径のやや小さい曲物を内側に入れ、2重にしている	井戸2	D-8
27	曲物	径 34.8 器高 8.8	イヌガヤ科イヌガヤ		・ 器高の低い曲物である	井戸1	C-5
28	枕	残存長 85.5 径 2.6	クワ科クワ属		・ 1端を他方向から削って尖らせ、もう1端は欠損 ・ 枝を払っている	河川1	C-6・7
29	二又材	残存長 35.3 径 3.8	マツ科モミ属(二葉松類)	心持材	・ 又部の端部は欠損 ・ もう1端は4方向から削って尖らせる	基壇周廻	C-3 4
30	不明木製品	残存長 28.7 残存幅 5.1 器厚 6.4	ブナ科アカガシ亜属		・ アカガシかと思われるが焼成を受けて炭化しているため詳細は不明	祭祀場	C
31	楕	全長 16.8 残存幅 8.5 最大厚 5.0	マツ科マツ属		・ 長方形の板材の中央をくり抜いて容器としたもの ・ 1側縁が欠損 ・ 削り痕が明瞭に残る ・ 表面中央をレンズ状に削る ・ 焼成による欠損のため全体形不明	祭祀場	C
32	不明木製品	残存長 27.7 残存幅 8.0 厚 3.9	ブナ科シイ属	柱目	・ 中央部分に長方形の孔を両面から穿っている	祭祀場	C
33	板材	残存長 27.5 幅 9.4 厚さ 0.8	ツバキ科ナツツバキ属		・ 断面形が凸レンズ状を呈する長方形の板材である	祭祀場	C
34	壱弁	全長 102.8 長径 8.2 短径 5.8	マツ科マツ属(二葉松類)		・ 両端は使用により磨耗 ・ 表面を削って抉りを入れる ・ 断面形は楕円形を呈す	祭祀場	C
35	天秤棒	全長 104.6 幅 4.0 厚さ 2.4	ブナ科シイ属		・ 両端は削って折り取る ・ 両端とも2方向から削って挿穴に削り出す ・ 表面は使用により磨耗	D-7	13
36	楕状木製品	残存長 60.2 最大幅 6.4			・ 1端を削って薄く広げてもう1端は断面形がやや丸みのある長方形を呈す	祭祀場	C
37	楕状木製品	残存長 56.4 最大幅 5.6 厚さ 2.4			・ 1端を張り出すように削り、もう1端は全体に丁寧な面取りをする ・ 1部樹皮を取っただけの自然面のまま残す	祭祀場	C

表2 木製品観察表(2)

38	楕状木製品	残存長 最大幅 厚さ	58.8 4.7 0.6			・1端を削ってうすく広げて、もう1端は全体に荒く削って面をとる	配石3	C	
39	白	長径 器高	38.8 27.2			・白部は楕円形を呈す ・白部底部は欠損する ・全体を削って丁寧に仕上げている		C-4	12
40	不明木製品	残存長 残存幅 厚さ	63.6 13.9 2.2	スギ科スギ属		・焼成により全体形状は不明 ・方形の張り出しや方形の挟り等削って作り出す ・全体に丁寧な作りで仕上げに面取りを行う		D-3	13
41	杭	全長 径	73.4 5.4	心持材		・1端を3方向から削って尖らせ、もう1端は4方向から削って折り取る	祭壇場	C	
42	朱塗木製品	残存長 最大幅 最大厚 最小厚	11.8 5.5 0.7 0.4	ブナ科シイ属		・平面形が長方形を呈すと思われる ・表面の中央に段差を削り出すが、表面は無加工 ・表面全体に朱が塗られる ・1端は斜めに削って終わらせる	配石6	C-4	
43	朱塗武器形木製品	残存長 最大幅 最大厚 柄部径	16.7 13.9 2.3 0.9			・両面に朱が塗られ、また柄部の両面に黒漆が塗られている ・中央部をシノギ状に削って尖らせる ・方形の柄部中央に高まりを削り出す	配石5	C-6	図45と供伴して出土 銅剣を模したものか
44	有頭木製品	全長 幅 厚さ	12.5 5.2 4.1	ブナ科シイ属		・1端は多方向から削って折り取り、もう1端は多方向から削って尖らせる ・表面中央部に頭部を削り出す ・1辺は同側面から削って狭める		C	16
45	武器形木製品	残存長 最大幅 最大厚	30.3 4.8 0.8	スギ科スギ属		・厚さは両端にいくほど薄くなる ・全体にうすく削りなめらかに仕上げている	配石5	C-6	図43と供伴して出土 銅剣を模したものか
46	朱塗木製品	残存 残存幅 厚さ	26.8 6.7 0.6			・2辺は残存するが、欠損が多く全体は不明 ・表面に円孔を列になして穿つ穿孔には縦による摩擦痕が見られ1部に板皮が残存した ・表面と1側面に朱が塗られている	祭壇場	C	盾の可能性もあるが、器厚がやや薄いように思われる
47	不明木製品	全長 幅 器高	24.4 11.9 3.1	ニレ科 エノキ属		・平面形は1方がやや広い長方形を呈す ・中央よりやや端部よりに2箇所の長方形の孔を穿ち、断面形が長方形の木材をほめこむが以下は欠損 ・表面には足踏らしき使用痕が見られる ・裏面と1側面に使用による摩擦痕がある	祭壇場	C	下駄の一種か
48	板材	残存長 幅 厚さ	24.4 4.0 0.6	スギ科スギ属		・ごくうすい板材で、1端は荒く折り取られ、もう1端は欠損 ・何らかの削りくずか	祭壇場	C	

表3 木製品観察表(3)

49	板材	全長 幅 厚さ	25.7 3.3 1.0			・両端をも荒く削って折り取る ・全体に刃状の反りをもたせて削り出す ・断面形は長方形を呈す	祭祀場	C		武器形木製品の可能性がある
50	板材	残存長 幅 厚さ	35.3 6.5 1.6	ブナ科シイ属		・1端は荒く削っているが、もう1端は欠損 ・中央部をシノギ状に削り出す ・断面形は菱形を呈す	祭祀場	C	12	武器形木製品の可能性がある
51	武器形木製品	残存長 幅 厚さ	62.4 3.6 3.2			・1端を多方向から削って頭部を作り出す ・もう1端は1方向から削って尖らせる	祭祀場	C	13	図53とほぼ同加工。
52	武器形木製品	残存長 幅 厚さ	34.2 3.4 2.5			・1端を多方向から削って頭部を作り出す ・もう1端は多方向から削って尖らせるが、端部は欠損して不明	祭祀場	C		図52とほぼ同加工。
53	有頭棒	残存長 幅 厚さ	51.2 4.7 4.7			・1端を削り出して頭部を作り、もう1端を斜めに削って尖らせる ・頭部の下部に紐による圧痕とその裏面に削り痕がある	祭祀場	C		武器形木製品の可能性がある
54	有頭棒	残存長 幅 厚さ	9.1 3.5 1.5			・表面の端部近くを削って高まり削り出す ・1端は両面から削って尖らせもう1端は欠損 ・断面形は台形に近い	河川4	C		武器形木製品の柄部の可能性がある
55	棒材	残存長 幅 厚さ	20.3 4.5 1.7			・1端をやや丸みのある形に削り端部は尖らせる ・もう1端は欠損 ・断面形は扇形を呈す	河川4	C	16	武器形木製品の剣先の可能性がある
56	有頭棒	残存長 幅 厚さ	22.0 3.4 2.3			・1端を3方向から削って頭部を作り出す ・裏面は平坦なままである ・全体を削って成形する	祭祀場	C		武器形木製品の可能性がある
57	有頭棒	残存長 幅 厚さ	27.7 5.4 1.5			・1端を削ってやや丸みを帯びた頭部を作り出す ・もう1端は2方向から削って尖らせる ・全体を削って成形する	落込	C-6		武器形木製品の可能性がある
58	武器形木製品	残存長 幅 厚さ	34.2 3.4 2.5			・両端は欠損するが、中央部をシノギ状に削り出す ・柄部はやや厚めに削り出す ・断面形は菱形を呈す	落込	C-6		図43と同様、銅剣を模したものか
59	武器形木製品	残存長 幅 厚さ	62.4 3.6 3.2			・1端を多方向から削り、1側面に抉りを入れ柄部を作り出す ・もう1端は欠損	配石1	C-3		
60	棒材	残存長 幅 厚さ	18.8 2.5 2.0			・1端を2方向、もう1端は4方向から削って尖らせるがいずれも端部は欠損	祭祀場	C		
61	栓状木製品	残存長 幅 厚さ	6.6 6.2 4.4			・断面形が方形の角材部の端部の横に張り出し部をもつ ・全体に丁寧で鋭角に仕上げる	祭祀場	C		
62	有頭棒	残存長 幅 厚さ	20.0 2.4 1.9			・1端は削って丸みを帯びた頭部をもち、もう1端は欠損 ・端部付近に削って段をつくり出す ・全体に削って成形する	祭祀場	C		

表4 木製品観察表(4)

63	有頭樫	残存長 幅 厚さ	5.8 3.5 1.9		・両面から削って頭部をつくり出す ・端部は多方向から削って折り取り、もう1端は欠損	祭祀場	C-5	13	
64	杖状木製品	残存長 幅 厚さ	16.1 5.8 5.0	心持材	・1端は多方向から削って折り取り、もう1端は多方向から削って尖らせる ・表面中央部に頭部を削り出す	祭祀場	C	13	
65	杖状木製品	残存長 径	13.4 4.4	心持材	・1端は2方向から削って尖らせ、もう1端は欠損	祭祀場	C	13	
66	武器形木製品	残存長 幅 厚さ	17.4 3.4 1.5		・1端は欠損するが、もう1端は両側面から削って細くする ・全体を削って成形する	祭祀場	C	13	図45とほぼ同加工である
67	杖状木製品	残存長 幅 厚さ	23.2 9.0 3.1	心持材	・1端は多方向から削って尖らせるが、端部ともう1端は欠損	河川4	C		
68	有頭樫	残存長 径	59.8 3.3	心持材	・1端は削って頭部を作りだし、端部は削って折り取る ・もう1端は欠損	祭祀場	C	13	
69	杖状木製品	残存長 幅 厚さ	25.7 4.5 3.0	心持材	・1端を1方向から斜めに削って折り取り、もう1端は2方向から削って尖らす ・断面形は楕円形を呈す	祭祀場	C	13	
70	樫材	残存長 径	11.7 4.1		・1端は多方向から削って尖らせるが端部は欠損 ・もう1端は多方向から削って折り取る	祭祀場	C		
71	杖状木製品	残存長 幅 厚さ	17.4 2.6 2.3	心持材	・1端は多方向から削って尖らせ、もう1端は欠損 ・表面の中央を削って長方形のクボミをつくる ・裏面は削って平坦にする	落込	C-6		
72	杖	残存長 径	22.0 2.6	心持材	・1端は多方向から削って尖らせ、もう1端は欠損	祭祀場	C		
73	杖	残存長 径	278.8 4.9	心持材	・1端は多方向から削って折り取る ・もう1端は4方向から削って尖らせるが端部は欠損	祭祀場	C		
74	杖	残存長 径	22.2 4.1	心持材	・1端は4方向から削って尖らせるが端部は欠損 ・もう1端は欠損	塚	C-3		
75	杖	残存長 径	50.1 3.7	心持材	・1端は多方向から削って折り取りもう1端は欠損 ・枝は折り取る	配石2 周辺	C-4		
76	樫材	残存長 幅 厚さ	46.4 3.2 1.8		・1端は削って折り取り、もう1端は削って尖らせるが端部は欠損 ・全体に削っている	祭祀場	C		
77	杖	全長 幅 厚さ	53.5 4.6 2.8	心持材	・両端とも削って折り取る	祭祀場	C		
78	杖	残存長 幅 厚さ	53.7 3.3 2.0	心持材	・1端は2方向から削って尖らせるが焼成を受け欠損	祭祀場	C		
79	杖	全長 幅 厚さ	33.4 3.1 2.3	心持材	・1端を3方向から削って尖らせ、もう1端は、1方向から削って折り取り、もう1端は焼成を受け欠損	配石1	C-3		

表5 木製品観察表(5)

80	不明木製品	全長 最大幅 最小幅 厚さ	22.8 11.3 5.4 1.0	ブナ科 アカガシ属		・両側面に半円形の挟りを持つ ・中央に円孔を穿ち、その中心ラインに切り込みを入れている	D-3	13
81	不明木製品	残存長 幅 厚さ	12.7 9.0 5.4		心持材	・1端は段を削りだし、端部は斜めに削って終わる ・中央に長方形の孔を両面から穿つ	C-3	6
82	有頭棒	残存 径	77.6 7.0			・1端は削って折り取り、もう1端は欠損 ・多方向から削って頭部を作り出す ・1部を除き樹皮が残る	C-3	6
83	板材	全長 残存幅 厚さ	22.4 5.2 0.4	スギ科スギ属	心持材	・うすい板材で1側面が半円状を呈す ・側面中央に方形の切り込みと円孔を穿つ	祭祀場	C
84	不明木製品	残存長 幅 厚さ	34.5 7.0 5.4	ブナ科シイ属	心持材	・1端は1方向から削って折り取り、もう1端は欠損 ・両側面から方形の挟りを入れて頭部を作り出す	祭祀場	C
85	棒材	全長 幅 厚さ	15.2 3.4 2.5			・両端を2方向から削って折り取る	祭祀場	C
86	角材	残存長 幅 厚さ	10.4 3.7 1.6	マツ科モミ属		・1端を削って折り取り、もう1端は欠損 ・断面形は方形を呈す	祭祀場	C
87	脚部	残存長 最大幅 最小幅 厚さ	9.9 12.7 3.1 1.6	ヒノキ科アスナロ属		・平面形は台形を呈す ・1側面は平坦である ・全体を丁寧に作り磨きをかける ・痕などの脚部の可能性がある	D	12
88	不明木製品	残存長 最大幅 厚さ	34.2 6.2 1.7			・両面に削り痕が残るが、全体に面取りを施す ・何らかの製品の1部と思われる	祭祀場	C
89	組合鋸	残存長 残存幅 厚さ	32.6 8.3 1.2	ブナ科 アカガシ属		・ほぼ半分が欠損しているが長方形の挟りがあり、結合部にあたる ・表面は磨いて削り痕を残す	祭祀場	C
90	斧柄?	残存長 残存幅 厚さ	34.2 7.2 3.6			・端部は全て欠損 ・又上部は削って面を作り出す	祭祀場	C
91	板材	残存長 幅 厚さ	28.3 14.4 3.6			・全体に荒く削り出した板材で下部が広がっている ・木の未製品の可能性がある	祭祀場	C
92	組合鋸	全長 最大幅 厚さ	16.8 7.0 1.0			・上部に突起があり結合部と思われる ・全体を丁寧に磨いている	配石1	C-3
93	板材	全長 幅 厚さ	31.0 8.3 2.1	マツ科マツ属 (二葉松類)		・1辺が欠損し、全体形は不明 ・1側面を削って段を作り出す ・全体に荒い削り痕が残存	祭祀場	C
94	板材	残存長 残存幅 厚さ	12.7 6.1 0.8	コウヤマキ科 コウヤマキ属		・大部分が欠損し、全体形は不明 ・円孔を2つ穿ち、長方形の切り込みを入れる ・全体的に丁寧に作られている	C-5	6

表6 木製品観察表(6)

95	板材	残存長 残存幅 厚さ	25.9 16.1 2.0			<ul style="list-style-type: none"> ・全体に荒く削り痕が残る ・1辺は両面から削って折り取る 	C-3	16		
96	挟り入り 板材	全長 幅 厚さ	18.4 11.4 1.0	ブナ科 アカガシ属		<ul style="list-style-type: none"> ・1側辺は両面から削っている ・表面には荒い削り痕が残る ・1側辺に半円もしくは方形の挟りを入れる 	祭祀場	C	13	
97	槽	全長 幅 厚さ	18.5 4.6 2.5	ブナ科シイ属		<ul style="list-style-type: none"> ・表面を削って窪みをつくり出す ・1側辺が欠損しているため全体形は不明 	祭祀場	C		
98	板材	全長 幅 厚さ	17.4 10.7 2.0			<ul style="list-style-type: none"> ・ほぼ方形の背板の1側辺を両面から削って尖らせる ・表面は削り痕がそのまま残り、焼成を受けている ・方形の切り込みをもつ 	祭祀場	C		B地区出土の木製品(21)と同加工である
99	板材	全長 幅 厚さ	27.0 9.5 1.5	マツ科モミ属		<ul style="list-style-type: none"> ・1辺は両面より削って折り取る ・1側縁は表面から削って尖らせる ・ほぼ中央に表面が長方形の孔を穿つ 	祭祀場	C		
100	板材	残存長 幅 厚さ	13.8 8.9 2.1	マツ科モミ属		<ul style="list-style-type: none"> ・欠損が多く全体形は不明 ・表面を3方向から削って高まりを作り出す ・断面形は三角形を呈す 	祭祀場	C		
101	板材	全長 幅 厚さ	19.4 10.3 2.0			<ul style="list-style-type: none"> ・1端を1方向から削って折り取り、もう1端は2方向から削って折り取る ・1側辺を2方向から削って尖らせはば中央に挟りを入れる 	河川2	C-7		
102	穿孔板材	残存長 幅 厚さ	51.3 8.3 1.2		板目	<ul style="list-style-type: none"> ・1辺を削って折り取った板材の端部近くに両面から2つの方孔を穿つ ・側辺に段を削り出す 	祭祀場	C		
103	穿孔板材	残存長 幅 厚さ	38.8 5.5 1.4	スギ科スギ属		<ul style="list-style-type: none"> ・やや楕円形の孔を等間隔に3孔を両面から穿ち、孔と同位階の側辺に両面から方形の挟りを入れる ・ミカン削材を削って板材としている 		C-3	6	
104	穿孔板材	全長 幅 厚さ	40.4 7.6 1.2			<ul style="list-style-type: none"> ・1辺を削って折り取った板材の中央に両面から円孔を穿つ ・一部焼成を受け炭化 	祭祀場	C		
105	穿孔板材	残存長 幅 厚さ	36.0 8.6 3.0	ヒノキ科 アスナロ属		<ul style="list-style-type: none"> ・ミカン削材の表面全体を削る ・中央よりやや端部に近い位置に方孔を穿つ ・側辺に両面から方形の挟りを入れる 	配石8	C-2・3		
106	二又材	残存長 径	17.4 2.5		心持材	<ul style="list-style-type: none"> ・1端部は削って折り取る ・もう1端は欠損 		C	16	
107	二又材	残存長 径	30.1 3.3		心持材	<ul style="list-style-type: none"> ・又部の両端は欠損しており、もう1端も焼成を受け、欠損 	祭祀場	C		
108	二又材	残存長 径	39.9 2.4		心持材	<ul style="list-style-type: none"> ・又部の両端は削って折り取りもう1端は欠損 ・大部分に削成が残る 	祭祀場	C		
109	二又材	残存長 径	28.3 4.5	ブナ科 アカガシ属	心持材	<ul style="list-style-type: none"> ・端部は全て欠損 ・部分的に削成が残る 	河川4	C		

表7 木製品観察表(7)

110	二又材	残存長 34.9 径 5.1		心持材	・又部の両端は削って折り取り、もう1端は欠損 ・その他の枝は払っている	祭祀場	C	
111	二又材	残存長 53.2 径 3.8		心持材	・端部は全て欠損 ・その他の枝は払っている	配石1	C-3	
112	二又材	残存長 38.0 径 4.9		心持材	・又部の1端は削って折り取り、1端は欠損 ・もう1端は多方向から削って尖らすが焼成を受けている ・一部樹皮が残る	祭祀場	C	
113	二又材	残存長 24.3 径 2.7		心持材	・端部は全て欠損 ・その他の枝は払っている		C-4	
114	二又材	残存長 23.1 径 3.4		心持材	・端部は全て欠損 ・部分的に樹皮が残る ・1端が焼成を受け炭化	祭祀場	C	
115	二又材	残存長 8.8 径 1.8		心持材	・又部の両端は欠損 ・もう1端は4方向から削って尖らせる	祭祀場	C	
116	杭	残存長 32.6 長径 2.7 短径 2.0		心持材	・1端は多方向から削って尖らせ、もう1端は欠損 ・一部焼成を受け炭化	配石5	C-5・6	
117	杭	残存長 24.0 径 4.2		心持材	・1端は多方向から削って尖らせもう1端は欠損 ・表面は自然面のまま樹皮が残る		C-3	6
118	杭	残存長 23.9 径 4.8	スギ科スギ属	心持材	・1端は2方向から削って尖らせもう1端は欠損		C-4	6
119	杭	全長 34.5 径 4.2	マツ科マツ属 (二葉松類)	心持材	・1端は斜めに削って尖らせ折り取る ・もう1端は端部を多方向から削って折り取り、中央部から端部にかけて削って細くする	配石3	C-4・5	
120	杭	全長 27.0 幅 2.8 厚さ 3.3	ツバキ科サカキ	割材	・1端は多方向から削って折り取り、もう1端は4方向から削って尖らせる	祭祀場	C	
121	角材	全長 36.9 幅 3.8 厚さ 2.1	ヒノキ科ヒノキ属	割材	・1端は1方向から斜めに削って折り取る ・断面形は方形を呈す	祭祀場	C	
122	杭	残存長 55.0 径 3.1		心持材	・1端を2方向から大きく削った後、両側面からも削って尖らせる ・もう1端は欠損	配石1	C-3	
123	杭	全長 39.6 幅 6.3 厚さ 5.0		心持材	・両端を多方向から削って折り取る ・表面全体を削って仕上げる	祭祀場	C	
124	杭	残存長 41.6 径 2.0		心持材	・1端を斜めに削って尖らせ、もう1端は欠損 ・枝を払った自然面のままである	井戸3	D-4	
125	杭	全長 30.0 径 3.5	ツバキ科ツバキ属	心持材	・1端は2方向から削って尖らせ、もう1端は斜めに削って折り取る ・中央部を1方向から削って段を作り出す ・表面の一部は自然面のままで、その他は削っている	祭祀場	C	
126	穿孔樺材	残存長 31.2 幅 3.3 厚さ 2.1			・1端は荒く削って折り取り、もう1端は欠損 ・端部近くに長方形の切込みを入れる ・全体に削って成形する		C-3	

表8 木製品観察表(8)

127	棒材	残存長 幅 厚さ	14.6 2.9 1.5			・1端は削って折り取り、もう1端は欠損 ・端部近くを段状に削り出す	土器だまり19	C-2	27
128	羽子板状 木製品	全長 最大幅 最小幅 厚さ	44.0 16.5 4.9 4.1	マツ科モミ属		・両端を削って折り取る ・1端を持ち手状に削り出す ・断面形は長方形を呈す	祭祀場	C-5	
129	柱材	残存長 長径 短径	64.8 17.7 11.3		心持材	・1端は2方向から削って折り取り、もう1端は欠損	祭祀場	C	
130	杭	残存長 径	64.1 3.4	ツバキ科サカキ	心持材	・1端を多方向から削って尖らせる ・表面は枝を払う以外は自然面のまま一部には樹皮も残る	塚	C-3	
131	矢板	全長 幅 厚さ	64.0 6.2 1.6	ブナ科シイ	割材	・ミカン割材から板材を削りだし、1端を両側面から削って尖らせる ・断面形は台形を呈する	塚	C-3	
132	杭	残存長 幅 厚さ	78.2 8.6 5.5		心持材	・両端は欠損しているが、1端を1方向から削っている ・枝は折り取っている	塚	C-3	
133	杭	残存長 径	79.9 5.2		心持材	・1端を多方向から削って尖らせる ・表面は枝を払う以外は自然面のまま一部には樹皮も残る	塚	C-3	
134	矢板	残存長 幅 厚さ	98.9 13.0 2.2		割材	・ミカン割材から板材を削りだし、1端を両側面から削って尖らせる ・断面形は台形を呈する	塚	C-3	
135	矢板	残存長 幅 厚さ	95.6 13.6 4.0	ブナ科シイ属	割材	・ミカン割材から板材を削りだし、1端を両側面から削って尖らせる ・断面形は台形を呈する	塚	C-3	
136	矢板	全長 幅 厚さ	71.0 8.3 2.8		割材	・ミカン割材から板材を削りだし、1端を両側面から削って尖らせる ・断面形は台形を呈する	塚	C-3	
137	矢板	残存長 幅 厚さ	83.3 15.2 2.5		割材	・両端は欠けているが、ミカン割材から板材を削りだし、1端を両側面から削って尖らせる ・断面形は台形を呈する	塚	C-3	
138	板材	残存長 幅 厚さ	20.7 6.2 1.0			・欠損が多く詳細は不明だがやや1方が細い長方形を呈すると思われる ・側面は丁寧に削られている		D-9	

表9 木製品観察表(9)

石器・石製品・金属製品（第141・142図1～10）

今回の調査において出土した弥生時代の石器・石製品は、弥生時代中期末～後期初頭の配石遺構から配石に転用された太形蛤刃石斧1点・石錘2点・すり石が1点、模倣戦に用いられたと考えられる打製石鏃が1点出土している。中期後半には第1号方形周溝墓第1号主体部掘方内に供献された打製石剣がある。他に石鏃が1点出土した。弥生時代前期の自然河川から砥石が1点出土しており、この時代の石器は計8点認められる。西に続くA・B地区に比して打製・磨製石器ともに出土量は極端に減少している。なお、石鏃の形態分類に関しては既刊の「石鏃・石錐形態分類表」を用いた。

打製石器

打製石器は全てサヌカイト製であり、二上山産の石材を利用していると考えられる。(1)は1号方形周溝墓1号主体部掘方内より出土した打製石剣で、外形は紡錘形を呈している。先端部には摩滅がないが、基部には刃つぶしが施されており、周辺刃部には摩滅がみられる。長辺14.1cm。短辺3.0cm。厚さ1.5cm。重さ60g。(3)は打製石鏃である。いわゆる柳葉形石鏃で4類-bに相当する。方形周溝墓をめぐる墓道の盛土内より出土。この石鏃は、墓道築造時に混入したと考えられる。長辺4.6cm。短辺1.7cm。厚さ0.7cm。重さ3.92g。(2)は配石・祭祀遺構に伴って出土した打製石鏃で、いわゆる凸基式で5類-bに分類される。長辺4.0cm。短辺1.6cm。厚さ0.5cm。重さ3.14g。

磨製石器

配石遺構に伴って(4)太形蛤刃石斧が1点出土した。砂岩製で、側面に長軸に沿って大きな欠損が見られる。敲打痕が全体に多数見られ、石斧として欠損して後に叩き石として使用されたと考えられる。長辺11.7cm。短辺5.3cm。厚さ4.1cm。重さ431g。(5)は短軸方向に紐痕と思われる摩滅が認められるため砂岩製の石錘と考えられる。半分を欠損している。長辺9.9cm。残存短辺5.5cm。厚さ5.5cm。重さ457g。(6)も同じく石錘と考えられる。短軸方向に紐痕が残っている。しかし半分を欠損しており、表面には敲打の痕がみられる。砂岩製。長辺10.4cm。残存短辺5.1cm。厚さ4.1cm。重さ265g。(7)は配石遺構6から出土。すり石と考えられる。全体にすり痕がみられ、平らな面には有機物が一面に付着している。煤が付着していることから、被熱した可能性が考えられる。長辺8.9cm。短辺8cm。厚さ7cm。重さ763g。流紋岩製。(8)は砥石と考えられる。石質は未鑑定である。長軸方向にすり痕が見られるが、砥面と思われるのは一面のみである。長辺8.5cm。短辺4.7cm。厚さ4.0cm。重さ512g。

配石に用いられた石

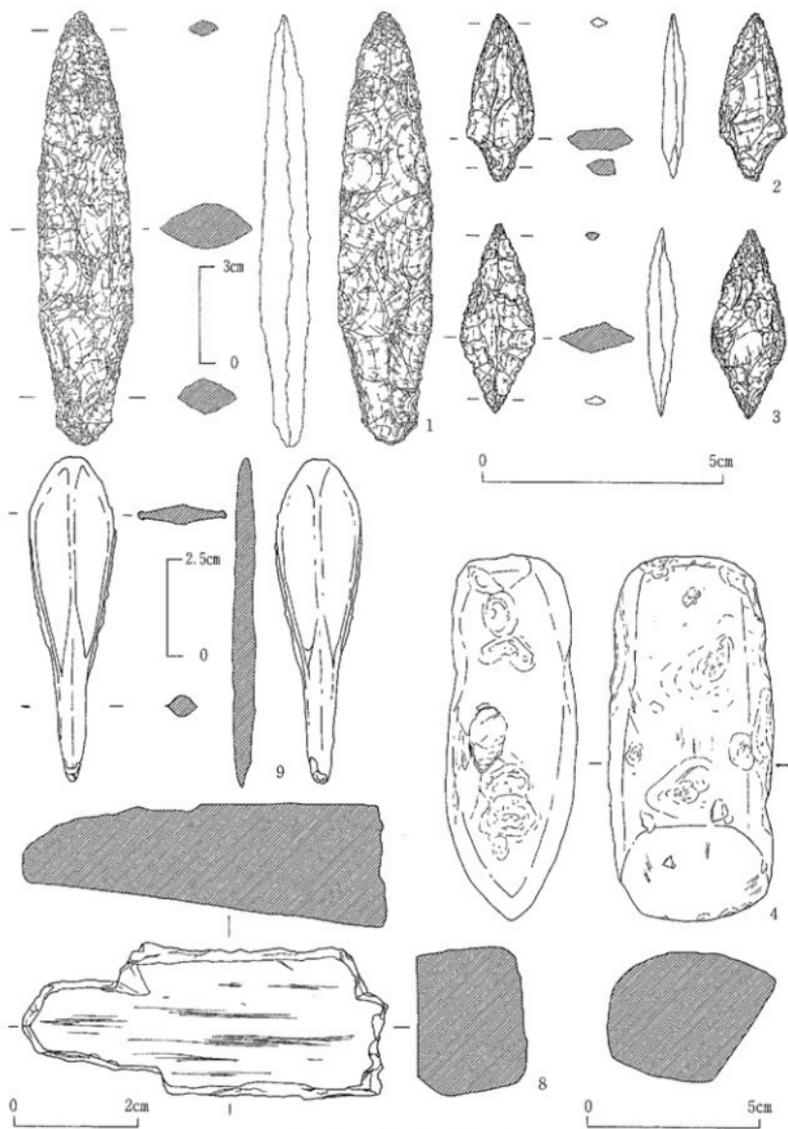
配石6において用いられていた緑泥片岩を1点掲載する。(10)は長辺40.8cm、短辺18.2cm、厚さ10cm、重さ12.3kgである。奥田尚氏によると紀ノ川流域の転石を搬入したものと考えられる。

砥石や石錘は、あるいは配石の用材としてもたらされたとも考えられるが、太形蛤刃石斧は配石の中から出土したが、祭に使用された後に配石に用いられたのか当初から配石の用材として使用されたのかは不明である。(5・7・8)の遺物には煤が付着しており、被熱している。

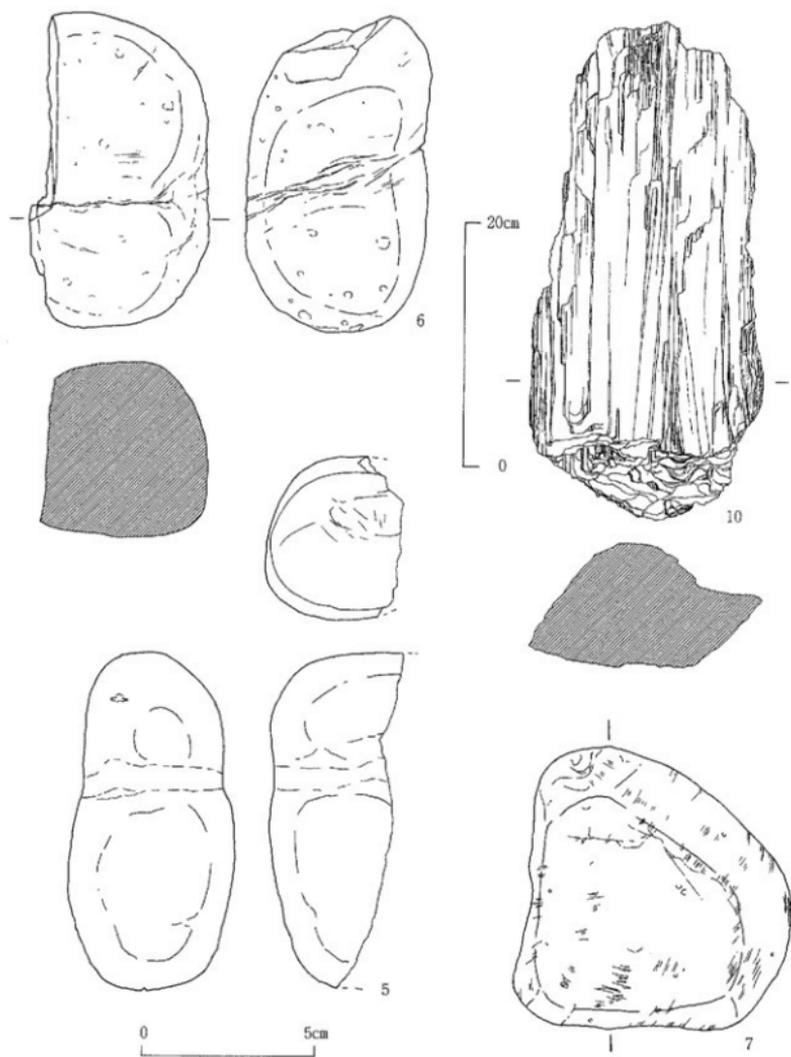
金属製品

銅鏃が、1点後期初頭の第13層から出土した(9)。いわゆる柳葉形を呈する。刃部が鑄造したままの状態で作りをし出していない。長辺5.2cm。短辺1.4cm。厚さ0.4cm。重さ6g。非常に保存状態がよく出土時点では、赤銅色を呈していた。刃部の形状からそのままでは、鏃としての殺傷力がないことから模倣戦に使用されたと考えられる。

注 福永信雄編 「瓜生堂第46次発掘調査中間報告書」37p 「石鏃・石錐形態分類表」2000年



第141图 石器·金属器实测图



第142图 石器·配石石材实测图

IV 小結（第47-2次調査の成果）

今回の調査地は、過去2年度に引き続き河内湖の南岸付近を東西にトレンチを設けた形で実施した。以下、調査で判明したことを新しい時期から順に箇条書きにまとめてとする。なお、例言で述べたごとく3年間にわたる調査の成果の全体を通しての調査成果の検討は、第VII章で行いたい。

1 近世の遺構は、溜池と溝を検出した。溜池は、杭を打ち横に竹をわたして土留めをし護岸していた。全形は調査区外に延びるため不明であるが、周辺の調査区に及んでいないためさほど大きなものではない。池内から弥生時代から近世までの遺物が出土したが、機能していたのは18世紀後半から19世紀前半までと考えられる。溝・溜池ともに耕作作用に用いられたものである。

2 中世に属す遺構は、13世紀代に属すと考えられる周溝で囲まれた瓜生堂廃寺の基壇をはじめ、大溝2条と井戸5基、土壌、柱穴などを検出した。

瓜生堂廃寺の基壇は、C地区のほぼ中央で検出した。基壇は、幅約3m深さ約1m、断面形が逆台形を呈する周溝で囲まれている。検出したのは、北辺部（基壇上面幅・東西約12m）である。南北（長辺）は、周辺部の調査結果から見て約20m程度と考えられる。南北に長い長方形の基壇上の建物は、東ないし西面することはまちがいないがいずれかは確認できない。基壇は、検出地の東側に分布する古代から中世の遺構面を構成する本遺跡内では比較的固くしまる土を用いて前後2回にわたり盛土して造成されている。第1次基壇は、13世紀初頭に11世紀後半から12世紀初頭の遺構面を削平し造成していた。2回目、13世紀前半から中葉に当初造られた基壇上に再度、盛土し北に拡張していたが、東西は逆に周溝を掘り替えた関係で狭めている。

周溝内や付近から瓦が出土するが、完形のものではなくいずれも破片である。量や破片の大きさからみて、基壇上の建物に葺かれていたとは考えられない。基壇上の建物は、茅葺きなどの屋根と考えられる。これを裏付けるように建物を構成する柱穴は、掘方の平面形が径50cm前後、深さ40cmのほぼ円形を呈する。掘立柱の柱材は遺存していない。柱通りは整然とせず、柱間は1.8m前後で東西3間は確認しているが南北は不明である。別に想定される瓦葺き建物は、瓦の出土量と範囲から位置は、基壇の東側に求められる。

溝の中には、幅約5m深さ約1mで14世紀から16世紀初頭まで機能していたのは南北方向に掘られた大溝2条（C・D地区各1条）がある。この溝は、形態・規模から見てB地区で確認した大溝と屋敷の周りに巡らされた環濠の可能性が高い。

基壇の東約50mで検出した14世紀初頭に廃絶した井戸は、灯明皿に使用した中国製の白磁皿が出土した。この種の皿は高級品のため通常、灯明皿に使用することはない。おそらく、寺に関係する井戸と考えられる。

3 平安時代中期から奈良時代の遺構は検出していないが、この時期の遺物がB地区と同様に少量、包含層中より出土している。従前の調査で約100mより東側で遺構や遺物が確認されており後世にもたらされたものと考えられる。

4 古墳時代の遺構は、今回の調査で初めて中世の遺構と同一面上で中期後半に属す小形低方墳の周溝の可能性が考えられる溝と前期の布留式期の井戸1基を検出した。小破片であるが、中期後半から後期前半に属す埴輪や須恵器などが、包含層中より出土している。中世段階で削平されているが、本来は調査地付近に当該時期の小形低方墳が複数存在したものと考えられる。また、布留式期の井戸は、井筒は確認できていないがほぼ円形の掘り方から見て存在した可能性が高い。また、井筒内より釣瓶に使用され、落込んだため遺棄されたと考えられる完形の壺と壺が計4点出土した。

5 弥生時代後期末と庄内期の遺構と遺物は、B地区と異なり遺構はほとんど検出されていない。遺

物は土器が一定量出土している。おそらく地震に伴う祭祀場所が、西側に移動したためと考えられる。また、前回確認した別の地震に伴う噴砂も認められない。

6 弥生時代後期初頭から中期末は、C地区の南海地震による地滑りで生じた窪地内および東肩付近で配石遺構を多数検出した。配石に用いられた石は、B地区で検出したものと同様で近隣で採取されたものはほとんど見られない。紀ノ川流域からもたらされた緑泥片岩は人頭大の重さ約12kg前後のもの複数認められる。配石遺構は、人頭大の石と玉石を用いたものに大きく2分される。

配石遺構の周辺からは、東部瀬戸内海地方からもたらされたと考えられる土器や、杵などの木製品や祭の供物と思われるイノシシなどの獣骨とハマグリなど動物遺存体や桃の実などが出土した。木製品には、一般に祭で模擬戦が行われる時に用いられたとされる武器型木製品が10点以上含まれる。後期初頭の配石には、土壌を掘りその中に1本の武器型木製品を納め、埋めた後に配石を行い、その上から朱塗り武器型木製品を突き刺した状況で発見されたものもある。また、朱塗りの盾、石鏃や後期初頭に属す銅鏃や供献土器の中には東部瀬戸内地域産と考えられる土器も多数含まれる。

7 弥生時代中期後半の遺構は、C地区で畿内Ⅳ様式後半に属す塚状遺構1箇所と畿内Ⅳ様式前半に属す方形周溝墓1基、D地区で方形周溝墓3基と墓道を検出した。また、遺構ではないが南海地震などによる地滑りに伴う2回の断層を確認した。

塚状遺構は、地震による地滑りが生じた直後に窪地に流れ込む水を調整するために設けられたと考えられる。なお、窪地が生じた直後に、一部を周辺の土を用いて埋めていることも確認できた。ただ、再度起こった地震による地滑りにより機能を停止し、以降は配石行為が行われたことが判明した。

方形周溝墓は、墓道を挟んで東側に2基、西側に2基を確認した。全形がほぼ判明した4号墓の規模は、幅約1mの溝に囲まれた中に長辺10m短辺5m、高さ約1.2mである。墳頂部で検出した甕棺の出土状況から本来の墳丘は現状より約0.3m高く、1.5m前後と推定される。主体部は、合わせて、木棺11基（痕跡含む）甕棺2基を検出した。残りのよい木棺材は、厚さ10cmのコウヤマキの板材（底板）がある。

木棺内に収められた人骨は比較的残りの良いものと消失したものがある。4号方形周溝墓を除いて木棺は切り合いが認められない。木棺内の副葬品は、存在しなかったが、1号周溝墓の1号木棺の被葬者の頭位近くの掘方内より供献されたと考えられる打製石剣が1点出土している。供献された土器は、周溝内から出土するものは少なくマウンド内に穴を掘り埋め込んでいた。

墓道は、南西から北東に向かう上場幅約2mの道（長さ約14mを確認）から南に向かい上場幅1mの道（長さ約4mを確認）が「y」字状に枝分かれしている。周囲を掘りくぼめ残った高まりに厚さ約10cm程土盛土を行ない、歩く部分を平坦に仕上げている。道の北端が南端に比べてわずかに高い。今回発見した墓を営んだ場所が、調査地点の北側に存在した河内湖の岸辺に当たる低い土地であったために墓につながる道が水でつかるのを防ぐために造成したものと考えられる。

8 弥生時代前期の遺構は、B地区では認められなかったが今回は、溝と土壌を検出した。同時に畿内第Ⅰ様式中段階に属す弥生土器が出土した。出土状況から見ると、東に約20m離れた地点でこの時期の堅穴住居などが発見されていることから調査地は居住域の外れに当たると考えられる。

9 今回確認した土層から見ると調査地付近は、一部削平されたことが考えられるが古墳時代以降中世までの堆積が50cm弱程度しかなく、逆に庄内式期には約80～150cmの堆積が認められた。弥生時代中期後半から後期までは厚いところで約20cmしか堆積していない。この状況は、今回の調査地点では方形周溝墓群が造られた後、約200年以上にわたり埋まることなく、その高まりが残存していたことを示している。

V 第46次（A地区）第47-1次（B地区）

調査の概要

1. 第46次（A地区）調査の成果

（1）はじめに

調査地は、従前の調査の大半が遺跡の中央付近で実施されていたのに対して、遺跡北端付近を東西にトレンチを設ける形で実施した。調査地付近は、今までの調査成果から弥生時代に存在した河内湖の南岸にあたる想定されており、遺構や遺物の存在が希薄な場所と考えられていた。しかし、調査の結果は、予想に反して弥生時代中期末の上・中・下3面の遺構面から掘立柱建物などの多くの遺構を検出し、弥生土器をはじめとする多数の遺物が出土した。これは、結果的に従前から想定されていた南北方向に延びる自然堤防の先端付近を、横断して東西に調査する形となったためである。すでに、中間報告として調査成果の一端を公表しているが今回最終報告を上梓するにあたり、中間報告作成後の整理作業を通じて図化できた弥生土器と柱材などを掲載し、これらの検討を通して明らかにしえた事柄の概要を以下、遺構と遺物について紹介する。

（2）遺構

弥生時代中期の遺構は、標高1m付近の5箇所自然堤防が起因するマウンド状の高まり（マウンド1～5と仮称）を中心に検出した。自然条件的には標高から見て、この地に居住域が営まれたのは当時小規模な海退が起こり河内湖の水位が低下した結果、水辺が一時期陸化したためと推定される。また、上・中・下遺構面の存在は、海退が短期間で終わり一端水没した際に居住域を移動したが、再度陸化し、そこをまた居住域としたことを示している。ただ、少しでも高まりを大きくすることを意図したのか、下面遺構の上に再度盛土を行っていた。

上～下面の遺構面から出土する弥生土器は、畿内第IV様式前半と見ることができる。したがって非常に短期間（おそらく数十年間）に2回以上の居住がおこなわれたと考えられる。この時期は本遺跡が最も栄えた時代である。逆に言えば、そのような時代であったからこそ、潮に面した不安定で低湿な立地条件にもかかわらず今回の調査地付近にまで居住域をひろげたのであろう。ただ、上面遺構はわずかな溝などしか認められないことから、第IV様式後半には、ヨシなどが生える状況で確実に陸化しているにもかかわらず居住域は南に移動したと考えられる。集落の衰退を示している可能性もあると思われる。

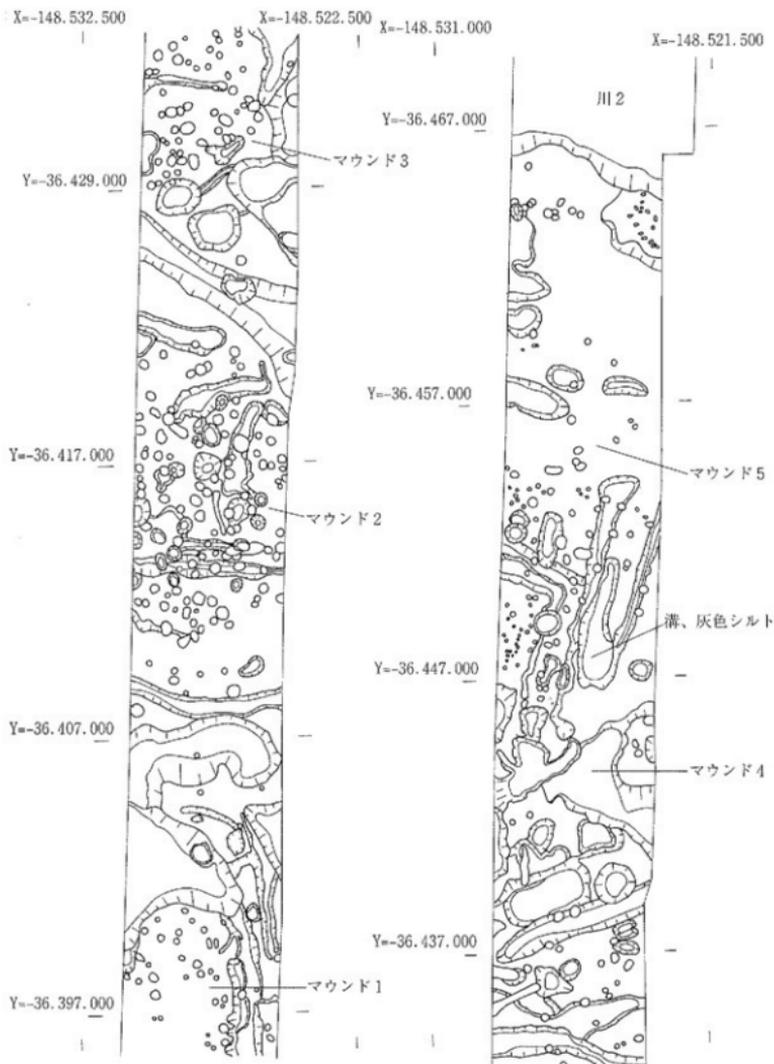
中面・下面遺構ともに柱穴はかなり密集し、切り合いも認められたことから短期間に掘立柱建物が建て替えられたことが判明した。掘立柱建物の柱は、基本的に建物を建てることに不適当な軟弱で低湿な地に敷いて営んでいることから図 1 に示したように様々な工夫が認められた。最も多かったのは、ヨシを柱穴に厚く敷き詰めることである。また、敷き詰めたヨシの上に礎板にあたる木（大半は両端を切った棒材）を柱を建てる前に置くことも行っている。ただ一つの建物に同じ柱の立て方を行った様子は見られない。また、以前の調査で検出されている柱の下端に切り込みを入れ、そこに礎板を組み合わせるものは、わずか1例しか認められなかった。柱材および礎板に使用された木は当時周辺に生息していたクヌギ・アカガシ・コナラ・クスノキなどの広葉樹を用いており特徴に選別した様子は見られない。

（3）遺物

遺物は、弥生時代中期のもの以外ほとんど出土していない。中間報告以降、整理作業を実施し図化した弥生土器と木製品（柱など）をまず紹介し、それ以外の遺物についてはすでに報告したため簡単に述べる。

弥生土器

土器溜まり出土品などに第IV様式前半～中葉の良好な一括資料が認められる。土器の中には、タタ



第143図 A地区(46次)弥生時代遺構配置図

キを施すものがあり、また広口壺の口縁部などを器台に転用したものがかなり認められる。中間報告でも一部を報告した。今回は、それ以外の主要な土器について図示し報告する。

土器溜まり1出土土器(第144図1~25、第145図26~38)

1~6は口縁端部を上下に拡張し、広い口縁を持つ。端部外面には、刺突文(1)たて線文(2・4・5)籐状文(3・5・6)がある。頸部はタテハケを施した後、直線文を加える。(2・3・5・6)がある。内面はヨコハケを施す(2・5・6)が存在する。口径は(1)、18.8cm。(2)、20.0cm。(4)、23.6cm。(5)、24.0cm。(6)、28.0cm。をそれぞれ測る。(1~6)は生駒西麓産である。(7・8)は受け口状口縁部を持つ。両者とも外面にタテハケ、内面にヨコナデを施す。口縁直下に一条の凹線が入る。胎土は灰白色を呈することから摂津産であろう。(9~13・15・16)は広口壺である。頸部から緩やかに外反する口縁部を持つ。端部には(9)は籐状文、(10~12)は波状文を施す。(12・13)は内面に線状文を配する(9)は口径22.0cm、(10)は19.2cm、(11)は12.4cm。(12)は22.0cm。(13)は16.6cm。(15・16)は端部を上下にわずかにつまみあげる無文である。(16)は口縁直下に二組一対の穿孔が見られる。口径は(15)は12.6cm。(16)は10.6cm。ともに灰白色を呈する。(14)は大型の細頸壺である。外面にはハケ状工具による刺突文が何重にも重なり、円形浮文を貼り付ける。口径11.6cm。生駒西麓産である。(17~25)は壺である。(17)は外面にヘラケズリ、内面にハケを施す。口径13.0cm。(18)は倒卵形の胴部から口縁部が緩やかに外反する。内外面にヘラミガキを施す。口径12.0cm、器高21.6cm。生駒西麓産である。(19~21)はくの字口縁を持つ。(20)は外面ヘラミガキ、内面タテハケ、(21)は内外面にタテハケ。口縁端部は上方につまみ上げる。口径は(19)が14.2cm、(20)が15.4cm、(21)が14.0cm。(22、23)は中型の壺である。両者とも外面ヘラミガキ、(22)は内面ハケを施す。両者とも生駒西麓産である。(24、25)は底部である。両者とも外面ヘラミガキを施す。(24)は一ヶ所穿孔している。

(26~28)は大壺である。三者とも内外面ハケを施す。口縁端部は(26)が下方、(28)が上下方に僅かに肥厚させる。三者とも生駒西麓産である。口径は(26)が31.2cm、(27)は40.4cm、(28)は40.0cm。(29)は胴部である。内外面にタテハケ後、ユビオサエを施す。(30)は底部である。外面に幅の広いヘラミガキ、内面にタテハケを施す。(31、32)は壺胴部辺である。(31)は籐状文、(32)は籐状文と扇形文を施す。(33、34)は口縁部外面に数条の凹線文が巡る鉢である。前者は外面タテハケ後ヘラミガキ、内面ヨコハケ。口径20.8cm。(34)は外面にヘラケズリ後タテハケ。口径20.6cm。(35、36)は台付鉢である。両者とも胴部上半~口縁部外面まで籐状文を密に施している。内外面はヘラミガキを行う。前者は23.2cm。後者は24.0cm。両者とも生駒西麓産である。(37)は高杯の脚部、(38)は柱状部である。

土器溜まり2出土土器(第146図39~54)

(39~42)は壺である。(39~41)は広口壺の口縁部である。(39)は端部に上下に刻目文を入れ、籐状文を施す。内面には2個一対の円形浮文を配する。(40)は僅かに波状文が残る。内面に刺突文を加える。(41)は端部に波状文、内部に扇形文、頸部に直線文を施す。(42)は直口壺である。口径は(39)が33.0cm、(40)が20.0cm、(41)が18.8cm、(42)は14.7cmである。(43)は外面に数条の凹線文が入る大型の鉢である。口径26.0cm。(44~48)は底部である。(49~53)は壺である。くの字口縁を持つ。(49)は内外面にヨコハケ。口径19.8cm。(50)は端部をつまみ上げる。内面にタテハケ。口径21.0cm。(51)は内面にヘラミガキ、口径14.6cm。(52)は内外面にヘラミガキ。生駒西麓産である。(53)は胴部片である。(54)は台付鉢の脚部である。

土器溜まり4出土土器(第146図55~57)

(55~57)は外面に籐状文を施す広口壺である。(55・56)の内面はヨコハケ、(57)はナデを行う。口径

は(55)が21.6cm、(56)が22.4cm、(57)が17.8cm。三者とも生駒西麓産である。

土壙出土土器

土壙6(第147図58~60)(58~60)は底部である。(58・60)は外面にヘラケズリ。(58)は生駒西麓産、(59)はヘラミガキを施す。生駒西麓産である。

土壙7(61~63)(61)は広口壺である。口縁端部に刺突文が巡る。口径15.6cm。生駒西麓産(62・63)は鉢である。両者とも内外面にヘラミガキを加える。(62)は口縁直下に一条の凹線を巡らす。口径27.8cm。(63)は外面に直線文や波状文を施す。口径32.4cm。

土壙17(66)(66)は壺胴部である。直線文、波状文、簾状文を施す。

土壙18(64・65)(64)は大型の鉢もしくは高杯の杯部である。口縁端部を内外に肥厚させる。外面に一部ヘラケズリを行う。口径33.0cm。(65)は甕である。内外面にハケを施す。口径37.0cm。

土壙21(67・68)(67)は直口壺である。摩滅が激しい為、外面調整は不明であるが、内面にタテハケを施す。(68)は壺胴部片である。直線文、簾状文を施す。

土壙22(69)(69)は鉢である。外面に直線文、口縁部に刺突文を施す。内面にはヘラミガキを加える。

土壙25(70~80)(70)は広口壺口縁部である。簾状文と刻目文を施す。(71)は壺胴部である。外面に粗いタテハケを施した後、下半にヘラミガキを加える。直線文が巡る。内面はユビオサエを施す。72は鉢である。外面に簾状文を施す。内面にはヘラミガキを加える。口径22.6cm。(77~79)は甕である。(77)は内面にヘラミガキを施す。(78)も内外面にヘラミガキを加える。両者とも生駒西麓産である。(79)は口縁端部をつまみあげる。(73・74・80・82)は底部である。

土壙34(81・82)(81)は鉢であろう。口縁端部に刺突文を施す。(82)は壺底部である。外面にヘラミガキを施す。

土壙B24(83~86)(83)は鉢である。外面にヘラミガキを施す。(84)は甕である。(85・86)は底部である。

ピット出土土器(第148図87~120、第149図121~148)

ピット46(95)(95)は脚部である。内面にヘラケズリを施す。

ピット47(90~94)(90)は大型の甕である。(91・92)は小型の甕である。外面にヘラミガキを施す。7は壺胴部である。外面に円形浮文を配する。

ピット48(87~89)(87~89)は底部である。(87)は外面にヘラミガキを施す。

ピット51(96)(96)は甕底部である。

ピット53(97)(97)は甕である。

ピット54(98~100)(98)は口縁部を上下に拡張する。外面に簾状文を施す。生駒西麓産である。(99・100)は壺胴部片である。

ピット55(101)(101)は底部である。外面にヘラミガキを施す。

ピット57(102)(102)は広口壺である。外面に直線文、口縁部に刺突文を施す。

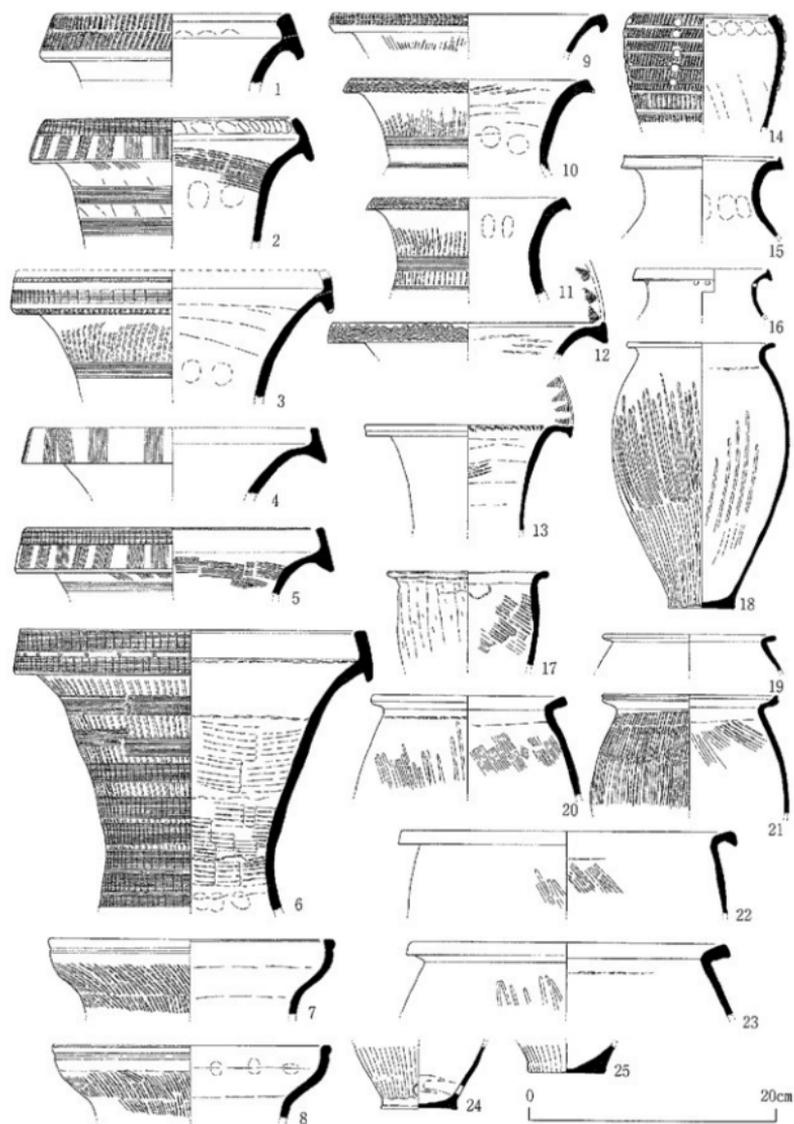
ピット63(103)(103)は壺胴部片である。

ピット68(104~106)(104)は鉢である。外面に簾状文を施す。(105)は甕底部である。(106)は鉢胴部片である。

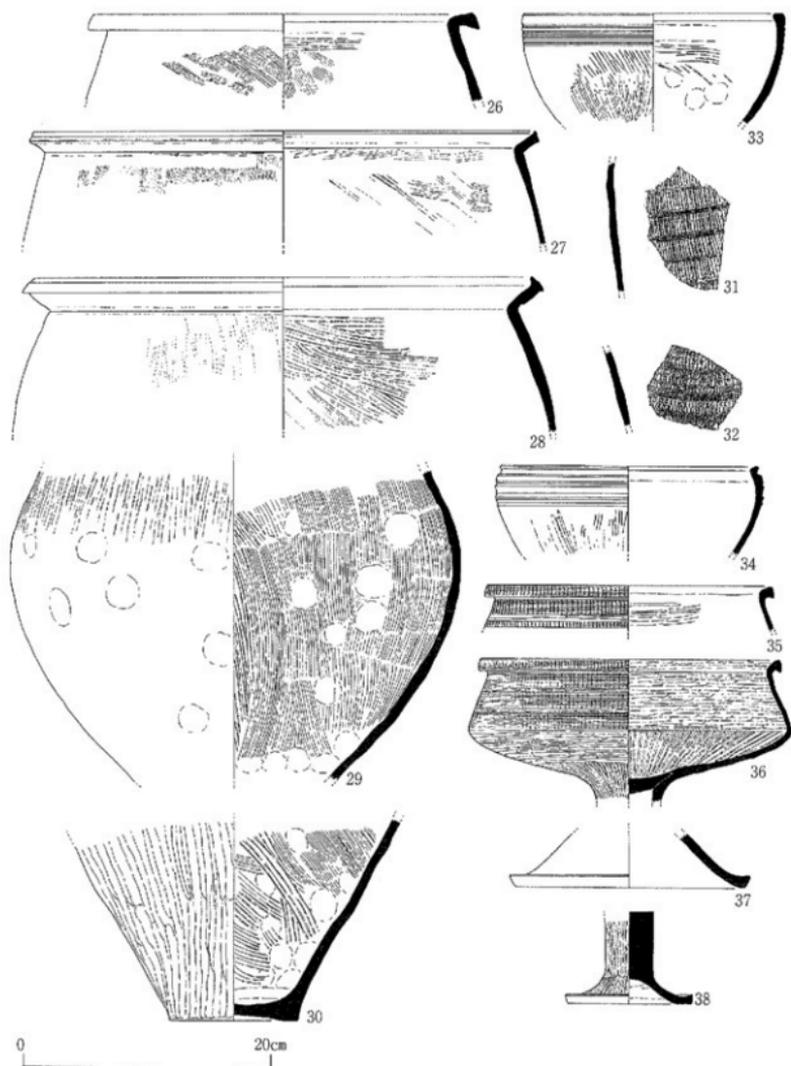
ピット122(108)(108)は高杯である。内外面にヘラミガキを施す。生駒西麓産である。

ピット126(109)(109)は壺底部である。

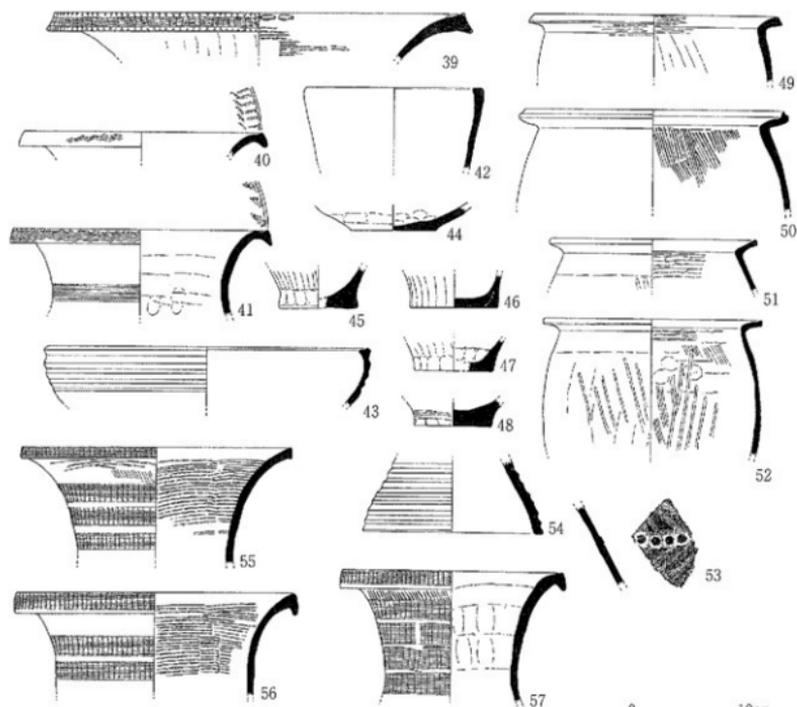
ピット137(110)(110)は鉢である。外面に扇形文、直線文、波状文を施す。



第144图 A地区土器溜まり1出土土器实测图(1)



第145図 A地区土器溜まり1出土土器実測図(2)



第146図 図A地区土器溜まり2、4出土土器実測図

ビット138 (111) (111)は壺胴部片である。外面に簾状文を施す。

ビット141 (114) (114)は底部である。

ビット143 (115) (115)は壺底部である。

ビット147 (112) (112)は壺胴部片である。外面に簾状文を施す。

ビット162 (113) (113)は甕である。外面にタテハケを施す。

ビット180 (116) (116)は甕底部である。

ビット183 (117) (117)は甕である。

ビット197 (118) (118)は壺胴部である。

ビット202 (119) (119)は高杯杯部である。生駒西麓産である。

ビット203 (120) (120)は底部である。木葉痕が残る。

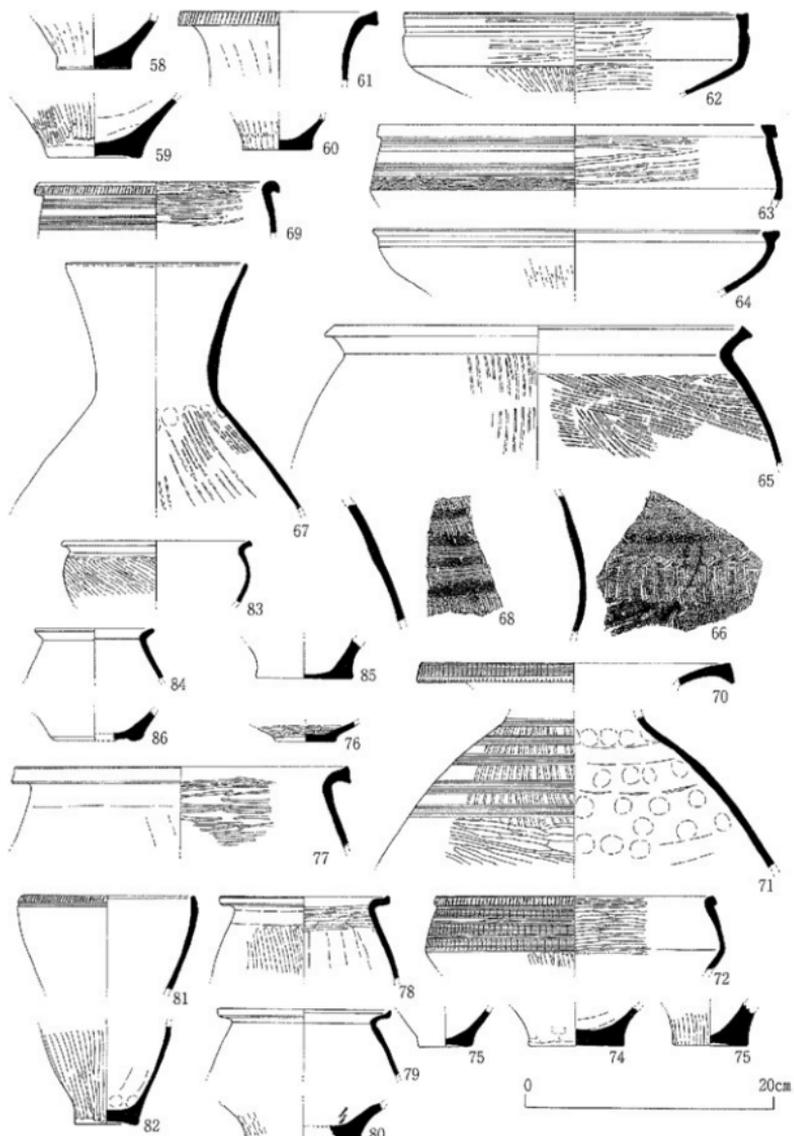
ビット206 (121) (121)は壺胴部である。

ビット224 (122) (122)は甕である。外面に直線文を施す。

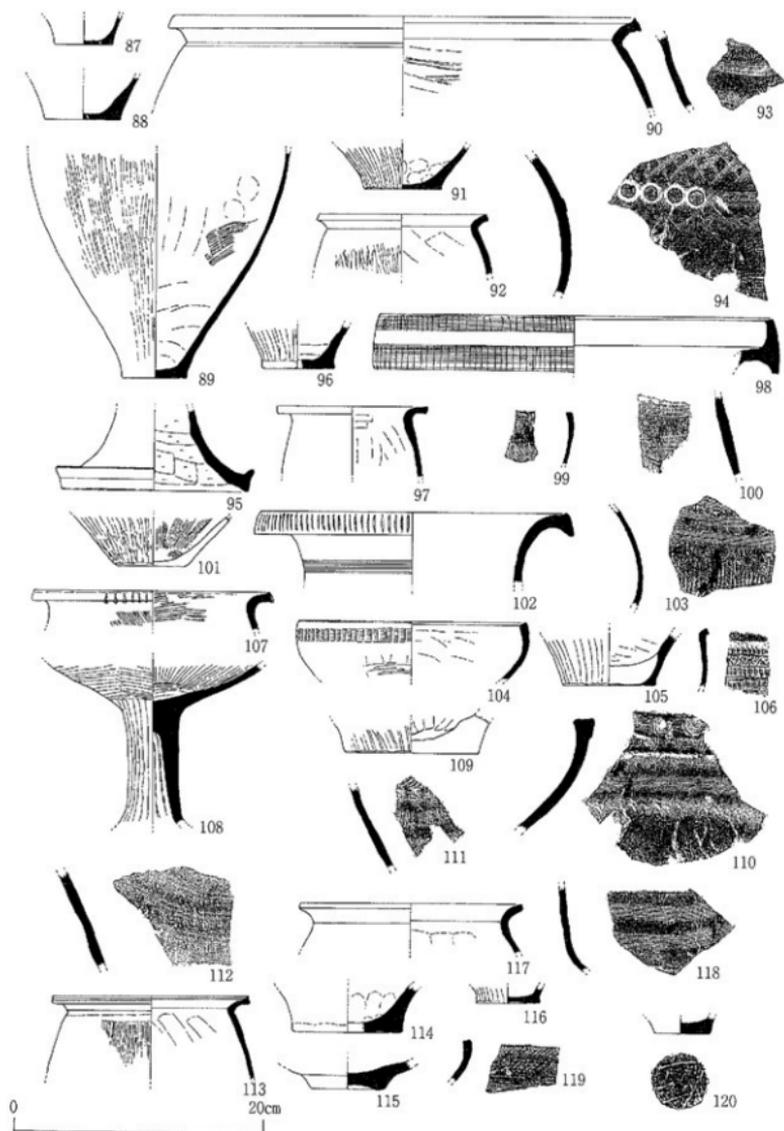
ビット228 (123・124) (123)は壺胴部片である。(124)は甕である。内外面にハケを施す。

ビット240 (125・126) (125)は甕底部である。(126)は壺胴部である。

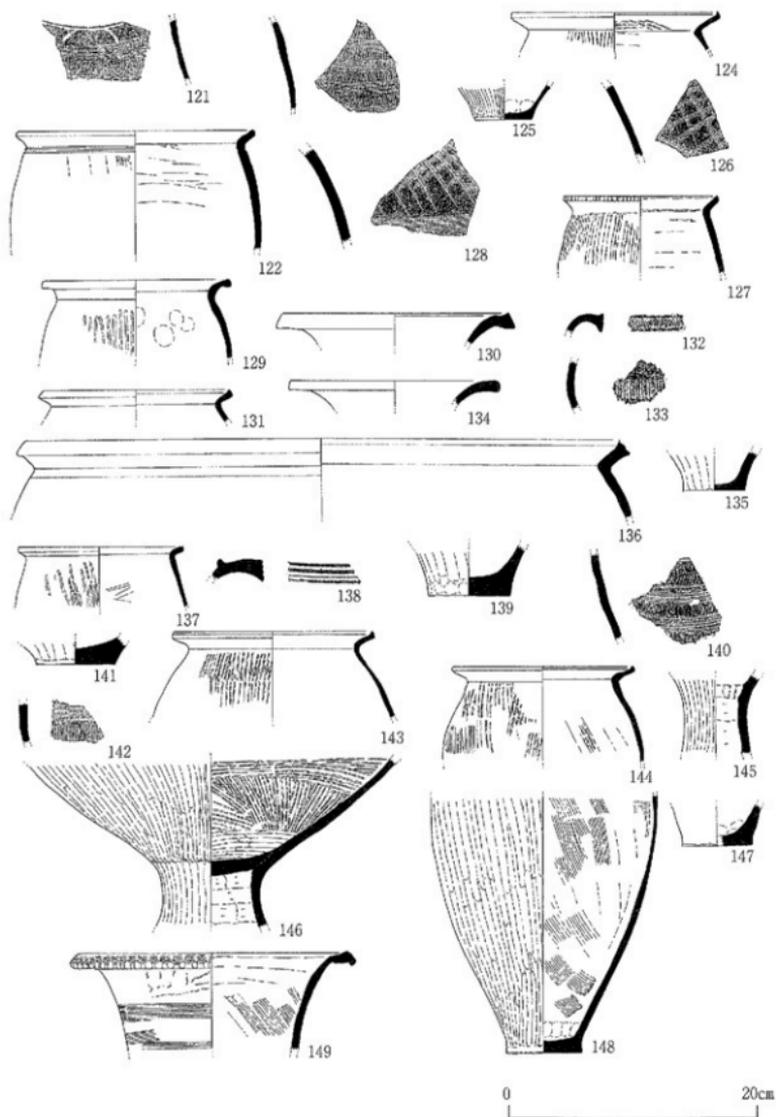
ビット252 (127) (127)は甕である。外面にヘラミガキを施す。生駒西麓産である。



第147图 A地区土质出土土器实测图



第148図 A地区ピット出土土器実測図(1)



第149図 A地区ピット出土土器実測図(2)

- ピット254 (130) (130)は広口壺口縁部である。
- ピット257 (129) (129)は甕である。
- ピット274 (130・133) (130)は壺口縁部である。(132・133)は壺胴部である。
- ピット275 (136・137) (136)は大型の甕である。生駒西麓産である。(137)は小型の甕である。外面にヘラミガキを施す。
- ピット279 (136・137) (136)は高杯の口縁部である。凹線文を加える。(137)は甕底部である。
- ピット318 (139・140・143) (139)は底部である。(140)は壺胴部片である。(143)は脚柱部である。
- ピット346 (141) (141)は甕である。外面にタテハケを施す。
- ピット360 (143) (143)は甕である。内外面にタテハケを施す。
- ピット421 (146) (146)は大型の台付き鉢である。外面にヘラミガキ、内面に粗いハケを施す。脚部内面はヘラケズリを行う。
- ピット473 (147) (147)は底部である。
- 柱3 (148) (148)は甕底部である。外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。
- 枕43 (149) (149)は広口壺である。外面に直線文、口縁部に波状文を施す。
- 溝 (第152図150～180、第153図181～208)
- 溝9 (150～158) (150)は口縁部を上下に拡張する。外面に刺突文、簾状文、扇形文を施す。生駒西麓産である。(151)は広口壺である。外面に粗いタテハケを施す。口縁部内外面に波状文を加える。(152)は壺胴部である。外面に波状文、直線文、斜格子文を施す。摂津産の可能性ある。(153・154)は壺口縁部である。(155)は大和型甕である。(156・157)は高杯脚部である。(158)は壺底部である。
- 溝12 (159～163) (159・160)は甕である。(162)は鉢口縁部である。凹線文を施す。(163)は壺胴部である。生駒西麓産である。
- 溝13 (164～169) (164)は甕である。生駒西麓産である。(166)は鉢である。内外面にヘラミガキを施す。(167)は鉢口縁部である。(168・169)は脚部である。
- 溝14 (170) (170)は口縁部が直立する鉢である。端部に刻み目を施す。
- 溝15 (171) (171)は壺胴部片である。
- 溝18 (172) (172)は壺胴部片である。
- 溝19 (173～176) (173)は鉢である。(174)は広口壺である。(175)は鉢である。口縁部に凹線文を施す。(176)は壺である。口縁部を上拡張する。
- 溝22 (177～182) (177)は鉢である。内外面に横方向のヘラミガキを施す。端部は刻み目を加える。(178・180・181)は甕である。(180)は口縁端部を上方につまみ上げる。(179)は広口壺である。外面に粗いタテハケ、口縁端部に刻み目を加える。(182)は鉢である。外面にヘラミガキ、直線文を施す。
- 溝27 (第149図183～187) (183)は鉢である。(184・185)は甕である。(184)は内外面にヘラミガキ、(185)はタテハケを加える。(186・187)は底部である。
- 溝30 (188・189) (188)は甕である。(189)は底部である。
- 溝32 (190～192) (190)は底部である。(191)は広口壺である。外面にタテハケを施す。(192)は甕である。
- 溝33 (193～198) (193・194)は高杯である。(194)は外面に凹線文を加える。(195)は把手付鉢である。(196)は鉢口縁部である。(197)は底部である。(198)は壺口縁部である。
- 溝37 (199) (199)は台付鉢の脚部である。

溝38 (200・201・203) (200)は鉢である。凹線文を施す。(201)は甕である。外面に細かいタテハケ、内面に粗いタテハケを施す。(200・201)は底部である。

溝39 (202) (202)は水差しのお縁部である。凹線文、波状文、直線文を施す。

溝40 (205) (205)は鉢である。

溝45 (206) (206)は広口壺である。口縁部に波状文、扇形文を施す。

溝48 (207) (207)は鉢である。内外面にヘラミガキを施す。生駒西麓産である。

溝49 (208～210) (208)は受け口縁部をもつ壺である。口縁部外面に凹線文と波状文を加える。(209)は脚部である。(210)は壺胴部片である。直線文と簾状文を施す。生駒西麓産である。

溝、灰色シルト (第152図209～217) (209)は広口壺である。外面にヘラケズリ、口縁端部に刻み目を施す。産地は不明である。(212～214)は甕である。(216～219)は鉢である。(216・217)は外面に簾状文、(217・218)は直線文を施す。219は生駒西麓産である。

A・B・C・D層 (第153図218～247、第154図248～265)

C層 (220～244) (220・221・242)は広口壺である。(231)は受け口状を呈する。外面に凹線文と波状文を施す。(221～232)は甕である。(231)は外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。(232)は生駒西麓産である。(233～237)は鉢である。(233)は内外面にヘラミガキを施す。生駒西麓産である。(235)は外面に直線文と波状文を施す。(238、239)は脚部である。外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリを施す。(230・241)は底部である。(243)は直口壺である。外面に簾状文と直線文を施す。

B層(244) (244)は鉢である。外面に簾状文を施す。生駒西麓産である。

A層(247) (247)は広口壺である。(248)は甕である。外面にタテハケを施す。(249)は高杯杯部である。

D層 (248～265) (248～254)は壺である。(248)は広口壺である。口縁部に波状文と扇形文を施す。(249)は口縁部を上下に拡張する。外面に簾状文と扇形文を施す。生駒西麓産である。(250)は受け口壺である。(251)は直口壺である。外面に刺突文、直線文、簾状文を施す。生駒西麓産である。(252)は壺胴部である。(253)は鉢である。(254～261)は甕である。(255・256)は口縁端部を上方につまみ上げる。(259)は外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。(260)は内外面にハケを施す。(257・258・261)は底部である。(262～264)は鉢である。(260)は高杯で外面に凹線文を施す。(262・264)は外面に直線文、内面にヘラミガキを施す。

川2 (第155図) (266)は広口壺である。外面に簾状文を施す。生駒西麓産である。(267)は受け口壺である。外面に凹線文、波状文、直線文を施す。(270～278)は甕である。(271・276)は外面にヘラミガキを施す。(273～276)は大型で口縁部を上下に拡張する。(276)は生駒西麓産である。(277・278)は底部である。(279～281)は鉢である。

落ち込み (第156図282～298)

落ち込み16 (282・283) (282)は甕である。(283)は鉢である。

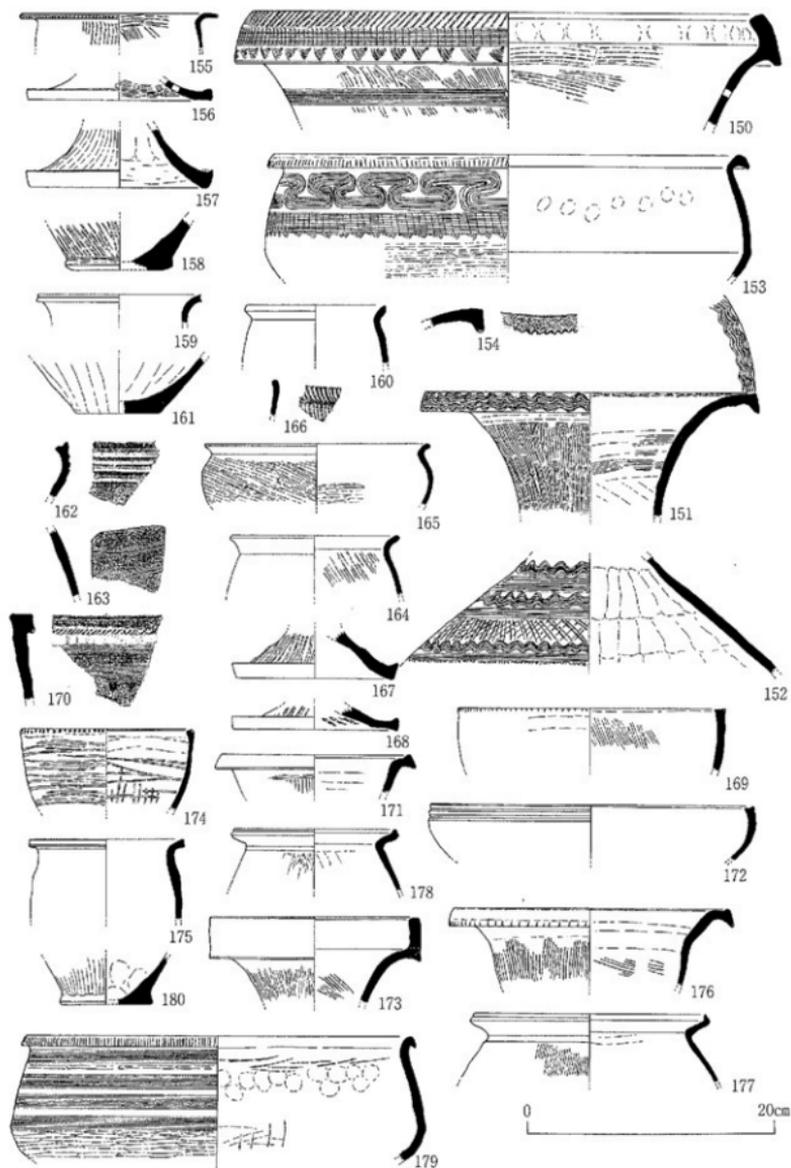
落ち込み17 (284～288) (284)は壺胴部片である。(285・286)は甕である。(285)は外面にタテハケを施す。(286)は生駒西麓産である。(287・288)は壺底部である。

落ち込み20 (289) (289)は壺胴部片である。簾状文を施す。生駒西麓産である。

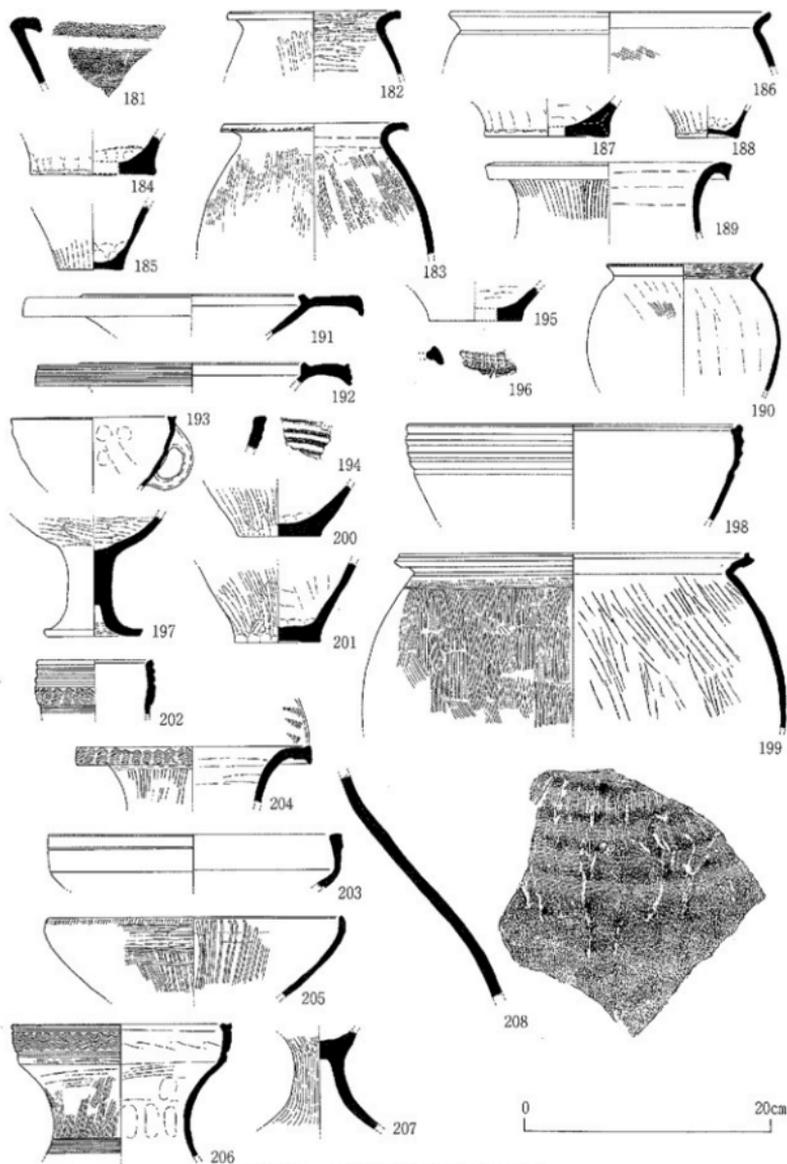
落ち込み20 (290・291) (290)は小型の鉢である。外面にヘラミガキ、内面にハケを施す。(291)は底部である。

落ち込み21 (292) (292)は壺口縁部である。

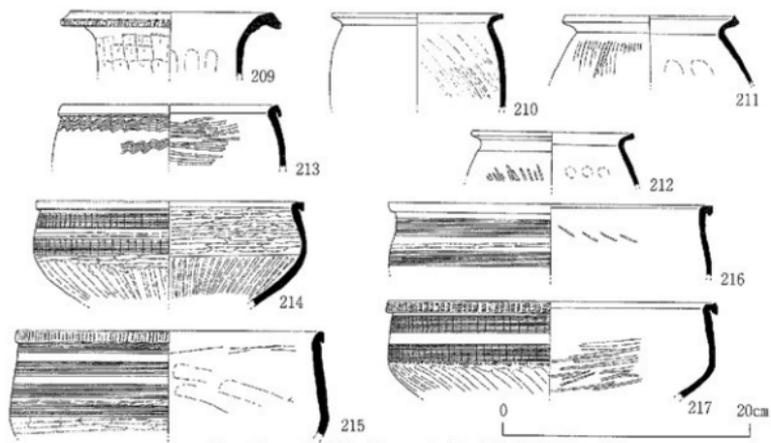
落ち込み25(293～298) (294)は受け口壺である。口縁部を上下に拡張する。外面に簾状文、扇形文、直線文を施し、内面に粗いハケを加える。(295)は鉢である。外面に粗いヨコハケを施す。生駒西麓



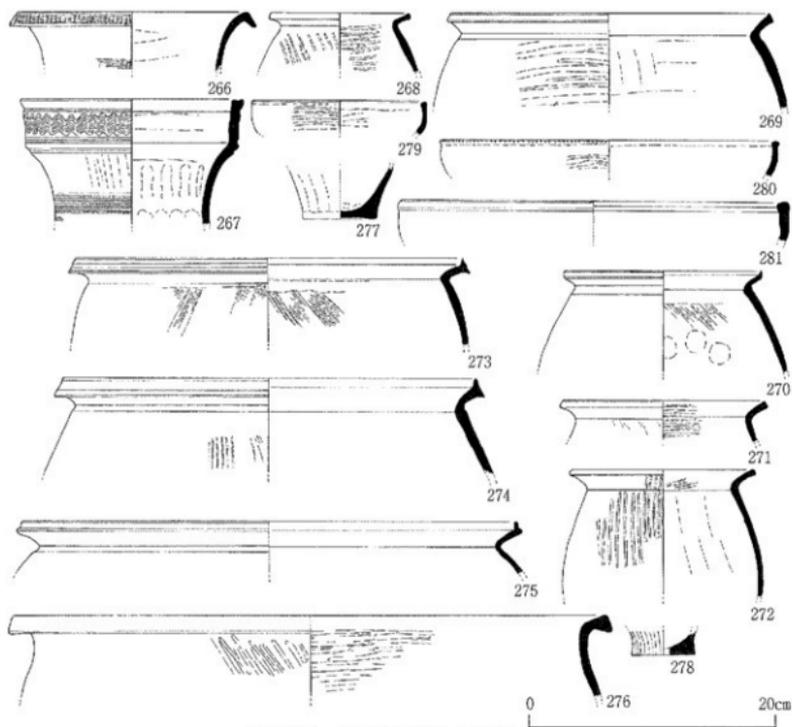
第150图 A地区沟出土土器实测图(1)



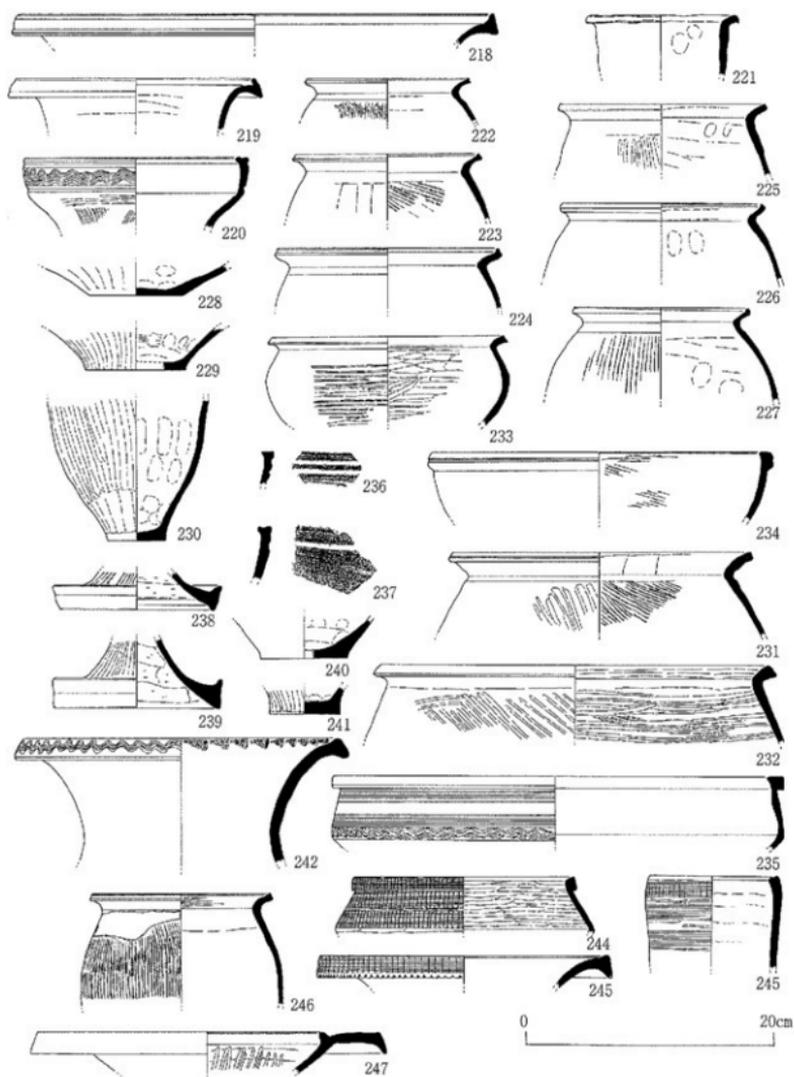
第151图 A地区滑出土土器实测图(2)



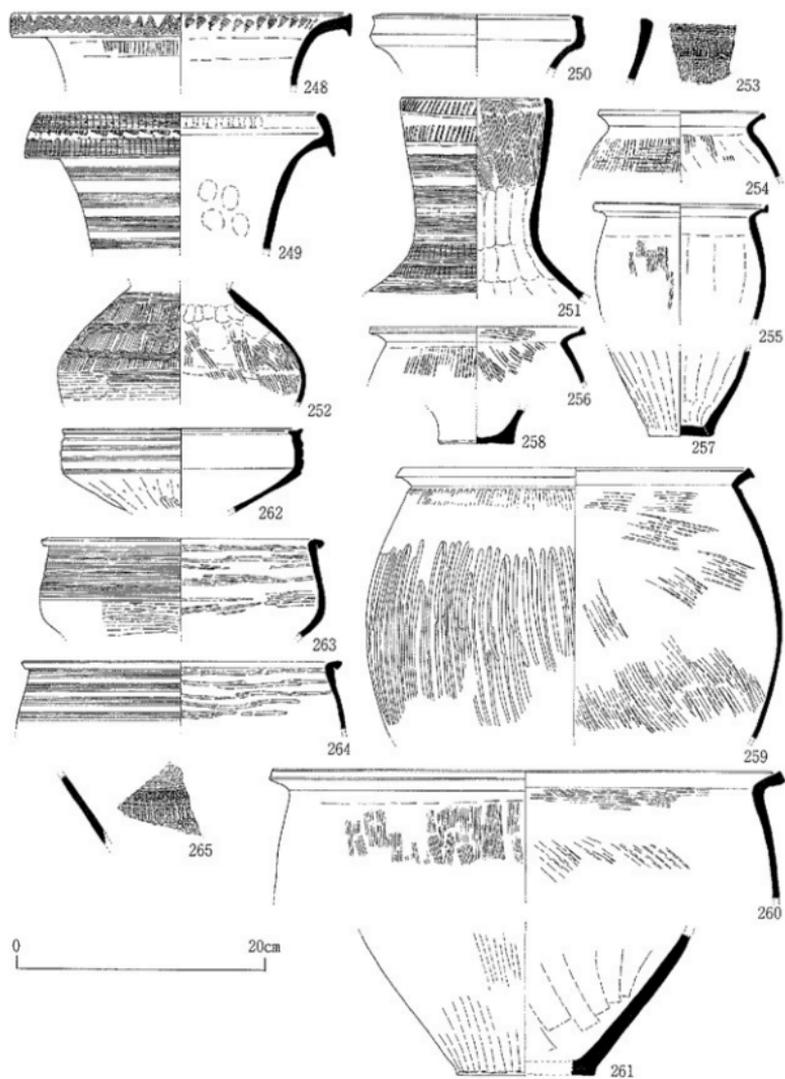
第152図 A地区津灰色シルト出土土器実測図



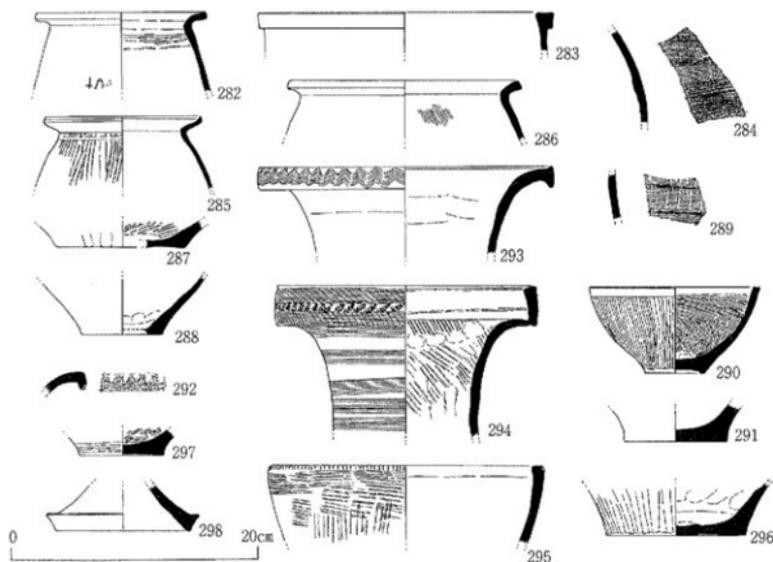
第153図 A地区川2出土土器実測図



第154图 A地区A·B·C·D层出土土器实测图(1)



第155图 A地区A·B·C·D层出土土器实测图(2)



第156図 A地区落ち込み出土土器実測図

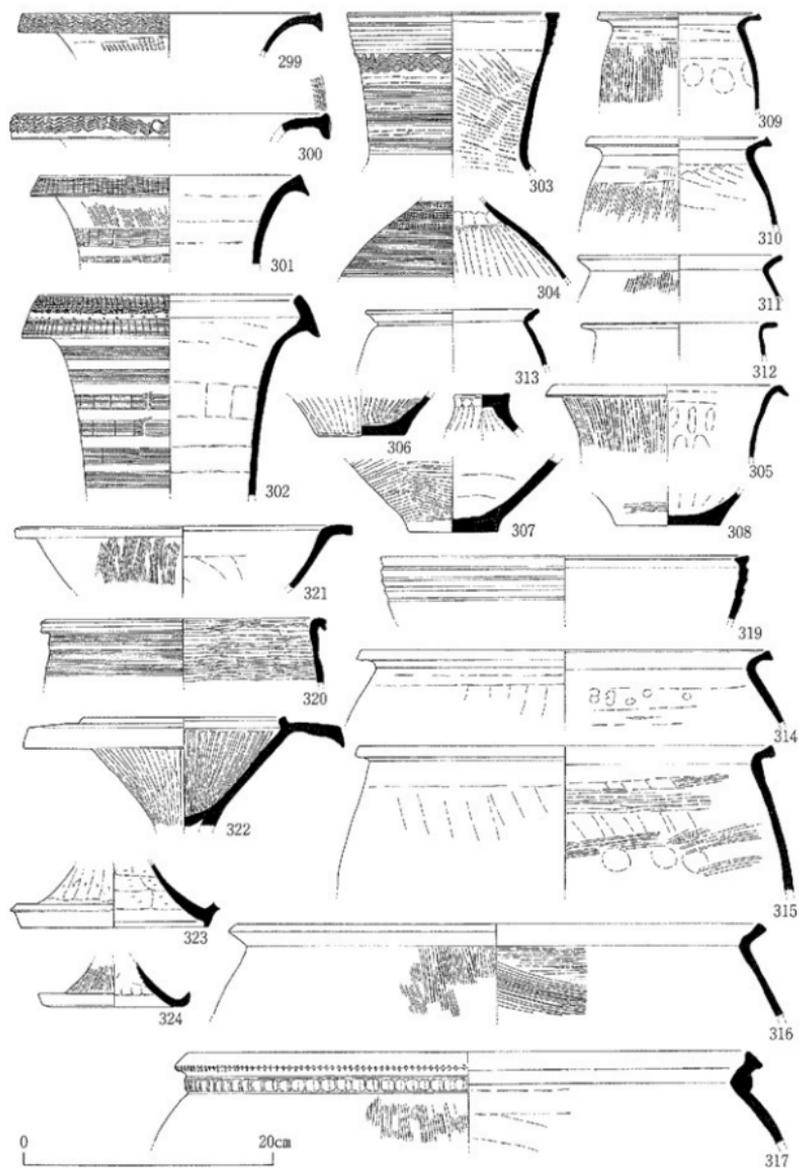
産である。(296・297)は壺底部である。(298)は脚部である。

包含層(第157回299~324)

(299~305)は壺である。(299~301・305)は広口壺である。(299・300)は外面に波状文、(301)は簾状文を施す。生駒西麓産である。(302)は口縁部を上下に拡張させるもので、外面に簾状文、扇形文、直線文を施す。(303)は直口壺である。外面に凹線文、波状文、直線文を施す。内面は粗いハケで仕上げる。(304)は細頸壺の胴部である。生駒西麓産である。(306~308)は底部である。(309~317)は甕である。(309~311)は外面にタテハケを施す。(314~317)は口縁部を上下に肥厚させる。(315)は生駒西麓産である。(317)は頸部に爪形状圧痕を巡らし、端部に刻み目を施す。(318)は蓋である。(321~322)は鉢である。(319)は外面に凹線文を施す。(320)は外面に直線文、内面にヘラミガキを加える。(321・322)は高坏坏部である。(322)は内外面にヘラミガキを施す。(323・324)は脚部である。(323)は内外面にヘラケズリを施す。

今回報告した46次出土の土器については、量的に多く、凹線紋出現期から盛行期にかけてのものと思われる。土器溜り1では口縁部を上下に拡張する甕(1~6)が卓越している。また、土器溜り2、4では量的には少ないが凹線文(43、54)と簾状文(55~57)の幅が広くなるという特徴がある。

土坑、ピットでは(63)のように段状口縁をもつ鉢が存在し、また、甕の口縁端部も(78、79、113)のように上方につまみ上げるものが出現している。溝では、(148)のように口縁部が内傾し、土器溜り1よりもやや新しい様相を示すものの存在が目される。また、(151)のように横型流水文もこの時期まで残っている。(149・150)は胎土から摂津からの搬入品の可能性もある。これらの土器の中で全体的に古相を示すのは薄灰色シルトであろう。鉢の口縁部は段状にはなっておらず垂下させるものである。また(209)の出自は不明である。これらの土器についての考察は第Ⅵ章で述べる。



第157图 A地区包含出土土器实例图

木製品(第131・160図、1～14)

いずれも、弥生時代中期後半に属するもので包含層や遺構から出土した。農耕具・生活用具・柱材・用途不明木製品などがある。農耕具は、平鋏・狭鋏・丸鋏・組合せ鉄鋏・鋤身・鋤柄・穂積具がある。鋤は、3点出土し内1点が未成品である。生活用具は把手付き槽・刺突具などがある。用途不明木製品の中には、ハノキ製の両面に朱が塗られた、小片が含まれる。全体の形状が不明であるが朱塗りであることから祭祀用具の可能性が高い。

以上の木製品は、すでに中間報告で紹介しているため以下では、未報告の掘立柱建物の柱材と礎板を図示し報告する。各柱材・礎板の詳細については後掲の観察表を参考にされたい。また紙数の都合でB地区出土の礎板3点をC・D地区出土の木製品(第131図)に掲載した。

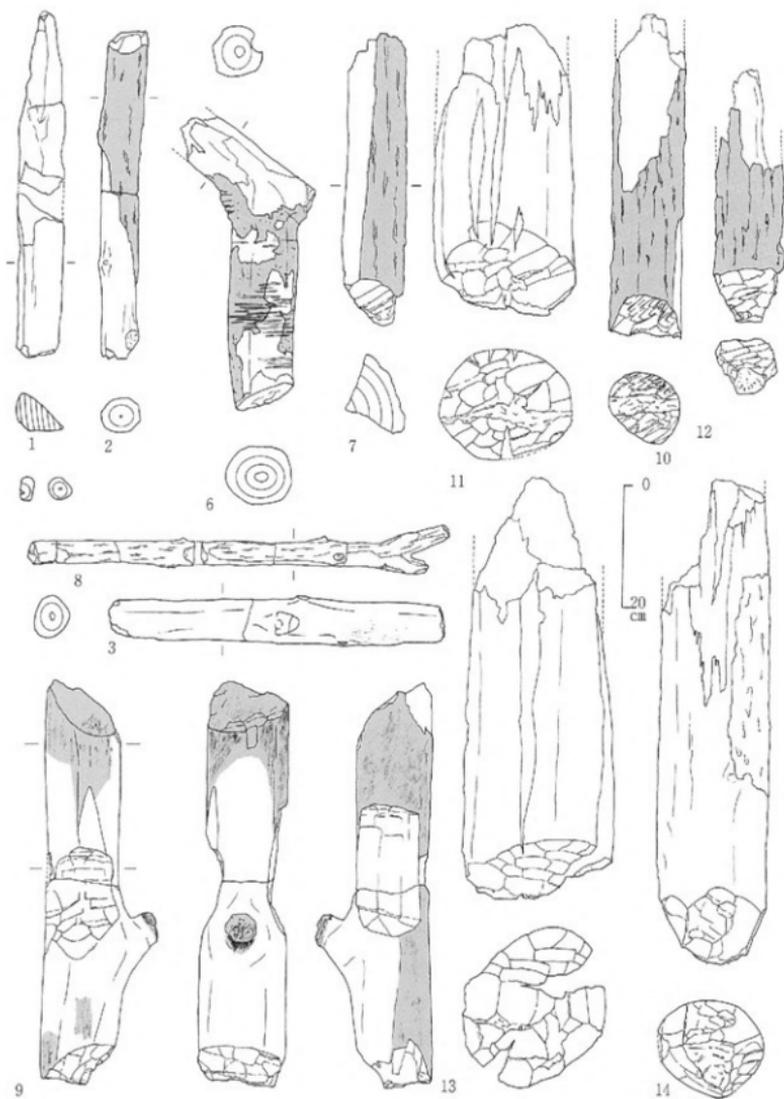
礎板(1～9) (1)は残存長56.4cm幅7.2cm厚さ6.0cm。ミカン割りをした割材の一端を斜に尖らせる。もう一端は削って折り取る。(2)は全長56.4cm径6.0cm。樹皮のついたままの心持材の両端を削って折り取る。(3)は残存長28.4cm径3.4cm。両端を折り取り枝を括弧している。中央部を削って挟りを入れてある。(4)は全長32.2cm長径4.0cm短径3.2cm。一端を削って折り取るがもう一端は焼成を受けており調整は不明である。(5)は残存長13.9cm幅5.5cm厚2.6cm。一端は削って折り取るがもう一端は欠損して不明である。割材使用。(1～5)ともにA地区ピット118から5点が並べられた状態で出土した。(6)は全長46.8cm径10.8cm。樹皮のついたままの二又材の端部を削って折り取る。中央部に紐を巻き付けたと思われる圧痕が見られる。材質はニレ科エノキ属。心持材使用。A地区ピット452出土。(7)は全長47.6cm幅10.0cm厚9.6cm。四分割にミカン割りをした割材の一端を斜に削って折り取る。もう一端は欠損。(8)は全長68.4cm径4.0cm。樹皮のついたままの二又材の端部を折り取り、枝は括弧している。樹皮から広葉樹と思われる。心持材使用。(9)は残存長65.6cm径13.6cm。一端は1方向から削って折り取るがもう一端は欠損。材質はクスノキ属ヤブツグイ。心持材使用。(8・9)ともにA地区ピット163出土。(8)と図化しなかったもう1点の礎板を並べ、その上に(9)をほぼ直行するように置いて礎板としたものである。

柱材(10～14) (10)は残存長53.2cm径11.6cm。下部の端部を2方向から削って折り取る。上部は欠損して不明。材質は樹皮から広葉樹と思われる。自然面のままの心持材を使用する。A地区ピット254より出土。(11)も同加工である。上部は欠損して不明。材質はブナ科クヌギ属。A地区ピット298出土。(12)は残存長47.6cm径22.0cm。下部の端部を4方向から削り尖らせ折り取る。上部は欠損して不明。材質はヤナギ属。自然面のままの心持材を使用する。A地区ピット315より出土。(13)も同加工である。上部は欠損して不明である。材質はブナ科コナラ節。A地区ピット414出土。(14)は下部の端部を3方向から削り尖らせ折り取る。上部は欠損して不明。材質はブナ科コナラ節。樹皮のついたままの心持材使用。A地区ピット113より出土。

以上のように柱材・礎板は判明した限りすべて広葉樹を用いている。花粉分析の結果から周辺に広葉樹が生息していたことが明らかであるため、これらを伐採して使用したものと思われる。

ここで報告したものの中には中間報告で報告した礎板と組み合わせるため柱材の下部に挟りを入れたものは見られない。しかし(6)のように柱材を建てて固定する位置に紐を巻き付ける、あるいは(9)のように柱材を安定させるために柱材が接する位置に挟りをいれるなど礎板自体に加工がなされているものもみられる。礎板はいずれも板材ではなく心持材か割材でも、棒状に加工したものをを用いている。

注1) 福永信雄他 「瓜生堂遺跡第46次発掘調査中間報告」 東大阪市教育委員会 2000年



第158圖 木製品実測圖

No.	器種	法量(cm)	材質	木取り法	調整	出土 地点	出土 地	出土 層	備考
1	礎板	残存長 28.1 幅 3.7 厚 3.1		割材	・ミカン削りした割り材の一 端を斜めに削って尖らせる ・もう一端は削って折り取る	P-118	A		
2	礎板	全長 26.7 径 3.8		心持材	・樹皮のついたまま、両端を 削って折り取る	P-118	A		
3	礎板	全長 27.1 径 3.9		心持材	・両端を折り取り、枝を払って いる ・中央部を削って抉りを入れる ・一部焼成を受けている	P-118	A		
4	礎板	残存長 32.2 長径 5.4 短径 3.2		心持材	・一端を削って折り取り、も う一端は焼成を受け不明 ・枝を払っている	P-118	A		
5	礎板	残存長 13.9 幅 5.5 厚 2.6		割材	・一端を削って折り取るがも う一端は不明	P-118	A		
6	礎板	全長 46.8 径 10.8	ニレ科 エノキ属	心持材	・樹皮のついたままの二又材 の端部を折り取る ・中央部に縦による圧痕	P-452	A		
7	礎板	全長 23.9 幅 5.2 厚 4.9		割材	・四分割にみかん削りしたも のを斜に削って折り取る ・もう一端は欠損	P-0	A		
8	柱材	残存長 47.6 径 22.0	樹皮広葉樹	心持材	・一端は2方向より削って折 り取り、もう一端は欠損	P-298	A		
9	柱材	残存長 41.2 径 9.4	樹皮広葉樹	心持材	・一端は2方向より削って折 り取り、もう一端は欠損	P-254	A		
10	柱材	残存長 52.9 径 11.9	ブナ科 クヌギ属	心持材	・一端は4方向より削って折 り取り、もう一端は欠損	P-315	A		
11	柱材	全長 68.4 径 4.0	ヤナギ属	心持材	・二又材の端部を折り取り、 枝を払っている	P-163	A		
12	柱材	残存長 33.2 径 7.1	クスノキ属 ヤブニッケ イ	心持材	・一端は1方向より削って折 り取り、もう一端は欠損 ・中央部を2方向から削って 抉りを入れている	P-163	A		
13	柱材	残存長 34.5 長径 13.2 短径 12.2	ブナ科 コナラ属	心持材	・一端は4方向より削って折 り取り、もう一端は欠損	P-414	A		
14	柱材	残存長 34.5 径 8.9	ブナ科 コナラ属	心持材	・樹皮のついたまま、一端を 3方向から削って折り取り、 もう一端は欠損	P-113	A		

表10 木製品観察表 (10)

その他の遺物

未成品を含めた打製石器・磨製石器の他に土製紡錘車、土製品、骨製品などが出土したが、すでに報告しているため今回は紹介を割愛する。

(4) 小結

この調査では、予想に反して弥生時代中期後半の段階で河内湖の水辺近くまで居住していたことが判明し従来、未確認であった遺跡北辺の集落の実態を明らかにすることができた。掘立柱建物は密集しかつ複数回建て替えられていることは確実である。ただし、その時期は、本遺跡が最も繁栄した中期後半に限られることは集落の推移を考えるうえに重要である。また、建物と湖の水位の変動により廃絶と再建が行われたことも知られた。

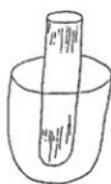
建物の柱を建てる際の工夫の状況が一律でなく少なくとも9種類の方法が存在することが知られた。大半は、柱穴の中にヨシを厚く敷き詰めて、その上に柱を立てるか、礎板を置いた後に立てるかである。わずかではあるが、柱穴を掘った後に杭のように柱を打ち込むものや、打ち込んだ柱周りに副木を置くものも見られた。また、同一の建物でも柱の立て方が異なることから、柱の立て方は、かなり任意に行うことが判明した。

掘立柱建物の居住者が残した食糧残滓と考えられる淡水産のセタジミヤ海産のアカニシと思われる貝やシカ・イノシシなどの動物遺存体が出土し、確実に居住し日常生活をおくったことを示している。また、川からは火を受けて炭化したため遺棄された稲の穂束が一定量出土している。おそらく火災で倉が消失した際に遺棄されたものであろう。

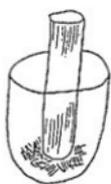
生業に関しては、多量のサヌカイトの刮片や、石包丁の半加工品も出土しており、調査地付近で石包丁を含む打製・磨製石器製作が行われていたことが判明した。また、出土した木製品の中に鎌などの農耕具の未製品が含まれており、石器の製作だけでなく農耕具の製作も行われていたことも明らかである。かつて本遺跡が、大集落ゆえにこれらの製品を他の集落から交易を通じて手に入れ消費するムラと考えられたこともあるが、他の大集落と同様に集落内部で各種の製品を製作していたことを明らかにできた。

また、当時の人々の精神活動を考えるのに特に興味深いのは、男性器と女性器を表したと考えられる性器形石製品が、相対して置かれていた状態のまま溝で区画された本遺跡の祭祀場の一つ想定される場所から出土したことである。今回出土した性器形石製品は、稲作に関する農耕儀礼の道具と考えてよいと思われる。男根状製品の類例は、今まで溝や河川からの出土が多いが、中には堅穴住居の壁の周囲に巡る溝から出土した例（兵庫県西宮市七日市遺跡）もある。今回は、村はずれの溝で囲まれたマウンド状の祭場と考えられる場所でも出土している。色々な場所で行われた多様な儀礼に用いられたことを示している。絵画文土器の盛行や銅鐸形土製品の存在など各種の儀礼が発達する弥生時代中期末の社会において、この種の儀礼が各地で行われていたことが予想される。今後、この発見を契機に類例の発見が増加すれば、当時の農耕儀礼の一端が明らかになるであろう。また、石製品の石材鑑定結果から男根状石製品が石川の河原、女性器形石製品が生駒山麓西麓とさほど遠距離で採集されたものでなく、本遺跡の人々が日常行き来できる範囲の地域（中・南河内）で採集できるものであることが判明している。これは、特別の儀礼ではなく日常的なものである可能性を示している。

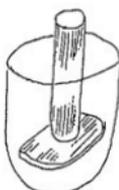
現状では、今回出土した性器形石製品が具体的に農耕儀礼の中のどのような目的を持った祭に使用されたかを推定することは困難である。ただ、縄文時代の石棒や女性器形石製品とは、形は似ているが系譜はつながらないと思う。狩猟採集社会と農耕社会という社会背景が違い使用された儀礼の性格が異なるからである。



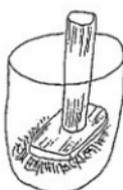
1. 柱のみ



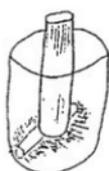
2. 敷物と柱



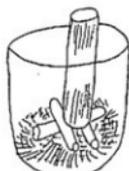
3. 礎板と柱
(板材)



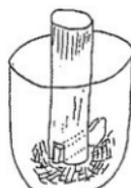
4. 敷物・礎板と柱
(板材)



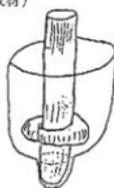
5. 敷物・礎板と柱
(丸太材)



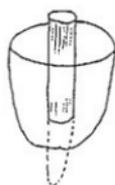
6. 敷物・礎板と柱
(丸太材複数)



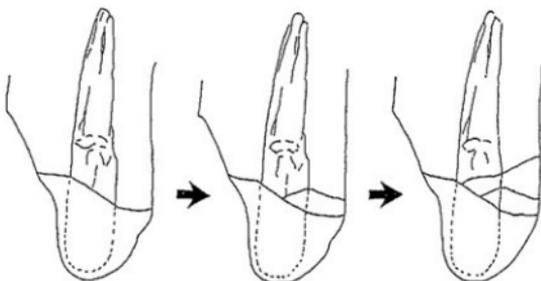
7. 敷物・礎板と柱
(加工)



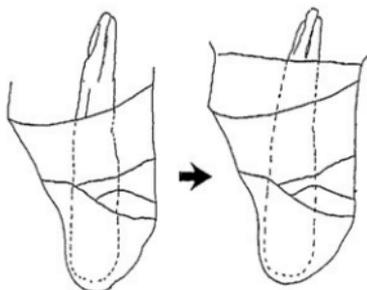
8. 副木と柱
(打ち込み)



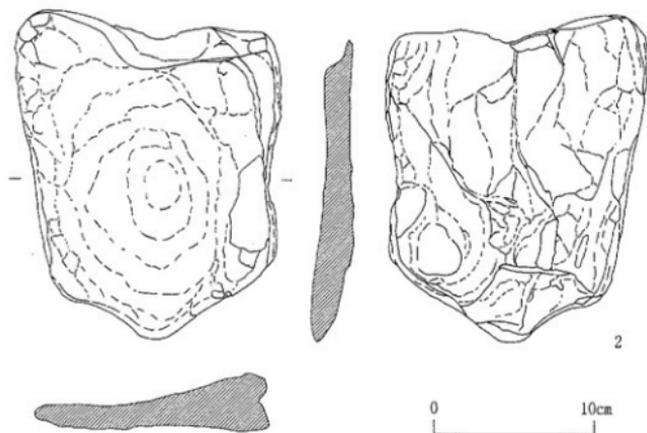
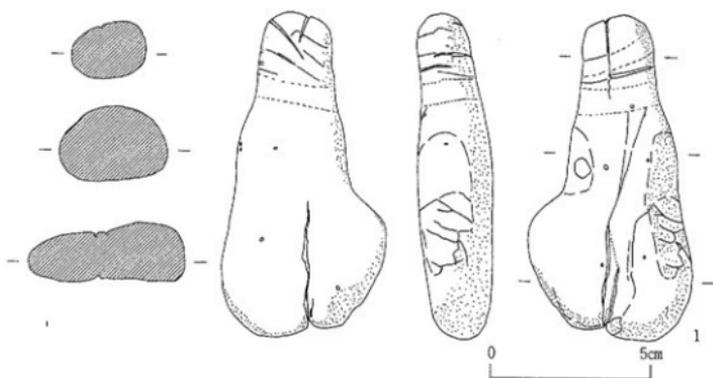
9. 柱 (打ち込み)



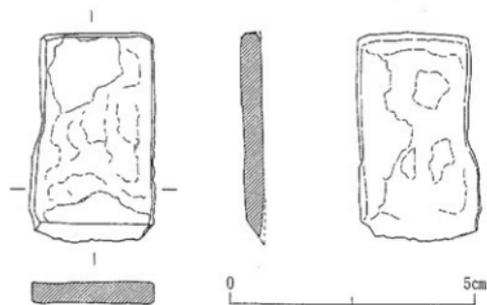
10. 掘り方埋め土順序



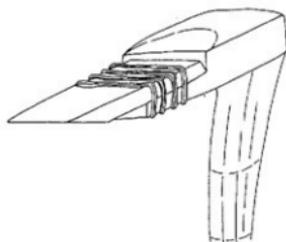
第159図 検出した掘立柱の立て方模式図



第160图 磨製石器（性器形製品）实测图



第161图 扁平片刃铁斧实测图



第162图 扁平片刃铁斧装着想定图

2. 第47-1次（B地区）調査の成果

調査は、A地区の東端から約20m離れて、引き続き河内湖の南岸付近を東西約90mにトレンチを設けた形で実施した。昨年度の調査地とは隣接しているにもかかわらず、確認できた遺構の時期や遺物の種類・量は大きく異なる。以下、新しい時期から遺構・遺物の順に概要を記す。

(1) 遺構

近世の遺構は、溝2条と井戸1基を検出した。溝・井戸ともに耕作に伴う遺構と考えられる。井戸は、種側の井筒で井筒内の底近くから井筒上部に使用されていたと思われる井戸瓦のほか筵・国産磁器などが出土した。国産磁器から見て江戸時代後期（19世紀前半）に造られたことが判明した。

中世に属す遺構は、いずれも13世紀代に属す溝1条と井戸2基、土壇1基を検出した。溝は、C地区で続きを確認した結果、調査地を北端付近にして「コ」の字状に巡ることが判明した。形態・規模から見て屋敷の周りに巡らされた環濠の可能性が高い。井戸は、下部を曲物、上部を土師器の羽釜の底を打ち欠き井筒に転用したものである。この種の井戸は、本遺跡周辺部で多く見られる。出土遺物の中に、第46次調査では出土していない平・丸瓦の小破片がわずかながら存在する。

平安時代から古墳時代にかけての遺構は、検出していない。少量、奈良時代の土器や古墳時代後期前半の埴輪などが小破片で中・近世の包含層中より出土しているのみである。従前の調査で約150mより東側で遺構や遺物が確認されており中世以降にもたらされたものと考えられる。

遺構ではないが、庄内式期中頃の段階で2回の地震により発生した噴砂が確認された。それぞれの噴砂に伴い祭を行った後に遺棄されたと思われる土器が単独に近い状態で出土している。土器の中の一つ手焙形土器は、内部に炭が約2/3程（約500g）入り出土した。この種の土器は全国で数百点は出土しているであろうが、使用状況を示す形で出土したのはおそらく初めてのことであろう。

噴砂が生じる前の庄内式期前半の遺構は、調査地の東端で弥生時代中期後半の南海地震（調査地付近で震度6）に伴う地滑りが起因する窪地の胃口付近で泉南地方の河川や海岸、紀ノ川の南岸から海南市の海岸で採取された石などを用い地震に対する地鎮めの祭を行った2基の配石が検出された。配石3・4の石は赤変し、石の上で火を燃やしたことを示していた。特に配石4の石は、火で熱せられた直後に水をかけられたため石が割れている。配石4の側から十字に組んだ木（約40cm）も出土した。付近から配石に伴った供献土器が使用後遺棄された状況（土器だまり1）で出土している。供献土器の中には口縁部を伏せて並べ置かれた高杯形の製塩土器が2点含まれている。

弥生時代後期から中期末の遺構は、調査地の東端の地滑りにより生じた窪地内部から検出した配石2基がある。後期に行われたと考えられる配石2に用いられた石の採取地は、柏原市付近の石川か泉南の河川で採取されたとされる。中期末から後期前半と考えられる配石1は、少数の大和川流域（柏原市付近）淀川、武庫川、但馬北部のものを除く大部分が、南河内の石川や和泉の槇尾川流域や泉南の海岸部から採取されたとされる石を3回以上にわたり積み上げていた。

弥生時代中期後半の遺構は、調査地の西端付近で落ち込み1箇所と中央付近の南壁断面で掘立柱建物の柱穴と考えられるビット1個を検出したにとどまる。A地区で確認した掘立柱建物群は、この地点まで及ばないことが判明した。遺物も46次調査に比すと極端に少なく落ち込みから出土したものが大半である。落ち込みの性格は明らかではないが、土器の外に扁平片刃鉄斧、木鏝や朱塗り盾などが出土していることから、あるいは祭りに使用された物が遺棄されたとも考えられる。

弥生時代前期の遺構は検出していないが、包含層より少量の畿内第I様式中段階に属す弥生土器が出土した。出土状況から見ると、東に約10m離れた地点でこの時期の堅穴住居などが発見されていることから調査地はこの時期の集落の外れに当たると考えられる。

(2) 遺物

今回の調査では近・中世から弥生時代前期の多量の遺物が遺構・包含層から出土した。特に庄内式期の遺物が最も多い。以下、時期ごとに概要を紹介する。

近・中世の遺物

A地区と比べると近・中世の遺物は量は少ないものの一定量が出土した。遺構内から出土したものが大半である。近世の遺物は、少量の井戸瓦や国産陶磁器などが出土した。

中世の遺物は、通常の日常雑器である瓦器や土師器、東播磨須恵器などが見られる。木製品として井筒に用いられた曲げ物(図29)が出土している。大半が13世紀代に属す。なお、古代から古墳時代の土器は出土していない。

弥生時代中期末から庄内式期の遺物

土器と木製品が、包含層や遺構などから出土している。庄内式期の土器の内、炭が入り出土した手焙形土器は、外面にも煤の付着が認められ火の中に入れて使用されていた。また、配石遺構に伴う土器だまり1から出土した土器約70点(口縁部・底部を含む)は整理の結果、上層の土器の内面にヘラ削りが認められ下層にはそれが無いなど下層出土土器に古い要素を見ることができる。上層出土土器は、本遺跡では従来余り知られていない庄内式期前半の良好な一括資料と考えられる。また、上層から出土した外面にタクキをもつ高杯形の製塩土器は、河内では現在知られる最も早い段階のものである。これについては、第Ⅶ章で検討する。弥生時代後期後半の完形品を中心とした土器も、配石に伴い一括出土している。中期末から後期初頭の土器は、配石にとまなうと考えられるが量が少なく破片である。

木製品は、えぐりを入れた棒材と棒材を十字に組み合わせたものがある。これ以外にも、配石遺構周辺から祭祀に使用されたと思われる板材や丸木材などが出土している。

弥生時代中期後半の遺物

土器・木製品・石器・金属製品が出土している。大半は落込み1からの出土である。

弥生土器は、凹線文が施された鉢や籠状文をもつ壺など畿内第Ⅳ様式前半に属するものが大半である。量は、A地区に比して極端に少ない。

木製品は、量は少ないが榎・堅杓子・木鏝・槽などが出土し、榎は外面全体に朱塗りが認められる。石器は、A地区に比し極端に量が少ない。石錘・叩き石・石鏝・打製短剣・不定形削器などがある。金属製品は、落込み1より扁平片刃鉄斧が1点出土した。扁平片刃石斧とほぼ同じ大きさと形を呈し、刃部に使用による刃こぼれと刃先を研ぎ直したために摩滅した跡が認められる。柄に装着しやすいようにするためか1側縁にえぐりが見られる。長さ4.2cm、短辺2.6cmのほぼ長方形を呈し、厚さ1.6cm重さ13.2gである。刃こぼれなどから見て一定の使用時間を考慮に入れる必要があるが、畿内第Ⅲ様式後半からⅣ様式初頭に選棄されたことは確実である。この時期の畿内では現在の所ほとんど出土例のないものである。

弥生時代前期の遺物

A地区では出土していないこの時期の土器と石器が包含層中より少量認められた。

弥生土器は、生駒西麓産の壺のみが出土した。壺の形態やヘラ描き沈線が4条以下の少条であることから畿内第1様式古・中段階後半に属すと考えられる。

石器

石庵丁が1点出土した。この時期に典型的な、耳成山で産出される白色の流紋岩製で、本来の形は五角形を呈するものと考えられる。

(3) 小結

この調査では、西に隣接する前年度に調査を実施したA地区とかなり異なることが明確になった。具体的に検出した遺構で見れば、A地区で顕著に認められた弥生時代中期後半の掘立柱建物は、全く認められず主要な遺構は落込み1箇所を検出したにとどまる。これは、河内湖の鳥足状に発達した自然堤防の先端部がひろがる岸辺を東西に調査していることによる。A地区は、湖側に自然堤防が発達して張り出し、今回のB地区ではそれが無いということが起因していると考えられる。

弥生時代中期後半とは逆に、近世の耕作に伴う溝・井戸や中世の井戸・屋敷の周りに巡らしたと考えられる環濠や、弥生時代中期後半に起こった南海地震に伴う地滑りにより生じた窪地の内部および西屑付近で、庄内期から弥生時代中期末の配石遺構や同時に使用した土器を遺棄した土器だまり、弥生時代前期の包含層などが新たに発見された。調査地が近世は耕作地として利用され、中世では東から続く集落の西限付近にあたることを示している。配石遺構は、検出状況から地震を怖れた人々が地鎮めの祭の際に残したと考えている。今までほとんど類例が知られていないものであり、これについては、第VI章で検討する。

A地区に隣接する調査地の西端(B-16・17)で検出した落込みは、東側屑口付近から弥生時代中期後半に属す多数の弥生土器が朱塗りの盾の破片・木鏝などの木製品や椀皮状の板材・加工木、扁平片刃鉄斧などとともに捨てられた状態で出土した。

大澤正巳氏の教示によれば扁平片刃鉄斧は、形状や類例などから中国で戦国時代に製作された鑄造鉄斧の一部をタガネなどで切り取り、砥石で研いで刃を付け斧に転用したものといる。中国から朝鮮半島を経てもたらされた同時期の扁平片刃鉄斧が北九州を中心に約200例が知られているが、現在のところ近畿地方では中期末から後期には存在するが、中期後半に属す例はほとんど知られていない。用途は、形状を写した扁平片刃斧と同様に木製品を加工するための斧として用いられたと考えられる。当時、すでに鉄器を用いて木製品を製作していたことは同時に出土した加工木の中にも鉄斧の痕跡が認められることでも明らかである。

この鉄斧が使用された中期後半は、一方で石器が全盛の時代でもある。A地区でも磨製・打製を問わず石器が製作されているが、他方で鉄器も搬入され使用されたことを示す。従前、畿内では出土品が少ないこともあり、大陸に近い北九州と異なりまだこの時期は、鉄器が貴重品であり珍重されたと考えられていた。畿内において石器に変わり、本格的に鉄器を使用するのは次の後期からであることは確かである。

この鉄斧が出土した落込みが、A地区で確認した祭場と隣接していること、同時に桶や木鏝が出土していることからあるいは祭場で行われた祭祀に用いられた後に遺棄されたことも考えられる。しかし、今回研ぎ直せば十分使えるにもかかわらず無造作に捨てられた状況で鉄斧が出土したことや木製品にみられる鉄器による加工痕からは、本遺跡の様な大集落ではこの時期すでにかなりの量の鉄器がもたらされていた可能性を考えさせる。

弥生時代前期の遺構は検出できていないが包含層の存在を確認した。包含層から出土した土器はすべて甕である。調査地の東約170mで複数の堅穴住居などが検出されており、調査地が日常生活を送る集落の西端にあたる場所であることを示している。

確認した層位から見ると調査地付近は、古墳時代以降中世までの堆積が50cm弱程度しかなく、逆に庄内期には約80～150cmの堆積が認められた。弥生時代中期後半から後期後半までは約20cmである。この状況は、他の時期より庄内期という限られた時期に非常に厚く土が堆積する自然環境であることを示している。

VI 考察

(1) 遺構

1) 層序について

今回の調査では河内湖の岸辺にあたる地をAからD地区まで東西約300mを調査した。したがって全体を通して見た層序は大きく見ればつながりがあるのは当然であるが、細かく見れば異なることも多い。例えば、A地区では他地区で認められた弥生時代前期の包含層は存在しない。残念なことに調査区が階級の事情でつながっていないため層の収斂などを明確には確認できていない部分もある。ここでは、花粉分析などの結果も参考にAからD地区までの層序について明らかにできた事例を上層から順にまとめておきたい。

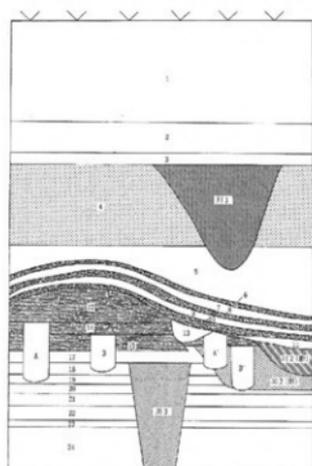
道路開設以前の旧耕地と床土の形成は近世以降と考えられる。おそらく室町時代の後期には調査地付近は耕作地として利用されていたことが遺構の分布状況から明らかであるが、近世に耕作のために削平されたと考えられる。したがっていずれの地点でも床土以下は庄内期までに堆積した層が確認できた。庄内期の堆積は、150cmの厚さが認められた。他の時期に比して極端に厚い堆積である。一部に洪水層と考えられる砂層が存在するが全体的にはすべて粘土層である。花粉・珪藻分析などの結果から水の影響を強く受ける低湿な堆積環境であったとされている。土器が出土したことにより層の年代が確定できたC地区では庄内期中頃のわずかな時期に約100cm近い堆積が起きたことが明らかになった。これと似た堆積状況は、南西約500mで調査した38次調査や南約900mで調査した若江遺跡38次調査でも確認している。この様な状況が起きる自然環境の変化を、各時代の集落推移と関連して今後は検討していく必要がある。

これに対して弥生時代中期後半から後期後半までは約20cm程度しか堆積していない。中期後半に造られた方形周溝墓の高まりが、4号方形周溝墓の竪堀の検出状況から見て頂部で約20~30cm崩れているものの、庄内期の初めまで、ほぼそのまま存在していたことが明らかになった。A地区で確認した自然堤防上に盛土して掘立柱建物群が作られた高まりも同様である。花粉・珪藻分析などの結果から水田が拡大し、カシ林が減少した河川などの流水の影響を受ける不安定で低湿な地であったとされているが、土の堆積が進んでいないことは間違いない。

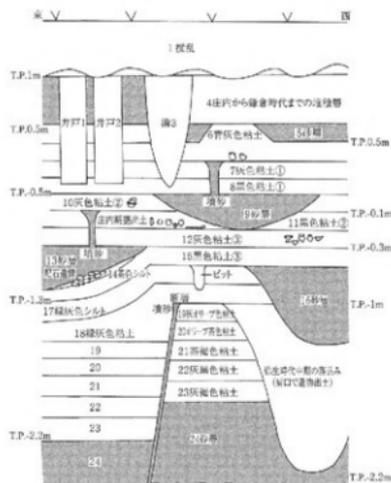
弥生時代中期後半の南海地震により生じた地滑りは、下層の河内湖に堆積した砂層が衝撃により湖に流出したために起きたと考えられるという。これは、この時期に調査地が湖の岸辺に存在していたことを示す証拠となろう。花粉・珪藻分析などの結果とも調和している。

上述したように弥生時代前期の包含層はB~D地区で検出しているが、A地区では確認できていない。層のつながりが調査区外の地区が存在するため不明である。この時期の包含層は大きく2層に分かれるが、厚さは、B地区で約40cm、C地区で60cm、D地区で35~65cmである。出土土器は型式から見て前期中頃の短い時期の所産である。庄内期ほどではないが、かなり急速に土が堆積したことが判明した。花粉・珪藻分析などの結果では、他の時代と異なり陸生珪藻の割合が高く湿った土壌の環境が示唆され相対的にやや乾燥した環境が推定されている。具体的には、調査地には湿地性の草地とやや乾燥した草地が分布し、近隣には主にカシ林の照葉樹林が分布するとされている。このような状況で短時間に土が堆積する自然環境を検討する必要がある。

かつて、本遺跡は遺跡中央部の調査結果から中期後半に起きた洪水で廃絶したと考えられた時期があった。しかし、今回の調査や周辺部の調査の結果洪水層で覆われるのは、一部の場所であることが明らかになった。むしろ、本遺跡においては地点によりかなり土の堆積状況が異なることを指摘できたと考える。また、中期後半から庄内期の初めまで方形周溝墓の高まりが湖の岸辺に累々と残る景観も復元できたと考えている。



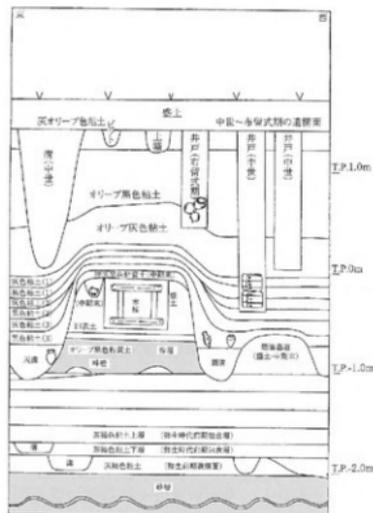
A地区基本層序



B地区基本層序



C地区基本層序



D地区基本層序

第163図 各地区基本層序模式図

2) 瓜生堂廃寺について

瓜生堂遺跡は、弥生時代中期を代表する遺跡として著名であるがC地区中央で遺跡の名称である「瓜生堂」の地名と関係すると思われる鎌倉時代から室町時代にかけて存在した寺跡の一部と思われる基壇跡を検出した。

平成8年12月から9年3月にかけて実施された試掘調査において、今回検出した基壇から東に約250m離れた地点で、曲物を井筒とする15世紀後半の瓦積み井戸が検出された。使用されていた瓦の中に平安時代後期の軒平瓦があり、周辺で現在までに知られている巨摩廃寺（検出地点より南西に約600m）、若江寺跡（南に約1000m）所要瓦と種類が異なることから、地名とあわせてそれまで知られていない瓜生堂廃寺の存在が予想された。その後のこの井戸周辺部の調査でも平安時代後期から室町時代前期の瓦が多数出土することから、付近に寺跡が存在することが確認されたが今回の調査まで関連する遺構は未検出であった。

今回C地区中央付近で確認した遺構は、幅約3m深さ約1m、断面形が逆台形を呈する周溝で囲まれた基壇の北辺部（基壇上面幅・東西約12m）である。南は調査区外に伸び、道路を隔てた南側で調査を実施している（財）大阪府文化財センターの調査区まで続く。南辺が不明なため厳密に確定できないが南北幅（長辺）は、約20m程度と考えられる。周辺の調査成果から検出位置は、当時の集落の西端に営まれている。

南北に主軸をもつため基壇上の建物は、東ないし西面すると考えられる。基壇は、D地区以東に分布する古代から中世の遺構面を構成する本遺跡内では比較的固くしめるシルト質の土を用いて都合2回（第1次・第2次基壇）盛土され造成されている。第2次基壇は、第1次基壇上に再度、盛土し北に約0.5m拡張していたが、東西は逆に約1m程周溝を掘り替えた関係で狹めている。第1次基壇は、11世紀後半から12世紀初頭の遺構面を削平して造成されていた。2回とも単に周辺の土を盛土しただけで古代寺院の基壇のような版築工法はとられていない。基壇の盛土や周溝内から出土した遺物から見て第1次基壇は13世紀初頭、第2次基壇は13世紀中葉に造られたと考えられる。

周溝内や付近から瓦が出土するが、完形のものではなくいずれも破片である。中には煤が付着し明らかに竈などに転用されたものが見られる。量や破片の大きさからみて、基壇上の建物にこれらの瓦が葺かれていたとは考えられない。おそらく茅葺きなどの屋根と考えられる。これは建物を構成する柱穴が、掘方の平面形が径50cm前後、深さ40cmのほぼ円形を呈する掘立柱であることから裏付けられる。掘立柱の柱材は遺存していない。第2次基壇は柱通りは整然としなが、柱間1.8m前後で東西3間は確認して南南北は不明である。

周溝は出土遺物から見て16世紀初頭まで徐々に埋まりながら溝として機能していたと考えられる。しかし、基壇上の建物が溝の廃絶時まで存続していたかは不明である。おそらく、掘立柱建物であることを考えると14世紀代で廃絶した可能性が高い。なお、周辺堆積土の土壌分析の結果、周溝内から人の寄生虫卵が少数検出されている。この点からも堂が集落の外れに位置していた可能性が指摘できる。

基壇の東約50mで検出した13世紀後半から14世紀初頭に機能した曲物を井筒とする井戸2から、灯明皿に使用したことを示す煤の付着した中国製の白磁皿が井戸廃絶後に遺棄された状態で出土した。この種の皿は高級品のため通常、一般集落で灯明皿に使用することはまずない。おそらく、寺に関係する人が使用した井戸で、廃絶後にゴミ穴として利用され遺棄されたと考えられる。井戸の周囲からは後世に削平されているため建物の平面形は明らかにできていないが掘立柱建物の柱穴が複数検出されている位置から見て、寺の住僧の居宅である可能性も考えられる。

多数の瓦の出土から別に想定される瓦葺き建物は、瓦の出土範囲と量の多少から建てられていた位置はこの基壇の東側に求められる。したがって少なくとも瓜生堂廃寺の構成する堂は少なくとも2堂以上で構成されていたことになる。瓦の出土量から見て他にもう1堂程度は瓦葺きの堂が存在したもののと思われる。B地区から以東で幅5m前後の大溝が5条、約60m前後の間隔で南北方向に掘られているのが確認されているが、あるいはその溝に囲まれた中に各堂が位置していた可能性も考えられる。いずれにしても、この寺が、当時の集落の西端近くに位置したことは間違いない。

次に寺の創建と廃絶時期を瓦から見ることにする。瓜生堂廃寺所要瓦は現在、軒丸瓦2型式、軒平瓦5型式を確認している。最古の軒瓦は、平安時代後期に属す連珠文軒平瓦3型式、唐草文軒平瓦1型式である。軒丸瓦はまだ出土を確認していない。他に鎌倉時代に属す巴文軒丸瓦2型式、連珠文軒平瓦1型式、剣頭文軒平瓦1型式がある。平安時代後期と鎌倉時代後期の鬼瓦が各1点出土している。また、室町時代前期に属す滑り止め瓦も見られる。したがって創建時期は平安時代後期の11世紀後半で廃絶時期は15世紀代ということになり少なくとも約400年近く存続した寺であることが想定できる。

所要瓦のうち剣頭文軒平瓦は飛鳥時代創建の若江寺跡出土瓦と同範である。この瓦当文様は一般的に剣頭文の剣先が下向きであるのに対して上向きの文様であるが中河内には比較的よく見られる瓦である。

若江寺は16世紀中頃まで存続した中河内を代表する大規模な寺である。文献から、鎌倉時代は平等院の末寺であることが知られている。周辺には平安時代後期に創建された今一つの寺、巨摩廃寺が存在する。巨摩廃寺は明確な遺構も未検出で、現在知られる限り瓦の出土範囲も狭い。おそらく瓦葺きの小規模な1堂程度の堂であると考えているが、平安時代後期に創建され鎌倉時代まで続いたことが出土している瓦から確認できる。

上述したように瓜生堂廃寺は複数の瓦葺きの堂と茅葺き屋根の堂から構成される寺である。規模からすれば、河内でも屈指の大規模寺院と考えられる若江寺と1堂程度の村堂の巨摩廃寺の間に入る中規模程度の寺院ということになる。南北約1kmの狭い範囲の中で規模の異なるこのような寺が同時に存在した状況は仏教が民衆によりやくは完全に浸透したことを示しているのであろう。また、瓜生堂廃寺は、巨摩廃寺と異なり若江寺と同範の瓦を持つことから両寺に何らかのつながりが存在したことも想定される。

若江寺を除く2寺は創建時期から見て浄土教が河内に広がる中で創建されたものと見てまちがいない。おそらくこの背景には当時、畿内全域で活発に貴賤を問わず活躍していた四天王寺の西門を極楽の入り口として難波の海に沈む夕日に阿弥陀浄土をみる日想感を基本的な宗教観の一つに持つ天王寺念仏衆の存在があると考えられる。今回検出した基壇上の建物が南北に主軸を持つ東ないし西面する堂であることは、示唆的である。

瓜生堂廃寺は、現在知られる限り文献上には全く登場しない。わずかに地名から「うりゅうどう」と呼ばれた堂があったことを想定できるに過ぎない。現在は、「瓜生堂」と音を借りて漢字で表記しているが、本来は「雨龍堂」と書いたのではないかと考えている。近世ではあるが、報告したようにB地区で耕作用の井戸やC地区で旱害に備えて小規模な溜池を作っている。河内平野は低湿地であるが古代より水害だけでなく日照りに悩まされたことは各種の文献に散見される。また30年近く前まで「ハネツルベ」を持つ井戸が調査地付近でも散見された。雨乞いをするために仏堂を作ることは当時、十分にありうる。龍は水の化身でもある。このように考えれば、今回検出した基壇上の建物か不明としてもこの寺を構成する仏堂の中に「雨龍堂」と呼ばれた堂が存在し、寺が廃絶した後もそれが、現在の地名に残ったかと思えるのである。

配石遺構について

B・C地区で、弥生時代中期後半の南海地震による地滑り（震度6；人が立っておれないほどの激しい揺れ。寒川旭氏の教示）により生じた東西最大幅35m前後、深さ0.6mの窪地を確認した。南北は、20m以上である。地滑りは、2回にわたり生じている。最初の南海地震による地滑りで、調査地東部に営まれていた方形周溝墓群西端の5号周溝墓の肩が崩れたようである。地震直後は、付近の土を用いて窪地をある程度埋め、それでも低いため周囲から流れ込む水を調整するための堰状遺構を作るなどしているが再度、中期末から後期初頭に起きた小規模な地震に伴う地滑り（規模は、東西10m前後）がほぼ同じ場所で再度発生し、その直後から窪地内や断層層口付近で多くの配石行為を伴う（東西約50m、南北20m以上の間）祭が行われたことが判明した。地滑りが生じた原因は寒川氏の教示によれば、調査地が河内湖の岸部にあたり下部の砂（第29層）が地震の衝撃による液状化現象により湖側に流出したためとのことである。なお、地滑りが生じた地点は、弥生時代中期後半段階では居住域と方形周溝墓群に挟まれた遺構が存在しない空白地帯にある。

配石が行われた期間は、供献された土器などから弥生時代中期末、後期初頭から庄内期の約200年間にわたる。配石の多さや供伴した土器などから、途切れることなく頻繁に祭が実施されていたと考えられる。なお、弥生時代後期末の庄内期の設階で2回の地震により発生した噴砂が確認された。配石は認められないが、噴砂にともない祭を行った後に遺棄されたと思われる土器が単独に近い状況で出土している。土器の中の一つ手焙形土器は、内部に燃やされた木（クロマツ・金原正明氏教示）が約2/3（約500g）程入り出土した。使用状況を示す形でこの種の土器が出土したのはおそらく初めてのことであろう。以下、検出した配石遺構の状況を要約した後に、地震のカミに対する祭の状況の復元を試みる。

配石に用いられた石は、おおむね径10から20cm大の自然石と空豆大の礫（いわゆる玉石）を2種類がある。最大の石の重量は、子牛頭大の38kg前後である。配石の仕方は、たんに石を置く場合だけでなく様々なものがある。例えばB地区で検出した配石1は東西3m、南北1.5mの楕円形の範囲に径10から20cm大の自然石を3回以上にわたり総重量約243kg以上を積み上げる。配石2は、1m四方の範囲に径5から12cm大の石を総重量約5kgを配置する。配石3は灰色をした空豆大の礫を長さ41cm短辺24cmの隅丸長方形の範囲に総重量約1.4kgを置く。配石4は径約30cmの範囲に白色をした空豆大で総重量約0.5kgの礫を置く。C地区で検出した配石1は、径1～3cm前後の玉石を平面形が径30cm前後、深さ約10cmの不整形形を呈する土壌に密に埋め（総重量1181g）ていた。

配石に用いられた石は、ごくわずかに石錘などを転用したものがあるが、ほぼすべて自然石である。石の採取地は、奥田尚氏の鑑定によれば近隣の生駒山西麓など石を用いず、和歌山県紀ノ川周辺や海南市付近、泉南地方や東灘区などで産出する石など本遺跡から遠く離れた地であることが判明した。紀ノ川で採取されもたらされた最大の結晶片岩は、後期初頭のC地区配石6に用いられていた重量12.3kgのものである。

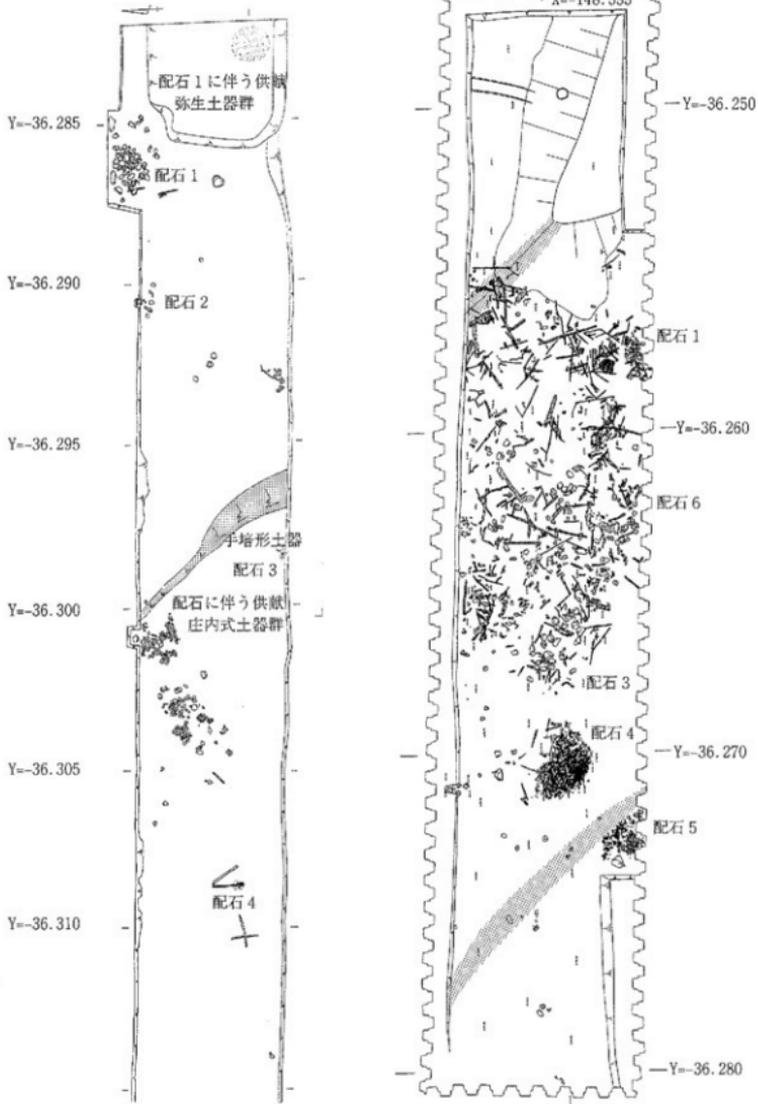
配石の周囲からは、焼けた木が多数出土している。のみならず、B地区配石3・4は、石の上で火を燃やし直後に水をかけたため石が割れている。また、配石は伴わないが炭が入ったままの手焙形土器も出土している。配石周囲の地表面には、火を焚いた跡が多数認められた。配石4の側から十字に組んだ木（約90・70cm）が発見されているが各配石の周囲には加工木や不明木製品が多数出土しておりこれの中にも祭に使用されたものが存在すると思われるが明らかにはできない。

各配石に伴った供献土器が遺棄された状況で出土しているが、まとまって出土するのは、後期後半から庄内期である。中期末から後期前半は、配石の周囲に散漫な状態で供献土器が出土している。各

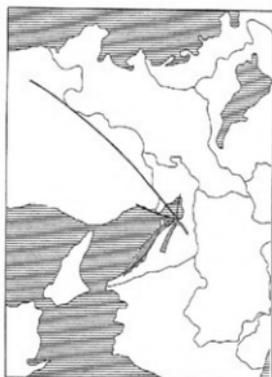
B地区

X=148.535

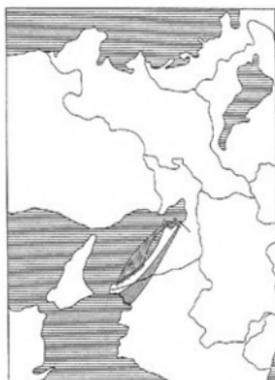
C地区



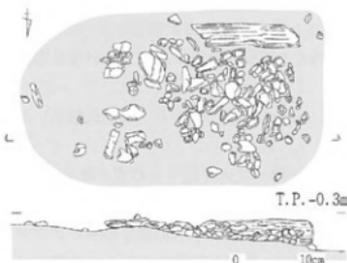
第164図 断層・配石遺構分布図



B地区配石1



B地区配石3・4



B地区 配石3 平面・立面実測図

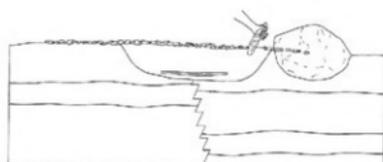


図3 玉砂利を敷きつめた後に武器形木製品をさし込む

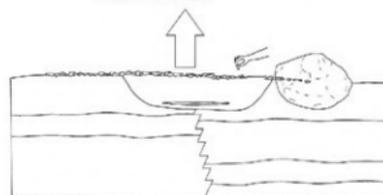


図2 穴を上で小さくその上に玉砂利を敷きつめる。

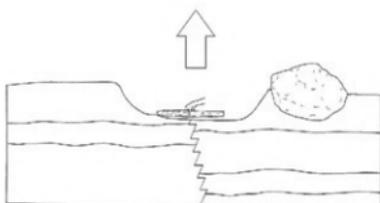
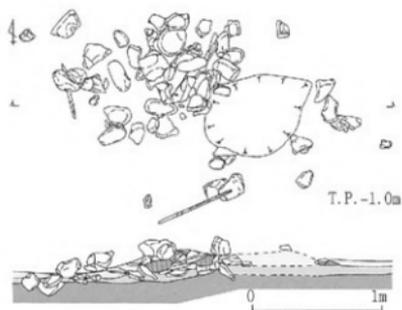


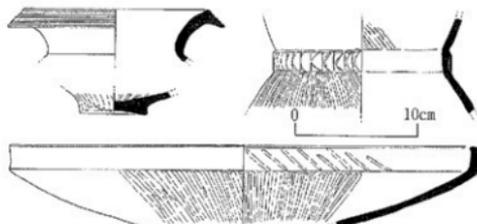
図1 断層上面に穴を掘り、武器形木製品を置く

C地区 配石5 武器形木製品埋納状況模式図



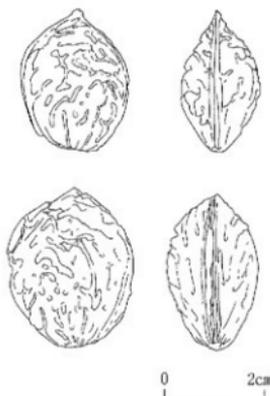
B地区 配石1 (全体) 平面・立面実測図

第165図 配石遺構実測図及び配石搬入先模式図



第166図 B地区配石遺構出土土器実測図

時期とも、土器の表面が強い火を受けたために剝離しているものが多く存在する。B地区配石3・4に伴い遺棄された土器の中には、河内では非常に珍しい完形に復元できる高杯形の製塩土器（庄内期・奥田氏の教示によれば堺の海岸の砂が含まれるとのこと）が2点見られる他、他地域産の土器も目立つ。中期末から後期前半は、岡山県や香川県からもたらされた土器が多く、庄内期には和泉地方の土器が見られる。



第167図 配石遺構出土桃核実測図

C地区の配石の周囲から、大型白や杵などの木製品や祭の供物と思われるイノシシ・ハマグリなど動物遺存体や桃の種子などが出土している（第167図）。木製品には、一般に祭で模擬戦が行われる時に用いられたとされる武器型木製品が10点以上含まれている。C地区で検出した後期初頭の配石5からは、土壌を掘りその中に1本の鉄剣形の武器型木製品を納め、埋めた後に結晶片岩を含む親指大の玉石を用いて配石を行い、その上から朱塗りの銅剣形の武器型木製品を突き刺した状況で発見された。また、朱塗りの盾、後期初頭の石鏃や銅鏃も出土している。

弥生時代の配石遺構は、現在、弥生時代前期後半のものが鳥根県匹見町下手遺跡など性格不明のものが知られる以外あまり報告されていない。今回の調査で、弥生時代にも確実に配石を伴う祭が存在したことが推定できる。ただ、縄文時代に見られる配石遺構とは、時代背景が異なり性格が異なると思われる。おそらく、今後は類例が増加するであろう。

さて、上記の出土状況や遺物から祭を復元してみる。祭の目的は、地震による地滑りの結果生じた窪地と肩口で行われていることから、地震を起こす「カミ」を鎮めるためであることは容易に推察できる。当時の竪穴住居や掘立柱建物の構造では、現在と異なり大地震の揺れだけでは負傷者は発生するであろうが、死者は余り出ないのではなかろうか。むしろ、津波などの方が被害が多いと考える。どちらにより怖れを感じたかはともかく、当時の人々も現代人と同様、地震に対して大いなる恐怖を持っていたことはまちがいなさろう。

祭が行われた季節は、複数の配石から桃の種子が出土し、当時の桃は、秋なり（金原氏教示）であり祭が行われた季節の一つは、秋と考えられる。

祭が行われた中心の時間帯は、配石が開始された当初から一環して火を使うため夜と考えられる。祭に際し煮炊きに用いられた多くの甕の器表が、強い火を受け剝離している。甕だけでなく壺も同様の剝離が認められるものが多く認められる。手焙形土器の中で燃やされた木も油脂分の多いクロマツである。通常よりも強い火を必要としたことを示している。間夜（新月）に行われたことを裏付けるのかもしれない。

祭儀式の一つに、模擬戦が行われたことは確実である。模擬戦の一環として最初に穴を掘り鉄剣形の

武器形木製品を取めた後に、玉石を用いて配石を行いその後、朱塗りを施すなどでいねいに作られた先端が欠損した銅剣形の武器形木製品を突き刺すことも行われている。埋められた武器形木製品が地震を起こすカミで、突き刺されたほうが鎮めるカミの象徴と考えることができる。このような状況は、1個所しか認められない。したがって、すべてがこのように行われたとは言えないが中期末から後期初頭の石鏃や後期初頭の鍔バリを残したままの銅鏃の存在は、武器形木製品だけでなく、これらも模倣戦に用いられたことも示している。

模倣戦を行う司祭者の様子は、既に銅鐃絵画や土器に施されている絵画から楯を持つ鳥装のシャーマンが行うことが推定されている。今回は、楯も出土しておりおそらくこの状況を示す具体的な検出例となろう。

配石に用いられた石が、当初から瀬戸内や紀北地方などからもたらされている。石だけでなく、土器も紀北地方のものはあまり明確でないが瀬戸内地方のものが一貫して含まれる。石の重量は、最大のもが38kg前後もあり遠距離を1人で持ち運ぶことは困難である。開始期から終末まで個々の配石に用いられた石の産地に一貫して規則性と継続性がある。配石の仕方は、細かく見ればいくつかのタイプに分かれるが、かなり厳密な取り決めがあることはまちがいない。これだけの配石に用いる石や土器などの資材を祭のために搬入するのや、祭儀式の一貫性から単なる交易だけでは考えにくい。祭用の石などの資材も含めて、司祭者を招聘し瀬戸内地方や紀北地方で行われていた地震に対する地鎮めの祭を、そのまま本遺跡で行ったのではなかろうか。

大型の臼と整杵、ハマグリやイノシシの骨あるいは桃の種子が出土していることから祭に際して神人供食の儀礼が行われたことも確実である。クスノキで作られた大型の臼の存在は、一度に大量に祭に食べる米を脱穀する必要からであろう。祭に使用された甕の中には、強い火で焚いたため米が器壁にこげになりこびりついたものも見られる。配石の規模や継続性からして当然であるが、この点からも祭が小規模なものでなく集落全体あるいは近隣の集落を含めた大規模なものであることを示している。

開始当初から終末期までを見れば、配石の規模および用いる石材の縮小・小型化、石材採取地の移動あるいは供献する土器の多少など時期により祭の仕方の変化が見られる。石だけでなく、祭に使用し遺棄された土器の中に当初は、吉備や讃岐あるいは和泉などからもたらされたものが多く含まれるが、配石の石材同様に庄内期には搬入された土器は、泉南から紀北からもたらされたものが主体となっている。時代が下がるに従い泉南や紀北地方に収斂していくことは、当初地震を起こす「カミ」がいる本拠地を瀬戸内地方と紀北地方の2箇所と考えていたのが、徐々に紀北あたりと考えるようになったことを示すのではなかろうか。当該地方の司祭者に地鎮めの祭を依頼した背景には、当初地滑りを起こした地震が四国南方で発生する南海地震であることが原因しているのであろう。

今回の検出状況から祭の最終段階では、規模が縮小し配石が行われなくなる。手摺型土器で火を焚いていることから引き続き、夜に行われたことが想定できるが、最終末の庄内期中頃には単に土器(甕)を置くだけになることが知られた。銅鐃祭祀などの終焉とほぼ時を同じくしている。前方後円墳が出現するのとはほぼ同時期で祭の対象とする「カミ」が変わったことを示す1例であろう。また祭の伝承が、守り続けられたことは地震が起きた弥生時代中期後半から庄内期まで少なくとも同一の系譜に属す人々が本遺跡および周辺に居住していたことを示すと考えられる。

4 方形周溝墓について

1. はじめに

弥生時代の墓形形態の一つである方形周溝墓が知られたのは、1966年に溝を方形に巡らせる遺構を墓と認識し、「方形周溝墓」と命名されたのに始まる（大場繁雄1966）。その後、1980年代に入り、古河内湖周辺の遺跡で盛土を伴う方形周溝墓が発見され始めた。特に本遺跡小阪ポンプ場周辺の2号方形周溝墓や加美遺跡のY1号方形周溝墓は高い墳丘と多くの埋葬施設を持ち著名である。それについて、墓制について多くの論及がなされるようになり、弥生時代の社会構造が解明されようとしている。

今調査で確認した4基の方形周溝墓を考察するにあたり、本遺跡と周辺遺跡の方形周溝墓からその諸属性を検討し、比較することによって、位置付けを行いたい。今回検討対象とした方形周溝墓は、東大阪市の鬼塚遺跡3基、西ノ辻遺跡11基、植附遺跡5基、鬼虎川遺跡28基、本遺跡62基、巨摩寺遺跡4基、若江北遺跡3基、八尾市山賀遺跡8基、四条暖市鎌田遺跡5基、雁屋遺跡14基、門真市古川遺跡10基、大阪市城山遺跡42基、加美遺跡4基、大阪市・八尾市亀井遺跡14基、久宝寺遺跡4基（八尾市3基、東大阪市1基）である。なお、報告書や文献は文末を参照されたい。

2. 方形周溝墓の諸属性の検討

(1) 平面規模

墳丘の長軸、短軸を墳丘裾から裾までとともに検出し、あるいは推定できるもの72基を散布図に表したものが表12-1である。縦軸は墳丘長軸の長さを、横軸は墳丘短軸の長さを示す。

表12-1から読み取れる傾向は、まず、長軸と短軸の比、すなわち長方形の形状は2:1を超えるものではなく、短軸が6.0m以下では1.5:1から1:1の間に収まる（18墓中16墓）。例外は、ⅡからⅢ様式に属す鬼虎川遺跡の20号方形周溝墓、Ⅲ様式の城山遺跡40号方形周溝墓が見られる程度である。短軸が6.0mを超えると1.5:1から2:1の間にくるものが現れる。長軸が12mを超えると偏平を指向するものが多く、1.25:1の比から正方形に近くなるものは少ない（26墓中6墓）。この傾向は平面規模が大きくなるⅢ様式から強まる。次に、墳丘の大きさについては、ⅠからⅡ様式の方形周溝墓は古川遺跡の方形周溝墓1の8.6×7.1mを最大として総じて長軸7.0mを超えるものは少ない。規模が大きくなるのはⅢ様式からであり、長軸7.0mを下回るものは58墓中6墓となっている。

(2) 墳丘長軸の方向

表12-2は長軸が確定している93基を、長軸の傾きが北から何度あるかを測定し、30°ごとの件数を表している。グラフ両端は合わせて東西方向（N±75°以上）を示す。長軸が南北方向（N±15°）を取る方形周溝墓がやや多いことが見受けられるが、明確な特徴を捉えることは難しい。検討件数が多い本遺跡、鬼虎川遺跡、城山遺跡ではそれぞれN±15°、15°～45°-E、15°～45°-Wの方向がやや多く、それに直交する方向を合わせると過半を占める。方形周溝墓は周溝を共有したり、隣接することが一般的で単独で存在することは少ないため、このような結果となることが考えられる。地域を包括するような方角に対する意識はなく、築造過程に影響されているといえよう。しかし、墓群などの小単位で検討した場合、整合することもあるが少しずつ傾きがずれることもあり、方角に対する厳格な規則性を想定することはできない。

(3) 埋葬施設の配列と構成

墳丘の上面をほぼ確認でき、盛土が残存し削平を受けていない39基のうち、平面規模と埋葬施設の数の関係を検討してみた。周溝内埋葬や、周溝外の方形周溝墓に付属すると考えられるものについてはこの検討に加えていない。基数が少ないため細かく分析することはできないが、墳丘長軸が8m未

溝では1基のみの単数埋葬が15基中14基と中心をなし、2基の埋葬施設を持つことは少ない。8m以上では2基以上の埋葬となり、10mを超えると5基以上の埋葬が普通である。主体部を確認することができていない方形周溝墓が本遺跡や城山遺跡で5基報告されている。主体部を検出することができなかったか、埋葬が行われなかったかを判断することは難しい。

埋葬配列は墳丘中央に埋葬施設を1基持つ単数型と、複数埋葬のうち中央に墳丘長軸に平行して配置される中心埋葬を持つ空間占有型、中心埋葬を持たない空間占有型に分類できる（大庭重信1999）。単数型は17基（内Ⅱ様式が8基）、空間占有型8基、空間占有型7基（内3基は詳細が分からず図面上での可能性である）となる。単数型は墳丘規模が比較的小さいため、墳丘の全体が検出されやすいことを考慮すると、Ⅲ様式以後は空間占有型と空間占有型はほぼ同じくらいの比率で単数型はやや少ないことになる。

また、埋葬施設の構成はデータとして抽出することは困難である。特徴を挙げると、本遺跡で土壌を埋葬施設に用いる例が多く、中でも近畿自動車道のB地区からD地区にかけては土壌が数の上で主体となる。ほかの地域では木棺が主体であり際立っている。木棺の内法の長さが1m以下の木棺を子供用（10歳前後以下）とした場合、全体で17基見つかっており、1mを超す長さの木棺においても子供を被葬者とするものが2基確認されている。土器棺は66基（成人の歯が検出されている1基を除く）である。検出の難しさを勘案しても、子供の埋葬施設は土器棺が主流であるが木棺も少なからず使用されている。主体部が多い方形周溝墓では併用されていることある。土壌における子供の割合は、検出例が2例と少なく、ほかの年齢層も7基であるので不明としておく。

（4）埋葬主体

今回、調査・検討した範囲で報告されている方形周溝墓の埋葬主体は、206例を数え、木棺（140基）、土壌（64基）、土器棺（42基）の3種類が挙げられる。

a. 木棺型式

木棺は、埋葬方法の主流で約7割を占める。このうち、62基は、木棺の残存状況が良好であり、木棺の型式を分類することができる。削抜き型木棺（瓜生堂D地区23号方形周溝墓第1主体部）、網代敷き木棺（鬼虎川19号方形周溝墓第2主体部）、二重木棺（加美Y1号方形周溝墓中心主体部）、小口板に削材を使用する木棺（山賀9号方形周溝墓主体部）、小口板を支えるような杭がある木棺（瓜生堂C地区12号第1主体部）などの特殊な例もあるが、大半の58基が蓋板、底板、側板、小口板から構成される組合せ木棺で、大きくⅠ型木棺とⅡ型木棺（以下Ⅰ型、Ⅱ型とする）の2型式に分けられる。

まず、Ⅰ型は、墓床面の両短辺部に溝状の掘り込みを造り、そこに小口板を立てて囲定することを特徴とする。また、小口板が長方形のもの（Ⅰ-a型）、底板両短辺を「コ」字形に切り取り、そこに「T」字形の小口板を差し込むもの（Ⅰ-b型）がある。

次にⅡ型は、底板上に小口板を立てることを特徴とする。底板に溝状の掘り込みを入れ、そこに小口板を立てる（Ⅱ-a型）、底板の両短辺を段状に削り、そこに小口板を立てるもの（Ⅱ-b型）に分けられる。

Ⅰ型は19基検出されており、そのうち山賀遺跡（7基）、鬼虎川遺跡（7基）に集中している。両遺跡ともⅠ型を中心に使用し、Ⅱ型は両遺跡で1基ずつ使用されているのみである。Ⅰ-a型木棺、Ⅰ-b型木棺（以下Ⅰ-a型、Ⅰ-b型とする）に偏りは無い。しかし、底板の構造に若干の差異がみられ、山賀遺跡の木棺は複数の板材を並べ底板を構成するものが含まれるが、鬼虎川遺跡のものは1枚板で底板を造っている。また、両遺跡のⅠ型は、第Ⅱ様式～第Ⅲ様式の時期に使用されていた。そのほか本遺跡では、Ⅰ型は3基検出されており、すべてⅠ-b型であった。鬼塚遺跡は、1基検出

されているが、I-a型かI-b型であるかは不明である。雁屋遺跡では、I-b型が1基検出されている。これらの使用時期は、第Ⅲ様式～第Ⅳ様式にあたる。

Ⅱ型は、42基検出されている。山賀、鬼虎川遺跡を除いた検討地域で中心的に使用され、Ⅱ-a型(10基)、Ⅱ-b型(14基)に遺跡による偏りはみられなかった。使用時期は、第Ⅲ様式～第Ⅴ様式にあたる。なかでも、第Ⅳ様式～第Ⅴ様式に属する巨摩庵寺遺跡は、15基中14基がⅡ型を使用しており、I型は検出されていない。

b. 埋葬姿勢

埋葬姿勢は、人骨の残存状態から推定できる35例をもとに、90°以上曲げる仰臥強屈肢とゆるやかに曲げる仰臥弱屈肢と仰臥伸展の3形態に分けて検討した。また、このほかに、横臥強屈肢(山賀遺跡B地区1号方形周溝墓主体部)の姿勢をとるものが1基あるが検討の対象外とした。

仰臥強屈肢は、鬼虎川遺跡(5基)、瓜生堂遺跡(3基)、山賀遺跡(2基)、雁屋遺跡(1基)、鬼塚遺跡(1基)で12基検出されている。この埋葬姿勢に使用されている木棺は、後に述べる仰臥伸展姿勢で使用される木棺より、全体的に規模は小さいが、成人を埋葬した170～180cm程の規模を持つ木棺にも関わらず、仰臥強屈肢の姿勢をとるものも3基ある。また、使用木棺は、I型のものが8基を占める。時期は第Ⅱ様式～第Ⅲ様式に該当するものが多い。

仰臥弱屈肢は、本遺跡(3基)、雁屋遺跡(1基)で4基検出されているが特徴的な傾向は認められない。時期は、第Ⅲ様式～第Ⅴ様式にあたる。

仰臥伸展は、巨摩庵寺遺跡(10基)、本遺跡(1基)で11基検出されている。仰臥強屈肢からの姿勢の変化に伴い、成人に使用された木棺は、内法が30cm前後拡大している。時期は、第Ⅲ様式～第Ⅴ様式にあたる。

c. 木棺材

木棺材は、樹種の不明なものを除くとコウヤマキ、ヒノキを中心として、モミ、クスノキ、カヤを使用していた。これらは、木棺に使用される際、単材で木棺を構成するものと混材で木棺を構成するものに分類できる。なお、樹種同定で樹種が確認された55例のうち、蓋板、底板、側板(2枚)、小口板(2枚)の6箇所なかで3箇所以上使用した樹種がわかれた39例を検討対象とした。

単材のものは、26例でそのうち、コウヤマキ20例、ヒノキ5例、と雁屋遺跡でカヤが1例報告されている。コウヤマキの使用頻度が圧倒的に高く、本遺跡では11基中9基がコウヤマキを使用し、第Ⅳ様式～第Ⅴ様式に属する巨摩庵寺遺跡でも、7基すべて単材でコウヤマキを使用している。対照的に雁屋遺跡は、コウヤマキよりヒノキや混材の使用頻度が高く、木棺ではⅡ型に多い。また、単材の使用が多い時期は、第Ⅲ様式～第Ⅴ様式にかけてである。

混材のものは、12例でヒノキ、コウヤマキを中心にモミ、カヤ、クスノキを使用する。鬼虎川遺跡では3基すべて、山賀遺跡でも5基中4基が混材であった。使用木棺ではⅠ型に多い。また、混材の使用が多い時期は、第Ⅱ様式～第Ⅲ様式であった。

d. 土器棺

土器棺は、本遺跡I地区11号方形周溝墓第9主体部で1基成人を埋葬していたが、その他については、棺の大きさから、嬰兒、幼児を埋葬するために使用されたと考えられる。木棺同様に組合せ式のもの主流であり、主に使用されるものは、鉢、甕、壺の3種類である。このうち、鉢は蓋として使用される事が多く、棺身は、甕を使用している。組合せは蓋・棺身の順に、鉢と甕(40%)、鉢と壺(12%)、甕(単棺)・壺(単棺)はおおの1%であった。

また、組合せ方法に時期差は認められない。地域的には、城山遺跡、本遺跡で、各27基検出されて

いることが目立つ。棺の埋葬位は、横位、斜位がともに8例、立位が4例であったが、組合せ、時期、地域との相関を示すことはできない。

e. 埋葬主体の頭位

埋葬主体の頭位を検討するにあたって、人骨の検出状況から判断できる96例を対象とした。これら地域全体では、一定の方向性を指すものはみられなかった。あえて挙げるとすれば、N-30°～59°-Wには、鬼虎川遺跡の4基のみであった点である。遺跡ごとに分析すると頭位に偏りが確認できたのは、山賀遺跡ではS-30°～59°-WとS-60°～89°-Eの2方向のみに集中していた。他には偏りはみられなかった。方形周溝墓ごとに分析すると、1方形周溝墓内の埋葬主体の多くは、方形周溝墓長軸にあわせるものと長軸に直交するものが多い。

以上、埋葬主体の分析をまとめると、木棺は、第Ⅱ様式～第Ⅲ様式の時期にかけて、混材を組合せたⅠ型を使用し、被葬者は仰臥強屈肢の姿勢で埋葬される。第Ⅲ様式～第Ⅳ様式の時期には、Ⅰ型は衰退しはじめる。Ⅰ-b型は、本遺跡で若干使用されるが、Ⅰ-a型は姿を消し、代わってⅡ型が主流になる。棺材も混材から単材に変化し、被葬者の埋葬姿勢も仰臥弱屈肢、仰臥伸展に移行していく。第Ⅳ様式～第Ⅴ様式には、Ⅰ-b型はみられなくなり、大半をⅡ型で占める。棺材は、コウヤマキに限って使用していた。土器棺については、弥生時代を通じて鉢×甕の組合せのものが大半を占める。また、今回対象からはずした土壙や本文中にふれた頭位などは、不明瞭な部分が多いため細かな分析ができなかった。

3. 47-2次調査で検出した方形周溝墓との比較

上記の周辺遺跡を含めた方形周溝墓の属性の検討をふまえ、今回の調査で検出した4基の方形周溝墓(第Ⅳ様式前半)を同時期(第Ⅲ～Ⅳ様式)のものと比較してみたい。

平面規模をほぼ確定することができるものは、3号方形周溝墓、長軸10.4m×短軸6.5mと4号方形周溝墓、10.9×8.0mである。ともに長方形の偏平度合が強くそれぞれ1.6:1、1.36:1である。平面形態A(藤田真依1987)に該当するものであろう。第Ⅲ様式～第Ⅳ様式に属する方形周溝墓のうち偏平度合が1.5:1前後以上のもの中では小規模な面積で、全体では中規模といえる。埋葬施設は3号方形周溝墓が4基の木棺、4号方形周溝墓が4基の木棺と1基の土器棺であり、墳丘の規模に応じた基数である。1号方形周溝墓は3基の木棺と1基の土器棺である。北西方向にどの程度大きくなるかは不明であるが、北東から南西の軸が10mを超えることは確実であり、偏平率が低い方形周溝墓においても主体部の数は同様であるため、当該期の傾向と合致すると考えられる。

埋葬施設は木棺を主体とし土器棺を少数使用し、土壙を含まない構成である。本遺跡中央北部、城山遺跡以外の地域と同様の傾向を示す。埋葬配列は4号方形周溝墓では1号主体部が中心埋葬施設となりうるが、2号主体部に木棺の一部を破壊されていることから、標石等の墓竈上表示がないとしても占有しているとは考えられず空間分有型と捉えるべきであろう。1号方形周溝墓は北東から南西の軸が長軸とした場合、中心主体部に該当するものではなく空間分有型である。北西に長く伸びる形状になると想定した場合、中心主体部は調査区外に存在する可能性があるため不明である。3号方形周溝墓では中央部に墳丘長軸と木棺長軸を同一方向に合わせる2号・3号主体部があるが、後者は4号主体部の墓壙をきるため、後からの埋葬であり、前者が中心主体部の可能性が高い。しかし、3号主体部と縦方向に並ぶ状態で、やや南方向に位置し、墓壙の底面はほかに比べて特に深く掘られていることもなく、空間分有型の範疇で捉えるべきかもしれない。

木棺の形式は、棺材が残存し確定できる木棺のほかにも、墓壙床面に小口板を固定する掘りこみが確認できなかったため、検出した12基すべてⅠ型以外に属する。棺材から小口板と底板との組み方が

分かるものは4号方形周溝墓の5号主体部のⅡ-a型のみである。木棺痕跡から形式を推定できるものには3号方形周溝墓の3号主体部、4号方形周溝墓の1号主体部があり、小口板が底板を挟むものをⅢ型とした場合、Ⅲ型の可能性が高い。Ⅰ型木棺を含まないことは第Ⅳ様式以降の傾向である。また、Ⅲ型で棺材から確認できるものには巨摩庵寺遺跡の第2号方形周溝墓第7埋葬施設(第Ⅴ様式前半)がある。痕跡から可能性が高いものに本遺跡北西部の8号方形周溝墓墓塚(中期後半)や城山遺跡23号方形周溝墓1号・3号主体部(第Ⅲ～Ⅳ様式)、19号方形周溝墓1号主体部(第Ⅳ様式)があり、Ⅲ型の木棺は第Ⅲ様式以降には少数ながらも存在すると推定しておきたい。

埋葬姿勢では脚部を強屈肢するもの、弱屈肢するもの、伸展するものが共存するが、同様の例は本遺跡西部の14号方形周溝墓などがある。棺材の樹種構成はコウヤマキを主としヒノキを従として使用している。本遺跡小阪ポンプ場ではコウヤマキのみ、雁屋遺跡ではヒノキがコウヤマキと同程度であり、相異が見られる。本遺跡南部の近畿自動車道のⅠ～Ⅳ地区と同様の樹種構成を示している。

土器棺の組合せは棺身に甕を、蓋に鉢を用いる例が多くを占めるが、検出した1号方形周溝墓4号主体部、4号方形周溝墓4号主体部は数少ない棺身が甕のみの単棺を使用している。

墓葬供献についてはその形態を定量的に検討することはできなかったが、いらかの供献のあり方に差異を認めることができる。供献土器を墳丘上面に土器を置くもの、周溝に土器を並べるもの、墳丘斜面から周溝にかけて破砕してまくもの、土壌に土器を埋めるものなどがある。それらの中には1つの形態だけではなく組み合わせたり、数量における多寡、位置による偏り、穿孔や打ち欠きや破砕などの行為の差などが各々の方形周溝墓によってさまざまな形態がある。今調査の5号方形周溝墓や1号方形周溝墓では、墳丘の上面から深さ0.5m前後の土壌に土器を埋納する方法が採られており、検討対象の地域では特殊である。また供献土器以外では、1号方形周溝墓1号主体部の墓塚から打製石剣が出土しており、磨製石剣が墳丘上から出土した例は、本遺跡中央部の14号方形周溝墓の木棺の南1mから出土した例と検出状況が分からない巨摩庵寺遺跡7号方形周溝墓の例があるだけである。

また、1号方形周溝墓と3号方形周溝墓との空閑地は盛土がなされていることから方形周溝墓に付帯する墓道と判断しているが、このことから他調査においても周溝間にある空閑地は墓道として利用されていた可能性が高いと考えてよからう。

4. 本遺跡の方形周溝墓群について

本遺跡では方形周溝墓は可能性があるものを含め68基(47-2次調査含む)であるが、対象にすることができなかった方形周溝墓は西部の小阪ポンプ場の南部に7基、遺跡北東部の近鉄奈良線北側に9～10基存在している。方形周溝墓が近接する本遺跡以南の巨摩庵寺地区を加えると88基を数える。

遺跡内の墓域の広がりには1つに片寄るのではなく数カ所に分かれることは従来から指摘されている。また方形周溝墓は単独で存在することは少なく群を形成することが多い。本遺跡では西部の小阪ポンプ場周辺、北西部の近鉄奈良線南部、中央部の近畿自動車道のAからC地区、D地区の大溝周辺、南部のⅡからⅣ地区、北東部の近鉄奈良線北部である。

今調査地が含まれる北東部は未報告のため詳細が不明な方形周溝墓が多いが、規模から見ると西半の長軸10mを超える集まりと、規模が小さな集まりに分かれるようである。47-2次調査の方形周溝墓を土器棺や供献土器から見ると東から西に築造されている。一方、大阪府教育委員会による試掘調査の2トレンチで検出された方形周溝墓は1号方形周溝墓と5号方形周溝墓の間に位置している。検出された土器棺や甕口縁部からⅢ様式新段階と考えられている。様式感に差があるとみられ、また、出土遺物が少なく、同形態の壺ではないため、1号周溝墓から出土した土器と先後を決定することは難しい。しかし、概ね東から西へ築造される1群と捉えておきたい。

松宮昌樹氏の論考を参考にすると、小阪ポンプ場周辺では第Ⅲ様式のみ・中段階から築造が始まり、第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式にかけて遺跡全域に範囲を広げ、他の全ての群で方形周溝墓が形成され、第Ⅳ様式末～第Ⅴ様式初頭にはⅠ地区、第Ⅴ様式に巨摩庵寺地区北部へと基数を小さくさせる。各墓域の特徴を挙げると、小阪ポンプ場周辺では13号方形周溝墓で主体部に赤色顔料を使用する上位階層が見られる（大庭重信1999）。A～C地区では、規模が大きな墳丘に土壌を主体とする埋葬施設を有し、D地区大溝周辺では溝の土手を利用した小さな墳丘規模の方形周溝墓が築造される。北西部と北東部、南部では大きな規模の墳丘を持たない中小規模の方形周溝墓が集まり、Ⅰ地区では単数埋葬が見られる。巨摩庵寺地区では赤色顔料を有する上位階層墓が存在する。

すなわち、本遺跡は第Ⅲ様式から方形周溝墓を築造する集団がいくつか発生し、第Ⅲ様式には遺跡の南部を除き墓域が増加、拡大し、その中から上位階層が生まれる。上位階層の集団は第Ⅳ様式末～第Ⅴ様式にかけて遺跡南部と巨摩庵寺地区北部へ墓域の規模と数を小さくさせつつ移動した状況が読み取れるのではなかろうか。第Ⅳ様式末～第Ⅴ様式の方形周溝墓は検討地域で224基中9基と4%に満たない。本遺跡の墓域の縮小と移動はこの時期に弥生社会が大きく変動した姿を如実に表していると想定できる。

5. おわりに

今回使用したデータは報告書数値をできるだけ用いたが、未記載の事項は報告図面より測定し、また、推定により計測している箇所がある。本来なら集成データを公開すべきであるが、紙数の都合上、載せることができなかった。機会をあらためて報告したいと考えている。

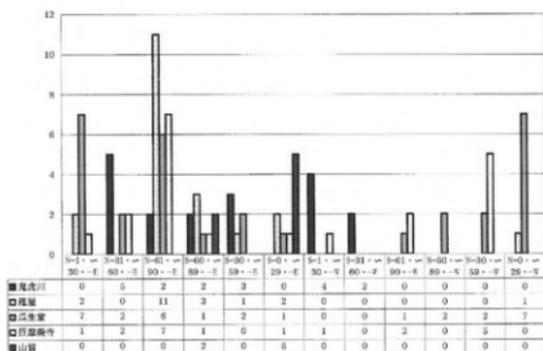


表11-1 主体部頭位

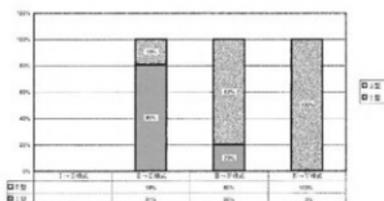


表11-2 木棺形式変遷

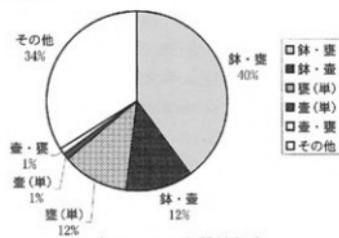


表11-3 土器棺組合

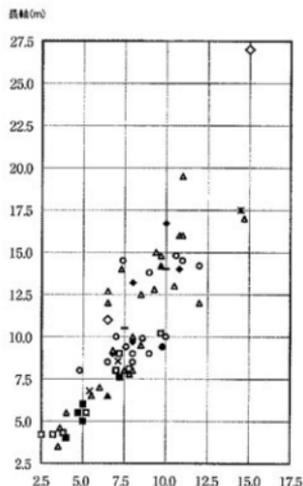


表12-1 埴丘平面規模

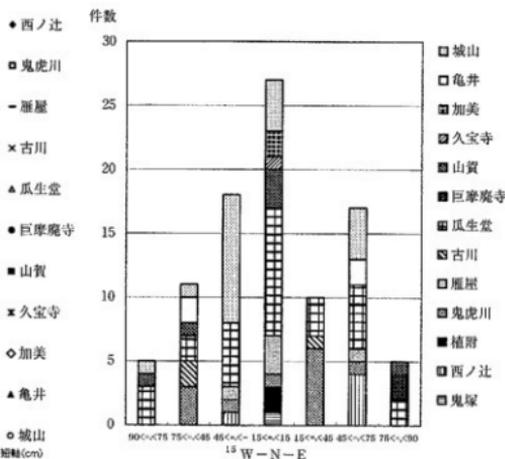


表12-2 方形副溝墓の長軸の向き

【参考文献・報告書】

- 朝東大阪市文化財協会 『鬼塚遺跡第8次発掘調査報告』1997年
 朝東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会 『西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡-西ノ辻遺跡第6次、第7次
 第8次調査 鬼虎川遺跡第18次調査概要報告書-』1988年
 朝東大阪市文化財協会 『西ノ辻遺跡第26次発掘調査概報』『朝東大阪市文化財協会概報集』1990年
 東大阪市教育委員会 『西ノ辻遺跡第9次発掘調査報告』1996年
 東大阪市教育委員会・朝東大阪市文化財協会 『鬼虎川遺跡第25次発掘調査報告』1998年
 東大阪市教育委員会 『西ノ辻遺跡第42次発掘調査報告』2001年
 大阪府教育委員会・朝東大阪市文化財協会 『西ノ辻遺跡第18～20次調査概要報告』1995年
 大阪府教育委員会 『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅱ』1986年
 大阪府教育委員会 『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅲ』1986年
 大阪府教育委員会 『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅳ』1986年
 朝東大阪市文化財協会 『西ノ辻遺跡第28・29次発掘調査報告』1991年
 朝東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会 『鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告』1987年
 朝東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会 『鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告』1988年
 東大阪市教育委員会・朝東大阪市文化財協会 『鬼虎川遺跡第29・30次発掘調査報告』1988年
 朝東大阪市文化財協会 『鬼虎川遺跡第31次発掘調査報告』1990年
 朝東大阪市文化財協会 『鬼虎川遺跡第32次発掘調査報告』1994年
 朝東大阪市文化財協会 『鬼虎川遺跡第33次発掘調査報告』1996年
 四桑環市教育委員会 『雁屋遺跡』1987年

- 大阪府教育委員会 『雁屋遺跡発掘調査概要』1987年
- 四条巖市教育委員会 『雁屋遺跡発掘調査概要』1994年
- 大阪府教育委員会 『雁屋遺跡発掘調査概要・Ⅳ』1999年
- 市立歴史民族資料館 『まんだ』第51号 1994年
- 門真市教育委員会 『古川遺跡』1999年
- 瓜生堂遺跡調査会 『瓜生堂遺跡』1971年
- 瓜生堂遺跡調査会 『瓜生堂遺跡資料編』1972年
- 瓜生堂遺跡調査会 『瓜生堂遺跡Ⅱ』1973年
- 瓜生堂遺跡調査会 『瓜生堂遺跡Ⅲ』1981年
- 財東大阪市文化財協会 『瓜生堂遺跡・西岩田遺跡発掘調査概要』『財東大阪市文化財協会年報1983年度』1984年
- 大阪府教育委員会・財大阪文化財センター 『瓜生堂』1980年
- 財大阪文化財センター 『巨摩・瓜生堂』1982年
- 大野 薫 『瓜生堂遺跡北東辺部の調査』『大阪府下埋蔵文化財研究会(第25回)資料』1992年
- 財東大阪市文化財協会 『瓜生堂遺跡第42次調査概報』『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要-1995年度調査(1)-』1997年
- 財大阪府文化財調査研究センター 『瓜生堂遺跡99発掘現場公開資料』2000年
- 財大阪文化財センター 『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告-第4次-』1995年
- 財大阪府文化財調査研究センター 『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告-第5次-』1996年
- 財大阪文化財センター 『山賀(その2)』1983年
- 財大阪文化財センター 『山賀(その3)』1984年
- 大阪府教育委員会・財大阪文化財センター 『山賀(その5・6)』1986年
- 財東大阪市文化財協会 『久宝寺遺跡発掘調査報告』1986年
- 財大阪文化財センター 『久宝寺南(その2)』1987年
- 財八尾市文化財調査研究会 『Ⅰ久宝寺遺跡(KH90-5)』『八尾市文化財調査研究会報告32』1991年
- 田中清美 『近畿弥生社会の墳墓』『早良王墓とその時代』1986年
- 大庭重信 『加美遺跡の発掘調査-KM95-14次-』『大阪府下埋蔵文化財研究会(第35回)資料』1997年
- 財大阪文化財センター 『亀井遺跡』1982年
- 財八尾市文化財調査研究会 『亀井遺跡』1989年
- 大阪府教育委員会・財大阪文化財センター 『亀井』1983年
- 大阪府教育委員会・財大阪文化財センター 『亀井(その2)』1986年
- 三好孝一 『八尾市亀井遺跡の検討』『大阪の弥生遺跡Ⅲ』大阪の弥生遺跡検討会 2000年
- 大阪府教育委員会・財大阪文化財センター 『城山(その1)』1986年
- 大庭磐雄 『方形周溝墓』『日本の考古学』1966年
- 大庭重信 『方形周溝墓制からみた近畿弥生時代中期の階層構造』『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究会 1999年
- 濱田延充 『瓜生堂遺跡の調査成果』『大阪の弥生遺跡Ⅰ』大阪の弥生遺跡検討会 1998年
- 福永伸哉 『弥生時代の木棺墓と社会』『考古学研究・第32巻第1号』1985年
- 藤沢真依 『近畿地方の方形周溝墓』『文化史論叢・上』1987年
- 松宮昌樹 『瓜生堂遺跡と周辺遺跡の集落変遷』『大阪の弥生遺跡Ⅰ』大阪の弥生遺跡検討会 1998年

(2) 遺物

1) 中・南河内における土師器皿の変遷

はじめに

今回の瓜生堂遺跡の調査では、弥生土器ばかりでなく各種の中世土器もまとも出土した。従来当地域の中世土器は供伴する瓦器碗によってその年代が与えられるのが常であった。しかし、今回の調査では瓦器碗ばかりでなく土師器皿も出土しており、この土師器皿についても編年の位置付けをする必要があると思われた。これまで土師器皿の編年は平安京を中心に行われ、その他の地域では等閑に伏されていることが多かったように思われる。畿内周辺部では独自に編年が組み立てられることが少なかったようである。そこで本稿では中河内地域を対象範囲を限定し、主に土師器皿の平安京における年代観や、供伴する瓦器碗の編年を基幹とし、上述したこれらの地域の土師器皿の編年の位置付けを行うことを試みたい。なお基準となる瓦器碗については主に和泉型は尾上実氏⁽¹⁾大和型は近江俊秀氏⁽²⁾、和泉型の暦年代は森島康雄氏⁽³⁾の編年観を参照する。

研究史抄

土師器皿の編年の研究はまず、平安京から大量に出土するいわゆる「京都系」から先鞭がつけられた。昭和56年、横田洋三氏は土師器皿をまず大まかに白色系と褐色系に区別したあと、A～Cのタイプに細編し、それぞれをⅠ期からⅥ期に弁別した⁽⁴⁾同年宇野隆夫氏は京都大学構内から出土する土師器皿ばかりでなく他の器種も入れた総合的な編年体系をまとめた⁽⁵⁾。またこの年、京都市高速鉄遺跡丸線内遺跡調査会により平安時代から近世に至るまでの、重層的な編年研究が明らかにされた⁽⁶⁾。翌年伊野近富氏は文献史学の立場から土師器皿の具体的な使用法を明らかにした⁽⁷⁾。昭和59年、横田氏は「Bタイプ」とそれまで呼称してきた土師器皿の更なる細分化に取り組み、その製作技法を明らかにし、それにとまなう編年観を示した⁽⁸⁾。また同年同氏はより一層詳細な土師器皿の編年案を提示した⁽⁹⁾。翌年、鋤柄俊夫氏は独自の編年案を展開した⁽¹⁰⁾。

昭和62年、伊野氏は新たな分類と編年案を示し、文献学的考察を行った⁽¹¹⁾。平成6年鋤柄氏は先に提唱した氏独自の編年案をさらに補強し、古代学協会がそれまで調査した、ほぼ全ての遺物についての新たな編年案を示した⁽¹²⁾。また平成8年、小森俊寛、上村憲章氏らにより、平安時代から近世に至るまでの土師器皿の体系的な編年が提示された⁽¹³⁾。その翌年筆者も鋤柄氏の研究を基に左京五条八町出土の土師器皿の編年を試みたことがある⁽¹⁴⁾。

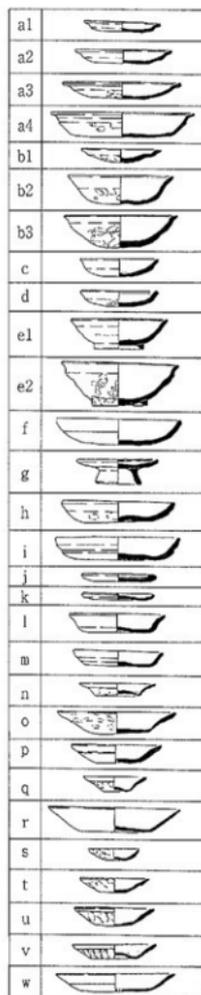
一方、平安京以外に目を向けると昭和62年中河内地域においては森島康雄氏によって神並・西ノ辻・虎伏川遺跡から出土した土器を総合的に分析し、この地域における中世土器編年の体系化を行った⁽¹⁵⁾。平成11年中井淳史氏は主として室町・戦国期の土師器皿をもちいて畿内一圏での地域色を明らかにした⁽¹⁶⁾。一方、瀬戸哲也氏等は栗栖山南墳墓群の報告に於いて土師器皿の分類を行った⁽¹⁷⁾。

形式分類

以上のように研究史を概観してきたが、本稿では編年を中心に論を進めるために、ここで土師器皿の形式分類を行う。

- a 形式・いわゆる「ての字」口縁を持つ皿である。形態によりa1～a4まで細分される。京都系、白色系である。
- b 形式・「ての字」口縁を指向するが、口縁端部をつまみ、先がとがるものである。形態によりb1、～b3に細分される。褐色系である。
- c 形式・口縁部がヨコナデによって内弯気味に立ち上がるものである。褐色系である。
- d 形式・口縁部がヨコナデによって内弯気味に立ち上がるものであるが、c形式よりもやや浅い皿状

- を呈する。褐色系である。
- e 形式・碗形で高台が付くものである。内外面にヘラミガキを施すものもある。形態により e 1、e 2 に細分される。
- f 形式・口縁部を 1～2 回に亘ってヨコナデを行い、端部は尖り気味である。大皿である。
- g 形式・土師器皿に脚部を付加させたものである。
- h 形式・口縁部に 2 段に亘ってヨコナデを施し、内湾気味に立ち上がる大皿である。褐色系である。
- i 形式・口縁部を 1～2 回に亘って強くヨコナデを施し、段をなすものである。褐色系である。
- j 形式・いわゆるコースター皿である。白色系である。
- k 形式・扁平で口縁部をあまり意識しない皿である。褐色系である。
- l 形式・やや上げ底を呈し、口縁部は「く」の字に折れ、端部をつまみあげるもの。褐色系である。
- m 形式・口縁部と底部の境が不明瞭でヨコナデを二段に亘って施すものである。
- n 形式・あげ底でいわゆるヘソ皿である。指頭圧痕を多く残す。雑な作りである。内面には「の」の字状のナデ上げ痕が残る。褐色系である。
- o 形式・口縁部を強くヨコナデし、外面に指頭圧痕を残す。口縁部は大きく開き、内面にはナデ上げ痕がある。大皿である。褐色系である。
- p 形式・口縁部が外側に向かって開き、端部をつまみ上げる中皿である。黄褐色系である。
- q 形式・底が上方に突き上がり、内面にナデ上げ痕がある。いわゆるヘソ皿であるが、n 形式とは形態的にやや異なる京都系の白色土器である。
- r 形式・大皿で口縁部は外側に開き、端部をつまみあげる。比較的丁寧に作られている。白色系である。
- s 形式・手づくねで作られた塩皿である。赤褐色系である。
- t 形式・口縁部が外側に開き指頭圧痕を残すものである。丁寧に作られている。黄褐色系である。
- u 形式・ナデにより成形されており、指頭圧痕を残すものである。内面の底部と口縁部の境に沈線が入る。黄褐色系である。
- v 形式・口縁部をヨコナデし、外面に指頭圧痕を残す。上げ底のものである。褐色系である。
- w 形式・口縁部を広くヨコナデし、指頭圧痕をもたず、丁寧に作られた大皿である。内面に沈線が入る。黄褐色系である。



第168図 土器分類図

福年
I 期

長原遺跡（その1）26トレンチ出土土器を指標とする¹⁰⁴。a 1類（1、2）はいわゆる「ての字」口縁を持つものである。平安京では鋤柄福年の「右京二条二坊S X 1」に相当する。10世紀半ばに比定されている。b 1類（3、4）は若干口縁が折れ曲がるようである。c 1類（5、6）は口縁部のヨコナデが強く端部はややつまみ上げる。b 2（10）、b 3（11）類は口縁部にヨコナデを施し、端部は尖り指頭圧痕を残す。a 2～a 4（12～14）類はこれも「ての字」口縁をもつものである。中皿と大皿がある。a 1類同様京都系で器壁は薄く、白色系である。この時期に共伴するものは黒色土器の椀（15、16、18）と皿（19）である。椀には大・中・小の3種類が存在し、15は口縁部に沈線を入れるため大和型の祖形となるだろう。これらの黒色土器は近江俊秀氏の第V段階¹⁰⁵に相当する。以上の点からこれらの土器群を10世紀中頃～後葉に位置付けたい。

II-1期

長原遺跡（その1）S K 023出土土器¹⁰⁶を指標とする。a 1類の「ての字」口縁を呈する（20）と、端部のつまみ上げが鈍くなるもの（21、22）が存在する。c 1類は口縁部のヨコナデがゆるくなり、内湾気味の（25）が出現する。また、この時期にはc類ほど深くならない浅い皿状のd類（26、27）が出現する。c、d類はその後、小皿の中心器種を担うものとなる。またこの時期a 2（33）、a 3（34）類の口縁部は「ての字」の残存形態を呈し、b 1類と同様の傾向を示す。黒色土器（35、36）はI期とあまり形式変化していない。これらの土器は鋤柄福年No. 23土壙6、近江氏の第IV段階に相当する。以上の点からこれらの土器群を10世紀後葉～11世紀初頭に位置付けたい。

II-2期

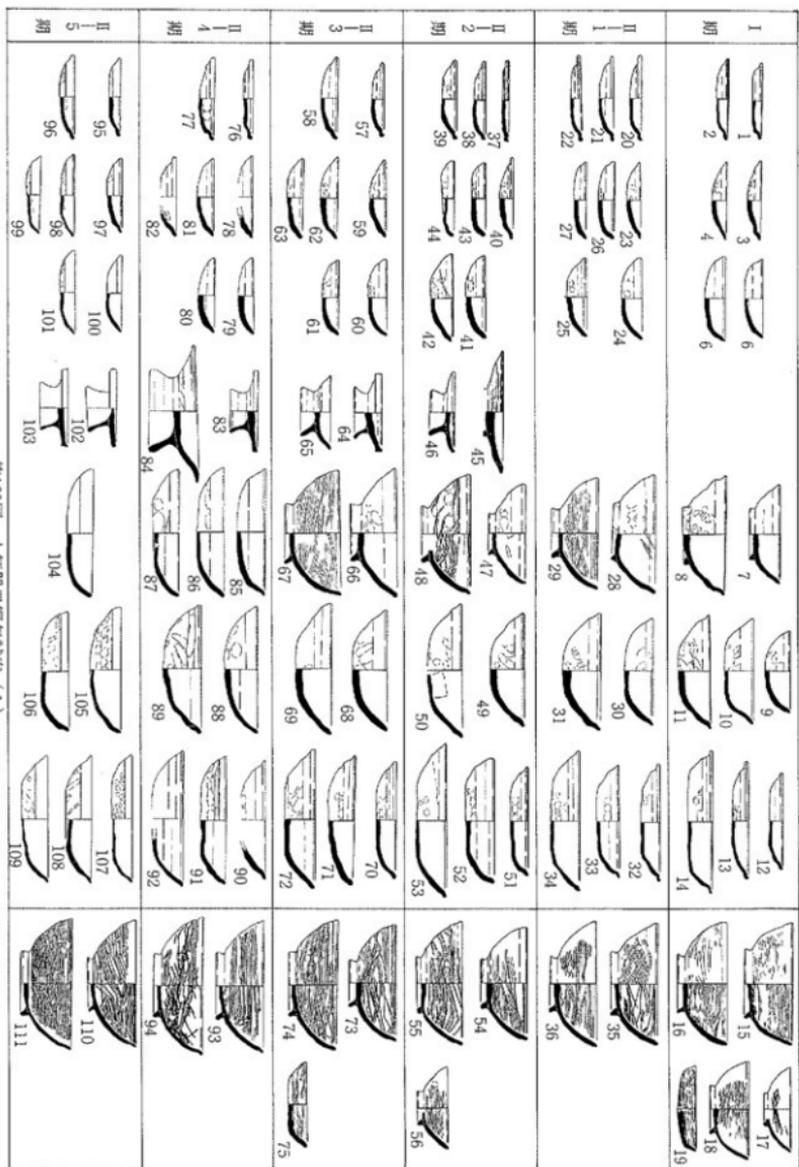
長原遺跡（その1）旧第4層出土土器を指標とする¹⁰⁷。b 1（40）類は「ての字」が退化してしまう。この時期d類には器壁の薄いもの（44）も出現する。b 2（49、50）類は端部を尖らせる。a 2～a 4（51～53）類の端部つまみ上げは鈍くなる。また、脚のついたg（45、46）類も出現する。黒色土器は小型の椀（56）がまだ存在する。これらの土器は鋤柄福年のNo. 67井戸7に相当する。以上の点からこれらの土器群は11世紀前半前葉に位置付けたい。

II-3期

長原遺跡（その1）S K 22出土土器を指標とする¹⁰⁸。a 1（57、58）、b 1（59）類はII-2期と変化は少ない。d（62、63）類は強いヨコナデが施され、外側に開く形態になる。b 2（68）、b 3（69）類は幅広い口縁部にヨコナデが施され、端部を丸くおさめる。a 2～a 4（70～72）類は「ての字」口縁がますます退化し、幅の広いヨコナデを2回に亘って施し、体部には指頭圧痕が看取される。a 1～a 4類は鋤柄福年No. 67井戸7とNo. 71井戸6の中間に相当するものと思われる。e類はこの時期を最後に消滅する。またこの時期瓦器が出現し黒色土器と供伴する和泉型の瓦器椀（74）は尾上福年I-1に相当する。黒色土器の皿はこの時期まで存在する。森島康雄氏はこの瓦器を11世紀前半以前に比定している。また黒色土器は近江氏のVI段階に相当する。ての字口縁の退化した土器器皿がみられることや、黒色土器などがまだ存在することを鑑みると、これらの土器群を11世紀前半後葉に位置付けたい。

II-4期

石川流域遺跡H J 98-3区第6層出土土器を指標とする¹⁰⁹。a 1（76、77）類は口縁端部をつまみ上げる「ての字」口縁から上方に折り曲げる受け皿状に変化する。c 1（60、61）類は底部と口縁部の境が不明瞭な皿となる。d（62、63）類は強いヨコナデによって口縁部がやや外反してのびるようになる。この傾向はf（85～87）類にもみられ、（85）のように先端が尖るもの、（86、87）のように丸くおさめるものが現れる。b 2（88）、b 3（89）類はII-3期と比べ口縁端部を丸く納めるよう



第169图 土器器皿種年式案 (1)

になる。体部の指頭圧痕は多い。a 2～a 4 (90～92) 類もヨコナデの幅が広くなり、b 2、b 3 類と同様の傾向を示す。これらの土師器皿は前段階同様、鋤柄編年 N o. 67 井戸 7 と No. 71 井戸 6 の中間に比定されるが、各器種の口縁端部の形態などから後出と思われる。また瓦器は和泉型 (93、94) が、尾上編年 I-2 期に相当する。森島氏はこれを 11 世紀後半に比定している。以上の点からこれらの土器群を 11 世紀後半に位置付けたい。

II-5 期

弥刀遺跡第 6 次調査土壇 22 出土弥生土器を指標とする⁹⁰⁾。a 1 (95、96) 類の「ての字」口縁は退化し始める。c (100、101)～d (98、99) 類はそれぞれ全体的に口縁部に幅の広いヨコナデを施し、いっそう外側に開くようになる。またこれによって c 類と d 類の区別が付きにくくなる。f (104)、b 2 (105)、b 3 (106)、a 2～a 4 (107～109) 類は前段階に比べ、形態的には変化は少ないものの、(106) のように口縁部にヨコナデによる段を持つものが現れる。これは平安京では 12 世紀前半に比定することができる。a 1～a 4 類は鋤柄編年 N o. 71 井戸 6 に相当する。また、瓦器碗は和泉型 (111) が尾上編年 I-3 期、大和型 (110) は近江編年 I-2 期に属す。森島氏は和泉型を 12 世紀初頭に比定している。以上の点からこれらの土器群を 11 世紀末～12 世紀初頭に位置付けたい。

II-6 期

鬼虎川遺跡第 25 次井戸 12⁹¹⁾、若江遺跡第 27 次井戸 2⁹²⁾、長原遺跡 (その 1) S D 210⁹³⁾、亀井北遺跡 (その 3) S K 8109⁹⁴⁾ 出土土器を指標とする。この時期までで a 1 (112、113) 類は消滅する。代わりにコースター状の j (114、115) 類が出現する。またこれまでの主要であった b (116)、c (117、118)、d (119、120) 類も調整技法や形態の差がなくなるのが特徴である。f (122～124)、h (125、126) 類は前段階と形態的に変化がない。i (127～129) 類は口縁部のヨコナデが強くなり、段を持つもの (128、129) が出現する。j 類の出現は平安京では 12 世紀前半前葉である。瓦器碗は和泉型 (131) が尾上編年 II-1 期、大和型 (130) が近江編年 I-3 期に属す。森島氏は和泉型を 12 世紀前半前葉に比定している。ここでは a 類の消滅と j 類の出現を以て一時期設定した。以上のことからこれらの土器群を 12 世紀前半前葉と位置付けたい。

III-1 期

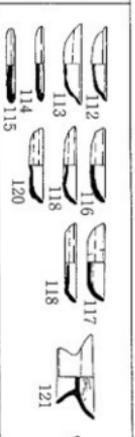
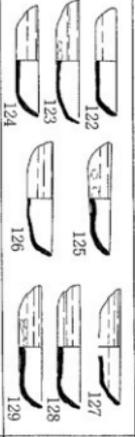
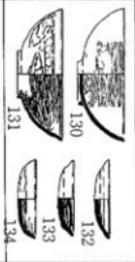
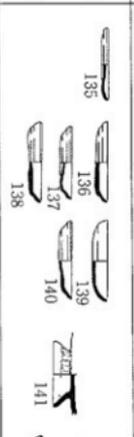
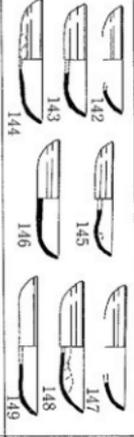
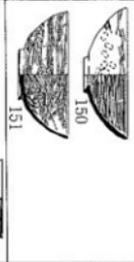
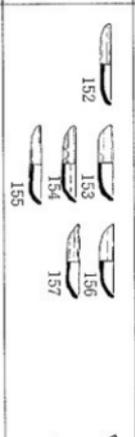
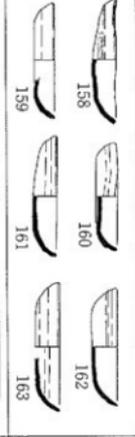
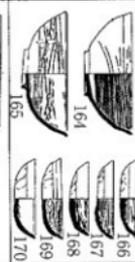
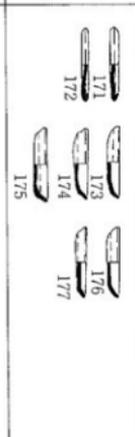
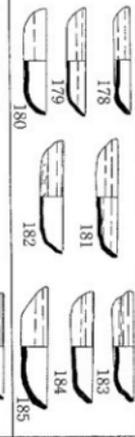
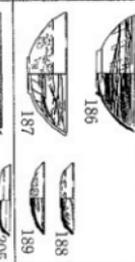
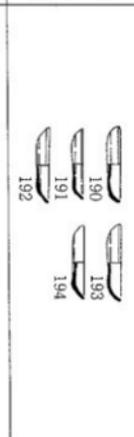
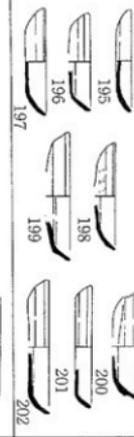
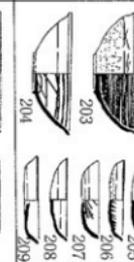
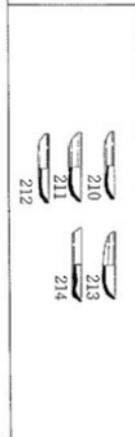
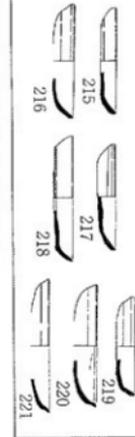
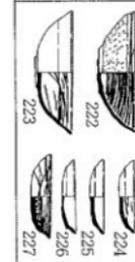
鬼塚遺跡第 13 次調査 A 地区土器溜まり⁹⁵⁾佐堂 (その 1) S E 405⁹⁶⁾ 出土土器を指標とする。この時期新たにごく浅い皿状の k 類が出現する。c 類は神並遺跡の分類から⁹⁷⁾ c 1 類 (136)、c 2 類 (137)、c 3 類 (138)、c 4 類 (139)、c 5 類 (140) に細分化される。g (141) 類はこの時期まで残る。f (142～144)、h (145、146)、i (147～149) 類は前段階と形態的に変化は見られない。瓦器碗は和泉型 (151) は尾上編年 II-2 期、大和型 (150) が近江編年 I-3 期に相当する。森島氏は和泉型を 12 世紀中葉に比定している。以上の点からこれらの土器群を 12 世紀中葉に位置付けたい。

III-2 期

亀井北遺跡 (その 3) S D 8146⁹⁸⁾ を指標とする。k (152) 類はこの時期で終わる。c (153～157) 類は前段階と形態的に変化は見られない。f (158、159)、h (160、161)、i (162、163) 類も同様で (159) や (160) のように若干上げ底になるものも現れる。瓦器碗は和泉型 (165) 尾上編年 II-3 期、大和型 (164) が近江編年 I-4 期に相当する。またこの時期瓦器皿が器種分化し、5 タイプに分類される。和泉型と大和型の実年代は若干ズレがみられるようである。森島氏は和泉型を 12 世紀後半前葉に比定している。

以上の点からこれらの土器群を 12 世紀後半前葉に位置付けたい。

III-3 期

II 6期			
I 1期			
II 2期			
III 3期			
III 4期			
III 5期			

第170圖 土師器血鬺年款案(2)

長原遺跡(その1)旧540トレンチ土器溜まり出土土器^㉑を指標とする。j(171、172)類はこの時期まで残存する。c(173~177)類は前段階と形態的に変化が少ないが、口縁部のヨコナデはやや強くなっている。f類は口縁部が直線状に伸びる(178)とやや「く」の字に外反して端部をつまみ上げる(179)と、内湾気味に立ち上がる(180)がある。h類には口縁部が2段に亘ってヨコナデされ、やや「く」の字に折れ、外面に指頭圧痕があるもの(182)が出現する。i類は平安京では12世紀後半後葉に出現する。瓦器椀は和泉型(187)が尾上編年Ⅲ-1期、大和型(186)が近江編年Ⅰ-5期に相当する。森島氏は和泉型を12世紀後半後葉に比定している。以上のことからこれらの土器群を12世紀後半後葉に位置付けたい。

Ⅲ-4期

神並遺跡 I S E 02 出土土器^㉒を指標とする。c(190~194)類は前段階と形態的な変化が少ない。f(195~197)、h(198、199)、i(200~202)類とも前段階と大差ないが、やや小型な(196、198)が出現している。(200)は口縁部のヨコナデが強くなっている。瓦器椀は和泉型(204)が尾上編年Ⅲ-2期、大和型(203)が近江編年Ⅰ-6期に相当する。森島氏は和泉型を12世紀末~13世紀初頭に比定している。以上のことからこれらの土器群を12世紀末~13世紀初頭に位置付けたい。瓜生堂廃寺第1次基壇整地土がこの時期に相当する。

Ⅲ-5期

若江遺跡第29次調査土器溜まり、^㉓神並遺跡 I S K 22^㉓出土土器を指標とする。c(210~214)類はやはり前段階と形態的な変化は少ない。f(215、216)、h(217、218)、i(219~221)類も形態的には前段階と大きな変化は見られないが、全体的に小型化し、大皿というより中皿が多くなる。口縁部がヨコナデにより立ち上がり端部をつまみ上げる。瓦器椀は和泉型(223)が尾上編年Ⅲ-3期、大和型(222)が近江編年Ⅰ-6期に相当する。森島氏は和泉型を13世紀前半中葉に比定している。瓜生堂廃寺第1次基壇周溝がこの時期に相当する。以上のことからこれらの土器群を13世紀前半中葉に位置付けたい。

Ⅲ-6期

矢作遺跡 S D 14 出土土器^㉔を指標とする。c(230~234)類にはやはり前段階と形態的な変化は見られないが、(230)のようにやや上げ底気味になるものも現れる。f(235、236)、h(237、238)類も前段階と変化はないが、i(239~241)類は口縁部がやや内湾して立ち上がり、端部をつまみ上げるようになる。両者の形態的な差異はほとんど無くなる。瓦器椀は和泉型(242)が尾上編年Ⅳ-1期に相当する。森島氏はこの形式を13世紀前半後葉に位置付けている。以上のことからこれらの土器群を13世紀前半後葉に位置付けたい。瓜生堂廃寺第2次基壇整地土がこの時期に相当する。

Ⅳ-1期

水走遺跡第2次鬼虎川塚遺跡第20次No. 4 トレンチ S K 17 出土土器^㉕、河内寺跡第5次 S K 3 出土土器、^㉖を指標とする。コースター型の j(244)類はこの時期まで残存するが、口縁部をやや内側に折り曲げ、やや上げ底となる。c(246~250)類はやはり前段階と形態的な変化は少ないが、上げ底気味となる。f(251~253)、h(254、255)類も前段階と変化はない。h類は口縁部のヨコナデが一層強くなり端部を内側に折り曲げ、上げ底となる。またこの時期、口縁部をヨコナデにより「く」の字に外反させ、端部をつまみ上げ、上げ底となる。l(256)類と、口縁部の中程にヨコナデによる段を持ち、端部が直線状に伸びる i 類は既に出現している。瓦器椀は和泉型(259、260)が尾上編年Ⅳ-2期、大和型(261)が近江編年Ⅱ-1期に相当する。森島氏は和泉型を13世紀後半前葉に比定している。以上の点からこれらの土器群を13世紀後半前葉に位置付けたい。瓜生堂廃寺周溝はこの時

III 6 期	228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243	242 243
IV 1 期	244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261	259 260 261
IV 2 期	262 263 264 265 266 267 268 269 270 271	271
IV 3 期	272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282	281 282
V 1 期	283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294	
V 2 期	295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305	

第171圖 土師器Ⅲ編年試案(3)

期に掘削され、15世紀頃まで存在する。

IV-2期

西ノ辻遺跡第9次溝21⁽⁶⁶⁾、同土壙1⁽⁶⁷⁾出土土器を指標とする。c(262~266)類は口縁部を外側に開き、一層浅く小型になる傾向を示す。この時期f、h、i類は少なくなり、新たに口縁部と底部の境が不明瞭なm類(267)が出現する。l類(270)は口縁部につまみなくなり、外側に伸びる様相を示す。瓦器碗は和泉型(271)が尾上編年IV-3期に相当する。森島氏は和泉型を13世紀後半後葉に比定している。以上の点からこれらの土器群を13世紀後半後葉に位置付けたい。

IV-3期

西ノ辻遺跡第9次土壙1⁽⁶⁸⁾出土土器を指標とする。c類(272~276)は小型化し、口縁端部に強いヨコナデを施し、尖り気味になる。f類も一層小型化する。l(280)類も口縁部に強いヨコナデを施し、外反するようになる。瓦器碗は和泉型(282)が尾上編年IV-4期、大和型(281)が近江編年II-2期に相当する。森島氏は和泉型を14世紀前半前葉に比定している。以上の点からこれらの土器群を14世紀前半前葉に位置付けたい。

V-1期

水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡第20次調査No.4トレンチ包含層⁽⁶⁹⁾出土土器を指標とする。この時期いわゆるヘソ皿のn類(284、294)が出現し、新たな器種として加わる。しかし前時代的なc類も未だに存在し、この時期を境に土師器皿の様相が変化するといえる。なおf(291)、l(290)類は口縁部のヨコナデが一層強くなり、外反して開くようになる。n類は平安京では14世紀の前葉には出現している。瓦器碗が消滅しているため、年代決定は難しいが、前後の時間的な様相から考えて、これらの土器群を一応ここでは14世紀前半前葉に位置付けたい。

V-2期

水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡20次調査No.4トレンチSK14出土土器⁽⁷⁰⁾を指標とする。この時期の資料は非常に少ない。c(297~300)類は数を減らし、主体はn(296、305)類に変化してくる。中皿も同様の傾向にある。また、口縁部を水平近くまで外反させ、端部をつまみ上げるo(304)類も出現する。o類は平安京では14世紀末に出現する器種であり、この土器群の中では新しい様相を示す。以上のことからこれらの土器群を14世紀後半後葉に位置付けたい。

V-3期

石川流域KT92-1、SX01⁽⁷¹⁾出土土器を指標とする。c類(308、309)はヘソ皿に近くなる。i(310)、l類もn(312、313)類に変化し、形態差があまりなくなり、指頭圧痕を多く残すようになり、上げ底気味となる。瓦器碗は天野山金剛寺遺跡⁽⁷²⁾の編年ではl類に分類できよう。以上の点からこれらの土器群を15世紀前葉に位置付けたい。大溝1はこの時期に掘削されたと考えられる。

V-4期

客坊山遺跡第2次D地区土器溜まり⁽⁷³⁾出土土器を指標とする。この時期、京都系の白色土器であるq(316、317)類が出現する。ヘソ皿である。q類は平安京では14世紀の前葉には出現しており、中南海内地域とは様相を異にする。またc(318~321)類はこの時期まで残存し、口縁部と底部の境が無くなくなり、一種類のみとなる。n類(324~326)も口縁部に強いヨコナデを施す指頭圧痕をのこす。また、口縁部が大きく開き、端部をつまみ上げる。r類が出現し、これ以降口径を大きくし大皿化していく。瓦器碗は最終末となりこれ以降は見られなくなる。この時期には最終末の瓦器が伴う。以上のことからこれらの土器群を15世紀前葉から中葉に位置付けておきたい。

V-5期

Y 3 期	 	 	 	 	
Y 4 期	 	 	 	 	
Y 5 期		 	 	 	
Y 6 期	 	 	 		
VI 1 期		 	 		
VI 2 期	 	 	 	 	

第174圖 土師器血罐年試案(4)

若江遺跡第44次落込み1⁽⁴⁷⁾出土土器を指標とする。この時期 q (331) 類は指頭圧痕を外面に残す。c (335、336) 類はまだ残存している。n (332~334、339~341) 類は中皿 (339~341) が口縁部のヨコナデを一層強いものとする。また o (342)、r (343、344) 類も口縁部が外に向かって開くようになる。以上の点からこれらの土器は n、o 類の形態などから15世紀中葉に位置付けたい。

V-6期

若江遺跡第38次調査出土土器⁽⁴⁸⁾を指標とする。小型器種は n (347~349)、q (345、346) 類となる。中皿・大皿も v 類と r (353) 類のみとなる。この時期に新しく v (350~352) 類が出現する。外面にヨコナデを施し、指頭圧痕を残す。上げ底である。土師器皿が中世的な様相を示すのはこの時期までである。これらの土器群は伴する瓦質土器などから15世紀後半に位置付けられる。

VI-1期

弥刀遺跡第6次調査溝12出土土器⁽⁴⁹⁾、古市遺跡群ⅢSE-01⁽⁵⁰⁾を指標とする。小型器種は n 類 (358) の他に手づくねで作られていっそう小型の s (360) 類や、やや丸底で丁寧なナデによって成形される t (355~357) 類が出現する。また r (361~363) 類は口縁端部を丸くおさめるものとなり、全体的な器種が変化を遂げる。これらの土器は平安京では16世紀前半に出現することから、同時期に位置付けておきたい。

VI-2期

若江遺跡第38次調査小堀出土土器⁽⁵¹⁾を指標とする。この時期新たに中皿の u (371~373) 類が出現する。内面はそれまでのナデ上げ痕から沈線へと変化する。t (366~368) 類同様丁寧なナデによって成形され、口縁部と底部の境が不明瞭である。またこの時期 o 類の他に口縁部をヨコナデし、指頭圧痕をもたない w 類が出現する。w 類の内面は t 類同様沈線が入る。他の器種は前段階とは変化が見られない。n 類はこの時期まで残る。これらの土器群は伴する。他の土器や陶磁器から16世紀後半に位置付けておきたい。

まとめ

これまで10世紀中葉から16世紀後半までの土師器皿の変遷を見てきたが、ここではI~IV期までの設定基準となった器種組成について簡単に述べておく。

まずI期は a 1~a 4 類などの「ての字」口縁が存在する時期である。

II期はその「ての字」口縁が崩壊していく過程である。III期はコースター型の j 類が出現し、ての字口縁が消滅する。c 類が細分化される。しかし c 類はその後のこの時期を通じてどの器種も形態的に変化はしない。また、c 類のような小型器種ばかりではなく、a 2~a 4、b 2、b 3、f 類も同様の傾向にある。III期は土師器皿の変化の乏しい時期である。

III期は全器種にわたって口縁部に強いヨコナデを1、2回施すことにより成形する。

IV期は j 類が消滅し、c 類が前段階に比べ比較的浅い傾向を示す。また a 2~a 4、b 2、b 3、f 類の他に h、i、l 類が出現する。口縁部のヨコナデは一層強くなり各器種とも外側に開くようになる。

V期は n 類のような雑なつくりのヘソ皿や上げ底になる器種が出現する。また、口縁部を水平近くまで折り曲げ端部をつまみ上げる o 類が出現するのも特徴である。o 類は中南河内では

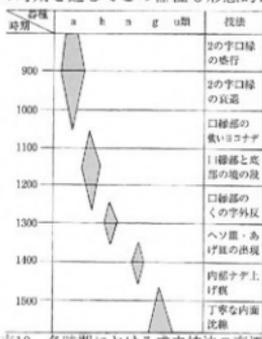


表13 各時期における成立技法の変遷

近世になっても存在する器種である。

VI期はそれまでになかった s、t、u 類がそれまでの全ての器種に変わって登場する時期である。土師器皿は近世的な様相を示している。以上のことを模式化すると表7のようになる。10世紀後半までは「ての字」口縁の盛行、その後、11世紀前半～12世紀前半までの間に退化してしまう。12世紀後半～13世紀前半にかけて一様に口縁部に強いヨコナデを施すようになり、それが13世紀後半～14世紀前半にかけて口縁部が「くの字」に外反するようになる。その後平安京より内面にナデ上げ痕があるヘソ皿、上げ底の器種が入り、この地域も平安京と同様の変化を遂げる。しかし15世紀後半にはそれまでの器種は少なくなり、ナデ上げ痕から内面沈線へと変化し、丁寧なナデ成形による近世的な土器群が出現するといえる。

おわりに

本稿では中・南河内における土師器皿の編年を試みたが、十分に目的を達したとは言えないであろう。この地域においては年代決定の基準となるのは瓦器であることは今も変わらない。今回の編年をしていく上で困難を極めたのは形態的变化のない13、14世紀の土器群と瓦器が消滅した15世紀以降の土器群であった。特に14世紀後半の良好な一括資料の中で管見に及ぶものは少数であった。今後資料の増加を待って再考を加えてみたい。

注

- 1) 尾上 実「南河内の瓦器碗」『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』1983年
- 2) 近江俊秀「大和型瓦器碗の編年と実年代の再検討」『古代文化』第43巻第10号 1991年
- 3) 森島康雄「畿内産瓦器碗の併行関係と暦年代」『大和の中世土器』Ⅱ 大和古中近研究会 1992年
- 4) 横田洋三「出土土師器編年試案」『平安京跡研究調査報告』第5輯(財)古代学協会 1981年
- 5) 宇野隆夫他「京都埋蔵文化財調査報告」Ⅱ 京都大学埋蔵文化財研究センター 1981年
- 6) 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅲ 1981年
- 7) 伊野近富「葉碗」「薬皿」考『京都府埋蔵文化財情報』第5号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年
- 8) 横田洋三「付論 土師器皿(Bタイプ系)の器形、規格の変化と製作技術について」『平安京跡研究調査報告』第12輯(財)古代学協会 1984年
- 9) 横田洋三「土師器皿の分類と編年観」『平安京左京四条三坊十三町』(財)古代学協会 1984年
- 10) 鶴柄俊夫「畿内における古代末から中世の土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 日本中世土器研究会 1985年
- 11) 伊野近富「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集』第1集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年
- 12) 鶴柄俊夫「平安京出土土師器の諸問題」『平安京出土土器の研究』(財)古代学協会 1994年
- 13) 小森俊寛、上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号(財)京都府埋蔵文化財調査研究所 1996年
- 14) 拙稿「右京五条三坊八町出土の中近世土器について」『平安京左京五条三坊八町』(財)古代学協会 1997年
- 15) 森島康雄「西ノ辻遺跡周辺における中世土器の編年」『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅳ』大阪府教育委員会 1987年
- 16) 中井淳史「室町・戦国期における近畿地方の土師器皿」『中近世土器の基礎研究』XⅣ 日本中世土器研究会 1999年

- 17) 瀬戸哲也他『栗栖山南墳墓群』 朝大阪府文化財調査研究センター 2000年
- 18) 畑 暢子他『河内平野遺跡群の動態Ⅲ』南遺跡群、古墳時代中期以降編 大阪府教育委員会 朝大阪府文化財調査研究センター 2000年
- 19) 近江俊秀、岡田清一「河内中南部における古代末期から中世土器の諸問題」『八尾市文化財紀要』4 八尾市教育委員会文化財室 1989年（以下、黒色土器についても近江氏の編年を用いる。）
- 20) 注18に同じ
- 21) 注18に同じ
- 22) 注18に同じ
- 23) 上田 睦「H J 98-3区」『石川流域遺跡群発掘調査報告』X V 藤井寺市教育委員会 2000
- 24) 才原金弘他「弥刀遺跡第6次調査報告書」『埋蔵文化財発掘調査概報集-1998年度(2)-』 朝東大阪府文化財協会 1999年
- 25) 福永信雄『鬼虎川遺跡第25次発掘調査報告』朝東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会 1998年
- 26) 才原金弘『若江遺跡第27次発掘調査報告書』朝東大阪市文化財協会 1988年
- 27) 注18に同じ
- 28) 注18に同じ
- 29) 福永信雄『鬼塚遺跡第13次(遺物編)15次発掘調査報告』朝東大阪市文化財協会 1999年
- 30) 注18に同じ。
- 31) 下村晴文『神並遺跡』I 東大阪市教育委員会朝東大阪市文化財協会 1986年
- 32) 注18に同じ。
- 33) 注18に同じ。
- 34) 注31に同じ。
- 35) 上野利明他『若江遺跡第29次発掘調査報告』朝東大阪市文化財協会 1989年
- 36) 注31に同じ。
- 37) 原田昌則「I矢作遺跡(第1次調査)発掘調査概報報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要』平成元年度 朝八尾市文化財調査研究会 1989年
- 38) 才原金弘他『水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡第20次発掘調査報告』朝東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会 1992年
- 39) 菅原草太「河内寺跡第5次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報集』1998年度(2) 朝東大阪市文化財協会 1999年
- 40) 福永信雄『西ノ辻遺跡第9次発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会 1996年
- 41) 注40に同じ。
- 42) 注38に同じ。
- 43) 注38に同じ。
- 44) 新開義夫「K T R 92-1」『石川流域遺跡群発掘調査報告』藤井寺市教育委員会
- 45) 李本隆裕・才原金弘『客坊山遺跡群第2次発掘調査報告書』(財)東大阪市文化財協会 1998年
- 46) 尾谷雅彦他『天野山金剛寺遺跡』河内長野市遺跡調査会 1994年
- 47) 才原金弘『若江遺跡第44次発掘調査報告書』(財)東大阪市文化財協会 1993年
- 48) 福永信雄『若江遺跡第38次発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会 1993年

49) 註24に同じ。

50) 笠井敏光他『古市古墳群』Ⅲ 羽曳野市教育委員会 1982年

51) 註47に同じ。

52) 今回編年を試みた13世紀代の土師器皿の小皿は13世紀の中では形態的な変化が追えないものであったが、古い様相を示すものは全体的に厚く、端部に面を持つものから薄く、端部を丸く結めるものに変化するという特徴がある。なお中、大皿は14世紀に近づくにつれて、口縁端部を強くヨコナデし、やがて「くの字」に折れ曲がる様になる。また13世紀代の土師器皿の暦年代については森島康雄氏による論考がある。その中で森島氏は伊野編年と小森・上村編年に誤差があることを指摘し、瓦器椀による年代から内膳町遺跡の新たな年代観を示した。

一方、14世紀後半の資料は管見に及ぶものは少なく、また瓦器椀が南河内の中で一部の地域に残ることから各報告者によって若干編年観が異なることも問題となろう。終末期の瓦器椀がどの地域でどのくらい残るかは今後の課題である。また14世紀後半の資料は少ないことから遺構の数が減ることも考えられる。さらに筆者のV期に京都系のヘソ皿や大皿が出現するが、なぜこの時期に河内において京都形の土師器皿が出現するのか等問題が残った。また河内の土師器皿を編年する際には瓦質土器や土師質羽釜などの年代のクロスチェックも必要であると痛感した。今後はこれらの点に留意し、改めて考察を加えてみたい。なおこれらの問題点については森島康雄から数々の御教示を得た。

森島康雄 「瓦器椀編年からみた京都系土師器皿の年代観」 『中世土器研究論集』 中世土器研究会 2001年

補記

これまで述べて来た事実記載と考察については下記の文献を参考にした。

近江俊秀「大和型瓦器椀の編年と実年代の再検討」『古代文化』第43巻第10号 (財)古代学協会 1991年

森島康雄「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ 日本中世土器研究会 1990年

横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4九州歴史資料館 1978年

森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館 1986年

2) 庄内期の土器について

1. はじめに

B地区を中心にC・D地区においても、弥生時代後期末から庄内期にかけての土器が検出された。B地区の土器が出土した土器だまり1と仮称する遺構は、弥生時代中期後半に起こった南海地震に伴って生じた地滑りの後に行われた祭祀遺構の1つである。土器だまり1は地震の断層により生じた窪地の肩口付近に存在し、庄内期の地鎮に伴うと考えられる配石遺構の2カ所を検出した付近に認められた配石に伴う供献土器の集積である。これらの配石遺構には泉南地方や紀ノ川以南の海南市付近などの河川や海岸から採取されたとされる石材が使用されていた。

土器だまり1の層位関係では、黒色粘土層（以下上層）と灰色粘土層（以下下層）の2層からなることが確認できた。土器だまり1上層直上に堆積した灰色粘土層からは、同様の祭祀に用いられたと考えられる手焙り形土器が出土している。また土器だまり1下層直下である砂層からは第V様式に相当する完形を多く含む弥生土器が狭い範囲からまとまり出土している¹⁾（土器だまり2）。また畿内第III様式後半から畿内第IV様式前半に相当する弥生土器も下層より出土している。よって層位から土器だまり1は、弥生時代後期末から庄内期に相当することは明白である。以下、2時期にわたる土器群を器種ごとに類れる形態の相違から分類を行いたい。

2. 型式分類（第175～177図）

【広口壺】

広口壺 a 下層（1）、上層（15～17）

短い筒状の頸部から外反する口縁部をもつ。口縁端部に面をもつ（1・15・16）と、上下に拡張する（17）がある。（1・16）は体部から頸部にかけての屈曲が強く、内面体部上半に粘土紐接合痕が見られる。（1）は肩部に最大径をもつが、（16）は体部中央部に最大径をもち、突出する平底をもつ。（17）は体部から頸部にかけて緩やかに外反し、体部は緩やかなカーブを描く、内面体部下半に粘土紐接合痕が見られるやや突出した平底である。外面調整に、縦方向のヘラミガキを施す（1・17）と、タタキ後粗いハケ調整を施す（16）がある。

広口壺 b 下層（2）、上層（18）

短い筒状の頸部から外反する口縁をもち、口縁端部が丸く終わる（2）と、面をもつ（18）がある。（2）は体部下半部に最大径をもち、やや突出した平底をもつ。（18）においては、頸部に粘土紐接合痕が2カ所見られることから少なくとも2回の粘土の継ぎ足しが行われた。外面調整は、頸部から体部にかけて丁寧な縦方向のヘラミガキを施し、接合痕を消そうとする意図が窺える。

広口壺 c 上層（19）

頸部は短く立ち上がり、やや内弯しながら外反する口縁部をもつ。口縁端部は上下に拡張する。頸部外面には櫛描波状文が見られ、内面にはハケ調整が施されている。

広口壺 d 上層（20・21）

口縁部は体部から緩やかに外反し、口縁端部が下方へ拡張し、凹線（20）や波状文と円形浮文（21）などの加飾が見られる。外面調整は、縦方向のヘラミガキを施す。

【長頸壺】

長頸壺 a 下層（3）

頸部が外上方に伸び、口縁端部をつまみ上げ気味にヨコナデした「受口状」口縁で、口縁端部に面をもつ。外面調整に、タタキが残る、内外面共に粘土紐接合痕が顕著に残る。体部形態は体部中央部に最大径をもつ扁平な球形である。

長頸壺 b 下層 (4)

頸部が外上方に伸びる。口縁端部は外反して丸く終わる。内外面共にハケ調整が施され、頸部には粘土紐接合痕が、顕著に残る。

【無頸壺】

無頸壺 a 下層 (5)

口縁部を指押さえによって成形し、立ち上がり気味に終わる。体部は中央部に最大径をもつ球形で、突出する底部をもつ。粘土紐接合痕が体部中央部から上半部にかけて目立つ。調整は内外面共にハケ調整を施すが、外面にはタタキが残る。また底部内面にはクモの巣状ハケが見られる。

【直口壺】

直口壺 a 上層 (22)

直口する口縁部をもち、口縁端部は丸く終わる。体部下半に最大径をもち、突出しない平底をもつ。調整は、内面はヘラケズリが施され、外面はハケ調整が見られる。

【短頸壺】

短頸壺 a 上層 (23)

口縁部が甕のように内弯しながら「く」の字に外反し、口縁端部は上下に拡張する。体部は球形で、やや突出する平底をもつ。調整は、内面はハケ調整が施され、底部にはクモの巣状ハケが見られる。外面は縦方向のヘラミガキが施されている。

【鉢】

鉢 a 下層 (6・7)、上層 (28)

口縁部が外反し、「受口状」の口縁をもつ。体部は浅い碗形で、突出する平底をもつ(6・7)、(28)は体部下半部に丸みをもつ。調整は、外面にタタキを残す(6)と、内外面共にヘラミガキを施す(7)がある。

鉢 b 上層 (24・25)

口縁端部に粘土の折り返しが見られ、甕の下半部と共通する碗形の体部をもつ。突出する平底(24)と、指押さえによる成形を施した突出しない平底(25)がある。内面はハケ調整が施される。

鉢 c 上層 (26)

丸い碗形の体部で、口縁部が内弯し、口縁端部に面をもつ。突出しない平底をもち、内外面共に縦方向のヘラミガキによる調整が施される。

鉢 d 上層 (27)

丸い碗形の体部で、口縁部は外反し、口縁端部を指押さえによって成形する。他の鉢と比べると粗雑である。内面調整で、ヘラケズリを施す。

【甕】

甕 a 下層 (8~20) 上層 (29・30)

口縁部が「く」の字に外反し、「受口状」の口縁をもつ。口縁端部は上方に拡張する。体部上半部に最大径をもち、底部はドーナツ状底(8)や突出しない平底(9・30)がある。調整は、内面は主にハケ調整で、外面にはタタキが残る。特に(9)は剥離痕にもタタキが見られることから叩き出して後粘土紐を接合する成形であることが明確である。しかし、粘土紐を外側に巻き足した方法は北島池下層では見られず、模倣した可能性が高い。

甕 b 下層 (11・12)、上層 (31~34)

口縁部が「く」の字に外反する。口縁端部が丸く終わる(11・12)と、端部が下方に拡張する(32・

33)がある。体部のやや上半部に最大径をもち、底部は突出する平底(31)と、やや突出する平底(12)がある。調整は、内面はハケ調整が施され、底部にはクモの巣状ハケが見られる(12・31)。外面にはタタキが残る(11・12・31~33)と、ハケ調整のみの(34)がある。

甕c 下層(13・14)、上層(35)

口縁部は直立して後、外反する。口縁端部が丸く終わる(14)と、面をもつ(13・35)がある。口縁部に最大径をもつ(13)と、体部に最大径をもつ(14・34)がある。

甕d 上層(36)

口縁部がやや内湾しながら外反する。口縁端部は丸く終わる。外面調整にタタキが施され、粘土紐接合痕が目立つ。

甕e 上層(38・39)

口縁部は「く」の字に屈曲し、口縁端部は丸く終わる(38)、下方に拡張する(39)がある。調整は、内面はヘラケズリで、外面はハケ調整が主体となり、タタキはハケによって消される傾向がみられる。

甕f 上層(40)

口縁部はやや内湾しながら外反し、口縁端部に面をもつ。調整は、内面はヘラケズリで、外面はハケ調整が施される。底部はドーナツ状底であるが、重心がずれているため掘えることができない。このことから、すでに突出した甕と同様の方法によって使用されていたことが推測される。

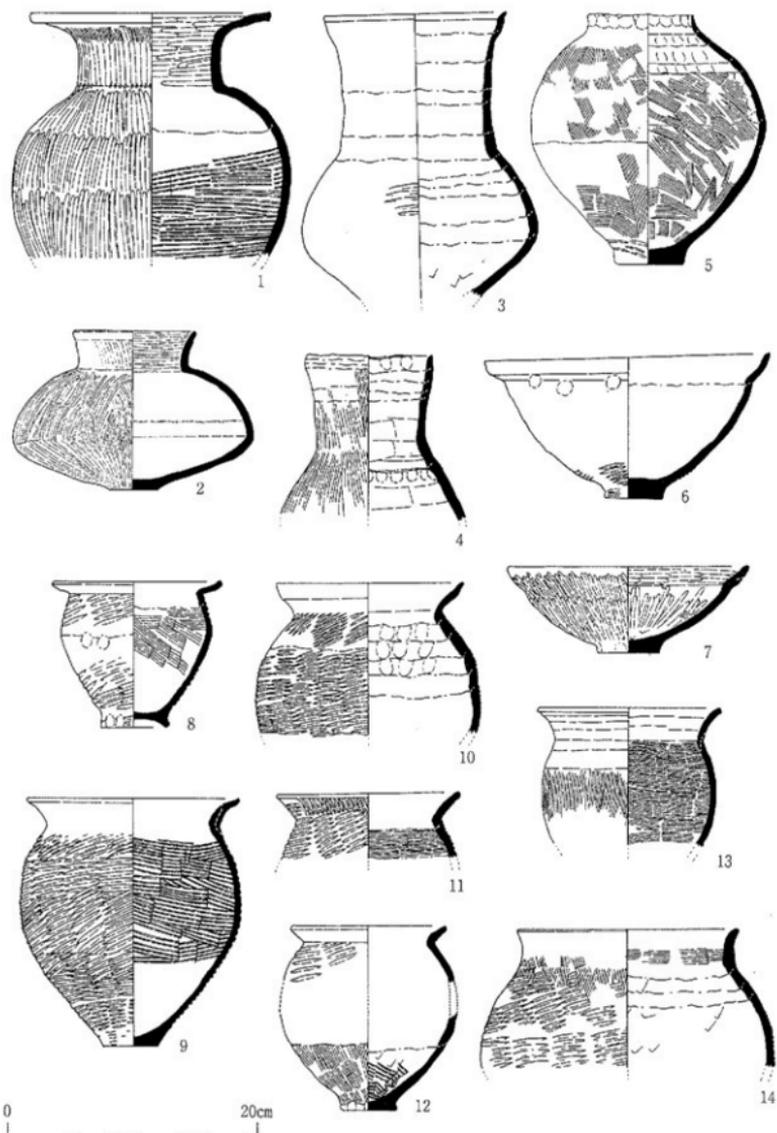
【製塩土器】

製塩土器 a 上層(41・42)

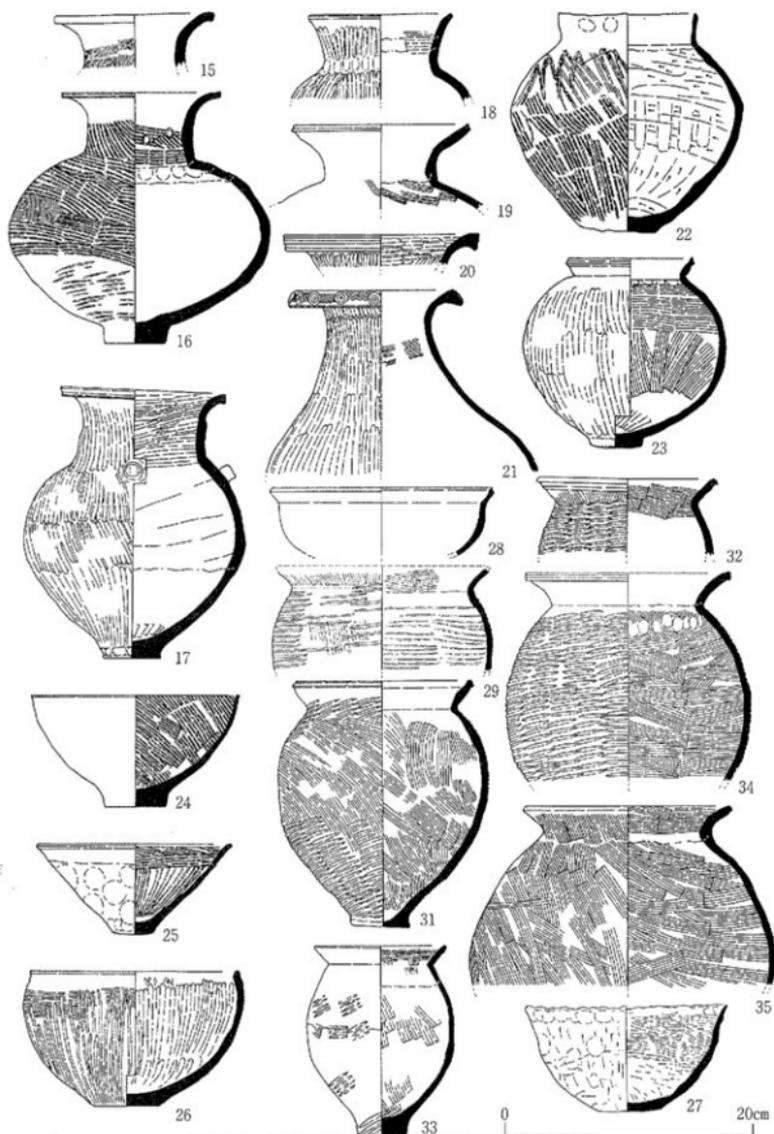
高杯の形であるが2次焼成を受けていることや外面にタタキが見られることから製塩土器と考えられる。坏部は皿状で口縁部は緩やかに外反し、口縁端部に面を持つ。内面調整は、粗い横方向のハケ調整が施される。成形技法を見ると、脚部に粘土紐接合痕が見られ、(42)には指押さえの痕跡が残ることから、粘土紐を輪積みにして脚部を作る。また脚部上端には円盤充填を行う手法が依然として用いられている。

以上から、上層と下層出土土器には、胎土の判別可能な生駒西麓産の比率や器種構成・形態に相違がみられた。まず胎土の角閃石の有無と茶褐色を呈する色調から、生駒西麓産と他地域産(ここでは在地土器は判別が不可能であるため他地域産に含み、生駒西麓産以外は全て他地域産とする)の比率を見てみると、器種全体においては、下層では生駒西麓産13点、他地域産2点が確認でき、生駒西麓産の比率は87%である。上層では生駒西麓産11点、他地域産27点が確認でき、生駒西麓産の比率は29%を示し、器種別においても、全ての器種において、下層では生駒西麓産の数量が上回り(表15)、上層では他地域産の数量が上回る(表14)。次に器種の組成(表16)やその割合(表17~19)をみると、甕において外面調整にハケ調整が施され、タタキが残らない土器の比率が下層(43%)よりも上層(83%)の方が高くなり、器壁を薄くするために内面調整にヘラケズリを施す土器は、上層でのみ確認できた。全ての器種において、下層よりも上層の方が器種や形態の種類が多く見られた。内面調整がヘラケズリを施している土器について統計を取ってみたが、上層からは7点、下層出土の土器からは出土しなかった。このことから、上層と下層には若干の型式・時間差が生じていることが推測できる。

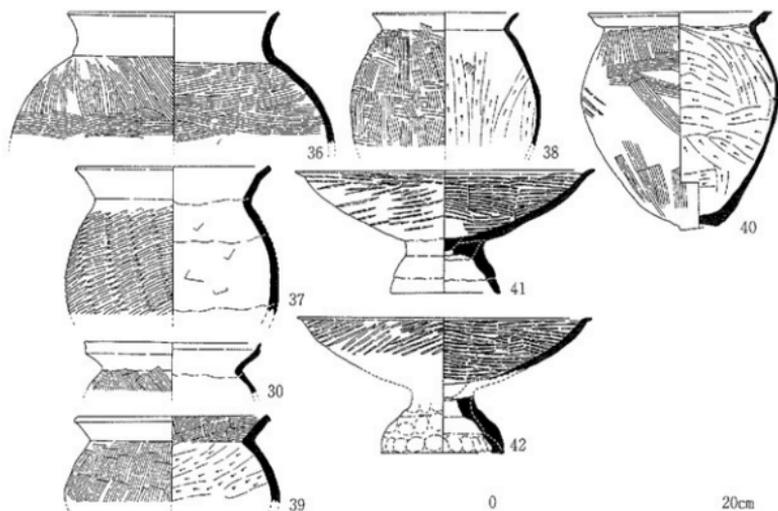
これらのことをふまえて考えると、特に上層の時期においては生駒西麓産の影響を直接受けず、独自ルートで土器を搬入、もしくは在地で生産していたことが窺える。また上層では庄内産の影響を受けたと思われる内面調整をヘラケズリした他地域産土器が71%とその比率が高いことから、庄内期初頭では少なくとも瓜生遺跡においては庄内式土器が生駒山麓から伝わった可能性は低いと考えられる。



第173図 土器だまり1（下層）出土土器実測図



第174図 土器だまり1 (上層) 出土土器実測図 (1)



第175図 土器だまり1 (上層) 出土土器実測図(2)

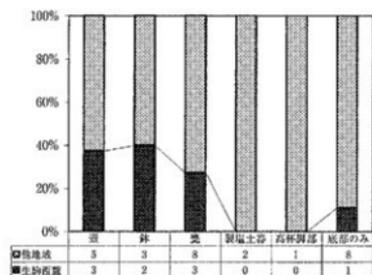


表14 土器だまり1 (上層)における器種別胎土比率

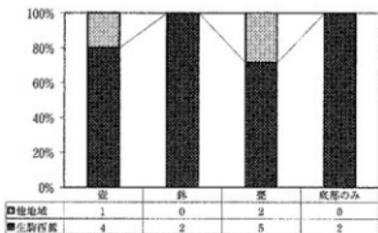


表15 土器だまり1 (下層)における器種別胎土比率

以上の様な特徴から、既発表である米田敏幸氏の庄内式土器の型式編年の中に位置付けるとすると、上層は庄内式Iに併行すると考えられるが、細かな特徴の違いは、地域差によって生じる差異であると思われ、一概に併行期であるとは断定出来ない。下層は層位関係から上層よりも時期が古いことは確定しているので弥生時代後期末に併行すると考えられる。次に中河内の他遺跡の同時期資料との比較検討を行い、型式的年代の位置付けを確定したい。

遺跡名	広口壺				長頸壺		無頸壺		直口壺				鉢		甕					
	a	b	c	d	a	b	a	a	a	b	c	d	a	b	c	d	e	f		
土器だまり1(上層)	3	1	1	2				1	1	2	1	1	2	4	1	1	2	1		
土器だまり1(下層)	1	1			1	1	1			2							3	2		
成法寺遺跡SW1(上層)	2	1	1											2	2			3		
成法寺遺跡SW2(下層)	2		1											2	3		1			
八尾南遺跡SE10										2				1	2					
馬場川遺跡(井戸1・2)	2					2	4	2					3	5			7	6		

表16 各遺跡における器種の組成

土器だまり1(下層)

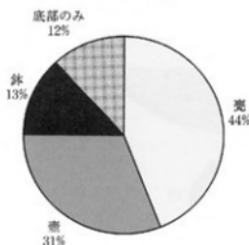


表17-1 土器だまり1(下層)における器種の構成比

土器だまり1(上層)

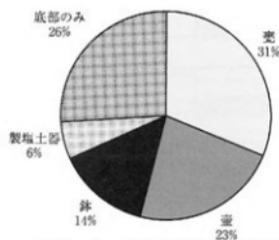
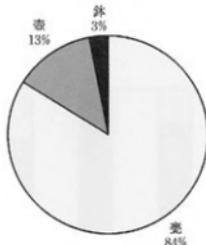


表17-2 土器だまり1(上層)における器種の構成比

成法寺遺跡SW1



成法寺遺跡SW2

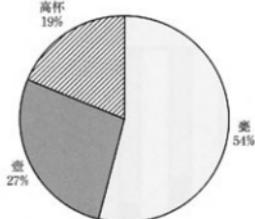
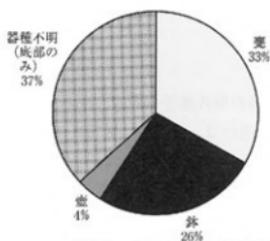


表18 成法寺遺跡SW1・2における器種の構成比

八尾南遺跡SE10



馬場川遺跡(井戸1・2)

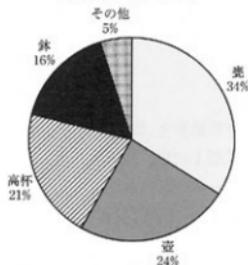


表19 八尾南遺跡SE10馬場川遺跡井戸1・2における器種の構成比

3. 他遺跡との比較検討(表14~19)

ここで比較対象とする他遺跡は、器種構成に最も類似点が多く見られる馬場川遺跡井戸1・2³⁾との併行期と考えられている八尾南遺跡SE10³⁾、成法寺遺跡SW1¹⁾と、その下層の成法寺遺跡SW2¹⁾との比較検討を試みた。

はじめに土器だまり1(上層)と併行期と思われる成法寺遺跡SW1と比較すると、共通点として、壺・鉢・高杯が数点ずつであるのに対して甕が圧倒的に多く、生駒西麓産の胎土をもつ土器に対して他地域産(在地産含む)土器の出土比率が高いことがあげられる。しかし、SW1出土の甕においては、大部分が内面ヘラケズリによって器壁が薄くされており、庄内甕の影響を顕著に現していることでは、上層土器とは異なる。

第2に前述した遺跡SW1の下層に相当するSW2と土器だまり1(下層)の比較検討を行った結果、相違点が目立ち、SW2出土の甕においては、下層で顕著にみられる外面成形のタタキのちハケ調整を施す土器がなく、内面調整にヘラケズリなどを施し、薄い器壁をもつ甕のみみられない。

第3に八尾南遺跡SE10と土器だまり1(上層)を比較すると、(表14)から窺えるように、数量では庄内甕よりもV様式系甕の出土率は高く、庄内甕の影響を受けた土器の存在も目立つ。庄内甕においては、器壁が厚く、口縁部のつまみ上げが顕著でないことや、底部の尖底化も進んでおらず、特に鉢においては、比較的しっかりした平底をもつことが共通点としてあげられる。一方、SE10出土土器では胎土に角閃石を含む庄内甕が顕著にみられ、壺においては、尖底化がやや目立つなどの相違点もある。

最後に馬場川遺跡井戸1・2は、土器だまり1(上層)と同様に多種多様にわたる器種から構成されており、他遺跡と比較しても分かるように全体数における甕の割合が比較的低い(表19)。壺においても、口縁部は波状文や円形浮文などによる装飾が目立ち、長頸壺・広口壺・直口壺など数種類の形態からの器種構成が類似する。しかし、生駒西麓産土器と他地域土器の比率でみると、生駒西麓産の比率は馬場川遺跡97%、土器だまり1(上層)は26%とかなりの相違点が認められる。器壁と薄くするために内面に施されたヘラケズリがみられる甕のうち、底部の尖底化が、井戸1・2では顕著である。また2重口縁壺・加飾の高杯・器台など布留式の特徴を持つ土器も井戸1・2では出土している。

以上から、出土した器種の中で甕の割合が最も高く、大半が畿内第V様式の系統を引く土器で全体を占めることは類似する。しかし、胎土(生駒西麓産土器の割合)や庄内式土器の影響を受けた土器の様相は、各々の遺跡単位で全く異なることから、弥生時代から庄内期の変換時期では、各遺跡で主体とする交流地域が異なることが、土器の様相に影響を及ぼしていることが窺える。

また中河内地域において縁辺部・山間部・内陸部でそれぞれ異なる土器交流をもつとも考えられる。瓜生堂遺跡は河内湖縁辺部に位置し、中河内の中でも特に外部との交流が盛んである地域の可能性が高い。土器だまり1より出土した甕e(底部は比較的しっかりした平底をもち、内面調整にヘラケズリ、外面はタタキのちハケ調整が施される)の特徴を顕著に表した土器が播磨地域の大中遺跡の庄内期併行期と考えられている大中Ⅱ式に相当する第2土器群出土の甕に見られる。広口壺では口縁端部に円形浮文を施す広口壺dも見られる。対して瓜生堂遺跡と同様に搬入土器が多く見られる中田遺跡では吉備系土器を多く搬入しているが、その形態をそのまま取り入れている。しかし瓜生堂遺跡では生駒西麓産を含む大半の土器において、形態に他の地域や遺跡ではみられない多様な特徴がある。以上のことから播磨地域などの他地域から土器を搬入するだけでなく、独自に製作していた可能性も考えられる。

4. 土器だまり1の性格

土器だまり1の性格を検討したい。まず祭祀行為に使用されたと考えられる製塩土器の出土から検討したい。2点の出土が確認された製塩土器は、現在のところ、河内地域で確認された最古の製塩土器と考えられ、胎土・形態から和泉北部からもたらされた可能性が高い。類似する資料としては、下田遺跡出土の製塩土器があげられる⁵¹。しかし当遺跡の立地条件から生産地であると考えられないことから、祭祀関係の土器であった可能性が高い。また、前述で取り上げた遺構のうち、性格のはっきりした八尾南遺跡S E10と馬場川遺跡井戸1・2から出土した土器と比較を試みた結果、器種の比率では、甕の比率が高いが、壺・高杯などの器種も見られる。そして完形の土器が多く出土していることなどから、破棄され自然埋没した井戸の八尾南遺跡S E10よりも祭祀行為によって供獻土器を埋没させた馬場川遺跡井戸1・2と類似する。これらの条件から土器だまり1出土の土器が供獻土器であり、祭祀行為に用いられ遺棄され埋没したものと出土土器からも判断される。

<注>

- 1) 福永信雄 「瓜生堂遺跡第47-1次発掘調査中間報告書」東大阪市教育委員会 2001年
- 2) 福永信雄・下村晴文・芋本隆裕 「馬場川遺跡発掘調査報告」東大阪市遺跡保護調査会 1977年
- 3) 米田敏幸・山本昭他 「八尾南遺跡」-大阪市高速電気軌道2号線建設に伴う発掘調査報告書- 八尾南遺跡調査会 1981年
- 4) 八尾市教育委員会 「成法寺遺跡」-八尾市光南町1丁目29番地の調査- 八尾市教育委員会 1983年
- 5) 山本三郎 「播磨大申遺跡の研究」播磨町教育委員会 1990年
- 6) 西村 歩 「下田遺跡」財団法人大阪文化財センター 1996年

<参考文献>

- 石野博信・関川尚功 「近畿地方の古式土師器」『纏向』奈良県立橿原考古学研究所 1976年
- 一瀬和夫 「久宝寺・加美遺跡の古代土師器」『大阪文化財論集』(財)大阪文化財センター 1989年
- 置田雅昭 「古墳出現期の土器」『えとのす』第19号
- 田中 琢 「布留式以前」『考古学研究』第12巻第2号 考古学研究会 1965年
- 都出比呂志 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号 考古学研究会 1974年
- 寺沢 薫 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1986年
- 原口正三 「大阪府松原市上田町遺跡の調査」『大阪府立島上高等学校研究紀要』 1968年
- 米田敏幸 「土師器の編年 1. 近畿」『古墳時代の研究』第6巻 1991年
- 「大阪府下の庄内式土器出土遺跡と搬入土器」『庄内式土器研究』Ⅰ 庄内式土器研究会 1992年
- 「河内における庄内式土器の編年」『庄内式土器の研究』Ⅵ 庄内式土器研究会 1994
- 米田文孝 「弥生後期型甕から布留式型甕へー製作技法の変遷を中心にして」『ヒストリア』大阪歴史学会第97号 1982年

3) 弥生時代中・後期の土器について

1. 中期の土器

A地区土器溜り1出土土器

A地区土器溜り1からは凹線紋出現期の土器がまとまって出土した。前期とは異なり、生駒西麓産の器種は全体の約3～4割程度である。このことは中期において土器の生産様相が変化した事を示しており、瓜生堂の在産土器がどの胎土を持つのか今後注意深く見ていかなければならない。

各土器を個別に見てゆくと、口縁部を上下に拡張し、受け口を作り出すA3類(267)と外反する口縁部の下端を下方に拡張するA2類(266)には幅広い簾状紋が施され、壺の中では両者が卓越している。細頸壺はこれらよりも量的にやや少ない。とくに國分政子氏が「生駒西麓産」と呼んだA類(14)は生駒西麓産であることが多い。また受け口壺の中には口縁部外面に凹線紋を入れるE類(7・8)、國分氏の「河内平野式」もまとまってみられる。壺は大型で口縁部を下方に拡張するD類(273～276)が目立ち、A(270・272)、C類(270)がこれに次ぐ。両者は内面をハケ、ナデ、ミガキ、外面をハケ、ミガキ、ケズリを施すものが主体を占める。鉢(279)は壺A2・A3類同様幅の広い簾状紋を入れる生駒西麓産のものが多く、在地あるいは搬入品と考えられる凹線紋が入るものはやや少なめである。これらの土器群は瓜生堂遺跡溝²⁹⁾、同第I面、亀井遺跡(その1)SD3074³¹⁾、西ノ辻遺跡SR25-A出土土器³²⁾に平行するものと考えられ、河内IV-3様式³³⁾に比定できる。

A地区、土器溜り2・4

壺はA2類(39～41、55～57)のみで、このうち(55～57)は簾状紋が卓越する生駒西麓産である。壺はA1類(49、51、52)、C類(50)が存在する。鉢(43、54)は凹線文が多条に巡る。壺は口縁部を上下に拡張するA3類が存在しないことや、A2類が口縁部を垂下させ、簾状文や凹線文が盛行することから、河内IV-3様式に比定できよう。

A地区、土拵、ピット、溝、A・B・C・D層、落込み

各土拵、ピットでは鉢(63)は外面に直線文や波状文を施すことから摂津の特徴をもつ。壺は大型のD類(65、77、136)、C類(78、79、113、143)は口縁部をあまり上方に拡張しない。壺A3類(98)は簾状紋の幅が狭く、口縁部の拡張部も直立する。

溝では壺A3(150)は口縁部をやや内傾させる。また、E類(206)は口縁部外面に波状紋を施す和泉的な特徴をもつ。鉢B1(150、179)は口縁部を下方に垂下させる。また(202)は南山城、大和、河内と広い範囲で見られるものである。壺C(177)、壺D(198)は口縁部を上方に拡張させる。また、大和型(182、183)も存在する。

A・B・C・D層では長頸壺(243)と鉢B1(244、263、264)はやや古相を示す。また、壺D(259)は外面にヘラミガキ、内面にハケを施し、口縁部を上、下に肥厚させることから河内と摂津の両方の要素をあわせもつ。

落込み1では壺A3(294)の口縁部はあまり内傾しない。また、壺C(285)も口縁部をあまりつまみ上げないという特徴をもつ。上述したこれらの土器群は以上の点から土器溜り1よりも古相を呈すると言えよう。これらの土器群は河内IV-2様式に比定される。

川2

川2では壺D類のうち(274、275)は口縁部を上下に拡張させる西方の影響がみとめられるものである。また(276)は河内ではII様式から系譜がたどれるものである。これらの点から土器溜り1とはほぼ同時期に比定できよう。

溝、灰色シルト

溝、灰色シルトでは鉢B 1 (213~217) の口縁部が段状にならず垂下する。また(213)は外面に波状文を施し、摂津的な要素をもつ。これらの点から、全体の中では最も古い様相を呈すると思われる。これらの土器群は河内Ⅳ-1 様式に比定されよう。

以上、46次の土器群を概観してみたが、古い方から順に、溝、灰色シルト→土抔、溝、A・B・C・D層、落込み→川2、土器溜り1、土器溜り2・4の順に遺構が形成されたと考えたい。

方形周溝墓供献土器

方形周溝墓の供献土器としては1号方形周溝墓で壺A 1 (612)、甕B 1 (626)、D類(627・628)、水差し(629・630)が出土した。このうち壺A 1 (625)、水差し(629・630)は底部に穿孔がある。(2)は外面にヘラケズリを行うことから摂津的な要素が強い。このうち壺A 1、甕B 1、D類は生駒西麓産である。壺A 1の簾状紋は幅が広く、また水差しの口縁部には凹線紋が多用されることから、これらの土器は河内Ⅳ-2 様式に比定される。

3号方形周溝墓からは甕C (631)が単独で出土した。4号方形周溝墓では無紋の壺C (633)、甕B 1 (639)、鉢A 1 (641)、B 2類(636)が出土した。これらのうち甕B 1と鉢B 2は生駒西麓産である。両者とも口縁部は下方に拡張せず、比較的古い様相を示している。壺Cも下ぶくれの形態は取らず、胴部中程に最大径がある。以上の点からこれらの土器は河内Ⅳ-1 様式に相当する。5号方形周溝墓では無紋の壺C (644)、甕C (647~650)、水差し(657)、鉢B 2 (658)、大型鉢(659)、高杯B 2 (660)、A (661)が出土した。このうち、甕C、鉢B 2、高杯Aは生駒西麓産である。壺Cは口縁端部に凹線紋を入れる。甕は外面にヘラミガキを施すものが多いが、タタキを施し、その後ハケを入れ(647)や、ハケのみで仕上げる(650)も存在する。また、大型の甕にはやはりタタキを入れる(651)や(652)が存在する。鉢B 2類は口縁端部を肥厚し、幅広の簾状紋を入れる。また、大型の鉢では口縁部外面に2条の凹線紋を施す。高杯B 2類は下方に拡張した部分を人為的に打ち欠き、杯部に一穿孔している。これらの土器群は河内Ⅳ-3 様式に比定される。これらの結果から今回検出した方形周溝墓は第4号方形周溝墓→第1・3号方形周溝墓→第5号方形周溝墓の順に築造された可能性がある。

C地区

川4出土土器

川4は配石の下層で検出したものである。ここからは吉備系と思われる口縁端部が肥厚し、縦凹線を施す甕と、直交する頸部から短く口縁部が折曲する壺が出土した。また、外面に赤彩を施し凹線紋の上に円形浮紋を貼り付ける装飾付台付鉢も出土した。

C地区配石及び祭祀場出土土器

配石及び祭祀場からは第Ⅳ様式末~第Ⅴ様式初頭の土器がまとまって出土した。まず、配石に伴うものとして、特殊壺(515・518)と装飾付台付鉢(533)があげられる。特殊壺は外面をヘラミガキによって丁寧に仕上げ、胴部平坦面に縦凹線紋とその上にうずまき状のスタンプ紋が入るものである。この土器は底部に剥離痕があり、脚部が付属していた可能性が高い。形態から山陽・山陰地方の影響を受けた土器であると思われる。また、装飾付台付鉢は配石のみならず、祭祀場(564・566)、川4(601)からも出土している。形態的には杯部を下方に拡張し、凹線紋と棒状浮紋を施している。類似は瓜生堂遺跡の過去の調査にも存在する。この土器は河内地域では系譜が追えないものである。播磨地域など瀬戸内からの影響を受けた可能性を考えたい。配石5からはこの土器の脚部(536)も出土しており、これらの配石から出土した一連の土器群が非日常的なものであることを暗示させる。また、口縁部に縦凹線を施す壺(542・543)、内面にヘラケズリを施す(529)などは東瀬戸内系であると考えられる。

祭祀場からは上述した裝飾付台付鉢の他、上東式³⁷⁾と思われる特殊壺(554)が出土した。この壺は赤色塗彩されており、これらの土器群の中ではやや時期が下るものである。その他では高杯(569)が池上遺跡の柱の抜き取り穴³⁸⁾から出土したものと類縁性がある。また、甕は外面にタタキを施す(560・561)やハケ、ミガキのみで仕上げる(558・559)が存在する。しかし、これらの土器の内面はヘラケズリが施されており、器形では畿内一円のものであるが、内面にヘラケズリを施す点は通常のものではない。このような甕は祭祀場だけでなく、黒色粘土③、黒色粘土②土器溜りなどからも出土しており、この様な土器が何故出現したのか、また受け口状を呈し内面にヘラケズリを施す(557)や口縁端部に疑凹線を施す(580)、長頸壺で端部に面をもつ(547・549・557)なども東瀬戸内系と思われる。また、祭祀場出土の裝飾鉢(585)は外面に粗い波状紋や円形浮紋を入れ、赤彩している。この土器は西部瀬戸内的な要素の強いもので、これらの土器群は瀬戸内的な影響を受けている可能性がある。

黒色粘土③

黒色粘土③からも、第Ⅳ様式末～第Ⅴ様式初頭の土器が出土した。

これらの土器群からは吉備系、讃岐系と思われる土器が出土した。壺は長頸壺が卓越している。そのうち(388)は頸部に線刻紋をもつ。内面はヘラケズリを施す。壺(403)は直口する頸部に疑凹線を多条に亘って入れるもので胎土は赤～橙色を呈する。讃岐系の可能性が考えられる。また、甕は口縁端部に幅広い面をもち、疑凹線を入れる東部瀬戸内系ものが多く出土している(428～434)。胴部外面下半にヘラミガキ、上半にタテハケ、内面はヘラケズリを施すものが多い。胎土は吉備ではなく在地のものと思われる。高杯(443)も吉備系の可能性がある。また、配石及び祭祀場同様、器形的には畿内系と考えられる甕の内面にヘラケズリを施すものが多く、以前、『巨摩・瓜生壺』で報告されたものに類似する。以前の報告ではこれらの土器を吉備系、もしくは瀬戸内のどこかの影響を受けた土器とされた。これに対して藤田憲司氏は単純にヘラケズリがあるからといって吉備系とすることに警鐘を鳴らし、「ヘラケズリ手法」自体は非畿内の要素では有り得ない¹⁰⁾と述べられた。しかしながら、今回の調査では吉備系、讃岐系と考えられる資料がまとめて出土しており、胎土は在地のものが多く各器種において搬入品がみられる。

C区、川2

川2からは第Ⅴ様式前半の土器が出土した。器形の判別し得る壺は全て長頸壺である。この傾向は黒色粘土③でも同様である。そのうち(466)は口縁部直下に2条の凹線紋を入れ頸部から胴部にかけて邪視紋と思われる線刻を施している(第178図)。このような邪視紋は亀井遺跡¹⁹⁾のものに近似している。甕は全体の器形を知り得るものではないが、タタキを施す(472～474・502)とハケを施す(476・478・493)に区分される。(503)はタタキを施した罎壺である¹⁴⁾。堺市鶴田町遺跡¹⁵⁾と観音寺山遺跡¹⁶⁾に類例がある。甕の中にはやはり吉備系と考えられる(475～478)が存在する。これらのうち、内面を明確に削るものは(476)のみで、ほかはハケ、及び板ナデを行なう。この点は黒色粘土③から出土したものは若干異なる。時期的にも川2は新しいため、内面のヘラケズリは一端途断えるものと考えられる。また近江系³⁷⁾も注目される。

C区、落込み

断層による落込みからは第Ⅴ様式前半の土器が出土した。ここでも吉備系、もしくは讃岐系と思われる長頸壺が存在する。また、甕には讃岐系と思われる(613)や、外面にタタキを施し、内面をヘラケズリする(614)が存在する。大型の壺底部(612)も内面にヘラケズリを施す。この時期の四国系土器については岩崎直也氏¹⁹⁾がまとめている。それによると畿内では壺を中心に鬼塚、郡家川西、安満、東京良、田辺天神山、縦向などで庄内式を中心に出土している。甕は類例が少ない。

5：小結

以上述べてきたことをまとめてみる。出土した吉備、讃岐など東部瀬戸内的と思われる土器の特徴は、畿内の要素として全体の器形、口縁部の成形技法、東部瀬戸内の要素として内面ヘラケズリ、頸部内面のユビオサエ、外面タテハケ、胴部下半のヘラミガキ、口縁端部の肥厚等がある。また阿波との共通の技法としてタタキ(12)があげられる。これらの技法によって造られた土器のうち、甕では(409・410・412・414・415・416・418)が外面にタテハケを施すもの、(417・420・560・614)が外面にタタキを施すものの二者が存在する。また壺では(392・578)があるが、甕が大勢を占めるのが特徴的である。これらの甕や壺は畿内と東部瀬戸内の両地域の要素をもつ為、ここでは折衷土器として捉えておきたい。瓜生堂遺跡以外で、この様な内面ヘラケズリをもつものは巨摩遺跡沼状遺構、亀井遺跡(その1)BトレンチSD3010、古曾部・芝谷遺跡などが挙げられる。このうち巨摩遺跡沼状遺構出土のものは外面にハケ及びヘラミガキを施すものがほとんどである。また亀井遺跡では外面にタタキを施すものが多い。また、今回出土した東部瀬戸内系と思われる土器群に併存するものとして、古曾部・芝谷S12住居址出土土器群がある。これらの土器群と今回報告した土器を比較してみると壺では長頸壺が本遺跡のものが口縁部が直立して端部に面を持つのに対し、古曾部・芝谷のものは口縁部がラッパ状に開き、端部に凹線文を施す点が異なる。広口壺は古曾部・芝谷では口縁端部に疑凹線を施し、頸部にハケ状工具で刺突痕を巡らすものが存在するが、今回は明確に広口壺と思われるものは無かった。また甕では内面ヘラケズリのあるものは、胴部にタタキを施し、口縁端部に疑凹線を施し、胴部最大径が肩部にあるものが多いという特徴がある。また器台も今回は出土していない。これらの土器群の時期の基準となる生駒西麓産の垂下口縁広口壺も古曾部・芝谷では存在するが、瓜生堂では存在しない。瓜生堂では壺や甕の中に東部瀬戸内からの搬入品と思われるものが存在するのに対し、古曾部・芝谷では明確に搬入と思われるものは確認できなかった。

一方、巨摩廃寺下層沼状遺構の土器群は角閃石を含むものが多く、広口壺や吉備系の高杯が存在する点でやや今回の瓜生堂出土土器群と異なっている。また、亀井遺跡(その1)BトレンチSD3010出土土器群の中にタタキを施し、内面をヘラケズリする甕が散見される。また、高松市上天神遺跡では河内の土器が出土しているという。

これらの事実は中期末～後期初頭にかけた東部瀬戸内地域から一元的に畿内に影響を与えたのではなく、人の移動や交流など複数のルートが相互に存在したために、このような土器様相の違いが現れたものと考えられる。中期以降、後期、庄内期まで続く、吉備系、讃岐系の土器とその折衷土器のうち中期末～後期初頭にかけた内面をヘラケズリする土器群の多さは以前報告されたものを含めて、注目に値する。この時期の畿内の他の集落でも同様なことが言えるのか。この問題は畿内ばかりでなく広く西日本の弥生中期社会から後期社会への転換がどのようにして起こったのかという問題と関係するだろう。西日本の弥生社会の変貌の過程解明がさらなる課題である。²⁰⁾

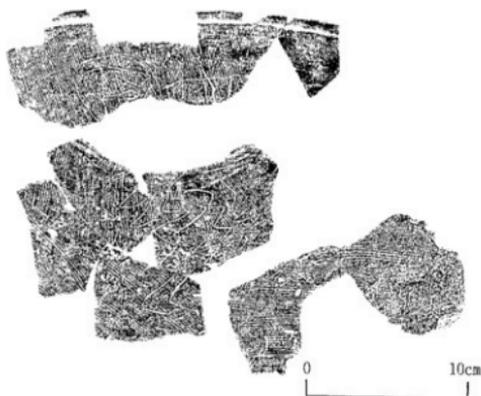
注

1) 國分政子 「河内地方弥生時代中期土器の検討」『長岡京古文化論集』Ⅱ 中山修一先生喜寿記念事業会 1992年

2) 村上年生他 「河内平野遺跡群の動態」Ⅲ北遺跡群 大阪府教育委員会(財)大阪府文化財調査研究センター 1996年

3) 若林邦彦他 「河内平野遺跡群の動態」Ⅶ南遺跡群 大阪府教育委員会(財)大阪府文化財調査研究センター 1999年

4) 福永信雄 『西ノ辻遺跡第22次発掘調査報告書』東大阪市教育委員会 1995年



第176図 邪視文土器拓影

- 5) 寺沢薫・森井貞雄「河内地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社 1989年
- 6) 今村道雄他「D地区の調査」『瓜生堂』大阪文化財センター 1980年
- 7) 柳瀬昭彦【川入・上東】岡山県教育委員会 1977年
- 8) 秋山浩三氏の御教示による。
- 9) 井藤暁子「第2節遺物」『巨摩・瓜生堂』（財）大阪文化財センター 1982年
- 10) 藤田憲司【「搬入土器」研究の課題】『大阪文化誌』17（財）大阪文化財センター 1984年
- 11) 長友朋子「弥生時代の土器地域色とその性格」『古代学研究』古代学研究会 2001年 この時期の東瀬戸内系の甕は凝口縁を呈するものが多いという。
- 12) 阿波との関係はこれからの課題である。
- 13) 宮崎泰史他「検出された遺構と遺物」『亀井遺跡』（財）大阪文化財センター 1982年
- 14) 池峰龍彦「鶴田町遺跡発掘調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告』第51冊 堺市教育委員会 1995年
- 15) 『大阪府和泉氏観音寺山遺跡発掘調査報告書』同志社大学歴史資料館 1999年
- 16) 橋本亜希子「男里遺跡出土の蛸壺型土器について」『大阪文化財研究』第12号（財）大阪府文化財調査研究センター
- 17) この土器は胎土や施文の仕方から搬入品ではなく、他の粘土で作られている。國分政子氏の御教示による
- 18) 岩崎直也「四国系土器の搬出」『大阪文化誌』17（財）大阪文化財センター 1984年
- 19) 宮崎康雄他「古曾部・芝谷遺跡」高槻市教育委員会 1996年
- 20) 森下英治・濱田延光氏の御教示による。
- 21) 弥生土器全体に亘って森岡秀人氏の御教示を得た。

4) 弥生時代前期の土器について

本調査ではB、C、D地区からは前期の土器が数基の遺構以外、大半が包含層内という形でまとも出土した。出土した土器は、前期中葉の土器で、ほとんどが生駒西麓で作られたものである。壺や甕に4本以上の沈線を施すものは数点しかなく、貼り付け突帯をもつものは1点もない。また、高杯、把手付鉢、縄文系の土器は認められず、土鍾が1点出土した。

器種構成ならびに胎土について

口縁部を残すものは、小片以外ほぼ全て図化した。その中で器種比率を算出したところ、壺が36パーセント、甕が49パーセント、鉢が5.2パーセント、壺蓋が2.6パーセント、甕蓋が7パーセントを占める。また、全体の9割が生駒西麓産である。壺と甕、どちらもその割合に差はない。追認のため、底部からも算出した結果、全体の8割が生駒西麓産である。本遺跡より、やや時期が上がる前・中葉の生駒西麓においては、鬼塚遺跡で在地の胎土が7割前後、他地域産が3割前後、植附遺跡で在地の胎土が8割前後、他地域産が2割前後である(福永1994)。本調査は、低地に立地しているが、生駒西麓産とよばれる土器の割合に、さして違いはない。

	生駒西麓産	非生駒西麓産	全体
壺	37	3	40
甕	49	6	55
鉢	6	0	6
壺蓋	2	1	3
甕蓋	7	1	8
合計	101	11	112

表20 器種別胎土個体数(個)

	生駒西麓産	非生駒西麓産	全体
壺底部	28	9	37
甕底部	57	10	67
合計	85	19	104

表21 壺・甕別底部胎土個体数(個)

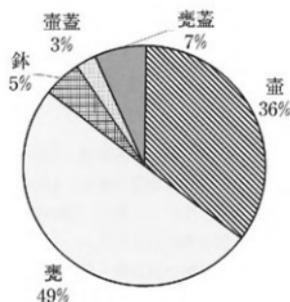


表22 器種比率

土器の特徴

壺…壺は比較的器形の復元が可能なのが多い。おおよそ、口縁部が短く外反し、体部のほぼ中央に最大径をもち、体部最大径は口縁部の約2倍弱でかなり体部が張り出す器形である。口径は推定できる15点のうち、大型壺2点を除く13点は近似値を示し(表23)、口径、体部最大径、底部の計測値が推定できる2点を比べた結果(表24)は極めて類似している。他に、頸部に削出突帯をもつミニチュアの壺も1点存在する。

外面はヘラミガキで仕上げている。口頸部境や口縁端部に施された沈線がヘラミガキによって消えているものもあるので沈線を施した後にヘラミガキを施すこともあるようである。頭部体の境の内面に指おさえがついているものも多く、そこでは他の粘土帯の接合箇所より接合痕跡が、より明確である。紋様をもつものは少なく、重弧紋が4点、木葉紋が2点(周溝墓出土のものを含む)認められる。口縁部内面にヘラガキ沈線を施すものもある(図669・700)。同様のものが鬼鹿川遺跡(東大阪市教委他1998)からも出土している。また、沈線紋を底部付近に半周めぐらすものがある(図701)。若江北遺跡でも中心を意識して施されている紋様があるが、同様のものであろうか((財)大阪府1995)。また、赤彩されているものはあるが、紋様を描いているものは認められない。

口頸部境には段を単独で使用するものが多い。全て頸部側が下がるものである。頸部部の境には段と2条、あるいは3条の沈線を施すものが多い。段をもたず、2条から3条の沈線のみを施すものも次に多い。4条以上の沈線を施すものは1点しかない。段は、粘土帯の接合個所に、板状工具で作りに出しているものが多い。段で削り出し低めた部分に、低めた後ヘラミガキでその沈線のある程度消しているもの、板状工具で削り取った痕跡が残るもの、明確な沈線を1条めぐるものがある。削り突帯をもつものは数点でⅡ種多条のものは1点上層から見つかったのみである。貼り付け突帯を持つものはない。

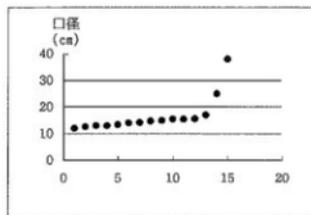


表23 壺の口径 (cm)

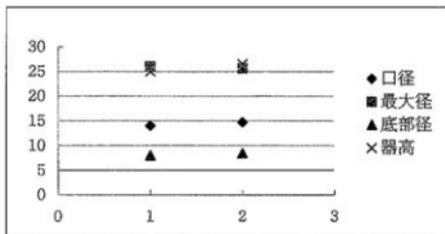


表24 壺のサイズ (cm)

段のみ	段と1条沈線	段と2条沈線	段と3条以上の沈線
8	1	0	0
段と紋様	1条沈線のみ	2条沈線のみ	3条以上の沈線のみ
2	2	3	1
削り突帯Ⅰ種	削り突帯Ⅱ種少条	削り突帯Ⅱ種多条	削り突帯と紋様
2	2	0	1

表25 口頸部境 (個)

段のみ	段と1条沈線	段と2条沈線	段と3条以上の沈線
2	4	17	14
段と紋様	1条沈線のみ	2条沈線のみ	3条以上の沈線のみ
3	1	9	5
削り突帯Ⅰ種	削り突帯Ⅱ種少条	削り突帯Ⅱ種多条	削り突帯と紋様
0	1	0	0

表26 頸部部境 (個)

壺…壺は体部最大径まで残っているものが少ない。口径は25cm前後ものが多く、壺に比べてばらつきが見られる(表27)。器形が推定できるものから、倒錐形を呈するものの方が、体部がやや膨らむ器形のものよりやや多く、下層から出土したものに体部が膨らむものが多い。口径がほとんど直角に曲がるもの(図679)、無紋で体部が膨らむ河内壺の祖形となるもの(図674)も1点ずつ出土している。口縁部全体に刻みを施し、頸部に3本沈線を施すものが最も多い。ついで頸部に3本沈線を施すが、口縁部には施紋しないもの、頸部に1条沈線を施し、口縁下部に、あるいは全体に刻みを施すものが多い。頸部に段を施すものが1点だけ出土しているがそれは体部側が下がる段である。口縁部に1条の沈線をめぐらすものが3点あり、口縁部に刻み目を入れつつ沈線もめぐらすものも1点含まれる。

鉢…体部がゆるく内湾するもの(図684)、直立するもの(図768)、筒型のもの(図709)など、バラエティーに富む。

包含層の位置付け

包含層は下から灰黒色粘土層、茶褐色粘土下層、茶褐色粘土上層、オリーブ茶色粘土層、灰オリ-

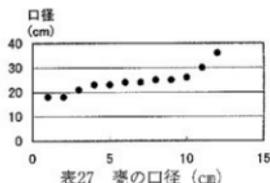


表27 壺の口径 (cm)

頸部の沈線	0条	1条	2条	3条	3条以上
口縁下部部に刻み	1	4	0	3	0
口縁端部全面に刻み	0	4	3	5	0
口縁端部に沈線	0	0	2	2	0
口縁部端部に裝飾無し	2	1	2	4	0
頸部に段	1	0	0	0	0
合計	4	9	7	14	0

表28 壺の頸部沈線数と口縁端部の刻み位置 (個)

	口縁下部部を刻む	口縁端部全体を刻む
茶褐色土層	5	12
灰黒色粘土層	7	8

表29 包含層別 壺の口縁端部の刻み位置 (本)

	1条沈線	2条沈線	3条沈線
茶褐色土層	3	3	8
灰黒色粘土層	6	4	5

表30 包含層別 壺の頸部沈線数 (個)

ブ色粘土層の順で堆積した。明瞭に時期区分できないが、最上層のオリープ茶色粘土層、灰オリープ色粘土層から頸部部の境に4条の沈線をもつ壺が出土している等、上層の土器の方が下層の土器に比して新しい様相を示すものが多いといえる。灰黒色粘土層は茶褐色粘土層より、壺の頸部の沈線が1条しかないものが多く、3条沈線が入るものは茶褐色粘土層の方が灰黒色粘土層より多い。口縁端部に全面に刻み目を持つものは灰黒色粘土層より茶褐色粘土層の方が多く、口縁下部部に刻み目をもつものは茶褐色粘土層より灰黒色粘土層の方が若干多い。

時期

まず、前期前葉に位置付けられている若江北遺跡の特徴を挙げると、壺、甕の口縁部の外反が短く、貼り付け突帯や多条沈線をもつものは少なく、区画文様帯に段や削り出し突帯を用いる。壺に関しては、頸部にゆるやかな屈曲を持つ無紋のものが多く、沈線も1条か2条のものが多く。

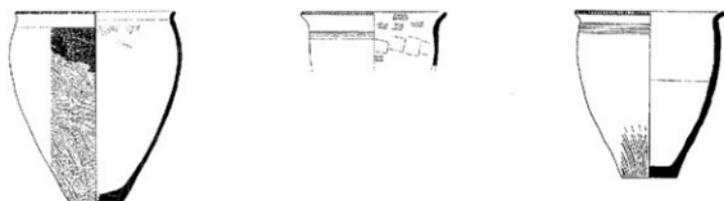
本遺跡出土の壺に関しては、区画紋様帯については段に何条かの沈線を施す段Ⅱ種が多い。甕に関しては頸部に3本以上の沈線を施すものが一定の割合を占める。以上のことより若江北遺跡の土器群より新しいと考えられる。

壺、甕の口縁部の立ち上がりが長く広がらないこと、貼り付け突帯をもたない点等から、八尾市山賀遺跡河川7、八尾市田井中遺跡第3期、八尾市亀井遺跡と同時期で、前期中葉に位置付けられる。東大阪市若江北遺跡、東大阪市植附遺跡土壘1、土壘234、東大阪市鬼虎川遺跡Cピット28-2層、八尾市山賀遺跡土壘10、八尾市田井中遺跡第1期、第2期の次の段階に属する。

本調査でも初痕のつく土器が存在することから、稲作を行う人々が、比較的短い期間に小規模な集落を構成しながら、若江北遺跡からこの瓜生堂遺跡、山賀遺跡へと移動したことが想定できるかもしれない。



第177図 河内高周辺弥生時代前期の壺 (左 若江北遺跡 中 瓜生堂遺跡 右 美園遺跡)



第178図 河内湯周辺弥生時代前期の甕(左 若江北遺跡 中 瓜生堂遺跡 右 美園遺跡)

結論

本調査で出土した土器の特徴をまとめてみる。生駒西麓産が9割を占める。甕は口縁が短く外反し、体部は体部中央付近で最大径を持つ。段、3条以下の沈線を施すものが大半で、削出突帯Ⅰ種は3点、削り出し突帯Ⅱ種は1点のみで、貼り付け凸帯を持つものはない。

調査地点の面積が狭かったため、高坏、把手付鉢、突帯紋系土器が認められないことが文字通りそれをさしているかは不明である。が、前期中葉の一時期を切り取った良好な資料といえるだろう。

(補弼)

今回、茨木市東奈良遺跡と兵庫県大間遺跡の土器を奥井氏と黒田氏の御好意で実見させて頂いたが、搬入の土器は、どちらかといえば東奈良遺跡の胎土に類似する。

参考文献

- 伊藤暁子 「入門講座 弥生土器 近畿1」『月刊考古学ジャーナル』No.195 ニューサイエンス社 1981年
- 大阪府教育委員会 「田井中遺跡発掘調査概要V」1996年
- 大阪府立花園高校地歴部 「鬼塚遺跡」『河内古代遺跡の研究』 1970年
- (財)大阪文化財センター 『山賀(その3)』 1984年
- (財)大阪文化財センター 『亀井(その2)』 1986年
- (財)東大阪市文化財協会 『植附遺跡』 1994年
- (財)大阪府文化財調査研究センター 『巨摩・若江北遺跡調査報告 第5次』1996年
- 寺沢薫・森井貞雄 「河内地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社 1989年
- 「突帯文と遠賀川」土器持寄委員会論文集刊行会 平成12年
- 田畑直彦 「畿内Ⅰ様式古・中段階の再検討」立命館大学論集Ⅰ 1997
- 福永信雄 「中河内の弥生時代前期」『第83回帝塚山大学弥生研究部会発表資料』1994年

弥生時代の石器について

本論では、AからD地区から出土した弥生時代の石器について述べてい。ただし、出土した石器の量や種類が、A地区と他地区では極端に異なる。以下それぞれの調査区の概略をまとめる。

A地区においては、本調査で掘立柱建物群と共に最も多量の石器、及びサヌカイト剥片が出土した。男性器・女性器をかたどったと考えられる性器形石製品が出土したのもこの地区である。この2つが確実に関連する形で出土した例は極めて稀であり、農耕祭祀に伴い用いられたと考えられる。この石器・剥片を出土地別に分類したグラフを作成した(表31)。この結果、A-4~6(マウンド2)、A-8・9(マウンド3)、A-11~13(マウンド4)にピークが認められた。これは遺構集中地域と一致する。製品と共にサヌカイト剥片も多数見られることから打製石器を製作していた可能性が高い。製作された石器は、剥片の大きさからみて石鏃などの小型の石器であると考えられる。打製石剣などを製作できる大きさの大型剥片は、今回の調査では出土していない。なお、A地区で出土したサヌカイトについては産地同定が行われた。その結果一部不明なものがあるものの、基本的には二上山産サヌカイトを使用していることが判明した。

これに対しBからD地区は居住域から外れるため、石器・剥片の出土量はA地区に比して非常に少ない。B地区においては集落を襲った地震に対する地鎮めとして配石祭祀を行っており、人頭大から玉砂利程度の大きさの石が積み上げられる形で検出された。配石遺構中にはごく少量の石器が含まれており、積み上げられた石の中にも転用品はいくつかみられた。

同じく配石遺構がつづくC地区においては、遺構と共に多量の加工木が廃棄された形で検出された。朱塗りの盾、朱塗りの剣、木製の模擬刀とともに石鏃が出土している。模擬戦を行う祭祀場であるという解釈を裏付けるようにそのつくりはごく荒いものであり、側刃のつくりも調整は密ではないという印象を受ける。

D地区では5基の方形周溝墓と共に、1号周溝墓の1号主体部の掘方内から供献される形で切先を被葬者の頭位に向けて打製石剣が完全な形で出土している。これに続く墓道からは石鏃も出土しているが、築成以前の混じりこみである可能性が高い。4地区のうちこの地区は完全な墓域にあたる為、最も石器出土量が少ない。

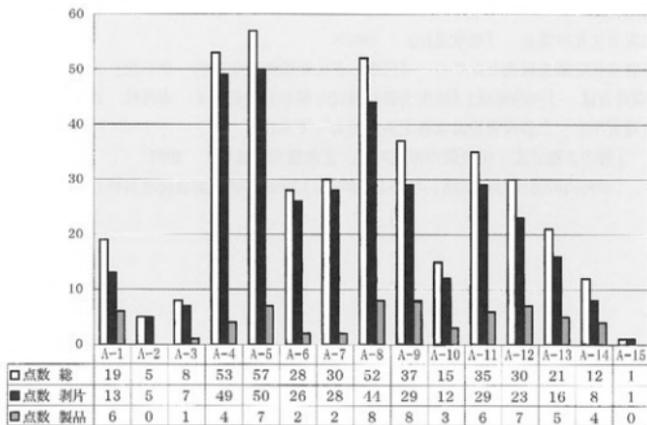


表31 サヌカイト点数地区別集計表

本調査においては住居・祭祀場・墓域の検出と、当時の集落における人々の精神的な生活の一端を
考えるうえで非常に有意義な成果があった。そしてそれは確実に出土石器の内容にも反映されている
といえるのではないだろうか。

これら4地区の調査で出土した石器の組成表を作成した(表32)。この中で最も数が多いのは石鏃
である。そのほとんどが長さ3cmを越えるものであり、なかには6cmを越えるものもあった。この石
鏃の量・大きさを考えるにもっぱら狩猟用であるとは言いがたい。打製石剣の本数も周囲の遺跡に比
して多いといえるだろう。なかには刺突の衝撃で欠損したと考えられるものもある。周囲の集団との
緊張関係が少なからずあったことが考えられる。なお、切先のみであるがA地区から磨製石剣が1点
出土している。

次に多いのは石錘・削器などの加工具である。石錘の中には玉錘とも考えられる大きさのものがあり
、木遺跡での玉製品加工の可能性も考えられる。

今回出土した石包丁はほとんどが緑泥片岩製で、黒色粘板岩を用いたものも1点出土している。出
土した未成品からは、その製作工程をうかがうことができた。緑泥片岩の原石からある程度の大き
さ・厚みをもって切り出された、いわば半加工ともいえる状態で搬入されてきたと考えられる。穿孔
が1箇所のみ的大型石包丁が3点出土している。弥生時代前期には一般的な、耳成山で産出する白色
の流紋岩製の石包丁も一点出土した。

そのほか生業に関する石器として、石製紡錘車・石錘が出土している。こぶし大の石錘の出土が目
立つ事から、遠浅の河内湖において漁業が行われていたことが想定できる。紡錘車は緑泥片岩製で、
石包丁を転用したものである。

住居の建材を切り出すための磨製石斧も、被熱あるいは欠損してはいるが2点出土している。

砥石は花崗岩などを利用した荒い砥石から、泥岩を利用した目の細かい仕上げ砥石まで各種類揃っ
て出土している。仕上げ砥石の存在などから集落における金属器の加工が考えられる。このように石
器のみを見ただけでも性器形石製品・配石遺構などから集落で行われた個々の祭祀の状況や農業、漁
業、繊維加工などの生業あるいは比較的大型の石鏃や打製・磨製石剣の存在から周囲との抗争の可能
性までもが示唆できたといえるのではないだろうか。

地理的に隣接する4地区を調査することによって、より面的に且つ正確に集落の性格を垣間見るこ
とができたといえるだろう。

	磨製石器								打製石器			
	石包丁	大型 石包丁	太型鋸 刃石斧	石錘	すり石・ 叩き石	砥石	紡錘車	磨製石剣	石鏃	石剣	石錘	削器
46次	14	3	1	2	3	14	8	1	19	3	7	12
47-1次	1	0	0	1	1	0	0	0	1	1	0	2
47-2次	0	0	1	2	2	2	0	0	2	1	0	0
計	15	3	2	5	6	16	8	1	22	5	7	14

表32 出土石器集計表

木製品について

今回の調査で多くの木製品が出土したが、紙数の都合で中世遺構・包含層出土の木製品については考察を省略し、庄内期から弥生時代中期に属する木製品について検討を行いたい。

B・C地区で確認された庄内期から弥生時代中期末、後期初頭の祭祀場や配石遺構では多くの木製品が出土している。その中でも朱塗り武器形木製品や朱塗り楯など、配石遺構に伴う祭に使用されたと思われるものが少なからず含まれる。また有頭棒や先端を尖らせた杙状木製品など武器型木製品の可能性のあるものも多く含まれる。明らかな武器形木製品の材質はスギとクワが見られる。クワ製の武器形木製品は比較的忠実に銅剣の形を模したものである。スギ製の武器形木製品は鉄剣の形を模したものであろう。

武器形木製品は各地で出土しているが、今回のように使用状況を示す形で出土したものは珍しい。またアカガシやクワなどでつくられた二又材が配石遺構の周辺から複数出土している。おそらく地面に突き刺して棒をかけたものと思われる。あるいは配石の結界に使用されたものかもしれない。これ以外にも配石遺構やその周辺から多数の加工木が出土している。十字やV字に組んだ形でB地区から出土した棒材のように、祭に使用されたものも多く含まれていると考えられるが、現状では使用形態が明らかにできない。また、朱塗りの不明木製品が出土している。

他に大型臼・杵が出土している。祭の際にこれらを用いて神人供食の儀式に供される米を脱穀したと思われる。年輪年代測定法の結果、第7層から出土した加工木の年代がA. D. 83年と報告されている。この加工木と伴出した土器は、庄内式期のものである。

弥生時代中期に属する農耕具あるいは農耕に関連する木製品はA・C・D地区で出土しているが、中でもA地区で鋤の未製品が出土しており、C・D地区では農耕具の未製品は出土していない。またA地区では掘立柱建物を構成する柱材や柱穴を多く検出し、未製品は掘立柱建物検出面を覆う盛土から出土した。集落の掘立柱建物の中で製作され、何らかの理由で廃棄されたものと思われる。このことから従来言われていたように本遺跡は完成品を交易により他から入手し、消費するだけの集落ではないことがわかる。この一例をもって全ての木製品を製作していたとは断定できないが、石器も製作されていることから、木製品の製作を行っていたことは確実であろう。ただ、未製品の出土数が少ないことも事実であるから、伐採から仕上げまでの全工程を行っていたのか、あるいは未製品の段階のものを外部から供給を受け、最終工程のみを行ったかについては今後の課題であろう。

漁労具と考えられる刺突具は、鬼虎川遺跡でも多く出土している。湖の漁労活動のうちで、魚を骨製品も含めてヤスで刺して捕る漁法がかなりの比重を占めていたことを示すと考えられる。

V章で記述したように掘立柱建物を構成する柱材および礎板は当時周辺で生息していたカシなどの広葉樹を利用していたことが明らかになった。特別な建物でない一般の住居はこのような材を用いて建てられていたのである。さまざまな加工をした柱材と礎板が出土したが、1棟の掘立柱建物を構成する各柱の構造は必ずしも一致しなかった。

方形周溝墓から検出された木棺はヒノキとコウヤマキの2種の材が使用されている。ヒノキの棺材はコウヤマキに比べて保存状態が悪い。コウヤマキの棺材は残りの良いものでは厚さ10cmを測る。その加工は鉄製の斧を用いて行われている。方形周溝墓の造営に使われたかは不明であるが天秤棒が1点出土しており、このような道具で土を運んだことが知られる。棺材を用いた年輪年代測定法の結果はあまり良好ではなかったが、今後検討する上での参考となる。

今回の調査で出土した木製品により、本遺跡で農耕具が製作されたことや生業の実態を示す各種木製品、地鎮の祭に用いられた木製品の一端などが明らかになったと考える。

VI 附編

(1) 瓜生堂遺跡の木棺材・加工木の年輪年代

1、はじめに

弥生時代や古墳時代の棺材にはコウヤマキ材が使用されていることが多い。現在、近畿地方におけるコウヤマキ材の暦年代パターンの作成状況は、おもに平城宮跡出土の柱根類の年輪を使って741年～22年までのものが早期の段階でできている。しかし、この先端を紀元前まで延長するための好個の材料が依然として見つかっていない。一方で、弥生時代の木棺が数多く出土している遺跡に着目し、これまでのところ、大阪雁屋遺跡、加美遺跡、兵庫玉津田中遺跡などの木棺材の年輪を使って788年分の暦年未確定の標準パターンを作成している。木棺材は、材の再利用がないものと考えられるので、この標準パターンに暦年が確定すれば、弥生時代の前期、中期、後期が暦年の何年に相当するのか、明らかになるであろう。

瓜生堂遺跡の発掘調査では、弥生時代の方形周溝墓が4基発見された。このなかには、木棺材が窺らないうちに遺存していた木棺墓が、11基分出土した。材種は木棺材の多くがコウヤマキ材で、これに若干ヒノキ材が使われていた。

これらのなかから年輪年代法が応用できそうな木棺材（年輪数がおおよそ100層以上あるもの）を選定し年輪年代法を実施した。

2、試料と方法

選定した木棺材は1号方形周溝墓のなかから2基、3号方形周溝墓から1基、4号方形周溝墓から2基の総数6基から7点の棺材を選定した。これ以外に、柾目板状に木取りされた小形の加工木を1点加えた（詳細は表33を参照）。

年代幅の計測は、木取りが柾目板のものは、本体から直接非破壊で計測し、板目に近いものは、やむを得ず端部を切断して木口面から計測を行った。加工木は本体から直接計測した。

コンピューターによる年輪パターンの照合は、相関分析手法によった使用した基準パターンにはコウヤマキの暦年標準パターン（741年～22年）とヒノキの暦年標準パターン（紀元前421年～506年）とを使用することとした。この他に、コウヤマキの木棺材で作成した暦年未確定の標準パターン（788年分）を使った。

3、結果と考察

木棺材8点と加工木の計測年輪数は表33に示したとおりである。最多のものは1号墓3号木棺材の264層、最小のものは3号墓2号木棺の60層であった。樹種の内訳は、ヒノキ5点、コウヤマキ3点であった。総数8点の年輪パターンと標準パターンとの照合は、それぞれ樹種別に行った。その結果、ヒノキでは1号墓3号木棺（底板）と、加工木の2点の照合が成立し、それぞれの年輪年代は順に紀元前218年、西暦83年と確定した（図34、図35参照）。

一方、コウヤマキは1号墓1号木棺（東側板）の1点だけが、788年分の標準パターンの最も新しい年輪（巨摩遺跡出土の木棺材）から245年分古く遡った年代位置で照合が成立した。（図36参照）。

これら3点の形状は、辺材部をとどめていない心材部のみからなるものと判断した。こうした形状のものは、原材の伐採年代よりかなり古い年代であると思われるが、原材から削除された年輪を正確に求めることはきわめて難しい。今回、年代測定用に選定した木棺材の中で最も遺存状態の良かったのは、辺材部を一部にとどめていると思われる1号墓1号木棺の底板であったが、この年輪年代は、残念ながら未確定に終わった。しかし、788年分の暦年未確定の標準パターンは年代位置によっては十分な年輪データ数を満たしていないところもある。特に、新しい年代部分の後端から遡ること約

200年間が不十分である。今後、この年代範囲の年輪データを補充していけば、この底板の年輪年代は確定する可能性が高い。

1) 田中 琢、光谷拓実、1990『年輪に歴史を読むーわが国における古年輪学の成立ー』、奈良国立文化財研究所 学報第48冊、同朋舎

No.	遺構	部材名	樹種	年齢数	年齢年代	標準パターン (778年分) との年代
1	1号基1号木棺	東側板	コウヤマキ	211	—	245年分(古)
2	〃	底板	〃	134	—	—
3	1号基3号木棺	底板	ヒノキ	264	218B.C.	—
4	3号基2号木棺	側板	〃	60	—	—
5	4号基3号木棺	西小口板	コウヤマキ	138	—	—
6	〃	蓋板	ヒノキ	120	—	—
7	4号基5号木棺	小口板	〃	147	—	—
8	第7層(黒ネリブ色シルト)	加工木	〃	90	83A.D.	—

表33 年輪年代測定用に選定した試料一覧と結果

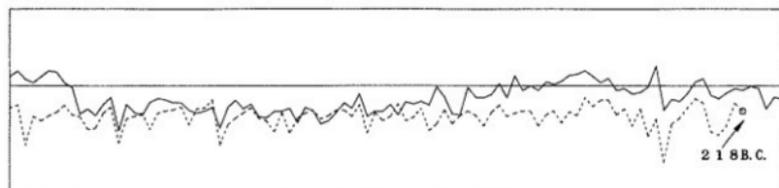


表34 ヒノキの暦年標準パターングラフ(実線)とNo. 3の年輪パターングラフ

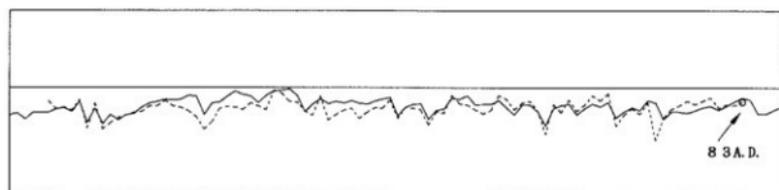


表35 ヒノキの暦年標準パターングラフ(実線)とNo. 8の年輪パターングラフ

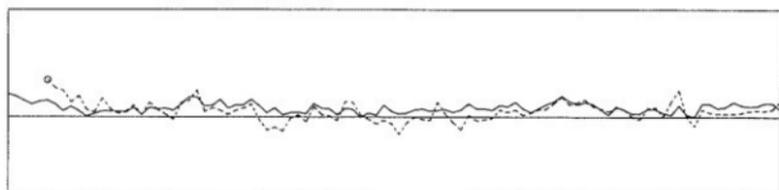


表36 コウヤマキの標準パターングラフ(実線)とNo. 1の年輪パターングラフ

(2) 瓜生堂遺跡で検出された人骨、獣骨の分析

瓜生堂遺跡から出土した人骨は、弥生時代中期の方形周溝墓が6体と中世の溝が1体の計7体である(表37)。

弥生時代の人骨は方形周溝墓の木棺内から出土し、多くは歯のエナメル質や頭骨の一部、四肢骨の長骨の骨幹を残すのみであった。したがって、埋葬時の姿勢は四肢骨の保存状態の良いもののみ推測できた。被葬者の年齢推定は歯の萌出状態や摩耗の程度から、性の推定は大臼歯の計測値から行った。

中世の溝から出土した人骨の出土部位は左大腿骨の殿筋粗面周囲の1点のみであり、骨の断面や粗面の発達程度から成人と思われるが、詳しい年齢や性は推定できなかった。中世の大溝は包含層のため、この人骨の由来は不明である。

弥生時代の人骨

a. 1号周溝墓1号木棺

1号木棺人骨は比較的保存が良く、特に下肢骨の遺存が良かったが上肢はほとんど遺存していない。頭位は北西で顔面は上方を向いている。下肢は両足をそろえた状態でゆるく屈曲して出土しているため、埋葬時には両膝をそろえた状態で膝を立てていたかわずかに屈曲させていたと推測される。

頭骨は脳頭蓋の保存は良かったが顔面頭蓋は破損が大きく、下顎骨は歯槽部に歯根のみが釘植した状態で出土している。遺存しているエナメル質は碎片となっているものが多く、復元し計測の出来たものは下顎第1大臼歯の近遠心径のみであった。下肢骨は左大腿骨と左右脛骨の骨幹の計測ができた(表38)。大腿骨は骨幹中央の計測値より断面示数が116.1である。脛骨は左右ともに栄養孔位での計測が出来たため扁平示数を計算すると、左脛骨が64.0、右が66.1で中脛の中でも扁平な部類に入る。土井が浜弥生人、三津弥生人、西北九州弥生人の男性と比較すると、大腿骨も脛骨も土井が浜弥生人や三津弥生人より筋の発達が良く、西北九州と似た値を示した。肉眼的な観察においてもヒラメ筋線が発達していた。

年齢は右下顎大臼歯の摩耗の程度より25才前後と推定できるが、性は推定の出来る大臼歯が計測できなかったため不明である。

b. 1号周溝墓3号木棺

3号木棺で確認できた人骨の保存は非常に悪く、発掘時のみ骨の輪郭が確認でき、取り上げ後のクリーニングが出来なかったため、発掘時の記録に基づいて記載した。被葬者の頭位は北西で顔面は西を向く。頭蓋骨は左側半分が破損され、顔面頭蓋は上顎と下顎の痕跡と上顎の大臼歯が遺存している。年齢はこの歯の摩耗が大きいためから熟年と思われる。また、左右の同定が出来ない大腿骨が出土している。骨の出土状況から埋葬当時の姿勢は推定できなかった。

c. 3号周溝墓2号木棺

出土した人骨の保存状態は悪く、頭骨の後頭部と四肢骨の一部が出土している。被葬者の頭位は北東で顔面は右側面を上北西を向いている。体幹や四肢骨の保存が悪かったため埋葬時の姿勢は推測できなかった。

出土した骨格のうち最も保存が良かったものは歯のエナメル質で、わずかに遺存している上顎骨と下顎骨に定植し、噛み合せた状態で出土している。切歯は右上顎側切歯のみ遺存していたが、シャベル状切歯であった。頭骨以外には右脛骨の栄養孔周辺約5cmが残存しているほか、長骨の骨幹と部位不明のものが1片出土している。歯の計測値は弥生時代の近畿地方男性の範囲内で(表39)、男性と推定される。また、年齢は第3大臼歯の萌出が完了していないことや摩耗の程度より20才前後と推定さ

れる。

d. 3号周溝墓4号木棺

4号木棺の人骨は比較的保存状態があまり良くないが、頭骨、上肢と下肢の骨幹が出土している。被葬者の頭位は北東で顔面の方向は下顎骨の上面が上を向いていることより、埋葬時の顔面は上を向いていたか首を体幹の方に屈曲していたと推定される。上肢骨は被葬者の左側の上腕骨が位置する所に3点の長骨骨幹が平行して出土していることより、前腕が屈曲していたと推測される。下肢骨は、左右不明の大腿骨が体幹に対し直角に出土し、大腿部を屈曲させていたことが伺える。

頭骨は頭蓋冠の一部と下顎骨の保存は比較的良かったが、上顎骨はほとんど遺存していない。下顎骨に釘植していた歯は左側が大歯、第1小臼歯と第2小臼歯で、右側が中切歯、側切歯、第1小臼歯と第2小臼歯であった。切歯は2本ともシャベル状を呈した。歯の摩耗は側切歯で特に大きく、歯冠の約半分は摩耗していた。切歯や小臼歯の摩耗度で年齢を推定することは困難であるが切歯の状況から見て30才以上と思われる。性を決定できる大臼歯が出土していないため不明である。

e. 4号周溝墓2号木棺

人骨の保存状態は大変悪く、ほとんどの骨は遺存していなかったが、歯のエナメル質の保存は良く、噛み合せた状態で出土している。被葬者の頭位は北で顔面の方向は不明である。埋葬時の姿勢は上肢、下肢ともに保存が悪かったため不明である。

出土した歯のうち永久歯はすべて未萌出のものであるが、第2乳臼歯の咬頭は上顎、下顎とも摩耗している(表39)。永久切歯で、シャベル状を呈しているものは右上顎中切歯であった。歯の萌出状況から推定した年齢は5、6才である。性の推定は未萌出の歯の計測値からは出来なかった。

f. 4号周溝墓5号木棺

5号木棺から出土した人骨の保存は頭部では良く、脳頭蓋と上顎、下顎ともに遺存していた。頭位は北西で顔面は左側を上を西を向いている。しかし、下顎骨の上面が上を向いていることより、埋葬時の顔面の方向は上を向いていたか首を体幹の方に屈曲していたと推定される。体幹および四肢骨は長骨の骨幹が出土しているが保存状態が悪いため骨の同定は出来なかった。埋葬時の下肢の状態は出土の状況から、膝を立てていたか軽度で屈曲させていたと思われる。

歯は上顎、下顎とも全てが釘植し、下顎の左右の切歯と犬歯は歯冠部が破損し歯根のみが残っていた。エナメル質の計測値は被葬者の計測値は弥生時代の近畿地方男性の計測範囲内であり(表39)、男性と推定される。歯から年齢を推定すると、下顎の右第3大臼歯萌出の途中であり、大臼歯の咬耗度が2から3であることから25才前後と推定した。

II 動物遺体

瓜生堂遺跡から出土した動物遺体は弥生時代中期と鎌倉から室町時代にかけての2期のものである(表40)。

a. 弥生時代の動物遺体

弥生時代から出土した動物遺体は、哺乳類が3種、鳥類が1種、爬虫類が2種である。哺乳類はイノシシ、シカとイヌの3種が出土している(表41)。イノシシは出土量が最も多く、最小個体数は左上腕骨の2であった。出土しているイノシシは歯の咬耗がないものや未萌出のもの、長骨の骨端が未癒合のものが多く、若い個体が多いと思われる。シカは6点出土したなかで角が1点あり、枝角を人工的に切断した痕が見られる。シカの最小個体数は左尺骨の2で、骨の出土量は少ないがイノシシと同数であった。本遺跡から出土しているイヌは橈骨の遠位部と大腿骨の2点であり、そのうち計測が出来た大腿骨の最大長は136.21mmで、小型犬の範囲であった。計測できなかった橈骨も小型

犬の大きさであった。

鳥類は左鳥口突起が出土し大型ものと思われるが、種の同定が出来なかった。

爬虫類ではスッポンの左腸骨と肋骨板や腹骨板が数点出土している。これらを食用にしたかどうかは不明である。また、種の特定ができなかったカメも1点出土している。

b. 鎌倉時代から室町時代の動物遺体

鎌倉時代から室町時代の層から出土した動物遺体は、哺乳類の4種のみであり、そのうち家畜種はウシとウマであった(表41)。イノシシは4点出土し、上肢骨と下肢骨であった。そのうち計測ができた右肩甲骨は、第3大臼歯が未萌出の標本と同程度の大きさであることから、この個体は2才程度と推測される。また、右大腿骨も遠位端が未癒合で大きさもこの標本と良く似ているため、同様に2才程度と推測される。シカは、同定できた骨片が角だけであったが、保存が悪かった。

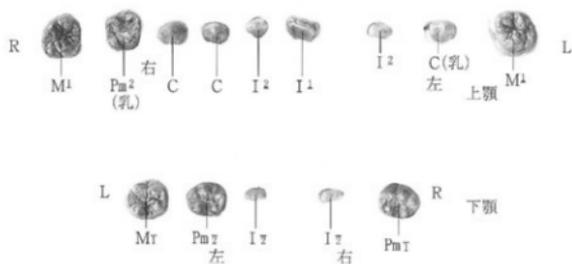
ウシは比較的保存の良い状態で出土し、出土量は5点と少ないが、最小個体数は臼歯の定植した左下顎骨の2である。ウシの下顎骨は骨計測ができたが、比較資料が少ないため今後の研究課題である。ウマは歯が3点と寛骨の一部が出土したのみであった。今回の調査区域ではウマよりウシの方が最小個体数も出土量も多かった。

Ⅲ. まとめ

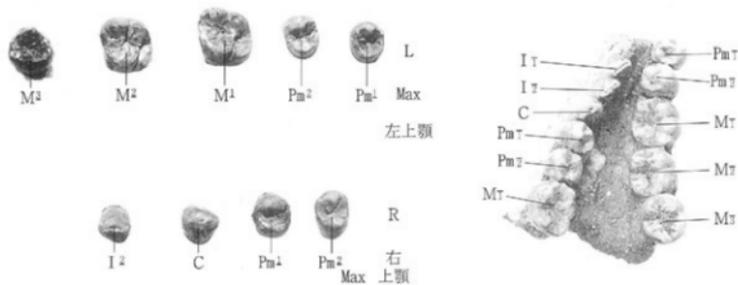
1. 弥生時代の方形周溝墓から出土した人骨は6体で、その年齢構成は、幼児と思われるものが1体、20才前後と思われるものが1体、20才代と思われるものが2体、30才以上と熟年がそれぞれ1体出土している。
2. 3号周溝墓2号木棺と4号周溝墓5号木棺の人骨は、歯の計測値より男性と推定される。
3. 下肢骨の骨幹の計測ができた1号周溝墓1号木棺人骨は脛骨の断面形態が扁平脛骨に近く、ヒラメ筋線の発達も見られた。
4. 弥生時代の動物遺体はイノシシの出土が最も多かったが、最小個体数ではシカも同様の2であった。
5. 弥生時代に出土したイヌは小型犬であった。
6. 弥生時代では大型鳥類やスッポンなどの爬虫類も出土していた。
7. 鎌倉から室町時代の動物遺体はウシが最も多く、次いでウマとイノシシであった。

参考文献

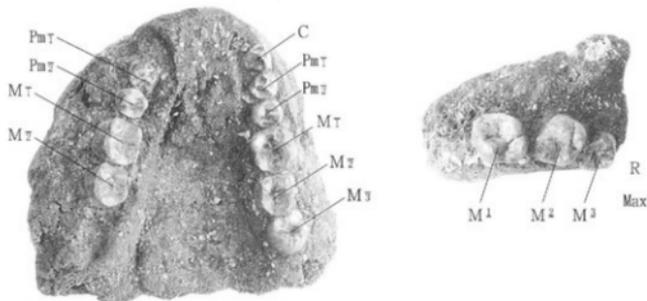
- 吉備 登 「歯冠計測値から見た古代近畿・中国地方人の特性」『人類学報』48: 1-25 1989年
内藤芳篤 「日本人Ⅰ」弥生人骨 人類学講座5 人類学講座編集委員会編: 57-99、雄山閣、東京
1981年



4号方形周溝墓2号木棺



3号方形周溝墓2号木棺



4号方形周溝墓5号木棺下顎骨

写真3 方形周溝墓出土人骨

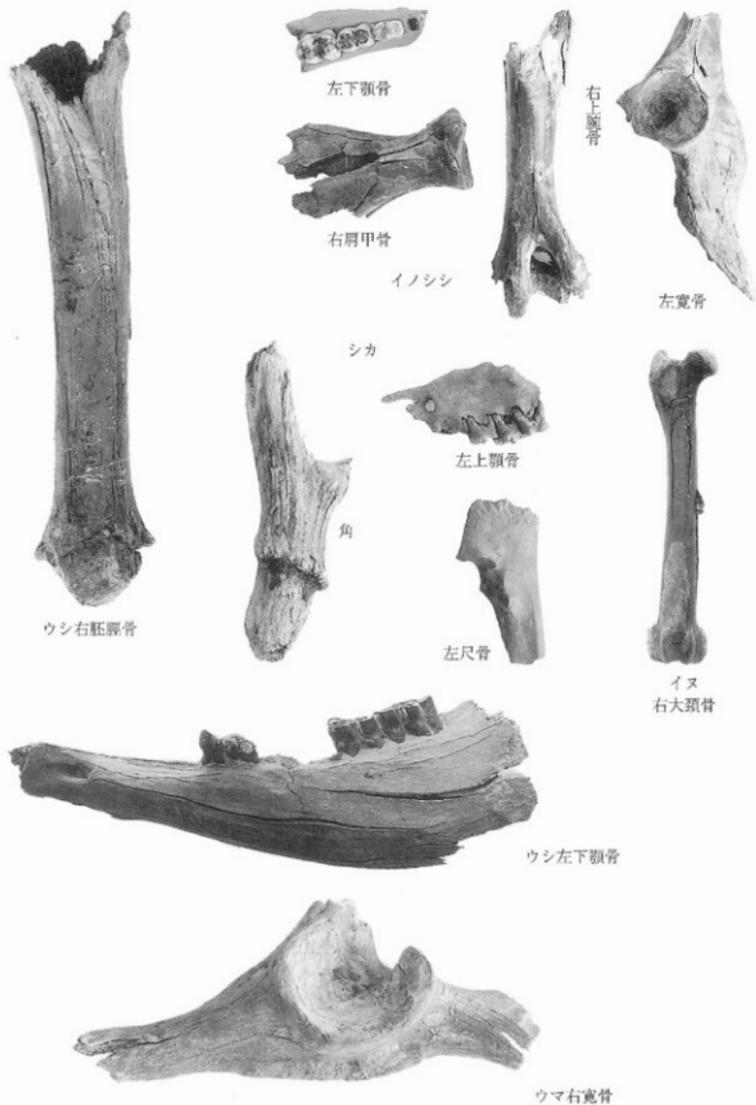


写真4 獣骨

表37人骨の出土表

地区	周溝墓	主体墓	骨番号	出土部位		備考
				左右	部位名	
1号周溝墓1号木棺						
		1		左右	下顎骨	歯槽部に歯根のみが釘植した状態で残存、歯の同定は出来なかった下顎歯の一部残存
D-9	1	1		右	下顎第1大白歯	近遠心径 10.85, 年齢25歳程度
D-9	1	1			大白歯	エナメル質
D-9	1	1			エナメル質	
		1			長骨	上肢骨(尺骨or橈骨の骨幹)
		不明	10		長骨	上肢骨(尺骨?)
		1	5	左	大腿骨	両骨端破損
		1	6	右	大腿骨	両骨端破損, 粗線発達
	1	1	9	左	脛骨	両骨端破損, ヒラメ筋線発達
		1	8	右	脛骨	両骨端破損, ヒラメ筋線発達
	1	1	9	左	腓骨	両骨端破損
		1	1		長骨	下肢骨
1号周溝墓3号木棺						
	1	3	5		不明	
	1	3	3		長骨	下肢骨
	1	3	2		不明	
	1	3	1		骨?	
	1	3			頭骨片	
	1	3	4		不明	
3号周溝墓2号木棺						
D-4	3	2	2		頭骨片	
				左右	上顎骨	歯はすべて釘植
D-4	3	2		左	上顎第1小白歯	摩耗1
D-4	3	2		左	上顎第2小白歯	摩耗1
D-4	3	2		左	上顎第1大白歯	摩耗2+
D-4	3	2		左	上顎第2大白歯	摩耗2
D-4	3	2		左	上顎第3大白歯	摩耗なし
D-4	3	2		右	上顎第2切歯	摩耗1
D-4	3	2		右	上顎犬歯	摩耗1
D-4	3	2		右	上顎第1小白歯	摩耗1
D-4	3	2		右	上顎第2小白歯	摩耗1
D-4	3	2		右	上顎第1大白歯	摩耗2+
D-4	3	2		右	上顎第2大白歯	摩耗2
D-4	3	2		右	上顎第3大白歯	萌出中
D-4	3	2		左右	下顎骨	歯はすべて釘植
D-4	3	2		左	下顎第1切歯	摩耗1
D-4	3	2		左	下顎第2切歯	摩耗1
D-4	3	2		左	下顎犬歯	摩耗1
D-4	3	2		左	下顎第1小白歯	摩耗1
D-4	3	2		左	下顎第2小白歯	摩耗1
D-4	3	2		左	下顎第1大白歯	摩耗2+
D-4	3	2		左	下顎第2大白歯	摩耗2
D-4	3	2		左	下顎第3大白歯	萌出中
D-4	3	2		右	下顎第1切歯	摩耗1
D-4	3	2		右	下顎第1小白歯	摩耗1
D-4	3	2		右	下顎第2小白歯	摩耗1

3号周溝墓2号木棺						
D-4	3	2		右	下顎第1大白歯	摩耗2+
D-4	3	2		右	下顎第2大白歯	摩耗2
D-4	3	2		右	下顎第3大白歯	萌出中
				5	胔骨	榮養孔周囲残存
				4	長骨片	
				1	不明	
3号周溝墓4号木棺						
D-4	3	4			頭骨片	
D-4	3	4			下顎骨	
D-4	3	4		左	下顎犬歯	摩耗2+
D-4	3	4		左	下顎第1小白歯	摩耗2+
D-4	3	4		左	下顎第2小白歯	摩耗2+
D-4	3	4		右	下顎中切歯	摩耗2+
D-4	3	4		右	下顎側切歯	摩耗2+
D-4	3	4		右	下顎第1小白歯	
D-4	3	4			下顎第2小白歯	
D-4	3	4	1		不明	
D-4	3	4	3		不明	
D-4	3	4	2		不明	
D-4	3	4	8		上肢骨	3 前腕?
D-4	3	4	7		下肢骨	
D-4	3	4	6	不明	大腿骨	骨幹
D-4	3	4	10		不明	
D-4	3	4	5		不明	
D-4	3	4	9		不明	
4号周溝墓2号木棺						
D-2	4	2		左	上顎第2切歯	未萌出
D-2	4	2		左	上顎乳犬歯	乳歯
D-2	4	2		左	上顎第1大白歯	未萌出
D-2	4	2		右	上顎第1切歯	未萌出
D-2	4	2		右	上顎第2切歯	未萌出
D-2	4	2		右	上顎乳犬歯	乳歯
D-2	4	2		右	上顎犬歯	未萌出
D-2	4	2		右	上顎第2乳白歯	乳歯摩耗有り
D-2	4	2		右	上顎第1大白歯	未萌出
D-2	4	2		左	下顎第2切歯	未萌出
D-2	4	2		左	下顎第2乳白歯	乳歯摩耗有り
D-2	4	2		左	下顎第1大白歯	未萌出
D-2	4	2		不明	下顎切歯	未萌出
D-2	4	2		右	下顎第2乳白歯	乳歯摩耗有り
D-2	4	2		右	下顎第1大白歯	未萌出 破損
D-2	4	2			エナメル質	破片多数
4号周溝墓5号木棺						
D-2	4	5			頭骨	頭蓋冠残存、顔面頭蓋破損、上顎骨残存、歯は釘植、左側上顎第3大白歯歯槽まで残存、ただし、歯根の形跡有り
D-1・2	4	5			上顎骨	歯は釘植
D-1・2	4	5		左	上顎第1or 2 小白歯	摩耗あり
D-1・2	4	5		左	上顎第1大白歯	摩耗3
D-1・2	4	5		左	上顎第3大白歯	摩耗1

4号周溝墓5号木棺						
D-1-2	4	5		左右	下顎骨	歯槽部に歯根のみが釘植した状態で残存
D-1-2	4	5		左	下顎第1小白歯	摩耗1
D-1-2	4	5		左	下顎第2小白歯	摩耗1
D-1-2	4	5		左	下顎第1大白歯	摩耗3
D-1-2	4	5		左	下顎第2大白歯	摩耗2
D-1-2	4	5		右	下顎第1切歯	歯根のみ残存
D-1-2	4	5		右	下顎第2切歯	歯根のみ残存
D-1-2	4	5		右	下顎犬歯	摩耗1
D-1-2	4	5		右	下顎第1小白歯	摩耗1
D-1-2	4	5		右	下顎第2小白歯	摩耗1
D-1-2	4	5		右	下顎第1大白歯	摩耗3
D-1-2	4	5		右	下顎第2大白歯	摩耗2
D-1-2	4	5		右	下顎第3大白歯	崩出中
D-2	4	5	4	不明	下肢骨	脛骨?腓骨?
D-2	4	5	2		下肢骨	脛骨?
D-2	4	5	3		下肢骨	
D-2	4	5	5		長骨	
D-2	4	5	6		長骨	
D-1-2	4	5	5		不明	
中世の人骨						
D第1面	溝3	0135	ヒト	左	大腿骨	股筋粗面

摩耗1：摩耗なし

摩耗2：摩耗の始まり、摩耗2+：1つの咬頭の象牙質が見え始める

摩耗3：全ての咬頭に象牙質が見え始める

表38 人骨の下肢骨の計測表

		マウンド1 主体墓1						土井ヶ浜	三津	西北九州
		骨幹中央矢状径			骨幹中央径 (栄養孔位)			断面示数		
		矢状径	横径	断面示数	矢状径	横径	断面示数			
大腿骨	左	29.85	28.37	105.2	—	—	—	109.8	105.9	114.1
	右	30.35	26.15	116.1	—	—	—			
脛骨	左	32.68	24.60		32.68	21.59	66.1	70.50	71.62	68.30
	右	—	—		37.94	24.28	64.0			

計測単位はmm

表39 歯の計測値表

		マウンド3 主体墓2		マウンド4 主体墓2		マウンド4 主体墓5	
		近遠心径	頬舌径	近遠心径	頬舌径	近遠心径	頬舌径
上顎第1切歯	右			*8.90	—		
	左			*6.28	—		
上顎第2切歯	右	6.78	—	*6.18	—		
	左			7.45	5.43		
上顎乳犬歯	右			7.29	4.86		
上顎犬歯	右	7.86	7.54	*5.14	*8.18		
上顎第1小白歯	左	7.50	8.44				
	右	7.63	9.20				
上顎第2乳小白歯	右			9.41	9.73		
上顎第2小白歯	左	7.14	9.33				
	右	7.20	10.42				
上顎第1大白歯	左	10.91	11.85	*10.71	*10.40	10.92	11.61
	右	11.61	11.56	*10.70	*10.28		
上顎第2大白歯	左	10.66	9.33				
	右	10.29	9.59				
上顎第3大白歯	左	9.38	10.21			8.50	9.66
	右	10.33	10.20				
*は未萌出							
下顎第1切歯	左	5.46	4.48				
	右	5.92	2.92				
下顎第2切歯	左	6.09	—	*5.76	*3.41		
	右	5.90	7.17			7.43	—
下顎犬歯	左					7.23	—
	右						
下顎第1小白歯	左	7.26	7.80				
	右	7.25	8.01			7.39	7.68
下顎第2乳小白歯	左			—	9.27		
	右			10.77	9.21		
下顎第2小白歯	左	7.12	8.31			7.25	7.80
	右	7.99	8.98			—	7.81
下顎第1大白歯	左	11.81	10.77	*12.02		11.86	10.16
	右	11.46	10.59			11.88	10.79
下顎第2大白歯	左	11.84	10.69			11.00	9.91
	右	11.72	10.70			10.81	9.35
下顎第3大白歯	左	11.27	9.49				
	右	10.98	9.78			*9.32	*10.21

計測単位はmm

表40 動物遺体の出土表

資料番号	地区番号	選擇名	骨番号	時代	種名	出土部位		計測値および備考
						左右	部位名	
E-22	A-10			弥生	イヌ	右	腕骨	遠位部、小型犬
E-7	A-14			弥生	イヌ	右	大腿骨	最大長 136.21
E-7	A-14			弥生	イノシシ	右	上顎骨	メス (大歯歯槽部より)、小臼歯歯槽部より後方は破損
E-8	A-9			弥生	イノシシ	左	上顎第1切歯	未剥出
E-6	A-8	マ-3		弥生	イノシシ	左	下顎骨	第3小臼歯歯槽後半から第2大臼歯第4小臼歯から、第2大臼歯釘植、第4小臼歯未咬耗
E-6	A-8	マ-3		弥生	イノシシ	左	下顎第1切歯	
E-5	A-12			弥生	イノシシ	左	下顎第2切歯	未剥出
E-1	A-9			弥生	イノシシ	左	上腕骨	外側縁遠位部
E-28	A-9	マ-3-5		弥生	イノシシ	左	上腕骨	骨幹部後面のみ残存
E-26	A-9			弥生	イノシシ	左	腕骨	幼体
E-5	A-12			弥生	イノシシ	左	第4中手骨	遠位端遊離
E-10	A-9	マ-3		弥生	イノシシ	左	大腿骨	骨幹遠位部
E-2	A-14			弥生	イノシシ	左	脛骨	近位から骨幹中央まで残存、近位端遊離
E-15	A-8	マ-3		弥生	イノシシ	左	趾骨	踵骨隆起
E-18	A-8	マ-2-3-6		弥生	イノシシ	不明	基節骨	
E-13	A-5	P-44		弥生	シカ		角	
E-6	A-8	マ-3		弥生	シカ	左	上顎骨	第2小臼歯から第1大臼歯の歯槽まで、第3小臼歯から第1大臼歯釘植
E-3	A-8			弥生	シカ	左	尺骨	肘頭から滑車切痕下部まで、肘頭破損、滑車切痕幅 22.48、切痕長 27.56
E-11	A-5	マ-2-6-7		弥生	シカ	左	尺骨	滑車切痕周辺
E-5	A-12			弥生	シカ	右	距骨	最大長 41.73、横径 23.37
E-25	A-8	マ-3		弥生	シカ	不明	基節骨	
	A-8	マ-3		弥生	シカorイノシシ		椎骨	椎体の一部
E-20	A-14			弥生	シカorイノシシ	不明	大腿骨	大腿骨遠位端の一部

E-27	A-14				弥生	カメ	不明	不明	不明	
E-2	A-14				弥生	スッポン	肋骨板	不明	不明	1
E-14	A-12				弥生	スッポン	肋骨板の肋骨板	不明		
E-27	A-14				弥生	スッポン	肋骨板	不明		
E-27	A-14				弥生	スッポン	肋骨	左		
E-2	A-14				弥生	鳥類(大型)	胸口骨	左		
E-21	A-9		P 257		弥生	不明	頭骨片			3
E-27	A-14				弥生	不明	頭骨片			2
E-8	A-9				弥生	不明	頭骨片			9
E-7	A-14				弥生	不明	頭骨片?			4
E-2	A-14				弥生	不明				1
E-22	A-10				弥生	不明	長骨			
E-8	A-9				弥生	不明	長骨片			
E-12	A-9		マ-3		弥生	不明	長骨片			
E-16	A-5		マ-2		弥生	不明	不明			
E-19	A-6		マ-2-7		弥生	不明	不明			2
E-20	A-14				弥生	不明	不明			2
E-30					弥生	不明	骨片			4
E-29	A-5		マ-2-6		弥生	不明				
H-38	C-2			1987	弥生	不明	骨片			焼けている
H-41				1771	弥生	不明	骨片			
H-44	C	大溝 1		骨-15	13~14C	イノシシ	肋骨	右		肩甲関節部最大長 39.09、横径 27.11
H-16	大溝 1			骨-18	13~15C	イノシシ	上脛骨	右		両骨端破損
H-14	大溝 1			骨-16	13~15C	イノシシ	寛骨	左		寛骨臼周辺
H-15	大溝 1			骨-17	13~15C	イノシシ	大腿骨	右		近位端破損、遠位端未適合、第II段階の原本と同程度の大きさ
H-17	C-2			1395	13~15C	シカ	角			
H-29	C-4 区			1403	12~13C	シカ or イノシシ	上脛骨	左		上脛骨滑車部残存
	D			0026	13~15C	ウマ	上顎骨 3 切歯	右		
H-42	C-3			特 1347	13~15C	ウマ	上顎骨 2 小臼歯	左		近遠心径 35.03、頬舌径 21.53
	D	灰黒粘土		0120	13~15C	ウマ	下顎臼歯	不明		

H-35	C-2			特1277	12~15C	ウマ	右	寛骨	寛骨臼周辺
H-17	C-2			1395	13~15C	ウマ?	不明	脛骨	2 遠位端
	C-4区			特1362	13~15C	ウシ	左	下顎骨	Pm2~M3まで残存、はは全て釘植、永久歯はすべて未萌出
	C-2区	第18層		特1396	13~15C	ウシ	左	下顎骨	下顎骨体残存、歯はPm2、Pm3、M2、M3が釘植、切歯部破損、臼歯列長 133.01、小白歯列長 53.88、大白歯列長 83.53
	D東	第1画		0077	13~15C	ウシ		中手骨Ⅲ・Ⅳ	
	C-3	暗灰色粘土		特1321	13~15C	ウシ	右	脛骨	骨幹部残存
H-11	大溝1			骨-12	13~15C	ウシ	右	脛骨	近位端破損
H-18	C地区			特1192	13~14C	ウマorウシ	不明	坐骨	坐骨結節残存
H-32	C-3・4区			1330	12~13C	大型哺乳類	左	切歯	歯根
H-27	C地区			1199	13~14C	大型哺乳類	左	脛骨片	
H-32	C-3・4区			1330	12~13C	大型哺乳類		長骨片	
	D-5・6			0436	13~15C	不明		歯のエナメル質	
	C-3・4区				13~15C	不明		上脛骨?	
H-17	C-2			1395	13~15C	不明		骨片	
H-33	C-3			1340	12~13C	不明		骨片	
H-21	C地区				13~14C	不明		骨片	
H-22					13~14C	不明		骨片	
H-24	C地区			1187	13~14C	不明		骨片	
H-27	C地区			1199	13~14C	不明		骨片	
	C-3	暗灰色粘土		特1321	13~15C	不明		長骨片	1
H-40	C地区				13C	不明		長骨片	
H-43	C地区			1188	13~14C	不明		長骨片	
H-34	C地区			1166	12~15C	不明		長骨片	
H-19	C地区			特1053	13~14C	不明		長骨片	
H-20	C地区			1201	13~14C	不明		長骨片	
H-23	C地区			1172	13~14C	不明		長骨片	
H-26	C地区			特1206	13~14C	不明		長骨片	
H-31	C-3・4区			1320	13~14C	不明		長骨片	
H-11	A-5	マ-2			13~15C	不明		不明	

H-12	大溝1		骨-13	13~15C	不明		不明	2	
H-13	大溝1		骨-14	13~15C	不明		不明		
	C-6・7			13~15C	不明		不明		
H-28				16~18C	不明		骨?		
	D東		0037	13~15C	不明				
	C-6-7		1830	13~15C	不明				
H-39	C-4区		1474	不明	大型哺乳類	左	脛骨	脛骨粗面から骨幹中央までの前縁が残存	
H-36	C-3		1492	不明	不明		長骨片		
H-37	C-1		1345	不明	不明		長骨片		
H-30	C地区			不明	ウマ	右	上顎第3大臼歯	近遠心径 27.44、頬舌径 24.84	

表41 動物遺体の出土頻度表

	中生代			
	イノシシ	イヌ	イノシシ	ウマ
角	1		1	
上顎骨	1			
上顎第1切歯	1			
上顎第3切歯				1
上顎第2小臼歯				1
下顎骨	1		2	
下顎第1切歯	1			
下顎第2切歯	1			
下顎第2小臼歯				2
下顎第3小臼歯				2
下顎第4小臼歯				2
下顎第1大臼歯				2
下顎第2大臼歯				2
下顎第3大臼歯				2
肩甲骨	2		1	
上腕骨			1	
尺骨			1	
橈骨	1			
中手骨Ⅲ・Ⅳ		1		
中手骨Ⅳ				1
蹠骨	1		1	
大腸骨	1		1	1
趾骨	1			
腕骨	1			
距骨	1			2
蹠骨	1			
不明				

(3) 瓜生堂遺跡で検出された地震の痕跡

東大阪市教育委員会が平成11・12年度に実施した発掘調査において、強い地震動によって生じたと考えられる地滑りの痕跡が検出された。平成11年度の事例については、東大阪市教育委員会(2001)にとりあげたが、本稿では平成12年度に検出された地滑り跡も含めて詳しく紹介したい。

I. 地震の痕跡の形態

I-1. 平成11年度の調査で検出された地震跡

弥生時代中期の生活面に顕著な段差が検出され、この位置で地層が鮮明に食い違っていた。

検出された段差(以下低崖と呼ぶ)は、全体としてN50°E方向にのびる中で、やや丸みを帯び、北東側に凹面を向けるような緩やかな円弧を描いていた(第179図)。低崖は幅約4.3mの調査区を斜めに横切っており、南半部では大きく二つに枝分かれしていた。この他、第179図に示したように、地面の微少な食い違い(落差数cm以内)も見られた。

低崖に交差する方向でトレンチA～Dを掘削して、地層の食い違いを調べた(第180～183図)が、地層をI～VI層に区分し、場合によってはさらに細分した。

第180図(写真5:トレンチA)では、I層が灰色粘土、II層が暗灰色の粘土で下部の数cmの部分が黒灰色である。III層はうす褐色の粘土、IV層は中～極細粒砂層で上に向かう級化(堆積の際、大きい粒子が下にたまり、上に行くに従って小さな粒子になる)が明瞭である。V層は極細粒砂、VI層は中～粗粒砂である。低崖に沿って図の左側(南東側)が低下するような変位を受けており、II層下部の変位量は55～60cmである。また、断層面(地滑りによって生じたもので、滑り面とも表現できる)に沿って、IV層の砂がわずかに上昇しており、食い違いが生じた際に引張力がかかり、断層面が少し開いた状態になったことや、IV層で軽微な液状化現象が生じたことが考えられる。

第181図(写真8:トレンチB)では、III層が極細粒砂～シルトである。IV層は3区分され、IVa層は中～極細粒砂、IVb層は極細粒砂、IVc層は粗～中粒砂となり、IVa層・IVb層では上に向かう級化が顕著である。V層は木片を含む腐植土層、VI層は粗～細粒砂で上へ向かう級化が明瞭である。低崖に沿って、複数の断層が生じたため図の左側が低下しており、V層の変位量は45～50cmである。また、IVc層では液状化が生じており、地層が液状化した場合に特徴的に見られる柱状構造が認められる。

第182図(写真9・10:トレンチC)では、断層が大きく二つに枝分かれしており、それぞれの間には、さらに小さな断層が見られる。地層は、I層が淡灰色の粘土、II層が暗灰色の粘土、III層が灰色の粘土、III2層が灰褐色の粘土となる。IV層の上部は極細粒砂で中～下部は中粒砂～シルトの互層、V層の上部は極細粒砂で下部は黒灰色の粘土である。また、VI1層は細～中粒砂、VI2層は中～粗粒砂、VI3層は細～中粒砂、VI4層は粗～中粒砂である。第184図はIV層下部とVI4層の試料に関する粒度分析の結果を示している。

第182図の左側の断層(a:主断層)ではII層下部が約25～30cm変位し、右側の断層(b)ではV層下部が15～18cm変位している。a,b間には3本の小断層があり、V層下部が最大3cm変位しているが、III層内で変位が不明瞭になる。

第183図(写真11・12:トレンチD)では、I層が淡灰色の粘土、II層が黒灰色の粘土、III1層が灰色の粘土、III2層が灰褐色の粘土、IV1層が極細粒砂と粘土の互層、IV2層が中～細粒砂である。さらに、V層上部が極細粒砂、V層下部が黒灰色粘土、VI層が細～粗粒砂である。

断層a(細かくは3つの断層面に分かれる)では、IV2層上部が約40cm変位しており、断層bではV

層下部が約15cm変位している。

I-2. 平成12年度の調査で検出された地震跡

平成11年度の調査で検出された地滑り跡から約50m東でも、地滑りの痕跡が検出された。ここでは、概ね東西から北西-南東方向に向かって、南西方向に開いた円弧状の段差が見られ、この南西側が20~30cm低下していた。

第183' 図(写真6:トレンチE)はこの低崖にやや斜行する方向の断面図である。説明の便宜上、地層をI~Ⅷ層に区分した(I-1におけるI~Ⅵ層とは異なる)が、I層は灰色の極細粒砂~シルト層で上部は粘土~シルトとなる。II層は灰色の粘土~シルトであるが、上部に極細粒砂~細粒砂層(II'層とする)をレンズ状に含んでいる。III層は黒灰色および灰褐色の粘土~シルトのブロックを多く含む盛土層である。IV層は灰褐色の粘土~シルト層、V層は極細粒砂層、VI層は上へ向かう級化が認められる粗~細粒砂、Ⅶ層は細~中粒砂、Ⅷ層は粗~中粒砂となる。

これらを切断する地滑りが認められるが、地滑りが発生する以前にはほぼ水平に堆積していたと見られるIV層、および、それより下位の地層が約60cm南西側(図の右側)が約50cm低下するように滑り落ちている。III層については、断層(あるいは、滑り面)を境にして南西側が厚く堆積しており、これを覆ってI・II層が堆積しているが、I~III層も南西側が低下するような10cm程度の変位を受けている。

第183'' 図は、第183' 図を作成した壁面を斜め後ろに後退させて、地滑り面に直交する方向(N28°E)の断面図を作成したものである(写真7:トレンチE')。ここでも、I~Ⅷ層に区分できるが、層相には、VI層が上へ向かう級化が認められる細~中粒砂、Ⅶ層が粗~中粒砂となる程度の違いしか見られない。ここでも、IV層およびそれより下位の地層が50~60cmの変位を示している。また、III層およびII層の下部が断層より南西側で厚く堆積して、これを覆ってI層とII'層が堆積しているが、いずれも、10cm前後の変位を受けている。

以上のことから、IV層が堆積した跡で地滑りが生じて、40~50cmの食い違いが生じ、その後、段差を解消する形で盛土(III層)がなされ、さらに残った、わずかな段差を埋めながらII層~I層が堆積した後に小さな(10cm程度)の変位が生じたことになる。断層(滑り面)のI・II層を変位させる部分では逆断層の形態を示しているが、地滑りが生じた段階で、低下側(図の右側)にまだ柔らかい地層(I~II層)が厚く堆積していたため、図の左側の地層が覆い被さるような状態になったものと思える。

II. 考察

平成11年度の調査で認められた地層の食い違い量は、垂直方向(北東側が低下)に最大約60cmである。円弧状にのびる崖の形態から考えても、第179図の矢印の方向に滑り動いた地滑りの痕跡であることは確実である。調査地が平坦な沖積低地に位置することや、地層に液状化の痕跡が認められることより、VI層よりさらに下位に分布する砂層で液状化現象が生じて、地層が水平方向に流れ動いたことによって生じた地滑りであることが推定される。

写真13は平成11年度調査地南縁の壁面を示したものである。矢印を境にして、下位の地層は切断されている。一方、矢印より上位の地層は地滑りの位置を境にして、左側(低下側)が緩やかに低下するように堆積しており、黒褐色粘土層は左側でやや厚さを増している。

このため、地滑りが生じた時点で矢印の位置まで堆積が及んでいたことは確実である。一方、矢印より上位の地層は地滑りの生じた後で堆積しているが、地滑りで生じた段差を除々に解消しながら堆積が進行している。

一方、矢印より下位の地層には、弥生時代のⅢ様式後半の遺物が多く含まれるが、矢印より上位の地層になるとⅣ様式前半の遺物が認められることから、Ⅲ様式からⅣ様式に移行する年代（土器に凹線文が出現する時期）に生じた地震によって生じた地変と考えられる（東大阪市教育委員会の福永信雄氏よりご教示頂いた）。

一方、平成12年度で検出された地滑りの痕跡は、南西側に凹面を向けるような緩やかな円弧を描きながら南西側が低下している。平成11年度の地滑り跡とは平行しており、大きく見ると、両者の間が少し沈降したイメージとなる。

平成12年度の場合もⅢ様式からⅣ様式に移行する時期に生じた地滑りで、地層に数10cmの変位が生じているが、その後、この段差を解消する形で盛土がなされている。さらに、それ以降（Ⅳ様式の終わりからⅤ様式の始め：福永氏にご教示頂いた）に、同じ滑り面を使って10cm程度の小さな変位が生じており、新たに生じた小規模の地震動（例えば、遠地における大地震や、当地域での小型の地震など）に伴う地変の可能性もある。

当遺跡において、顕著な地滑りはⅢからⅣ様式に移行する時期に生じており、激しい地震動に伴う液状化現象によって引き起こされた可能性が高い。このような時期に、遺跡周辺に激しい地震動を与えるものとして、日本列島の太平洋側海底に発達する南海トラフから繰り返し発生している南海地震、または、大阪平野周辺の活断層の活動による内陸地震が考えられる。

第185図は史料と遺跡の地震跡から南海地震と東海地震の発生時期を示したものである（寒川、2000、2001など）。これによると、淡路島の洲本市にある下内膳遺跡（洲本市教育委員会が発掘；寒川、1995、1997など）でもⅢ様式からⅣ様式に移行する時期の液状化跡が検出されている。南海地震が発生すると近畿南部から四国にかけての地域で激しい地震動が生じるはずなので、この2つの地域の地震跡が南海地震によって同時に刻まれたことが第一に考えられる。

ちなみに、南海地震の可能性が考えられる液状化の痕跡が、弥生時代頃でも、Ⅰ様式後半（八尾市の田井中遺跡；大阪府文化財調査研究センター、1997）Ⅴ様式後半（徳島県板野郡の黒谷川宮ノ前遺跡など；徳島県埋蔵文化財センター、1991；徳島県教育委員会・徳島県郷土文化会館、1991；埋文関係救援連絡会議・埋蔵文化財研究会編、1996など）と、古墳時代初頭（堺市の下田遺跡；大阪府文化財調査研究センター、1996）についても検出されている。

一方、活断層の活動時期について、活断層のトレンチ調査（工業技術院地質調査所、1999など）で少しづつ解明されているが、当遺跡で考えられる年代に対応するものは、今のところ認められていない。

瓜生堂遺跡における今回の調査で顕著な配石遺構が検出され、祭祀行為にともなうものと考えられている。この配石遺構は、弥生時代Ⅳ～Ⅴ様式にかけて複数回に及んでおり、遺構に用いた石材には和歌山市周辺のものが多い（福永、2000；東大阪市教育委員会、2001）。福永（2000、および、本報告書）は、地滑りで段差が生じた位置に配石遺構が集中することや、南海地震で大きな被害を受ける地域から石材が持ち込まれていることから、地震に対する祭祀行為の可能性が高いと推測しているが、現段階で考えられる有力な説であり、今後の進展が期待される。

謝辞

本稿をまとめるに当たり、東大阪市教育委員会の福永信雄氏・田之上裕子氏・鶴山まり氏に多くのご教示とご助力を頂きました。心から感謝いたします。

文献

福永信雄 (2000) 瓜生堂遺跡第46・47次調査の成果？弥生時代の祭祀遺構の発見。近畿弥生の会発表資料, 11p.

東大阪市教育委員会 瓜生堂遺跡第47-1次発掘調査中間報告書, 84p. 2001年

工業技術院地質調査所 平成10年度活断層・古地震研究調査概要報告書, 309p. 1999年

埋文関係救援連絡会議・埋蔵文化財研究会編 『発掘された地震痕跡』, 825p. 1996年

大阪府文化財調査研究センター 「下田遺跡」分析篇・考察篇。(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第18集, 792p. 1996年

大阪府文化財調査研究センター 「田井中遺跡(1～3次)・志紀遺跡(防1次)」。(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第23集, 376p. 1997年

寒川 旭 阪神・淡路大震災と地震考古学。ひょうご考古, 1, 1-14. 1995年

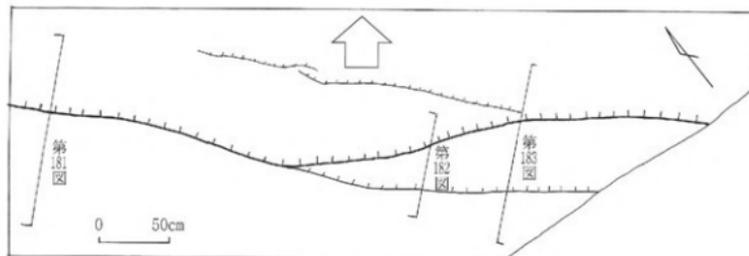
寒川 旭 『揺れる大地 日本列島の地震史』, 同朋舎, 272p. 1997年

寒川 旭 地震考古学に関する成果の概要。古代学研究, 150, 121-126. 2000年

寒川 旭 『地震 なまずの活動史』, 大巧社, 173p. 2001年

徳島県教育委員会・徳島県郷土文化会館 埋蔵文化財資料展「掘ったでよ阿波」, 29p. 1991年

徳島県埋蔵文化財センター 徳島県埋蔵文化財年報, Vol.2, 1990年度, 132p. 1991年



第179図 地滑りに伴う低崖の分布

ケバをつけた面が滑り下がっている。矢印の方向に滑り動いている。

第180図は第181図の北西に位置し、この図の範囲外にある。

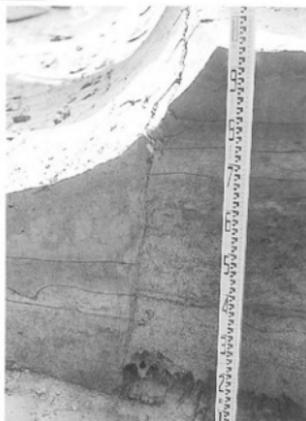
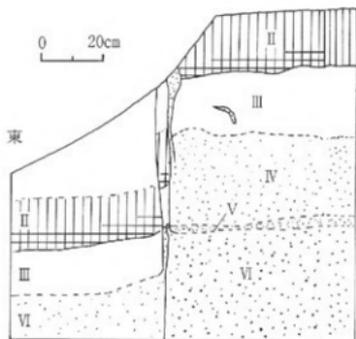
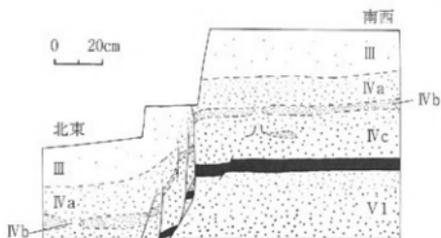


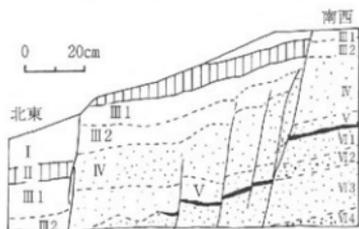
写真5 トレンチAの断面
(東大阪市教育委員会提供)



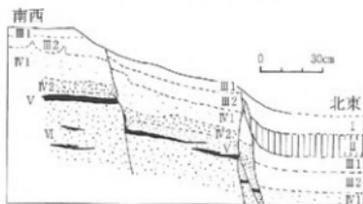
第180図 トレンチAの断面図



第181図 トレンチBの断面図



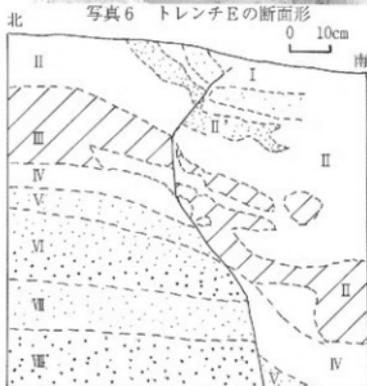
第182図 トレンチCの断面図



第183図 トレンチDの断面図



写真6 トレンチEの断面形



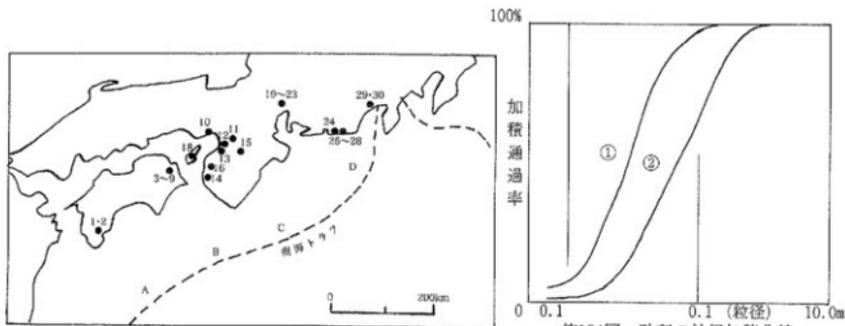
第183' 図 トレンチEの断面図



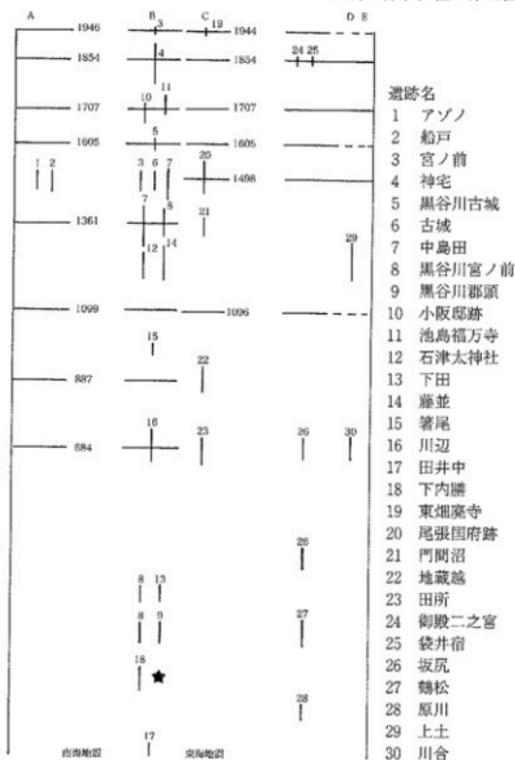
写真7 トレンチE'の断面形



第183'' 図 トレンチE'の断面図



第184図 砂利の粒径加積曲線
試料の採取位置は第45図に示した。



西暦は史料から求めた発生時期、縦線は遺跡で認められた地震跡の年代幅を示す。
星印は瓜生堂の地滑り跡の年代。

第185図 南海地震と東海地震の発生時期



写真8
トレンチBの断面形



写真9
トレンチCの断面形
(その1)



写真10
トレンチCの断面形
(その2)



写真11
トレンチDの断面形
(その1)



写真12
トレンチDの断面形
(その2)



写真13
平成11年度発掘区の南側壁
面矢印を境にして、下位の
地層が切断され、上位の地
層が覆っている。

(4) 瓜生堂遺跡第47-2次調査に伴う自然科学分析

はじめに

瓜生堂遺跡は大阪府河内平野の中央部、東大阪市西岩田、中小阪、若江北町、若江西新町にかけて広がる弥生時代～中世末にかけての複合遺跡である。今回発掘調査が行われた第47-2次調査においては、弥生時代前期の遺構や中期の畦畔・方形周溝墓、後期の銅罫、庄内期の土器だまり、中世の溝などが検出されている。

今回は、弥生時代前期、弥生時代中期、弥生時代後期～庄内期、中世の各時期の古環境に関する情報を得るために珪藻分析・花粉分析を実施する。また、調査区内で検出された弥生時代中期後半の方形周溝墓において、木棺内および竈棺内の堆積物について寄生虫卵分析を実施し、遺体埋葬に関する基礎資料を得る。

1. 試料

試料は、全て発掘調査時に調査担当者により採取されたものであり。珪藻分析・花粉分析試料は、弥生時代前期、弥生時代中期、弥生時代後期～庄内期の堆積物、および中世の溝内埋土から採取された試料番号1～10の計10点である。寄生虫卵分析試料は、弥生時代中期後半の木棺・竈棺内埋土、および中世の溝内埋土から採取された試料番号I～Xの計10点である。これら試料の詳細を表42に示す。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を適重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer and Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, b）などを参照する。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態を区分

し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数200個体以上の試料については、産出率3.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出した化石が現地性の化石か異地

表 42 分析対象試料表

珪藻分析・花粉分析		
試料番号	試料の状態	備 考
1	大溝1内埋土	中世・「瓜生堂竈守」の基礎に伴うもの
2	黒色粘土②	庄内期・土器だまり検出層
3	黒色粘土③	庄内期・土器だまり検出層
4	配石埋土	弥生時代後期から庄内期
5	配石埋土	弥生時代後期から庄内期
6	暗灰黒色粘質土	弥生時代後期・銅フタ検出層
7	緑灰色シルト	弥生時代中期の畦畔検出層
8	茶褐色粘土	弥生時代前期の遺構検出層
9	落ち込み	弥生時代前期の遺構
10	灰黒色粘土	弥生時代前期の遺構検出層

寄生虫卵分析		
試料番号	試料の状態	備 考
I	1号周溝墓1号木棺内埋土	弥生時代中期後半
II	1号周溝墓3号木棺内埋土	弥生時代中期後半
III	3号周溝墓2号木棺内埋土	弥生時代中期後半
IV	3号周溝墓4号木棺内埋土	弥生時代中期後半
V	4号周溝墓1号木棺内埋土	弥生時代中期後半
VI	4号周溝墓2号木棺内埋土	弥生時代中期後半
VII	4号周溝墓3号木棺内埋土	弥生時代中期後半
VIII	4号周溝墓5号木棺内埋土	弥生時代中期後半
IX	4号周溝墓竈棺内埋土	弥生時代中期後半
X	大溝1内埋土	中世・「瓜生堂竈守」に伴うもの

性の化石かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたっては、海水～汽水生種については小杉（1988）、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

（2）花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解、の順に物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

（3）寄生虫卵分析

試料15ccを量りとり、重さを測定して分析用試料とする。これについて水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理によるセルロースの分解、の順に物理・化学的処理を施し、濃集する。残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。なお、分析過程の各所で重量や容積の測定を行い、堆積物1ccあたりの検出個数を求められるようにする。

3. 結果

（1）珪藻分析

結果を表43・写真14・15に示す。珪藻化石は、いずれの試料からも100個体以上産出する。産出分類群数は33属247種であり、完形殻の産出率は約40～90%である。以下、試料別に産出種の特徴を述べる。

・試料番号10～2

全体的に優占する種はなく、淡水～汽水生種・流水性種・流水不定性種・陸生珪藻など、様々な生態性の種が低率で産出している。その中でも試料番号8は若干群集組成が異なり、淡水～汽水生種である*Fragilaria brevistriata* が約40%産出し、好止水性種の*Fragilaria construens*、好止水性種・好汚濁性種（Asai and Watanabe, 1995）の*F. construens fo. venter*などが若干産出する。その他は、様々な生態性の種が低率で産出する。なお、陸生珪藻とは、多少の湿り気のある乾いた環境に生育する種、好汚濁性種とは有機的に汚濁した水域で生育する種である。

・試料番号1

全体的には水生珪藻が優占する。大きく優占する種はないが、淡水～汽水生種・最下流性河川指標種（安藤, 1990）・好汚濁性種の*Cyclotella meneghiniana*、淡水～汽水生種・好汚濁性種の*Nitzschia palea*、好流水性種・中～下流性河川指標種群（安藤, 1990）の*Melosira varians*、流水不定性種（止水域にも流水域にも生育する種）の*Achnanthes hungarica*、好止水性種の*Gomphonema truncatum*などが10%前後産出する。なお、最下流性河川指標種とは、主に河川最下流部の三角洲などの環境で生育する種、中～下流性河川指標種とは、主に中～下流部、すなわち、河川沿いに河成段丘・扇状地・自然堤防・後背湿地といった地形が見られる環境で生育する種とされる。

表43 硅藻分析結果(1)

種 類	生態性			環境 指標種	指標種													
	塩分	pH	淡水		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10				
<i>Cocconeis acutellum</i> Ehrenberg	Euh-Meh			C1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cyclotella caspia</i> Grunow	Euh-Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Cyclotella striata</i> (Kuetz.)Grunow	Euh-Meh			B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Diploneis smithii</i> var. <i>rhombsica</i> Mereschkowsky	Euh-Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Nitzschia constricta</i> var. <i>subconstricta</i> Grunow	Euh-Meh				-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia sigma</i> (Kuetz.)W. Smith	Euh-Meh			E2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Achnanthes brevipes</i> var. <i>intermedia</i> (Kuetz.)Cleave	Meh			D1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>Amphora holtsatica</i> Hustedt	Meh			D1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora strigosa</i> Hustedt	Meh				-	-	-	-	4	-	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis permagna</i> (Bailey)Cleave	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Caloneis admodum</i> Mereschkowsky	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Diploneis pseudovalis</i> Hustedt	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7
<i>Fragilaria subsalina</i> (Grun.)Lange-Bertalot	Meh				-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia calida</i> Grunow	Meh				1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia filiformis</i> (W.Smith)Van Hoorck	Meh				1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia hungarica</i> Grunow	Meh			E1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Nitzschia littoralis</i> Grunow	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Nitzschia lorenziana</i> Grunow	Meh			E2	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>Nitzschia</i> sp-1.	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Opephora martyi</i> Heribaud	Meh			D1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Synedra pulchella</i> Kuetzing	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Synedra tubulata</i> Agardh	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Thalassiosira lacustris</i> (Grun.)Hasle	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	7
<i>Anomoeoneis sphaerophora</i> (Kuetz.)Pfitzer	Ogh-Meh	al-bi	ind		-	-	-	1	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Bacillaria paradoxa</i> Gmelin	Ogh-Meh	al-bi	l-rph	U	1	-	-	-	-	-	-	4	1	2	-	-	-	-
<i>Cyclotella atomus</i> Hustedt	Ogh-Meh	al-l	ind	S, U	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cyclotella meneghiniana</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-l	l-rph	L, S	14	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria brevistriata</i> Grunow	Ogh-Meh	al-l	l-rph	U	-	-	-	-	-	26	1	9	87	2	-	-	-	-
<i>Gomphonema pseudonagum</i> Lange-Bertalot	Ogh-Meh	al-l	ind	S	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula capitata</i> Ehrenberg	Ogh-Meh	al-l	r-ph	U	2	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula capitata</i> var. <i>elliptica</i> (Schulz)Cl.- Eu.	Ogh-Meh	al-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula capitata</i> var. <i>hungarica</i> (Grun.)Ross	Ogh-Meh	al-l	r-ph	U	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula goepfertiana</i> (Bleisch)H.L. Smith	Ogh-Meh	al-l	ind	S	-	-	-	-	-	1	-	2	1	-	-	-	-	-
<i>Navicula gregaria</i> Donkin	Ogh-Meh	al-l	ind	U	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula pusilla</i> W. Smith	Ogh-Meh	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Navicula pygmaea</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia frustulosa</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-Meh	al-bi	ind	U	-	2	-	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>Nitzschia levidensis</i> var. <i>victoriae</i> Grunow	Ogh-Meh	al-l	ind	U	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Nitzschia solis</i> (Kuetz.)W. Smith	Ogh-Meh	al-l	ind	S	19	-	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Hyphalodia gibberula</i> (Ehr.)J.G. Muller	Ogh-Meh	al-l	ind		-	-	3	2	2	9	1	2	4	6	-	-	-	-
<i>Achnanthes clevei</i> Grunow	Ogh-ind	al-l	l-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes exigua</i> Grunow	Ogh-ind	al-l	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	1	4	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes hungarica</i> Grunow	Ogh-ind	al-l	ind	U	37	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes inflata</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-l	r-ph	T	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	1	16	8	18	10	1	18	8	5	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes laterostrata</i> Hustedt	Ogh-ind	al-l	ind	T	-	1	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes minutissima</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-l	ind	U	-	1	2	7	4	-	7	-	1	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes montana</i> Krause	Ogh-ind	ind	ind	RI, T	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes rostrata</i> Desmup	Ogh-ind	al-l	r-ph	U	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes subhudsonis</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	2	-	-	-	-	-	3	-	1	-	-	-	-
<i>Amphora affinis</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-l	ind	U	2	-	1	2	4	3	1	3	2	1	-	-	-	-
<i>Amphora montana</i> Krause	Ogh-ind	ind	ind	RA	3	-	17	-	-	1	1	1	7	-	-	-	-	-
<i>Amphora normani</i> Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora pediculus</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	T	-	1	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Aulacoseira alpigena</i> (Grun.)Kraemer	Ogh-hob	ac-l	l-bi	N, U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-l	l-bi	N	-	-	1	-	2	-	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Aulacoseira granulata</i> (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-l	l-bi	M, U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Aulacoseira italica</i> (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-l	l-ph	U	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	2	-	-	-
<i>Caloneis aerophila</i> Bock	Ogh-ind	al-l	ind	RA	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.)Cleave	Ogh-ind	al-l	r-ph	U	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis leptosoma</i> Kramer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	BB	-	-	2	1	-	7	-	-	-	4	1	-	-	-
<i>Caloneis molaris</i> (Grun.)Kraemer	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.)Cleave	Ogh-ind	al-l	ind		1	-	-	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis silicula</i> var. <i>minuta</i> (Grun.)Cleave	Ogh-ind	al-l	ind		-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis neodiminuta</i> Kraemer	Ogh-ind	al-l	ind		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentalis</i> (Ehr.)Cleave	Ogh-ind	al-l	ind	U	1	3	2	-	5	2	3	-	-	-	-	-	-	1
<i>Cocconeis placentalis</i> var. <i>euglypta</i> (Ehr.)Cleave	Ogh-ind	al-l	r-ph	T	-	3	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentalis</i> var. <i>lineata</i> (Ehr.)Cleave	Ogh-ind	al-l	r-ph	T	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Craticula cuspidata</i> (Kuetz.)D. G. Mann	Ogh-ind	al-l	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Craticula halophila</i> (Grun. ex V. Hoorck)D. G. Mann	Ogh-ind	al-l	ind		-	-	-	-	-	1	1	-	2	-	-	-	-	-
<i>Cymatopleura soles</i> (Ehr.)W. Smith	Ogh-ind	al-l	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella aspera</i> (Ehr.)Cleave	Ogh-ind	al-l	ind	O, T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

表 43 硅藻分析結果 (2)

種 類	生態性			環境											
	塩分	pH	湧水		指標種	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
<i>Cymbella heteropleura</i> var. <i>minor</i> Cleve	Ogh-hob	ac-1l	l-ph		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella mesiana</i> Cholnoky	Ogh-ind	al-bi	l-bi	O	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella naviculiformis</i> Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	1	-	1	-	-	1	-	-
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	-	4	2	-	2	2	-	-	-	1	-
<i>Cymbella sinuata</i> Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	1	4	-	2	9	3	9	-	-	-	1
<i>Cymbella tumida</i> (Brob. ex Kuetz.) V. Heurck	Ogh-ind	al-1l	ind	T	1	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-
<i>Cymbella turgidula</i> Grunow	Ogh-ind	al-1l	r-ph	K, T	-	1	-	-	1	-	2	1	-	-	-
<i>Cymbella turgidula</i> var. <i>niponica</i> Skvortzov	Ogh-ind	al-1l	r-ph	T	-	2	-	1	1	-	1	-	-	-	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Breb.) Cleve	Ogh-ind	al-1l	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-1l	ind		-	4	2	1	3	-	3	3	26	-	-
<i>Diploneis parva</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	1	-	1	-	1	-	1	-
<i>Eunotia bilunaris</i> (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-1l	l-ph		3	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Eunotia duplicoraphis</i> H. Kobayasi	Ogh-hob	ac-1l	l-ph		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Eunotia fallax</i> A. Cleve	Ogh-hob	ac-bi	ind	RA	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia gracialis</i> Meister	Ogh-hob	ind	l-bi		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia naegeli</i> Nigula	Ogh-hob	ac-1l	ind		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia pectinialis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-1l	ind	O	-	-	-	1	-	-	3	-	1	-	-
<i>Eunotia pectinialis</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-1l	ind	O	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-1l	l-ph	RR, O, T	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> Grunow	Ogh-hob	ac-1l	l-ph	RR, O	-	1	3	1	2	-	-	-	-	1	2
<i>Fragilaria bidens</i> Heiberg	Ogh-ind	al-1l	r-ph		-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>benzoes</i>	Ogh-ind	al-1l	ind	T	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>gracilis</i> (Oestr.) Hustedt	Ogh-ind	al-1l	l-ph	T	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>mesolepta</i> (Rabh.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-1l	l-ph	T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>rupens</i> (Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-1l	l-ph	U	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria construens</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-1l	l-ph	U	-	1	-	1	4	3	6	19	-	-	-
<i>Fragilaria construens</i> fo. <i>venter</i> (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	al-1l	l-ph	S	-	1	1	4	3	7	11	3	-	-	-
<i>Fragilaria construens</i> var. <i>triundulata</i> Reichelt	Ogh-ind	al-1l	l-ph		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria exigua</i> Grunow	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Fragilaria parasitica</i> (K. Smith) Grunow	Ogh-ind	al-1l	ind	U	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-
<i>Fragilaria pinnata</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-1l	l-ph	S	-	-	-	1	5	2	-	8	1	-	-
<i>Fragilaria pinnata</i> var. <i>lanzettella</i> (Schum.) Hustedt	Ogh-ind	al-1l	ind	S	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-1l	ind	S	10	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
<i>Fragilaria ulna</i> var. <i>arcus</i> (Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-1l	l-ph	T	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	al-1l	r-ph	K, T	-	2	1	2	4	-	2	-	-	-	-
<i>Frustulia constricta</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.) De Toni	Ogh-ind	al-1l	ind	U	-	1	1	-	-	-	-	-	2	1	-
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-1l	ind	U	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	ind	l-ph	O	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema angustatum</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-ind	al-1l	ind	U	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema angustatum</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-1l	unk		-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema azur</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind		1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema clevei</i> Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-1l	l-ph	O, U	2	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema helveticum</i> Brun	Ogh-unk	ind	r-ph	T	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	3	5	7	18	7	2	7	1	4	1	-
<i>Gomphonema parvulum</i> var. <i>lagenula</i> (Kuetzing) Frenquelli	Ogh-ind	ind	r-ph	S	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema pusillum</i> (Grun.) Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-1l	ind		-	1	-	7	-	-	8	-	2	-	-
<i>Gomphonema sarcophagus</i> Gregory	Ogh-ind	al-1l	ind		1	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	17	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Gyrosigma acuminatum</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-1l	ind		-	1	-	-	-	28	-	1	-	-	-
<i>Gyrosigma scalproides</i> (Rabh.) Cleve	Ogh-ind	al-1l	r-ph		-	-	-	-	-	-	2	1	1	-	-
<i>Gyrosigma spencerii</i> (K. Smith) Cleve	Ogh-ind	al-1l	r-ph	U	2	1	-	-	1	-	3	1	-	-	-
<i>Gyrosigma</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-1l	ind	RA, U	-	5	21	4	2	-	2	1	4	6	-
<i>Melosira varians</i> Agardh	Ogh-hil	al-bi	r-ph	K, U	12	1	-	-	2	-	-	1	-	-	-
<i>Meridion circulare</i> var. <i>constrictum</i> (Ralfs) V. Heurck	Ogh-ind	al-1l	r-bi	K, T	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula accomoda</i> Hustedt	Ogh-unk	al-1l	ind	S	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Navicula angusta</i> Grunow	Ogh-ind	ac-1l	ind	T	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula bryophila</i> Boye-Petersen	Ogh-ind	al-1l	ind	RI	-	-	-	2	-	2	-	-	1	-	-
<i>Navicula capitatoradiata</i> Germain	Ogh-ind	al-1l	r-ph	K, T	1	-	-	1	-	-	5	1	-	-	-
<i>Navicula clementis</i> Grunow	Ogh-ind	al-1l	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula cohnii</i> (Hilse) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-bi	ind	RI	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula concentrica</i> Carter	Ogh-unk	unk	unk	T	-	-	-	3	-	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula confervacea</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RR, S	6	-	2	5	1	-	-	3	-	1	-
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-1l	ind	RA, T	1	10	6	1	-	1	2	-	5	-	-
<i>Navicula contenta</i> fo. <i>biceps</i> (Arnotti) Hustedt	Ogh-ind	al-1l	ind	RA, T	-	23	5	10	8	12	14	7	14	2	-
<i>Navicula cryptocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-1l	ind	U	6	-	-	3	-	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula cryptotenella</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	T	3	-	2	-	-	-	2	-	1	-	-
<i>Navicula detrasii</i> Oestrup	Ogh-ind	al-1l	r-ph	K, U	1	2	2	-	1	-	2	-	-	-	-
<i>Navicula digitoradiata</i> (Greg.) A. Schmidt	Ogh-ind	al-1l	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-
<i>Navicula elginensis</i> (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-1l	ind	O, U	-	1	22	5	2	17	3	1	-	-	-

表43 球藻分析結果(3)

種 類	生態性			環境 指標種	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	塩分	pH	流水											
<i>Navicula oligonensis</i> var. <i>cuneata</i> H. Kobayasi	Ogh-ind	al-11	ind	-	-	1	3	-	-	-	1	2	-	-
<i>Navicula oligonensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krauss.) Patrick	Ogh-ind	al-11	r-ph	U	-	1	2	6	-	2	-	2	-	-
<i>Navicula hambergii</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	1	2	1	-	-	-	-	-
<i>Navicula hussacia</i> Krauss	Ogh-hob	ac-11	ind	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula husta</i> var. <i>gracilis</i> Skvortzow	Ogh-ind	al-11	1-ph	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Navicula ignota</i> Krauss	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Navicula jaagii</i> Meister	Ogh-unk	unk	unk	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula kotochyi</i> Grunow	Ogh-ind	al-11	ind	-	1	1	-	1	-	-	1	-	-	-
<i>Navicula lapidosa</i> Krauss	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula medioconvexa</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	unk	-	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula menisculus</i> Schumann	Ogh-ind	al-11	r-ph	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-11	ind	RA, S	1	8	8	3	3	32	3	2	8	10
<i>Navicula mutica</i> var. <i>ventricosa</i> (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-11	ind	RI	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Navicula notsanda</i> Pantocsek	Ogh-ind	al-11	ind	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-
<i>Navicula oppugnat</i> Hustedt	Ogh-ind	al-11	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-
<i>Navicula plausibilis</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula pseudocuneata</i> H. Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph	-	1	-	2	1	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula pusilla</i> var. <i>incognita</i> (Krauss) Lange-B.	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Navicula radialis</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-
<i>Navicula radiosa</i> fo. <i>niponica</i> Skvortzow	Ogh-ind	al-11	ind	T	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-
<i>Navicula rhynchocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-11	ind	U	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-
<i>Navicula seminulum</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB, S	4	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula subcostulata</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula submyopharum</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	4	1	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula symmetrica</i> Patrick	Ogh-ind	al-11	ind	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula tantula</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI, U	-	-	-	-	1	3	1	-	-	-
<i>Navicula tenelloides</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	r-ph	T, U	-	-	-	2	1	-	2	-	-	-
<i>Navicula tokyonensis</i> H. Kobayasi	Ogh-ind	ind	1-ph	RI	-	1	-	-	1	-	1	-	1	-
<i>Navicula tridentata</i> Krauss	Ogh-ind	al-bi	ind	RI	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula tripunctata</i> (O. Muller) Bory	Ogh-hil	al-11	1-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Navicula trivialis</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-11	ind	-	2	-	-	-	-	-	2	-	-	-
<i>Navicula viridula</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-11	r-ph	K, U	1	2	1	7	-	2	1	1	-	-
<i>Navicula viridula</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-ind	al-11	r-ph	U	-	-	-	4	-	1	-	-	-	-
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rostellata</i> (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-11	r-ph	K, U	1	1	-	7	-	2	-	11	-	-
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rostrata</i> Skv.	Ogh-ind	al-11	r-ph	-	1	-	-	3	-	2	-	-	-	-
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	1	5	2	1	-	1	3	4	3	-
<i>Neidium affine</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ind	1-bi	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium affine</i> var. <i>hankense</i> (Skv.) Reim.	Ogh-ind	ac-11	1-ph	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	-	1	1	3	-	2	-	-	-	-
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	1-ph	-	1	1	2	1	1	2	1	1	-	-
<i>Neidium bisulcatum</i> (Lagerst.) Cleve	Ogh-ind	ac-11	ind	RI	-	-	2	1	-	5	-	1	-	-
<i>Neidium gracile</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-11	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Neidium iridis</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-11	1-bi	O	-	-	-	-	1	1	-	1	1	-
<i>Neidium productum</i> (W. Smith) Cleve	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	1	1	9	1	-	-	3	-	-	-
<i>Nitzschia angustata</i> (W. Smith) Cleve	Ogh-ind	al-11	1-bi	-	-	1	-	-	1	-	3	-	2	-
<i>Nitzschia brevisissima</i> Grunow	Ogh-ind	al-11	ind	RB, U	1	9	6	5	1	2	-	1	5	1
<i>Nitzschia debilis</i> (Arnott) Grunow	Ogh-ind	al-11	ind	RB, U	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Nitzschia dissipata</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-11	r-ph	T	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia fonticola</i> Grunow	Ogh-ind	al-11	ind	U	-	6	-	1	3	-	2	-	2	-
<i>Nitzschia hantzschiana</i> Rebenhorst	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Nitzschia linearis</i> W. Smith	Ogh-ind	al-11	r-ph	U	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Nitzschia paleacea</i> Grunow	Ogh-ind	al-11	ind	U	9	1	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia sigmoides</i> (Ehr.) W. Smith	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia terrestris</i> (Pot.) Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	3	1	-	-	-	-
<i>Nitzschia tubicola</i> Grunow	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia umbonata</i> (Ehr.) Lange-B.	Ogh-ind	al-11	ind	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	1	7	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W. Smith	Ogh-ind	al-11	1-ph	O	1	1	-	-	1	-	-	1	1	-
<i>Pinnularia appendiculata</i> (Ag.) Cleve	Ogh-hob	ind	ind	RB	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia brasili</i> (Grun.) Cleve	Ogh-hob	ac-bi	1-ph	-	-	-	2	2	-	-	-	3	-	-
<i>Pinnularia brasili</i> var. <i>amphicephala</i> (A. Meyer) Hustedt	Ogh-hob	ac-bi	1-ph	S	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia brevissonii</i> (Kuetz.) Rebenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia breviscostata</i> Cleve	Ogh-ind	ac-11	ind	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia divergens</i> W. Smith	Ogh-hob	ac-11	1-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia divergens</i> var. <i>decreasens</i> (Grun.) Krammer	Ogh-hob	ac-11	ind	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia divergentissima</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-11	ind	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-11	ind	O	1	-	-	-	1	1	1	1	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>linearis</i> Skvortzow	Ogh-hob	ac-11	ind	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia hemiptera</i> (Kuetz.) Cleve	Ogh-hob	ind	1-ph	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia mesolepta</i> (Ehr.) W. Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	-	1	2	-	-	-	-	-	9	-
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-11	ind	S	-	2	-	-	-	-	-	-	2	-

表43 珪藻分析結果(4)

種 類	生態性		環境	相対種										
	塩分	pH		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-11	l-ph	0	-	1	-	1	-	-	-	-	3	-
<i>Pinnularia obscura</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	5	-	1	1	3	-	-	-	-
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-11	ind	RA	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Kramer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	7	14	1	1	9	2	-	21	-
<i>Pinnularia schroederii</i> (Kuetz.)Kramer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1	1	-	-	10	1	1	2	2
<i>Pinnularia silvatica</i> Petersen	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia stomatophora</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-11	l-ph	RB, S	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-11	ind	RB, S	-	1	2	1	1	2	1	-	1	-
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-11	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Pinnularia subatomatophora</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-11	l-ph		-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia cf. transversa</i> (A. Schmidt)Mayer	Ogh-hob	ac-11	l-ph		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia ueno</i> Skvortzov	Ogh-hob	ac-11	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	0	-	-	1	1	-	2	-	1	1	1
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	3	2	3	-	2	-	-	-	1
<i>Rhopalodia abbreviata</i> (Ag.)Lange-B.	Ogh-hil	al-11	r-ph	K, T	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.)J. Müller	Ogh-ind	al-11	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Rhopalodia gibba</i> var. <i>ventricosa</i> (Kuetz.)H. & M. Peray	Ogh-ind	al-11	ind		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Rhopalodia quimbriana</i> Skvortzov	Ogh-hil	al-11	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Sellaphora bacillum</i> (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-11	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Sellaphora laevis</i> (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind		1	-	1	1	2	-	1	-	3	-
<i>Sellaphora pseudopopula</i> (Krasske)Lange-B.	Ogh-ind	ind	ind		1	1	1	-	-	2	-	-	-	-
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.)Mereschowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	5	5	6	17	7	-	5	2	6	-
<i>Sellaphora pupula</i> fo. <i>capitata</i> (Skvortzov & Mayer)	Ogh-ind	ind	ind		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	2	1	1	-	-	-	1	-
<i>Stauroneis kriegeri</i> Patrick	Ogh-ind	ind	unk	T	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Stauroneis lauenburgiana</i> Hustedt	Ogh-ind	al-11	ind		-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
<i>Stauroneis sphenocenteron</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	0	-	-	1	2	-	1	-	-	-	-
<i>Stauroneis tenera</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1
<i>Stauroneis thermicola</i> (Petersen)Lund	Ogh-unk	unk	unk	RT	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Stephanodiscus hantzschii</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-11	l-bi	M, U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stephanodiscus</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-11	r-ph	U	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Surirella bobemica</i> Maly	Ogh-ind	ind	unk		1	-	-	1	-	1	-	-	-	-
<i>Surirella ovata</i> var. <i>pinnata</i> (W. Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-11	l-ph	U	-	1	-	1	-	2	-	1	-	-
海水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種合計					0	0	0	0	1	0	1	0	4	3
汽水生種合計					4	3	0	0	5	0	3	2	5	23
淡水～汽水生種合計					46	4	4	9	36	12	16	97	14	8
淡水生種合計					172	201	207	200	165	189	195	110	188	71
珪藻化石総数					222	208	211	209	207	201	215	209	211	105

凡例

H. R. : 塩分濃度に対する適応性	pH : 水素イオン濃度に対する適応性	C. R. : 沈水に対する適応性
Eub-Meh : 海水生種～汽水生種	al-bi : 真アルカリ性種	l-bi : 真正水性種
Meh : 汽水生種	al-il : 好アルカリ性種	l-ph : 好止水性種
Ogh-Meh : 淡水～汽水生種	ind : pH不定性種	ind : 沈水不定性種
Ogh-hil : 貧塩好塩性種	ac-il : 好酸性種	r-ph : 好沈水性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種	ac-bi : 真酸性種	unk : 沈水不明種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種	unk : pH不明種	
Ogh-unk : 貧塩不明種		

環境指標群

- E: 内湾前指標, C1: 海水基指標, D1: 海水砂質干潟指標,
 E1: 海水泥質干潟指標, E2: 汽水泥質干潟指標 (以上は小島, 1988)
 J: 上流性河川指標, K: 中～下流性河川指標, L: 最下流性河川指標, M: 湖沼浮遊性種,
 N: 湖沼沼澤地指標, O: 沼沢地付着性種 (以上は安藤, 1990)
 S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上はAnai, K. & Watanabe, T., 1986)
 R: 陸生指標 (RA:A群, RB:B群, RI群, 伊藤・堀内, 1991)

(2) 花粉分析

結果を表45・写真16・17に示す。いずれの試料も木本花粉ではモミ属・マツ属・コナラ属アカガシ亜属が多く、草本花粉ではイネ科が多い傾向が見られる。試料番号10～7ではモミ属・アカガシ亜属をはじめ、ツガ属・スギ属・コナラ亜属などが認められ、試料番号6～2ではマツ属の割合が多くなっている。草本花粉については、いずれの試料もイネ科を中心にカヤツリグサ科などが認められ、水

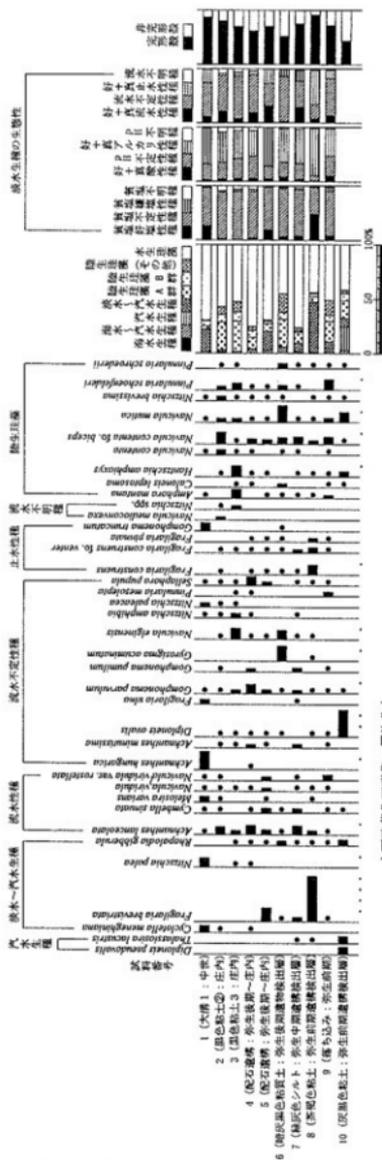


表44 主要珪藻化石群集の層位分布

主要珪藻化石群集の層位分布

汽水一淡水生物出庫・各種出庫率は余体比率、淡水生物の比率は汽水生物の比率を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は3%未満の試料について検出した種類を示す。

表 45 花粉分析結果

種 類	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
木本花粉											
マキ属	-	-	1	3	9	3	3	8	15	6	
モミ属	3	20	17	45	67	33	70	19	36	92	
ツガ属	3	17	11	28	25	8	25	14	1	13	
トウヒ属	-	-	1	-	1	-	-	-	-	1	
ヤツタ属等 虫媒属	-	-	1	3	6	6	1	2	1	1	
マツ属 虫媒等 虫媒属	60	25	35	18	27	15	9	6	7	10	
マツ属 (不明)	39	22	71	28	20	11	6	10	17	16	
コウヤマキ属	-	8	9	4	3	7	3	6	4	2	
スギ属	2	17	30	20	11	10	15	26	21	12	
イチイ科-イモガヤ科-ヒノキ科	-	8	9	6	4	-	2	9	1	3	
ヤナギ属	3	-	-	2	-	-	-	-	-	1	
ヤマキ属	-	-	-	12	-	-	1	-	-	-	
サワグルミ属	-	-	-	1	-	1	-	2	2	-	
クルミ属	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	
クマシダ属-アヤダ属	8	2	-	3	9	2	3	7	1	4	
ハンパミ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	
カバノキ属	1	-	-	-	-	-	1	-	-	1	
ハンノキ属	24	4	1	1	3	-	2	1	5	5	
ブナ属	3	2	2	5	8	2	4	7	7	6	
コナラ属 コナラ産属	8	19	12	19	12	3	16	19	34	15	
コナラ属 アカガシ産属	2	29	16	36	35	1	98	70	62	36	
クワ属	-	-	1	3	1	2	8	-	2	1	
シロノキ属	2	12	2	1	2	-	5	3	3	2	
ニレ属-ケヤキ属	10	6	2	8	5	1	5	7	5	7	
エノキ属-ムクノキ属	11	1	-	2	-	-	5	2	8	6	
キハダ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
センダン属	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
モクノキ属	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	
カヌツギ属	-	1	1	-	1	-	1	-	-	-	
トナリノキ属	1	1	-	1	-	-	-	-	-	1	
ブドウ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
ツタ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
ノボドウ属	1	-	-	2	1	-	-	-	-	-	
シゲノキ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
グミ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
ウコギ科	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	
ミズキ属	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	
ツツジ科	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	
イボクノキ属	1	-	-	-	1	-	1	-	-	-	
ガマズミ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
スイカズラ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
草本花粉											
ガヤ属	-	1	1	-	1	1	1	43	19	21	
ミタリ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
オオムギ属	6	2	-	-	1	-	-	12	-	-	
イネ科	210	44	142	122	163	20	32	179	192	25	
カサザリタネ科	9	36	36	52	8	10	36	12	9		
ミズアオイ属	1	-	-	-	1	-	1	6	-	-	
クワ科	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サナエタゲ節-フナギツカミ節	1	6	16	21	5	11	3	5	3	4	
ソバ属	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アカザ科	15	2	1	-	-	-	-	1	-	-	
ササコ科	4	-	-	-	-	-	-	3	-	-	
キンボウグ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
キンボウグ科	2	2	-	-	1	1	-	-	-	-	
アブラナ科	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
バラ科	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	
マメ科	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	
アズキ科	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
キヨシダキ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	
ヒシ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
セリ科	1	-	2	1	-	-	-	-	-	-	
レンコ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
オオバコ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ゴキウ属	39	-	3	1	-	1	-	-	-	-	
ヨネ草属	6	2	12	19	5	-	3	2	33	4	
オナムミ属	-	-	12	-	-	-	-	-	2	-	
キタ藍科	1	-	-	1	-	1	1	-	-	-	
タンポポ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
不明花粉	14	19	11	16	12	6	19	12	16	8	
シダ類 胎子											
ヒカゲノカズリ属	-	-	9	-	6	27	2	1	2	-	
ゼンマイ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
ミズウラボシ属	9	2	-	3	10	2	1	6	1	-	
サンショウモ	2	10	4	16	-	2	1	1	-	-	
アカウキタサ属	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イノモトウ属	3	18	3	3	24	33	26	6	7	11	
他のシダ類 胎子	23	159	57	76	135	135	141	45	36	109	
合 計											
木本花粉	203	200	225	254	255	100	259	220	234	242	
草本花粉	317	97	224	219	129	42	55	289	263	61	
不明花粉	14	19	11	15	12	6	18	12	19	8	
シダ類 胎子	72	187	73	98	175	199	171	59	46	120	
総計 (不明を除く)	592	494	522	571	559	341	485	608	543	453	

生植物のガマ属・ミクリ属・オモダカ属・ミズアオイ属や、水生シダ植物のミズワラビ属・サンショウモなども認められる。特に試料番号10~8では、他の試料と比べて水生植物のガマ属が多くみられた。試料番号1についてみると、木本花粉ではマツ属(ニヨウマツ類)が多く、ハンノキ属・エノキ属・ムクノキ属などがみられ、草本花粉ではイネ科が多産し、ゴキツル属や栽培種であるソバ属、水生植物のオモダカ属・ミズアオイ属・ヒシ属・ミズワラビ属・サンショウモ・アカウキクサ属なども認められる。

(3) 寄生虫卵分析

結果を表47に示す。ダイアグラムは花粉分析の結果と合わせて図2に示す。試料番号X以外は花粉化石・シダ類胞子・寄生虫卵ともほとんど産出しなかった。試料番号Xにおいては花粉化石が多く産出しており、木本花粉ではマツ属が多く、ハンノキ属・コナラ属アカガシ亜属・エノキ属・ムクノキ属などが認められる。草本花粉では、イネ科が多産し、ゴキツル属やソバ属もみられる。また、ガマ属・オモダカ属・ミズアオイ属・ミズワラビ属・サンショウモ・アカウキクサ属などの水生植物も認められた。

表47 寄生虫卵分析結果

種 類	試料番号	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
木本花粉											
モミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
ツグ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	8
マツ属単雄束亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
マツ属複雄束亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	50
マツ属(不明)	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	89
スギ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
クマツグミ属-アサダ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6
カバノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ハンノキ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	32
ツバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9
コナラ属アカガシ亜属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	32
クリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
シイノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
ニレ属-クサキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	19
アサチカラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
センシツル属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
イボクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
トネリコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
草本花粉											
ガマ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
オモダカ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
イネ科	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	208
アカウツリグサ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11
ミズアオイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
タワ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10
ギシギシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ササユヅ属-ウナギツカミ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2
ソバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6
アカ芋科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10
ナゲシコ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13
キンポウグ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
キンポウグ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
アブナ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
バラ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
アリノトウグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
セリ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オオバコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
ゴキツル属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	22
ヨモギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6
キク亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
タンポポ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
不明花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15
シダ類胞子											
ヒカゴノカズラ属	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ミズワラビ属	1	1	-	1	1	-	1	-	-	-	5
サンショウモ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6
アカウキクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	25
イノモトソク属	3	6	-	4	6	1	6	2	-	-	13
他のシダ類胞子	6	12	14	16	10	11	24	6	-	-	75
合 計											
木本花粉	2	1	0	1	0	3	0	2	1	280	
草本花粉	2	1	0	0	0	0	1	0	0	315	
不明花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	
シダ類胞子	9	21	14	21	18	12	33	8	0	124	
総計(不明を除く)	13	22	14	22	18	15	34	10	1	719	
その他											
糞虫卵	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
炭虫卵	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
1ccあたりの花粉総数	2.67	1.20	0.67	0	0	2.33	1.33	0.33	124		
1ccあたりの寄生虫卵総数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6.63	

4. 考察

(1) 堆積環境の変遷

全般的に試料番号10~2の産出陸産化石の特徴は、極端に優占する種はなく、流水性種・止水性種・陸生陸産など、異なる生態性の種が低率で産出することがあげられる。このような異なる生態性の種が低率で産出する群集は混合群集とされ、氾濫堆積物などに認められることが多い(堀内ほか, 1996)。

河内平野では弥生時代中期頃から小規模な洪水を繰り返していることが知られており(那須, 1989)、本遺跡も頻繁に河川の氾濫堆積の影響を受ける環境であったと考えられている(松田, 1999)。このことから、今回の47-2次調査地点においても、基本的には氾濫堆積物が分布する後背湿地のような場

所に遺構が構築されていたと思われる。また、全般的に特定の陸生珪藻が多産する試料がないことから、乾いた環境が安定して続く期間は短く、頻繁に氾濫の影響を受けるような環境であったと思われる。遺構はこの短期間の安定時期に構築されたと考えられ、それにより氾濫堆積物が攪乱を受けていると考えられる。また、少量含まれる陸生珪藻は、遺構が構築された安定時期の状況を反映している可能性がある。

以下に時代別・層位別に堆積環境について述べる。

弥生時代前期の遺構検出層ないし遺構埋土から採取された試料番号10～8のうち、遺構検出層である試料番号10・8では汽水生、ないし汽水～淡水生種を伴っていた。特に試料番号8では淡水～汽水生種の*Fragilaria brevistriata* が約40%産出し、止水性種の*Fragilaria construens*、*F. construens* fo. *venter* などが若干認められており、干潟後背の海岸湿地のような場所に堆積した堆積物の可能性がある。この点については調査区の古地理情報を含めて再評価する必要がある。

弥生時代中期の畦畔の検出層である試料番号7は、典型的な混合群集の特徴を示した。このことから、本時期の水田耕作は氾濫堆積物を利用して行われていた可能性が考えられる。ただし、混合群集は水田耕土のような人為的な攪乱作用が及んでいる堆積物中でも認められる。畦畔堆積物が水田耕土を利用しているとすれば、ここでの珪藻群集は当時の水田の様態を反映している可能性もある。

弥生時代後期の遺構検出層、弥生時代後期～庄内期の配石遺構内堆積物、庄内期の堆積物の珪藻化石群集もまた混合群集の特徴を示したが、陸生珪藻の産状に着目すると、配石遺構(試料番号4・5)とそれ以外の堆積物では多少の違いが認められる。陸生珪藻の産状は、上記したようにいずれも特定の種が多産することはないが、総陸生珪藻の出現率は配石遺構で低く、それ以外の堆積物で高い傾向がある。このような傾向は、各地点の地下水位の違いや、堆積後の状況の違いなどを反映している可能性があり、遺構の配置や土地条件を検討する上で興味深い結果といえる。

中世の瓜生堂庵寺に伴う大溝1内埋土である試料番号1からは、流水性種・流水不定性種・止水性種などの水生珪藻が産出する。よって、大溝1は何らかの水の影響を受けていたと思われる。また、好汚濁性種が産出することから、水質は有機的に汚濁していた可能性がある。

(2) 周辺植生

上記したように、調査対象とされている堆積物は、洪水による氾濫と人間の生業に伴う攪乱を多く受けている。したがって今回分析により得られた結果は、遺跡周辺の局地的な植生ではなく、より広域的な植生を反映していると考えられる。

弥生時代前期～中期とされている試料番号10～7では、アカガシ亜属とモミ属が主体であり、スギ属・コナラ亜属などが認められている。このことから、当時の遺跡周辺にはアカガシ亜属を中心とした常緑広葉樹が、モミ属・ツガ属・スギ属などの温帯針葉樹とともに生育していたものと推定される。草本類についてみると、イネ科とともに水生植物のガマ属が比較的多く認められる。ガマ属は湿地などの多く認められることから、周辺の低地には湿地のような環境が存在していたと思われ、河川の氾濫堆積とともに遺跡に運搬されたと考えられる。

大阪平野における既存の古植生研究結果をみると、それまで広がっていたコナラ亜属を中心とした落葉樹林が、アカホヤ火山灰降灰後の約6,300年前以降、アカガシ亜属を中核としてモミ・ツガ・マツ・スギ・コウヤマキ・シイ・イヌマキ・コナラなどの各属や、ヤブツバキ・クスノキ科の樹種も加わるような照葉樹林に移行したとされている(前田, 1984)。このことは、分析結果と調和的である。

弥生時代後期～庄内期とされている試料番号6～2では、それまでと同じくアカガシ亜属やモミ属などからなる組成を示すが、マツ属複雑管束亜属(ニヨウマツ類)が増加しているのが特徴である。

マツ属、特にニヨウマツ類の増加は、一般に森林破壊による二次林の増加や植林などによる、人為的な植生改変に基づくものとして知られている（例えば波田，1987など）。ここでマツ属の増加の原因としては、このような森林伐採などの人為的な植生干渉の影響が考えられる。ただし、マツ属の分布拡大に関しては、人為的影響のほか後背地域の地形環境の変化、すなわち土地の条件が悪化した場所の増加などにより分布域を広げる可能性もあり、その分布拡大様式については慎重に検討する必要がある。

本地域では巨摩・若江北遺跡第5次や瓜生堂遺跡第47-1次において同時期の花粉分析結果がある（古環境研究所，1996，2000）。これらの結果では、弥生時代前期から中期にカシ類を主体とする照葉樹林が成立しており、弥生時代中期末から後期にカシ林が減少、弥生時代後期から古墳時代にかけてカシ林が拡大し、シイの増加から照葉二次林が拡大した可能性が推定されている。今回の結果は、これらの結果と弥生時代後期にアカガシ亜属が減少している点で調和的である。ただし、今回の結果では弥生時代後期末から古墳時代の層準ではアカガシ亜属の増加が認められない。また、弥生時代後期以降のマツ属の増加も顕著である。このようなマツ属の増加傾向は大阪平野の花粉分析で確認されている地点もあり、マツ属は約2,000年前から増加し始め、約1,500年前以降から著しく高率となることが指摘されている（那須，1980；前田，1984など）。このような地点による花粉化石群集変遷の違いは、堆積物の成因、局地的な植生の違い、後背地域の微地形の違いによる植生の違いに起因する可能性がある。今後、調査地域の地形発達史などの情報を含めて総合的に評価する必要がある課題である。なお、本時期も、草本類ではイネ科を中心にカヤツリグサ科などが認められるが、ガマ属・オモダカ属・ミズアオイ属・ミズワラビ属・サンショウモなどの水生植物も認められている。このことから、依然として周辺低地にこれらの種が生育できるような湿地が存在していたと考えられる。

試料番号1、および寄生虫卵分析の試料番号Xは、瓜生堂廃寺に伴う中世の試料とされている。木本類ではマツ属が半数を占め、ハンノキ属・エノキ属・ムクノキ属・センダン属などが認められる。マツ属については先に述べたように植生干渉の結果の代償植生と考えられ、草本類の割合も増加していることから、周辺丘陵部などの伐採が進んでいったものと推測される。ハンノキ属は湿った低地や河川沿いなどに生育する種が多く、集落の周辺にふつうにみられる種類である。また、エノキは古くから神が宿る木と考えられ、神社の境内や人里に多く植えられており、センダンも庭木や街路樹として植えられていることが多い。これらのことから、ハンノキ属・エノキ属・ムクノキ属・センダン属は後背地の植生ではなく、遺跡周辺の同地的要素を反映している可能性が高い。しかしながら、これらの種が野生のものか、人間により植えられたかは明言しがたい。草本類は依然としてイネ属が中心であるが、ゴキツル属が次いで多くみられる。ゴキツル属は低地の水辺や湿地に生える蔓植物であり、そのほかにもオモダカ属・ミズアオイ属・ヒシ属・ミズワラビ属・サンショウモ・アカウキクサ属などの水生植物が認められることから、遺跡およびその周辺にこれらの種類が繁茂するような湿地が存在したと思われる。

また、栽培植物であるソバ属が認められることから、ソバの栽培が行われていたと推測される。

(3) 木棺・墓棺内埋土について

寄生虫卵分析を行った試料番号I～IXは、弥生時代中期後半とされている周溝墓木棺・甕棺内より採取された埋土である。寄生虫は、それに感染した中間宿主、あるいは寄生虫卵に汚染されたものなどを摂取することで、終宿主（ヒト）に感染する。寄生虫に関する症例は近年こそ少ないが、その昔日本にも蔓延していたとされている（吉田，1991）。したがって寄生虫に感染したヒトが埋納された場合、覆土中から寄生虫卵が検出されることも考えられた。しかしながら分析の結果、寄生虫卵は1

個体も検出されず、花粉化石・シダ類胞子も多くは認められなかった。認められた花粉化石の中ではツガ属・マツ属・スギ属など針葉樹に由来する花粉化石が多く、それ以上にイノモトソウ属をはじめとするシダ類胞子が多く認められた。一般的に花粉・シダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている(中村, 1967; 徳永・山内, 1971)。寄生虫卵が花粉化石とほぼ同程度の保存性を持つとされていることを考慮すると、花粉化石や寄生虫卵などは堆積後の経年変化により分解・消失し、分解に強い花粉・シダ類胞子が選択的に残された可能性がある。また、棺内の花粉分析では、群集組成に献花の影響が認められることがあるが、今回の結果からは献花の可能性を明言することはできない。

以上、木棺および甕棺内の土壌中には寄生虫卵や花粉化石はほとんど含まれていなかった。このような産状は、巨摩・若江北遺跡の調査でも確認されており、木棺内の堆積物が埋没後に周囲から供給された堆積物である可能性が高いと推定されている(金原ほか, 1995)。今回の場合も同様な可能性が考えられる。

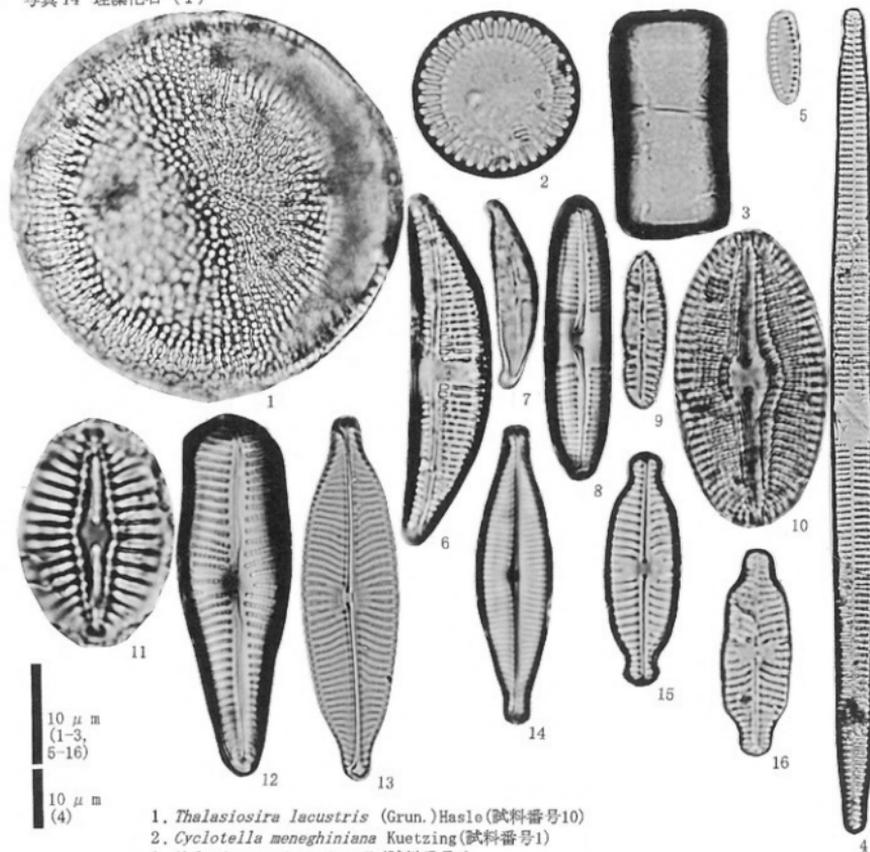
一方、中世の瓜生堂庵寺に伴う大溝内埋土である試料番号Xでは、わずかであるが3個体の寄生虫卵が検出された。これは1ccあたりの寄生虫卵総数に換算すると1個体にも満たない。一般に土壌1cm³あたり100個未満の寄生虫卵の検出については、ある程度の人口密度を持つ集落による汚染の範囲内とみなされており、トイレ遺構の検証例に至っては1cm³あたり1万~数万個が検出されている(金原ほか, 1995a, b)。このことから考えると、検出された寄生虫卵は集落による汚染の範囲であるといえる。

引用文献

- 安藤一男 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p.73- 88. 1990年
- Asai, K. and Watanabe, T. Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and Saproxenic taxa. Diatom, 10, p.35-47. 1995年
- 波田善夫 松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究—松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の攪乱とその動態について—, 資料集, p.41-49, 日本自然保護協会. 1987年
- 原口和夫・三友 清・小林 弘 埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, p.527-600. 1998年
- 堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫 珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について—混合群集の認定と堆積環境の解釈—. 日本文化財科学会, 第13回大会研究発表要旨集, p.62-63. 1996年
- 伊藤良永・堀内誠示 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23-45. 1991年
- (株)古環境研究所 第7節花粉、珪藻、プラント・オパール分析. 「東大阪市所在 巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書—第5次—」都市計画道路大阪中央環状線巨摩橋交差点南行車線跨道橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 財団法人 大阪府文化財調査研究センター, p.166-186. 1996年
- (株)古環境研究所 4. 東大阪市、瓜生堂遺跡第47-1次調査における自然科学分析. 瓜生堂遺跡第47-

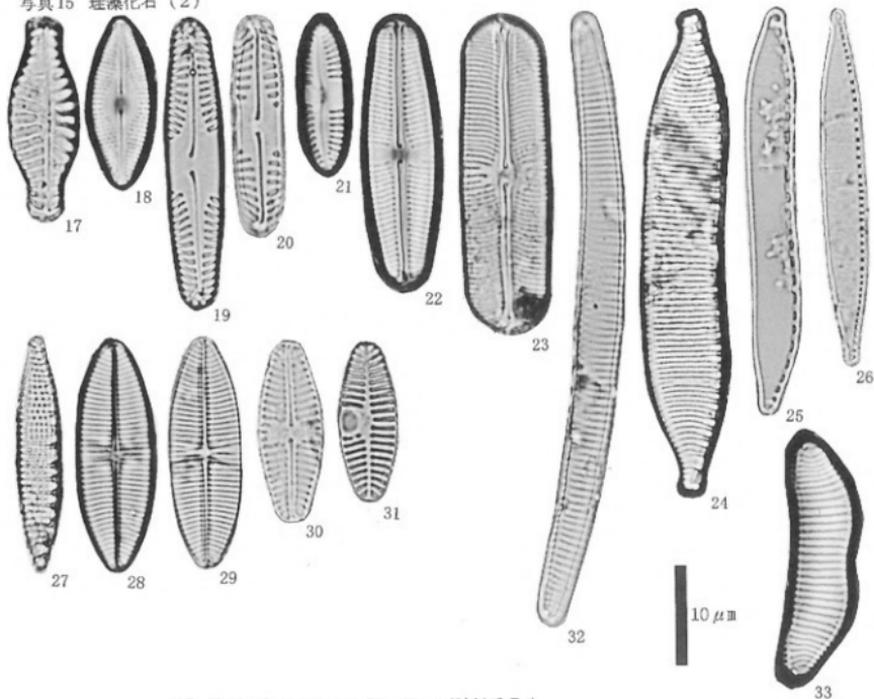
- 1次発掘調査中間報告書。東大阪市教育委員会。p.63-68。2000年
- 金原正明・金原正子・中村亮仁 大宮坊跡(蹟跡)における自然科学的分析。「史跡石動山環境整備事業報告Ⅱ」, p.51-70, 石川県鹿島町教育委員会。1995a年
- 金原正明・金原正子・中村亮仁 川合遺跡八反田地区SE402・SE405における寄生虫卵・植物遺体分析。静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第63集「川合遺跡 八反田地区Ⅱ」本文編, p.341-354, 静岡県埋蔵文化財調査研究所。1995b年
- 金原正明・金原正子 第3節 3・10・11号方形周溝墓主体部における微遺体分析。「巨摩・若江北遺跡発掘調査報告-第4次- 都市計画道路大阪中央環状線立体交差建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, (財)大阪文化財センター, p.178-179。1995年
- 小杉正人 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用。第四紀研究, 27, p.1-20。1988年
- Krammer, K. PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1-353., BERLIN・STUTTGART. 1992年
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag. 1986年
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, 1988年
Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eumotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag. 1991a年
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag. 1991b年
- 前田安夫 花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積(更新)世後期以降の植生変遷。「日本植生誌, 近畿」, 宮脇 昭編, p.87-99, 至文堂。1984年
- 松田順一郎 瓜生堂40次調査における河川堆積作用の変化。「瓜生堂・若江北・山賀遺跡発掘調査報告書-電気工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の調査報告」, p.93-105, (財)東大阪市文化財協会。1999年
- 中村 純 「花粉分析」, 232p., 古今書院。1967年
- 那須孝梯 花粉分析からみた二次林の出現。関西自然保護機構会報, 4, p.3-9。1980年
- 那須孝梯 活動の舞台: 概論。「弥生文化の研究1 弥生人とその環境」, 永井昌文・那須孝梯・金関恕・佐原真編著, p.119-130, 雄山閣出版。1989年
- 徳永重元・山内輝子 花粉・胞子。「化石の研究法」, p.50-73, 共立出版株式会社。1971年
- 吉田幸雄 「図説 人体寄生虫学」, 284p., 株式会社南山堂。1991年

写真14 珪藻化石 (1)



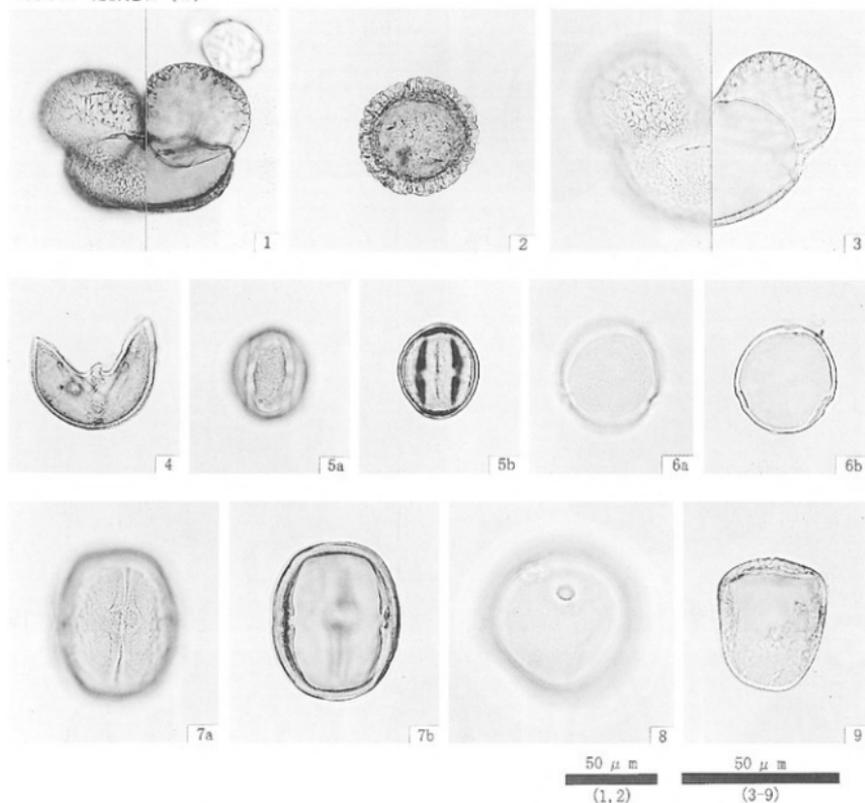
1. *Thalassiosira lacustris* (Grun.) Hasle (試料番号10)
2. *Cyclotella meneghiniana* Kuetzing (試料番号1)
3. *Melosira varians* Agardh (試料番号1)
4. *Fragilaria ulna* (Nitzsch) Lange-Bertalot (試料番号1)
5. *Fragilaria brevistriata* Grunow (試料番号5)
6. *Amphora affinis* Kuetzing (試料番号1)
7. *Amphora montana* Krasske (試料番号3)
8. *Caloneis leptosoma* Krammer & Lange-Bertalot (試料番号6)
9. *Cymbella sinuata* Gregory (試料番号5)
10. *Diploneis ovalis* (Hilse) Cleve (試料番号10)
11. *Diploneis pseudovalis* Hustedt (試料番号10)
12. *Gomphonema truncatum* Ehrenberg (試料番号1)
13. *Navicula viridula* var. *rostellata* (Kuetz.) Cleve (試料番号7)
14. *Navicula gregaria* Donkin (試料番号1)
15. *Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs (試料番号3)
16. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (試料番号4)

写真15 珪藻化石(2)



17. *Navicula capitata* Ehrenberg(試料番号1)
 18. *Navicula confervacea* (Kuetz.) Grunow(試料番号1)
 19. *Pinnularia schoenfelderi* Krammer(試料番号3)
 20. *Pinnularia obscura* Krasske(試料番号6)
 21. *Pinnularia schroederii* (Hust.) Krammer(試料番号6)
 22. *Sellaphora pupula* (Kuetz.) Mereschkowsky(試料番号1)
 23. *Sellaphora laevissima* (Kuetz.) Mann(試料番号7)
 24. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow(試料番号3)
 25. *Nitzschia brevissima* Grunow(試料番号2)
 26. *Nitzschia palea* (Kuetz.) W. Smith(試料番号1)
 27. *Nitzschia amphibia* Grunow(試料番号3)
 28. *Achnanthes hungarica* Grunow(試料番号1)
 29. *Achnanthes hungarica* Grunow(試料番号1)
 30. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow(試料番号3)
 31. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow(試料番号7)
 32. *Eumotia bilunaris* (Ehr.) Mills(試料番号1)
 33. *Eumotia praerupta* var. *bidens* Grunow(試料番号3)

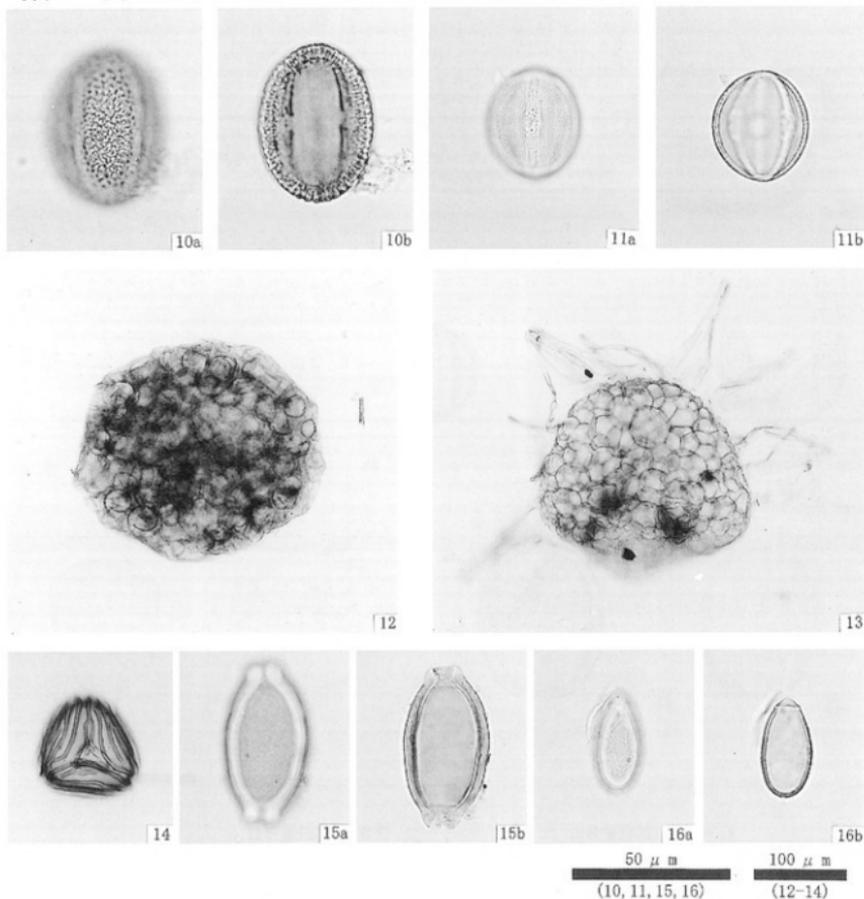
写真 16 花粉化石 (1)



1. モミ属 (試料番号2)
3. マツ属 (試料番号1)
5. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号8)
7. センダン属 (試料番号1)
9. カヤツリグサ科 (試料番号1)

2. ツガ属 (試料番号1)
4. スギ属 (試料番号8)
6. エノキ属—ムクノキ属 (試料番号1)
8. イネ科 (試料番号1)

写真17 花粉化石(2)・寄生虫卵



10. ソバ属(試料番号1)
 12. サンショウモ(試料番号X)
 14. ミズワラビ属(試料番号X)
 16. 吸虫卵(試料番号X)

11. ゴキヅル属(試料番号1)
 13. アカウキクサ属(試料番号X)
 15. 鞭虫卵(試料番号X)

(5) 東大阪市瓜生堂遺跡出土木製品の樹種同定調査結果

1. 試料

試料は東大阪市瓜生堂遺跡から出土した農具2点、服飾具2点、容器3点、祭祀具19点、武具2点、運搬具1点、建築材54点、部材11点、用途不明品24点、自然木1点の合計119点である。

2. 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果(針葉樹7種、広葉樹14種、樹皮1種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch f. *drupacea* Kitamura)

(遺物No. 22)

(写真No. 18)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は漸進的で、晩材の幅は非常に狭く、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はトウヒ型で1分野に1~2個ある。仮道管内部には螺旋肥厚が見られる。短冊形をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続(ストランド)して存在する。板目では放射組織はほぼ単列であった。イヌガヤは本州(岩手以南)、四国、九州に分布する。

2) マツ科モミ属 (*Abies* sp.)

(遺物No. 2, 58, 61, 63, 81, 100, 114)

(写真No. 19)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に1~4個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

3) マツ科マツ属[二葉松類] (*Pinus* sp.)

(遺物No. 46, 51, 64, 93, 118)

(写真No. 20)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1~15細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属[二葉松類]はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

4) コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* S. et Z.)

(遺物No. 4~6, 9, 10, 13~17, 20, 97, 99)

(写真No. 21)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや緩やかで晩材部の幅は極めて狭い。柾目では放射組織の分野壁孔は小型の窓状で1分野に1~2個ある。板目では放射組織はすべて単列

であった。コウヤマキは本州(福島以南)、四国、九州(宮崎まで)に分布する。

5) スギ科スギ属スギ(*Cryptomeria japonica* B. Don)

(遺物No. 56, 65, 68, 69, 94, 96, 102, 109, 111)

(写真No. 22)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

6) ヒノキ科ヒノキ属(*Chamaecyparis* sp.)

(遺物No. 33, 48)

(写真No. 23)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州(福島以南)、四国、九州に分布する。

7) ヒノキ科アスナロ属(*Thujaopsis* sp.)

(遺物No. 1, 7, 8, 18, 19, 21, 36, 59, 70, 95, 116)

(写真No. 24)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

8) ヤナギ科ヤナギ属(*Salix* sp.)

(遺物No. 82)

(写真No. 25)

散孔材である。木口では中庸ないしやや小さい道管($\sim 110 \mu\text{m}$)が単独または2~4個放射方向ないし斜線方向に複合して分布する。軸方向柔組織は年輪界で顕著。柾目では道管は単穿孔孔と交互壁孔を有する。放射組織は直立と平伏細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はやや大きく、篩状になっている。板目では放射組織はすべて単列、高さ $\sim 450 \mu\text{m}$ であった。ヤナギ属はバッコヤナギ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

9) ブナ科シイ属(*Castanopsis* sp.)

(遺物No. 3, 24, 49, 50, 57, 60, 88, 90, 92, 101, 103, 104~107, 112, 115)

(写真No. 26)

環孔性放射孔材である。木口では孔部部の道管($\sim 300 \mu\text{m}$)は単独かつ大きい接線方向には連続していない。孔部外に移るにしたがって大きさを減じ、放射方向に火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型で楕円の壁孔がある。板目では多数の単列放射組織が見られる。シイ属にはツブラジイとスダジイがあるが、ツブラジイに見られる集合~複合放射組織の出現頻度が低く、両者の雑種もあるので区別は難しい。シイ属は本州(福島、佐渡以南)、四国、九州、

琉球に分布する。

- 10) ブナ科コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.)

(遺物No. 23, 28, 37, 52, 62, 66, 71, 75, 86, 110)

(写真No. 27)

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管 ($\sim 200 \mu\text{m}$) が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1~3細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で櫛状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の境の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州(宮城、新潟以南)、四国、九州、琉球に分布する。

- 11) ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.)

(遺物No. 25, 26, 35, 38, 44, 85, 87, 89, 108)

(写真No. 28)

環孔材である。木口では大道管 ($\sim 430 \mu\text{m}$) が年輪界にそって1~数列並んで孔圍部を形成している。孔圍外では急に大きさを減じ、厚壁で円形の小道管が単独に放射方向に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に幅の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には櫛状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ属クスギ節はクスギ、アバマキがあり、本州(岩手、山形以南)、四国、九州、琉球に分布する。

- 12) ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.)

(遺物No. 29, 31, 32, 34, 40~42, 45, 73, 74, 79)

(写真No. 29)

環孔材である。木口では大道管 ($\sim 380 \mu\text{m}$) が年輪界にそって1~3列並んで孔圍部を形成している。孔圍外では急に大きさを減じ、薄壁で角張っている小道管が単独あるいは2~3個複合して火炎状に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カシワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

- 13) ニレ科エノキ属 (*Celtis* sp.)

(遺物No. 39, 91, 117)

(写真No. 30)

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管 ($\sim 230 \mu\text{m}$) が数列で孔圍部を形成している。孔圍外では小道管が多数集まって円形、斜線状の集団管孔を形成し、花綫状に配列している。放射組織は1~数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏型のものと8~10細胞列の大型のものがある。大型の放射組織は周囲を軸方向に長くやや大型の細胞(鞘細胞)に取り囲まれている。

エノキ属はエノキ、エゾエノキ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

14) クワ科クワ属 (*Morus* sp.)

(遺物No. 53, 72, 112)

(写真No. 31)

環孔材である。木口では大道管 ($\sim 280 \mu\text{m}$) が年輪界にそって1~5列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が2~6個、斜線状ないし接線状、集合状に不規則に複合して散在している。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。小道管には螺旋肥厚もある。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管内には充填物(チロース)が見られる。板目では放射組織は1~6細胞列、高さ $\sim 1.1\text{mm}$ からなる。単列放射組織はあまり見られない。クワ属はヤマグワ、ケグワ、マグワなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

15) クスノキ科クスノキ属クスノキ (*Cinnamomum camphora* Presl)

(遺物No. 12, 54)

(写真No. 32)

散孔材である。木口では中庸の道管 ($\sim 200 \mu\text{m}$) が単独または2ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に取り囲んでおり、その中に見えな小管と見間違えるほどの油細胞(樟脳油貯蔵細胞)がある。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はレンズ状の大型壁孔が階段状に並んでいる。板目では放射組織は1~3細胞列、高さ $\sim 800 \mu\text{m}$ からなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞に変化したものが多く見られる。クスノキは本州(関東以西)、四国、九州に分布する。

16) クスノキ科クスノキ属ヤブニッケイ (*Cinnamomum japonicum* Sieb.)

(遺物No. 27, 77, 78, 80, 83, 84)

(写真No. 33)

散孔材である。木口では中庸の道管 ($\sim 100 \mu\text{m}$) が単独または2ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に囲んでいる。道管の壁がやや厚い。柾目では道管は単穿孔とまれに階段穿孔、側壁に交互壁孔とかすかな螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は円形、レンズ状、篩上の壁孔が並んでいる。板目では放射組織は1~3細胞列、高さ $\sim 750 \mu\text{m}$ からなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞(樟脳油貯蔵細胞)となるがあまり顕著でない。ヤブニッケイは本州(宮城、富山以南)、四国、九州、琉球に分布する。

17) ウルシ科ウルシ属 (*Rhus* sp.)

(遺物No. 11)

(写真No. 34)

散孔材である。木口では中庸の道管 ($\sim 100 \mu\text{m}$) が単独または2ないし数個が集団で複合し、疎らな1~2列の孔圏様配列が見られる。年輪の外境では道管の分布・直径とも減少する。軸方向柔細胞はターミナル状、周囲状が顕著である。柾目では道管は単穿孔を有し、内腔にチロースを持つ。道管放射組織間壁孔は中~大型のレンズ状、篩状である。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1~3細胞列、高さ $\sim 700 \mu\text{m}$ からなる。ウルシ属はヌルデ、ヤマウルシ、ヤマハゼがあり、北海道、本州、四国、九州、琉球に分布する。

18) ツバキ科ツバキ属 (*Camellia* sp.)

(遺物No. 67)

(写真No. 35)

散孔材である。木口では極めて小さい道管 ($\sim 40 \mu\text{m}$) が単独ないし2~3個接合して均等に分布する。放射組織は1~3細胞列で黒い筋としてみられる。木繊維の壁はきわめて厚い。柎目では道管は階段穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔 (とくに直立細胞) は大型のレンズ状の壁孔が階段状に並んでいる。放射柔細胞の直立細胞と軸方向柔細胞にはダルマ状にふくれているものがある。柎目では放射組織は1~4細胞列、高さ $\sim 1\text{mm}$ 以下からなり、平伏細胞の多列部の上下または間に直立細胞の単列部がくる構造をしている。木繊維の壁には有縁壁孔が一行に多数並んでいるのが全体で見られる。ツバキ属はツバキ、サザンカ、チャがあり、本州、四国、九州に分布する。

19) ツバキ科ナツツバキ属 (*Stewartia* sp.)

(遺物No. 119)

散孔材である。木口では中庸の道管 ($\sim 140 \mu\text{m}$) が単独ないし2~4個複合して分布する。柎目では道管は階段穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はレンズ状の壁孔が階段状に並んでいる。柎目では放射組織は1~3細胞列、高さ $\sim 400 \mu\text{m}$ からなる。ナツツバキ属はナツツバキ、ヒメシヤラがあり、本州、四国、九州に分布する。

20) ツバキ科サカキ属サカキ (*Cleyera japonica* Thunb. pro parte emend. S. et Z.)

(遺物No. 55, 98)

(写真No. 36)

散孔材である。木口では極めて小さい道管 ($\sim 50 \mu\text{m}$) が単独ないし2~4個複合して平等に分布する。柎目では道管は階段穿孔と側壁に対列ないし階段壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状壁孔が存在する。柎目では放射組織は単列、高さ $\sim 1.5\text{mm}$ からなる。木繊維の壁には有縁壁孔が一行に多数並んでいるのが見られる。サカキは本州(茨城、石川以南)、四国、九州に分布する。

21) ツバキ科ヒサカキ属 (*Eurya* sp.)

(遺物No. 30)

(写真No. 37)

散孔材である。木口では極めて小さい道管 ($\sim 50 \mu\text{m}$) が単独ないし2~4個複合して平等に分布する。柎目では道管は階段穿孔と側壁に対列ないし階段壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状壁孔が存在する。柎目では放射組織は1~4細胞列で、高さ $\sim 5\text{mm}$ からなる。木繊維の壁には有縁壁孔が一行に多数並んでいるのが全体で見られる。ヒサカキ属はヒサカキ、ハマヒサカキがあり、本州(岩手、秋田以南)、四国、九州、琉球に分布する。

22) 広葉樹の樹皮

(遺物No. 43, 47, 76)

(写真No. 38)

横断面、放射断面、接線断面ともに柔細胞、じん皮繊維やスクレイドを含む死滅した篩部と、不定形の細胞からなる皮層が見られる。

4. 考察

木棺材にはコウヤマキが多用されている。各地の既往の発掘例でも木棺材はほとんどが針葉樹材であり、なかでもコウヤマキの出土は関西に集中している。他の出土品に針葉樹材の使用が少ないことから、周辺環境の開発によって針葉樹林が減少していたことが考えられる。一方、柱材、礎板、矢板等にはコナラ類11点、クスギ類8点、カシ類5点、シイ11点が使用されており、針葉樹材の使用はほとんど見られない。これらの広葉樹材の選択的な使用は本遺跡周辺においてカシ類、シイの照葉樹林とコナラ類、クスギ類の落葉樹林が混交する二次林への変化が拡がっていたものと考えられる。

◆参考文献◆

- 島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版 1988年
 島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社 1982年
 伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所 1999年
 北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本Ⅱ」 保育社 1979年
 深澤和三 「樹体の解剖」 海青社 1997年

◆使用顕微鏡◆

Nikon
 MICROFLEX UFX-DX Type 115

表48 東大阪市瓜生堂遺跡出土木製品樹種同定表

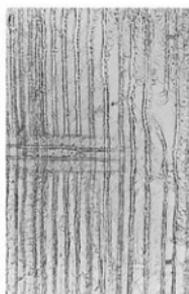
No.		品名	樹種
1	弥生中期	木棺材	ヒノキ科アスナロ属
2	弥生中期～後期	板材	マツ科モミ属
3	弥生中期	矢板	ブナ科シイ属
4	弥生中期	木棺材	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
5	弥生中期	木棺材	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
6	弥生中期	木棺材	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
7	弥生中期	木棺材	ヒノキ科アスナロ属
8	弥生中期	木棺材	ヒノキ科アスナロ属
9	弥生中期	木棺材	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
10	弥生中期	木棺材	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
11	弥生中期～後期	矢柄	ウルシ科ウルシ属
12	弥生中期	加工木	クスノキ科クスノキ属クスノキ
13	弥生中期	木棺材?	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
14	弥生中期	木棺材	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
15	弥生中期	木棺材	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
16	弥生中期	木棺材	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
17	弥生中期	木棺材	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
18	弥生中期	木棺材	ヒノキ科アスナロ属
19	弥生中期	木棺材	ヒノキ科アスナロ属
20	弥生中期	木棺材	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
21	弥生中期	木棺材	ヒノキ科アスナロ属
22	弥生終末～古墳初頭	杭状	イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ
23	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属

24	弥生中期	柱材	ブナ科シイ属
25	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節
26	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節
27	弥生中期	柱材	クスノキ科クスノキ属ヤブニッケイ
28	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
29	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
30	弥生中期	柱材	ツバキ科ヒサカキ属
31	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
32	弥生中期	柱材	ヒノキ科ヒノキ属
33	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
34	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
35	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節
36	中世?	杭状	ヒノキ科アスナロ属
37	中世?	二股材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
38	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節
39	弥生中期	柱材	ニレ科エノキ属
40	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
41	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
42	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
43	弥生中期	柱材	樹皮(広葉樹)
44	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節
45	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
46	弥生中期	柱材	マツ科マツ属[二葉松類]
47	弥生中期	柱材	樹皮(広葉樹)
48	弥生中期～後期	角棒状	ヒノキ科ヒノキ属
49	弥生中期～後期	板材	ブナ科シイ属
50	弥生終末～古墳初頭	木製品	ブナ科シイ属
51	弥生中期～後期	木製品	マツ科マツ属[二葉松類]
52	弥生中期～後期	木製品	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
53	中世	二股材	クワ科クワ属
54	弥生中期～後期	板材	クスノキ科クスノキ属クスノキ
55	弥生中期～後期	杭状	ツバキ科サカキ属サカキ
56	弥生中期～後期	木製品	スギ科スギ属スギ
57	弥生中期～後期	木製品	ブナ科シイ属
58	弥生中期～後期	木製品	マツ科モミ属
59	中世	下駄	ヒノキ科アスナロ属
60	弥生中期～後期	加工木	ブナ科シイ属
61	弥生中期～後期	木製品	マツ科モミ属
62	弥生中期～後期	板材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
63	弥生中期～後期	加工木	マツ科モミ属
64	弥生中期～後期	加工木	マツ科マツ属[二葉松類]
65	弥生中期～後期	曲物	スギ科スギ属スギ
66	弥生中期～後期	木製品	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
67	弥生中期～後期	木製品	ツバキ科ツバキ属
68	弥生中期～後期	削くず?	スギ科スギ属スギ
69	中世	曲物	スギ科スギ属スギ
70	中世	曲物	ヒノキ科アスナロ属
71	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属

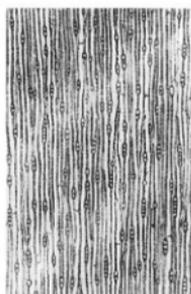
72	弥生中期	柱材	クワ科クワ属
73	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
74	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
75	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
76	弥生中期	柱材	樹皮(広葉樹)
77	弥生中期	柱材	クスノキ科クスノキ属ヤブニッケイ
78	弥生中期	柱材	クスノキ科クスノキ属ヤブニッケイ
79	弥生中期	柱材	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
80	弥生中期	礎板	クスノキ科クスノキ属ヤブニッケイ
81	弥生中期	礎板	マツ科モミ属
82	弥生中期	礎板	ヤナギ科ヤナギ属
83	弥生中期	礎板	クスノキ科クスノキ属ヤブニッケイ
84	弥生中期	礎板	クスノキ科クスノキ属ヤブニッケイ
85	弥生中期	礎板	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節
86	弥生中期	礎板	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
87	弥生中期	礎板	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節
88	弥生中期	礎板	ブナ科シイ属
89	弥生中期	礎板	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節
90	弥生中期	礎板	ブナ科シイ属
91	弥生中期	礎板	ニレ科エノキ属
92	弥生中期	礎板	ブナ科シイ属
93	弥生中期～後期	木製品	マツ科マツ属[二葉松類]
94	弥生終末～古墳初頭	板材	スギ科スギ属スギ
95	弥生中期～終期	板材	ヒノキ科アスナロ属
96	弥生中期～終期	板状	スギ科スギ属スギ
97	弥生終末～古墳初頭	木製品	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
98	弥生中期	杭	ツバキ科サカキ属サカキ
99	中世	棒状	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
100	中世	板状	マツ科モミ属
101	弥生中期	矢板	ブナ科シイ属
102	?	下駄	スギ科スギ属スギ
103	弥生中期	矢板	ブナ科シイ属
104	弥生中期	矢板	ブナ科シイ属
105	弥生中期	矢板	ブナ科シイ属
106	弥生中期	矢板	ブナ科シイ属
107	弥生中期	矢板	ブナ科シイ属
108	弥生中期～古墳初頭	木の根	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節
109	弥生中期	不明木製品(木偶?)	スギ科スギ属スギ
110	弥生中期	鋸	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
111	弥生中期	板状加工木(武器形)	スギ科スギ属スギ
112	弥生中期	武器形	クワ科クワ属
113	弥生中期	不明木製品	ブナ科シイ属
114	弥生中期	楯	マツ科モミ属
115	弥生中期	不明木製品(木剣?)	ブナ科シイ属
116	弥生中期	不明木製品(脚部?)	ヒノキ科アスナロ属
117	弥生中期	不明木製品(槽)	ニレ科エノキ属
118	弥生中期	天秤棒	マツ科マツ属[二葉松類]
119	弥生中期	杵	ツバキ科ナツツバキ属



木口×40

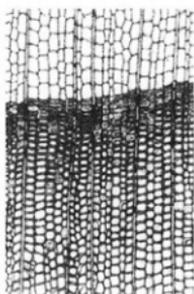


柁目×100

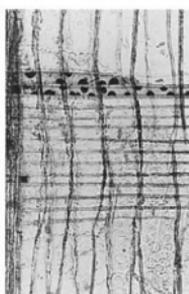


板目×40

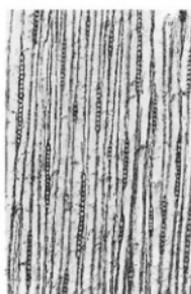
イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ (遺物No.22)



木口×40

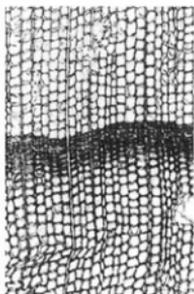


柁目×100

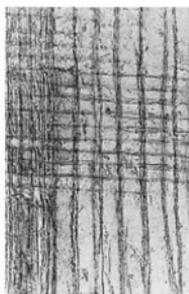


板目×40

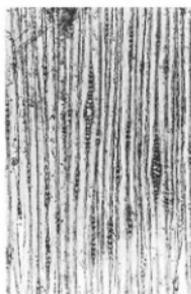
マツ科モミ属 (遺物No.61)



木口×40



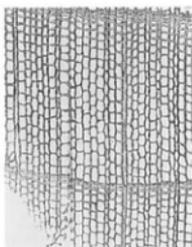
柁目×100



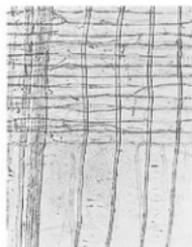
板目×40

マツ科マツ属 [二葉松類] (遺物No.64)

写真18 出土木製品・顕微鏡写真(1)



木口×40

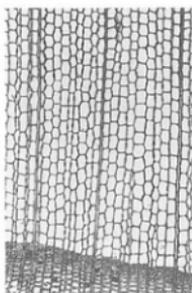


柁目×100

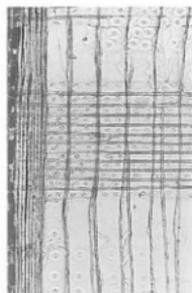


板目×40

コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ (遺物No. 5)



木口×40

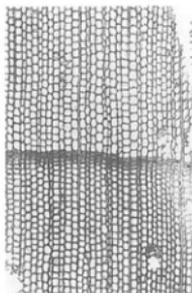


柁目×100

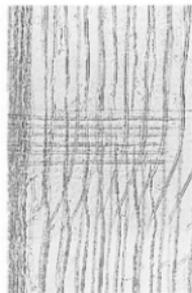


板目×40

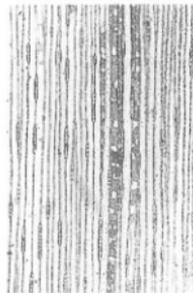
スギ科スギ属スギ (遺物No. 94)



木口×40



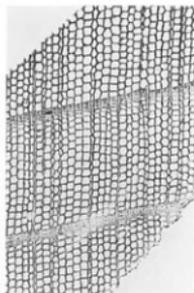
柁目×100



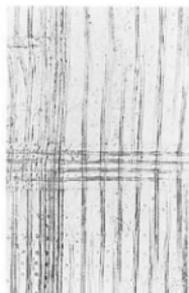
板目×40

ヒノキ科ヒノキ属 (遺物No. 48)

写真19 出土木製品・顕微鏡写真(2)



木口×40

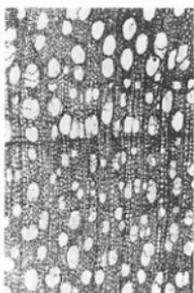


柁目×100



板目×40

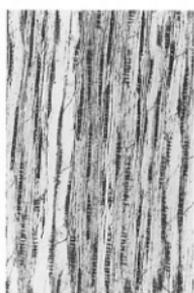
ヒノキ科アスナロ属 (遺物No. 7)



木口×40



柁目×100



板目×40

ヤナギ科ヤナギ属 (遺物No. 82)



木口×40



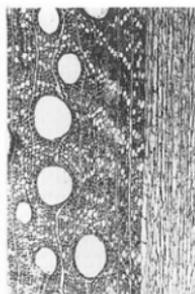
柁目×100



板目×40

ブナ科シイ属 (遺物No. 105)

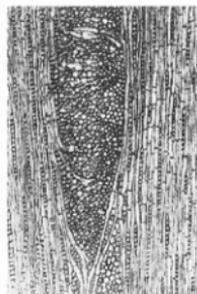
写真20 出土木製品・顕微鏡写真(3)



木口×40

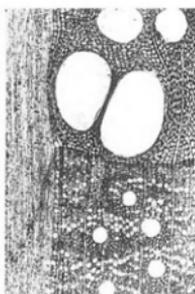


柁目×100



板目×40

ブナ科コナラ属マカガシ亜属 (遺物No. 75)



木口×40

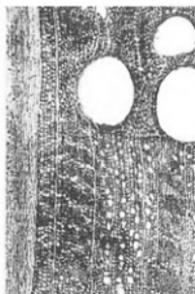


柁目×100



板目×40

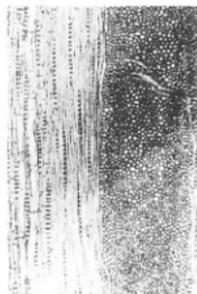
ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節 (遺物No. 25)



木口×40



柁目×100



板目×40

ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節 (遺物No. 73)

写真21 出土木製品・顕微鏡写真(4)



木口×40

ニレ科エノキ属 (遺物No.91)



柁目×100

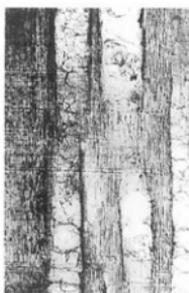


板目×40

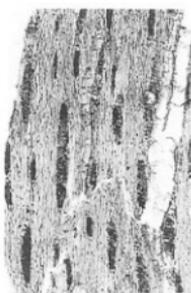


木口×40

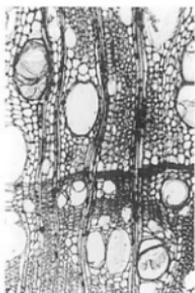
クワ科クワ属 (遺物No.53)



柁目×100



板目×40



木口×40

クスノキ科クスノキ属 (遺物No.12)

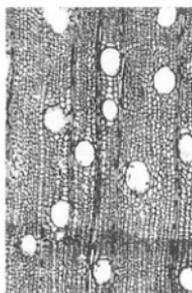


柁目×100



板目×40

写真22 出土木製品・顕微鏡写真(5)



木口×40

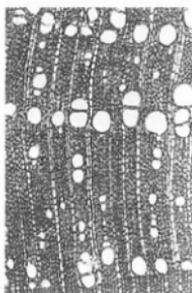


柁目×100



板目×40

クスノキ科クスノキ属ヤブニッケイ (遺物No.27)



木口×40

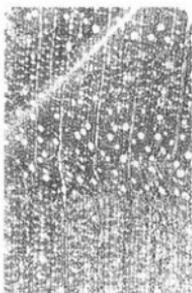


柁目×100



板目×40

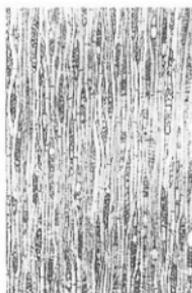
ウルシ科ウルシ属 (遺物No.11)



木口×40



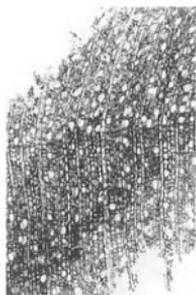
柁目×100



板目×40

ツバキ科ツバキ属 (遺物No.67)

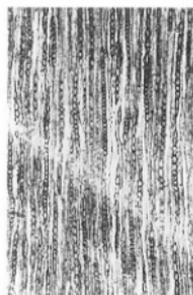
写真23 出土木製品・顕微鏡写真(6)



木口×40

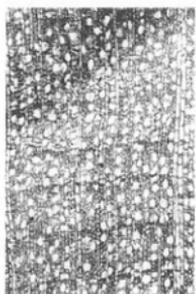


柁目×100



板目×40

ツバキ科サカキ属サカキ (遺物No. 98)



木口×40



柁目×100



板目×40

ツバキ科ヒサカキ属 (遺物No. 30)



木口×40



柁目×100



板目×40

広葉樹の樹皮 (遺物No. 43)

写真24 出土木製品・顕微鏡写真(7)

(6) 瓜生堂遺跡第46次調査出土のサヌカイト製造物の石材産地分析

はじめに

石器石材の産地を自然科学的手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサヌカイトおよび黒曜石遺物の石材産地推定を行なっている(1, 2, 3)。地質時代に自然の力で移動した岩石の出発露頭を元素分析で求めるとき、岩石と露頭原石の組成が一致すれば、その露頭から流れた岩石であると言うことは、自然法則に従って流れたルートを証明できる。産地分析では『石器とある産地の原石が一致したからと言って、その産地のものと言いつれ切れないが、一致しなかった場合その産地のものではないと言いつれ切れる』が大原則である。人が移動させた石器の組成とA産地原石の組成が一致したからと言って、産地と出土遺跡の間に地質的関連性がないため、移動ルートが自然の法則に従って証明できず、その石器がA産地の原石と決定することができない。従って、石器原材と産地原石が一致したことが、直ちに考古学の資料とならない、確かにA産地との交流で伝播した可能性は否定できなくなったが、B、C、Dの産地でないと証明がないために、A産地だと言いつれ切れない。A産地と一致しなかった場合、結果は考古学の資料として非常に有用である。それは石器に関してはA産地と交流がなかったと言いつれ切れる。考古学は、様式が一致すると言う結果が非常に重要な意味があり、見える様式としての形態、文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの素材があり一致すると言うことは古代人が意識して一致させた可能性があり、一致すると言うことは、古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する重要な結果である。地質など自然科学の場合は、自然科学的方法(物理・化学的方法)に従って、産地を特定するが、分析装置を使用すれば科学的分析と誤解している科学者がみられるが、装置は物差しにすぎず、得られた結果を自然の法則に従って処理し産地を特定しなければならない。考古学者は考古学を基準にして、例えば産地が遺跡から近い、移動キャンプ地のルート上に位置する。または原産地地方との交流が石器以外の他の遺物で証明されているなどの条件を考えて、石器の石質と一致する最も近い産地の原石を肉眼観察を基準にして推測する。この結果が信用される場合は、石質の一致よりも、産地との交流を推測しても考古学条件に無理がないためである。これは、遺跡から500km以上離れた産地の石材が石器と一致しても、遠距離の産地を言わず、近くの一一致した産地しか言わないことから分かる。従って、実際に遠距離から伝播した原材でも、近くの産地のものとして処理している。日本中の産地の石材を観察すると、とても肉眼観察で産地を特定することはできないと思う。また地質学者に聞いても、とても肉眼観察で産地など特定できないと言う人が多い。石器原材の岩石名、産出産地を述べる場合客観的なデータに基づいて決定した結果を記さなければ、報告書全体が正確さを欠くように思われる。黒曜石、サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の手続きも簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさらに有利な分析法である。今回分析した遺物は東大阪市に位置する瓜生堂遺跡第46次調査出土の弥生時代のサヌカイト石片18個で、これら遺物について産地分析の結果が得られたので報告する。

サヌカイト原石の分析

サヌカイト両原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイトでは、K/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srをそれぞれ用いる。サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わせて32ヶ所の調査を終えている。図186にサヌカイトの原産地の地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多く地点からは良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数ヶ所の群に分かれる。近年、丸亀市の双子山の南嶺から産出するサヌカイト原石が双子山群を確立し、またガラス質安山岩は縄石器時代に使用された原材料が普通寺市の大麻山南からも産出している。これらの原石を良質の原石を産出する産地および原石産地不明の遺物を元素組成で分類すると72個の原石群に分類でき、その結果を表1に示した。香川県内の石器原材の産地では金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西群、金山東群、国分寺群、遍光寺群、白峰群、法印谷群の6個の群、城山群および双子山群に、またガラス質安山岩は金山奥池・五色台地区産は五色台群の単群に、大麻山南産は大麻山南第一、二群の2群にそれぞれ分類され区別が可能なことを明らかにした。金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約2/3が表2に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大磨地区からは、岩屋第一群に一致する原石がそれぞれ92%および88%と群を作らない数個の原石とがみられ、金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。表50に示す和泉・岸和田原産地からも全体の約1%であるが金山東群に一致する原石が採取される。表51に示す和歌山市梅原原産地からは、金山原産地の原石に一致する原石はみられない。仮に、遺物が岩屋、和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、表49、50のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない。二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心にした広い地域から採取された。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の原産地から6%の割合で採取されることから、一遺跡10個以上の遺物を分析し、表50のそれぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しなければならない。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なった。一方黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水合層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。今回分析した遺物の結果を表53に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためK/Caの一変量だけを考えると、分析番号66480番の遺物はK/Caの値が0.273で、二上山群の【平均値】±【標準偏差値】は、0.288±0.010であるから、遺物と原石群の差を標準偏差値

(σ) を基準にして考えると遺物は原石群から 1.5σ 離れている。ところで二上山群の産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 1.5\sigma$ のずれより大きいものが54ヶある。すなわち、この遺物が、二上山群の原石から作られていたと仮定しても、 1.5σ 以上離れる確率は54%であると言える。だから、二上山群の平均値から 1.5σ しか離れていないときには、この遺物が二上山群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を金山東群に比較すると、金山東群の平均値からの隔たりは、約 17σ である。これを確率の言葉で表現すると、金山東群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 17σ 以上離れている確率は、千兆の百倍分の一であると言える。このように、千兆の百倍個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、金山東群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は二上山群に54%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから二上山群の原石が使用されいると同定され、さらに金山東群に対しては千兆分の1%の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たさないことから金山産原石でないと同定される」。遺物が一ヶ所の産地(二上山群の産地)と一致したからと言って、例え二上山群と金山東群の原石は成分が異なっても、分析している試料は原石でなく遺物でさらに分析誤差が大きくなる不定形(非破壊分析)であることから、他の産地に一致しないとは言えない、同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地(二上山群)に一致したと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を表1の72個すべての原石群について行ない、低い確率で帰属された原石群を消していくことにより、はじめて二上山産地の石材のみが使用されていると判定される。実際はK/Caといった唯一ヶの変量だけでなく、前述した8ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量が少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT2検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する(4、5)。産地の同定結果は1個の遺物に対して、サヌカイト製では72個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上『記入』を省略しているのみで、実際に計算しているため、省略産地の可能性が非常に低いことを確認したという重要な意味を含んでいる、すなわち、二上山群の原石と判定された遺物について、香川県金山原石とか佐賀県多久産、北海道旭山の原石の可能性を考慮する必要がない結果で、高い確率で同定された産地のみの結果を表52に記入した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のバラツキの範囲を越え大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。原石産地(確率)の欄にマハラノビスの距離D2の値で記した遺物については、判定の信頼限界としている0.1%の確率に達しなかった遺物でこのD2の値が原石群の中で最も小さなD2値である。この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低いが、その原石産地と考えては間違いないと判断されたものである。瓜生堂遺跡第46次調査出土のサヌカイト剥片18個は、全て二上山群に同定された。二上山群に同

定される原材は、奈良県二上山産地以外に、和泉・岸和田原産地から6%の確率で採取することができることから、瓜生堂遺跡出土の二上山群に同定された遺物の原石産地は、この両産地を考える必要がある。しかし、和泉・岸和田産地から二上山群原石のみを他の諸群(表50)を1個も採取せずに、二上山群の原石18個を採取する確率は0.06を18乗する確率で、限りなく零%に近い確率になり、和泉・岸和田原産地から採取された原石でないと言い切れる。従って瓜生堂遺跡で使用された原石は奈良県二上山原産地から伝播した原石と推測された。今回分析した遺物は全て二上山産原石であったが、多数の遺物を分析すると、原石産地が不明の遺物群(表1)が使用されていることがあり、例えば、向出No.6遺物群が向出遺跡と鬼虎川遺跡で、また向出No.49遺物群は向出、種附、兵庫県亀田の各遺跡間で使用されていることが明らかになってきている。遺跡の産地分析の結果で二上山産、金山産、に加えて不明遺物群の各群使用頻度が求まれば、その使用頻度を決定された考古学的背景は古代の社会事情が関係していると思われる、使用遺跡間の交易とか交流関係を明らかにできる可能性が推測される。

参考文献

- 1) 薬科哲男・東村武信 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(II)。考古学と自然科学, 8:61-69 1975年
- 2) 薬科哲男・東村武信・鎌木義昌 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(III)。(IV)。考古学と自然科学, 10, 11:53-81:33-47 1977年 1978年
- 3) 薬科哲男・東村武信 石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16:59-89 1983年
- 4) 東村武信 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9:77-90 1976年
- 5) 東村武信 考古学と物理化学。学生社 1980年

表49 岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果

原石群名	個数(個)	百分率(%)	他原産地および他原石群との関係
岩屋第一群	20	30	淡路島、岸和田、和歌山に出現
第二群	22	33	白峰群に一致
第三群	6	9	法印谷群に一致
ク	5	8	国分寺群に一致
ク	4	6	蓮光寺群に一致
ク	3	5	金山東郡に一致
ク	2	3	和泉群に一致
ク	4	6	不明 (どこの原石群にも属さない)

表50 和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果

原石群名	個数(個)	百分率(%)	他原産地および他原石群との関係
岩屋第一群	12	17	淡路島、岸和田、和歌山に出現
和泉群	9	13	ク
岩屋第二群	6	8	白峰群に一致
	4	6	二上山群に一致
	1	1	法印谷群に一致
	1	1	金山東郡に一致
	39	54	不明 (どこの原石群にも属さない)

表51 和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果

原石群名	個数(個)	百分率(%)	他原産地および他原石群との関係
和泉群	10	48	淡路島、岸和田、和歌山に出現
岩屋第一群	1	5	ク
岩屋第二群	10	48	不明 (どこの原石群にも属さない)

表52 瓜生堂遺跡群出土のサヌカイト製割片の原材料産地推定結果
(東大阪市)

分析 番号	鑑定 No.	テ-プ 地区, No.	点数, Date	出土地点, 土質, 出土層	原 石 産 地 (雜率)	判 定	備 考
66480	1,	A-3,	7, 1, 990108,	, C,	二上山(8%)	二上山	
66481	2,	A-4,	41, 1, 990222,	, D,	二上山(62%)	二上山	
66482	3,	A-4,	45, 1, 981224,	, B,	二上山(3%)	二上山	
66483	4,	A-5,	39, 1, 990107,	, D, ㄞ2-6	二上山(58%)	二上山	
66484	5,	A-9,	4, 1, 990212,	, D,	二上山(3%)	二上山	
66485	6,	A-11,	28, 1, 990114,	落込3,	二上山(20%)	二上山	
66486	7,	A-12,	1, 1, 990329,	南壁, D,	二上山(13%)	二上山	
66487	8,	A-12,	4, 1, 990309,	シヅ25,	二上山(4%)	二上山	
66488	9,	A-12,	2, 1, 990329,	南壁, D,	二上山(41%)	二上山	
66489	10,	A-13,	5, 1, 990208,	, C,	二上山(63%)	二上山	
66490	11,	A-1,	5, 1, 981222,	, B, ㄞ1-2	二上山(11%)	二上山	
66491	12,	A-6,	3, 1, 981119,	先行トヅ,	二上山(33%)	二上山	
66492	13,	A-7,	1, 1, 990217,	, D, ㄞ-3	二上山(78%)	二上山	
66493	14,	A-4,	40, 1, 990222,	, D, ㄞ2	二上山(1%)	二上山	
66494	15,	A-6,	9, 1, 981224,	, D,	二上山(82%)	二上山	
66495	16,	A-8,	1, 1, 990226,	シヅ38,	二上山(17%)	二上山	
66496	17,	A-8,	3, 1, 990226,	シヅ39,	二上山(9%)	二上山	
66497	18,	A-12,	3, 1, 990212,	, ,	二上山(36%)	二上山	

注意: 近年産地分析を行つた所が各産地の研究も進んで行つたが、割片の産地を判別する場合には、割片の産地を判別するに際しては、本報告の分析結果を参考にすることが必要である。本報告の分析結果を参考にすることが必要である。本報告の分析結果を参考にすることが必要である。



第86図 サマカイト及びサマカイト様岩石の原産地

表53 瓜生堂遺跡第46次調査出土サマカイト製割片の元素比分析結果

分析 番号	元 素 比									
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
66480	0.273	0.237	0.053	4.382	0.209	0.063	0.655	0.013	0.014	0.132
66481	0.275	0.223	0.067	4.304	0.207	0.058	0.651	0.010	0.015	0.126
66482	0.274	0.233	0.072	4.366	0.221	0.063	0.709	0.020	0.013	0.127
66483	0.273	0.229	0.061	4.513	0.217	0.059	0.633	0.018	0.017	0.132
66484	0.278	0.222	0.055	4.052	0.205	0.081	0.647	0.016	0.015	0.132
66485	0.270	0.224	0.074	4.485	0.203	0.066	0.674	0.032	0.015	0.131
66486	0.267	0.224	0.061	4.341	0.224	0.068	0.660	0.022	0.013	0.130
66487	0.274	0.226	0.076	4.560	0.220	0.070	0.694	0.032	0.014	0.127
66488	0.276	0.233	0.072	4.205	0.208	0.074	0.610	0.019	0.016	0.135
66489	0.276	0.228	0.063	4.284	0.216	0.065	0.625	0.029	0.017	0.135
66490	0.267	0.215	0.072	4.658	0.221	0.072	0.665	0.025	0.015	0.126
66491	0.275	0.234	0.067	4.257	0.213	0.064	0.657	0.026	0.016	0.122
66492	0.267	0.223	0.064	4.494	0.200	0.069	0.634	0.019	0.011	0.125
66493	0.271	0.226	0.061	4.418	0.207	0.095	0.648	0.051	0.015	0.127
66494	0.276	0.227	0.070	4.619	0.212	0.071	0.628	0.027	0.013	0.140
66495	0.275	0.227	0.064	4.181	0.199	0.064	0.653	0.029	0.016	0.129
66496	0.273	0.225	0.077	4.559	0.225	0.082	0.680	0.021	0.014	0.120
66497	0.270	0.222	0.081	4.673	0.207	0.071	0.625	0.024	0.013	0.128
JG-1	1.261	0.287	0.043	2.729	0.743	0.161	0.819	0.068	0.034	0.384

JG-1: 標準試料-Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol. 8 175-192 (1974)

VIII 総括

当初は、従前の調査成果から調査地は弥生時代中期における集落の北はずれと考えられていた場所を東西約300m、南北幅6～8mの範囲で継続して整理作業期間1年を含めて4年間実施した。発掘調査の結果、既述したようにA～D地区と仮称した調査地から、本遺跡を著名なものとしている弥生時代の遺跡のみならず「瓜生堂」の地名に残る平安時代後期から室町時代中期に存在した寺跡の一面を初めて確認し、堂（建物）の基壇や、寺に関係すると思われる井戸などを検出した。

また、古墳時代中期後半の埴輪を持つと考えられる小型低方墳の一部や前期の井戸、弥生時代中期前半の水田、前期の溝なども検出した。これらの調査の成果については、新聞紙上でも大きく取り上げられ速報をかねて2回（10・12年度に各1回）の現地説明会を通じて市民に（計約600人の参加）紹介した。最後にあたり調査の結果を踏まえて、今回明らかにできた調査地全体の近世から弥生時代前期までの推移を以下まとめて総括しておきたい。

近世から近代 近世から近代にかけて調査地は、基本的に耕作地として利用されていた。昭和23年米軍の撮影した航空写真（図版1上）から、この時代の様子を窺わせる状況が見てとれる。A地区は遺構が顕著でないが、B地区で桶個井戸、C地区で近世の溜池などを検出した。出土した国産磁器からいずれも18から19世紀代に機能していたことが知られる。井戸や溜池の存在は、当時の河内平野が、洪水の被害だけでなく旱害にも苦しめられたことを端的に示している。生駒山西麓で多く見られる島畠（掘上田）は見られない。平野部と山麓部の異なりであろうか。

中世から古墳時代 中世の遺構は、B地区東半からD地区で認められた。特に、D地区では中世から古墳時代前期までの遺構が同一面で検出された。土層の堆積時期が明らかにできたのと同時に、中世段階で集落を営む関係で一定の削平が行われたと考えられる。A地区では遺物も含めてほとんど存在せず、B地区がD地区より東側の既往調査区で存在が明らかになっている集落の西端に当たることが判明した。

C地区の中央よりやや西で、鎌倉時代に建てられた瓜生堂廃寺を構成する周溝で囲まれた建物の基壇の一つを検出した。本廃寺についての創建の背景などを第VI章-2)で検討したが、基壇上の建物は、瓦葺きでないことから別の瓦葺建物が存在し、複数の建物（堂）で構成された寺であることが判明した。また、D地区で検出された寺に関係した井戸や住僧の住居と考えられる掘立柱建物の柱穴の存在とあわせて当時の寺院の形態を知るうえで今後の参考となろう。花粉分析の結果から中世段階には、付近でソバが栽培されていたことが知られている。

平安時代から奈良時代は、遺構は全く検出されておらず遺物も後世の包含層中からわずかに出土するのみである。D地区の東方約100mで存在が知られる集落の西側に位置することは確実である。

古墳時代の遺構は、A～C地区では全く検出していない。遺物もB・C地区でわずかに出土したのみである。しかし、D地区で中期後半の小型低方墳の周溝の名残かと考えられる溝と前期の井戸を検出した。既往の調査でも埴輪が一定量出土していることから古墳の存在が想定されていたが、今回初めて周溝を検出することができた。上部がほとんど中世の削平により破壊されているため実態は明らかではないが、同時に出土した埴輪は古墳時代中期中頃（竈窯焼成開始前後）から後期前半までのものである。約100年間に亘り、最小の古墳であるこの種の古墳が複数存在し、古墳群を形成していたことはまちがいない。中央環状線を隔てた西400m付近でも中期後半の埴輪が多数出土している。位置から見て別の古墳群と考えられるが河内湖の岸辺に少なくとも2つの小形低方墳を主体とする群集墳が存在したことが判明した。この種の古墳は、集落の周囲に営まれることが多いことから周辺に同

時期の集落が想定される。

D地区で一基検出した前期の井戸は、今まで知られていない時期の遺構であるが、井戸から東約80m離れた付近で摩滅していないこの時期の遺物を多量に含む河川が検出されており今後、周辺で集落が発見される可能性が高いことを示している。

庄内期から弥生時代中期末 祭場跡と考えられる配石遺構をB・C地区で検出した。配石は、A地区では全くみられない。D地区では配石は認められないが、方形周溝墓が起因する高まり上で祭に関連して供献されたのではないかと考えられる完形の土器が複数出土している。祭は、考古学的資料のみから目的や祭儀式などの復元は困難が伴う。しかし、第VI章(1)で述べたように、出土状況や遺物から目的を初めとして祭の具体的な様子を明らかにできたと考えている。ごく簡単に再度、述べる。

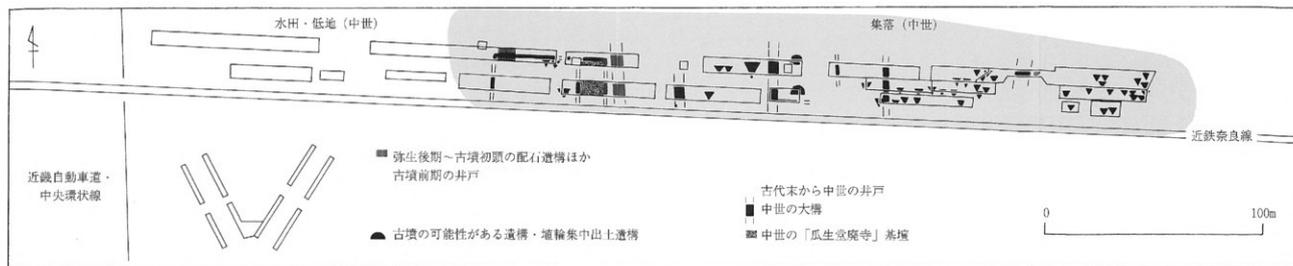
中期後半(凹線文出現期)に起きた南海地震と中期末から後期初頭の2回にわたる地震により生じた地滑り跡の窪地内部と肩口周辺で配石行為を伴う祭が行われた。祭は中期末ないし後期初頭から庄内期前半までの約200年間行われた。祭の時期の一つは秋で、時間帯は、夜(新月か)である。祭は少なくとも毎年1回ないしそれ以上行われた。祭を行う人々は、本遺跡あるいは周辺の人々である。個人的な祭ではなく、近隣を含む集落全体の祭と考えられる。祭の司祭者は、地震を起こすカミが住むとされていた瀬戸内あるいは泉南ないし紀北から招かれたと考えられる。祭の目的は、地震を起こすカミを鎮め再度、地震が起こらないことを願うためである。司祭者が各地の土器などとともにもたらした武庫川や紀ノ川などの石を用いて配石を行う。庄内期には、製塩土器を用いることもあった。配石の周辺、あるいはその上で強い火を焚く。祭に使用する土器も通常より強い火にかける。火が赤々と燃える中で鳥装をした男性の司祭者が、武器形木製品と盾をもち、あるいは時期により異なるが石鏃・銅鏃なども用いて、模擬戦を行う。模擬戦の祭儀式の中には穴を掘り鉄剣形の武器形木製品を埋めその上に玉石を用いた配石を行い、さらに配石上から先の折れた銅剣形の武器形木製品を突き刺すことも行われた。祭の後には供物を用いて神人共食の儀式が行われた。

配石に用いる石の大きさは当初は、小牛頭大前後(38kg)のものを最大に小兒頭大から空豆大である。しかし、庄内期になると空豆大の玉石に限られ、配石を行う場所も肩口付近に移動する。庄内期の中頃には配石がなくなり、手焙形土器などを単独で用いるだけの祭に変化し終焉を迎える。

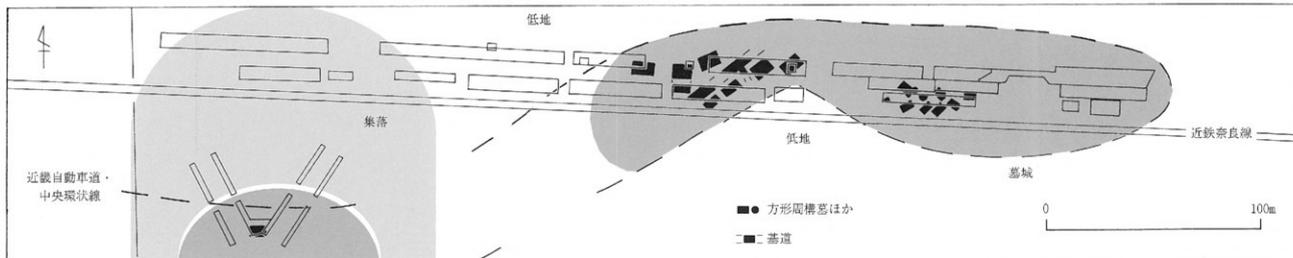
弥生時代中期 A地区で、自然堤防が起因するマウンド状の高まり5箇所から中期後半の3面の遺構面から掘立柱建物群や溝・土壇などと溝で囲まれた祭場を検出した。掘立柱建物群は、住居だけでなく打製・磨製石器や木製品(農耕具)製作が行われる工房である。祭場からは男根状石製品と女性器を表したと考えられる石製品が一対置かれた状態で出土した。しかし東に隣接するB地区の主要な遺構は扁平片刃鉄斧などが出土した落ち込み一個所で出土遺物も極端に少ない。C地区の東端とD地区全体で弥生時代中期後半の盛土を持つ方形周溝墓4基と、今まで想定されていたが実際にほとんど発見されていなかった墓に行き来するため墓地内に造られた道(墓道)を検出した。しがつてB地区東半とC地区の西側2/3以上が遺構の空白地であることが判明した。この部分が上述した南海地震により地滑りを起こしたのである。また、D地区の方形周溝墓下層からは畦畔を検出している。

弥生時代前期 B地区東半からD地区まで前期中頃の土器を主にした遺物が出土したが、遺構が存在したのはD地区に限られる。この地区の東で竪穴住居などが検出されており集落の西辺に当たることが判明した。出土した土器は、9割が生駒山西麓産で居住者の出自を示していると考えている。

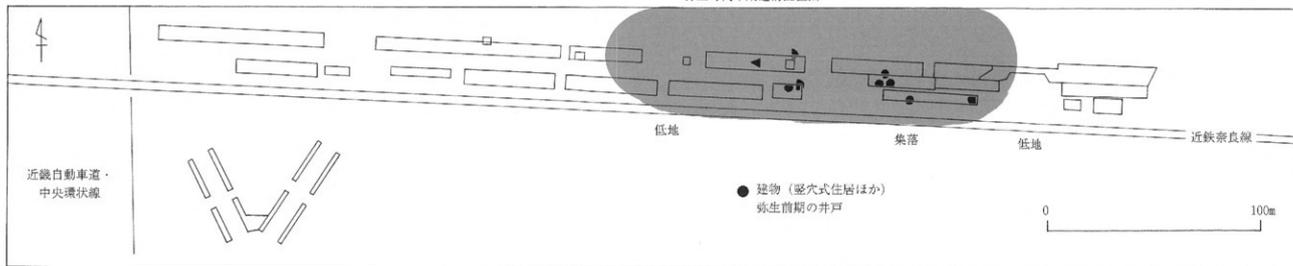
以上のように、従前は遺跡のほぼ中央部中心付近で調査されていたのに対して、集落の北辺を東西に貫く形で行った結果、報告・検討したように多くの事柄を解明できた。今回、畿内の弥生社会について考えられてきたいくつかの事柄について、再検討すべきことを示せたのではないかと思います。



中世遺構配置図



弥生時代中期遺構配置図



第187図 弥生時代～中世遺構配置図

弥生時代前期以降配置図

(財) 大阪府文化財調査研究センター作成の現地説明会資料を一部改題

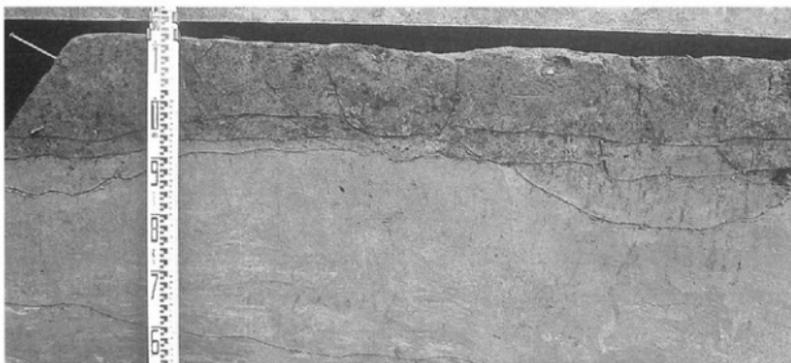
版 圖



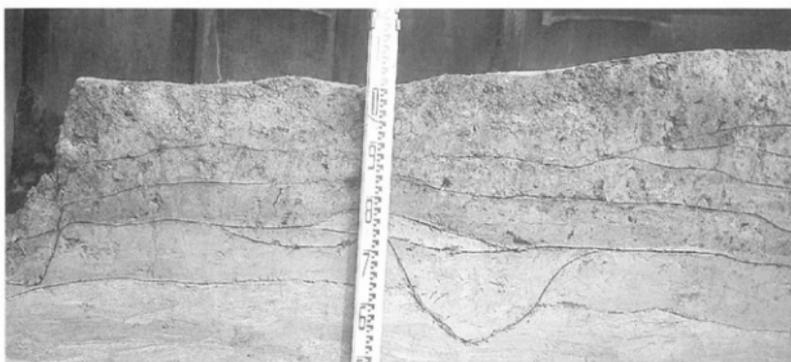
上. 航空写真 (昭和22年撮影)



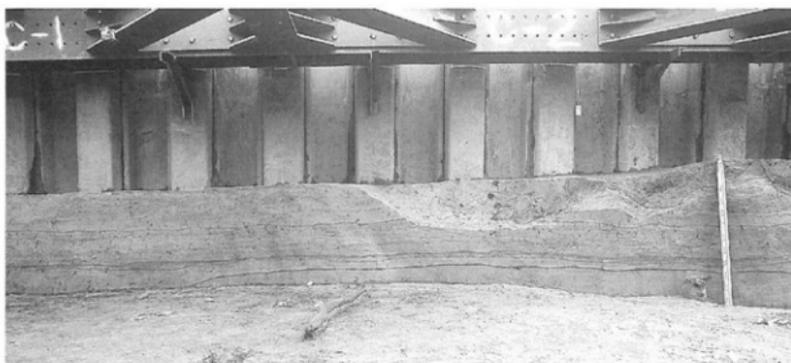
下. C・D地区全景 (西より)



上. C-3 南壁断面



中. C-4・5 南壁断面



下. C-2 南壁断面



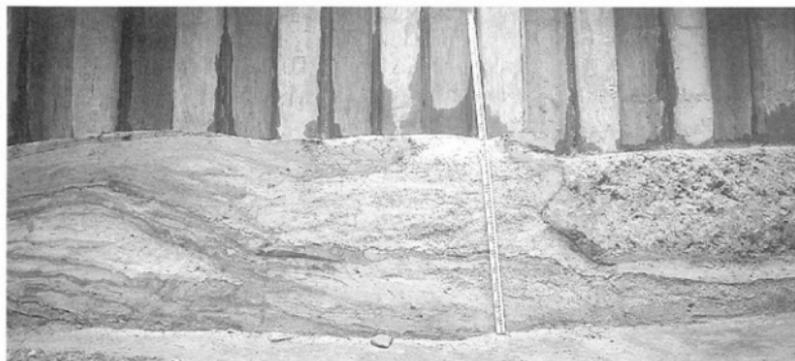
上. C-6 南壁断面



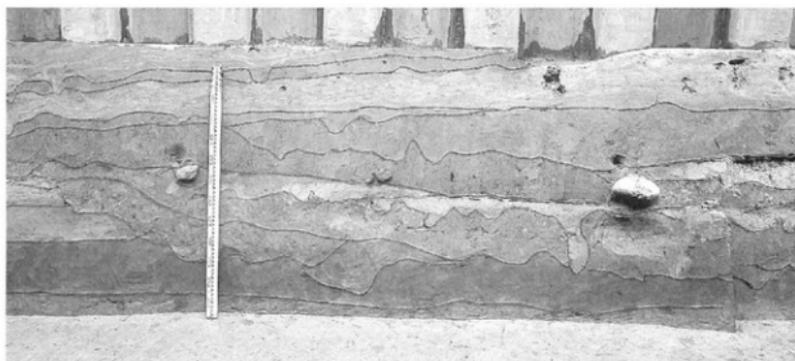
中. C-4 南壁断面



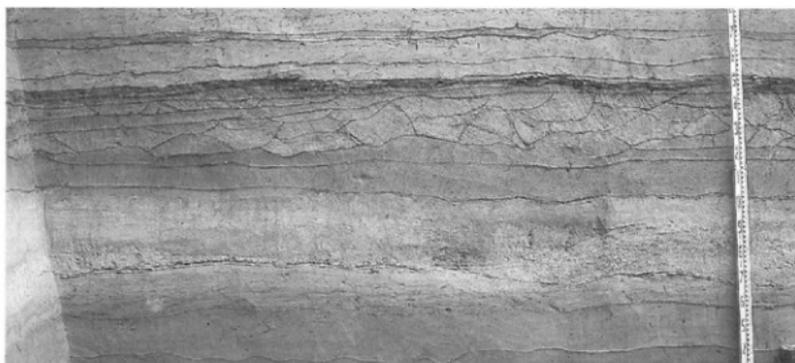
下. C-5 南壁断面



上. C-6 南壁断面



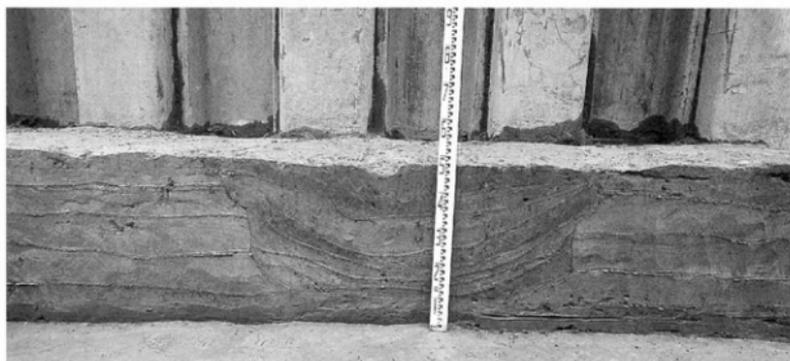
中. C-2・3 南壁断面



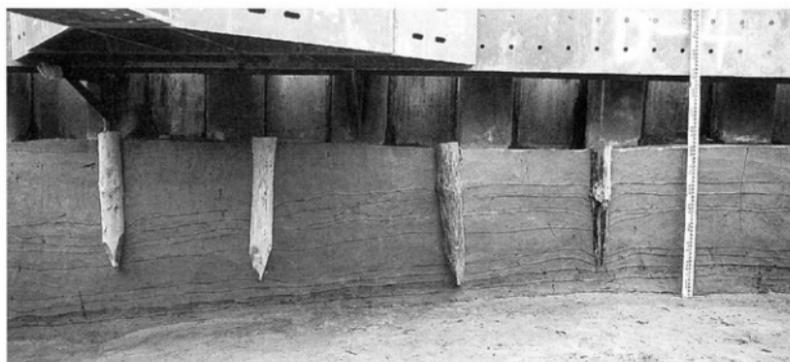
下. C-1 南壁断面



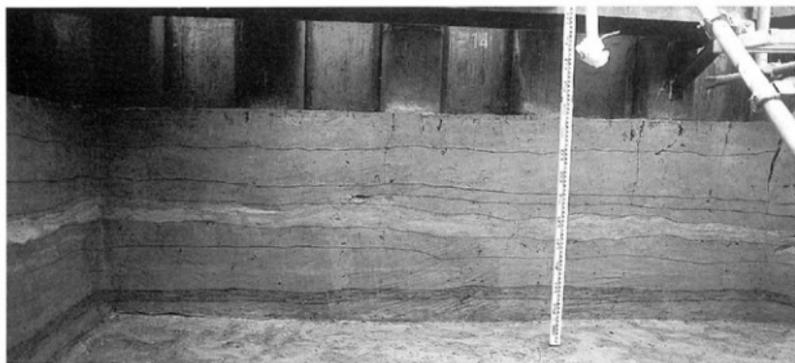
上. D-5 南壁断面



中. D-8 南壁断面



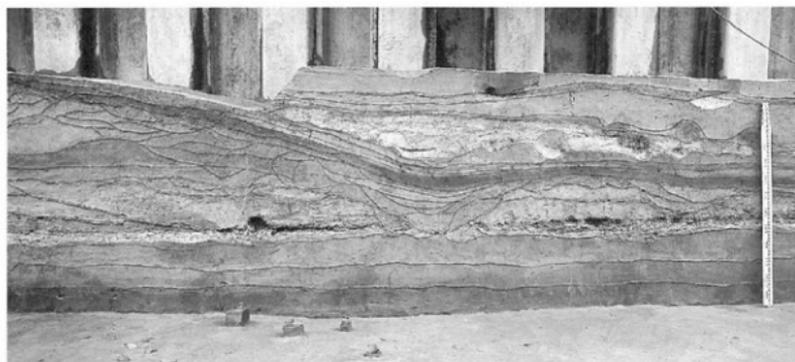
下. D-3 南壁断面



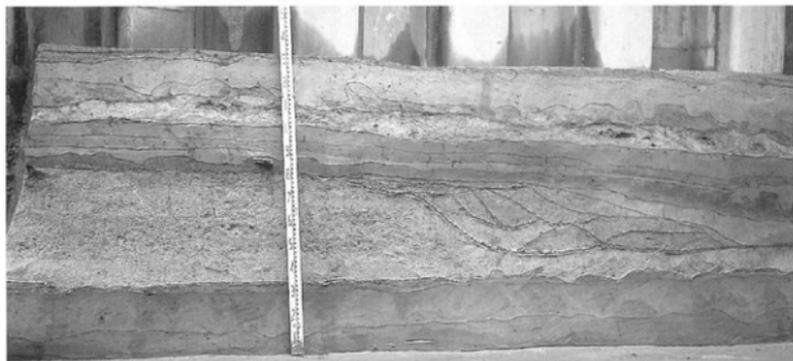
上. D-1 南壁断面図



中. D-7・8 南壁断面図



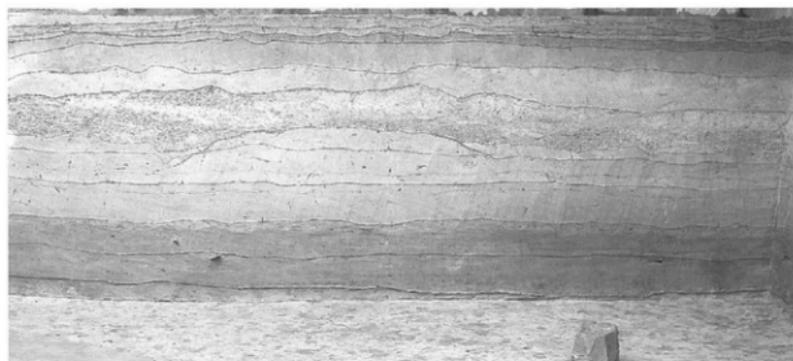
下. D-4・5 南壁断面図



上. D-8·9 南壁断面图



中. D-6 南壁断面图



下. D-1 東壁断面图



上. C-7溜池
検出状況(東より)



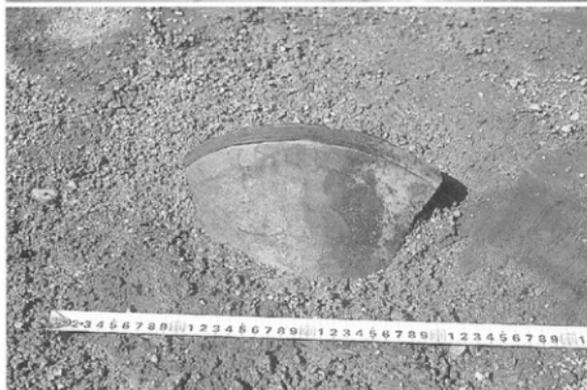
中. C-7溜池
護岸検出状況
(南東より)



下. C-7溜池
銅鈎出土状況
(南西より)



上. C-2・3大溝1
断ち割り断面南壁
(北より)



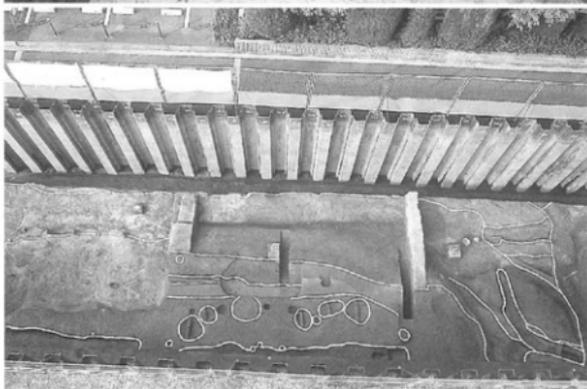
中. C-2・3大溝1
瓦器摺鉢出土状況
(北より)



下. C-2・3大溝1
獣骨出土状況 (北より)



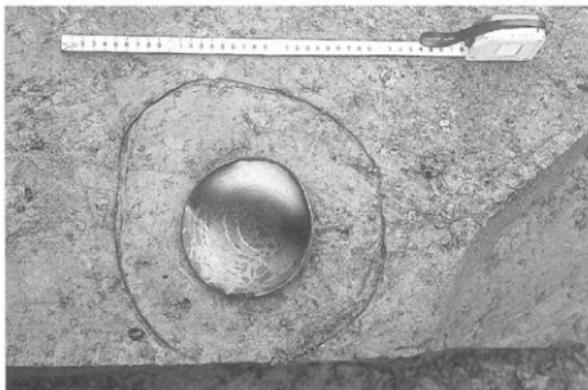
上. C-2~7中世
遺構全景(東より)



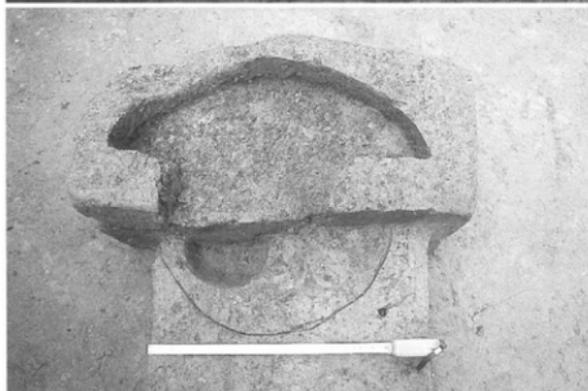
中. C-3~5瓜生堂廃寺
第2次基壇全景
(南より)



下. C-4~6瓜生堂廃寺
第1次基壇全景
(北東より)



上. C-4 基壇整地土内
瓦器出土状況
(北より)



中. C-4 基壇柱穴
(ピット10) 出土状況
(北より)



下. C-4 基壇柱穴
(ピット15)
断ち割り断面
(北より)



上. C地区中世遺構全景
(東より)



中. C-4大溝1検出状況
(東より)

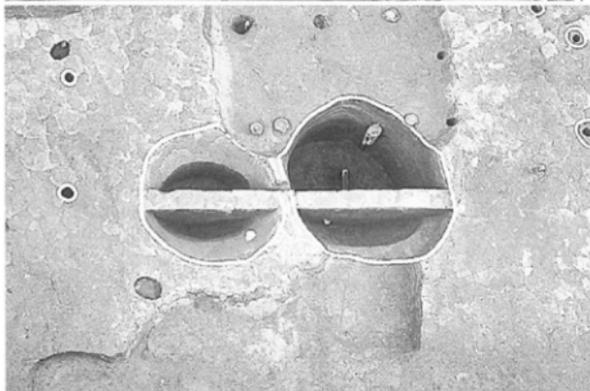


下. C-5・6大溝1上面
石造物検出状況
(西より)

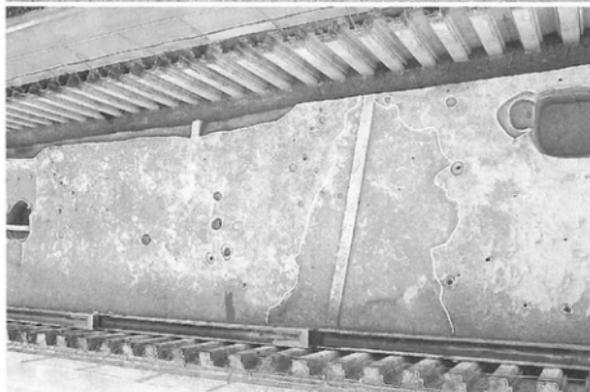
上. D-7~9 中世~古墳
時代遺構全景
(南より)



中. D-6~8 中世遺構
全景 (南より)



下. D-5~6 中世~古墳
時代遺構全景
(南より)

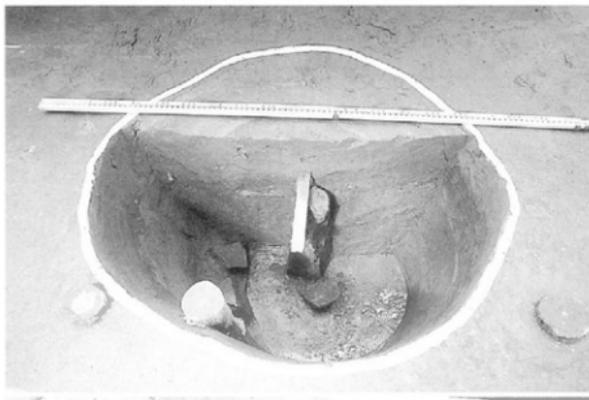




上. D-3～6 中世～古墳時代遺構全景（南より）



下. D地区中世～古墳時代遺構全景（南より）



上. D-8 中世遺構井戸2
検出状況 (北より)



中. D-8 中世遺構井戸2
検出状況 (北より)



下. D-8 中世遺構井戸2
検出状況 (北より)



上. D-8 中世遺構
井戸2 完掘状況
(北より)

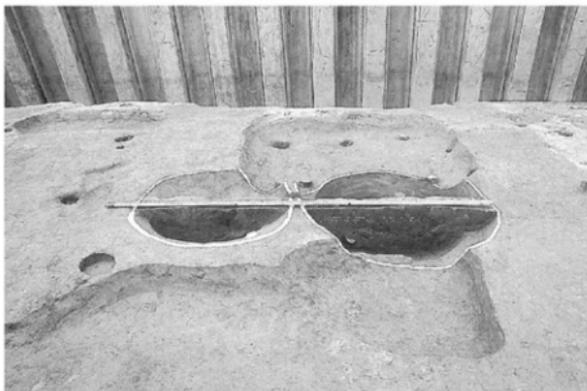


中. D-8 中世遺構井戸2
白磁皿出土状況
(北より)

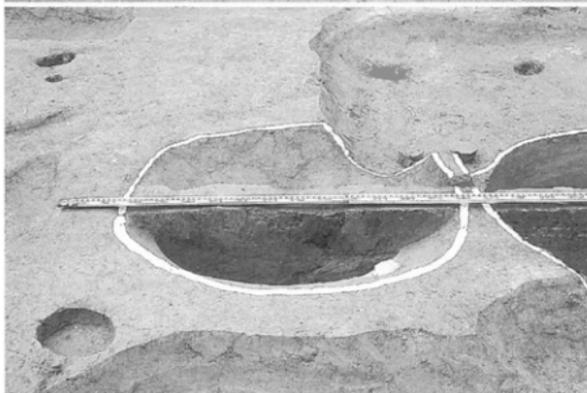


下. D-8 中世遺構井戸2
瓦器碗出土状況
(北より)

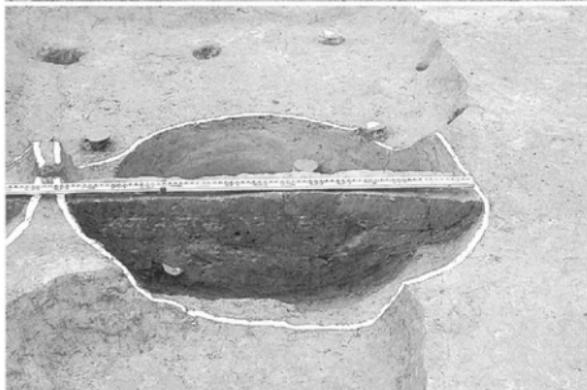
上. D-8 中世遺構
井戸1・2 検出状況
(南より)



中. D-8 中世遺構
井戸1 検出状況
(南より)

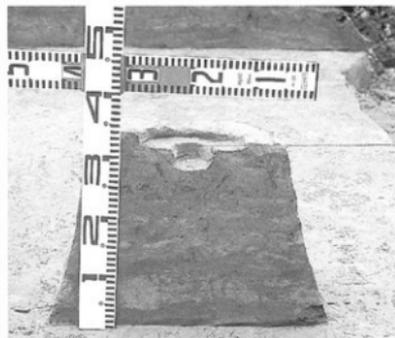


下. D-8 中世遺構
井戸3 検出状況
(北西より)





左上. C-5 中世遺構井戸1 断ち割り断面 (東より)



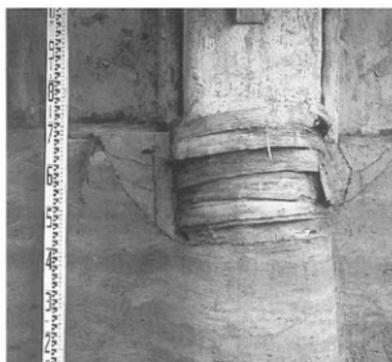
右上. D-1 中世遺構ビッド15断ち割り断面 (東より)



左中. C-5 中世遺構井戸1 検出状況 (東より)



右中. D-8 中世遺構ビッド33断ち割り断面 (北より)



左下. C-5 中世遺構井戸2 断ち割り断面 (北より)



右下. D-2 中世遺構ビッド8 断ち割り断面 (北より)



上. D-7 中世遺構
ピット34断ち割り断面
(北より)



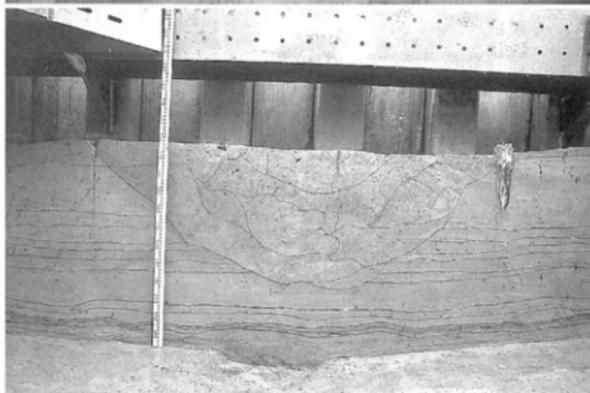
中. D-7 中世遺構
ピット32断ち割り断面
(北より)



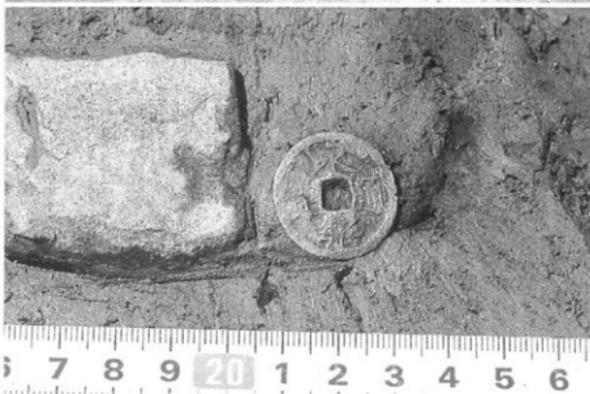
下. D-7 中世遺構
ピット29断ち割り断面
(北より)



上. D-3大溝2 検出状況
(南より)



中. D-3大溝2 断ち
割り断面南壁
(北より)



下. D-3大溝2
銅銭出土状況
(北より)

上. D-1～3小型低方墳
周溝(溝3)検出状況
(南より)



中. D-2小型低方墳周溝
(溝3)遺物出土状況
(東より)



下. D-2小型低方墳周溝
(溝3)須恵器出土状況
(北より)

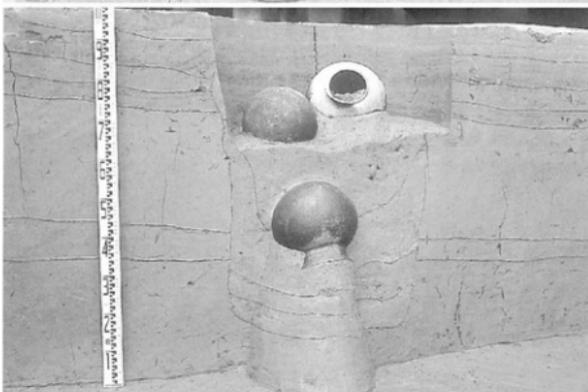




上. D-5井戸3 検出状況
(北西より)



中. D-5井戸3
布留式土器出土状況
(北西より)



下. D-5井戸3
断ち割り断面 (東より)



上. C-4 第11層
(黒色粘土②)
土器だまり出土状況
(東より)



中. C-4 第11層
(黒色粘土②)
土器だまり出土状況
(西より)



下. C-4 第11層
(黒色粘土②)
土器だまり出土状況
(南より)



上. C-3 第12層
(灰色粘土③)
土器だまり出土状況
(北より)



中. C-4 第12層
(灰色粘土③)
土器だまり出土状況
(北より)



下. C-4 第12層
(灰色粘土③)
木臼出土状況 (北より)